もだかの根にある莖塊。――ずり「澤瀉摺」
(名)布に澤瀉をすりたるもの。
おもた・し「重」(形、二) めかた多し。おもし。
〔お・もたせ「御持」(名) 人の持たせ來れるとの敬
語。――もの「御持物」(名) 人より持せ來り
たるおくり物の敬稱。
++おも・だた・し「面立」(形、二) 面目あ
り。面目よし。　「しらだつ。
おも・だ・つ「重立」(自、た四) 主となる。か
〔お・もちや「玩具」(名) (「おもちあそび」の轉)小
兒の玩具。もてあそびもの。もちあそびもの。(玩物)。
――や「玩具屋」(名) おもちやを賣る家。
++おも・づら「絡頭」(名)「おもがい」の古名。
おもて「面」(名) ㊀かほ。つら。顏面。㊁めん。おも
がた。假面。㊂めんぼく。――もふらず 脇目
をせず。――をおかす 其人の不機嫌をも憚ら
ずに諫む。――をおこす 顏をあぐ。又、はまれ
を得。――をふす うつむく。又、面目を失す。
おもて「表」(名) ㊀外部。外側。そと。うらの對。㊁
家屋の中にて、客に接對するところ。「―びろま」。㊂
いりくちに近き處。㊃うはべ。あらは。見え。㊄お
ほやけ。「―沙汰」。㊅ところ。もと。「西京―」。㊆た、
みおもて。疊表。「備後―」。
おも・で「重手」(名) おもきず。ぢゆうしやう。ふ
かで。「―を負ふ」。(重傷)。　「目ある歌。
++おもて・うた「表歌」(名) 人に賞美せられて、面
++おもて・おこし「面起」(名) 名譽となりて、面目
をほどこすと。
++おもて・かた「面形」(名) めん。假面。「ふると。
〔おもて・がへ「表換」(名) 疊のおもてを取り換
おもて・ぐち「表口」(名) おもてにあたる入り口。

おもて・ざた「表沙汰」(名) ㊀政府に訴訟する
と。㊁おほやけざた。おもてむき。
〔おもて・だうぐ「面道具」(名) 鼻・口・目・眉な
ど、すべて顏に屬する各個の部分。
おもて・だ・つ「表立」(自、た四) ㊀公事沙汰
となる。裁判事となる。㊁世にあらはれて公然と
なる。
おもて・つき「表附」(名) 下駄にた、みをつけた
ると。又、其下駄。　「なし。
おもて・どほり「表通」(名) 市街の表にあたる
大通路。うらどほりの對。
おもて・はづか・し「面羞」(形、二) 面目
おもて・はんでふ「表半疊」(名) 劇場にあり
て、種々の用事をつとむる係りのもの。
おもて・ぶせ「面伏」(名) はぢて面を伏すると。お
もぶせ。(不面目)。
おもて・まけ「面負」(名) ㊀外面のみにて阿附す
ると。㊁おもてよはきと。
おもて・むき「表向」(名) ㊀おもてだつと。公然と
なると。㊁公事。裁判。㊂うはべ。あらは。公邊。
おもて・もん「表門」(名) 家のおもてぐちにある
門。うらもんの對。(正門)。
おもて・よわ・し「面弱」(形、二) 人と對面
して強き言動をなす能はず。
おもと「萬年青」(名) 【植】百合科に屬する草、葉
は革質綠色にして根莖より簇生す、花は穗狀花序に
排列し、花莖は短くして綠黄色を帶ぶ、夏の末、は、
づきに似たる實を結ぶ、觀賞用として栽培せらる。
++お・もと「御許」(名) お坐所。おそば。　「(膝)。
++お・もと「御許」(代) 婦人の對稱の代名詞。あなた。
++おもと・びと「御許人」(名) 貴人の側にありて、

諸用を辨ずる人。おそば。(侍臣、侍從)。
++おもと・まちぎみ「侍從」(名) 古昔、天子の御側
に侍せしもの。おもとびと。
++おも・な「面無」(名) おもなきと。「さながら―の
あり樣にて」。
おも・なが「面長」(名) 顏の稍や長きと。
++おも・な・し「面無」(形、二) 人にあはすべき
おもてなし。面目なし。おもはゆし。はづかし。(赤
面)。　「なる。
++おも・な・る「面馴」(自、ら下二) 面を見
おも・に「重荷」(名) ㊀重き荷。㊁過重の負
擔。せめ。ひきうけ。「―を負ふ」。(重任)。――にこ
づけ あるが上に、過重の負擔のそはると。
おも・に「主」(副) 主として。もつぱら。
おも・にく・し「面憎」(形、二) つらにくし。
おもね・る「阿」(自、ら四) (面練の義)つゐ
えようをなす。へつらふ。こぶ。(諂、諛)。
++お・もの「佩物」(名) 身に帶ぶる物。おびもの。
++お・もの「御物」(名) 主上などの供御(ク)。(御膳)
――え「御物師」(名) 後宮の裁縫師。――だ
な「御物棚」(名) 御膳を据うるたな。(御膳棚)。
――やどり「御物舍」(名) 古昔、紫宸殿の西廂に
ありて、すべての供御を安置せしところ。(御膳所)。
おもはく「思」(名) (「おもふ」の延言)㊀かんが
へ。おもふ所。(想)。㊁投機にて、暴利を獲期する
と。(思惑)。――がひ「思惑買」(名) 投機に
て、暴利を獲期して買ひ込むと。
おもは・し「思」(形、二) ㊀おしはか
り思ふべし。すゐりやうせらる。㊁好きやうに思は
る。おもはろく考へらる。
おもは・ず「不思」(副) おもひもよらず。おも

ひがけなく。――あらず「不思不知」(副) 前
條に同じ。
〔おもはせ・ぶり「思振」(名) 擧動を以て示し、
他をして其正意をさとらしむると。
++おも・はゆ・し「面靦」(形、二) 顏あらはす
は、まばゆく思はれてはづかし。をもぶせなり。はぢ
らはし。(面頰)。
おもひ「思」(名) ㊀おもふと。おもふ所。かんが
へ。志よぞん。㊁思想。㊂うれひ。志んぱい。㊃す
ゐりやう。さうぞう。㊄志ふねん。うらみ。「―をは
らす」。㊅++中古、喪に籠(コモ)りて居りしと。
おもひ・あか・す「思明」(他、さ四) ふ
かく物を思ひつ、、夜をあかす。
おもひ・あた・る「思當」(他、ら四) お
もひくらべて、げにと思ひあはす。おもひよる。か
んがへつく。
おもひ・あは・す「思合」(他、さ下
二) おもひくらべて考へあつ。おもひつく。　「訛。
〔おもひあはせる「思合」(他) 「おもひあはす」の
おもひ・あま・る「思餘」(自、ら四) ㊀
おもひ過ごす。㊁思ひに堪へず。
おもひ・いだ・す「思出」(他、さ四) ㊀
考へつく。㊁むかしの事をおもひうかぶ。(回想)。
おもひ・い・づ「思出」(他、た下二)
おもひいだす。
おもひ・い・る「思入」(自、ら四) ㊀ふ
かく思ひ考ふ。かんがへこむ。㊁おもひ及ぶ。㊂世
をいとひて山に入る。㊃こゝろをかく。
おもひ・いれ「思入」(名) ㊀おもひいるると。㊁
心をこむると。㊂芝居にて役者が、おもひいる志う
ちをなすと。

おもひ・いれ「思入」(副) おもふぞんぶん。満
足するまで。　「ひのこす。
おもひ・お・く「思置」(他、か四) おも
おもひ・おこ・す「思起」(他、さ四) お
もひいづ。(想起)。
おもひ・おもひ「思思」(名、副) 各自の心任
おもひ・がけず「不思掛」(副) おもひよらず。
(不慮)。
おもひがけ・な・し「思掛無」(形、二)
かくあらんとは思ひまうけずにあり。意外なり。ふ
りよなり。(不意、忽然)。
おもひ・がは「思川」(名) 人の情念を、水の流
れにたとへいふ語。
おもひ・かへ・し「思翻」(名) おもひかへすと。
おもひ・かへ・す「思翻」(他、さ四) ㊀
非と知りて思ひ改む。(改意)。㊁今迄のおもひをい
れなほす。
〔おもひ・きって「思切」(副) かたく心を定め
て。「―行ふ」。　「ねん。
おもひ・きり「思切」(名) おもひきると。だん
おもひ・き・る「思切」(他、ら四) 思ひ
をたつ。斷念す。あきらむ。(絶念)。
おもひ・ぐさ「思草」(名) 思ひを草にたとへい
++おもひ・ぐまな・し「思隈無」(形、
二) ㊀思ひやりなし。考へ行きとゞかず。㊁思ひあ
まねく至る。よく氣付く。　「ころぐるし。
おもひ・ぐる・し「思苦」(形、二) こ
おもひ・ご「思子」(名) かはゆき子。(愛子)。
おもひ・こが・る「思焦」(他、ら下二)
おもひあこがる。おもひこむ。
おもひ・こみ「思込」(名) おもひこむと。

おもひ・こ・む「思込」[illegible]
もひいる。(決意)。
〔おもひ・ざし「思差」(名) 其人に心ありて、酒
杯をさすと。(思獻)。
おもひ・しづ・む「思沈」(自、ま四) ふ
かく考へこむ。おもひわづらふ。
おもひ・し・に「思死」(名) 思ひしづみ其ため病
をかもして、遂に死ぬると。　「ひこむ。
おもひ・し・む「思染」(自、ま四) おも
おもひ・し・る「思知」(他、ら四) 心に
それとおもひあたる。
++おもひ・すぐ・し「思過」(名) おもひすぐすと。
++おもひ・すぐ・す「思過」(他、さ四) 思
ひすごす。
おもひ・すご・し「思過」(名) 思ひすぎて誤る
おもひ・すご・す「思過」(他、さ四) と
りこしぐらうす。あらぬ事まで思ふ。
おもひ・すま・す「思澄」(自、さ四) お
もひ定めて、迷はずにあり。
おもひ・そ・む「思初」(他、さ下二) 「おこす。
おもひはじむ。
おもひ・だ・す「思出」(他、さ四) おもひ
おもひ・たち「思立」(名) ㊀思ひたつと。決意。
㊁おもひつき。
おもひ・た・つ「思立」(自、た四) 物事を
成さんと、思慮を定む。(企圖)。
おもひ・つき「思付」(名) ㊀かんがへ。くふう。
㊁心に浮ぶと。
おもひ・つ・く「思付」(他、か四) ㊀考
へつく。考へおこす。(立意)。㊁思ひ寄る。志たひは
じむ。

おもひ-つづ-く(オモ)[思續](他、か下二)　其事のみを思ふ。いろ〳〵と思ふ。「誤」

おもひつづける[思續](他)「おもひつづくるの誤」

おもひ-つ-む(オモ)[思詰](他、ま下二)　一圖に思ひこむ。思ひこみて決心す。

おもひつめる[思詰](他)「おもひつむ」の誤。

おもひ-で(オモ)[思出](名)　一以前ありし事を、思ひだしてわが心をなぐさむること。二心のなぐさむること。もひのまゝをなすこと。

おもひ-ど(オモ)[思所](名)　思ふところ。

おもひ-さち-む(オモ)[思止](他、ま下二)　おもひとまる。

おもひ-さと-む(オモ)[思止](他、ま下二)　おもひやむ。

おもひ-さま-る(オモ)[思止](他、ら四)　斷念す。おもひきる。あきらむ。

おもひ-どり(オモ)[思取](名)　一うけひき、又、きとり。二「己の思ふ人より盃をとること。

おもひ-さ-る(オモ)[思取](他、ら四)　其れと氣づく。さとる。

おもひ-なが-す(オモ)[思流](他、さ四)　一おもひやる。二おもひくらす。三おもひにとゞめず。

おもひ-なし(オモ)[思做](名)　思ひはかりて、それと定むること。おもひなすこと。

おもひ-な-す(オモ)[思做](他、さ四)　すゐさつして、それと定む。

おもひ-なほし(オモ)[思直](名)　おもひなほすこと。

おもひ-なほ-す(オモ)[思直](他、さ四)　考へなほす。思ひあらためむ。「翻思」。

おもひ-ね(オモ)[思寐](名)　深く其事を思ひながら寢ること。「一の夢」「思寢」。

おもひ-の-いへ(オモ)[思家](名)　三界の火宅。煩惱(ボン)にみちたる娑婆世。

おもひ-の-いろ(オモ)[思色](名)　くれなゐの色。

おもひ-の-こし(オモ)[思殘](名)　みれん。ざんねん。

おもひ-の-こ-す(オモ)[思殘](自、さ四)　心をのこす。思ひあく。みれんのこる。ざんねんがる。

おもひ-の-つな(オモ)[思綱](名)　其事のために思ひのまゝならぬこと。こゝろのほだし。

おもひ-の-つゆ(オモ)[思露](名)　なみだの稱。

おもひ-の-ほか(オモ)[思外](名)　意外。案外。

おもひ-の-まま(オモ)[思儘](名、副)　心に思ふまま。おもふさま。ぞんぶん。「存分」。

おもひ-ば(オモ)[思羽](名)　つるぎば。いてふば。「舵」。

おもひ-はじ-む(オモ)[思始](他、ま下二)　おもひそむ。「おもひきる」。

おもひ-は-つ(オモ)[思果](他、た下二)　「おもひはつる」。

おもひ-びと(オモ)[思人](名)　思ひを掛けたる相手の人。こひゞと。「戀人」。

おもひ-まう-く(オモ)[思設](他、か下二)　あらかじめ考へおく。豫期す。「誤」。

おもひ-まは-す(オモ)[思回](他、さ四)　一往事を追想す。々に思ふ。思ひめぐらす。「想思」。二思ひくるしむ。おもひなやむ。おもひわづらふ。

おもひ-みだ-る(オモ)[思亂](自、ら下二)　「おもひみだれる」の誤。

おもひ-みる(オモ)[思亂](自)　思ひあつ。思ひためす。かんがへみる。おもんみる。「思惟」。

おもひ-めぐら-す(オモ)[思運](他、さ四)　思ひまはす。「回想」。

おもひ-もの(オモ)[思者](名)　愛妾。「愛妾」。

おもひ-や-り(オモ)[思遣](名)　おもひやること。

おもひ-や-る(オモ)[思遣](他、ら四)　人の身の上などを、おしはかりて、思ひ(アハ)みおもふ。

おもひ-や-る(オモ)[思遣](自、ら四)　心をやる。思ひをはらす。

おもひ-よ-す(オモ)[思寄](他、さ下二)　かんがへを傾く。思ひをかく。

おもひよせる[思寄](他)　「おもひよす」の誤。

おもひ-よらず(オモ)[不思寄](副)　不意に。思ひがけず。あんぐわいに。

おもひ-よ-る(オモ)[思寄](他、ら四)　思ひあたる。かんがへつく。おもひつく。

おもひ-れ(オモ)[思入](副)「おもひいれ」の略言。

おもひ-わす-る(オモ)[思忘](他、ら下二)　わする。

おもひ-わた-る(オモ)[思渡](自、ら四)　思ひつゞけ、月日をおくる。

おもひ-わづら-ふ(オモ)[思煩](自、は四)　おもひなやむ。おもひくるしむ。

おもひ-わ-ぶ(オモ)[思侘](自、は上二)　わびしく思ふ。いとはしく思ふ。

おも-ふ(オモ)[思ふ](他、は四)　一思慮す。かんがふ。二推量す。おしはかる。三想像す。おもひかたどる。「想」。四願望す。ねがふ。五忘れず。記す。六愁しむ。惱ます。「腦」。七憐む。愛す。「戀」。八暫(シバ)し。こひしがる。「懷」。九回顧す。おもひめぐらす。

おもふき[趣](名)　おもむき。

おもふ-く(オモ)[趣](他、か下二)　おもむく。

古語　一 俚語方言　（一 字音

おもぶくら[面脹](名)　顏肥えて頰豐かなること。

おもふ-さま(オモ)[思樣](名、副)　思ふほり。おもふまゝ。おもさま。おもいれ。「任意」。

おも-ぶせ[面伏](名)　面目なきこと。はづかしきこと。はぢらふこと。「一にいふ」。

おもふ-に(オモ)[思、惟](副)　思惟するに。かんがふるに。はかるに。「原、意」。

おもへ-らく(オモ)[思謂](副)　思へるには。「以爲」。

おもも-へ-り(オモ)(名)　かほつき。顏色。

おもも-ほ-し(オモ)[思](形、二)　おもはし。

おもも-ほ-す(オモ)[思](他、さ四)　おぼす。おぼしめす。

おもや-ほ-でり(オモ)(名)　おもはてること。

おもや-ほて-る(オモ)(自、ら四)　顏にいかれる氣色あらはる。「る」。

おもほ-ゆ(オモ)(自、や下二)　思ひ得らる。思はる。

おもみ[重](名)　おもくある度合ひ。

おもむき[趣](名)　一ことわけ。ものゆい。二やうす。いきはひ。三其物事に存する感興。ふうゐん。おもむき。おもはひ。

おもむ-く(オモ)[赴趣](自、か四)　一其方向をとる。二すゝみ行く。向ひ至る。三ものゝ方に傾く。

おもむ-く(オモ)[赴趣](他、か下二)　おもむかしむ。ゆかす。ものゝ方に傾かしむ。

おもむろ[徐](名)　ものゆかしく。おだやか。ゆるやか。

おもも-ち[面地](名)　かほつき。めんもち。おもかげ。「恐れたる一」「面體」。

おも-や[母屋](名)　一家の最も中央なる部分。廊下などの對。「母殿」。二住まひなどにすべき家。なやなどの對。「正屋」。「もざし」。

おも-やう(オモ)[面樣](名)　かほつき。かほだち。おもて。

おも-やく[重役](名)　おもき役目。ぢゆうやく。

おもゆ[重湯](名)　極めてうすき粥。飯の汁。

おもらか[重](名)　重くあるらしく見ゆること。

おもり[重](名)　一輕きものに、重さを增さんために附け加ふるもの。「釣錘の一」。二秤(ハカ)の附屬品。はかるべき物品の重さと平均を保たしむるために用ふるもの。ふんどう。「錘」。

おもりか[重](名)「おもらかに」の同じ。

おも-る[重](自、ら四)　一目かた多くなる。二病氣危篤となる。

おも-わ[面曲](名)　おもて。おもて。「おもやの一のつかしきかな」「面輪」。

おも-わすれ[面忘](名)　以前には見知り居りし人の顏を見わすれたること。

おもん-ず(オモ)[重](他、さ變)　一たふとぶ。うやまふ。二はゞかる。「憚んず」。

おもん-みる(オモ)[重](他、ま上二)　一たふとぶ。二愛す。をしむ。

おもんぱかり[慮](名)　一走りよ。かんがへ。二とりはからひ。處置。三はかりごと。謀策。四うたがひ。うれひ。

おもんぱか-る(オモ)[慮](他、ら四)　一はかる。つら〳〵かんがふ。おもひめぐらす。二疑ふ。憂ふ。

おもん-みる(オモ)[惟](他、ま上二)　一謀策を立つ。二疑ふ。憂ふ。

おや[親](名)　一我を產みたる人。ちゝはゝ。父母。二我を養ひて子としたる人。養父母。三子ある人。四祖先。「とほつみ一」。五頭だつもの。又、ものゝ出て來たる元。六大小相對するものにて、大なるものゝ稱。「一骨」。

おや(感)　意外の事に驚きたる發聲。

おや-いも[親芋](名)　芋の塊根の最初に出來たるもの。こいもの對。「芋魁」。

おや-おもひ[親思](名)　親に孝行なること。

おや-おもひ(感)「おやこを重ねたる聲」「一大變」。

おや-がかり[親掛](名)　子の罰は親に養はれて居ること。

おや-かぜ[親風](名)　一親の身分位置を鼻に掛くること。二子に對して、親の威をふるふこと。

おや-かた[親方](名)　一我が身に恩を掛けてくる、人。親として仰ぐべき人。二元祿時代に、主人の稱。三職人などの頭又は飲食店の主人などの稱。四昔時、琉球にて按司(アジ)の次なりし官名。

おや-が-る(ラ)[親](自、ら四)　親ぶる。「あやがりたるあんふるまひ」「月經」。

おや-やく[御役](名)　一役目の敬稱。二つきやく。

おや-こ[親子](名)　一親と子と。二玉子と鶏肉と。三そら豆とえんどう豆と。

おや-ご[親御](名)　人のおやの敬稱。——**さま**[親御樣](名)　おやご。尊大人。

おや-ごころ[親心](名)　子を思ふ親の慈愛心。「親思ふ心にまさる一」。

おや-ざと[親里](名)　嫁したる女又は奉公人などが、吾が親の家を指していふ語。おやもと。

おやこ-どんぶり[親子丼](名)　丼へあたゝかき飯をいれ、其上に玉子と鶏肉とをあはせ煮たるをかけたるもの。

おやこ-なべ[親子鍋](名)　鍋にて、鶏肉と鶏卵とをあはせ煮たるもの。

おやこ-まめ[親子豆](名)　そら豆とえんどう豆とをあはせ炒(イ)りたるもの。

古語　一 俚語方言　（一 字音

おやじ[親父]（名）「おとこ」の轉。「心—」。我が身なれども。

おや・しほ[親潮]（名）【地】海流の一。「オホツク」海に起り、我國の北海道及本州の東岸に沿ひて流る、寒流。

おや・しらず[不知親]（名）㊀子供の時に人に養はれ又は孤兒となりて、父母の顔を見ざりぬこと。㊁「おや」は「ちゝ」の略言。㊂波うちぎはなどの極めて危險なる所。——**ば**[不知親崎]（名）齒の三十二枚の中四枚最もおそく生(ハ)ゆるもの。

おや・だま[親玉]（名）㊀かしらだつ人。かしら。をさ。たいちやう。（互魁）㊁遊藝などの巧みなる人を賞讃していふ語。

おや・ぢ[親父]（名）《親父(チヤ)の義》㊀他人に對して、我父の稱。ちゝ。（家父）㊁老人。おきな。㊂親方。——**さま**[親父樣]（名）他人の父の敬稱。ごおんぢ。

おや・どり[親鳥]（名）鳥の親。子鳥の對。

おや・なし[親無]（名）幼兒の親をうしなひたること。又、其人。——**ご**[親無子]（名）親を失ひたる子。みなしご。「孤兒」。

おや・の・すねかじり[親脛噛]（名）親に依りて生活し若しくは遊學するものをあざけりていふ語。「てする」と。

おや・はん[親判]（名）證文の判を親の立ち合ひて。

おや・ふね[親船]（名）大いなる船。（和船にいふ）。

おや・ぶん[親分]（名）㊀假りの親。㊁職人又は遊び人などの社會にて、假に親として、すべての物事を依托する頭目(カシラ)の稱。こぶんの對。㊂轉じて、其人の依屬せる人の稱。

おや・ぼね[親骨]（名）扇の左右のはしに各一枚づつある最もふとき骨。（扇股）。

おや・もざ[親許]（名）おやざと。「—へ引きとる」。

おや・ゆづり[親讓]（名）親より譲りうけたること。又其物事。「の隱語。

おや・ゆび[親指]（名）㊀あはゆび。（拇）。㊁（亭主の隱語。

おや・わん[親椀]（名）大なる飯椀。

お・ゆ[老]（自、や上二）㊀よはひ重なる。としよる。㊁としよりて衰弱す。おとろふ。

お・ゆどの[御湯殿]（名）㊀古昔、宮中にて御茶の湯などをおかけし所。㊁湯殿の敬稱。

おゆ・らく[老]（自）「おゆる」の延言。

およぎ[泳]（名）およぐこと。およぐ術。

およ・ぐ[泳]（自、か四）㊀水中にて、肢體を働かし浮きて行く。㊁世に處(ヲ)る。官職を得て、賢くなる。

およ・ず・く（自、か下二）年の進むに從ひ

およそ[凡]（名）其物事の要概。がいりやく。えうま。たいりやく。

およそ[凡]（副）㊀たいがいは。あらかたは。がいりやくは。㊁一般に。あしなべて。

およづれ[妖]（名）いつはると。あやしきこと。

およば・す[及]（他、さ四）あよばしむ。

および[指]（名）ゆび。

および[御呼]（名）おめし。おまねき。

および[及]（名）およぶこと。とゞくこと。——**ごし**[及腰]（名）からだをはこばず、手のみさきにて出だして、事を行はんとする態をいふ。

および[及]（接）また。ならびに。「花—月」。

およ・ぶ[及]（自、は四）㊀到達す。いたる。とどく。「言に—」。㊁遍布す。ゆきわたる。ゆく。

およぼ・す[及]（他、さ四）㊀其物事となる。「戰ひに—」。㊁其物事と比す。ならく。

およぼ・す[及]（他、さ四）あよぼやうにす。あよばす。とゞかす。ゆく。かく。「すみになる。

お・よ・る[寢]（自、ら四）あよんなる。あやまる。

お・よんな・る[寢]（自、ら四）寢るの敬語。

おら[己]（代）あもに、下等人のつかふ自稱の代名詞。おれ。おいら。

おら・ぶ[叫]（自、は四）さけぶ。よばふ。

おり[織]（名）織ると、織りたるもの。

おり[澱]（名）流動體中にある沈澱したる物質(ヲ)。をどみ。ちんでんぶつ。（沈渣）。

オリーブ[阿列布＝Olive]（名）【植】「かんらん」（橄欖）に同じ。——**ゆ**[阿列布油＝Olive-oil]（名）「かんらんゆ」（橄欖油）に同じ。

おり・いろ[織色]（名）絲を染めて織りたるありもの、色。そめいろの對。

おり・た・つ[下立]（自、た四）㊀下へ行く。㊁たしく行ふ。みづから爲す。

おり・のり[下乘]（名）あると乘ると。「じ。

おり・ひめ[織女]（名）《字の訓讀》「たなばた」に同

おり・べ[織部]（名）さかづきの一種、木製朱塗りにして、蒔繪・梨地などをほどこしたる小形のもの。天正の頃、織部重能といへるもの、茶道にくはしく、此形を作り出だし、より名とす。其大なるを「むさしの」といふ。（京藝）。——**つかさ**[織部司]（名）古昔の官名。大藏省の所屬にして、織物の事をつかさどりし所。

おり・もの[織物]（名）㊀機(ハ)にかけて、織りたる反物の總稱。㊁殿に織りたる綿布の特稱。

おり・もの[下物]（名）㊀月經。㊁あとざん。

おり・や[織屋]（名）はたおりを業とする家。

++おりる・の・みかど（名）位をゆづり給ひたる天皇。上皇。太上皇。

おり・ゐる[下居]（自、わ上一）㊀下へおりてゐる。㊁位をゆづる。

お・る[織]（他、ら四）㊀絲を機(ハ)にかけ、匠(タク)筬(ヨロ)をくみあはせて布帛につくる。㊁細長きすぢのものをくみあはせて、席・疋などをつくる。㊂まじ（作る。くみたつ。

お・る[下降]（自、ら上二）㊀高きより低きへくだる。上にありしもの下にさがる。くだる。さがる。㊁位をさる。ゆづる。㊂露・霜など降る。

オルガン[Organ]（名）西洋より傳來したる一種の樂器。種々の管（一端開きたるもの）を設置し、下に装置したる鞴(ブイ)を動かして、これに氣流を吹き入るゝときは、氣流は樹形の管に衝突して、管内の氣柱に振動を起さしめ音を發す。學校にて、唱歌を教ふるとき又は「クリスト」教會にて、讃美歌を唱するときなどにこれを奏す。ふうきん。「オルゴル」。

［シンガルオ］

オルゴル（名）《オランダ語Orgel》㊀「オルガン」に同じ。㊁西洋佛來の一種の樂器。匣中にぜんまい装置ありて、それにより回轉する「シリンドル」の刺が、他の櫛狀の鋼鍵に觸れて音を發す。（自鳴琴）。

おれ[己]（代）《おのれ」の略言》㊀おもに下等社會の用ふる自稱の代名詞。われ。あち。いら。㊁輕蔑の意の對稱の代名詞。「—などが、何なるべき。

オレーフ[阿列布＝Olive]（名）【植】「オリーブ」に同じ。——**ゆ**[阿列布油＝Olive-oil]（名）「オリーブゆ」に同じ。

お・れい[御禮]（名）恩惠・庇護又はおくり物を受けたるに對して、感謝の意を表すること。——**まゐり**[御禮參]（名）神佛へ、かけたる願の成就して、其禮謝として參詣すること。

++おれ・おれし[接頭]（形、二）あろかに見ゆ。

おろ—（接頭）㊀或語に冠してくはしからぬ意を表はす。「—ぼれ」。㊁或語に冠して意を表はす。「—いゆ」。

++おろ・おろ（名、副）㊀力無く十分ならぬさまにいふ語。㊁泣き聲するさまにいふ語。「—泣く」。——**どゑ**（名）あろ〳〵なく聲。——**ねみだ**（名）あろ〳〵と泣きて、涙をたるゝこと。

おろか[愚]（名）智能とぼしきこと。理解心のかけたること。ばか。あはう。（愚・癡）。

おろか[疎]（名）てあち。ぬかり。あろそか。疎略。

おろか・れひ[穡]（名）刈りとりたる後に、稻の再び自生すること。又、其自生したる稻。

おろか・し[形、二]（名）愚鈍なり。にぶし。

おろか・もの[愚者]（名）ばかもの。あはう。

おろし[卸]（名）㊀あろしうり。㊁あろしの略言。㊂山より吹きあろす風。（颪）。㊃尊き方に奉りたる食物の殘餘。のこり。（餕）。——**うり**[卸賣]（名）問屋より商品を請け賣り人にわたしこうりの對。（仲買賣）。

おろし・ぐすり[下藥]（名）墮胎さするための藥。

おろし・がいこん[卸大根]（名）大根をあろしにかけてあろしたるもの。

おろし・なみ[卸並]（名）商品の賣價が、其卸し値（ネ）と同じきこと。「きの値（ネ）」。

おろし・ね[卸値]（名）商品をあろしに附すること。

おろ・す[卸、下]（他、さ四）㊀高きより低きへ移す。くだす。㊁結びつけたるものを解く。ほどく。㊂衣紋をくつろぐ。㊃垂下す。さげ。㊄投下す。くだす。「爆を—」。㊅官職又は位階をひくゝす。㊆あしくいひなす。あとしむ。いひくさす。㊇高きより低きへ吹き降す。「吹き—」。㊈新しき品をつかひそむ。「春衣を—」。㊉切載す。きる。「枝を—」。㊊刷去す。そる。「髮を—」。㊋あろしに掛けてすりくづす。「大根を—」。㊌あろしうりをなす。㊍墮胎せさす。「子を—」。㊎やすりにてすりへらす。

おろそか[疎]（名）㊀注意してなさゞること。なはざりに行ふこと。ゆるがせ。そりやく。㊁ぬかり多きこと。めんみつならざること。

おろぬく[他、か四]「うろぬく」に同じ。

おろ・ねぶり[疎眠]（名）なはざりに眠ること。

++おろ・ねむ・る[他、ら四]すこしくねむる。

おろ・みど（名）「あろりに」に同じ。

おん[恩]（名）めぐみ。なさけ。いつくしみ。

おん[音]（名）㊀【理】物體の振動によりて起る聽官の感覺。物體の振動が、其周圍の媒體（通常は空氣）に傳はりて音波を生じ、以て聽官の鼓膜に達し、鼓膜の其ために振動するによりて、此感覺を生ず。㊁樂器の調子。ねいろ。㊂音聲。こゑ。「大—に喚ばる。」㊃單純なる音聲。即ち、一氣に出づる音聲。「拍—」「清—」。㊄漢字の字音。訓の對。

おん—[御]（接頭）《おほみの轉》「おほんの略言」

或語に冠して敬意を表はす。「—言」「—事」。

(おん-あい)[恩愛](名) ㊀めぐみいつくしむこと。㊁こまやかなるなさけ。

(おん-かい)[音階](名) 元音と其「オクテーヴ」との間に、順次異なる樂音を排列したるもの、現今行はる、音階の順次即ち元音に對する音程は、ド(ハ)・レ(ニ)・ミ(ホ)・ファ(ヘ)・ソ(ト)・ラ(イ)・シ(チ)・ド(ハ)にして、これを一(ヒ)・二(フ)・三(ミ)・四(ヨ)・五(イ)・六(ム)・七(ナ)・一(ヒ)といふ。

(おん-がく)[音樂](名) 樂器を使用して、音を發し調を成し、歌謡の節に合はせて、以て人心を樂ましむるもの、總稱。又、其技術。 ——**か**[音樂家](名) おんがく專門の人。おんがくに長じたる人。

おん-がへし[恩返](名) 受けたるめぐみをかへすこと。報恩。

(おん-き)[恩誼](名) めぐみ。あはれみ。[恩義]。

(おん-き)[音義](名) ㊀音と意味と。「—を說く」。㊁一音ごとに有する意味。

(おん-きふ)[恩給](名) ㊀めぐみて給ふこと。に、ぎはすこと。㊁政府が多年勤續して一定の條件の下に職務を去りたる判任以上の官吏に、一定の金額を修身給與すること、在官滿十五年以上にして、六十歳を超ゆるか又は疾病傷痍のためか、若しくは廢官廢廐のために退官したるもの、在官十五年に滿たざれど、公務のため傷痍を受け疾病に罹り、一肢以上の用を失ふに至りたるもの、乃至滿五年以上國務大臣の職にありたるもの等は、恩給を受くるものとす、軍人には特別なる恩給法ありて、其現役を離れたるものに給與す。 ——**しょうしょ**[恩給證書](名) 恩給を受くる權利あることを證明したる證書、内閣これを作成して本人に交付す。

(おん-きょう)[音響](名) ㊀音とひびきと。㊁音に同じ。 ——**がく**[音響學](名) 音の性質及現象を研究する科學。

(おん-きょく)[音曲](名) 鳴りもの即ち琴・三味線などの樂器に合はせて、謡ふべきうたひ物の稱。

(おん-ぐう)[恩遇](名) なさけをかけて取り扱ふこと。いうたいすること。厚待。

(おん-けい)[恩惠](名) めぐみ。なさけ。 ——**き**

おつ[恩惠期日](名) 債務履行等につき、定期の外に特典として與ふる猶豫期限。

(おん-こ)[恩顧](名) なさけをかくること。あはれみ。かばひ。いきさ。「—の餘寵」。

オンコ(名) 【植】「いちゐ」の一名。

おん-ごと[御事](名) 其人にかゝはる事柄の敬稱。「俊德さまの—」。

おん-ごと[御事](代) きみ。あなた。

(おん-さ)[音叉](名) 【理】音の調子を計るに用ふる具、鋼鐵製にて、二脚及柄を有し、一定の振動數の音を發し得るもの。

[おんさ]

おん-ざうし[御曹司](名) ㊀古昔、堂上家の子息の「やごみ」の稱。㊁後世、源家嫡流の「やごみ」の子供の稱。「—冠朝」。

おん-し[御師](名) 「おしに同じ。

(おん-し)[恩賜](名) めぐみてたまはること。君主などよりたまはること。又、其たまはりたる物。

(おん-し)[恩師](名) 恩義ふかき師匠。

(おん-じき)[飲食](名) 《字の吳音》飲みものと食ひものと。「百味の—」。

(おん-しゃ)[恩赦](名) なさけによりて、罪をゆるさること。「—にあふ」(恩免)。

(おん-しょう)[恩賞](名) 其行爲をほめて物を賜はること。はうび。「—を受けんとすれば」。

(おん-しょう)[音聲](名) 【生】人類の發するこゑ、咽喉の内にある聲帶が空氣出入の際に振動して發するもの。其大小高低あるは、咽喉の軟骨これに附屬する筋肉と共動して、聲門を測大にし狹小にし、又、聲帶を弛緩し緊張するが故なり。

(おん-しゃく)[恩借](名) なさけによりて金錢又は物品を借りたること。又、其借りたる金錢物品。

おん-しゅ[飲酒](名) 【佛】五戒又は十戒の一、酒をのむこと。

おん-しらず[恩不知](名) 恩をうけて酬ゆることをしらざること。又、其人。

(おん-しん)[音信](名) おとづれ。たより。いんしん。

(おん-じん)[恩人](名) 恩をかけてくれたる人。

オンス[号 = Ounce](名) 英・米兩國に於ける衡量の單位「アヴォイルデュポイス」衡にては、一「ポンド」の十六分の一にして、我國の七匁五分六厘に當る、又、「トロイ」衡にては、「トロイ、ポンド」の十二分の一にして、我國の八匁二分九厘四毛に當る。

(おん-せい)[音聲](名) 「おんしょう」に同じ。

(おん-ぞ)[御衣](名) ㊀貴顯の人の着する衣服。㊁神事などの場合に着する服。

(おん-たく)[恩澤](名) めぐみ。うるはし。「—に浴す」。

(おん-てい)[音程](名) 【理】二つの聲音の振動數の比。

(おん-てう)[音調](名) ㊀【理】音の高低の稱にして、聲音體の振動數の多少に起る、振動烈しければ高く緩なれば低し。㊁詩文の語路又は音曲の抑揚。

一字音　一俚語方言　十古語

(おん-てん)[恩典](名) めぐみを賜はること。

(おん-でん)[隱田](名) かくしだ。

(おん-と)[音吐](名) 聲の出しかた。又、音聲。

(おん-ど)[音頭](名) 二人以上にて興(クヨウ)などをうたふとき、一人が先づ頭だちて調子を取ること。 ——**とり**[音頭取](名) ㊀音頭をつとむる人。發聲者。㊁物事の首唱者。

(おん-とく)[恩德](名) めぐみ。なさけ。

(おん-どく)[音讀](名) ㊀漢字を其音にて讀むこと。訓讀の對。㊁こゑを出して讀書すること。

(おん-ば)[乳母](名) めのと。うば。

(おん-ば)[音波](名) 【理】發音體に接觸せる空氣が、發音體の振動を受けて生ずる疎密の波、其波及ぶが、吾人の耳に入り鼓膜を振動するにより、音の感覺を起す。

おん-ばう(ボウ)[御坊](名) ㊀墓を守る人。はかもり。(墓番)。㊁火葬にて、死骸を焼く職業の人。(焚屍人)。

††おん-ばかせ[音博士](名) 古昔の大學寮の博士の一、主として漢字の漢音・吳音の研究を擔當し、これを諸生に教へしもの。

おん-ばと[車前](名) 【植】「おほばこ」の音便。

(おん-びん)[音便](名) 語調の便宜によりて、其音をなだらめてよびなす一定の音格。「かみぬし」を「かんぬし」、「行きて」を「行って」といふ類。

(おん-ぷ)[負](名) ㊀背におふこと。㊁會計などを人に持たすること。人におどらせなどすること。「詞(ノ)」。

おん-み[御身](代) 稍々敬意を含める對稱の代名詞。

(おん-みつ)[隱密](名) ㊀ひそかになること。かくしてなすこと。㊁たんてい。かくしめつけ。

オン-ムン[諺文](名) 《字の朝鮮音》朝鮮の國字、子母二十八字よりなる寫音文字にして、其中の三字は現今用ひられず、傳へて李朝第四世の王世宗の創作するところとされど詳かならず、梵字に倣ひて數個の文字を造り、これを基礎とし聲音相互の關係を斟酌して組み立てたるもの。(鳥文)。

(おん-めい)[恩命](名) ありがたきおほせ。

††おん-めの[佩物](名) 「おびもの」の轉。

††おん-やう(ヨウ)[陰陽](名) ㊀「いんやう」に同じ。 ——**け**[陰陽家](名) 古昔の官名、陰陽寮の所屬にして、卜筮方鑑の事を掌りしもの。(卜筮者)。 ——**はかせ**[陰陽博士](名) 古昔の官名、陰陽寮の所屬にして、天文・曆數などを教授せし職。 ——**たち**(ヨウ)[陰陽道](名) 卜筮方鑑又は天文・曆數などに關する學問。 ——**のつかさ**[陰陽寮](名) 古昔、中務省の被官にして、陰陽に關する事を掌りし役所。 ——**れう**(ヨウ)[陰陽寮](名) 前條に同じ。

(おん-りつ)[音律](名) ㊀おんのてうし。こゑのあや。㊁轉じて、音樂の稱。「—を好む」。「る」。

(おん-る)[恩威](名) 恩惠と威光と。「—並び行はる」。

(おん-ゐん)[音韻](名) 音と韻と。「—相叶はず」。

か　が

か 喉的破裂音K即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「あ」との聲音。凡て「か」と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふと異なるのみ。

か[香](名) 鼻官の感覺。にほひ。かをり。「梅が—」。

か[蚊](名) 【動】雙翅類に屬する小さき飛蟲、夏日人畜の血を吸ふ、體は黑褐色にして、腹部及脚部の白色なるもあり、雄蟲は花被を吸收し、雌蟲は二三百の卵子を水中に滴下す、卵子は、孵化後三週間にして蛹に化し、蛹は十日間を經て成蟲に化す。「蚊帳」。

††か[鹿](名) 【動】「しか」に同じ。

(か[加](名) かさん。よせざん。又、よせざんしたる數。

(か[可](名) ㊀よろしきこと。㊁ゆるすこと。㊂やゝ不滿足ながちゆるすこと。

††か[彼](代) かれ。「—はたれどき」。

か[歟](助) ㊀疑ひの意を表はす語。「憂—、うつゝ—」「あるー、なきー」。㊁問ひかくる意を表はす語。「いづれー」「どれー」。㊂感歎の意を表はす語。かな。「さびしくもあるー、ひぐらしの聲」。

††か—(接頭) 語調を整ふるために或語に冠する語。「—ぐるま聲」「—よわし」。

(—か[個・箇](接尾) 物事を數ふるにいふ語。「三—」「百—」。

(—か[荷](接尾) 一人の荷ふべき分量の荷物を數ふるにいふ語。「兩掛—」。

—か[處](接尾) 或語に添へて、場所の意を表はす語。「住み—」「隱れ—」。

—か[日](接尾) 或語に添へて、日數の意を表はす語。「十—」。

(か[買](名) ㊀いはひ。ことよぎ。「改暦の—」「新年の—」。㊁詩老いたるをよろこび祝ふと。古昔は、四十・五十・六十・七十・八十等の年齡に行ひしが、今時は六十一・七十七・八十八等の齡にも行へり。

(が[駕](名) 馬のひく乘車。のりもの。「—を迎ふ」。

(が[鵝](名) 【動】「がてう」に同じ。

一字音　一俚語方言　十古語

(が)[蛾](名)【動】蛾類の成蟲。
(が)[芽](名) 植物の萌(ザ)し、即ち、嫩葉を以て被包せられたる生長點。め。
(が)[我](名) ㊀わが思ふ趣をいひはりて、人の言に從はぬと。(執拗)。㊁自家の私利をはかると。私慾。㊂【佛】自家一身は假合なるに、實體なりと執着すると。㊃【哲】自家の存在。觀察點を異にするに從ひて、客我・主我等に分つ。㊄【心】一切の心的狀態の中に於て、最も主觀的と感ぜらる、心的狀態。
(が)[雅](名) ㊀支那上代に於ける詩の六義の一、義理正しくして後世の法とすべきもの。「大—、小—」。㊁たゞしき音樂。たゞしき歌謠。(雅樂、雅音)。㊂たゞしき言語。たゞしき道峻。㊃たゞしきと。正善。㊄おくゆかしきと。けだかきと。みやびやか。ゑとやか。㊅簡略にして趣味多きと。(風雅)。
が(助) ㊀主格を表はす語。「人—笑ふ」。㊁關係を表はす語。「君—世」。㊂「にある」の意を表はす語。「宮城—原」。㊃「といふ」の意を表はす語。「如意—獄」。㊄さうではあるもの、、又はゑかしながらなどの意を表はす語。「尋ねし—知れず」。
++が(助) こひねがふ意を表はす語。がな。「哀れ見てし—」。
カーキー[Khaki](名) (きたな色の義)近時ふもに陸軍の軍服に用ひらる、色、「インド」にて牛糞を以て染めしに濫觴すといふ、茶褐色とも褐(カ)(チ)色とも稱す。
ガーゼ(名) (「ドイツ」語 Gase) 消毒したる粗き木綿、外科用のもの。
カード[Card](名) ㊀厚紙の小片。ふだ。㊁骨牌。
──しき[─式](Card system)(名) 簿記法にて、各個の口座を各個の「カード」に記載して勘定整理するもの。

かい[櫂](名) (「かき」の音便) 船具の名、櫓(ロ)より小さく且つ曲がらず、水を撥(カ)き分けて、船を進むるに用ふるもの。(櫂、楫、橈)。
(かい)[戒](名) ㊀いましむると。いましむる言。いましめ。㊁漢文にて人をいましむるに用ふる文體。㊂【佛】非を防ぎ惡を止むると。又、其例。「十—」、「五—」。
(かい)[階](名) ㊀きざはし。あがりだん。㊁ゑな。くらゐ。だん。「位一—」。
(かい)[楷](名) 「かいゑよ」の略言。
(かい)[解](名) ㊀意義又は方法のときあかし。(解說)。㊁漢文にて人の疑ひを釋くに用ふる文體。
(かい)[海](名) うみ。なだ。「—面」。(洋)。
(かい)[介](名) ㊀かひがら。かひ。㊁すけ。かいぞへ。㊂なかだち。仲人。㊃節操かたきと。㊄纖介なきと。
(かい)[界](名) ㊀上下四方。空間。㊁場所。位地。㊂社會。なかま。「學者—」。㊃さかひ。かぎり。
(か-い)[下意](名) ゑもじもの意思。「—通ぜず」。
(か-い)[下衣](名) 上衣の下に着する衣服。ゑたぎ。
(かい)[粥](名) 「かゆ」の訛。
かい—[搔](接頭) 語勢をそふるために成動詞に冠する語。「—つくろふ」「—ゑくく」。
(がい)[蓋](名) ㊀おほふもの。おほひ。㊁笠・傘又は繖(キヌ)(ガサ)など。かさ。㊂器物のふた。㊃【佛】貪慾瞋恚などの如き善心をおほふもの。
(がい)[害](名) ㊀そこなひ。さまたげ。さはり。わざはひ。「一利一—」。㊁【倫】人生の障礙抵抗、これを分つて二とす、一は物理的にして即ち自然的勢力をいひ、他は道德的にして即ち惡をいふ。
(が-い)[我意](名) 我が思ふまゝのこゝろ。わがまゝ。
(がい)[街](名) ㊀とほり。ちまた。まち。㊁臺灣にて、廳の管轄に屬する行政區劃、長を置きて其行政事務を取扱はしむ。

(がい)[該](代) その。この。「—書籍」「—局」。
(がい-あく)[害惡](名) 「がい」(害)に同じ。
(かい-い)[介意](名) 氣にかくると。ゑんぱい。
(がい-い)[害意](名) 他を害せんとする心ぐみ。
(かい-いん)[拐引](名) 詐僞の手段を用ひて、人を他處へつれゆくと。かどはかし。
(かい-いん)[改印](名) 印形(インギヤウ)を改めかふると。
(かい-いん)[海印](名) 【佛】覺者の智の稱、其諸法を照觀すると海の萬象をうつすにたとへいふ。
(が-いう)[雅遊](名) 風流なるあそび、即ち、詩歌の會又は山水の遊びなどにいふ。
(かい-う)[海宇](名) 「かいだい」(海內)に同じ。
(か-いう-せい)[下遊星](名) 【天】地球の軌道の內方にある遊星、即ち、水星・金星の稱。
(かい-うん)[開運](名) 幸運に向ふと。運ひらけてよくなると。
(かい-うん)[海運](名) 船舶により海上を通じて貨物又は旅客を運送すると。──げふ[海運業](名) 海運を以て賃錢を取得するを目的となす營業。又、海路による運送の事業。
(がい-えう)[概要](名) あらまし。おほそ。
(かい-えき)[改易](名) ㊀あらためかふると。㊁(族籍を改めかふる義)德川時代に武士に科せし刑罰の一、其族籍を除(ノゾ)き其家祿を沒收して、平民となしゝと。蟄居より重く切腹より輕し。
(かい-えん)[開演](名) 演說・講義又は遊藝・演劇などをはじむると。
(がい-か)[崖下](名) 絕壁のした。がけゑた。
(がい-か)[凱歌](名) 凱陣を祝ふうた。「—をあぐ」。
(かい-かう)[開講](名) 講義を始むると。

(かい-かう)[偕行](名) つれだちてゆくと。又、ともにおこなふと。
(かい-かう)[海港](名) 海岸にある軍艦・船舶の避難所若しくは停繫場。うみべのみなと。
(かい-かう)[開港](名) 其港に外國船の自由出入を許すと。港を開放すると。又、其港。
(かい-かう)[開校](名) 學校にて授業を始むると。
(かい-かう-けんえき)[海港檢疫](名) 傳染病豫防のため、海外の諸港等より來る船舶に對し、指定の海港に於て檢疫を行ふと。
(かい-かう-しき)[開校式](名) 學校にて授業を始むるにつきて行ふ式。
(かい-かう-ぢやう)[開港場](名) 開放したる港。
(かい-かう-しや)[偕行社](名) 師團所在地に設けある陸軍將校の集會所。
(かい-かく)[改革](名) ㊀あらためかふると。又、あらたまりかはると。㊁其目的が國家の基礎に關せず其方法が憲法の範圍を超えず、且普通に、行動の穩なる政治上又は社會上の變化。革命の對。
(かい-かく)[海角](名) みさき。さき。「喜望峯の—」。
(かい-かく)[介殼](名) 【動】軟體動物の外套膜より分泌して生成する石灰質のもの、頭足類即ちいか等にては、多く甲狀をなして外套膜の內にあり、腹足類即ちたにし・あはび等にては、螺旋狀若しくは板狀をなし單一にして外套膜の外にあり、瓣鰓類即ちはまぐり・あさり等には、左右二枚概ね同形にして內に二枚の外套膜あり。
(かい-がく)[海壑](名) ㊀海とたにと。㊁恩惠の深大なるにたとへいふ語。「—の恩」。
かい-がけ[皆掛](名) ゑろものとふうたいとを共に秤(ハカ)りにかくると。うはめ。

++かい-がね[胛](名) 「かいがらぼね」の古名。
(かい-かふ)[開闔](名) ㊀ひらくととづると。㊁++古昔の官名、和歌所・藏人所・政所などにありて、次官に同じき職掌のもの。
かいがら-ぼね[胛骨](名) 【生】軀幹の背の上部の骨、扁平三角形にして、左右一對あり、前方は上膊骨及鎖骨に連接して關節をなす。けんかふこつ。かりがねぼね。
(かい-がん)[海岸](名) 陸地の海に接近したる箇處。うみのきし。うみばた。うみべ。──えうさい[海岸要塞](名) 軍港・要港又は兵略上重要なる港灣に設けある要塞。──せん[海岸線](名) 海水と陸地との相接せる處、即ち、海陸の界。──はう[海岸砲](名) 海岸要塞に備置する各種の大砲。──ばうぎよ[海岸防禦](名) 海岸をふせぎまもると。又、海岸に設置せる兵備。──はうだい[海岸砲臺](名) 海岸防禦のために設けたる砲臺。──ばうろう[海岸望樓](名) 「かいぐんばうろう」に同じ。
(かい-き)[皆既](名) 【天】「かいきしよく」に同じ。
(かい-き)[開基](名) ㊀ねもとをひらくと。㊁寺院の創立者。寺院の祖。かいさん。「—は一遍上人」。(開祖、開山)。
かい-き(名) (甲斐絹の略か) 織物の名、甲斐國郡內地方より出づ、生絲にて織れる織色の絹にして、無地又は縞等あり、蝙蝠傘又は羽織の裏などに用ふ。
(かい-き)[海氣](名) 海の氣。うみべの空氣。
(かい-ぎ)[海技](名) 海員として必要なる技術。──めんじやう[海技免狀](名) 海員の試驗に合格したるものか、若しくは遞信大臣が合格者同等と認めたるものにして、海員名簿に登錄濟みとなりたるものに對し、授與する船舶職員免許の證書。

(がい-き)[咳氣](名) 咳(セキ)を催す氣。「—あり」。(咳嗽)。
(かい-き-しよく)[皆既蝕](名) 【天】日蝕の一體、太陽が太陰に全く蔽(オホ)はれたる現象の稱にして、即ち、觀測者が太陰の本影內にあるときをいふ。
(かい-きふ)[階級](名) ゑな。くらゐ。とうきふ。「—を四等に分つ」。(等級)。
(かい-ぎやう)[戒行](名) 【佛】よく戒律を守ると。
(かい-ぎやく)[諧謔](名) 不相應若しくは不釣合にして、好笑の情緒を呼び起す言。面白味多き言。おどけ。ゑやれ。
(かい-ぎよ)[海魚](名) 海に產する魚。うみうを。
(かい-きん)[戒禁](名) ㊀いましめ。制止。㊁【佛】一切の不善法を制止すると。
(かい-きん)[皆勤](名) 一年又は一箇月若しくは或時期の間に、一定の休日の外は、一日も缺かず出勤せしと。
(かい-きん-しや)[海金砂](名) 【植】海金砂科に屬する羊齒植物、樹林の中などに生ず、莖は上昇革本にして、芽胞房は其頂端に完全なる帽狀の彈力環を有す、藥用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる。ゑなぐさ。たゝきぐさ。
(かい-ぐ)[戒具](名) 刑事被告人又は囚人の逃走暴行等をいましむるために用ふる器具、あしかし・てぢやうの類。
(かい-ぐ)[皆具](名) 道具のこらず備はりたると。
(がい-く)[街衢](名) まち。ちまた。
(かい-ぐう)[海隅](名) 入りこみたる海のすみ。
++かい-くらみ-どき[搔暗時](名) たそがれ。くれがた。ゆふかた。(黃昏)。

かい-ぐり[掻繰](名) かいぐること。

かい-ぐ-る[掻繰](他、ら四) 左右の手にて繰る。たぐる。

(かい-くわ[開化](名) 人智のひらけ進むこと。世の思想風俗など善良に向ひ進むこと。又、其開け進みたるありさま。「文明—」(開明。

(かい-くわ[諧和](名) 睦じくやはらぐこと。

(かい-くわい[開會](名) ㊀團體の成立又は會議・集會の開始。㊁帝國議會が有効なる行動を始むる手續、天皇が開院式を行ひ給ひてこれを命ぜらる。

(かい-ぐわい[海外](名) 我國の境を圍める海のそとの國。とつくに。「—に遊ぶ」(外國)。——**-りよかうけん**[海外旅行券](名) 海外へ渡航するものゝ所持すべき旅行券、外務大臣より出願者に對して附與するもの。

(かい-くわつ[開豁](名) ㊀度量大なること。心廣かなること。㊁させつかぬこと。㊂眺望の開け渡れること。

(がい-くわつ[概括](名) すべて、なること。よせつゞむること。

(かい-くわん[開卷](名) 書物を繙[ひもと]くはじめ。開きたる書物のはじめの部分。かきだし。はじめ。

(かいくわん-ぜい[海關稅](名) 稅關にて海路による輸出入の貨物に課する稅。

(かい-ぐん[海軍](名) 海上の軍艦及兵備に關する一切の總稱、即ち、海上に於ける國家國民の利益又は權利を保護し、戰爭に際しては、海上の攻守にあたる軍備。——**-かんせん**[海軍艦船](名) 海軍に屬する軍艦及船舶の總稱、分つて第一種軍艦(戰鬪の役務に堪ふる軍艦)・第二種軍艦(戰鬪の役務に堪へざるも、常務を帶び航行し得る軍艦)・水雷艇・雜役船の四種とす。——**-きくわんがくかうゴウ**[海軍機關學校](名) 專ら機關に關する軍務に從事する海軍の高等武官を養成する學校、其學科は機關術・水雷術及普通學とす。——**-きやうゴウ**[海軍卿](名) 明治十八年官制改革前に於ける海軍大臣の稱。——**-く**[海軍區](名) 海軍の必要より、我國の海岸及海面に設定した若區劃の稱、管理は其區內にある鎮守府司令官に屬す、現今の制にては、四海軍區あり。——**-ぐんいがくかうゴウ**[海軍軍醫學校](名) 海軍の軍醫官に高等の學術を教授し、又、海軍の醫官及藥劑官となすべき候補生に必要なる學科及職務を練習せしめ、兼ねて、被服食料等の衛生試驗を行ふ所。——**-ぐんれいぶ**[海軍軍令部](名) 海軍上の國防及用兵に關する事を掌る所、部長ありてこれを統理す、部長は天皇に直隸して帷幄の機務に參じ、國防及用兵に關する事を參畫し、親裁を受けこれを海軍大臣に移す。——**-とうきやうゴウ**[海軍工廠](名) 各軍港に設置しありて其鎮守府に屬し、艦船及兵器の製造・修理・續裝並に兵器の保管・供給に關する事を掌り、又、需用品の調辨・供給を掌る所。——**-とんきよち**[海軍根據地](名) 海軍が根據として諸種の設備をなしたる地、又、艦隊が一時設定したる修理・供給等をなす所。——**-ざうへいきやうゾウ**[海軍造兵廠](名) 海軍に關する兵器の製造・修理・購買其他造兵事業に關する事を掌る所。——**-きやうゾウ**[海軍省](名) 海軍大臣の統轄の下に屬し、其意思を受けて、海軍に關する軍事行政を取り扱ふ中央官廳、又、海軍大臣が處理する事務の全體の稱。——**-だいがくかうコウ**[海軍大學校](名) 海軍の將校及機關官に高等なる學術を教授する所。——**-だいおん**[海軍大臣](名) 各省大臣の一にして、軍事行政の單獨官府、海軍に關する軍事行政を管理し、海軍の軍人軍屬を統率し、所轄所部(鎮守府・兵學校等)を監督するもの。——**-はうゾウ**[海軍砲](名) 軍艦の裝備に適する各種の直射砲。——**-はうろうロウ**[海軍望樓](名) 海軍省の所管にして、沿岸の諸要所に設置せられ、海上の見張り及通信を掌り、並に氣象の觀測をなす所。——**-へいがくかうコウ**[海軍兵學校](名) 海軍將校となすべき生徒を教育する所、其學科は、砲術・水雷術・運用術・航海術・機關術及普通學とす。——**-りくせんたい**[海軍陸戰隊](名) 陸上の戰鬪にあたるために、軍艦の定員中より採りて編制せられたる軍隊。

(かい-げ[改悔](名) 【佛】以前の非惡を自覺して、善道に向ふこと。ざんげ。

(がい-け[咳氣](名) せきの多く出づること。

(かい-けいき[蓋擎子](名) 茶碗を載(の)する臺、載せたる茶碗の上に蓋をなす。

[えいけいかい]

(かい-けつ[解決](名) もつれ事の處理。又、問題の解釋。

(かい-けふ[海峽](名) 【地】陸と陸とにはさまれて狹くなりたる海にして、大海に通じたるもの。

(かい-げふ[開業](名) ㊀營業をなしつゝあること。㊁營業を始むること。㊂みせびらき。かいてん。㊃營業をなしつゝあること。開店しあること。——**-い**[開業醫](名) 免狀を受けて開業せる醫師。——**-きき**[開業式](名) 會社・銀行などが、其開業に際し、關係者などを招待して擧行する儀式。——**-めんきやうゾウ**[開業免狀](名) 特定の條件により特定の人に、官廳が開

一 俚語方言　一字音　++古語

業を許可する證書。「醫術—」。

(かい-げん[改元](名) ㊀年號をあらたむること。㊁帝王又は王朝の交代。だいがはり。かくめい。

(かい-げん[開眼](名) 《まなこをひらく義》【佛】(い)法性眞如を證見すること。(ろ)新に出來たる佛體を神聖にするがために、僧徒の行ふ儀式。「—供養」。

(かい-げん[戒嚴](名) ㊀いましめを嚴しくすること。きびしく用心すること。㊁【法】戰時若しくは事變に際し、兵備を以て全國若しくは一地方を警戒すること、其範圍內の行政權及司法權の一部若しくは全部を其地の司令官の掌管に委ぬるものにして、分ちて臨戰地境及合圍地境の二とす。——**-れい**[戒嚴令](名) 【法】天皇の大權により戒嚴を宣告したまふの勅令。

(がい-けん[概見](名) 大凡を見たること。さっと目をとはすこと。

(がい-げん[概言](名) 大凡をあげて言ふこと。

(かい-こ[解雇](名) やとひ居たる人を解除すること。やとひを解くこと。かいよう。

(かい-こ[註誤](名) ㊀まちがい。まちがい。㊁人をまどはすこと。

(かい-ご[解悟](名) さとること。氣がつくこと。迷ひを開くこと。「開悟」。

(かい-ごう[邂逅](名) あもはず出會すること。たまさかに遇ふこと。

(かい-こう[開口](名) ㊀口をひらくこと。聲を發すること。言ひ出すこと。㊁先づ第一番にあんどを取りて、音聲を出すこと。はっせい。㊂うたひの一種、謠初などに作りてうたふもの。

(かい-こく[海國](名) 四境の海なる國。えまくに。

(かい-こく[開國](名) ㊀國を建つること。㊁外國と交通を始むること。鎖國の對。

++かい-こ-す[掻越](他、さ四) うしろの方へ垂れたる髮の毛を、まへの方へこし出だす。

(がい-こつ[骸骨](名) ㊀からだ。むくろ。㊁肉あらで、骨ばかりとなりたる死がい。——**をこつふ**[乞骸骨]。《主君にさゝげしむくろを乞ふ義》位地高き人の仕官を辭するにいふ。

かいご-の-はな[解語花](名) 《ことばのわかる花の義》美人の稱、ものいふはな。

かい-こ-む[抱込](他、む四) 【掻込】か(こ)む。㊁流動體を汲みいれる。

(かい-こん[開墾](名) 山野をひらきて、新に田畝をつくること。かいはつ。かいたく。(開拓)。——**-ちつくること。かいたくしたる土地。**

(かい-さ[開鎖](名) ひらくこと。ざすこと。

(かい-さい[改竄](名) ㊀んねん。かいねん。

(かい-ざい[皆濟](名) ㊀借金をことごとく返却すること。又、年貢をことごとく納むること。㊁物事のことごとくのこと。のひすみたること。

(がい-さい[睚眥](名) にくさげに人を視ること。にらむこと。——**-のうらみ**[睚眥怨](名) わかばかりのうらみにいふ語。「みくさ」

(かい-さうソウ[海藻](名) 海產の植物の總稱。うみ

(かい-さうソウ[改葬](名) 一旦葬りたる死骸をあらためて葬りかふること。

(かい-さく[開鑿](名) ㊀山などをひらきて、道を通ずること。又、其新道。㊁海水などを埋め立てゝ、新田をつくること。又、其新田。「て調ふること。

(かい-さつ[開札](名) 入札などに、札をひらきぞをあらぶること。「停車場の—」。

(かい-さつ[改札](名) ふだをあらたむること、きっ

(かい-さん[解散](名) ㊀集會せる者の散じ去ること。㊁集會せる者を散じ去らしむること。㊂契約を解き一定の事業を廢止すること。「會社にいふ」。㊃議員の任期未滿なるに、其資格を解除すること。「議會にいふ」。

(かい-さん[開山](名) ㊀寺院の創立者。寺院の祖、開基。㊁或物事の開始者。

(かい-さん[海產](名) 海に產するもの。

(かい-ざん[改竄](名) 文字のかきかへ。文句のつくりかへ。

(がい-さん[概算](名) あらましの勘定。おほづもり。「概計」。

(がい-ざん[碍竄](名) 入るをさゝふること。——**せい**[碍竄性](名) 【理】物質の性質の一、一物質が占むる空間には、他の物質をして同時に占有せしめざること。

(かいさん-ぶつ[海產物](名) 海に產するもの。

(かい-ぎ[界紙](名) すぢを引きてある紙。罫紙。

(かい-ぎ[開士](名) 【佛】《法を以て開き導く人の義》菩薩(ぼさつ)の稱。

(かい-さ[開始](名) はじめること。又、はじまること。

(かい-さ[戒師](名) 【佛】信者に戒を授くる法師。

(かい-さ[介士](名) 甲冑を着けたる士。

(かい-さ[海市](名) あんきろう。「と。

(かい-さ[開示](名) ときあかすこと。いひあらはす

(かい-さ[海事](名) 海上に關する事。

(がい-さ[碍子](名) 架設する電線を支持し、且支柱などに其電流の傳はるを防ぐに用ふる磁器製の物。電柱の腕木の上に見ゆる白色の物これなり。

(がい-ぎ[孩兒](名) みどりご。をさなご。「嬰兒」。

(かい-ぎ[海獸](名) 海中に棲息する獸類、即

++古語　一字音　一俚語方言

ちゝくぢら・あざらしの類。うみのけもの。

++かい・しき[掻布](名) (「かきしき」の音便) 古昔、食物のうつはもの、中に、木葉などをしきしと。又、其しきたる木葉。

⌒かい・しき[解式](名) 【數】演算の順序を一定の記號方法によりて記載したるもの。

++かい・しき[皆式](副) みな。のこらず。

⌒かい・じきよく[海事局](名) 遞信大臣の管理に屬し、船員及水先人の試驗又は船舶の試驗檢査其他法令の定むる所の海上に關する事務を取り扱ふ遞信省の一局。

⌒かい・しやう[海相](名) 海軍大臣の異稱。

⌒かい・しやう[海床](名) 【地】海底の深谷。

⌒かい・しやう[海商](名) 【法】海上に於ける商行爲。 ——・はふ[海商法](名) 【法】商法の一部、海商に關する權利關係を定むる法規、最も艀(ハシケ)其他櫓(ロ)・櫂(カイ)のみを以て運轉し又は主として櫓櫂を以て運轉する舟には、これを適用せず。

⌒かい・しやう[海上](名) 海のうへ。海のおも。 ——・けん[海上權](名) 海上を制御する權力。 ——・しようとつ[海上衝突](名) 海上に於ける船舶の衝突、其豫防に關し、船燈又は信號等に就き詳細なる規定あり。 ——・はふ[海上法](名) 航海に關する法規の總稱、これを分つて公法的及私法的の二とす、公法的は、船舶の國籍・登記又は貿易・航海に關する條約及規定等にして、私法的の大部は海商法なりとす。 ——・ほくわく[海上捕獲](名) 【法】交戰國の一方が、交戰主體の權利により、公海又は領海に於て、敵國の船艦、若しくは他國の船艦の中立違犯の實蹟又は嫌疑あるもの等を捕獲すること。 ——・ほけん[海上保險](名) 【法】航海に關する事故によりて生ずべき損害の塡補を以て目的とする保險、此保險に關する商法の規定は、一種の特別法にして、若し特別の規定なき限りには、一般の保險に關する規定を適用するものとす。

⌒かい・じやう[海上](名) 「かいしやう(海上)」に同じ。

⌒かい・じやう[開城](名) 城をひらきて敵に降ること。

⌒がい・じやう[街上](名) ちまた。みちばた。

⌒かい・じやう・だんそう[階狀斷層](名) 【地】斷層の順次に階級の狀をなすこと。

⌒かい・しやく[介錯](名) ㊀かいはうする人。㊁古昔、切腹のとき付き添ひて、其人の首をはねしこと。又、其人。 ——・にん[介錯人](名) 介錯する人。

⌒かい・しやく[解釋](名) ㊀ときあきらむること。ときあかし。せつめい。㊁もつれたる事件の處理。「東方問題の—」。

⌒かい・じやく[海若](名) 海の神。わたつみ。

⌒かい・しゆ[皆朱](名) 朱又は辰砂を混じて、赤色に塗りたる漆塗り。

⌒かい・しゆう[改宗](名) 信仰歸依(キエ)せる宗旨をあらたむること。

⌒かい・しゆん[改春](名) あらたまりたる春。しんしゆん。(新年)。

⌒かい・しゆん[開春](名) 春のはじめ。はつはる。

⌒かい・しゆん[改悛](名) 前非をあらたむること。心をいれかふること。かいしん。かいご。

⌒かい・しよ[楷書](名) 漢字の書體の一、隷書より轉化せしものにて、晉の王次仲の創始にかゝるといふ、形最も正し。しん。しんしよ。(眞書)。

⌒かい・しよう[改稱](名) となへをあらたむること。

⌒かい・じよう[階乘](名) 【數】一より初めて一つ宛多き數を皆な掛け合はしたる積、1×2×3×4×……×n は n の階乘なり、n! 又は ∟n を以てこれを表はす。

⌒かい・しよく[解職](名) 其人の其職務より去らしむること。免職。

⌒かい・しよく[戒飾](名) いましむること。つゝしむこと。

++かい・しろ[垣代](名) ㊀とばり。(帳)。㊁がくにん。れいじん。(伶人)。

⌒かい・しん[改心](名) 惡心をあらためて、善心にたちかへること。かいしゆん。かいご。

⌒かい・しん[開申](名) まうしひらき。まうしあげ。しやうえん。「—すること」。

⌒かい・しん[戒心](名) 自らいましむること。ようじん。

⌒かい・しん[改新](名) ㊀あたらしくすること、又、あたらしくなること。㊁年の始め。

⌒かい・しん[改進](名) ㊀物事のあらたまりすゝむこと。㊁舊弊を改め新文明に進ますること。 ——・たう[改進黨](名) 明治十四年に、大隈重信が首唱となり、北畠治房・矢野文雄等と共に團結して創立せし政黨。

⌒がい・しん[害心](名) わるだくみ。あくしん。

がい・す[害す](他、さ變) ㊀きずつく。そこなふ。㊁あやまをなす。さまたぐ。㊂さつがいす。ころす。「白晝人を—」。㊃ねたむ。忌む。「其能を—」。

⌒かい・すう[海陬](名) 海邊のかたゐなか。沿岸の僻村。(海隅)。

++かい・す・む[掻澄む](自、ま四) かきひそむ。「かいすみて、こゝろぼそげなれど」。

ガイスレル・くわん[—管=Geisslers' tube](名) 【理】甚だ稀薄なる瓦斯を充(ミ)たせる玻璃管の

兩端に電極を附したるもの、これを感應「コイル」に路(ツナ)ぎ、放電を行ふとき、陰極は青綠色の微光にて蔽(オホ)はれ、次に暗所あり、陽極は美麗なる桃色の微光が、鱗狀をなし層々相重なりて發出す、「ドイツ」人「ガイスレル」氏初めて此實驗をなしゝにより此名あり、管内に螢光を放つ物體を入れ、或は管を「ウラニウムガラス」にて作るときは、放電の際、螢光を放ちていよ〳〵美麗なり。

[ガイスレルくわん]

⌒かい・すゐ[海水](名) 海洋に湛(タヽ)ふ水、多量の鹽分を含みて淡水より重し、固有の色は青なれど、鹽分の多寡によりて、其濃淡を異にす、しほみづ。 ——・よく[海水浴](名) 夏日衞生のため、海水に入りて沐浴又は游泳すること。「—をなすこと」。

⌒かい・せい[改正](名) あらためただすこと。善き方にあらたむること。

⌒かい・せい[改姓](名) 苗字をあらたむること。

⌒かい・せい[皆濟](名) 「かいさい」(皆濟)に同じ。

⌒がい・せい[慨世](名) 世の成り行きをなげきうれふること。がうがい。「—の氣あり」。

⌒がい・せい[蓋世](名) 世をおほひつくすほどの器量又は功名あること。「—の功名」。

⌒かい・せい・ぶつ[海生物](名) 海中に生ずる動植物、淺海に生ずるものは、普通人の知る所なれど、深海は水溫低く且闇黑なるが故に、植物は下等植物にして、動物は眼孔非常に大なるもあり、或に全く盲目なるもあり、又、燐光を發する等もありて、特殊の機關を備ふるものとす。

⌒かい・せう[海嘯](名) 巨大なる波浪の不時に起りて陸地を侵すこと、海底火山の破裂若しくは地震等に伴ふもの多し。つなみ。

⌒かい・せき[解析](名) ㊀解きひらくこと。㊁物事を細かく解きひらき、理論によりて研究すること。 ——・きかがく[解析幾何學](名) 【數】代數的演算により研究する幾何學、「フランス」人「デカルト」氏の創めしもの。

⌒かい・せつ[開設](名) あらたにまうくること。はじむること。

⌒かい・せつ[解說](名) ㊀ときあかし。せつめい。㊁物事を分解して、其要素又は概略を舉示すること。

⌒がい・せつ[剴切](名) 最も適切なること。「引證—」。

⌒かい・せん[海船](名) 海上を航行するための船舶。うみぶね。

⌒かい・せん[改選](名) 議員又は役員の任期滿ちあらためてこれを撰擧すること。

⌒かい・せん[海戰](名) 海上の戰爭。陸戰の對。

⌒かい・せん[開戰](名) 戰爭行爲を始むること。敵に對して攻擊を始むること。

⌒かい・せん[疥癬](名) かいせんちゆうの寄生によりて生ずる皮膚病、甚だ痒(カユ)きもの。ひぜん。

⌒かい・ぜん[改善](名) 改めて善に向ふこと。

⌒がい・せん[凱旋](名) いくさに勝ちてかへること。がいぢん。(旋軍、凱還)。

⌒がい・ぜん[蓋然](名) しかあり得るならん又はしかあるならんといふこと。必然の對。

⌒がい・ぜん[慨然](名、副) いきどほりなげくさまにいふ語。

⌒がい・ぜん[駭然](名、副) おどろきたるさまにいふ語。

⌒かい・せん・ちゆう[疥癬蟲](名) 【動】蜘蛛類に屬する細小なる蟲、形狀壁蝨(ダニ)に類し、人の皮膚に寄生して、圓狀に害蝕し、以て疥癬を起す。ひぜんのむし。

かいぜん・ばんり[階前萬里] 君主が、下民の事

情に極めてくはしきにいふ。

⌒がい・そう[劾奏](名) 官吏の罪過をあげて君主に奏すること。(彈劾)。

⌒かい・ぞく[海賊](名) ㊀海上に橫行し又は上陸して、財貨を强奪する盜賊。「—毛利九右衞門」。㊁近古、海軍の異稱。㊂【法】一國の主權の承認なく又は全く關係なく、公海・領海に橫行し若しくは島嶼・領地等に上陸して、貨財を奪ひ暴行を恣にするもの、現今の國際法にて、これを人類の公敵と看做し、何れの國の船艦又は國民にても、これを拿捕して、自國法廷の裁斷に附するを得るを通則とせり。 ——・せん[海賊船](名) 【法】海賊の使用せる船舶、現今の國際法にて、海賊と同じく、何れの國の船艦又は國民にてもこれを拿捕して、自國法廷の裁斷に附するを得、又、海洋を航行する船舶の海賊たるを疑ふに足るべき十分の理由あれば、何れの國の軍艦も其船舶の審査を行ひ得るものなり。

⌒がい・そく[槪則](名) あらましのきそく。

かい・ぞへ[介添](名) ㊀かしづき。たすけ。てつだい。㊁嫁(ヨメ)に行きたる後まで、其嫁女にともなふ下婢。

⌒かい・そん[海損](名) 【法】航海に關して生じたる船舶及荷物の損害、これを分つて共同海損・單獨海損・小損害の三とす、共同海損とは、船長が船舶及積荷をして、共同の損害を免れしむるための處分より生じたる損害をいひ(沈沒を免るゝために、積荷を投棄したる場合などの如き)、單獨海損とは、任意にあらずして、船舶又は積荷にのみ生じたる損害をいひ、小損害とは、航海及臨時の必要より生じたる費用をいふ。

⌒かい・たい[解體](名) ㊀身體をときわくること。か

いばう。㊁多數のもの相集りて成り立ちたる一の物事が、個々別々になること。

(かい・たい)[懈怠](名) ㊀おこたり。なまけ。げたい。㊁ぬかり。失念。㊂〔法〕自己の行爲により生ずべき惡結果の豫期せられ、且これを防止し得べき地位に立つにも關らず、これを等閑に附したるがため、惡結果を生じたると、例せば、往來に於て放銃して通行人を殺傷せるが如きこれなり。

(かい・たい)[拐帶](名)〔法〕委托を受けたる物品を、其人に途附する意思なきか又は其承諾以外の使用をなさんがために、持ち去ること。もちにげ。

(かい・たい)[改ハ](名) 代のかはること。だいがはり。

(かい・だい)[改題](名) 題號をあらたむること。

(かい・だい)[解題](名) 書冊の著者又は概略若しくは出版の年月等の說明。「漢書—」。

(かい・たい)[海内](名) ㊀東西南北の四海のうち、即ち、國内。㊁天下の稱にもいふ語。

(かい・たい)[戒刀](名) 僧具三衣を截(タ)つに用ふる刀。又、僧侶のたしなみに持つ刀の稱。

(かい・だい)[海道](名) ㊀沿海の地方を通ずる街道。山だうの對。㊁東海道の略稱。㊂〻みちすぢ。街道。〻——・くだり[海道下](名) 古昔、東海道を東國へくだりしこと。

(かい・だい)[海棠](名)〔植〕薔薇科に屬する木、葉は單葉にして、蕚は黑紅色を帶び、花瓣は帶紅色なり、觀賞用として栽培せらる。海紅、花仙。

(がい・たい)[該當](名) よくあてはまること。適合すること。

(がい・だい)[街道](名) 國中に通ずるおほやけのみち。みちすぢ。ちまた。官道。

(かい・たく)[開拓](名) 山野をひらき新に田畝をつくること。荒れ地をあらたにひらくこと。かいこん。——・**ち**[開拓使](名) 明治二年設置せられ同十五年に廢止せられたる官職、始めは北海道及樺太の開地なりしが、後に北海道のみとなり、其行政及開拓をつかさどれり。

かい・だ・す[掻出](他、さ四) かき出す。くかき出す。

(かい・たふ)[解答](名) ときあかして答ふること。ときあかし。こたへ。「謎の—」。

(かい・だん)[戒壇](名)〔佛〕佛家にて戒法授受のための道場。——**めぐり**[戒壇廻](名) 善光寺の堂の縁下の暗所をめぐりあるくこと。——・**せき**[戒壇石](名) 禪宗又は律宗の寺院の門前に建てたる石、多くは其面に「不許葷酒入山門」の句を記す。

(がい・たん)[骸炭](名) 石炭を大氣に觸れしめずして熱したる多孔質の黑塊、木炭に比ずれば其質緻密にして堅く且炭素に富む、冷金術又は鑄物等高熱を要するとき必用なる燃料なり。コータス。

(がい・たん)[慨嘆](名) なげきうれふること。

(がい・だん)[街談](名) 道路の世評。世の中のうはさ。ふうせつ。「—巷說」。

(がい・ちう)[鎧冑](名) よろひとかぶと。又、戎衣の總稱。

(かい・ちく)[改竄](名) あらためかへること。

(かい・ちやう)[開帳](名)〈とばりをひらく義〉廚子(ヅ)のとばりを開きて、其中の佛體を拜するを公衆に許すこと。「賽龕」。

(かい・ちやう)[開廳](名) 官廳の執務を開始すること。

(かい・ちやう)[開場](名) ばえよをひらくこと。公衆の入場を許すこと。「杖、(錫杖)」。

(かい・ちやう)[戒杖](名) 山伏などの所持する杖。

(かい・ちゆう)[海中](名) 海のなか。うみのとなか。——・**くわざん**[海中火山](名)〔地〕海底に噴出せる火山。——・**たいげん**[海中臺原](名)〔地〕海の底が、海岸より緩き傾斜を以て漸次に低下し、急に傾斜の度を加へて一階段をなす處の稱。Continental shelf.

(かい・ちゆう)[介蟲](名) 介殼を有する蟲。

(がい・ちゆう)[害蟲](名) 植物體の種々の部分を傷害し、且其繁殖の迅速なる草食性の昆蟲、うんか・ありまきの類。「と。「隱人を—す」。

(かい・ちよ)[刈除](名) かりとること。のぞきすつること。

(かい・ちよ)[解除](名) ㊀ときのぞくこと。のぞきさること。㊁〔法〕或關係若しくは責任を消滅せしめて、其關係若しくは責任なき以前の狀態に復せしむること、契約の解除は、相手方に對する意思表示を以てこれを爲す。——・**けん**[解除權](名)〔法〕契約を解除し得る權利、或は法律の規定により生じ或は契約によりて生ずれど、何れにも普通なるは、不履行及履行不能より生ずるものとす。

(がい・ぢ)[海津](名)〔動〕くらだひの幼期。

(かい・づ)[海圖](名) 數字を以て海底の深淺を示し、且海底の性質岩礁の位置等、海洋の狀態を記載せる圖。

〔づいか〕

(かい・つう)[開通](名) ひらけとほること。又、ひらきとほすこと。「道路—」「一式」。

かい・つか・む[掻摑](他、ま四) ㊀手にとらへつかむ。㊁奪括す。とりあつむ。

かい・つくろ・ふ[掻繕](他、は四) みだれたるをつくろひなほす。「衣紋を—」。

かいつぶり[鸕鷀](名)〔動〕水禽鴨中短翼類に屬する鳥、嘴堅硬にして尖銳なり、翼短小にして脚は殆んど尾端に位し、各趾扁闊なり、巧みに潛泳し、又、水中に潛沒す。むぐり。にほ。

かい・つま・む[掻摘](他、ま四) つまむの意を稍々強めたる語。

かい・つら・ぬ[掻列](他、な下二) つらぬの意を強めたる語。「つらぬ。

かい・つら・ぬ[書列](他、な下二) 書きつらぬ。

(かい・てい)[海程](名) 海上の里程。

(かい・てい)[海底](名) ㊀うみのそこ。㊁〔地〕海中臺原より傾斜再び緩慢となりて深海に達する處の稱、されど其形狀は所によりて一樣ならず、平地一般に高臺あり深溝ありて、起伏すると陸地に異ならず。——・**くわざん**[海底火山](名)「かいちゆうくわざん」に同じ。——・**せん**[海底線](名)「かいていでんせん」の略稱。——・**でんせん**[海底電線](名) 海底に架設したる電信線、其遠海に架設する線は、數個以上の銅線に各絕緣の裝置をなし、これを集束して防水絕緣物に包み、數條の大なる鐵線を合して撚りたる數個の繩索を以て、其上を缺めて綫勾配の螺旋狀に捲き、更に其上に防腐劑を塗抹す。

(かい・てい)[階梯](名) ㊀あがりおりの階段、きだはし。㊁進みゆくべき物事の初步又は端緒。はじまり。てびき。

(かい・てい)[解停](名) 停止をときて以前の狀態に復すること。新聞、雜誌などにいふ。「と。

(かい・てい)[開廷](名) 法廷を組織し裁判を開くこと。

(がい・てい)[孩提](名) をさなご。みどりご。

(かい・てい)[海潮](名) うしほ。かいすい。

(かい・てふ)[戒牒](名)〔佛〕戒をうけたるあかしに受くるかきつけ。

(かい・てん)[開展](名) ㊀㊁集せるもの若しくは開蔵せるもの、ひらきのぶること。㊂發達進歩すること。——・**はふ**[開展法](名) 地圖作成の一法、紙を圓筒狀となして地球を被ひ、地表の諸點をこれに投影して開展せしめたる理によるもの、此法によれば、子午線互に平行して方位一定するが故に、航海用としても最便なり。

(かい・てん)[開店](名) 商人などの店をひらくこと。かいげふ。みせびらき。「開業」。

(かい・でん)[皆傳](名) 藝術の師より、其奧義を殘りなく傳(うるゝ)こと。又、師のこれを傳ふること。おくゆるし。

(かい・とう)[街頭](名) 市街のほとり。

(かい・とう)[街燈](名) 市街に點火する夜燈。

かい・どう・げ[海藤花](名) 一種の食品、豆腐にせる蛸(タ)の子、小さき粒多く集合して、藤の花に似る、播磨國明石の名產。

(がい・どく)[害毒](名) ㊀いためそこなふこと。㊁健康をそこなふもの。善良をそこなふもの。

++かい・ともし[掻燈](名)〈かきともしの音便、かきあげてともす義〉古昔、禁中にて、夜の御殿などに點せし燈火。

かい・どり[掻取](名)「うちかけ」に同じ。

かい・ど・る[掻取](他、ら四) 着又はつまさきを取りあげてかゝぐ。

かい・な・づ[掻撫](他、た下二) なづの意を強めたる語。

++かい・なで[掻撫](名) 皮相(かは)を撫でたるばかりにて、其實相(ほん)に至らぬこと。

(かい・なふ)[皆納](名) 年貢など殘りなく上納すること。かいさい。

かい・ならし[掻均](名)「とかき」樂に同じ。

(かい・なん)[海難](名) 航海上にて生ずる危難。

(かい・なんふう)[海軟風](名)〔地〕「かいふう」(海風)(一)に同じ。

(かい・にん)[解任](名) 其人を其任務より退去せしむること。

(かい・にん)[改任](名) 其人を其任務に新につかしむること。

かい・ねり[掻練](名) ㊀紅のねりぎぬ。㊁かさねの色目、表も裏もすべて、紅のねりぎぬ。

(かい・ねん)[改年](名) あらため。えんねん。

(がい・ねん)[概念](名) 特殊の具象的想念を抽象的想念として構成したる想念。

++かい・の・ま[掻の間](名) 殿の間。

(かい・は)[海](名) 產の

(かい・ゃ)

卵を入れて孵化せしむ。たつのおとしご。（ろ）海水類に屬する哺乳動物。體長もよそ一丈内外に達す、面に僅少の粗毛を生じ、頭は短けれど明かに胴と區別するとを得、鼻孔は頭前に位し、口吻に厚き脣もり、胴は漸次尾となり、其末端は左右扁平なる尾鰭をなす、後肢は缺け前肢は短くして魚鰭の如し、熱帶地方の河口又は海洋に群居し、我國沖縄諸島にも產す。ざゆごん。

（かい・はい［解廢］（名）やぶれすたること。やめて用ひざること。

（かい・はい［改廢］（名）改むること。廢（すた）むること。

（かい・はう［介抱］（名）㊀たすけいだくこと。㊁世話をすること。かんびやうすること。

（かい・はう［解放］（名）捕縛又は監禁せられてあるものを、ゆるしてときはなすこと。自由を束縛せられてあるもの即ち奴隷などの束縛を解き、これが自由を得しむること。

（かい・はう［開放］（名）㊀あけはなすこと。㊁防禦を解き去ること。「城塞の—」。㊂禁制を撤去して、自由に交通を許すこと。「滿洲—」。

（かい・ばう［海防］（名）一國の海岸の防禦。うみのふせぎ。——・かん［海防艦］（名）ももに海岸の防禦にあたる軍艦、速力及石炭の積載量は多からず。又、淺水に利用するため喫水淺く構造せらる。

（かい・ばう［解剖］（名）㊀動物の身體を解きて、其骨格・筋肉・臟腑などの委細を考ふること。其全身に渉（わた）るものと局部に限られたるものとあり。（分解）。㊁物事の條理を細かに分ちこれを研究すること。——・がくゆつ［解剖術］（名）人身を解剖する手術。醫術の一部。

（かい・はく［該博］（名）學問のひろくゆきわたりたること。

（かい・はさ・むはさむ［搔挾］（他、ま四）はさむの意を強めたる語。

（かい・はつ［開發］（名）㊀開きもこすこと。㊁【教】兒童の教育に、其心意の發達の順序に從ふ方法を擇び、兒童をして自發的に領解して智識をみづから發し開くやうになすこと。ちゆうにふの對。——・ぎゆき［開發主義］（名）【教】教育上二大主義の一。即ち、開發を以て教育法の本旨となすもの。

（かい・ばつ［皆伐］（名）全林を採伐し盡すこと。平面より高き差異。

（かい・ばつ［海拔］（名）【地】陸地又は山嶽の海水面より高き差異。

（かい・ば・むはさむ［垣間見］（自、ま四）かきまむ。のぞきみる。

（かい・はん［改版］（名）はんぎをはりなほすこと。

（かい・はん［解版］（名）組み上げたる活版を箇々の字にときわくること。

（かい・はん［鎧板］（名）彈丸の洞貫等を防ぐために、物の表面に施したる鐵若しくは鋼の板。

（かい・ひ［開扉］（名）㊀とびらをひらくこと。㊁かいちやう。（開帳）。

（かい・ひそ・むはさむ［搔潛］（自、ま四）かくれゐる。ひきこもる。

（かい・ひそ・むはさむ［搔潛］（他、ま下二）身をひそめます。

（かい・びやく［開闢］（名）㊀天地のひらけはじめ。世界のおこりはじめ。㊁借家にて、儀式の開始をいふ。「法華會の—」。「五增法の—」。

（かい・ひん［海濱］（名）はまべ。うみべ。かい（ん。——・ぎよくぶつ［海濱植物］（名）【植】海濱の砂上に生ずる植物。葉は肥厚多肉にして、且多量の鹽分を含み、烈しき潮風又は強き日光に堪ふ。

（かい・ふう［冷かい］

（かい・ぶし［蛟］いぶしやくと。か

封緘をせぬ

（かい・ぶん［海岔］

（がい・ぶん［涯分］

（かい・へい［開閉］（名）

（かい・へい［開平］（名）

（かい・へい［海兵］（名）海軍下士

たん［海兵團］（名）各軍港に設置せらるる海軍下士卒の教育・訓練及軍港の守衛を司り、補缺員を貯蓄する所。

（かい・へう［界標］（名）陸地又は水面の界を表示するための標識。

（かい・へう［開票］（名）投票函を開き投票の結果をとりあらためること。——・たちあひにん［開票立會人］（名）開票に立ち會ひこれを監視する人。

（かい・へん［海邊］（名）うみのほとり。うみべ。はまべ。

（かい・ほう［改封］（名）土地をうつしあらためらるゝこと。領地を變換せらるゝこと。くにがへ。

かい・ほ・すきせさせ［搔乾］（他、さ四）池沼などの水をくみつくす。「いぼり。

（かい・ほつ［開發］（名）㊀かいこん。㊁謂りて、かゝ。

（かい・ぼり［搔堀］（名）堀などの水をかいはすこと。

（かい・まき［搔卷］（名）うす綿にせる夜著。どてら。よぎ。（抱卷）。

＋＋かい・ま・みゆ［垣間見］（名）物のあひだなどよりのぞきみること。かいまむ。（闚窺）。

＋＋かい・ま・むはさむ［垣間見］（自、ま四）物のひまよりひそかにうかがひみる。のぞきみる。

（かい・みやう［戒名］（名）【佛】（い）受戒によりて得たる諱。即ち、得度後の名。（ろ）死者に附くる號。

（かい・む［皆無］（名）物のみなこと〳〵く無きこと。

（かい・む［皆無］（副）のこらず。かいくれ。みな。こと〳〵く。「—見えない」。

（かい・む［海霧］（名）海上にたつ霧。

（かい・めい［改名］（名）名をあらたむること。姓をかふること。變名。

（かい・めい［解明］（名）ときあかし。

（かい・めい［開明］（名）人智開け文物進歩せること。野蠻の狀態に遠ざかれること。（開化）。

（かい・めん［海面］（名）うみのおもて。うみづら。

（かい・めん［海綿］（名）【動】（い）海綿動物の略言。（ろ）俗にいふ海綿は、海綿動物の一なる沐浴海綿の角質の骨骼を製したるもの、多くはこれを沐浴用に供す。——・どうぶつ［海綿動物］（名）【動】下等動物の一、海に產す、種々の形狀あれど、多くは單獨なる囊狀にして、其一端は他物に固着し、他端に大孔あり、大孔の直下は内腔にして、これより射出する無數の燈狀纖毛あり、體壁を貫き群數の小孔により外へ開く、此纖毛は總々に纖毛室あり、其働きにより、水は小孔より内へ入り大孔より外へ出で、ために有機物を伴ひ來りて營養分となす。體壁は厚くして角質・石灰質若しくは硅質の骨骼を有す、概ね出芽又は分裂によりて增大す。

（かい・もく［皆目］（副）のこらず。全く。

＋＋かい・もち［搔餅］（名）飯にてつくりたる ぼた餅。又、そばがきをもいふ。（鬻託餅）。

＋＋かい・もざ［垣下］（名）饗宴のとりもちする人。

（かい・もん［海門］（名）せと。かいけふ。

（かい・もん［開門］（名）門をひらくこと。

（かい・もん［戒文］（名）【佛】戒の條文。

＋＋かい・や・るこれる［搔遣］（他、ら四）強ひて彼方へ押しやる。

（かい・よう［海容］（名）海の如き寛大の心を以て、罪を宥恕すること。「罪を謝するに用ふ」。「御—下されたく候」。

（かい・よう［解傭］（名）「かいこ」（解雇）に同じ。

（かい・らう［偕老］（名）夫婦睦まじくして共に老ゆること。「—のちぎり淺からず」。

（かい・らう［海老］（名）【動】えび（海老）に同じ。

（かい・らう・どうけつ［偕老同穴］（名）㊀（詩經より出づ）夫婦の愛情深く、死してなほ相伴ひて同じ穴に葬らるといふこと。㊁【動】海綿動物の一種、骨骼は硅質にして形狀恰も（ちまの如くにして美觀なり、中に一二疋蝦類の棲居すること、これ其幼時に入りて生長し、再び外に出づる能はざるものか、相摸洋などの深底に產す。うみへちま。

かいらう・び［海老尾］（名）琵琶又は三味線の絲まきに近き上部の後方へ曲がりて、恰もいせえびの尾のごとくなりたる所の稱。（恩頭）。

かいらご［梅華皮］（名）てふざめの皮、刀のつか又はさやを包むに用ふ。

（かい・らく［開落］（名）花などの、ひらくとまつること。

（かい・らく［偕樂］（名）多くの人と共に樂しむこと。

（かい・らん［解纜］（名）船舶のともづなを解きて出帆すること。

（かい・り［海里］（名）海上の距離を測る單位、合衆國にては六〇八六「フィート」にして、「イギリス」國にては六〇八〇「フィート」、我國の約十七町に當る。「浬」。

（かい・り［解離］（名）㊀解けはなるゝこと。又、解きはなすこと。㊁【化】物體が狀況の變化により分解し、其狀況の復舊するときは、再び化合する場合に於ける分解をいふ。

（かい・り［海狸＝Beaver］（名）【動】齧齒類中海狸科に屬する哺乳動物。「ヨーロッパ」・「北アメリカ」等の河湖の邊に棲息す、尾は扁平にして鱗を帶び、後趾に蹼（かき）あり、足と尾とを以てよく泳ぐ、又、よく大木を倒し、其皮と枝とを食ひ、其幹を組み立てゝ家の如きものを構造す、皮毛頗る高價にして、又、芳香ある一種の脂を出すを以て有名なり、性怜悧にして群居す。

（かい・りう［海流］（名）【地】海中にて恰も陸上の河の如く一定せる流動系、其主因は風なれど、海上の溫暖の相違なども與つて大に力あり、南極地方より赤道地方へ向ふものを極流といひ、赤道地方より南極地方へ向ふものを赤道流といふ。

（かい・りつ［戒律］（名）【佛】諸戒と威儀と。——・ぎゆう［戒律宗］（名）【佛】律宗に同じ。

(かいりふ)[開立](名)【數】立方根を求むること。
(かいりやう)[改良](名)舊き弊(ヘイ)をあらためてよくすること。改善。——はんし[改良半紙](名)從來のものに比して、色白く質緻(チ)かにして薄き半紙。
(がいりやく)[概略](名)あらまし。おほよそ。たいがい。
(かいる)[蛙](名)【動】「かへる」の訛。
(かいれき)[改曆](名)こよみのあらたまること。かいねん。新年。(開曆)。
(かいろ)(名)【動】「かへる」の訛。
(かいろ)[海路](名)うみの上の船の行くみち。ふなぢ。ふなみち。うみのみち。うみぢ。航路。
(かいろ)[薤露](名)古昔、支那にて、貴人の棺を挽(ヒ)くとき歌ひし謠(ウタ)。
(かいわい)[界隈](名)㊀さかひ。くま。㊁あたりきんじよ。もより。(近所)。
(かいわうせい)[海王星](名)【天】太陽より最も遠き遊星、「フランス」國人「ヴェー」の推算に基き、「ドイツ」國人「ガレ」の發見にかゝるものにして、太陽よりの平均距離十一億六千里なり、百六十八年九個月を以て太陽を一周す。
(かいわん)[海灣](名)いりうみ。わん。(内海)。
(かいゐ)[階位](名)位階。くらゐ。
(かいゐ)[詿違](名)あやまち。まちがひ。
(かいゐ)[解頤](名)おとがひをとくこと。大いに笑ふこと。おほわらひ。
(かいゐん)[海員](名)船舶に於ける船長以外一切の乘組員の稱、又、海技免狀を有するもの、稱にもいひ、然るときは船長をも含む。——めいぼ[海員名簿](名)遞信大臣が海技免狀を受けんとする者の請求に基き、授與すべきものと認めたる場合に、一定の樣式通りに登錄する名簿。
(かいゐんしき)[開院式](名)帝國議會の召集後、勅令を以て開會の日を定められ、兩院議員を貴族院に會合せしめて、開會を命ぜらるゝ儀式、多くは天皇親臨して勅語を賜ふ。
(かいヲシヤウ)[戒和尙](名)【佛】戒を授くる和尙。
++(かう)[上](名)「かみ」の音便。「—の殿」。(頭)。
(かう)[香](名)㊀にほひ。かをり。㊁伽羅・沈香・白檀・旃檀等すべてにほひのよきもの。又、種々の香料を集めて錬りたるもの。にほひもの。たきもの。(薰物)。㊂「かうあはせ」の略言。
(かう)[更](名)一夜を五つに分けたる區分の稱、初更は五つ即ち今の八時、二更は四つ即ち今の十時、三更は九つ即ち今の十二時、四更は八つ即ち今の二時、五更は七つ即ち今の四時。
(かう)[講](名)㊀書物をかうえやくすること。㊁神佛の信者又は賴母子などの組合。「富士—中」。
(かう)[孝](名)よく父母に從順なること。よく親につかふること。「—をつくす」。(孝行、孝道)。
(かう)[考](名)㊀かんがへ。㊁或事蹟の起原・沿革に付きての判定。㊂死にたる父の稱。先考。妣(ヒ)の對。㊃官吏の功課。かうくわ。
(かう)[劾](名)㊀志るし。きゝめ。かうのう。「藥の—」。㊁いさを。てがら。
(かう)[稿](名)㊀わら。くき。禾莖。㊁さうかう。したがき。
(かう)[項](名)㊀うなじ。うしろ。㊁或種類の事柄に屬する各箇の事柄の稱。かでう。㊂【數】多項式を組み立つる各箇の單項式。又、分數或は分數式にて、分子若しくは分母。又、二量の比にて各量。又、級數を組み立つる各數。
(かう)[衡](名)㊀はかりざを。秤桿。㊁重量の標準、我國現今の制度にては貫を基本とす。㊂輕重を平かにすること。はからひ。㊃輕重を爭ふこと。あらそひ。㊄たひらか。平正。㊅てすり。欄杆。㊆よこぎ。橫木「—門の下」。㊇くびき。車轅。㊈冠(カンムリ)のかうがい。㊉眉と目との間の稱。「—を揚げ笑ひを含む」。⑪よこ。「合從連—の策」。(衡)。
(かう)[膏](名)㊀あぶら。㊁かうやく。膏藥。㊂うるほひ。膏澤。㊃くちべに。脣脂。㊄むねのしたの心下。「病已に—肓に入る」。
(かう)[鋼](名)かうてつ。はがね。
(かう)[綱](名)㊀つな。おほづな。㊁おほぐゝり。おほもと。㊂つらなみ。行列。㊃【動】動物學上に於ける自然分類の一階級、即ち門を分ちたるものにして、例せば脊椎動物なる門の下に哺乳類又は食肉類なる綱あるが如し。
(かう)[庚](名)㊀えとの一、かのえ。「—甲」。㊁よはひ。年齡。「同—のもの」。㊂みち。道路。
(かう)[交](名)㊀ゆき、ゆきかよひ。㊁つきあひ。まじはり。よしみ。㊂きりあふこと。交錯。㊃とも。ともどち。「—を賣る」。㊄いりかはり。かはりめ。㊅あひだ。「八九月の—」。㊆えり。衣領。
(かう)[亢](名)㊀二十八宿の一、あみぼし。㊁あやまち。㊂ひでり。旱魃。
(かう)[耕](名)たがへし。かうさく。「—を廢す」。
(かう)[行](名)㊀たび。まゆったつ。「此—志必ず成らん」。㊁漢詩の一體、樂府より轉化したるもの「白樂天の琵琶—」。
(かう)[校](名)㊀學校の略言。「—を閉づ」。㊁校正の略言「初—」「再—」。
(かう)[斫](副)「かく」の音便。
(がう)[鄕](名)㊀古昔、地方の區域の名。郡をわか

ちたるもの。「豐島郡瑞島—」「やつしろ—」。㊁みなか。さと。「—に入っては、—に從ふ」。
(がう)[毫](名)㊀毛。㊁ふで。「—をふるふ」。㊂尺度又は秤目にて、一釐の十分の一の稱。㊃極めて微少なること。
(がう)[壕](名)はり。みぞ。
(がう)[號](名)㊀となへ。名稱。名目。㊁おくりな。諡名。㊂いひつけ。まうしわたし。みことのり。「大—煥發」。㊃あひづ。ふてう。符語。㊄名又は字(アザナ)の外に附したる稱呼。「—は山陽」。㊅番を追ひて附したる標記。志るし。㊆物の大小長短の順序。「二—活字」「三—活字」。㊇船舶の稱呼に用ふる語。「高陞—號沈」。
(がう)[剛](名)つよきこと。たけきこと。「—のもの」。(豪、強)。
(がうあく)[強惡](名)甚しくあしきこと。まうあく。きようあく。「—の人」。
(かうあつ)[高壓](名)高度の壓力。——ぶ[高壓部](名)【地】高氣壓の部分。
かうあはせ[香合](名)一種の遊戲、種々の香料をたき、其にほひを嗅(カ)ぎて、香の種類を考へあつる遊戲。
(かうあん)[考案](名)かんがへ。あんじ。くふう。
(かうい)[更衣](名)㊀ころもがへ。㊁女御の次ぎの女官。
(かういう)[交友](名)ともだち。はういう。「朋友」。
(かういう)[交遊](名)㊀まじはり。つきあひ。㊁とも。はういう。
(かういう)[孝友](名)親に孝行にして兄弟と仲よきこと。
(かういう)[校友](名)㊀同學の友。㊁學校が卒業生に對して與ふる一の稱呼。——くわい[校友會](名)校友の團體又は集會。
(がういう)[豪遊](名)さかんなる遊樂。
(がういん)[豪飮](名)大酒すること。(鯨飮)。
(がういん)[強淫](名)「がうかん」(強姦)に同じ。
(かうう)[香芋](名)【植】なんきんまめ。
(かうう)[膏雨](名)ほどよく物をうるほす雨。「靈澤たる—」。
(がうう)[豪雨](名)俄かに起る大雨、時としては雹をまじふることあり。
(かううん)[耕耘](名)たがやしくさぎること。又、農作。
(かううん)[幸運](名)さいはいなるうんめい。よきしあはせ。(好運)。——じ[幸運兒](名)しあはせよき人。
(かうえき)[交易](名)物品と物品とをかへあふこと。我有餘の物品を與へて彼より我が不足の物品を得ること。財の交換。
(かうえつ)[校閲](名)書籍文書などのあやまりをしらぶること。しらべけみすること。
(かうえつ)[哽咽](名)むせびくるしむこと。又、むせびなくこと。
(かうえん)[講筵](名)かうしやくをする席。
(がうおく)[剛臆](名)こゝろのたしかなること。「—を試みる」。(勇怯)。
(かうか)[降嫁](名)皇女又は王女などの自家より位置低き人に嫁(トツ)ぎたまふこと。
(かうか)[耕稼](名)地をたがやし種をまくこと。又、農事。
(かうか)[高價](名)ねだんたかきこと。かうぢき。
(かうが)[高雅](名)けだかくみやびやかなること。かうしやう。
(がうか)[豪家](名)富みたる家。勢力ある家。ふか。ぶげんしや。
(がうが)[聱牙](名)㊀齊一ならざること。㊁強硬にして、人の言を聞き入れぬこと。㊂文章のむづかしく解し難きこと。
(かうかい)[更改](名)あらためかふること。以前の状態を變ずること。
(かうかい)[航海](名)船舶にのりて海をわたること。船舶によりて目的地に向ふこと。船舶にて諸港の間を往復すること。(渡海)。
(かうかい)[沆瀣](名)海の氣。浪の氣。又、北方夜半の氣。
(かうかい)[港界](名)港の限界。
(かうがい)[梗概](名)あらまし。たいりやく。
(かうがい)[慷慨](名)意氣ふるひおこりてなげきかなしむこと。——か[慷慨家](名)㊀國事又は世事を慷慨して奔走する人。㊁よく物事に慷慨する性質の人。
かうがい[笄](名)《かみかきの義》㊀古昔、男女ともに髮を搔き上ぐるに用ひし具。㊁後世、婦人のかみかざりの一種、金銀・鼈甲又は蒔繪などにて造り、髷の間に橫にさすもの。㊂刀のさやに差しこむ箆(ヘラ)に似たるもの。㊃冠に橫にさす細長きもの。——ぐる[笄曲](名)明暦の前後に行はれたる髮の結(ユ)ひ方、かうがいの周りに毛を卷き付けしもの。

[かうがい]

(かうかいしや)[航海者](名)航海を業とする人。(多くは、乘組員の上位にあるものをいふ)。
(かうかいづはふ)[航海圖法](名)「えんちゆうとうえいはう」(圓柱投影法)に同じ。
(かうかいにっし)[航海日誌](名)船舶に備へ付けて、其航行中に起れる一切の事故を記載する日誌、航海者の最も要用とするもの。
かうがいひる[笄蛭](名)【動】渦蟲類中蛭腸類に屬する蛹形動物、長形にして黑色なり、前頭

は擴木(シユモク)の形をなし、これを以て物を編綴す、恰もかうがいをさしたるやうに見ゆ、我國諸所に産す、南方には、淡黄色にして暗褐色の縦線あるものもあり。

(かうかい-へんかう)[航海變更](名)【法】航海の中途にて、到達の目的地を變更すること、例せば、長崎より香港(ホンコン)へ向つて出帆し、中途にて變更し、上海(シャンハイ)に到達するが如し。

(かうかい-れき)[航海暦](名)航海に必要なる天文事項を記載せるもの、「イギリス」國「グリニッチ」天文臺にて發行せるもの最も精しく、毎三年前に發行す。

(かう-かう)[皓皓](名)雪などのつもりて白きさまにいふ語。

(かう-かう)[皎皎](名)月の光などの白く見えわたるさまにいふ語。

(かう-かう)[杲杲](名)日の光のあきらかなるさまにいふ語。「にいふ語。

(かう-かう)[灝灝](名)水面などのひろききさまにいふ語。

(かう-かう)[耿耿](名)㊀小さき光の明かなるさまにいふ語。「―たる殘燈」。㊁まじまじとして、眠り得ざるさまにいふ語。

(かう-かう)[香香](名)かうのもの、つけもの。

(かう-かう)[更行](名)女のえんげき。

(かう-かう)[航行](名)船舶にて水上をゆくこと。

(かう-かう)[抗衡](名)(くびき)をあらそふ義)相對抗して下らざること。はりあふこと。

(かう-かう)[孝行](名)親によく事ふること。

↔(かう-かう)[斯斯](副)「かく〳〵」の音便。

(がう-がう)[囂囂](名、副)聲多ききさま又はかしましききさまにいふ語。

↔(かう-がう-し)[神神](形、二)(「神神し」の音便)㊀ものさびて何となく尊く感ぜらる。神さびてあり。㊁たふとくしておごそかなり。いとけだかし。

(かう-かうてん)[降交點](名)【天】交點の一、遊星・衛星又は彗星が、北より南に向つて通過するとき、黄道面を通過する點。

(かう-かく)[磽确](名)地味豐沃ならざること。又、其地。いしぢ。やせち。

(かう-がく)[講學](名)學問をとくこと、又、學問をきはむること。

(かう-かけ)[首懸](名)馬具の一、馬の頭上に横に掛くる革。

カウカシアン[Caucasians](名)世界三大人種の一、骨格最も優秀なるものにして、皮膚白く紅色の毛髪は柔軟にして卷曲し、額廣く鼻高し、「ヨーロッパ」一體の人民は多くは此種に屬す。(高加索人種)。

(かうか-てつだう)[高架鐵道](名)地上に柱礎を建設し、其上に架設する鐵道、多くは市街などの如き人家多くして地域狹き所に架設す。「こ。

(かう-がふ)[香合](名)香を入るゝ器。かうばこ。

(かう-がふ)[交合](名)男女の交接。ばうぶ。まじはり。

↔(かうが-ふ)[考](他、は下二)「かんがふ」の音便。

(かう-かぶつ)[好下物](名)よき酒の肴。

↔(かうがへ)[考](名)「かんがへ」の音便。

(かう-がん)[抗顏](名)㊀世間に顏だしすること、人に顏をあはすこと。㊁つれなきこと。強顏。

(がう-かん)[強姦](名)暴行脅迫其他不法の手段を用ひて、婦人を姦淫すること。―ざい[強姦罪](名)【法】強姦の犯罪、十二歳以下の幼女を姦淫したるものも、また此罪に準ぜらる、此犯罪は親告罪なり。

(がう-がん)[傲岸](名)高ぶりて擧動のかど〳〵しきこと。「の訛。

(かう-がん-じ)[仰願寺](名)「かうぐわんじ」

(かうかん-しんけい)[交感神經](名)高等動物の體にありて、おもに胸腔腹腔の諸内臟及血管に分布せる一種獨立の神經系、人類のは鏈狀に連れる二十四對の神經球より成り、脊柱の兩側に沿(ソ)ひて縱行し、尾閭骨部に於て一個の神經球に合す、全體灰白質及白質の混合より成り、一端は腦神經及脊髓神經と連絡す。

(かう-き)[綱紀](名)物事のおほもと。又、國家のまつりごと。

(かう-き)[高貴](名)㊀身分たかく尊きこと。「―なる生れ」。㊁あたひ高きこと。

(かう-き)[香氣](名)にほひ。かをり。

(かう-き)[降旗](名)降參のときに立つる旗。(白旗)。

(かう-き)[耕器](名)土壤を打ち起すに用ふる農具、即ち、すき・くは等の類。

(かう-ぎ)[講義](名)文書又は學説の意義を講じあきらむること。かうえやく。

(かう-ぎ)[廣義](名)範圍廣く解釋したる意義。狹義の對。

(かう-ぎ)[巷議](名)ちまたのぎろん。せけんのうはさ。(街談)。

(かう-ぎ)[抗議](名)反對の意見を主張すること。「―を申し込む」。

(かう-ぎ)[高義](名)なみ〳〵ならぬ恩義。

(かう-ぎ)[交誼](名)かうさいのよしみ、まじはりのよしみ。

(がう-き)[剛毅](名)意志の確乎として物事にむぢひるまざること。精神の威力の健(スコヤ)かなること。

(がう-き)[豪氣](名)㊀心たけく確乎としたること。㊁意氣の壯快なること。「方の俚語」。

↔(がう-ぎ)(名)勢はげしくりつぱなること。

(かうき-あつ)[高氣壓](名)空氣柱の平均の重さ、即ち七六〇「ミリメートル」の水銀柱の重さより、氣壓の度が大なること、大氣は高氣壓より低氣壓に向つて流動するものなり、氣壓の高低の變化は、溫度と水蒸氣とに主因すれど、概して高氣壓は緯度三十度の邊にあるものとす。低氣壓の對。

(かう-きう)[好逑](名)よきつれあひ。よきつま。

(かう-きう)[購求](名)あがなひもとむること。

(かう-きう)[講究](名)講じきはむること。けんきう。(攻究)。

(かうき-しん)[好奇心](名)つねに異なりたる事を好むこゝろ。ものずきのこゝろ。

(かう-きふ)[高級](名)階級の高きこと。下級の對。「―參謀」。「と。

(がう-きふ)[號泣](名)おほごゑをたてゝ泣くこと。

(がう-きゆう)[強弓](名)㊀歩(ブ)厚く、力のつよき弓、重さ四十三貫の物を、其弓に掛け、僅かに撓(タワ)む程度のものといへり。㊁強弓をひき得ること。

(かう-きよ)[抗拒](名)てむかひしてさゝふること。ふせぐこと。「ころ、てがゝり。

(かう-きよ)[考據](名)考へをつくべきよりどころ。

(がう-きよ)[傲倨](名)おごりたかぶること。

(かう-ぎよく)[鋼玉](名)【鑛】大理石又は花崗岩等の中に產する鑛物、硬度高く酸類に侵されず、分つて寶石種・尋常種及砂種の三とす、寶石種は藍・紅・黄・紫等にして多くは透明なり、尋常種は淡藍若しくは黑色にして透明ならず、砂種は粒子をなし磨き砂に用ふ。―せき[鋼玉石](名)【鑛】前條に同じ。

(かうきる-るゐ)[硬鰭類](名)【動】硬骨類の一、其脊鰭完全なるか或は其一部分硬(カタ)くして關節なき鰭骨より成れるもの、たひ・すゞき等これなり。

(かう-きん)[高金](名)大なる金高。たいきん。

(かう-く)[康衢](名)おほどほり。わうくわん。

(かう-ぐ)[香具](名)匂(ニホ)ひもの又はたきものなどの材料、即ち、白檀・沈香・丁子・伽羅・麝香などの總名。―うり[香具賣](名)㊀香具を賣りあるく人。㊁やし。野師。―し[香具師](名)又は香具をつくる人。―や[香具屋](名)かうぐをうり又はつくる人。(香藥舖)。

(かう-くわ)[硬貨](名)其原質が金屬なる貨幣。軟貨の對。

(かう-くわ)[効果](名)㊀できあがり。まあげ。㊁きゝめ。まるし。㊂てがら。いさを。

(かう-くわ)[考課](名)官吏などの事務の効果。又、其効果のとりしらべ。

(かう-くわ)[硬化](名)㊀かたき物體となること。㊁弱き意見を捨てゝ、強硬の意見をとること。

(かう-くわ)[行貨](名)わいろ。まいなひ。

(がう-くわ)[豪華](名)おごり。ぜいたく。

(かう-ぐわい)[郊外](名)まちはづれ。のべ。

(がう-ぐわい)[號外](名)㊀新聞・雜誌などが、定まりたる號數のほか、臨時に發行するすりもの、㊁轉じて、定まりたる數の外のもの、例。

(かう-くわい)[狡獪](名)わるがしこきこと、わるずれしたること。

(かう-くわつ)[狡猾](名)㊀怜悧なること。才あること。わるするどきこと。㊁りんまよく、けち。

(かう-くわん)[高官](名)たかき官職。

(かう-くわん)[交換](名)㊀とりかへ。ひきかへ。とりかへっこ。(更換)。㊁【經】自己に不必要若しくは必要少き財物を他人に與へ、其報酬として、他人より自己に必要若しくは必要多き財物を得ること、方法・時間及地域によりてこれを三種に分つ、方法に關するものは、物と物との交換と貨幣の媒介による交換となり、時間に關するものは、即時互に交換を了するものと他日に渡りて交換を了するものとなり、地域に關するものは、內國貿易と外國貿易となり。(交易)。㊂【法】金錢の所有權にあらざる財產權の移轉を目的とする契約、賣買の規定を準用すべきものとす。

(かう-くわん)[交驩](名)とも〴〵にたのしむこと。(交歡)。

(かう-ぐわん)[睾丸](名)總て雄性動物の有する器官にして、雄性元素即ち精子の製出作用を營むもの、其數は動物の種類によりて一定せず、高等動物にては一對、下等動物に至つては多數なり。きんたま。

(かうくわん-かかく)[交換價格](名)【經】社會一般の人を標準として定めたる價格、酒一升と米三升と交換せらるゝとせば、米三升は、酒一升の交換價格を有し、酒一升は、米三升の交換價格を有するものなり。有用價格の對。

(かうぐわん-じ)[仰願寺](名)「かうぐわんじらふそく」の略言。―らふそく[仰願寺蠟燭](名)細小なる一種の蠟燭、古昔、江戸山谷の仰願寺にて、念佛を修せしとき、大蠟燭は不便な

りしを以て、小さきものを用ひしより此名あり。

(かう-ぐん)[コウ][行軍](名) 軍隊が、列を整へて旅行又は巡行すること。

(かう-げ)[コウ][高家](名) ㊀王朝時代に、身分の高き人。(貴賓)。㊁徳川時代に、幕府の儀式をつかさどりし職掌の家柄。

(かう-げ)[コウ][高下](名) ㊀たかきと低きと。㊁まされるとおとれると。いうれつ。㊂あがりさがり。あげさげ。

(かう-げ)[コウ][香華](名) 佛などに奉る香と花と。かう「道」。

(かう-けい)[コウ][豪家](名) 「がうか」に同じ。

(かう-けい)[コウ][行徑](名) ㊀みち。こみち。㊁行ふ

(かう-けち)[コウ][纈纈](名) 染め模様の名、くゝり染めにしたるもの、いたぶめえぼりぞめの類。(夾纈)。

(かう-けつ)[コウ][膏血](名) (あぶらとちとの義)人民の身心を勞して得たる收益又は資産にいふ語。「民の—を竭くす」。 ——を **そぼる**[絞膏血] 背税を人民に課するにいふ。

(かう-けつ)[コウ][高潔](名) けだかくしてけがれなきこと。高尚にしていさぎよきこと。「いさぎよきこと。

(かう-けつ)[コウ][皎潔](名) けがれなきこと。極めて

(かう-けつ)[コウ][豪傑](名) 智力・勇氣などの凡人にすぐれたる人。えいけつ。(英傑)。

(かう-けふ)[ゴウキ][豪俠](名) こゝろたけくをとこぎあること。物事はでやかにしてをとこぎあること。

(かう-げん)[コウ][香華院](名) だんなでら。

(かう-けん)[コウ][効驗](名) きゝめ。かうのう。「藥の—」。

(かう-げん)[コウ][高言](名) くちはゞひろきことば。たかぶりたるいひぶん。たいげん。「—を吐く」。

(かう-げん)[コウ][巧言](名) たくみに言ひなすこと。うまい口まへ。「—令色」。

(かう-げん)[コウ][郊原](名) のべ。はら。のはら。「十里郊野」。

(かう-げん)[コウ][高原](名) [地]平原の一、即ち、兩山脈に圍まれたる高地又は火山の噴出物の堆積より成りたる高地。

(かう-こ)[コウ][江湖](名) ㊀江水と湖水と。いりえ

(かう-こ)[コウ][考古](名) 世の中。世上。「—の諸彥」。

(かう-こ)[コウ][考古](名) 古代の遺物によりて、古代の物事を研究すること。 ——**がく**[考古學](名) 古代の物事を研究する科學。

(かう-こ)[コウ][好古](名) 古昔の物事に關する事を好むこと。「がふ」。

(かう-こ)[コウ][香壺](名) 香を入れておくつぼ。かう

(かう-こ)[コウ][向後](名) いまよりのち。いご。こんご。このゝち。いちい。

(かう-こ)[コウ][行伍](名) ㊀兵隊の最下級の組合。㊁隊列。ならび。

(かう-こ)[コウ][交互](名) たがひちがひ。くみ。「將帥—より出ヅ」。

(かう-ご)[コウ][豪語](名) 意氣盛んなることば。

(かう-ごう)[コウ][港口](名) 港の船舶の出入口。

(かう-ごう)[コウ][硬口蓋](名) 口蓋の硬(カタ)き部分。

(かう-ごく)[コウ][抗告](名) 〔法〕訴訟手續に關して、裁判所がなしたる決定に對して、其直接上級裁判所に、不服の上訴をなすこと。 ——**さいばんしょ**[抗告裁判所](名) 〔法〕不服なる決定をなしたる裁判所の直接上級裁判所、即ち、決定の抗告をなす裁判所。

(がう-こく)[ゴウ][號哭](名) おほごゑをたてゝなげきかなしむこと。がうきふ。

(かう-こ-けいさん)[コウ][交互計算](名) 商人間又は商人と商人にあらざるものとの間の取引にて、一定の期限間の債權・債務の總額につき、相殺をなして、其殘額の支拂ひをなすこと。

(かう-こつ)[コウ][硬骨](名) ㊀骨骼の硬(カタ)きこと。㊁安に自家の主張又は主義を曲げざること。剛強にして人に屈せざること。 ——**たんし**[硬骨男子](名) 意志剛強なる男子。 ——**るゐ**[硬骨類](名) 〔動〕脊椎動物中の一類の稱、魚類の大部分を占むるものにして、骨骼は硬骨より成り、鰓は櫛齒狀をなして鰓蓋あり、更に分ちて、硬鱗類・軟鱗類・喉鰭類・固體類・總鰭類とす。

(かう-ざ)[コウ][高座](名) 講釋・說法など、聽衆に對して物事を說く人のために設けたる一段高き席。

(かう-ざ)[コウ][講座](名) ㊀講義の席位。㊁講義すべき學科に就きて、特に定めたる教授事務の受持。「商法の—」。 ——**きふ**[講座給](名) 講座の受持に對して給與する俸給。

(かう-さい)[コウ][交際](名) つきあひ。まじはり。 ——**か**[交際家](名) 交際に巧みなる人。 ——**くわん**[交際官](名) 國家と國家との交際の局にあたる官吏、外交官。 ——**とく**[交際國](名) 互に通商交際する國。 ——**ひ**[交際費](名) ㊀つきあひに要する費用。㊁職務上交際を要する特種の官吏に對し、官より給與する交際の費用。

(かう-ざい)[コウ][絞罪](名) 死刑の一種、首を絞め命を絶つこと。

(かう-ざい)[コウ][好在](名) 無事にてくらすこと。

(かう-さう)[コウ][窖倉](名) 土を掘りて物をいれおく所。あなぐら。「又、其場所。

(かう-さう)[コウ][高燥](名) 場所高く氣少きこと。

(かう-さう)[コウ][顯著](名) あはぜ。そう。

(かう-さう)[ゾウ][抗爭](名) 山立の用意。たびたたかうそひ。はりあひ。

(かう-さう)[ゾウ][豪壯](名) ㊀氣象の強く盛んなること。㊁物事のはなやかにして勢盛んなること。

(かう-さく)[コウ][交錯](名) かれこれ入りあふこと。さくそう。

(かう-さく)[コウ][高作](名) 人の詩文の敬稱。御作。

(かう-さく)[コウ][耕作](名) 田畑の土をすきかへして、穀菜を作ること。又、農事。 ——**げんかい-ち**[耕作限界地](名) 〔經〕最も生産力少き劣等なる土地、これを耕作すとも、其生産費は、生産費と等しくして殘餘なきもの。 ——**のう**[耕作農](名) 穀物を作ることを專業とする農。

++**かう-さく**[コウ][警策](名) ㊀一篇中の主眼。㊁詩文の秀逸なること。

(かう-さつ)[コウ][高札](名) ㊀古昔、町中に高くかゝげたる側札。たかふだ。㊁入札の中最も價を高くつくること。たかふだ。「—にもとす」。「察し。

(かう-さつ)[コウ][高察](名) 他人の推察の敬稱。御

(かう-さつ)[コウ][考察](名) 思想をはたらかして、物事をきはむること。かんがへあらためること。

かう-さま[コウ][斯樣](名) かくあるさま。

がう-ざむらひ[ゴウ-ライ][郷侍](名) ㊀「がうし」に同じ。㊁武骨なるおなか者。ざいがうもの。

(かう-さん)[コウ][降參](名) ㊀たゝかひに負けて、敵にくだること。かうふく。(降服)。㊁すべて物事に負けて、閉口すること。

(かう-ざん)[コウ][高山](名) たかき山。 ——**ぶつ**[高山植物](名) 〔植〕高山に生ずる植物、其分布の狀態は、山の高低位置等によりて、多少異なれど、通常これを山麓帶・雲木帶・潅木帶・草木帶・地衣帶の五帶に分つ。

(がう-さんせ)[ゴウ][降三世](名) 〔佛〕明王の一、三面八手にして、貪・嗔・痴の三毒を制し、つねに東方をまもるといふ。「東方、—」。

(かう-さう)[コウ][孝子](名) 孝行の子。

(かう-さう)[コウ][講師](名) ㊀學術の講義をなす人。㊁大學などにて、本官に就かず囑託を受けて教授する人。㊂歌合せなどのときに、歌をよみあげる人。㊃古昔、諸國の國分寺にありて、佛經の講義をなし、僧官。

(かう-さう)[コウ][高士](名) ㊀志高く節をまもりて、流俗にとびぬ人。㊁隱君子。

(かう-さう)[コウ][考試](名) 學生又は進士(支那にて)若しくは志願者に對して、問題を擧げて、其學力資格を試み、採否又は及落を判すること。しけん。「試驗」。

(かう-さう)[コウ][考思](名) かんがへあらため。

(かう-さう)[コウ][嚆矢](名) ㊀かぶらや。㊁支那の古昔に、戰爭の開始のあるしに、かぶらやを射掛けしより、すべて物事の開始たるものをいふ語。

(かう-さう)[コウ][更始](名) あらためはじめること。たまりはじまること。

(かう-さう)[コウ][行使](名) つかふこと。用ふること。

(かう-さう)[コウ][格(カウ)子](名) 格子の音便。㊁細き木を縱横に組みあはし、間をすかして作りたる建具。くみがうし・つりがうし等あり。

(かう-さう)[コウ][格子](名) ㊀女郎が格子の内に店を張れるより、女郎屋の稱にもいふ。「小—造び」。 ——**ど**[格子戸](名) 格子につくりある戸。 ——**づくり**[格子造](名) 表にかうしを設くること。又、其家。

(かう-さう)[コウ][行尸](名) 《あるく尸(シカバネ)の義》無能の人をあざけりていふ語。「—走肉」。

(かう-さう)[コウ][柑子](名) 《「かんし」の音便》 ㊀〔植〕「みかん」の古名。㊁〔植〕「かうじみかん」の略言。㊂黃と赤とを殆んど同分量に合はしたる色。だいゝろ。 ——**いろ**[柑子色](名) 「かうじ」に同じ。だいゝろ。

(かう-さう)[コウ][好事](名) ㊀よろこばしきこと。めでたき事がら。「一度多し」。㊁よき行ひ。「—門を出でず」。㊂ものずき。 ——**ごのみ**[好事者](名) ものずきの人。かうずか。

(かう-さう)[コウ][香餌](名) ㊀にはひ好き餌(エサ)。「—の下、必ず死魚あり」。㊁人に陷(カ)はす好利益。

++**かう-さう**[コウ][勘事](名) 「かんざ」の音便。勘當。

(がう-さう)[ゴウ][郷士](名) 村落に住居する武士。農を營むさむらひ。がうざむらひ。

かう-さう[コウ][香敷](名) 炭火の上に置き、其上にて巻をたく器。雲母の薄片などをもてつくる。ひもき。きんえふ。隔火。

かう-さう-くりげ[コウ][柑子栗毛](名) 馬の毛色、栗毛にやゝ柑子色を帶びたるもの。

(かう-さう)[コウ][膠漆](名) ㊀にかはとうるしと。㊁膠と漆とをもてつけたるやうに、極めて親密なること。「—の交」。

かう-さつ-せい[コウ][向日性](名) 〔植〕植物の枝葉の太陽の光線の來る方に向つて成長する性質。

かう-さ-はうていさき[コウ-キ][高次方程式](名) 〔數〕二次より高き次數の方程式の總稱。

(かう・しふ)[講習](名) 講じならふこと。――くわい[講習會](名) 或物事を講習するために、設立したる會。
かうし・みかん[柑子蜜柑](名)【植】みかんの一種、葉は一箇の小葉より成り、花は白色にして柄を有し、果實は黄色にして皮薄く酸味多し、其皮は藥用又は香料に供せらる。たちばな。はなたちばな。(包橘、黄柑)。
(かう・しや)[膠沙](名) 船が沙地にのりかゝること。
(かう・しや)[巧者](名) たくみなること。上手。
(がう・しや)[豪奢](名) はなはだしき奢りをつくすこと。
(がう・しや)[鄕社](名) 神社の格、府縣社の下、村社の上にして、數個村の鎮守の社をいふ。
(かう・しやう)[高尙](名) ㊀程度高きこと。「―なる學科」。㊁尊敬の情を以て仰視せらるゝ性質、卑俗ならざる狀態。けだかさ。
(かう・しやう)[翺翔](名) ㊀鳥の翼を張り展(ノ)べて空をかけること。㊁逍遥して樂しむこと。
(かう・しやう)[好尙](名) ㊀このみ。のぞみ。㊁はやり。流行。
(かう・しやう)[行商](名) 貨物を賣りあるくこと。又、其商人。たびあきんど。
(かう・じやう)[綱常](名) 人生の履行せざるべからざる道義。三綱五常。
(かう・じやう)[交情](名) 交際のよしみ。したしみ。
(かう・じやう)[向上](名) 上位に向つてのぼりすゝむこと。進歩。――しゆぎ[向上主義](名) 人生を現實神聖なるものと觀じ、進歩を以て人生の道德となすこと。
(がう・しやう)[豪商](名) 勢盛んなる商人。

(がう・じやう)[强情](名) 心のかたくななること。意地をはりとほす性質。がまん。
(かう・しやく)[講釋](名) ㊀釋(ト)きわくること。㊁昔時、公衆に對して、源平盛衰記・太平記等の軍書を面白く讀み聞かせしこと。今時は、軍書のみに限らず、傳記・小說又は人情話などをも、平易に面白く說くことにいふ。じんだん。かうだん。――し[講釋師](名) 席亭にて、軍書又は傳記・小說などの講釋を業とする人。かうだんし。
(かう・しゆ)[絞首](名) ㊀首をしめてころすこと。㊁【法】生命刑の一、重罪者に科するもの。――だい[絞首臺](名) 罪人を絞首に處する臺。
(かう・じゆ)[香薷](名)【植】「いぬえ」に同じ。
(がう・しゆ)[强酒](名) あけく酒を飲むこと。たいしゆ。
(かう・じゆん)[交詢](名) 交際の便利をよくし、互に親密ならしむること。
(かう・じゆん)[孝順](名) 親に孝行にして其意に逆はぬこと。又、親に孝行にして兄姉に從順なること。
(かう・しよ)[校書](名) (支那の唐朝に薛濤といへる女、文筆に秀でし才妓ありしが、韋皐といへるものこれを召して、校書としたりといふ故事に出づ)「げいしや」の異稱。(歌妓)。
(かう・しよう)[考證](名) 古代の物事を說くに、證據の證索を要とすること。――がく[考證學](名) 支那清朝に至りて大に起りし學、古書を說くに證據の證索を要とするもの。
(かう・しよう・ざん)[高勝山](名) かぶとの一種、鉢のわきをつぶし山を高くして、人の額と同じ形にし、てっぺんの中をせまくしたるもの

かうしよう・の・くわん[高勝鐶](名) 兜のうしろにある鐶。
(かう・しよく)[好色](名) ㊀うつくしき色。美婦人。㊁いろごのみ。――か[好色家](名) いろごのみの人。すきもの。
(かう・じる)(自、さ上一) 增長す。たかぶる。つのる。「ぜいたくが―」。
(かう・じる)[講](他)「かうず」の訛。
(かう・しん)[庚申](名) ㊀えとの一、かのえさる。㊁「かうしんまち」の略言。
(かう・しん)[孝心](名) 孝行のこゝろ。「―天に通ず」。
(かう・しん)[幸臣](名) 氣に入りのけらい。おきにいり(嬖臣)。
(かう・しん)[更新](名) あらたまること。又、あらたむること。
(かう・しん)[亢進](名) たかぶりすゝむこと。「肺氣―」(昂進)。
(かう・じん)[幸甚](名) 仕合せなること。ありがたきこと。(感謝するときに用ふ)「高察を賜はらば―」。
(かう・じん)[好人](名) 心根よき人。
(かう・じん)[佼人](名) みめよき人。
(かう・じん)[行人](名) ㊀路行く人。㊁たびびと。旅人。㊂頌を行ふ者。とりつぎにん。
(がう・しん・かう)[降眞香](名) 一種の香料。
(かう・しん・だう)[庚申堂](名) 庚申を祀(マツ)りてある堂。
かうしん・づか[庚申塚](名) 道邊(ミチベ)に庚申を祀(マツ)りてある塚。
かうしん・ばら[庚申薔薇](名)【植】ばらの一種、葉は通常三個乃至五個の平滑にして光澤ある小葉より成り、花は紅色・白色等にして美麗なり、隔月即ち庚申ある月に、咲くより名づく、觀賞用とし

て栽培せらる。いばらぼたん。(長春花)。
(かう・じんぶつ)[好人物](名) 心根よき人。わるぎなき人。
かうしん・まち[庚申待](名) 庚申の日に行ふ帝釋天と青面金剛との祭、其夜に信者は寐(イ)ねずして旦(アシタ)に達するを例とす。
かう・す[抗](他、さ變) ㊀はりあふ。あらそふ。㊁對す。むかふ。
かう・す[航](自、さ變) ふねにて水上を渡る。
(かう・ず)[好事](名) 奇異なる物事に、殊に深く心を寄すること。ものずき。――か[好事家](名) ものずきのひと。
かう・ず[講](他、さ變) ㊀文書の意味を說く。㊁歌會などにて、和歌のよみあげをなす。㊂和解す。たひらぐ。「和を―」(媾)。㊃論告す。つぐ。㊄練習す。ならはす。「武を―」。㊅討究す。しらぶ。「道を―」。㊆謀議す。はかる。「事を―」。
がう・す[號](自、さ變) ㊀いひたつ。いひふらす。「八十萬と―」。㊁號としてとなふ。名稱に呼ぶ。「名は貼、瓜琴と―」。
かう・すくひ[香匙](名) 香を盛るさじ。
(かう・すゐ)[香水](名) ㊀にほひのよき水。㊁佛に供する水。㊂一種の化粧品、薔薇・丁子・菊・菫(スミレ)など、芳香を有する植物より製したるにほひよき水。(花露水)。
(かう・すゐ)[交綏](名) 敵味方共に退陣すること。あひびき。
(かう・すゐ)[硬水](名)【化】石灰又は他の鑛物を溶解せる水、石鹸の溶液を加ふるときは、脂肪酸のカルシウム鹽を生じ沈澱するを以て、洗濯の用をなさず。
(かう・ずゐ)[洪水](名) 暴漲したる水。おほみづ。(洪水)。

(かう・せい)[校正](名) 印刷物と原稿とを引きあはせて、其誤謬をなほすこと。きやうがふ。
(かう・せい)[倣製](名) にせてつくること。
(かう・せい)[更正](名) あらためたゞすこと。なほし。
(かう・せい)[好晴](名) 晴れわたりたる天氣。
(かう・せい)[高聲](名) こえだか。おほごえ。
(かう・せい)[行星](名)【天】遊星に同じ。
(がう・せい)[降生](名) 神佛などが、生を人間に享(ウ)けて斯世に生るといふこと。
(がう・せい)[剛性](名)【理】物質の性質の一、破碎の難易をいふ
(かう・せう)[巧笑](名) うつくしきわらひがほ。
(かう・せき)[衡石](名) はかり。(秤)。
(かう・せき)[考績](名) 官吏の功課。いさを。
(がう・せき)[拷責](名) がうもん。
(かう・せきかう)[硬石膏](名)【化】「せきかう」(石膏)に同じ。
(かう・せつ)[高說](名) 他人の說の敬稱。おせつ。
(かう・せつ)[講說](名) 講じ說明すること。又、其主意。
(かう・せつ)[巧拙](名) たくみなるとつたなきと。
(かう・せつ)[高節](名) 高きみさを。なみなみならぬおこなひ。
(かう・せつ)[巷說](名) ちまたのうはさ。世間のひやうばん。(街談)。
(かう・せつ)[交接](名) ㊀相接着すること。まじはりつくこと。㊁つきあひ。かうさい。㊂男女のまじはり。房事。(交合)。
(かう・せふ)[交睫](名) 上下のまつげをあはすこと。即ち、眼を閉ぢ睡ること。
(かう・せふ)[交渉](名) ㊀かけあひ。はなしあひ。㊁くわんけい。かゝりあひ。

(かう・せん)[抗戰](名) はりあってたゝかふこと。
(かう・せん)[交戰](名) ㊀戰を交ふること。相戰ふこと。がっせん。㊁【法】交戰主體が互に兵力を以てする敵對行爲。
(かう・せん)[香煎](名) 米(多くはダイタウマイ)のこがしに、陳皮・茴香などの香料を交へ合はせたる粉、湯に點じて飮む。
(かう・ぜん)[浩然](名) ゆったりとしたるさま又は廣大なるさまにいふ語。「―の氣を養ふ」。
(かう・ぜん)[皎然](名) 月あきらかにしてくもりなきさまにいふ語。
(がう・ぜん)[囂然](名、副) かまびすしきさまにいふ語。
(がう・ぜん)[傲然](名、副) おごりたかぶるさまにいふ語。
(かう・せん・こく)[交戰國](名) 交戰主體たる國。又、我に對して戰鬪行爲をなす國。
(かう・せん・しや)[交戰者](名)【法】戰鬪行爲に從事する者。即ち、將校・兵士若しくは義勇兵の類。
(かう・せん・しゆたい)[交戰主體](名)【法】兵力を以て敵對行爲をなす國。又、他の國より交戰主體と認められたる團體。
かうぜん・の・き[浩然之氣](名) 道義に根底し、自ら省みて毫も疚(ヤマ)しき所なく、屈せず撓(タワ)まざる剛健の德。道義的大勇氣。「吾善養―」。
(かう・せん・はう)[鋼線砲](名) 大砲の一種、砲身の内筒外部に無數の鋼線を纏繞せしめ、砲彈の力を增加せしめたるもの。
(かう・そ)[高祖](名) ㊀己れより五代前の親、即ち、祖父母の祖父母。㊁先祖の稱。㊂【佛】一宗又は一寺の開基の人。「―日蓮大菩薩」。

かう・ぞ［楮］(名)【植】(い)桑科に屬する直立木本、枝は密毛を有せず、葉は小形にして卵形をなし尖頭を有す、樹皮の纖維を採り製紙の原料に供す。かみのき。かぞ。(穀)。(ろ)「とろろあふひ」の一名。
(がう・そ)［強訴］(名) 徒黨して訴訟すること。
(かう・そう)［高僧］(名) ㊀德行すぐれたる僧。㊁官位高き僧。
(かう・そく)［高足］(名) ㊀たかあし。㊁高位地の弟子。優秀なる門弟。
(かう・そく)［梗塞］(名) ふさがりて通ぜざること。「道路―」。
(がう・ぞく)［豪族］(名) 勢力大なる家門。財產多き一家。
かう・ぞめ［香染］(名) 黄に黑みある色、袈裟などに用ふ。もと「インド」にて、「ケンダラ」といふ香樹の藥にて染めしより此名あり。もくらんぢき。
かう・ぞり［髮剃］(名) (髮剃カミソリの轉) ㊀佛門に入る式、僧侶が死人又は出家に戒をさづけて、其髮を剃(ソ)ること。(首剃)。㊁在家俗人が佛門に歸依する證として行ふ一種の式、僧侶が剃刀(カミソリ)を其在家俗人の頭にあて、髮を剃(ソ)るまねをなす。
(かう・たい)［交代］(名) かはりあふこと。「參勤―」。(交替)。――しき［交代式］(名)【數】代數式の一、式中の文字二つを交換して、其符號を變ずるとき、其二つの文字に就きての稱、例せば、$x(a+b)$はaとbに就きての交代式なり。――よりあひ［交代寄合］(名) 德川時代の身分格式の一、領地に住み、年を定めて參勤交代する一萬石未滿の武士の家柄。
(かう・だい)［高臺］(名) ㊀高き足のあるわん。ちやわん。㊁たかく築きたるうてな。
(かう・だい)［高大］(名) ㊀たかく大なること。㊁最もすぐれたること。極めてたふときこと。
(がう・たい)［剛體］(名)【理】如何なる力を加ふとも變形せざる假想體。
(かう・たう)［浩蕩］(名) ひろ〴〵としたるさまにいふ語。
(かう・たう)［高蹈］(名) ㊀たかく自家の地歩を占むること。世累をぬけ出づること。㊁官祿に心をのこさず身を去りぞくること。
(かう・だう)［孝道］(名) 親に事(ツカ)ふる道。
(かう・だう)［香道］(名) 香をかぎわくるわざ。
(かう・だう)［講堂］(名) ㊀寺院にて講義又は說敎をなす堂。㊁學校の敎室。
(がう・だう)［豪宕］(名) 意氣さかんにして言行の尋常規律の外に逸すること。
(かう・だう)［坑道］(名) ㊀地下にうがつ通路。㊁地下に火藥を裝置し爆裂せしむる所。
(がう・だう)［強盜］(名) 暴行又は脅迫の手段を加へて、他人の財物を奪ふ者。(劫盜)。――づきん［強盜頭巾］(名) づきんの一種、麻絲を紺染めにしてつくる、賤しき人のかぶるもの。――はん［強盜犯］(名)【法】強盜の罪、其際に強姦又は殺傷したるものをも概括していふ。
(かう・たく)［膏澤］(名) ㊀うるほひ。㊁あぶら。
かう・たけ［革茸］(名) (「かはたけ」の轉)【植】菌類の一種、山嶺の落葉の下などに生ず、かさ芳(ハウ)し、乾せば染め革の如き黑色となる、味苦く灰汁(アク)にてゆでゝ食ふ。(茅蕈)。
かう・だたみ［香疊］(名) 香包(カウツヽミ)・香箸(カウバシ)其他香道に必要の具を包む紙。
(がう・だつ)［強奪］(名) しひてうばひとること。かすめとること。
(かう・たん)［降誕］(名) 神佛又は非凡なる人のうまるゝにいふ語。たんぢやう。「皇子の―」。(降世)。
(かう・だん)［高談］(名) ㊀聲たかく物がたること。世間憚らず物がたること。㊁おせつ。おはなし。
(かう・だん)［講談］(名) 「かうえやく」(講釋)㊁に同じ。――し［講談師］(名) 「かうえやくし」(講釋師)に同じ。
(かう・だん)［講壇］(名) 講義する座位。
(がう・たん)［豪膽］(名) 膽のよくすわりて居ること。物事に驚かぬこと。だいたん。「―の少年」。
(がう・たん)［毫端］(名) 筆のはさき。(筆端)。
(がう・だん)［強談］(名) 無理にはなしをつくること。おして談判すること。
(かう・たん・くわい)［降誕會］(名) 釋迦牟尼又は孔子・基督などの如き大偉人の降誕當日を祝するための會合。「孔子―」。
(かう・だん・し)［好男子］(名) りつぱなる男。よきをとこ。「―惜むらくは兵法を知らず」。
(かう・ち)［耕地］(名) 耕作すべき土地。山林・宅地・河海などの對。
(かう・ち)［巧智］(名) 物事たくみなる才智。
(かう・ち)［狡智］(名) わるがしこき才智。
カウ・チ［交趾］(名) 古昔、安南國より舶來せし陶器の稱。
(かう・ち)［巧遲］(名) おそくしてできあがりの勝(スグ)れたること。拙速の對。「―は拙速に如かず」。
(かう・ち)［高地］(名) たかき土地。たかき場所。
かう・ぢ［麴］(名) 米又は麥を蒸(ム)してもやしと混じ、これをねかし、かうぢかびを生ぜしめたるもの、酒・醬油・味噌などを製する原料なり。――かび［麴黴］(名)【植】下等菌類の一、一の細胞より次第に新細胞を芽出し、後に特立の細胞となりて蕃殖す、澱粉を糖類に變化せしむ。――ばな［麴花］(名) 「かうぢかび」に同じ。――むろ［麴室］(名) 麴をねかすためのむろ。

(かう・ちう)［行廚］(名) べんたう。わりご。
(かう・ぢき)［高直］(名) 價の高きこと。たかね。「高價」。
(かう・ち・せい)［向地性］(名)【植】植物の根が地下に向ひて生長する性質。
(かう・ち・せいり)［耕地整理］(名) 耕地の利用を增進するために、諸般の設備をなすこと、即ち、所有者共同して、土地の分合・變更若しくは畦畔・溝渠等の變更・廢置などを行ふこと。
(かう・ちやう)［校長］(名) 學校の長。
(かう・ちやう)［高聽］(名) 他人の聽くことの敬語。きゝ。
(かう・ちやう)［綱丁］(名) 古昔、貢物を運送せし使丁。
(かう・ちやう)［腔腸］(名)【動】くらげ等の體腔の營養をつかさどる所。――どうぶつ［腔腸動物］(名)【動】くらげ・さんご・いそぎんちやく等の總稱、體形は種々あれど、構造は一般に囊狀にして、僅かに二層の皮膜組織より成り、概ね口の周圍に觸手を有す、其口によりて外界に通ずる內腔は、腔腸にして、其一部若しくは全部を以て食物の消化をなし營養をつかさどる、又、此等の動物の特性として、外面の皮膜中に諸刺胞と稱する小胞あり。
(かう・ぢやう)［定考］(名) (文字をさかさに讀むが例なり) 古昔、官吏の行狀又は藝能を、考へさだめて撰び出しゝこと。
(かう・ぢゆう)［講中］(名) 神佛などに協同の組をむすびて詣(マヰ)づる連中。又、賴母子の連中。「い」。
(かう・ちよ)［較著］(名) いちぢるしきこと。ちよめ
(かう・ぢよ)［孝女］(名) 孝行なる女。
(かう・ちよく)［硬直］(名) 一途に正しきこと。りちぎ。(剛直)。
(かう・つう)［交通］(名) ㊀ゆきかよひ。ゆきき。㊁人身の往復・物品の運搬又は人々互に意思を相通ずること、これを分つて運搬と通信との二とす、人身の往復又は物品の運搬は前者に屬し、意思を相通ずることは後者に屬す。――きくわん［交通機關］(名) 往復又は運搬に屬する機關卽ち道路・橋梁・船舶・鐵道等と、通信に屬する機關卽ち電信・電話・郵便等とをいふ。――ろ［交通路］(名) ゆきかよひする路筋。ゆきゝのみち。「世界の―」。
(かう・つがふ)［好都合］(名) つがふよきこと。
(がう・つくばり)［強突張］(名) 頑情にして人に從はざるものを罵りていふ語。
(かう・づゝみ)［香包］(名) 香を包む紙。
(かう・つ・さ)(感) 如何になさんかと考ふるときなどの發聲。かうと。え、と。
(かう・てい)［高弟］(名) いちばんでし。かうそく。
(かう・てい)［行程］(名) みちのり。ゆきみち。
(かう・てい)［高低］(名) ㊀たかきとひくきと。㊁あがりさがり。(昂低)。
(かう・てい)［抗抵］(名) てむかひ。はりあひ。「抵抗」。
(かう・てい)［更訂］(名) あらためなほすこと。
(かう・てい)［校訂］(名) 出版物などの文字又は文句の誤謬をなほすこと。
(かう・てい)［考定］(名) かんがへさだむること。「又、其かんがへ」。
(かう・てい)［扛鼎］(名) (かなへをあぐる義) 重き物をあぐる力あること。「―の力」。
(かう・てい)［孝悌］(名) 父母に孝行にして、兄弟に從順なること。(孝弟)。
(かう・てう)［高潮］(名) ㊀【地】あげ潮が其極に達せしときの稱。㊁感情又は時勢などが、最も高まり起りたる程。
(かう・でう・はう)［鋼條砲］(名) 「かうせんはう」(鋼線砲)に同じ。
(がう・てき)［強敵］(名) ㊀手にあまるばかりつよき敵。きやう敵。㊁非常なること。すぐれたること。
(かう・てつ)［鋼鐵］(名) 百分中に〇・八乃至一・八の炭素を含有する鐵、銑鐵を融解して高壓を加へ、空氣を吹き入れ炭素の幾分を酸化せしめて製す、用途甚だ多し。はがね。――かん［鋼鐵艦］(名) 鋼鐵を材料として建造したる軍艦。
(かう・てつ)［更迭］(名) あらたまりかはること。いりかはり。「內閣の―」。(更代)。――のり［更迭の理］【數】同種類の四つの量が比例をなすとき、第一と第三との比が、第二と第四との比に等しきこと。
(かう・てん)［昊天］(名) そら。あめ。
(かう・てん)［高點］(名) おほき點數。たかき點「數」。
(かう・てん)［交點］(名) ㊀かれとこれとが相交はる點。㊁【天】遊星・衛星又は彗星の軌道が、黃道面と相交はる點。――げつ［交點月］(名)【天】大陰が其軌道の交點の一を再び通過するまでの時間の稱、二十七日五時十分三十七秒なりとす。
(かう・でん)［香奠］(名) 死者の靈前に供ふる贈物。(香典、賻)。
がう・てんぢやう［格天井］(名) 格子の目の如くに桟(サン)をつくりたる天井。
(かう・と)［狡兎］(名) すばしこきうさぎ。――しにて　そうく　にらる［狡兎死走狗烹］事變の際、人のためにはたらきて功績を立てたるものも、事變平ぎて後は、却つて其人のために除害せらるゝにたとへいふ。
(かう・と)［高等］(名) 品よくけだかきこと。ひとが

ち。「—なつくり」。

〔かう-ざ[コウ]**〔斯〕**(感) いかゞなさんかと物を考ふるときの發聲。さてと。えゝと。

(かう-ど[コウ]**〔高度〕**(名) ㊀程度高きこと。㊁〔天〕地平より天體に至る角距離。

(かう-ど[コウ]**〔耕土〕**(名) 心土即ち下層土の上層にあり、春人の耕鋤する部分の土壌、岩石崩碎して土砂となり、動植物質これに混じて、草木を養ふべき土となりたるもの。〔表土〕。

(かう-ど[コウ]**〔硬度〕**(名) 瑕疵(カシ)を與へんとするに對する物體の抵抗の程度、普通用ふる程度の標準は、(一)滑石(二)石膏(三)方解石(四)螢石(五)燐灰石(六)長石(七)水晶(八)黄玉石(九)鋼玉石(十)金剛石の順序にして、金剛石は硬度最も高し。

(かう-ざつ[コウ]**〔昂騰〕**(名) 價などのあがること。

(かう-ざつ[コウ]**〔高等〕**(名) 程度のすぐれたること。

—-がくかう[ガクカウ]**〔高等學校〕**(名) 文部省直轄學校の一、專門學科を教授する所にして、帝國大學の入學者のために豫備學科を設く。——。

きやうせい[キヤウセイ]**〔高等行政〕**(名) 國家社會の安寧に關する行政。

—-くわん[クワン]**〔高等官〕**(名) 官吏の等級の一、これを分つて八等とし、一等二等を勅任官といひ、三等以下八等迄を奏任官といふ。

—-けいさつ[高等警察]**〔高等警察〕**(名) 國家社會の安寧に關する危害を防止することを目的とする警察、即ち、出版・集會・結社又は浮浪・出獄人若しくは火藥・刀劍等に關する警察をいふ。

—-けりいく[ケリイク]**〔高等教育〕**(名) 程度高き教育、又、專門の學科。

—-けりいくくわいぎ[ケリイククワイギ]**〔高等教育會議〕**(名) 文部大臣の監督の下に屬して、其諮詢の事項を審議する機關。

—-とうげふがくかう[ガクカウ]**〔高等工業學校〕**(名) 文部省直轄學校の一、工業に關する高等の學術技藝を教授する所。

——-きはんがくかう[ガクカウ]**〔高等師範學校〕**(名) 文部省直轄學校の一、師範學校・尋常中學校及高等女學校の教員を養成する所、附屬中學校及附屬小學校を置く。

——-あきやうげふがくかう[アキナヒガクカウ]**〔高等商業學校〕**(名) 文部省直轄學校の一、商業に關する高等の學術・技藝を教授する所。

——-きよくぶつ[キヤクブツ]**〔高等植物〕**(名) 根より被狀の澱養分を吸收し、狀態の全く動物と異なる植物の稱。

—-せうがくかう[ショウガクカウ]**〔高等小學校〕**(名) 小學校の一種、尋常小學校を卒業したる者に更に程度高き初等普通教育を施すを目的とする所、修業年限は、二箇年とす。

たんぱう[タンパウ]**〔高等探訪〕**(名) 新聞社にて、政治社會の狀況を探訪すること。又、其人。

—-がくかう[ガクカウ]**〔高等女學校〕**(名) 女子に高等なる普通教育を授くることを目的とする學校。——。

どうぶつ[高等動物]**〔高等動物〕**(名) 口を有し固形又は液狀の食物を攝取し、複雜なる內部の器官によりこれを消化し、狀態全く植物と異なる動物の稱。

(かう-ざう[コウ]**〔行動〕**(名) 寫すこと。行ふこと。はたらき。ふるまひ。

(がう-ざつ[ガウ]**〔豪頭〕**(名) 書物の欄上に細註を加ふること。〔冠註〕。

(かう-ざく[コウ]**〔高德〕**(名) 德のすぐれたること。

(がう-ざな[ガウ]**〔名〕**〔動〕「やどかり」に同じ。〔寄蟹〕。

(かう-ざう[コウ]**〔香囊〕**(名) にはひぶくろ。

(かう-ざう[コウ]**〔行囊〕**(名) 郵便物を入れて逓送するに用ふる囊。

かう-ざき[コウ]**〔巫〕**(名) 「かんなぎ」の音便。

(かう-にん[コウ]**〔降人〕**(名) かうさんしたる人。

かう-ぬし[コウ]**〔神主〕**(名) 《「かみぬし」の音便》㊀神を祭るときの主たる人。祭主。㊁神につかふる人。かんぬし。〔祠官〕。

(かう-のう[コウ]**〔耕農〕**(名) 耕作を專業とする農民。

(がう-のう[ガウ]**〔豪農〕**(名) 財產多く勢力ある農民。

かう-の-さの[コウ]**〔督殿〕**(名) 《「かう」は「かみ」の音便》衛門府又は兵衛府の長官・國守等の尊稱。

かう-の-もの[コウ]**〔香物〕**(名) 一種の食品、野菜を糠・鹽・味噌・粕などに漬けたるもの。かうこ。つけもの。〔漬物〕。

がう-の-もの[ガウ]**〔剛者〕**(名) すぐれてつよき人。たけきもの。ゝふ。強者。

(かう-は[コウ]**〔硬派〕**(名) ㊀堅く政府に反對する意見を執る在野の政黨。㊁すべて敵に對して、手強き處置に出でんとを主張する派の稱。㊂新聞社又は雜誌社にて、文學又は體物(モノ)の擔當に對して、政事方面の擔當にいふ。「—記者」。

(かう-は[コウ]**〔行馬〕**(名) ㊀こまよせ。こまつなぎ。㊁端に釘をうちつけある杙(クヒ)、敵騎の突入を防ぐために、陣頭に設くるもの。

(かう-はい[コウ]**〔伉配〕**(名) つれあひ。めをと。

(かう-はい[コウ]**〔向背〕**(名) ㊀またがふとそむくこと。㊁やうす。なりゆき。

(かう-はう[コウ]**〔好望〕**(名) 前途によきめどあること。

(がう-はう[ガウ]**〔豪放〕**(名) 小節にかゝはらざること。勇氣ありてあはまかなること。「其ひゞき。

(がう-はう[ガウ]**〔號砲〕**(名) あひづに打つ大砲。又、

(かう-はく[コウ]**〔巷陌〕**(名) ちまた。まち。

(かう-はく[コウ]**〔皓白〕**(名) 白きこと。

(かう-ば[コウ]**〔香箱〕**(名) 香を入るゝ器、紙を折りてつくりたるもの。〔香合・香盒〕。「使。

かう-ばさみ[コウ]**〔髮鋏〕**(名) 「かみばさみ」の音便。

かう-ばし[コウ]**〔香箸〕**(名) 香をたくとき、香をはさむに用ふる箸。〔香匕〕。

—-がひ[ガイ]**〔香箸貝〕**(名) 〔動〕「うに」の一名。

かうば-し[コウ]**〔しくしとしき〕〔香〕**(形シク) 《「かぐはし」の音便》㊀かをりよし。にほひよし。〔芳・芬〕。㊁德聞又は名聲の流傳するにいふ。㊂〔利益〕あり。もゝえろし。「—き話」。

(がう-はつ[ガウ]**〔毫髮〕**(名) ㊀毛一すぢ。㊁轉じて、わづかなる物事。

かう-はな[コウ]**〔香華〕**(名) 佛に奉る香と花と。「—たむくる方もなし」。

(かう-はん[コウ]**〔考槃〕**(名) 樂しむこと。

(かう-はん[コウ]**〔皓礬〕**(名) 〔化〕硫酸亞鉛の稱。

(かう-ばん[コウ]**〔交番〕**(名) ㊀かはりあひて番にあたること。㊁「かうばんえよ」の略言。

—-ゑよ[ヱヨ]**〔交番所〕**(名) 市中の要處に設置しある巡査の派出所。

—-でんりう[交番電流]**〔交番電流〕**(名) 〔理〕方向の振動的に交互に變ずる電流。

(かう-ひ[コウ]**〔糠粃〕**(名) ㊀あらぬかとえひなと。㊁粗末なる食事。㊂こな。くゞ。

(かう-ひ[コウ]**〔高批〕**(名) 御ひやう。御批評。

(かう-ひ[コウ]**〔皐比〕**(名) 虎の皮のゑがきもの。

(かう-ひ[コウ]**〔交尾〕**(名) 鳥獸蟲魚などの雌雄兩性の交接。つるむこと。つがふこと。

—-き[交尾期]

(名) 禽獸蟲魚などの交接を行ふ時期。

(かう-ひ-よ[コウ]**〔行秘書〕**(名) いきてゐるえよもつぼと、即ち、博く書史に通じたる學者をいふ。

かう-ひねり[コウ]**〔紙捻〕**(名) 「もとゆひ」の古名。

(かう-びん[コウ]**〔幸便〕**(名) 便宜よきたより。

(かう-ふ[コウ]**〔耕父〕**(名) ひやくえやう。〔農夫〕。

(かう-ふ[コウ]**〔交付〕**(名) 物事を引渡すこと。ひきわたし。

(かう-ぶ[コウ]**〔講武〕**(名) 武道を講じ習ふこと。

(がう-ふ[ガウ]**〔豪富〕**(名) 頗る富める者。又、其人。

(かう-ふく[コウ]**〔幸福〕**(名) ㊀運命の吉なること。遭遇のはえあること。さいはひ。えあはせ。〔福祉〕。㊁生存に危害なきこと。心中の平和なること。

(かう-ふく[コウ]**〔降伏〕**(名) くだること。かうさん。

(がう-ふく[ガウ]**〔剛愎〕**(名) かたくなにして人に從はざること。がうゑやう。——-ふそん[剛愎不遜]〔名〕がうゑやうにして人に對し不禮なる挙動多きこと。

(がう-ぶく[ガウ]**〔降伏〕**(名) ㊀我を屈して服從すること。㊁神佛の功力に由りて、惡魔・外道・敵などを押へ鎭ずむること。——-の-ほふ[降伏の法]〔名〕降伏のために、ごまをたきて祈ること。

かう-ぶくろ[コウ]**〔香囊〕**(名) 香を入るゝふくろ。

(かう-ぶき[コウ]**〔香附子〕**(名) 〔植〕一種の草、田野に自生す、莖はにらに似て堅くして光澤あり、五六月の頃、黃色の花を開き實を結ぶ、多く藥用とす。

(かう-ぶつ[コウ]**〔好物〕**(名) すきこのむ食物。

かう-ぶり[コウ]**〔冠〕**(名) 《「かかぶり」の轉》㊀かんむりの古名。㊁位階。

かう-ぶる[コウ]**〔被〕**(他ら四) 「かうむる」に同じ。

(かう-ぶん[コウ]**〔行文〕**(名) 文章のかき方。文字の「つかひ方。

(かう-ぶん[コウ]**〔高聞〕**(名) 他人の聞くことの敬語。「異稱。

(かう-ぶん-ぼく[コウ]**〔好文木〕**(名) 〔植〕「うめ」の

(かう-べ[コウ]**〔首〕**(名) 《上部(カミ)の音便》くび。あたま。〔頭〕。

—-をめぐらす[回首]〔名〕あと〈ふりむく。又、むきかへる。既往を回想す。

(かう-べき[コウ]**〔降冪〕**(名) 〔數〕同一なる文字が、種々の冪を有する多くの項より成る式に於て、其最大冪の項より順次低き冪の項が下方へ列ねあると、例へば、$4x^3-12x^2+5x-7$ の如きこれなり。

(かう-へい[コウ]**〔降兵〕**(名) 降參したる兵。

(かう-へい[コウ]**〔衡平〕**(名) 平均すること。つりあふこと。又、平均若しくはつりあひを得しむること。

かうべ-をめぐらす-うた[コウ]**〔旋頭歌〕**(名) 「せどうか」に同じ。

(かう-べん[コウ]**〔抗辯〕**(名) ㊀はりあひて論辯すること。㊁〔法〕訴訟手續にて、訴訟の本案に就き辯論すべき特別の資格條件なきことを主張して、其辯論を拒むこと。「料。

(かう-ぼ[コウ]**〔酵母〕**(名) 醱酵作用を起さしむる原

かう-ぼね[コウ]**〔河骨〕**(名) 〔植〕睡蓮(ヒツザ)科に屬する水草、水上に浮出せる葉は箭狀心形を呈し、莖片は背色にして花瓣樣をなし、柱頭は數裂して放線狀を呈す、觀賞植物として栽培せらる。〔菖蒲草〕。

(かう-ぼん[コウ]**〔藁本〕**(名) またがき。草稿。〔稿本〕。

(かう-ぼん[コウ]**〔香盆〕**(名) 香を盛る盆。

かう-ぼり[コウ]**〔蝙蝠〕**(名) 〔動〕「かうもり」に同じ。

(がう-ま[ガウ]**〔降魔〕**(名) あくまを降服せしむること。

—-の-けん[降魔劍]〔名〕不動明王が手にせる劍。「と。

(がう-まい[ガウ]**〔豪邁〕**(名) 心たけくすぐれたる

(がう-まつ[ガウ]**〔毫末〕**(名) 《毛すゑのさきの義》僅かなる物事にいふ。「參詣すること。

かう-まゐり[コウ]**〔講參〕**(名) 講中を結びて、神佛に

(かう・まん)[コウ]〔高慢〕(名) ㊀自ら高ぶりて人をあなどること。(自負)。㊁其身のほどに過ぎたる事をすること。——**・ちゃく・れ**[ヂャク]**・れ**[レ]**・れ**[レ]〔自ら下一〕樣子又は口まへばかりが、實際と不平均に高慢なるにいふ。(東京の方言)。

(かう・まん)[コウ]〔顔漫〕(名) ひろ〳〵しきと。

(かう・まん)[コウ]〔傲慢〕(名) おごりたかぶりて禮に缺けたること。不遜。(謙徴)。

(かう・み)[コウ]〔好味〕(名) よきあぢはひ。又、よきあぢはひのもの。(美味)。

(かう・みゃう)[コウ]〔高名〕(名) 名のたかく現はるること。なだかきこと。よきひやうばん。

かうむ・る[コウ]〔被、蒙〕(他、ら四) ㊀頭にいたゞく。頭におはふ。(冠)。㊁上に置ふ。上に加ふ。㊂着く。きる。「残衣を—」。㊃負ふ。「矢を—」と同の如し。㊄受く。「御免を—」。㊅酒を飲み醉ひを帶ぶ。「酒をかうむりて臥す」。

(かう・めい)[コウ]〔高名〕(名) ㊀名高きこと。よきひやうばん。㊁人の名の敬稱。「—はかねて承りて居りました」。

(かう・めい)[コウ]〔果明〕(名) 日光のあきらかなること。

(かう・めい)[コウ]〔講明〕(名) ときあかすこと。又、きはめあきらかにすること。

(かう・めう)[コウ]〔高妙〕(名) すぐれてたえなること。

(かう・めん)[コウ]〔高免〕(名) ゆるしを受くることの敬語。おゆるし。「—を乞ふ」。

(がう・もう)[ガウ]〔毫毛〕(名) 《毛すぢの義》僅かなる物事にいふ。

(かう・もく)[コウ]〔綱目〕(名) ㊀網のおはづなと細かき目と。㊁物事のすべて、りとこわけと。

(かう・もり)[コウ]〔蝙蝠〕(名) ㊀〔動〕翼手類に屬する小獸。胴ありて手と足との間より體の後端に翼出でゝ、手指は伸長してこれを支張する骨となる。鳥の如く空中を飛翔す。體面には羽なくして毛あり、鼠は短くして鉤爪を具し、休止するときはこれを以て物に懸垂す。かはほり。かくひどり。へんぷく。(天山、伏翼)。㊁かうもりがさの略言。——**がさ**〔蝙蝠傘〕(名) さしがさの一種、西洋より傳來し、鯨の骨に鐵子・毛鐵子(スジ)・綱などをはりてつくれるもの。——**づけ**〔蝙蝠附〕(名) 具足ののどわの作り方、かうもりの羽をひろげたる如くに、一枚革にて草摺(ゾリ)をひろく脇に附けたるもの。

[(一)りもうか]

(かう・もん)[コウ]〔肛門〕(名) 消食器の末端、即ち、直腸の下端にありて、體中の不用老廢物を排出する孔。ありのあな。

(かう・もん)[コウ]〔港門〕(名) みなとのいりぐち。

(がう・もん)[ガウ]〔拷問〕(名) 罪人をいためせめて實狀を問ひたゞすこと。

かうや[コウヤ]〔名〕「かはや」(厠)の音便。

(かう・や)[コウ]〔郊野〕(名) ひろ〳〵としたる野。かうじわい。のはら。

(かう・やう)[コウ]〔孝養〕(名) 孝行して親をやしなふこと。かうかう。

かう・やう[コウ]〔斯樣〕(名) かやう。このやう。「便」。

かう・やがみ[コウヤ]〔紙屋紙〕(名) 「かみやがみ」の音便。

(かう・やく)[コウ]〔膏藥〕(名) 膏にて練(ネ)りかためたる外傷用の藥。紙片又は布片に塗べて、體の患部に貼用す。あぶらぐすり。

(かうや・どうふ)[コウ]〔高野豆腐〕(名) 紀伊國高野山より出ることはりどうふ。

かうや・ひじり[コウ]〔高野聖〕(名) ㊀勸進を目的に、高野山より全國に出づる僧徒の稱。㊁〔動〕蜻蛉類の幼蟲が水中に生活するときの稱。長さ二寸許、形は蜉に似て色黑く甲あり、足は六本、歩むと遲し、水中にありてぼうふりを食し、蚊の驅除に大効あり、我國に產するもの百餘種あり。

かうや・まき[コウ]〔高野槇〕(名) 〔植〕松杉科に屬する喬木、葉は長線形にして數個輪生し、果鱗は通常七箇の胚珠を有す、高野山等に多く產す、木材は種々の用に供せられ、樹皮はまきはだと稱し、水槽・船等の空隙を塞ぐに用ひらる。(金松)。

(かう・ゆ)[コウ]〔香油〕(名) 化粧品として用ふるにはひよき油の總稱。

(かう・ゆ)[コウ]〔膏腴〕(名) 土地肥えて、作物によく適すること。「—の地」。

(がう・ゆう)[ガウ]〔豪雄〕(名) ゆうまや。がうけつ。

(がう・ゆう)[ガウ]〔豪勇〕(名) つよくいさましきこと。又、其人。

(かう・より)[コウ]〔効用〕(名) ㊀役に立つこと。つかひみち。㊁りえき。きゝめ。㊂〔經〕財貨が人の願望を充たすに適する能力。

(がう・よく)[ガウ]〔强欲〕(名) 飽くことを知らぬ欲心。どんらん。(大慾)。

かう・より[コウ]〔紙捻〕(名) 《「かみより」の音便》紙を細く切りてよりたるもの。普通にこよりといふ。かんぜんより。かんぶんより。(紙綫、紙繩)。

カウライ[コウ]〔高麗〕(名) 朝鮮產の陶器の總稱。(茶人の語)。——**うぐひす**[ス]〔高麗鶯〕(名)

〔動〕うぐひすの一種、形は鶯(ウ)に似て、腹部は白く、頭部・背部は黃綠色なり、ところがる如き調子に鳴く。(鶯)。——**まは**〔高麗芝〕(名) 〔植〕えばの一種、莖短く葉細くして美し。ひめえば。(飯事草)。——**うり**[リ]**せきやさ**〔高麗石菖〕(名) 〔植〕せきさやうの一種、葉細し。(錢蒲)。——**せんべい**〔高麗煎餅〕(名) せんべいの一種、餅粉を原料としたる小形のもの。——**ちゃわん**〔高麗茶碗〕(名) 朝鮮より舶來せるちやわん。——**で**〔高麗手〕(名) 「かうらいやき」に同じ。——**べり**〔高麗縁〕(名) 疊のへりの一種、白地の綾に、模樣を黑く織り出したるもの。——**もん**〔高麗門〕(名) 普通の屋根の外に、左右のひかへ柱の上にも屋根ある門。——**やき**〔高麗燒〕(名) 朝鮮にて燒きたる陶器の總稱。かうらいで。「慰愛」。

(かう・らう)[コウ]〔犒勞〕(名) ねぎらひたはること。

(かう・らく)[コウ]〔行樂〕(名) 細事にかゞづらはず心やすらかに樂むこと。「御ぶん。

(かう・らん)[コウ]〔高覽〕(名) 他人の見るとの敬語。

(かう・らん)[コウ]〔高欄〕(名) 高き樓のらんかん。又、たけ高きらんかん。

(かう・り)[コウ]〔行李〕(名) ㊀旅行の荷物。旅行の支度。㊁軍隊の輜重又は宿營に必要なる物品を積載せる輜重。大行李と小行李との別あり。其條を見よ。㊂旅行用の荷物を入るゝ具、形はつゞらの如く、竹又は柳にて編み作る。㊃便者。つかひ。「一介の—」。

(かう・り)[コウ]〔高利〕(名) 貸し金の利息が、普通よりたかきこと。——**かし**〔高利貸〕(名) 高利を貪りて金錢を貸すこと。又、其業に從ふ人。(放重利者)。

(かう・り)[コウ]〔狡吏〕(名) わるく民爾なる役人。

(がう・り)[ガウ]〔毫釐〕(名) 極めて少き分量。——**のさは せんりのあやまりを いたす**〔毫釐差致千里謬〕始めはすこしのたがひも、終りは甚しき相違あるにいふ。

(かう・りう)[コウ]〔江流〕(名) 河のながれ。「一千里」。

(がう・りき)[ガウ]〔强力〕(名) ㊀つよきちから。㊁々まぶしの連れたる下男。㊂登山する者の屈ふ人足。

(かう・りつ)[コウ]〔高率〕(名) 率の程度高きこと。

(かう・りやう)[コウ]〔膏粱〕(名) ㊀あぶらぎとあはは。㊁美味なる食饌。—に飽く。

(かう・りやう)[コウ]〔綱領〕(名) 物事の大眼目。おはもと。おはくゝり。

(かう・りやう)[コウ]〔考量〕(名) かんがへ。おもんぱかり。

(かう・りよ)[コウ]〔考慮〕(名) かんがへ。たび。又、たび人。「り。

(かう・りよ)[コウ]〔行旅〕(名) たび。

(かう・りよう)[コウ]〔蛟龍〕(名) ㊀想像上の動物。四足ありて頸細く、頸に珠あり、其大なるものは人を呑む。雲雨に會して天上にのぼるといふ。あまりよう。㊁未だ時機に際會せざる英雄豪傑の稱。——**うんうを**[ヲ]**う**[ウ]〔蛟龍得雲雨〕豪傑・英雄が時機に際會するにいふ。

(かう・りよく)[コウ]〔効力〕(名) ㊀はたらき。ちから。「と。

(かう・りん)[コウ]〔降臨〕(名) 神佛などのあまくだること。

(かう・りん・るゐ)[コウ]〔硬鱗類〕(名) 〔動〕魚類の一、骨骼は軟骨及硬骨の二部より成るか若しくは全く硬骨かなり、鱗は概ね斜方形の板狀體にして表面に琺瑯質を被るを常とす、尾鰭は通常不正なり、太古には繁榮せし魚類なれど、現今には生存するもの少し、ちやうざめこれに屬す。

(かう・れい)[コウ]〔綱領〕(名) おはもとのすぢみち。えうれい。がんもく。

(かう・れい)[コウ]〔高齡〕(名) としより。老年。「事。

(かう・れい)[コウ]〔好例〕(名) よきためし。よきひき。

(かう・れい)[コウ]〔伉儷〕(名) つれあひ。夫婦。(配偶)。

(がう・れい)[ガウ]〔號令〕(名) ㊀君主の勅令。みことのり。おほせ。㊁將官の指揮。さしづ。げぢ。㊂すべて上位にあるものゝ下位のものに對してのいひつけの稱。——**あせのごとし**〔號令如汗〕君の勅令は、一たび發せられたる以上、更にこれを止めて以前の狀態の如くする能はずとの意を、汗の一たび出づればもとへかへらざるにたとへいふ。

(かう・れう)[コウ]〔香料〕(名) にほひよき材料品。「印度は、—の產物に富む」(香物)。

(かう・れう)[コウ]〔高料〕(名) 價たかきこと。かうぢき。

(かう・れう)[コウ]〔校了〕(名) すりもの、校正のすめること。

(かう・れん)[コウ]〔孝廉〕(名) ㊀孝行と廉直と。㊁支那の撰時代の進士の一名目。

(かう・ろ)[コウ]〔香爐〕(名) 香を焚く器、多くは陶器・銅器若しくは漆器を用ふ、其形種々あり。(香炉)。

[ろうか]

(かう・ろ)[コウ]〔航路〕(名) 船舶の航行の路。ふねのゆき。「きみち。

(かう・ろ)[コウ]〔坑路〕(名) 地下の通路。あなみち。

(かう・ろう)[コウ]〔高樓〕(名) 高きたかどの。(屋)。

(かう・ろく)[コウ]〔高祿〕(名) 多くの祿高。

(かうろ・ぎんがう)[コウ]〔航路信號〕(名) 航行中の汽船が他船に近寄りたるとき、衝突を避くるために、汽笛又は汽角を以て我船の變(ヘ)んとする航路を通知するための號報。現今の規定にては、短聲一發は舷路を右舷に取るものとし、短聲二發は、舷

路を左舷に取るものとし、短聲三聲は全速力を以て背進するものとす。

(かうろ・へうしき)[航路標識](名) 航路の安全を圖るための標識、即ち、燈臺、燈船又は警報旗の如きもの。

(かうろ・へんかう)[航路變更](名) 航行の目的地を變更せずして、航行の路を變更すると。

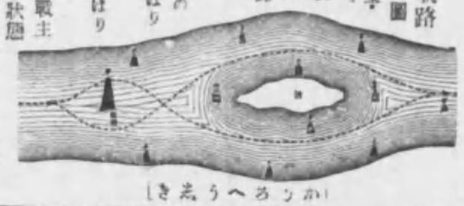
(かう・ろん)[高論](名) ㊀りつぱなる議論。㊁他人の議論の敬稱。「—をうけたまはりたし」。

(かう・ろん)[抗論](名) はりあひて議論すること。

(かう・わ)[講和](名) 交戰主體が和議して、平和破裂前の狀態に復すること。「講和條約」(名) 交戰主體が講和のために締結したる條約、其締結により交戰中に於てのみ繼續せらるべき行爲は廢絶せらるゝものとす。

かう・わか[幸若](名) 桃井幸若の始めし舞、物語を音曲に合せ鼓拍子にて舞ふもの。さいわか。

(かう・ゐ)[行爲](名) ㊀意思に基きたる動作。まわざ。あこなひ。㊁[法]權利の得喪移轉を生ずるまわざ。これを分つて二とす。其目的が直接に法律上の効果を生ぜしむるにあるときは、これを法律行爲といひ、其目的が直接に法律上の効果にあらずして、法律もまた其發生を欲せざりしものなるときは、これを不法行爲といふ。㊂[倫]意圖に基きたる行爲が道德的性質を帶ぶるもの、即ち、通常所謂德心を有するものゝ動作にして、其意體を以て爲されたるものなると、これを分つて內面・外面の二とす、內面とは動機より意志までをいひ、外面とは動作より結果までをいふ。



(かう・ゐ)[高位](名) たかき位。「きらひと。

(かう・ゐ)[好意](名) このむとにくむと。すきとにくみ。

(が・えい)[牙營](名) はんぎん。「本營」。

(が・えぶし)[敎燻](名) 「かいぶし」の訛。

(が・か)(名) ㊀はゝの幾稱。「阿母」。㊁つまの幾稱。「家婦」。

(が・か)[個個](名、副) ひとつ〳〵。

(が・か)[呵呵](名、副) わらふさまにいふ語。「どと。

(が・か)〳〵、げたゝ〳〵、げらゝ〳〵。

(が・か)[家家](名) あの〳〵のいへ〳〵。いへ〳〵。

(が・か)[佳佳](名) いとよきと。上等。

(が・か)[加賀](名) 「かゞぎぬ」の略言。「一一疋」。

(が・か)[蛾蛾](名、副) 山などのかど〳〵しくそびえたるさまにいふ語。

(か・か・あ)[嗚](名) つまの幾稱。(家婦)。——**んか**[嗚天下](名) 妻が夫よりも多く權力を持ち、一家を自由に支配すること。

(か・かい)[加階](名) 位階の加はりのぼること。

(か・かい)[河海](名) 河とうみと。——**はさいりうをえらばず**[河海不擇細流]大事業を成すものは、これがたよりとなるものは、瑣細なりともすてずしてこれを取るにいふ。——**ぎや**

(か・がい)[加害](名) 害をくはふること。

(か・がい)[加害者](名) 害をくはへたるもの。

かが・いも(名) [植]蓮摩科に屬する蔓草、山野に自生す、春末に宿根より芽を出す、葉は楕圓狀にして尖頭を有し對生す、夏の頃、紫色五瓣の小花を開く、根莖蕉いづれも、切れば一種の白き汁を出す。(蓮摩、何首烏)。

(か・がう)[歌稿](名) 歌の草稿。

(が・がう)[雅號](名) 文人・墨客などが、實名の外に附くる號。

カカオ[加加阿=Cacao](名) ㊀[植]梧桐科に屬する木、熱帶植物にして、「アメリカ及西「インド」等に產す、其因實胡瓜(ウリの)種の果實に仁を有す。㊁一種の飲料「カカオ」屬の仁を焙(ア)りて粉となしたるもの、通常ビスケットの如き形に製し、牛乳又は砂糖と共に、熱湯を加へて飲む。

かが・がさ[加賀笠](名) 加賀國の名產なるすげがさ、元祿・寶永の頃最も行はれたり。「はぶた(の)」の類。

かが・きぬ[加賀紬](名) 加賀國より產する絹布。

(か・かく)[家格](名) 家の格。いへがら。

(か・かく)[歌格](名) うたの一定の法格。

(か・かく)[價格](名) ㊀あたひ。ねだん。さうば。㊁[經]財物と財物との交換の比例、分つて有用價格と交換價格の二となす、通常價格と稱するは、交換價格をいふ。價値。

かか・ぐ[揭](他、か下二) ㊀高き所へさしあげ、「看板を—」。㊁表はし示す。㊂掲きたつ。「燈を—」。

(か・がく)[歌學](名) 和歌の學問。歌道。「—」(挑)。

(か・がく)[家學](名) 家に傳はる學問。實家の學。

(か・がく)[下學](名) 手近なる所より學ぶこと。又、程度ひくき學問。——**おやうたつ**[下學上達](名) 手近なる所より學びて、次第に深遠なる事理にすゝみゆくこと。又、單に、學べは自づとすゝみゆくこと。

(か・がく)[賀客](名) 祝賀のために來る客。「新年の—」。「異稱。

(が・かく)[雅客](名) ㊀風流なる人。㊁水仙花の

(が・がく)[雅樂](名) ㊀正しき音樂。みだちならざる音樂。㊁音樂の一種、支那又は三韓より傳へたるもあり、本邦にて創作したるもあり、共に和琴・太鼓・三管などをもて奏す。

(かかく・てき)[可覺的=Sensible](形) 吾人が感覺し得べきにいふ。

かかぐ・る[自、ら四] たより近づく。すがる。たよる。たどる。「かゝぐり行く」。

かがく・れう[雅樂寮](名) 「うたまひのつかさ」に同じ。

かかげ・の・はこ(名) 古昔用ひし髮道具を容るゝ「匣」(櫛笥)。

(かかける)[掲](他)「かゝぐ」の訛。

かか・さま[母樣](名) はゝの敬稱。

かか・さん[母樣](名) 前條に同じ。

(かか・さん)(名) 他人の妻の敬稱、又、母の敬稱。(京都地方の方言)。

かかし[案山子](名) ㊀竹・葦などにて人の形をつくり、弓矢などを持たせ、田畠の間に立て、鳥獸の害を防ぐし防ぐもの。そほど。やまだのそほづ。「草人」。㊁見かけばかりにて、無能なる人物をのゝしりていふ語。東京の俚語。

(かかし)[案山子](名) 前條に同じ。

(かが・しら)[蚊頭](名) 「かばり」に同じ。

かかぢ[酸漿](名) [植]「はゝづき」の古名。

かかづらひ[關](名) かゝづらふこと。

かか・づら・ふ[關](自、は四) ㊀たづさはる。かゝはる。あづかる。㊁拘泥す。なづむ。㊂秩序す。つかさどる。

かかと[踵](名) 足の裏の後部。くびす。きびす。

かか・ね・く[嚇](自、か四) 聲をいからしてはげしく鳴く。

かか・ねべて(副) 日日なべて、日を重ねて。

かが・の・むしみづ(自、ま四) 「かがむ」は飲む音。「をたゝいをぎ飲む。ぐい〳〵のむ。かのむ。

かかは[名] 銅布のぼろ。

かかは・る[係、關](自、ら四) ㊀これとそれとにわたる。互につながる。くわんけいす。㊁あづかる。たづさはる。かゝづらふ。㊂秩序す。つかさどる。㊃拘泥す。なづむ。「拘」。

かかは・わらうづ(名) かゝはをもてつくりたるわらぢ。

かが・ばんし[加賀半紙](名) 加賀國より出す半紙、色白くして質良し。

かがひ[耀歌](名) ㊀うたがき」に同じ。㊁ふなびとの謠ふ歌。漁歌。

かかふ(名) 「かゝはの訛。

かかふ・ふ[抱](他、は下二) ㊀雙腕にて支へ(持つ)かゝ。さゝ。㊁腕の中にかこひこむ。いだく。だく。㊂含み有(モ)つ。「たき物の香、かゝへたる」。㊃家臣又は召使とす。「乳母を—」。「よ。

(か・がふ)[下合](名) [天]「がふ」合の條を見

かか・ふ[抱](自、は四) 耀歌(カガ)をなす。男女かけあひにてうたふ。

かが・ぶし[加賀節](名) 德川時代の初年に、一時行はれし俗曲。

かかぶ・る[他、ら四] かうぶる。㊀やとひめしつかひ。——**い・る**[抱入](他、ら下二) ㊀いだきいる。かゝへこむ。㊁やとひ入る。めし使ふ。——**れび**[抱帶](名) ふどき。こしもび。——**ぐるま**[抱車](名) 車夫をかゝへて挽(ヒ)かする自家用の人力車。——**おやふ**[抱車夫](名) かゝへむきて、自用車をひかする車夫。

(かかへる)[抱](他)「かゝふ」の訛。

かが・ほほ[加賀頰](名) めんぼほの一種、加賀國より作りて出しゝもの。「ゐ。かゞむ。

かがま・る[屈](自、ら四) かゞむやうになる。

かが・み(名) [植]「かゞいも」の古名。

かが・み[鏡](名) 〈影見の義〉 ㊀もの、姿形をうつして見る器、びやくらふとからかねとを混じ、平面にして圓形なるものに作り、水銀を塗りて光を發せしめたるもの、今時は、多く硝子板の裏面に水銀を塗りたるものを用ふ。㊁滑かなる面にして、よく光線を反射するもの。㊂光りかゞやく圓形又は影をうつす平面。「月の—」。㊃[佛]戒又は模範の稱、いましめ、てほん。「世の人の—」。㊄[酒樽の蓋。——**いし**[鏡石](名) 表面透明にて、物の影のよくうつる類の石。かがみいは。——**いた**[鏡板](名) 芝居のだいぶんぼしらのある所、即ち、かゞみのま、又、其後に張り付けたる板。——**いは**[鏡石](名) 「かゞみいし」に同じ。——**いを**[鏡魚](名) [動]「かゞみだひ」に同じ。——**かけ**[鏡懸](名) 「かゞみたて」に同じ。——**ぐさ**[鏡草](名) ㊀古昔、正月元日禁中にて、かゞみもちのうへにゆきしだいこんの稱。はるのかゞみぐさ。「けふよりは、我れを、もちひの—」。㊁[植]「いちやくさうの一名。(白菖)。——**ど**[鏡子](名) ほゝづきの實。かがちのみ。——**さう**[鏡草](名) [植]「いちやくさう」に同じ。——**たい**[鏡奩](名) 「かゞみたて」に同じ。——**たて**[鏡立]

(名) かゞみを立てかくるためのわく又は臺。かゞみかけ。かゞみだい。きやうだい。(鏡架)。——だひ［鏡鯛］(名)【動】硬鰭類中まとだひ科に屬する魚。體は側扁にして短く高し、口は大にして吻端にあり、上顎は延長す。體色は蒼白にして體側の中央に錢又は的の如き黑色の大なる圓點あり、鱗は微小なり。體長一尺五六寸、肉は脂多く味美なり。——どき［鏡磨］(名) 金屬のかゞみのくもりを磨(ト)ぎなほすと。又、其人。かゞみいを。まとだひ。

［いだみがか］

——のま［鏡間］(名) 芝居のだいぶんばしらのある所。十——は［鏡葉］(名) 巾廣き柏の葉。——びらき［鏡開］(名) 昔時、武家にて、正月に男は具足に女は鏡臺に供へしかゞみもちを、其月の二十日に切りて食しゝと。——ブトン［鏡蒲團］(名) へりを取りたる蒲團、形鏡に似たればいふ。——もち［鏡餅］(名) 圓く扁(ヒラ)くこしらへ、神佛に供へ又は吉例のときなどに用ふる餅、形金屬の鏡に似たるよりいふ。

十かが・み・る［鑑］(他、ま上一) かんがみる。

かが・む［屈］(自、ま四) ㊀折れ曲がる。㊁えたがふ、へりくだる。「人に—」。

十かが・む［屈］(他、ま下二)「かゞます。」ふゞましむ。まぐ。

十かが・め・く［屈］(自、か四) 猿などなき叫ぶ。

〔かがめる［屈］(他)「かゞむ」の訛。

かが・もん［加賀紋］(名) 五色に彩(イロ)りたるうはゑの紋所、加賀の國人多く用ひしより名づく。

十かがやか・し［赫］(形、二) はづかし。めんぼくなし。おもはゆし。まばゆし。

かがやか・す［赫］(他、さ四) ㊀光を放つ。ひからす。㊁功名を揚ぐ。威勢を觀(シ)す。

かがや・く［赫］(自、か四) ㊀光輝發す。照りひかる。きらめく。ぴかぴかす。(耀、輝、燿)。㊁功名揚がる。威勢著はる。

十かか・ゆ［抱］(他、や下二) かゝふ。

十かがよ・ふ［赫］(自、は四) かゞやく。

〔かから・ふ (自、は四) かゝはる。

かかり［掛］(名) ㊀從事するると。㊁關係するると。㊂せむると。攻擊。「車—の陣」。㊃うけもち。(職分)。「出納—」。㊄つくりかた。かまへかた。㊅養はるゝと。厄介。「親—」。㊆いりかた。にふひ。㊇かゝりもの。賦稅。㊈着手の第一步。てがゝり。㊉蹴鞠の場の稱、東西南北の位置正しく方形に設け、東北の隅に柳を、東南隅に櫻を、西南の隅に紅葉を、西北の隅に松竹を植うるを古式とせり。けまりのば。⑪【文法】むすびに對し、其上に來るべき弖爾波(テニハ)「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の用法。

かかり［句］(名) つりばりの曲りたる末の部分、即ち、魚の口中につきとはるべき部分。(倒鉤)。

かか・り［斯有］(自、ら變)「かくあり」の約。

かがり［篝］(名) ㊀かゞりびを焚く鐵籠。㊁かゞりびの略言。㊂鎌倉時代に、京都及鎌倉の警衛として、其辻々に設備せし兵。「四十八所の—」。

かがり［膁］(名) かゞると。「俵の—」。

がかり［大鋸］(名) 最も大なるのこぎり。がんぎ。

かかり・あひ［掛合］(名) ㊀くわんけい。かゝはり。㊁まきぞへ。れんざ。れんるゐ。

かかり・あ・ふ［掛合］(自、は四) ㊀くわんけいす。あづかる。たづさはる。㊁まきぞへとなる。れんるゐとなる。

かかり・うど［掛人］(名) (掛人(カケリト)の音便) 人によりかゝりて養ひをうくる人。やしなはれびと。ゐさふらふ。食客。(寄食兒)。

かかり・ご［掛子］(名) ㊀人に養はるゝ子。㊁親の年老いて養はるゝ子。

かがり・び［篝火］(名) かゞりに焚(タ)く火。夜のけいご又はすなどりなどに用ふ。(燎火、庭火)。

かがり・ぶね［篝船］(名) かゞりを焚きて、すなどりする船。(燎船)。

かがり・まつ［篝松］(名) かゞりびに用ふる松の材。たいまつ。(炬松)。

かかり・まけ［掛負］(名) 利益より費用多きと。

かかり・もの［掛物］(名) ㊀眼のなかに出づるくもり。ひ。(障翳)。㊁かゝり。賦租。

十かがり・や［篝屋］(名) 古昔、觸所などのけいごの武士の屯(タム)せし所、夜はかゞりをたきしよりいふ。

かか・る［掛］(自、ら四) ㊀物に附着して垂下す。たる。さがる。ぶらさがる。㊁遁(ヨ)る。もたる。「椅子に—」。㊂たよる。たのむ。㊃其處に至る。「通り—」。㊄留まる。仕向けらる。「人手にかゝりて死ぬ」。㊅養はる。厄介になる。㊆かゝはる。あづかる。(係)。㊇心にとゞまる。忘られず。「氣に—」。㊈かうむる。かぶさる。「嶺は雲がかゝりて見えず」。㊉罹る。及ぶ。「とばしりが—」。⑪あふ。であふ。「病に—」。(罹)。⑫進み擊つ。攻む。「敵に—」。⑬碇泊す。いかりをおろす。⑭着手す。はじむ。「讀み—」。⑮費ゆ。いる。「金が—」「手が—」。

かが・る［膁］(他、ら四) うちゝがへに絲をかけて編み又は綴る。「鎧を—」。

かかれ・ば［斯有者］(接) かくあれば。

か・かん［假感］(=Ideal feeling)(名)【哲】美の所立の感情、實在體より遊離したる假相に關して生ずるもの、實在體に關して生ずる實感に對して假感といふ。實感の如く好惡愛憎を伴はずして、且つ把持力薄し、假感を感ずる能力なきものに對しては、美は存在せず。

〔がかん・せん［鵞眼錢］(名) 鵞鳥の目は丸くして、其瞳四角なるより、これに似たる錢の稱。(鳥目)。

〔がかん・ぼ (名)【動】「かのうば」の訛。

かき［柿］(名)【植】柿樹科に屬する木、葉は大形淡綠色にして、通常毛を帶びたる三分内外の葉柄を有す、五月頃、淡黃色の小花をひらく、果實は大形にして二寸内外の長さを有し、味甘く食用とすべし、變種多く、ごえよがき・やまとがき・こねりがき・にたりがき・えぶがき等あり。(柹、柿、赤實果)。㊁かき志ぶにて染めたる色。べにがらに少し黑を混じたる染色のかき志ぶに似たるもの。「—のころも」。

かき［垣］(名) ひとかまへの土地の圍ひに設けたるもの、多くは土・竹又は木などをもてつくる。

かき［牡蠣］(名)【動】鰓鰓類中單柱類に屬する軟體動物、介殼は不正にして葉狀をなす、多くは左殼を以て海中の岩石に附着す、中には許多集堆して、山の如き形をなし、其大なるは高さ一二丈に至るものあり、我國沿海淡水の注流する所には多少產せざるはなく、殊に砂泥土の海底に多し、產卵期は六七月頃にして其生長は一二年間最も強盛なり、人爲を以て此時間に適當なる方法を行へば發育頗る宜し、肉味美にして、廣島地方の產特に有名なり。(蠔)。

［きか］

(か・き［嫁期］(名) 女のよめに行く年頃。よめいりどき。

(か・き［夏氣］(名) 夏の氣候。あつさ。

(か・き［夏季］(名) 夏の時節。「—休業」。

かぎ［鉤］(名) ㊀かゞみ曲がりたるかね。㊁かゞみ曲がりたるもの。

かぎ［鍵］(名) ㊀錠の中にさしいれて、これを開くに用ふる具。(鑰)。㊁「ぬすびと」の一名、其錠前のあくる處をあくるものなればいふ。かぎのて。

(か・ぎ［歌妓］(名) うたひめ。げいしや。

(か・ぎ［嘉儀］(名) よろこびごと。(賀儀)。

(が・き［餓鬼］(名) ㊀うゑたる鬼。㊁【佛】「がきだう」の略言。㊂無緣の亡者。㊃子供の賤稱。(東京の方言)。

(が・き［牙旗］(名) 大將の居る處に樹(タ)つる大旗、古昔、支那にては、其上に象の牙(キバ)にてつくりたる飾りをつけしよりいふ。

(が・き［賀儀］(名) よろこび事。(嘉儀)。

かき・あ・ぐ［搔揚］(他、か下二) かゝげあぐ。

かき・あ・ぐ［書上］(他、か下二) ㊀記載して奉る。㊁書き終はる。

かき・あげ［書上］(名) ㊀書きて目上の人に奉ると。又、其奉る書きもの。㊁書き終はり。

かき・あげ［搔揚］(名) ㊀「かきあげ志ろ」の略言。㊁天麩羅(テンプラ)の一種、生玉子と饂飩(ウドン)の粉とを攪(カ)き合はせ、これをころもとしてあぶらに揚げたるもの。——志ろ［搔揚城］(名) 壕(ホリ)のみ掘りて水未だ通ぜず、半ば出來せる城壘の稱。(堡障)。

〔かきあげる (他)「かきあぐ」の訛。

かき・あつ・む［搔集］(他、ま下二) 取りよせてひとつにす。

かき・あつ・む［書集］(他、ま下二) あつめて編輯す。(蒐集)。

かき・あつめ (名) かきあつむると。又かきあつめたるもの。

〔かきあつめる (他)「かきあつむ」の訛。

かき・あは・す［搔合］(他、さ下二) 手にて寄せ合はす。

〔かきあはせる［搔合］(他)「かきあはす」の訛。

かき・い・る［書入］(他、ら下二) ㊀書き加ふ。記入す。㊁抵當として記入す。「邸を—」。

かき・いれ［書入］(名) ㊀書き加ふると。記入。㊁ひきあて。抵當。

〔かき・いれ［搔入］(名) 豫期したるまうけ。——どき［搔入時］(名) 搔入の時期。

〔かきいれる (他)「かきいる」の訛。

かき・いろ［柹色］(名) 柹㊁に同じ。——がみ［柹色紙］(名) 柹色の紙、伊豆國修善寺近傍の產。

かき・おき［書置］(名) ㊀人を訪(オト)れて其人不在なるとき用事の程を書き遺すと。又、其書き遺したるもの。おきてがみ。㊁所存又は要件を死後に書き遺すと。又、其書き遺したるもの。のこしぶみ。

かき・お・く［書置］(他、か四) 書きおきをなす。書きのこす。「—あとを、かたみとも見よ」。

かき・おくり［搔送］(名) 櫓(ロ)もて櫂(コ)ぐと。又、其船。おしおくりの對。

かき・おく・る［書贈］(他、ら四) 其物事を書きて人におくる。

かき・おく・る［搔送］(他、ら四) 櫓(ロ)を用ひて船をやる。

かき・おとし［書落］(名) 書くべき文字などを書きぬかすと。又、書き落としたる文字。

かき・おと・す［書落］(他、さ四) 書き誤りて

文字などをぬかす。
++かき・かぞ・ふ [播數](他、は下二) かぞふ。「手を折りて、ーれば」。
かき・がく・かう [夏期學校] = Summer school (名) 多くは夏期の休暇などを利用して、其間だけ或學科を教授するために設立したる學校。
かき・がね [掛金](名) 戸のさしかためにに用ふる鐵金物。かけがね。きすがね。(鎖)。
かき・がら [牡蠣殼](名) 牡蠣のかひがら。(蠣殼)。
—ばひ [牡蠣殼灰](名) かきがらを燒きて製したる石灰。かきばひ。かひいしばひ。(蠣殼灰)。
—やね [牡蠣殼屋根](名) かきがらを敷せたる屋根。蠣殼屋根。
++かき・きら・す [播曇](自、さ四) かきくもる。
かき・き・る [播切](他、ら四) ㊀きる。「敵の首をー」。㊁刀の刃を己れの方へ向けて物を切る。
かぎ・ぐすり [嗅藥](名) 嗅ぎて用ふる藥。(嗅藥)。
かき・くだ・す [書下](他、さ四) 下へ順を追ひて書きゆく。「其文字」
かき・くは・ふ [書加](他、は下二) あとより文句を補ひ足して書く。
かき・くは・へ [書加](名) かきくはふると。
かき・くも・る [播曇](自、ら四) くもるの意を稍々強めたる語。「ー雪氣の空を」。(播陰)。
かき・くら・す [播暗](他、さ四) くらすの意を稍々強めたる語。
かき・くら・む [播暗](自、ま四) くらむの意を稍々強めたる語。
かき・く・る [播暮](自、ら下二) くるの意を稍々強めたる語。「長月の空かきくれて」。
かき・け・す [播消](他、さ四) 消すの意を強めたる語。「ーやうに失せにけり」。
かき・ごし [垣越](名) 垣の上を越ゆると。又、垣を隔て、ものするを。「ーにものをいふ」。
かき・こみ [書込](名) 書き入る、と。又、書き入れたる文字。(傍註)。
かき・こ・む [書込](他、ま四) 書き入る。
かき・こ・む [播込](他、ま四) 己れの方へ播き入る。己れの方へ播きあつむ。
かぎ・こ・む [嗅込](他、ま四) ㊀鼻にかぎいる。㊁かぎつく。
かき・こも・る [播籠](自、ら四) 「こもる」に同じ。「むくの竹、ーとも」。
かぎ・ざき [鉤裂](名) 着物などを、釘などにかけてかぎなりに裂(サ)くと。又、其さけめ。
かき・さぐ・る [播探](他、ら四) 「さぐる」に同じ。
かき・さ・す [書止](他、さ四) 書きかけてやむ。
かき・しぶ [柿澁](名) えぶがきより取りたる液、紙・扉・木などに塗りて、其朽腐を防ぐ。(柿油)。
かき・す・う [舁据](他、わ下二) 舁(カ)きてすゑおく。
〔かきすゑる [舁据](他) 「かきすう」の訛。
かき・そこなひ [書損](名) かきそこなふと。又、其かき物。しよそん。
かき・そこな・ふ [書損](他、は四) かきやうをあやまる。
かき・そ・ふ [書添](他、は下二) かきくはふ。
かき・そへ [書添](名) かきくはへ。
かき・ぞめ [書初](名) 新年に始めて文字を書くと。又其書きもの。(試筆)。
かき・だ [牡蠣田](名) 海中に竹などを立て、垣根を結び、牡蠣(カキ)を養殖する所。
(がき・だう [餓鬼道](名) 【佛】六道又は六趣の一、所住するもの福德あれば、山林塚廟の神となり得れど、然らざれば、不淨處に居り飲食を得ず、常に鞭打を受けて苦惱無量なりといふ。
かき・たし [書足](名) 文書の不完全なる箇處を補ひかくと。又、其文句。
かき・だし [書出](名) ㊀書き出すと。かきはじめ。㊁書きはじめのもの。ふでがしら。冒頭。㊂賣りたる品の値を記したるもの。かきつけ。勘定書。
かき・た・す [書足](他、さ四) かきたしをなす。
かき・だ・す [書出](他、さ四) ㊀書きて差出す。㊁書きはじむ。
かき・だ・す [播出](他、さ四) 物をかきて前へ出だす。
かぎ・だ・す [嗅出](他、さ四) ㊀鼻にてかぎて知る。㊁見當を付けて探り知る。
かき・た・つ [播立](他、た下二) ㊀燈火などを搔(カ)きおこしてあかるくす。(挑立)。㊁かき混ず。はだつ。
かき・た・つ [書立](他、た下二) とりあげて書きならぶ。「ーれば、罪ばかり」。
〔かき・だつ (名) おや船のまどの稱。
かき・たて [書立](名) 書きたつると。きはだゝせて書くと。
〔かきたて・ぎ [播立木](名) 「とうえんぬきへ」の一名。
〔かきたて・ぼう [播立棒](名) 「とうえんぬさへ」の一名。
〔かきたてる (他) 「かきたつ」の訛。
かぎ・タバコ [嗅烟草](名) 煙を吸はず火を付けず、只鼻にて其香を嗅ぐための粉烟草。
++かき・た・る [播低](自、ら下二) 雨雪などふりいでんとして空くもる。

かき・ちらし [書散](名) 書きちらすと。又、書きちらしたるもの。
かき・ちら・す [書散](他、さ四) ㊀筆にまかせて書く。㊁譯(ワケ)もなく書きつく。
かき・ちん [書賃](名) 書きものしたる賃錢。書きたる勞力の報酬。
++かき・つ [垣內](名) 垣のなか。
かき・づき [柿餻](名) 一種の食品、餅米を洗ひ、其中にほしがきを入れ一緒に蒸して、これを餅につきあげたるもの。
かき・つ・く [書付](他、か下二) しるしおく。記錄す。
〔かぎ・つ・く [嗅付](他、か下二) ㊀嗅ぎて考へあつ。㊁探(サグ)しあつ。
かき・つく・す [書盡](他、さ四) 殘る所なく書く。思ふ存分に書く。
かき・つけ [書付](名) 書き付けたる文書。
〔かきつける [書付](他) 「かきつく」の訛。
〔かぎつける [嗅付](他) 「かぎつく」の訛。
かき・つ・ばた [燕子花](名) (垣之端の義といふ) 【植】鳶尾(イチハツ)科に屬する植物、莖は中肋脈を有せず、花は初夏に開き、種々の色あれど通常紫色なるもの多し、花蓋の內層の片は、通常細長くして鋭頭を有す。かほばな。ふでばな。(紫羅蘭、劇草)。
かき・つ・む [書詰](他、ま下二) ㊀餘白なく記す。㊁たえまなく書き記す。
++かき・つ・む [播集](他、ま下二) 播きあつむ。「よきのはねがき、かきつめて」。
〔かきつめる (他) 「かきつむ」の訛。
かき・て [書手](名) ㊀書又は畫を書く人又は書きたる人。筆者。㊁書又は畫をよくかく人。めいひつ。能書。
かき・どほし [垣通](名) 【植】葡萄科に屬する蔓草、陰濕の地に生ず、莖は四角形をなす、葉は腎臟形にして通常五個の小葉より成り、色は深綠にして香氣強し、花は紫色にして四裂せる帶赤色の瓣を有す、藥用に供せらる。(積雪草)。
かき・と・む [書留](他、ま下二) しるし置く。
かき・とめ [書留](名) ㊀しるして後にのこしおく書きもの。㊁「かきとめいうびん」の略言。
—いうびん [書留郵便](名) 郵便物の送達を確(タシ)かにするための手續、一定の手數料を拂へば、其取扱をなしたる郵便局所が、備へ付けの帳簿に、其郵便物の種類・番號及發送人と受取人との住所・姓名をかきとめおき、紛失若しくは誤送ありたるときは、其とりしらべをなす。
〔かきとめる (他) 「かきとむ」の訛。
かき・ともし [播燈](名) 「かいともし」に同じ。
かき・とり [書取](名) ㊀書きうつすと。又、其書きうつしたるもの。㊁教師の朗讀する語句又は文章などを生徒の書き取ると。
かき・と・る [書取](他、ら四) 言語又は文字を書きてうつしとる。
かき・ながし [書流](名) かきながすと。又、かきながしたるもの。
かき・なが・す [書流](他、さ四) 筆の運びをゆるめずして書く。又、思ふまゝにさら〳〵と書く。
かき・な・す [書成](他、さ四) 書きて其さまになす。かきうつす。
++かき・な・す [播鳴](他、さ四) かきならす。「ー箏のね」。
かき・なほし [書直](名) かきなほすと。又、其物。
かき・なほ・す [書直](他、さ四) 前に書きたるものをすておき、改めて書く。
かき・なら・す [播鳴](他、さ四) 箏などを爪にて彈ず。
かき・にく・し [書難](形、二) 書くになやまし。
かき・ぬき [書拔](名) ㊀書きぬくと。又、其書きぬきたるもの。ぬきがき。ばっすゐ。(抄書、拔萃)。㊁芝居にて其役々のもの、せりふ及口上を、臺帳よりかきわけたるもの。
かき・ぬ・く [書拔](他、か四) 文章の一部又は要領を寫しとる。ばっすゐす。ぬきがきす。
かき・ね [垣根](名) ㊀垣のもと。㊁單に、垣。(墻)。
—ぐさ [垣根草](名) 垣根に生ずる草。
かぎ・の・て [鉤手](名) ㊀かぎの形にまがりたるもの。㊁ぬすみする性癖あるもの。
〔かぎ・のめし (名) なぐりがき。
〔かき・のめ・す (他、さ四) なぐりがきに書く。
++かき・は [堅磐](名) 堅固なる岩。(永久にと祝ふときに用ふる語)「ときはに、ーに」。
++かきはき・の・こだち [播佩小太刀](名) つねに腰に帶ぶる小さきかたな。
かぎ・ばこ [鍵箱](名) 多くのかぎをさめおく箱。
かき・はじ・む [書初](他、ま下二) かくとにとりかゝる。かきいだす。
かき・はじめ [書初](名) かきはじむると。又、かきたるもの、はじめ。
かぎ・ばな [鉤鼻](名) 端曲りて鷲の嘴の如くなりたる鼻。
かき・ばひ [牡蠣灰](名) 牡蠣(カキ)の殼を燒きてつくりたる石灰。かきがらばひ。いしばひ。
かき・はん [書判](名) 規則だちたる文書の自名の下に、自筆にて一定の字形に書きたる判。多くは實名の字を種々にくずして、判の如くに書く、又、

其字形に、ゑ。さうめい。くわあふ。(花押)。

かき-びたし[柿浸](名) 酒にひたしたる干柿。

かき-びん[掻鬢](名) 德川時代の初め、前髮だちの若年の者が結びし髮の鳳、耳の上より前髮の際(ぎは)まで、一緒にかきあげて束ねたるもの。

(**かー-きふ**)[下級](名) 級位の下なること。「一官廳」。

++**かき-ふ-す**[掻臥]〔他、さ下二〕 だきながら寢ねしむ。

++**かき-ほ**[垣穂](名) かきのすゑ。「一にゐふるダ」。

かき-ま-ぜる[掻雜]〔他〕「かきまぜる」の訛。

かき-まは-す[掻廻]〔他、さ四〕 ㊀自由にあつかふ。㊁かきまぜる。

++**かき-み**[垣間見](名) 「かいまみ」の古言。

かき-みだ-す[掻亂]〔他、さ四〕 まぜ亂す。「る」。

かき-めし[牡蠣飯](名) 牡蠣を入れ、味をつけて炊(か)ぎたる飯。

++**かき-も**[垣面](名) 垣のおもて。

かき-もち[缺餅](名) ㊀正月の具足餅を、うちくだきて編くるもの。㊁餅を薄く切り乾して貯へおき、火にあぶりて食ふもの。(ぎもち。けづりもち。(乾餅。鳴牙餅。

かき-もの[書物](名) ㊀文字などを書くこと。「一して居る」。㊁書きまるしたる文。かきつけ。(文書。

かき-もん[書紋](名) 衣服の紋所を筆にてかきたるもの。めひもん又はそめもんの對。

(**かー-きやう**)[佳境](名) 快く思はるゝこと。快く感ずる場合。「一に入る」。

(**かー-きやう**)[家鄉](名) ふるさと。こきやう。

(**かきやう-へんかく**)[加行變格](名)〔文法〕不規則動詞の一。「こ」を「來」といふ動詞のみに限る。

かき-やく[書役](名) 文書の草案をつくり又は筆寫をなす人。ものかき。ゑよき。(書記)。「たげ」。

(**かー-きやく**)[荷擔](名) いぢめくるしむること。ゑ〈。

かき-やく-はんれう[可逆反應](名)〔化〕離すれば分解し冷せば再びもとの化合物となるが如く、狀況を異にするとき正反對の反應を呈すること。例せば、豐化「アンモニウム」と豐化水素とに分るれど、其分れたる「アンモニウム」と□化水素とを冷却すれば、再びもとの豐化「アンモニウム」となるが如し。

かき-やみ[戯鬼病](名) うゑに迫りたること。

かき-やり[鉤槍](名) 槍の一種、穂のもとにかぎを付けたるもの、其かぎにて、敵の槍をからみてまき落とすに用ふ。(鎖鎌槍)。

(**かー-きよ**)[河魚](名) かはざかな。かはうを。——。

の-やまひ[河魚疾](名)〔左傳に出ヅ〕はらの-やまひ。ふくつう。(腹痛)。

(**かー-きよく**)[歌曲](名) ㊀うたひもの、曲譜。㊁うた。又、うたのふし。

かぎり[限](名) ㊀きは。さかひ。けいかい。㊁あひだ。うち。ほど。㊂きはみ。はて。きよくど。㊃それ以外に及ぼさゞると。「其場—」。

—**かぎり**[限](接尾) 極度まで。あるたけ。「力—」。「腕—」。「つゞく—」。

かぎ-る[限](他、ら四) ㊀かぎりをなす。さかひをなす。㊁〔だつ。さへぎる。ゑきる。㊂其物又は其人に如(し)くものあらず。「あの人に—」。㊃特に其物事を指すといふ語。「其日にかぎりて外出せぬ」。

++**かき-ろひ**[陽炎](名) かげろふ。いとゆふ。——**の**(枕) 「はる」「もゆる」「はのかち」「ひ」「いは」に冠らする詞。

かき-わ-く[掻分](他、か下二) わけひらく。わく。

かき-ゑ[描畫](名) 筆にて描寫せる繪畫。すりものの繪の對。「ひる等の類」。

(**かー-きん**)[家禽](名) 家に畜(ヤシ)ふ鳥の總稱。鷄。あ

(**かー-きん**)[瑕瑾](名) ㊀きず。いたみ。やぶれ。㊁はぢ。なをれ。ぶぢよく。㊂其人の短所。㊃不完全なる箇處。(闕點)。

(**かく**)[角](名) ㊀つの。「牛—」「鹿—」。㊁えかく。方形。「一あんどん」。㊂四角なる材木。「五寸—」。㊃すみ。かど。㊄〔歌〕相會する二直線のなす形。かくど。㊅〔天〕二十八宿の一。すぼし。㊆獨のかどにて、鳥の脇腹を圓(ケ)りて進めやるもの。㊇五音の一。東方に屬するもの。㊈射的の的にある四角形のもの。

(**かく**)[格](名) ㊀のり。きそく。法式。法例。㊁くらゐ。みぶん。ぶんざい。「家—」。㊂古昔、代々の天皇が、律令を執行するために時勢に應じて臨時に發せられたる命令。きやく。「三代—」。㊃〔文法〕文章中に於て名詞が他の語に對する關係。即ち、主格・賓格・目的格などの類。㊄たな。皮架。㊅くひ。杙樁。

(**かく**)[閣](名) ㊀樓觀又は官殿。たかどの。どてん。㊁皮藏又は庖廚。ものおき。くりや。㊂禮拜又は極道はしがゝり。かけはし。㊃內閣の略言。「一臣」。

(**かく**)[額](名) かず。員數。「金—」。

(**かく**)[膈](名) 食道に癌を發して、飲食の通過を害する疾。疾癌。食道癌。噎膈。

(**かく**)[核](名) ㊀〔植〕果實の中果皮の中にある硬くして石の如きもの。即ち、內果皮の硬化して內部の種子を保護するもの。さね。㊁原形質即ち細胞の中身にある小體。

(**かく**)[客](名) 「きやく」に同じ。

(**かー-く**)[佳句](名) よき文句。

(**かく**)[各](副) おのく。それ〴〵。

(**かく**)—[客](接頭) むかし。過去。「一年」「一月」。

(**かく**)—[隔](接頭) 一つおき。間おき。

かー-く[掻](他、か四) ㊀手にてゐじやる。「水をかきて泳ぐ」。㊁彈ず。ひく。「琴をかきならす」。㊂ぬぐひ去る。はらひ去る。㊃かきおこす。「鼎首を—」。㊄〔かうむる。受く。「はぢを—」。

かー-く[書](他、か四) ㊀文字を表はし又は畫をえがく。㊁文に作る。書に述ぶ。又、畫に畫(エ)く。

かー-く[舁](他、か四) ㊀二人以上にてかゝへもつ。(舁)。

かー-く[構](他、か四) くみつくる。かまへ。「ぐ」。

かー-く[繫](他、か四) かけとゞむ。かけつなぐ。

かー-く[鈎](他、か四) ㊀すくなくす。へらす。ふそくせしむ。㊁損ず。こはす。そこなふ。㊂ゐとすぬかす。もらす。㊃時間をつひやす。勤務をゐこたる。㊄組織を網めず。のがる。「組を—」。(逃)。

かー-く[缺](自、か下二) ㊀不足となる。すくなくなる。へる。㊁損じこはる。そこなはる。㊂ぬかる。もる。㊃時間つひや。勤務ゐそかになる。㊄月影が滿月より漸次小さくなる。(虧)。

かー-く[掛](他、か下二) ㊀一端を物に附着して下(サ)で。さゞ。㊁これとかれとにわたす。(架)。㊂よせもたす。よせかく。㊃〔關係をなす。行來かけて。㊄そゝぎかく。ふりかく。はなつ。「水を—」「火を—」。㊅あぐ。かゝげ。「顏を—」。㊆及ぼす。被らしむ。「惰を—」。㊇費やす。用ふ。「時間をかけて」。㊈所願をなす。迫る。「攻撃を—」。㊉仕向けをなす。「謎を—」。㊊始む。「書き—」。㊋錠をおろす。㊌試みる。「船を泊む」。㊍「船をかけて風を待つ」。㊎〔案ず。思ふ。「氣に—」。㊏秤(カ)にて量を試みる。㊐〔歎く。だます。㊑〔日掛け月掛けの錢を出す。

かく[斯](副) 上文の意を受けて、下につゞくに用ふる語。かやうに。「しつゝ、とにも—にも、ながら〈て」。(如此)。

(**かー-ぐ**)[家具](名) 家の道具。(家什)。「は移らず」。

(**かー-ぐ**)[下愚](名) 甚だもろかなること。「上智と—と」。

かー-ぐ[嗅](他、か四) 物質が瓦斯體となり、鼻粘膜に分布する嗅神經を刺戟して、一種の感覺を起す。㊁にほひを聞く。にほひを分別す。㊂物をさぐり知る。「長氣を—」「樣子を—」。

(**がく**)[額](名) ㊀ひたひ。㊁がくぎん」の略言。㊂紙・帛又は板などに、文字又は繪畫などをえがして、門又はなげしなどに、高くかくるもの。「掛—」。㊃〔額〕「がくさう」の略言。㊄員數又は分量。たか。

(**がく**)[樂](名) 樂器により、調子よき音を發して、人心をたのしましむるもの、總稱。

(**がく**)[學](名) ㊀教をうくること。まなぶと。「はやく—に志す」。㊁まなぶべき道理又はまなぶべき法則。「—を修む」。㊂或物形に就きて經括をなし統系をたてたる智識の團體。「哲—」「科—」。㊃がくかう」に同じ。「大—」「中—」。

(**がく**)[顎](名) 動物の口の近傍にある器官の一、食餌をとるためのもの。人類のは上顎骨一對と下顎骨一枚とより成る。(顎)。

(**がく**)[蕚](名) 〔植〕花の保護機關の一、花冠の外部にあり、通常綠色にして數個輪生し其一を萼片と稱す。植物により其形狀種々にして或はこれを缺くものもあり。はなぶさ。

がく-あぢさゐ[額紫陽花](名) 〔植〕あぢさゐの一種。其花周圍の外に向ひたる方より開き初むるもの。がくさう。はつせんくわ。

(**がく-い**)[隔意](名) こゝろおかれて、うちとけぬこと。「こてのかれて、うちとけぬ」。

がく-いた[額板](名) ㊀がくめんの板。㊁鎖の

(**がく-ぐ**)[架空](名) 根據なきこと。「一の論」。

がく-うら[額裏](名) ㊀面のうら。㊁衣服の裏。

がく-うんぞう[角運動](名) 〔理〕「くわいてん」に同じ。

かく-えり[角襟](名) 「はうりやう」「方領」に同じ。

(**がく-れん**)[樂音](名) 〔理〕規則正しき音波により、聽官に愉快なる感を與ふる音。

(**かく-か**)[閣下](名) おそば。もてもと。(身分高き人に用ふ。「相公の—に白す」。

(**かく-か**)[閣下](代) 身分高き人の尊稱。

(**かく-が**)[客我](名) 〔哲〕吾人が自己に關して考察するときの對象、即ち、客觀的に見たる自己。

(**かく-かう**)[角行](名) 將棋のこまの名。遠近自由に斜行することを得、又、なりては更に一重づゝ前後左右に動くことを得るもの。

(**がく-かう**)[學校](名) 學問を教授する處。「大—」「專門—」「法律—」。——**い**[學校醫](名) 囑託を受けて其學校の衛生事務に與(アヅ)る醫士。——**くみあひ**[學校組合](名) 或學校を設立維持のために設置する町村其他公共團體の

組合。——せいくわつ［學校生活］（名）學校にありて學問修業に身を委ぬること。——ゑいせい［學校衛生］（名）學校の教員職員等に生徒の健康の保護增進を圖ること。

（かく・かく［赫赫］（名）㊀きらめくさま又はあきらかなるさまにいふ語。㊁景氣甚しきさまにいふ語。㊂威光かがやくさまにいふ語。

かく・かく［斯斯］（副）かやう〳〵。さかん。

（がく・がく［謦謦］（名、副）率直にして、主君に對して節を曲げざるさまにいふ語。「一の臣」。

（かく・がん［擱岩］（名）船舶が岩にのりかゝること。

（かく・きカク［客氣］（名）血氣に任ずる勇、一時のはやり氣。

（かく・ぎ［閣議］（名）內閣の會議即ち國務大臣の會議、我國現今の制にては、會議の場所は一定せず、陛下の御前又は議會の一室又は總理大臣の官邸等に於てす、法律案・豫算決算案・外國條約及重要なる國際條件、官制又は法律規則の施行に關する勅令、各省間の主管權限の爭議、天皇より下付せられ又は帝國議會より送致せる請願、豫算外の支出、勅任官及地方官の任命及進退、其他各省主任の重大なる行政事務等は必ず閣議を經べきものと定められ、此會議は多數決にあらず全會一致にして、一人にても不同意あるときは成立せざるものとす。

（がく・きガク［樂器］（名）音樂を奏する器械、たいこ・ふえ・せう・ひちりき・かね・かっこ等の類。

（がく・きカク［學期］（名）一學年のうちの小區分。

（がく・きふガク［學級］（名）同時同所に於て、同一の教授を受くる生徒の一團。

（がく・きよ［鰐魚］（名）【動】爬蟲類に屬する動物、體はとかげに似たれど遙かに長く強大にして硬き甲鱗を被る、尾は側扁にして水中進行の用をなす、鋭齒ありて顎骨に嵌入す、四肢は短けれど跳躍に誤ありて游泳に適す、性兇暴にして、概ね熱帶地方の大河沼澤に棲息し、長さ丈餘に達するものあり、往々人畜を襲ふ。わに。「鰐」。

（かく・きより［角距離］（名）【理】觀測者より二物體に至る二直線のなす角度。

（かく・きり［角切］（名）四角形に物を切ること。

（かく・きん［額銀］（名）德川時代の銀貨の一、形額面に似たればいふ。がくばん。五匁銀。

（かく・くわカク［核果］（名）【植】中果皮は多肉にして、內果皮は硬化し核をなす果實、即ち、梅桃の果實の如きこれなり。

（がく・くわガク［學科］（名）教授上若しくは研究上より、規定し區別しある學問の科目。

（かく・くわい［客懷］（名）他鄉にありての情思。たびのもの思ひ。「一起し」。

（かく・ぐわい［格外］（名、副）普通にはづれたるさまにいふ語。「一よろし」。

（がく・くわいガク［學會］（名）或學問を研究するために設立したる會合。

かくくわ・の・たん［隔靴歎］（名）發ッを隔てゝ搔カクくが如く、思ふやうに手のとゞかぬこと。

（かく・くわんカク［客觀］＝Object］（名）自己以外の他物又は意識の目的物、即ち、主たるものゝ對象にして、自己又は意識に觀察せらるゝ一切の外物。——てき［客觀的］＝Objective］（形）或物事を自己又は意識の對象として觀察するにいふ。

（かく・けカク［脚氣］（名）風土病の一種、多くは脚に水腫を起す、急性なるは衝心して忽ちに生命を奪ふ。あしのけ。かくびやう。

（かく・げつ［客月］（名）あとげつ。（去月）。

（かく・げつ［隔月］（名）ひとつきぬき。

（がく・げふガク［學業］（名）學びのわざ。學問。

（かく・げん［格言］（名）法とすべき調。妙理を發揮したる言。「古人の一」。（金言）。

（かく・こ［客語］（名）【文法】命題の中にて、一般の事を言ひ表はしたる語。例せば「鷲は鳥なり」といふ命題にては、鳥は客語なり。主語の對。

（かく・こ［覺悟］（名）㊀事物の道理をさとること。さとり。㊁前より心に待ちまうくること。こゝろがまへ。ようぶん。——のまへ［覺悟前］かねて覺悟してあること。「くに、世界—」。

（かく・こくカク［各國］（名）くに〳〵。あの〳〵の

（がく・こつガク［顎骨］（名）あごのほねの總にして、人類のは、下顎骨一對と上顎骨一枚とより成る、上顎骨は顏面の中央にありて、不齊の方形をなして、不動關節なり、下顎骨は諸鈍狀にして顳顬骨と可動關節をなす。

（かく・こん［恪勤］（名）おこたらず勤むること。

（かく・さい［客歲］（名）きよねん。昨年。

（かく・さい［隔歲］（名）一年おき。「間歲」。

（がく・さい［學才］（名）學問の才能。「なびのまど。「一あり」。

（がく・さうガク［學窓］（名）學問を修業する處。まど。

（がく・さうガク［顎草］（名）【植】（い）「がくあぢさゐ」に同じ。（ろ）「あきなぐさ」の一名。「美濃の方言」。

＋かくさ・ふカク［隱］（他、ヘ四）「かくす」の延言。「書の一べしや」。

かくし［隱］（名）㊀かくすこと。㊁着物に縫ひつけある一種のふくろ、中に細かなる持物などを入るる「ポッケット」。

（かく・しカク［客思］（名）たびのもひ。かくくわい。

（かく・しカク［角字］（名）㊀ゑんゑよ。梧書。㊁はんぶ。匡字。㊂ふるしばんてんなどの紋所。又、模樣に用ふる一種の書體。

（かく・しカク［各自］（名、代）おの〳〵。めい〳〵。

（がく・しガク［學士］（名）㊀すべての學者の稱。㊁現今の制にては、大學本科規程の學問修業を終へたるものゝ稱號。「理」、「工」。

（がく・しガク［學資］（名）學問の修業に要する費用。

（がく・しガク［樂師］（名）音樂をつかさどる人。

（がく・しガク［學事］（名）學問に關する事柄。

かくし・うら［隱裏］（名）外面より見えぬやうにつけたる衣服のうら。

（がく・しがうガク［學士號］（名）學士のとなへ。

（かく・しきカク［格式］（名）㊀身分其他に關する所定の儀式。（制度）。㊁格と式と。「三代—」。

（がく・しきガク［學識］（名）㊀學問と識見と。㊁學問上の識見又は學問より得來りたる識見。「れふだ。

＋かくし・きしやうヨウ［隱起請］（名）にふさつ。い

（がくしきん［學資金］（名）「がくし」に同じ。

かくし・げい［隱藝］（名）人に知らせず覺え得たる遊藝。「まわざ。

かくし・ごと［隱事］（名）他に知らせずしてなすもの、みに知らするための符牒の言語。（秘密語）。

かくし・ことば［隱語］（名）人に知られず味方の

かくし・せい［隱勢］（名）ふせい。ふくへい。

かくし・だ［隱田］（名）租稅をのがれんために、官に隱せる田地。「こもむと。又、其題。

かくし・だい［隱題］（名）題の名を歌の中によみ

かくし・だて［隱立］（名）他人に對して、事を知らしめざるやうにつゝみかくすこと。

（かく・しつカク［確執］（名）㊀かたく自說を主張して曲げざること。㊁雙方のあひだ不和になること。

（かく・しつ［隔日］（名）一日づゝをへだつること。いちにちおき。（間日）。

（かく・じつ［確實］（名）まちがひなきこと。矛盾（ムジン）なきこと。危險なきこと。たしかなること。

かくし・づま［密夫］（名）まをとこ。まぶ。

かくし・づま［密妻］（名）かくしめ。かこひもの。

かくし・どころ［隱所］（名）男女の陰部。

かくし・ね［隱名］（名）いつはりの姓名。

かくし・ぬひイ［隱縫］（名）外面に出でざるやうにぬふこと。

かくし・ばいちよ［隱賣女］（名）密賣淫婦。ぎごく。

（がく・ばふ・ゐんガク［學習院］（名）天皇陛下の聖旨に基き、華族の子女に、華族的教育を施す所、又、華族にあらざるものなりとも、教育の都合によりては、入學を許さる、宮內大臣の監督を受け、院長これを總理す。男子部・女子部あり。「くれる蔵。

かくし・まと［隱窓］（名）外より見えぬやうにつ

かくし・むすび［隱結］（名）絲又は紐の類を、外より見えぬやうに結ぶこと。

かくし・め［隱女］（名）かくしづま。（外妾）。

かくし・めつけ［隱目附］（名）志のびて事情を探偵する管吏。（隱密）。

（かく・ぢや［客舍］（名）たびのやど。はたごや。

（かく・ぢや［客車］（名）旅客運送用の列車。

（がく・ぢや［學者］（名）學事に通達せる人。學問に長じたる人。「心」。

（かく・ぢやうヨウ［客情］（名）旅行中の感情。（客心）。

＋（がく・ぢやうヨウ［學生］（名）學ぶ人。がくせい。

（かく・ぢやうヨウ・たいぶんショウ［各省大臣］（名）內閣の次班にありて、行政事務の分配を擔任し其責任を負ふ單獨官府、其擔任事務に就きて省令を發し、下級の官府に對して、訓令及監督の權を有す、次官以下の行政官吏はすべて其補助なり。

（かく・ぢゆ［鶴首］（名）㊀ながあたま。㊁首をのばして、物事の到來を待ちわぶること。

（がく・ぢゆつ［學術］（名）㊀學問と技術と。㊁學問の方法。——と［學術語］（名）學問の研究上特に使用する語。

＋がく・ぢよ［樂所］（名）古昔、音樂をつかさどり

（かく・ぢより［確證］（名）たしかなる證據。「し所。

（がく・ぢよく［學殖］（名）學問の素養。

かくし・ゑ［隱繪］（名）うち見ては、さもなけれど、よく見れば、尙は他の形の隱しかきてある畫。

かくし・をとこ［隱男］（名）まぶ。（密夫）。

（かく・ぢん［客心］（名）旅行中などの心情。（客情）。

（かく・ぢん［確信］（名）かたく信じて疑はざること。又、動かざる信仰。「向ふと。

（かく・ぢん［革進］（名）舊態をあらため進歩の域に

（かく・ぢん［隔心］（名）うちとけずして〳〵だてあること。

（かく・ぢん［閣臣］（名）國務大臣の稱。「なると。

かく・すすせ［隱］（他、さ四）㊀見えぬやうにす。知れぬやうにす。ひむ。㊁知れぬやうにして所持す。㊂ゐはふ。㊃譯（イ）みていはず。私して說かず。㊄埋葬す。はうむる。「そのなきがらかくして」。

（かく・すみ［角錐］（名）【數】一つの平面多角形及其各邊を底邊とし、同一の點を頂點とする三角形の界する多面體。「恩ひあり」。

（かく・せい［隔世］（名）世代を異にすること。「一の

（かく・せい［客星］（名）時に臨みてあらはるゝ星。

(**がく・せい**)[學生](名) ㊀學問に從事する生徒、學ぶ人。たよせい。(書生)。㊁大學本科生徒の特稱。

(**がく・せい**)[學制](名) 諸種の學校に於ける學問の程度又は其順序・連絡等に關する規定。「—の變更」。

(**がく・せい**)[學政](名) 「がくせいくぎやうせい」の略。教育行政」に同じ。

(**がく・せき**)[學籍](名) 其學校に在學して、生徒名簿に名を登錄しあると。又、其登錄しある名簿。——**・ぼ**[學籍簿](名) 學校に備へ置ける生徒の

(**がく・せつ**)[確說](名) たしかなる說。 [名簿。

(**がく・ぜつ**)[隔絕](名) へだたりてあると。かけはなれたると。「天地千里の—」。

(**がく・せつ**)[學說](名) 學問上の說。

(**がく・ぜん**)[愕然](名、副) もどろきたるさまにいふ語。「—答ふる所を知らず」。

(**かく・せん・せき**)[角閃石](名) 【鑛】我國の火山にある岩石中に廣く存在する鑛物。普通柱狀の結晶をなし、褐色又は綠色を帶び、形狀甚だ輝石と類似すれど、長き柱狀をなす特徵あり。

(**がく・そく**)[學則](名) 學生に關する學校の規則。

(**かく・そくど**)[角速度](名) 【理】物體の廻轉する割合、即ち、定點より物體に引ける線が單位時間に畫く速度。

かく・そで[角袖](名) ㊀角形の袖。㊁日本在來の衣服。㊂「かくそでおゆんさ」の略言。——**・おゆんさ**[角袖巡査](名) 官服を着けずして普通の衣服を着けたる巡査。

(**かく・たい**)[客體](名) 意思又は行爲の主體に對し、其意思又は行爲を及ぼさるゝもの、例へば、國土又は臣民は國家の客體にして、義務者は權利者の客體なるが如し。

(**がく・たい**)[樂隊](名) 音樂を奏する一隊。又、音樂を奏するを目とする一隊。

(**がく・たいこ**)[樂太鼓](名) 雅樂に用ふる大鼓。

(**がく・だう**)[額堂](名) 神社佛閣などにある額面をかゝげ置く堂。 「くかう。

(**がく・だう**)[學堂](名) 學問を教授する所。か

(**がく・たふ**)[確答](名) たしかなる〈んさ。

(**がく・だん**)[格段](名、副) かくべつ。かくべつ。かくべつわい。とりわけ。「格別」。——**・すう**[格段數](名) 【數】數字を以て表はされたる數。一般數の對。

(**かく・ちく**)[角逐](名) 互に競爭すること。

(**かく・づきん**)[角頭巾](名) 頭巾の一種、すみ頭巾といふべきを、よみあやまれるもの。

かく・づと[角髻](名) 德川時代に、御殿女中などが髮のたぼを、角(つの)にせしもの。まるづとの對。

かく・て[搔手](名) 琴の手の一種「一、十文字」。

かく・て[斯](接) 斯くの如くありて。さて。それより「—、其後」。(然而)。

(**かく・てい**)[角觝](名) ちからくらべ。すまひ。

(**かく・てい**)[確定](名) たしかに定まると。定まりて動かぬと。——**・とうさい**[確定公債](名) 政府償還の準備ある公債。——**・はんけつ**[確定判決](名) 【法】不服申立ての期間を經過したる判決又は上告審の判決の稱、即ち、確定の効力を有するもの。

(**かく・てう**)[格調](名) 詩歌の字句の組織又は「調子」。

(**かく・でう**)[各條](名) あげてあるそれ〈〉の條。

(**がく・てう**)[樂調](名) 音樂の調子。

(**がく・てん**)[樂典](名) 音樂の法式。

(**かく・と**)[穀斗](名) 【植】蕊蕊の總苞の成熟したるもの、例へば、栗の毬斗の如きこれなり。

(**かく・と**)[角度](名) 【數】相會する二直線のなす形。又、其形の空間の度數、圓の中心より圓を三百六十等分したるものを單位としてこれをはかる。

(**かく・ど**)[客土](名) ㊀たび。他國。「—に流寓す」。㊁あきつち。あげつち。 「いかると。

(**かく・ど**)[赫怒](名) はげしくいかると。あはいに

(**かく・とう**)[角塔](名) 【數】一つの直線に平行なる數個の平面と、此直線に會する二つの平行平面とにて界する多面體。

(**かく・とう**)[角燈](名) 「ガラス」を張りたる四角形の燈。さげ持つやうにつくる。

(**かく・どう**)[格鬪](名) くみうち。うちあひ。

(**がく・どう**)[學頭](名) ㊀數多の教師の內にて、上席を占むるもの。㊁校長。塾頭。

(**がく・とく**)[學德](名) 學問と德行と。

(**がく・とくわ**)[穀斗科](名) 【植】多年生木本植物にして、根は木質多年根、莖は木質多年生、葉は不完全單葉鋼狀脈、花は單性花雌雄同株、花蕊は穗狀、果實は堅果にして蕊斗あり。 「一種。

カグ・ナミ[江南](名) 《字の朝鮮音》刀のつばの

かぐ・なわ[結葉](名) 「かくのあわ」の略言。「—に是認すると。

(**かく・にん**)[確認](名) まかとみとむると。たしか

(**がく・にん**)[樂人](名) 音樂を奏する人。雅樂を奏する人。伶人。(音樂師)。

(**かく・ねん**)[客年](名) きよねん。さくねん。

(**かく・ねん**)[隔年](名) 一年づゝへだてたると。いちねんおき。「間年」。

(**がく・ねん**)[學年](名) 學校にて規定せる一年間の修業期又、一年間の修業期によりて、區別したる學級。

++**かく・の・あわ**[香菓泡](名) 古代の菓子の名、油揚げにして、形は繭を結びたる如くなりといふ。かぐなわ。「結菓」。

++**かぐ・の・とのみ**[香菓](名) 「かぐのみ」に同じ。

++**かぐ・の・み**[香菓](名) たちばなの實。

がく・の・ま[額間](名) 御殿の名を書きたる額をかけてある柱の間。

(**かく・のり**)[角乘](名) 四角なる材木を水に浮かべ、其上にて種々の輕わざをなすこと。

(**がく・は**)[學派](名) 學問の流派。「陽明—」。

(**がく・はう**)[確報](名) たしかなる〈らせ。

かく・ばし[角柱](名) ㊀四角形をなす柱。

(**かく・はん**)[各般](名) もろ〳〵。いろ〳〵。

(**かく・ばん**)[隔番](名) 一度置きに交代すること。一日置きに交替すること。かはりばん。

(**がく・ばん**)[額列](名) 「がくぎん」に同じ。

(**がく・ひつ**)[擱筆](名) 筆をさしおきて書きやむること。「三霜夜—せず」。

(**か・くひ・ぞり**)[蚊食鳥](名) 【動】「かうもり」の一名。 「じ。

++**かく・ひやう**[脚病](名) 「かくけ」脚氣に同じ。

++**かく・ふ**[圍](他、は四) 「かこふ」に同じ。

(**がく・ふ**)[樂譜](名) 音樂の譜。

(**かく・ぶつ**)[格物](名) ㊀事物の道理をきはめ知ると。「究理」。㊁意念の生滅に就き、反省して惡を絕ち善に進むこと。

(**かく・べ**)[角兵衛](名) 「かくべゑ」の略言。——**・おさ**[角兵衛獅子](名) ㊀名工角兵衛といふもの、腹作せし獅子がしらの稱。㊁えもごえもの一名。「助平人」。

(**かく・へき**)[隔壁](名) ㊀〈だてのかべ。㊁〈だて。おきり。

(**かく・べつ**)[格別](名、副) とりわけ。べつだん。

(**かく・へん**)[蕚片](名) はなぶさの片。蕚の條を見よ。「する人。

(**がく・ぼく**)[學僕](名) 師家の僕となりて、學問

(**がく・まく**)[膈膜](名) 【生】胸腔と腹腔との中間にありて二腔を區別する筋肉質の膜、平常は胸腔に向つて隆起すれど、收縮すれば扁平となり下方に胸腔を擴張す、此膜の一張一縮は呼吸の原因なり。

(**かく・まく**)[角膜](名) 【生】眼球の白色なる外壁の前面にある膜、堅革且透明にして著しく隆起す。——**・えん**[角膜炎](名) 眼病の一種、かくまくのはれていたむ症。

かくまふ[匿](他、は四) ひそかに人を隱す。かくす。(舍、匿)。

++**かくみ**[圍](名) かこみ。——**・ゐ**[圍居](名) かこみてすわると。まどゐ。

++**かく・むむ**[圍](他、ま四) 「かこむ」に同じ。

(**がく・む**)[學務](名) 教育上に關する事務。——**・委員**(名) 市町村又は市町村學校組合が、小學校教育事務のために設置する委員。

ゐゐん[學務委員]

(**かく・めい**)[革命](名) ㊀前の王統覆(くつが)り他の王統代りて、統治者となること。㊁目的が國家の基礎に關し行動が憲法の範圍を超え、且普通に急激傷亂なる政治上又は社會上の變化。㊂陰陽家にて、辛酉の歲の稱。此歲には、變亂多しといへり。

(**がく・めい**)[學名](名) 學術上便利のため動植物に附したる世界共通の名稱。「ラテン」語にて記す。

(**がく・めん**)[額面](名) ㊀〈がく」額に同じ。㊁證券面の金額。——**・かかく**[額面價格](名) 公債・株券等の額面どはりの價格、例へば、額面百圓なれば其百圓をいふ。實買價格の對。

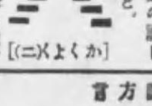
(**かくめん・はう**)[角面堡](名) 少數の邊より成る多角形の堡壘、其面の數及配置は、地形及射擊すべき方向の如何によりて一定せず。

(**がく・もん**)[學問](名) ㊀まなびならふと。學藝を修むると。㊁修得せる學藝。——**・およ**[學問所](名) 學問するために設けられたる處。(學館)。

かくや[樂屋](名) ㊀能・芝居などの舞臺のうしろにある部屋、役者の裝束をつけ化粧をなし又は休息する所。(戲房)。㊁「うちまく」ないたよ。——**・いり**[樂屋入](名) 役者の自宅より樂屋に行くと。樂屋に入ると。——**・おち**[樂屋落](名) 落語家の高座にてなしゝ落語のおちを、其落語家の話し了り樂屋に入りたる頃に了解せらるるといふと。

(**かく・よく**)[鶴翼](名) ㊀つるのつばさ。㊁古昔、左右翼を張りたる陣形。

++**かぐ・よ・ふ**[自](自、は四) 「かくよく(二)」



ぐやく。

かぐら[神樂](名) 《神座(かぐら)又は神樂(かぐら)の轉》今日に傳はれる古代の音樂、歌あり舞ひあるもの、鳴物は、古昔は和琴・笛・拍子の三つなりしが、後世に至りてこれに篳篥(ひちり)を加ふるとなれり。——**うた**[神樂歌](名) かぐらに合はせて謠(うた)ふ歌、其曲あよを三十七ありといふ。——**ざさ**[神樂笹](名) 【植】(い)百合科に屬する草、地上莖は枝を有し葉は披針形をなす、花蓋は淡黃綠色にして紫色を帶び、稍や鐘狀をなし其片は鋭頭なり、清國より渡來したる草本にして、觀賞用として栽

培せらる。たうちくらん。まんぎゆちく。（萬齡竹）。
（ゐ）「ごまいざゝ」の一名。——**さん**［神樂算］（名）「えやちゝ車地」に同じ。——**すず**［神樂鈴］（名）すゞの一種、小さき鈴を十二箇繰りて、柄をつけしもの、おもにかぐらに用ふ。——**たち**［神樂堂］（名）「かぐらでん」に同じ。——**づき**［神樂月］（名）陰曆十一月の異稱。——**でん**［神樂殿］（名）神社の境内に設けたる、神樂を行ふ所。——**ふえ**［神樂笛］（名）一種の横笛、かぐらに用ふるもの。

（**かくらう**）［閣老］（名）老中の異稱。

（**かくらふ**）［客臘］（名）昨年の末。

（**かくらん**）［蘭］（名）【植】蘭の一種、琉球に產す、花は白色若しくは紫色にして、其形鶴に似る、觀賞用として栽培せらる。

（**かくり**）［隔離］（名）㊀へだゝると、又、へだつると。㊁傳染病患者を遠ざけ移すと。——**ぢつ**［隔離室］（名）傳染病患者を遠ざけ移す室。

（**がくり**）［學理］（名）學問上に於て是認せられたる理論。學問上の認識。——**てき**［學理的］（形）物事を論じ又は行ふに、學理を基とするにいふ。

（**かくりつ**）［格率］（名）のり。きそく。

（**かくりつ**）［確立］（名）たつかりと立つると。立つて動かざると。

†**かくる**（たれたるる、たれたよ）［隱］（自、ら下二）㊀外部にあらはれずにあり。外部より見えずなる。（蔽）㊁ひそむ。かゞむ。（潛）。㊂のがる。にげ。（匿）。㊃去る。うす。「大道既に—」㊄官に仕へずして野に處る。世を逃れて山などに住む。㊅高貴なる人死亡す。

†**かくる**（たれたるる、たれたよ）［隱］（自、ら四）前條に同じ。

†**かくれ**［隱］（名）㊀みえずなると。㊁ものかげの外より見えぬ處。「山の—にひそみて」。——**あそび**［隱遊］（名）小兒のたはむれ。かくれんぼう。

（**かくれい**）［格例］（名）㊀えきたり。ためし。㊁のり。きそく。

†**かくれい**（革令）（名）陰陽家にて甲子の年の稱。

（**かくれい**）［閣令］（名）內閣總理大臣が、其職權內に於て發する行政命令、官報を以てこれを公布す、法律・勅令には抵觸するを得されど、府縣令・廳令はこれを廢止變更するを妨げざるものとす。

（**がくれい**）［學齡］（名）小學校就學の年齡の稱にして、兒童滿六歲の翌月より滿十四歲までをいふ。——**おとり**［學齡兒童］（名）其齡が學齡內なる兒童の稱。

（**かくれいは**）［隱岩］（名）水波に隱れて見えぬ「岩石」。（暗礁）。

（**かくれうゐ**）［閣僚］（名）內閣に列する國務大臣、又、一の國務大臣より他の國務大臣をさす稱。

（**がくれう**）［學寮］（名）がくかう內の生徒の寄宿する所。又、寺院にて徒弟の修學する所。

（**かくれが**）［隱所］（名）㊀世をのがれてかくれ住むい。㊁世をのがれてかくれ居る所。

（**かくれかご**）［隱駕籠］（名）古昔、忍のなあるきするに乘りしかご。

（**かくれがさ**）［隱笠］（名）かくれみの、類

†**かくれごと**［隱語］（名）其人の居らぬ所にて、其人の上を論評すゝ。かげぐち。

（**かくれどころ**）［隱所］（名）かくれひそむ所。

†**かくれぬ**［隱沼］（名）草などにうもれて外より「隱匿所」。は見えぬ沼。

（**かくれば**）［隱場］（名）かくれが。かくれどころ。

†**かくれぼう**［隱坊］（名）「かくれんぼう」に同じ。（隱遊）。

（**かくればきよ**）［隱場所］（名）かくれが。かくれぬけみち。「間道」。「ば、

（**かくれみち**）［隱道］（名）

（**かくれみの**）［隱蓑］（名）㊀身を隱すために着る蓑。「かいま見の人—とられたる心地して」。㊁【植】五加（ウコ）科に屬する常綠木、葉はあをぎりに似て小さく、色濃綠にして光澤あり。

†**かくれる**［隱］（自）「かくる」の訛。

†**かくれんぼう**［隱坊］（名）小兒の遊戲、歌人物かげに隱れたるを、他の一人がさがし出し、其さがし出されたる者が、代りて更に他の者をさがし出すと。（捉迷藏）。

†**かぐろ**（くろき）［黑］（形、一）くろし。

†**かくろ**（ふ）［隱］（自、は四）「かくる」の延言。「かくろひて待つほどに」。「に同じ。

†**かくろ**（ふ）［隱］（自、は下二）前條

（**かくろ**）［確論］（名）たしかなるぎろん。

（**かくわ**）［假果］（名）【植】蓴（ヅサ）の花托等の部分が、子房と共に肥大して形成したる果實、梨・林檎等の果實これなり。

（**かくわい**）［嘉會］（名）㊀よろこび事ありて、多人數の集會すると。㊁風流なる會合。

（**かくわい**）［歌會］（名）うたの會。

（**かくわん**）［加冠］（名）㊀元服すると。㊁元服のとき、冠を元服する者に着する人。

（**がくわん**）［鶴管石］（名）㊀【動】「いしぎ」の唐名。㊁【鑛】中の空虛なるつゝ、いし。

（**がくゐ**）［學位］（名）㊀文部省より成學術に長じたる人に對して、特に授與する博士號。㊁大學卒業者の學士號の俗稱。

（**かくん**）［家君］（名）わが父。「嚴父」。

（**かくん**）［家訓］（名）家庭のをしへ。父母のいましめ。

†古語　一般語方言　一字音

†**かけ**（鶴）（名）「にはとり」の一名。

かけ［掛］（名）㊀「うちかけ」の略言。㊁帶をえめはじむる方の一端。「—がゆるんでえまらぬ」。㊂金錢の授受を後日として、物品を賣買すると。㊃かけね。

かけ［賭］（名）勝負事に互に物を出しあひて、勝ちたるものこれを取ると、又、其出しあひたる物。

かけ［駈］（名）馬を疾走せしむると。馬を驅（カ）ると。「—を乘る」。「驅駈」。

かけ［闕］（名）かくると、又、かけたる部分。（缺）。

かげ［景］（名）ひかり。あかり。「日—」。「月—」（晷）。

かげ［影］（名）㊀光を遮りてあらはるゝ暗體の形。「障子にうつる人—」。㊁物の形狀及物色等が、其まゝ、鏡面又は水面などにうつりて見ゆるもの。「鳥の—、水に落ちて」。㊂人の姿。「—をかくす」。㊃【天】光線が暗體によりて遮られたる部分の稱、若し光線が一點より出づれば、影は全く暗けれど、然らざるときは、全く光線の達せざる部分と、幾分か光線の達する部分とあり、光線の全く達せざる部分を本影といひ、幾分か達する部分を半影といふ。

かけ［陰、蔭］（名）㊀光にあたらぬ所。影となる所。「家の—」。「山の—」。㊁人目にふれざる所。「—で笑ふ」。㊂他よりの庇護。人のおかげ。「みんなの—で」。

かげ［鹿毛］（名）馬の毛色、まふの毛の如く茶色なるもの。（驪、驊）。「りきし。（鍵、挨）。

がけ［崖］（名）懸けたるごとくそばだちたる岸、きを表はす語。「わらぢ—で其まゝなる意

—がけ［掛］（接尾）㊀或語に添へて其まゝなる意を表はす語。「命—」。㊁或語に添へて投げ出す意を表はす語。「行き—」。

かけあし［駈足］（名）㊀はやく走ると。㊁體操又は行軍に於ける一種の步調、普足の急なるもの。

かけあはす［駈合］（他、さ下二）㊀馬をはやく走らすと。かけ。㊁互に乘馬をよせ合はせて戰ふ。

かけあはす（せさせすする、すれすせよ）［掛合］（他、さ下二）

†**かけあはせる**［掛合］（他）「かけあはす」の訛。

かけあひ（イ）［掛合］（名）㊀かけりあひてなすと。「—て讀む」。㊁はなしあひ。だんぱん。㊂「かけあひせりふ」の略言。——**せりふ**［掛合臺詞］（名）芝居にて、役者が順々に一句づゝのぶるせりふ。

かけあふ（リフ）［掛合］（自、は四）㊀それと相關係す。㊁はなしあふ。

かけアンドン［掛行燈］（名）柱などにかけあくこれと相關係す。

かけい［家兄］（名）わがあに。「濟。

かけい［家計］（名）一家生計の用度。一家の經

かけい［夏畦］（名）夏の炎天に耕作する農夫。

かけい［家鷄］（名）【動】にはとり。——**をかいす**［輕家鷄、愛野雉］妻を愛せずして遊女などに溺るゝにいふ。

かけい［嘉慶］（名）よろこびごと。めでたき事。

かけい［雅兄］（代）男子を親しみ尊びていふ稱。「以て如何となす」。「平田—」

†**かけいと**［掛絲］（名）あやいと。あやいと。

かけいいっぽんだち［掛一本立］（名）相撲四十八手の一、我足一本のみ立たして投ぐる手。

かけいぼき［家計簿記］（名）一家生計の費用を整理するために用ふる簿記、其主要帳簿は日記帳及元帳にして、他に種々の補助帳簿あり。

かけいり（リヰ）［駈入］（名）㊀駈けこむと。㊁新參。

かけうけ（ウケ）［架橋］（名）はしをかけわたすと、又、かけわたしたるはし。かけはし。「すあそび。

かけうま［駈馬］（名）馬にはしりくらべをせさ

かけうり［掛賣］（名）其品物のあたひを貸しあきて賣ると。かしうり。（賒賣）。

かけおち［駈落］（名）住地より逃亡すると。ちくてん。えゆっぽん。（失踪）。——**もの**［駈落者］（名）かけおちしたる人、逃亡者。（失踪者）

†**かけおび**［掛帶］（名）古昔の婦人の服飾、腰（モ）につきたる帶の如きものにして、これを肩より前にかけたり。

かけがう（ゴウ）［掛香］（名）㊀香を絹のふくろに包みて懸けおくと。㊁絹の袋に香料を入れて、婦人などの携帶せるもの。（風香）。「樣子なり。

†**かけかけし**（しくしき）（形、二）こゝろに掛くる

かけがね［掛金］（名）かきがね。（鑰）。

かけがへ（エガ）［掛替］（名）用意に備へおくもの。ひか（へ）。かはり。（懸替）。

†**かけかまへ**（マエ）［掛構］（名）心かま（へ）。心まち。

かけがみ［懸紙］（名）㊀袋捐を防ぐため、書狀を卷きて封袋に入るゝ白紙。㊁文案を檢閱して、意見を他の紙に書し、これをはりたるもの。ふせん。

かけきん［掛金］（名）㊀日掛け月掛けなどに、掛けてゆく錢（掛錢）。㊁かけになりてある代金。

かけぐさり［懸鎖］（名）物にひきかくるくさり。

かけぐち［陰口］（名）かげごと。

かけくらぶ（ばべばぶる、ばべばぶれ）［掛比］（他、は下二）量目を比較す。物事を比較す。くらぶ。てらしあはす。

かけくらぶ（ばべばぶる、ばべばぶれ）［駈比］（自、は下二）はしりくらべをなす。

かけくらべ［掛比］（名）てらしあはせ。比較。

かけくらべ［駈比］（名）はしりくらべ。かけっこ。

†古語　一般語方言　一字音

かけくらべる（自、他）「かけくらぶ」の訛。

かけ・こ［懸籠子］（名）はこのふちに掛けて、其中に家入するやうに造りたる箱。（蚕子、暫匿）

かけ・ごと［賭事］（名）財物を賭けて、勝負を爭ふこと。「一に身をやつす」（賭博、博奕）。「と」（後言）。

かけ・ごと［陰言］（名）其人の居らぬ所にてそしること。

かけ・ことば［掛詞］（名）【文法】義異にして音同じき語に、上下兩樣の意味を含ましむること。例せば、「鳴く」と「泣く」との意義を含ましむして、「何と仕樣もなくばかり」といふが如し。

かけ・こひ［掛乞］（名）かけとり。（元祿頃の語）。

かけ・こみ［駈込］（名）かけこむこと。——**そだよう**［駈込訴訟］（名）昔時、町奉行など（の訴訟を、經常の手續によらずして直接に奉行所に駈込みてなしゝこと。——**ねがひ**［駈込願］（名）前條に同じ。

かけ・こ・むこ［駈込］（自、ま四）駈けて入る。「かけこみ來る」。㊁かけこみそをえようをなす。

かけ・こゑ［掛聲］（名）㊀人をよびかくる聲。㊁撃劍などにて、勢をそふるために發する聲。（挑聲）。

かけ・ざくら［影櫻］（名）櫻の花の模樣をかげにてくみたてたるもの。「方」。

かけ・さき［掛先］（名）掛代金を受けとるべき先

かけ・ざを［掛竿］（名）㊀手拭又は衣服などを掛けむくための竿。（物竿）。㊁細物をかくるに用ふる竿

かけ・ざん［掛算］（名）【數】二つの數の乘積を求むる算法。乘法ともいふ。（乘算）。

かけ・ぢ［掛字］（名）床の間などにかくる書幅。かけもの。（軸物）。——**ぶかけ**［掛字掛］（名）かけものを掛くるための竿。

かけ・ぢ［缺字］（名）㊀主上などの御名をあるすに、其字の上をあけおくこと。㊁闕字。

かけ・ぢやうゆ［掛醤油］（名）㊀料理にかくる色薄き醤油。㊁一種の料理、鯛などの肉を、色薄き醤油にて蒸したるもの。

かけ・ぢゆく［掛軸］（名）「かけぢく」に同じ。

かけ・す［懸巣］（名）【動】蒜雀類からす科に屬する鳥。稍や大形なり、嘴は大きく、其根基に刷き羽毛あり。鼻孔を蔽ふ、性質あらく、小鳥を取りて食ふ、秋の末群飛す。かしどり。

かけ・すずり［懸硯］（名）かけごのある硯箱。

かけ・せん［掛錢］（名）かけきん。（掛金）。

かけ・ぜん［陰膳］（名）旅に出でたる人の無事を祈りて、其留守に供ふる膳部。

かけ・そば［掛蕎麥］（名）汁をかけたるそばきり。もりそばの對。

かけ・だいきん［掛代金］（名）かけうりの品物の代金。

かけ・だし［駈出］（名）㊀かけいだすこと。㊁物事のはじまり。㊂まだ其物事になれぬこと。

かけ・だ・す［駈出］（自、さ四）㊀かけはじむ。㊁にげ去る。

かけ・だひ［懸鯛］（名）古昔、正月の儀式に、門松にかけし一疋のはしだひ。

かけ・ぢ［懸路］（名）石間の細き道路。

かけ・ぢから［懸稅］（名）古昔、伊勢神宮の祭事に穂のまゝにて垣にかけて、神に奉りし屑。

かけ・ぢく［掛軸］（名）床の間などにかくる書畫の幅。かけもの。「粗末なる茶屋」

かけ・ぢやや［掛茶屋］（名）路傍などに構へたる（かけつ）［可決］（名）會議にて、議案を是認せる議決をなすこと。「にしたる圖」

かけ・づ［掛圖］（名）壁上などにかくるやうに軸物に他の役をあはせもつこと。又、其人。（兼官）。

かけ・づかさ［掛官］（名）一役をもてる上に、更

かけ・つ・く［駈付］（自、か下二）駈けて到り着く。急ぎて到り着く。

かけ・づくり［懸造］（名）渓又は小川などの上に、かけわたしてつくりたる家。「一の茶屋」（棧閣）。

かけ・づ・くる［懸造］（他、ら四）かけわたしてつくる。「一、谷のいはりの軒場より」。

かけっこ（名）はしりくらべ。

かけ・づめ［繋爪］（名）けづめ。（蹴爪）。「まはる。

かけづ・る［駈］（自、ら四）奔走周旋す。かけて［掛］（副）かねて。「走馬燈」。

かけ・どうろう［影燈籠］（名）まはりどうろう。

かけ・ども［影面］（名）㊀山の南。㊁山陽道の古稱。——**のおほみかど**［影面大御門］（名）大内裡の南門。——**のみち**［影面道］（名）山陽道の古稱。「價鬼」。

かけ・とり［掛取］（名）掛代金を請求に來る人。

かけ・ながし［掛流］（名）㊀一度用ひたるのみにて捨つること。㊁物をかけ其まゝになしおくこと。

かけ・なは［掛縄］（名）縄。あひなは。（買索）。

かけ・にんぎやう［影人形］（名）光線の作用によりて、紙又は布などにうつす人形の影。

かけ・ね［掛値］（名）㊀實價より高くいふる値。㊁（あはぎやうに物事をいふこと。

かけ・の［陰野］（名）山のかげになりてある野。

かけ・はし［掛橋］（名）㊀はしご。（梯）。㊁けはしき處に板などを渡したる橋。（棧）。㊂すべて物と物とにかけわたしたる往來の路。「けあく花いけ。

かけ・ばないけ［懸花生］（名）柱又は壁などに掛

かけ・はね・る［掛離］（自、ら下二）遠く

かけ・ぶかさ［掛官］（名）一役をもてる上に、更

かけ・つ・く［駈付］（自、か下二）駈けて到り着く。急ぎて到り着く。

かけ・づくり［懸造］（名）渓又は小川などの上に、かけわたしてつくりたる家。「一の茶屋」（棧閣）。

かけ・づ・くる［懸造］（他、ら四）かけわたしてつくる。「一、谷のいはりの軒場より」。

かけっこ（名）はしりくらべ。

かけ・づめ［繋爪］（名）けづめ。（蹴爪）。「まはる。

かけづ・る［駈］（自、ら四）奔走周旋す。かけて［掛］（副）かねて。「走馬燈」。

かけ・どうろう［影燈籠］（名）まはりどうろう。

かけ・ども［影面］（名）㊀山の南。㊁山陽道の古稱。——**のおほみかど**［影面大御門］（名）大内裡の南門。——**のみち**［影面道］（名）山陽道の古稱。「價鬼」。

かけ・とり［掛取］（名）掛代金を請求に來る人。

かけ・ながし［掛流］（名）㊀一度用ひたるのみにて捨つること。㊁物をかけ其まゝになしおくこと。

かけ・なは［掛縄］（名）縄。あひなは。（買索）。

かけ・にんぎやう［影人形］（名）光線の作用によりて、紙又は布などにうつす人形の影。

かけ・ね［掛値］（名）㊀實價より高くいふる値。㊁（あはぎやうに物事をいふこと。

かけ・の［陰野］（名）山のかげになりてある野。

かけ・はし［掛橋］（名）㊀はしご。（梯）。㊁けはしき處に板などを渡したる橋。（棧）。㊂すべて物と物とにかけわたしたる往來の路。「けあく花いけ。

かけ・ばないけ［懸花生］（名）柱又は壁などに掛

かけ・はね・る［掛離］（自、ら下二）遠く

かけはなれる（掛離）（自）「かけはなる」の訛。

かけ・ばん［掛盤］（名）外へそりたる足ある膳の上品なるもの。「ひ」（貫）。

かけ・ひ［懸樋］（名）地上に架設し水を通ずるもの。

かけ・ひき［駈引］（名）㊀軍隊が機會を見はからひて、或は駈け進み或は引き退くこと。㊁賣買・談判等に機會を見はからひてなすこと。

かけ・ひなた［影日向］（名）㊀日のさす部分とさゝぬ部分と。㊁場合によりて其所行を異にすること。

かけ・ぶち［家業］（名）なりはひ。職業。

かけ・ぶち［鹿毛斑］（名）馬の毛色、斑文ある鹿毛

かけ・べり［掛減］（名）秤（はかり）にかけてはかるに缺きて、重量減ずること。

かけ・べんけい［陰辨慶］（名）かげにては強きさまをなせど、表面に立ちては弱きこと。

かけ・ぼし［陰干］（名）日のさゝぬ處にて干（ほ）しかわかすこと。「一の銀杏」（陰乾）。

かけ・ぼふし［影法師］（名）㊀うつし繪。㊁光によりてうつりたる人影。

かけ・ま［陰間］（名）男色を賣る童。（變童）。

かけ・まくも［掛卷毛］（副）口にかけていはむも。「一、あやにかしこし」（懸卷茂）。

かけ・まつり［影祭］（名）㊀芝居にて、曾我の狂言を演じ了りて行ふ廳屋の祭事。㊁例年の儀式を省きて、賞賜にする神社の年祭。

かけ・まは・る［駈廻］（自、ら四）かけづる。

かけ・まひ［陰舞］（名）㊀昔時、役者が、舞臺に出ず座敷などにて舞ひしと。又、それを業となしい役者。㊁「かげま」に同じ。

かけ・み［影身］（名）影となり身となりて、まめやかに守ること。「一に添ひて」

かけ・みち［蔭路］（名）ものかげにある路。（陰路）。

かけ・むかひ［掛向］（名）二人さしむかひ。

かけ・むさや［影武者］（名）古昔、敵を詐（あざむ）くために、主將などが己と同樣せしめし武者。

かけ・め［陰女］（名）めかけ。（妾）。

かけ・め［缺目］（名）㊀かけ落ちて滿足ならぬ部分。㊁圍碁にて、打ちならべたる石の中に目の如く見ゆれど、其四方を圍み塞がば目とならざるもの。

かけ・め［掛目］（名）秤にかけてはかりたる重量。「愛帶」。

かけ・もち［掛持］（名）二つ以上の職を受持つこと。

かけ・もの［掛物］（名）㊀書畫を軸物に表裝し、掛けもきて、一室の装飾とし又は賞翫に便にするもの。（掛軸）。㊁こはりかけ又はひがけにせる乾菓子。——**かけ**［掛物掛］（名）かけものをかくるに用ふる具。端に又（マタ）を附けたる竿。

かけ・もの［賭物］（名）勝負事にかけたる物。

かけ・や［掛矢］（名）最も大なるさいづち。（堀槌）。

かけゆゑ［勘解由使］（名）古昔、解由狀（ゲユジヤウ）の事實をかんがふる職官。

かけ・ら［缺片］（名）もの、斷片。きれ。

かけ・りう［影流］（名）「えんかげりう」の略言。

かけ・る［翔］（自、ら四）㊀鳥翼をのばして空たかく飛ぶ。㊁疾走す。はす。

かける［掛］（他）「かく」の訛。

かける［欠］（自）「かく」の訛。

かげ・る［陰］（自、ら四）㊀かげになる。㊁くもる。㊂日傾く。（夕）。

かけろ（名）鶏の鳴き聲。「一と鳴く」。

かけは（名）鶏の鳴き聲。「一と鳴く」。

かげ・ろ［影炎］（名）かげろふ。（遊絲）。

かげ・ろふ［陽炎］（名）春のうらゝかなる日に、野邊などにちらゝ立ち上る氣。いとゆふ。（遊絲）。

かげ・ろふ［蜉蝣］（名）【動】い）蜻蛉の古名。其かげろふのひらめくが如きより此名あり。（玉蜻）。（ろ）蜻蛉類蜻蛉科に屬する蟲。腹質にして鋼狀眼を有する二雙の翅を具し、はゞ同長なる三個の尾毛あり、夏秋の交、多く水邊に飛び、數時間にして死す、幼蟲は二三年を經て、成蟲に羽化す。

かげろ・ふ［思惑］［陰］（自、は四）㊀光かくれてかげになりゆく。㊁月の光りなど物のすきまよりひらめく。

かけ・ゑ［掛畫］（名）ゑのかけもの。（懸繪）。

かげ・ゑ［影畫］（名）うつしゑ。寫繪、幻燈繪。

かけ・を［懸緒］（名）冠の緒、古昔は紙捻にてつくり、後世は絹にてつくる。

（かけん［家憲］（名）一家の根本の規定。

（かけん［嘉言］（名）よきことば。「一善行」。「善言」。

（かげん［下弦］（名）㊀【天】太陰が弓狀に見ゆる場合の一、即ち、其弦が下方に見ゆる望より晦に至る間。㊁陰曆廿二三日頃の月の特稱。

（が・けん［我見］（名）㊀【佛】此身は虚假なるに、妄に主宰を立て、我となすこと。㊁偏頗なる見地。

（か・げん［加減］（名）㊀加はると減（へ）ると、又、加ふると減ずること。㊁程あひ。ぐあひ。「鹽かげん」

（か・げん［下元］（名）陰曆十月十五日の稱。

（か・げん［家嚴］（名）ちゝうへ。ちゝぎみ。

（が・げん［雅言］（名）みやびやかにて正しきことば。殊に歌などに用ふることば。

かと［鹿子］（名）【動】鹿の子。

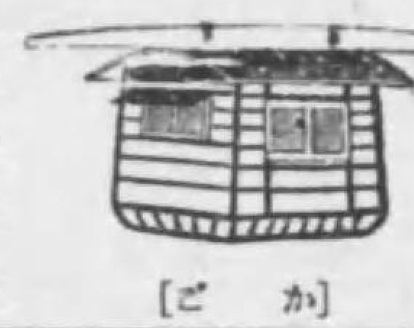
かと［舵子］（名）船をつかふことを業とする水夫。

ふなこ、かんどり、かぢとり。(水手)。

かこ[鉸具](名) ㊀革帶の端にある鈎、帶をとむるためのもの。㊁あぶみの鐶環に附屬せるひぢよおれ。

かご[籠](名) ㊀竹にて編みたる器物の總稱。(籃)。㊁金屬の線條にて編みたる器物。「鋼の—」。

か-ご[駕籠](名) 人をのせて、前後よりかき行くのりもの、よつでかご・たれかご等種類多し。(籃與、肩與)。



[かご]

(か-ご)[加護](名) 神佛などが力を添へてまもり給ふと。(擁護)。

(が-ご)[雅語](名) 「がげん」(雅言)に同じ。「はぐち。

(か-こう)[河口](名) 河流の湖又は海に注ぐ口、かこう。

(か-こう)[加工](名) ㊀人工を加ふると、細工。㊁【法】天然物又は他人の所有物に工事を施すと。

(がこう-さう)[鵝口瘡](名) 極めて幼稚なる小兒に發する一種の病、口中白くたゞれて乳を呑むに苦しむ、多くは牛乳より傳染す。

かご-うつし[籠寫](名) 書畫などを、中を空白にし、まはりを線にて寫しとると。又、其寫しとりたるもの。ふたへがき。(塡郭、影書)。

＋かこか[圍](名) 「かたやか」に同じ。

かご-かき[駕籠舁](名) かごをかく人夫。(舁夫)。

かこ-がしら[鉸具頭](名) 「かこ二二」に同じ。

(か-こく)[苛酷](名) ㊀過度にきびしきと。からきと。(刻覈)。㊁無慈悲なると。むごきと。(酷薄)。

(か-こく)[家國](名) ㊀ふるさと、故國。㊁國家。「—を憂ふ」。

かごしま-じる[鹿兒島汁](名) 獸肉・野菜などを「混同して煮たる汁。

かご-そ[駕籠訴](名) 德川時代に、大名などの通行を要し、其駕籠に近づきて、直接に訴訟なし、と。(闌幡上書)。

かこち-がほ[託顏](名) なげくかほつき。「んがは。(愁色)。

かこ-つ[託](他、た四) ㊀かこつく。㊁恩ひわびてなげく。(咳)。

かこつ-く[託](他、か下二) ㊀他の事實をいひたてにす。ことよす。㊁他の事情に寓して說く。「かこつけて諫む」。

かこつけ[託](名) いひぐさ。いひまへ。

＾かこつける[託](他) 「かこつく」の訛。

か-ごと[託言](名) ㊀かこつけいふと。又、其物事。㊁言ひわけだけの事實、言ひわけまでの行爲。いひわけ。㊂すこしばかり。少許。—**がまし** しくしくしくしけれ[託言箇間敷](形、二) ㊀かごとめきて見ゆ。㊁恨みかこつ機なり。—**ばかり**[託言許](名) いひわけまで。又、すこしばかり。

かご-ぬき[籠拔](名) かごうつし。

かご-ぬけ[籠脫](名) かるわざの一種、身を躍らせて、竹籠の筒をくゞりぬくると。(籠跳戲)。

かこひ[圍](名) ㊀かこふと。㊁かこふための垣又は屛など。㊂足利義政のとき、茶道の祖たる僧珠光が、慈照寺に設けし數寄屋を板かこひになしゝより出づ)茶道にて、數寄屋の稱。㊃まはり。周回。㊄かこへる敵兵又は堡壘。「—を衝く」。—**ぐるひ**[圍狂](名) かこひ女郎におぼれて通ふと。又、かこひものにおぼれて通ふと。—**ぢよらう**[圍女郎](名) 京都島原の女郎の稱。—**め**[圍妾](名) 我家の外にかくまひおく妾。(外妾、外嬖)。—**もの**[圍物](名) ㊀貯へおくもの。秘藏もの。㊁「かこひめ」に同じ。—

をんな[圍女](名) 「かこひめ」に同じ。

かこ-ふ[圍](他、は四) ㊀四方をかぎる。あたりをふさぐ、とりまく。かこむ。㊁かくす。かくまふ。かくしおく。㊂貯へおく。「松蕈を—」。㊃敵軍の四方を遮斷す。とりまき攻む。

かこみ[圍](名) ㊀かこむと。㊁かこむための垣又は屛など。㊂まはり。周回。㊃とりかこみたる敵兵又は堡壘。「—を破ぶって走る」。

＾かご-みみ[籠耳](名) 聞きたる事を忘れ易きと。

かこ-む[圍](他、ま四) ㊀かこふ。とりまく。(繞)。㊁敵軍の四方を遮斷す。とりまき攻む。

か-ごめ[香籠](名) 其物の香をも合せとると。にはひぐるみ。「—にさそふ風の來ぬ間に」。

かご-め[籠目](名) うちひもなどの、竹籠の目の如く編みたるもの。

かご-や[籠屋](名) かごを編み又は賣る人。又、其家。

かご-や[駕籠屋](名) ㊀かごかき。㊁かごかきをおき、望めに應じて駕籠を爲立つる人。又、其家。

＋かこやか[圍](名) ㊀かこまれたるが如きさまをなすと。㊁ちいか。ちめやか。

＋かこ-ゆみ[鹿兒弓](名) 鹿を射る弓。

かご-わたし[籠渡](名) 山澗の絕處などに縄を亙(ワタ)し、これに籠を吊(ツ)し、往來の人を其中に乘せて渡すもの。

かさ(名) ㊀雨又は日をさへぎるために、頭にかぶるもの、かぶりがさ。(笠)。㊁「さしがさ」の略言。(傘)。㊂ぬりわんのふた。(弁)。㊃さしがさ又はかぶりがさのさまをなすもの、稱。「松蕈の—」、「ランプの—」。(蓋)。㊄大氣中に微細なる水粒の浮遊せるとき、光線の屈折によりて、太陽又は太陰の周圍に見ゆる輪形の光。(暈)。—**に きる** 巳が後援者又は威

勢を恃むにいふ。又、巳が施し、恩德を恃むにいふ。

かさ[梂](名) 實の殼。「松—」。

かさ[瘡](名) ㊀皮膚病の總稱。できもの。はれもの。ええもつ。㊁黴毒の特稱。さうどく。ばいどく。—**を かく** ばいどくを病む。

かさ[嵩](名) ㊀重なりたる物の高さ又はひろがり。(層)。㊁數量の多寡。容積。(量)。

かざ[香](名) にほひ。かをり。か。

かざ[風](名) 風の轉。「—ぐるま」。「—かみ」。

かさ-あて[笠當](名) かぶり笠の内部の頂にあたる處に、つくる小さき布團(フトン)の如きもの。

かざ-あな[風穴](名) ㊀風ぬきの穴。㊁風の吹き出る穴。「富士の—」。㊂風の來るすきま。「障子の—」。

(か-ざい)[加罪](名) 罪の加はり重なると。「—」。

(か-ざい)[家財](名) ㊀家の道具、家具。(家什)。㊁一家の財產。

かさい-ねんぶつ[葛西念佛](名) ㊀德川時代に、武藏國葛西の農夫が、笛又は太鼓の囃(ハヤシ)につれ、念佛を唱へつゝ、江戶市中を踊りありきしと。㊁芝居にて、鐘・太鼓・三味線の三曲をもて囃(ハヤ)すと。

かさい-のり[葛西海苔](名) 古昔、武藏國葛西邊の海にて、採りし海苔。淺草海苔に同じ。

かざ-いれ[風入](名) むしぼし。

(か-さう)[家相](名) 家の方向・地位又は結構などを觀てなす吉凶の判斷。

(か-さう)[假相](名) 實在にあらざる物象。假りの現象。感覺若しくは空想の作用により、實在より遊離したる現象。

(か-さう)[假裝](名) 假に其もの、姿をよそほふと。—**くわい**[假裝會](名) 各自思ひ〳〵に異形のよそほひをなして集まる會合。—**ぶたふ**[假裝舞踏](名) 思ひ〳〵に異形の出立ちをなしてする舞踏。—**じゆんやうかん**[假裝巡洋艦](名) 戰時に巡洋艦の艤裝をなす商船。

(か-ざう)[家藏](名) 家にをさめおくと。又、其物。「—の書物」。

(が-さう)[我相](名) 【佛】心の所圖に執着し、これを認めて我となすと。又、學問・財寶又は家格等を恃(タノ)みて驕慢なると。

かさ-かき[瘡搔](名) 瘡毒を病める人。(黴瘡人)。

＋かざ-がくれ[風隱](名) 風を避け物かげに隱る、と。又、風のあたらぬこかげ。「—に花を植う」。

かさ-がけ[笠懸](名) 騎射の式、射場に高く笠をかけて、遠矢を射ると。

[かさがけ]

⌒かさ-かさ(名、副) 硬くしてからびたる物などの相觸れて出る音。

⌒がさ-がさ(名、副) ㊀前條に同じ。㊁性質がしきさまにいふ語。

かざ-かみ[風上](名) 風の吹き來る方角。轉じて、「上位、上流。

かさ-ぎ[笠木](名) 鳥居又は門などの上に、橫にわたす木。(蓋木、衡木)。

かざ-きり[風切](名) ㊀船上に樹(タ)て、風むきを見る旗。かざみ。㊁鳥の雨翼の短き羽、これを以て風を切りて飛ぶといふ。(翮)。—**ばね**[風切羽](名) 前條(二)に同じ。

(か-さく)[家作](名) やづくり、家屋。

(か-さく)[假作](名) かりにつくると。

(か-さく)[佳作](名) 詩文などのできよきと。又、「其詩文。

＋かさ-ぐさ[瘡草](名) 【植】「だうくわんさう」の一名。

かざ-ぐすり[風藥](名) 風邪をなほすに用ふる藥、かぜぐすり。(風寒藥)。

かざ-ぐるま[風車](名) ㊀風力を假りて回轉せしむる裝置の車。㊁【植】毛茛科に屬する草、花瓣は簀(スノ)形にして青白色を帶び、葉は九箇の小葉より成る、觀賞用として栽培せらる。(鐵仙蓮)。

かさ-け[瘡氣](名) 黴毒の氣味。「うぬぼれと—」。

かざ-け[風氣](名) ㊀風邪に感じたると。(感冒)。

かさ-ご[笠子](名) 【動】硬鰭類かさご科に屬する魚、體は稍や楕圓形をなし、眼の間凹(クボ)みて中央に溝あり、背部は綠褐色にして暗褐色の斑紋あり、我國東海より西南海にかけて多く生ず。

かざ-ごゑ[風聲](名) 風邪のためにかれたる聲。

かささぎ[鵲](名) 【動】燕雀類中からす科に屬する鳥、稍や大形にして、嘴大きく其根基に剛き羽毛ありて鼻孔を蔽(オホ)ふ、翅は黑色にして頭部及背部は暗褐色なり。—**の-はし**[鵲橋](名) ㊀陰曆七月七日の夜、牽牛と織女との會合のとき、かささぎが、翅を竝べて天河にかくといふ想像上の橋。(烏鵲橋)。㊁禁中の御階。

かざし[簪](名) ㊀かざすと。又、かざすに用ふるもの。㊁古昔、冠又は頭にかざし、花枝又は造花の稱、挿頭花。(華、簪、插頭)。—**ぐさ**[插頭草](名) 【植】「かもあふひ」の一名。

かさ-おとろ[笠鐙](名) 笠の如き狀につくりたる鐙。

かざ-おた[風下](名) 風の吹きゆく方。かざしも。

かざし-の-は[翳羽](名) 鳥の羽などにてつくりこれに柄をすげたるものにして、古昔、貴婦人など翳(サシ)すに用ひたり。えい。さしは。(雉羽扇)。

かざ-まも[風下](名) かざみた。

かさ-おるし[笠標](名) 古昔、軍隊の目ざるしのためにかぶり物に付けし標。(笠符)。 ——**の-くわん**[笠標環](名) かぶとの鉢の後の環、これに笠標をつけたり。

[しるしかさ]

かざ-おるし[風標](名) かざみ。かざきり。

かざ-す[翳](他、さ四) ㊀冠又は頭にはさむ。(插頭)。 ㊁頭上におく。かぶる。「一刀をふり—」。 ㊂かげをなす。おほふ。 ㊃まかげをなす。「一蓋」。

かさ-すげ[笠菅](名) 【植】すげの一種、用ひて笠を編む。(蓑)。

かさ-だか[嵩高](名) 嵩の高きこと。 ——**し**[嵩高](形、二) 嵩多し。かさばれり。

(か-さつ[苛察](名) こまかき事にまでも、立入りてせんさくすること。きびしくさぐること。

(がさつ(名) たちゐふるまひの粗暴なること。

(かさつ-かき[瘡掻](名) 「かさかき」の訛。

かさ-づけ[笠附](名) 俳諧にて初句を出して、次の二句を附くること。

かさ-ところ[瘡處](名) 瘡のあと。「それ行くと。

++かざ-ながれ[風流](名) 鷹などの呼に吹かれて

かざ-なぎ[風和](名) 風やみて波のなぎたること。

かざ-なみ[風波](名) ㊀風のために立つ波。 ㊁いさかひ。あらそひ。もめ。

かざ-ねみ[風並](名) 風の方向。

かさなり[重](名) かさなること。かさなる段。(層)。

かさね-る[重](自、ら四) ㊀物の上に物つもりたまる。事の上に事増し加はる。たゝまる。つもる。(累)。 ㊁更に爲さる。くりかへさる。

かさ-ぬ[重](他、な下二) ㊀物事の有るが上に物事をつけ加ふ。つむ。たゝみあぐ。 ㊁更に爲す。くりかへす。

かざ-ぬき[風抜](名) 空氣を通はすための穴。かぜぬき。(透涼)。

かさ-ぬひ[笠縫](名) 笠を製造する人。

かさね[重](名) ㊀かさぬること。又、かさねたるもの。 ㊁古昔、袍の下に着し服。(襲)。 ㊂衣服をかさねて着ること。かさねぎ。又、其衣服。 ㊃上着下着の衣服具はること。又、其衣服。 ㊄かさなりたるものを歌ふにいふ語。(餅一—)。 ——**あ-ぐ**[重上](他、か下二) かさねてつむ。つみあぐ。 ——**ぎ**[重上げる](他) 前條の訛。 ——**がさね**[重重](副) ぢゅう〜。たび〜。 ——**がハラけ**[重土器](名) 三つ組みなどの如く重ぬるカハラけ。又、定まれる獻酬の外にかさぬる盃。 ——**き**[重着](名) 衣服をかさねて着ること。(襲)。 ——**すずり**[重硯](名) 歌個くみかさぬるやうに作りたる硯箱。 ——**だんす**[重簞笥](名) 二つかさぬるやうにつくりたるたんす。 ——**て**[重](副) くりかへして。ふたゝび。さらに。 ——**る**[重](他) 「かさぬ」の訛。

(かさ-バチ[瘡鉢](名) 小兒の頭蓋(ヅガイ)。 「ろし。

かざ-ばな[風花](名) ㊀初冬の細雨。 ㊁かざはな。

かざ-はや[風早](名) 風の強きこと。

かさ-ばる[嵩張](自、ら四) かさ多くあり。かさ増す。かさむ。

++かさ-びる[草蛭](名) 【動】やまびる」に同じ。

かさ-ぶた[瘡蓋](名) はれものきずあとなどの痂(カサブタ)。 「やうす。

(一)ゆるに從ひて、其上に生ずる皮。(痂)。

++かざ-ふり[蓑振](名) 頭に挿(サ)したるもの。

かさ-ぼこ[傘鉾](名) 祭禮のときに用ふる傘の上に鉾などの飾あるもの。(蓋鋒)。

かざ-ほろし[風痺](名) 風邪の熱によりて、皮膚に細く出る發物。(風疹)。

かざ-ま[風間](名) かぜのやみたる間。

かざ-まち[風待](名) 船舶が出帆せんと順風を待ち居ること。 「松」。

かさ-まつ[笠松](名) 笠の如き形に茂れる松。(蓋

かざ-まつり[風祭](名) 風の神の祭事、秋收又は海上などに、風を鎮むるために行ふ。

かざ-まど[風窓](名) 風を通はさんがために設けたる窓。かざあな。(氣眼)。

か-ざみ[汗衫](名) 古昔は、汗取りの服。後世は、官女又は童女などの初夏のうはぎ。(汗衣)。

[みざか]

かざ-み[風見](名) 風の方向を候(ウカ)ふために、風に隨ひて轉回するやう、屋上又は船中などに設けある具。かざきり。かざぐるし。(候風、檢風)。

かざみ(名) 【動】「かざめ」に同じ。

++かざ-み-ぐさ[風見草](名) 【植】「やなぎ」の異

かさ-むき[嵩](自、ま四) ㊀かさばる。 ㊁あごる。(驕)。

かざ-むき[風向](名) かぜむき。

かざめ(名) 【動】かにの一種、頭胸部は著しく左右に延長し、其間鎖突出す、疎なる顆粒ありて短毛を有す、體は暗綠色にして體長大なるは二尺許に達す、我國東海に多く產す、常に近海の泥沙に棲息す。(蟹鮮、虎蟹)。

かざ-よけ[風除](名) 風をさけぎるもの。

かざり[飾](名) ㊀かざること。(飾、裝)。 ㊁かざりたるもの。又、かざるに用ふるもの。「正月の—」。 ㊂髮。 ——**ぐし**[飾串](名) 古昔、冠につけたる裝飾の一種。 ——**ざよく**[飾職](名) 金屬にて細かき細工をする職業。又、其職業の人。(金銀工)。 ——**た-つ**[飾立](自、た下二) りつばにかざる。きれいにかざる。 ——**たてる**[飾立](他) 「かざりたつ」の訛。 ——**だま**[飾玉](名) ㊀裝飾に用ふる玉類。 ㊁【鑛】水晶・碧玉又は瑪瑙等の稱。二に、半寶玉といふ。 ——**つ-く**[飾付](他、か下二) 品物などをかざりそろふ。 ——**つける**[飾付](名) かざりつくること又、かざりつけたるもの。 ——**つける**[飾付](他) 「かざりつく」の訛。 ——**ねは**[飾繩](名) 一月の松飾に用ふる繩。又、まめなは。 ——**もの**[飾物](名) かざりに用ふるもの。又、かざりてあるもの。 ——**や**[飾屋](名) 「かざりまよくに」に同じ。 ——**わら**[飾藁](名) 藁にてつくりて一月の飾に用ふるもの。 ——**をれろす** 貴人が髮を剃(ソ)りて曾尼となるにいふ。

かざ-る[飾](他、ら四) ㊀外觀をよくす。文飾を加ふ。よそほふ。りつばにす。はなやかにす。(裝飾)。 ㊁修めとゝのふ。 ㊂人爲を加ふ。「素朴にしてかざらず」。 ㊃內實の非なるに、外觀のみを飾る。

かざ-わき[風邊](名) 風の吹く方角にそれたる方。

かざをり-ぼし[風折烏帽子](名) ゑぼしの一種、さきを折りたわめたるもの。

[ゑぼしをりをざか]

かざ-をれ[風折](名) 樹木などの風に吹き折られたること。又、其樹木。

(か-さん[加算](名) ㊀年を加ふること。 ㊁【數】二つ以上の數をよせあつめて其値を求むること。よせざん。加法。 「う。衛生。

(か-さん[加養](名) 《食物を加ふる義》やうぞや

(か-さん[家產](名) 家の財產。まんだい。(家資)。

(か-ざん[家山](名) ふるさと。故郷。(郷國)。

かし[樫](名) 【植】殼斗科に屬する喬木、葉は長楕圓形にして尖り、長き葉柄を有し十分に成長すれば平滑となる、木材は帶赤色にして種々の用に供し、又、觀賞用として栽培せらる。あかがし。(橿、樫)。

かし[枷](名) 鐵又は木にてつくり、罪人などの身體の自由を束縛するために、其體に嵌(ハ)むるもの。「くびー」「てー」「あしー」(戒具)。

かし[戕](名) 船を繫ぐくひ。もやひぐひ。(舸)。

かし[貸](名) ㊀貸すこと。又、貸したる物。 ㊁「かしかた」に同じ。

かし[河岸](名) 河水又は湖水などの岸。

(か-さ[家資](名) まんだい。(財產)。 「の下士官。

(か-さ[下士](名) ㊀卑き身分のさむらひ。 ㊁陸海軍家につかふさむらひ。(家臣)。

(か-さ[家士](名) 家につかふ士。

(か-さ[下肢](名) あし。脚部。

(か-さ[瑕疵](名) きず。あやまち。けつてん。

(か-さ[家事](名) 家內の事。かせい。 [ずー]。

(が-さ[餓死](名) うゑじに。

かし-あげ[河岸揚](名) 荷物などを、河岸より揚ぐること。みづあげ。にあげ。りくあげ。

かし-いへ[貸家](名) かしや。

かし-ぢ[植](名) 「かまゆう」(何首烏)に同じ。

かし-うり[貸賣](名) かけ。かけうり。

かじか[鰍](名) 【動】硬鱗類に屬する魚、淡水に產す、形はぜに似て常に石の下に隱匿す、體長三寸許に達す、食ふべし。(鰍魚)。

か-おか[河鹿](名) 【動】かはづの一種、外觀醜くけれど美音を發す、山間の渓流などに棲む。(石蛙)。

かし-かた[貸方](名) ㊀物を貸す人。かして。(債主、金主)。 ㊁簿記にて、帳簿に對し何物かを渡したる方、例へば、一反の反物を拾圓にて買ひ取りたりとせば、拾圓の金額は貸方なり。

かし-がま-し[囂](形、二) かしましし。やかまし。(喧、聒)。

(かじか-むだ(自、ま四) 手足こゞえて動かず。「手がー」。(龜裂)。

++かおき[樣](名) 「かんおき」の古名。(樣、鬱靴)。

かしき[炊](名) ㊀飯をたくこと。(爨)。 ㊁飯をたく人。 ——**がて**[炊糧](名) 雜炊(ザフスイ)の類。(餌飯)。 ——**どの**[炊殿](名) 飯をたく所。

かしく[恐](名) 婦人の手紙の末尾に用ふる語。頓首又は謹言などの類。 「飯につくる。たく。(爨)。

かし-ぐ[炊](他、か四) 穀類を蒸又は蒸して

++かし-ぐ[傾](自、か四) かたむく。(欹)。

++かし-ぐ[傾](他、か下二) かたむかす。

かじ-く(自、か下二) ㊀やせはそる。あとろ(弱る。憔悴)。 ㊁冷えちゞむ。こゞえひるむ。(龜裂)。

かし-ぐら[貸藏](名) 他に貸す土藏。 [組]。

(か-おくわん[下士官](名) 陸海軍の下級の士官、即ち、陸軍にては曹長・軍曹及伍長をいひ、海軍にては上等兵曹及兵曹をいふ。かた。

(かしける(自) 「かじく」の訛。

かしこ[彼處](代) 彼の所。あそこ。あしこ。(彼許)。

かしこ[恐](名) ㊀かしこきこと。 ㊁かしく。

かし-こ[貸越](名) 定限より貸し過ぎたること。

かしこ・し[恐、畏](形、一) ㊀もったいなし。おそれ多し。㊁かたじけなし。ありがたし。

かしこ・し[賢](形、一) ㊀才智多し。思慮深し。㊁勝(ス)れたり。まされり。㊂＋好し。㊃＋甚し。

かしこ・どころ[賢所](名) 宮中にて、祖宗を祀り神鏡を置かせ給ふ殿。けんそよ。ないしどころ。

＋**かしこ・どり**[畏鳥](名)【動】鷹の一名。

かしこまり[畏](名) ㊀かしこまると。㊁おれい。謝辭。㊂わびごと。託言。「佛に—聞ゆるこそくるしけれ」。㊃あとがめ。かんだう。

かしこまる[畏](自、ら四) ㊀おそれつゝしむ。㊁わび入る。㊂正しく座す。ひざまづく。㊃つつしみて承る。

かしこ・む[畏](自、ま四) つゝしむ。かしこまる。「かしこみて、つかへまつらむ」。

かしこ・ざしき[貸座敷](名) ㊀料をとりて貸す座敷。かしま。㊁ずよろうや。いうずよや。

かしこ・さげ[貸下](名) 政府が民間に物を貸すこと。

かし・ち[貸地](名) 貸す土地。「(典房)」。

かし・ぢち[家賃](名) 賃に入れたる建物。いへぢち。

かし・ちん[貸賃](名) 貸したる物の料。

かし・ぢつ[暇日](名) 用なき日。ひまのひ。「證書。

かし・ぢよりもん[貸證文](名) 財物をかしたるむ。

かし・せき[貸席](名) ㊀料をとりて貸す坐席。㊁ずよろうや。たやうざや。

かし・そつ[下士卒](名) 下士官と兵卒と。

かし・だな[貸店](名) 人に貸す店。

かしづき[傅](名) ㊀かしづくこと。(護)。㊁もり。かいぞへ。(待)。——**びと**[傅人](名) もり。かいぞへ。

——**もの**[傅物](名) 大切にすべきもの。

かし・づく[傅](他、か下二) かしつけをなす。かしわたす。かす。

かし・づく[傅](他、か四) ㊀附き添ひ守る。まもる。(護侍)。㊁愛す。かはゆがる。㊂後見す。うしろむ。たすく。

かし・つけ[貸附](名) 他人に後に還附せさする約にて、或物を交附し、又は或物の使用若しくは收益をなすを許すこと。——**きげん**[貸附期限](名)

貸附の約が存續する期間。——**れう**[貸附料](名) 借主が貸主に支拂ふ料、地代・家賃の類。

かし・て[貸手](名) 貸す人。かりての對。

かしてきにん・ぢよりぢよ[下士適任證書](名) 成績優等なる兵卒に、服役滿期の際、下士に適任せしむることを證して授與する證書。

かし・どり[樞鳥](名)【動】「かけすの一名。「人。

かし・ぬし[貸主](名) かしつけをなす當事者。貸す

＋**かし・は**ワ[葉](名) (炊葉の義といふ)古代に、炊きたる飯などを盛りし木の葉の類。

かし・はワ[柏](名) (前條と同義なりといふ)【植】殼斗科に屬する喬木。葉は圓大にして長橢卵形をなし、鋸邊に波狀の鈍齒を有し、下面に褐色の毛を生ず。幹は薪炭料に樹皮は染料及柔皮用に供せらる。(大葉樫)。㊁古代に、かしはの葉に食物を盛りしより、轉じて、食器の稱。

＋**かしはワ**[黃鶏](名)【動】茶色の毛の鶏。肉味美なる人。(勝司)。

＋**かしはワ・で**ワ(名) ㊀飲食の羞膳。㊁羞膳をつかさどる人。(勝司)。

かしはワ・でワ[柏手](名) 神を拜するに、掌を打ちあはして鳴らすこと。(振動拜)。

＋**かしはワ・ばさみ**ワ[柏夾](名) 古昔、凶事に用ひたる冠、白木をもて造れり。

かしはワ・もちワ[柏餅](名) ㊀ふたつに折りたる柏の葉に包みたるあんもち、五月節句の供物とす。(柏葉餅)。㊁一枚の布團にくるまりて寢ること。

かふふワ[歌集](名) 和歌を集めたる書。

かふふワ[家集](名) 一人の述作の歌をあつめたる書。「貫之—」。

かふふワ[家什](名) 家の什物。家具。

かふふワ[我執](名)【佛】心の所證に執着して我を立つること。我意を偏(ヒタ)り執ること。

かふふ・ぶんさん[家資分散](名)【法】強制執行處分により、義務を辨濟する資力なき者に對して、管轄裁判所が、職權又は申立により決定を以てなす處分、此處分の宣告を受けたる者は、其當日より選擧權及被選擧權を喪失するものとす。——**ぢや**[家資分散者](名) 家資分散の宣告を受けたる者。

かし・ま[貸間](名) 價をとりて貸す部屋。

かしましシ[囂](形、二) 言煩(サワ)て又は騷多くして厭(ヒ)ふべし。かまびすし。やかまし。

かぢまたち[鹿島立](名) かどで。ぢゆったつ。たびだち。(首途)。

かぢまの・とさぶれ[鹿島事觸](名) 昔時、其年の吉凶につき鹿島の神の神託を、春毎に全國にふれまはりしと。又、其人。

カシミヤ[Cashmere](名) 舶來の織物、地質強く光澤多く、且嫩を生ぜず、多く女學生の袴地に用ひらる。

かし・もの[貸物](名) 損料にて貸す夜具。(京阪地方の方言)。

かし・や[貸家](名) 人に貸す家。貸屋。「車。

かぢや[香車](名) 將棋の駒の名。

かぢやうヤウ[嘉祥](名) めでたきこと。めでたき

ことし。ずゐぢやう。

かぢやうヤウ[假晶](名)【鑛】或鑛物が他の鑛物によりしはむると。

かぢやうヤウ[嘉賞](名) よみしはむると。

かぢやうヤウ[嘉祥](名) 陰曆六月十六日に瘟を攘(ハラ)ふために、菓子又は餅十六個を先づ神に供へ後これを食ひしと。後世にては、錢十六文をもて物を買ひて祭るととなれり。——**ぐわ**ヤウ[嘉祥食](名) 前條に同じ。

かぢやうヤウ[下情](名) 民間の情態。ぢもう。

かぢやうヤウ[佳釀](名) よきさけ。美酒。

かぢやうヤウ[牙商](名) さいとり。なかがひ。

かぢやうヤウ[牙城](名) 城の本丸。「る音。

＋**かしや・かしや**(名、副) かはきたるもの、相觸

＋**かしや・がしや**(名、副) ㊀堅くして細かきものの相觸るゝ音。㊁物事のさわがしく又はやかましくいひ立つるさまにいふ語。「なむと。

かぢやく[呵責](名) とがめかること。せめさい

かぢやく[假借](名) ㊀かると。よると。㊁かすと。ゆるすと。「寸毫も—せず」。㊂漢字の六書の一、其字本來或意味を有せざるに、他の同聲の字の或意味をかり用ふるもの。例へば、哥と歌との如し。

かぢゆ[嫁娶](名) ㊀よめいりとよめとりと。「—の禮」。㊁結婚。

かぢゆ[雅趣](名) 風雅なるおもむき。(雅致)。

かぢゆう[何首烏](名)【植】蓼科に屬する蔓草、根莖は毛多くして味苦(ニ)し、元來は支那產のものにして、其根莖はかぢゆうだまと稱し、藥用とし、又、灰汁を以て煮て食用とす。(夜合)。——**いも**[何首烏薯](名) かぢゆうの根莖。——**だま**[何首烏玉](名) 前條に同じ。

かぢゆう[家從](名) ㊀親王家又は諸王家の庶務に從事する屬官にて、家扶の次席なるもの。㊁華族の家人にて、家扶に屬從し庶務に從事するもの。

かぢゆう[加重](名) ㊀加へて重くすること。㊁【法】再犯以上又は犯罪人の特別の情狀により、法律上にて、刑を加へて重くすること。されど其結果は罪名を變ずるとなし。

かぢゆく[家塾](名) 一節人の設立せる塾。えゝ

かぢゆん[河潤](名) 恩澤の及ぶを河の土地を潤ウるに譬へ、「文字—」。

がぢゆん[雅馴](名) みやびやかにしておだやかなること。「かなると。

かぢよ[歌書](名) 和歌の書物。

かぢよ[箇所](名) これと目ざす處、ところ。

かぢより[下春](名) 日の西に沒すること。

かぢより[家乘](名) 家の記錄。「ると。農作。

かぢよく[稼穡](名) 穀物を植ゑ又は取り入る

かし・よね[粳米](名) せんまい。あらひよね。

かしら[頭](名) ㊀かうべ。首部。㊁かみ。頭髮。「をゆる。㊂頭だつ人。を

さ。(長)。㊃仕事師のおやかた。㊄刀の櫛頭。つかがしら。——**あげ**[頭上](名) 事項又は金額などを、他の行と區別してかきあぐること。——**がき**[頭書](名) 本文の上に解釋などを書きそふること。(冠註、標註)。——**ぎ**[頭字](名) 文章若しくは字句の首にある文字。おやもぢ。——**たつ**[頭立](自、た四) 其社會にてをさとなる。首座をたむ。上にたつ。——**づつみ**[頭裹](名) づきんぱうま。——**の・ぢも**[頭霜](名) 白くなりたる髮。——**の・ゆき**[頭雪](名) 前條に同じ。——**ぼね**[頭骨](名) 「かしらぎ」に同じ。

ぼね[頭骨](名) ㊀頭の骨。づがいこつ。㊁魚の頭にある丁字形の骨。——**やく**[頭役](名) をさ。長。——**をあつむ**[鳩頭](名) 多人數よりあつまりて相談などするをいふ。——**をれろす** 髮をそりて僧尼となる。

——**がしら**[頭](接尾) 或語に添へて其時、其を又は其とたんの意を表はす語。「てあひ—」。

かじり・つき[齧付](名) かじりつくこと。

かじり・つく[齧付](自、か四) ㊀ひつしと其物に取り付きて離れず。㊁其位地を離れじとさまざまに力を盡す。

かじ・る[齧](他、ら四) ㊀物の片はしを噛(カ)む。「鼠がー」(咬)。㊁僅かの部分に手をつけとゝろむ。「少しく法律をー」。「らい。

かぢん[家臣](名) 家につきたる臣。けにん。け

かぢん[河身](名) 河の水の流るゝ部分。

かぢん[嘉辰](名) よきひがら。めでたきひ。

かぢん[歌人](名) 歌を獻(ヨ)む人。うたよみ。「い。

かぢん[佳人](名) みめよき女。美人。

かぢん[家人](名) ㊀妻子等族。㊁かたん。けら

かす[滓](名) ㊀をどみ。もり。㊁酒の醪(モロ)の濾(ヨ)して殘りたるもの。(糟粕)。㊂よきところを取り去りて、あとに殘りたる不用物。

かす[他、さ四] ㊀ひたす。つく。(漬、浸)。㊁水にてあらふ。穀類をとぐ。(研)。

かす[貸](他、さ四) ㊀後に返さす約束にて物を交付す。或期間だけ其物の或用又は收益をなすことを許す。(假)。㊁宥恕す。ゆるす。「罪をー」。㊂力を添ふ。たすく。「智慮をー」。

かす[嫁](自、さ變) よめに行く。とつぐ。よめいる。「人にー」。

かす[嫁](他、さ變) よめにやる。とつがす。

かす[架](他、さ變) かけわたす。

かす-すぼす[乾](自、さ下二) 瘡又は創のかさぶた乾く。かさる。「醫物が—」。

かず[數](名) ㊀物事の多寡。がぞふべきもの。かさ。りやう。㊁數多あると。くさ〳〵。いろ〳〵。「—ある中に」。㊂取り立て、かぞへうるゝと。「—ならぬ身をさほど恨に」。[員]。

ガス[瓦斯=Gas](名) ㊀流動し易くして且一定の體積を有せざる物質、即ち、空氣・水素・酸素等の如きこれなり。氣體。㊁「せきたんガス」の略言。㊂「ガスとう」の略言。㊃「ガスいとをり」の略言。

が-す[賀](他、さ變) いはふ。ことぶく。

が-すせ[駕](他、さ變) ㊀車馬を御す。馬車に乘る。「車に—」。㊁側御す。あつかふ。つかふ。㊂上に出づ。まのぐ。「人に—」。

ガス-いと[瓦斯絲](名) 瓦斯にて、つやをつけて練(ネ)りたる絲。——**-おり**[瓦斯絲織](名)「ガス」絲を經(タテ)緯(ヨコ)にしてもりたる織物。

(か-すう[假數](名)【數】對數の小數の部分、例せば、log20=1,3010 に於て、3010の如し。

かすか[幽・微](名) ㊀あきらかならざると。まかと認めがたきと。はのか。「—なる影」。㊁勢さびしきと。見るかげもなきと。「—なるくらし」。㊂すくなきと。わづかなると。

(かす-かす(名) うまみもあぶらけもなきさまにいふ語。「—した氷豆腐」。「また、きよた。

かず-かず[數數](名、副) いろ〳〵。たくさん。あまた。

かずが-とうろう[春日燈籠](名) 燈籠の一種、蓋(サヤ)天ならずして丈高く、火袋は六角又は四角にして、二方に雌雄の鹿の形を刻み他の二方には雲形に日月を浮彫にしたるもの、木造と石造とあり。

かすか-に[微・幽](副) ㊀ほのかに。㊁さびしく。㊂すこしく。

かすがひ(イガ)[鎹](名) ㊀戸ぶまりのかけがね。かきがね。㊁隔壁同樣に曲りたる釘、物の合目を繋ぎ止むるために打ち込むもの。(鐵鋲、蝙蝠釘)。㊂兩者の間を繋ぎとむるものゝ稱。「子は夫婦の—」。

ガス-きくわん[瓦斯機關=Gas engine](名) 石炭瓦斯を活塞を具へたる圓筒内に導き、これに點火して爆發せしめ、活塞を動かして動力を生ずしむる裝置の機關。

かす-きやく[粕客](名) 利益なき客。(元祿時代の語)。

かす-げ[糟毛](名) 馬の毛色、灰色に白きさし毛あるもの。(鞭、衣馬)。

ガス-けいりやうき(ケイリョウ)[瓦斯計量器](名)「ガスメートル」に同じ。

かす-ど(名) 【動】硬齒類中たひ科に屬する魚、體形は稍圓形にして側扁なり、體色は淡褐にして體側に濃き同色の斜線ありて、鮮明なる綠色の斑點散在す、我國沿岸多少これを產せざる所なし。(練鯛)。

++かす-どめ[醡](名) にごりざけ。

かず-さし[數差](名) かずとり。「と出茶ず。

かず-ずれず[數不知] 數あまりに多くして知るべからず。

ガス-たい[瓦斯體](名) 氣體。

ガス-ためゝ[瓦斯溜=Gas-holder](名) 瓦斯を貯へもき隨時所要の量だけ供給する裝、水上に浮べたる鐵製の圓筒にして、瓦斯の入るときは圓筒上り、出づるときは、其重さにて下るやうの裝置にしたるもの。「あげたるもの。

かず-つか[數塚](名) 射的をおくために砂を盛りたるもの。(柏藏)。

かす-づけ[糟漬](名) 肉又は野菜などを酒糟に漬くると。又、其漬けたるもの。(柏藏)。

カステイラ[粕底羅](名)《スペインのCastilla といふ地より、はじめて製出せしが故に、此名あり》一種の菓子、雞卵と砂糖とを小麥粉にまぜ、鍋にて蒸燒きにしたるもの。(卵糖)。

カステラ(名) 前條に同じ。

ガス-とう[瓦斯燈=Gas-burner](名) 石炭瓦斯を管に通しこれに點火する裝置の燈。(煤氣燈)。

かず-とり[數取](名) ㊀或物によもくて其物を數ふること。㊁多くの數をかぞふるとき、其心覺のまるしとなすもの。(籌)。

かず-の-と[數子](名) (かどの子の轉)鍵(ニル)のはらごを乾したるもの、水にひやしおきて、これに醬油などをかけて食す、數の子を子孫繁盛の義にとりて、新年・婚禮及其他の祝儀に用ふ。(青魚卵)。

ガス-はつどうき[瓦斯發動機=Gas engine](名)「ガスきくわん」に同じ。

か-すひ-どり(イヒ)[蚊吸鳥](名)【動】蕪雀類中怪鳥類に屬する鳥、嘴は扁平にして口裂濶し、翼長くしてよく飛翔す、足は小さく且微弱にして地を歩むに適せず、夜間出でゝ、昆蟲類を食す。(蚊母鳥)。

++かず-ふ[數](他、は下二) かぞふ。

++かずへ-の-かみ(カエ)[主計正](名) 主計寮の長官。

++かずへ-れう(カリヨウ)[主計寮](名) 古昔、民部省の所管にして、調庸又は貢獻の事をつかさどりし所。かぞふるつかさ。

++かず-ま-ふ(ふまふ)[數](他、は下二) ㊀かぞふ。㊁人なみにかぞふ。

かすみ[霞](名) ㊀かすむと。(霧)。㊁朝又は夕に、天空の日光を受けて赤く見ゆると。あさやけ。ゆふやけ。㊂春の空の明かに見えぬと。(霧)。——**-いし**[霞石](名)【鑛】硅酸鑛物の一種、透明若しくは不透明にして玻璃光を帶ず、色は一樣ならず。——。

の-とろも[霞衣](名) かすみを、衣にたとへていふ語。——**-の-ほら**[霞洞](名) 仙洞御所の異稱。——**-の-まゆ**[霞眉](名) 德川時代に、奥女中が、眉のところを墨をはかにさして粧(ヨソホ)ひし眉の稱。——**-そめ-づき**[霞初月](名)《此月より、かすみそむといふ義》陰曆正月の異稱。

かす-む[霞む](自、ま四) ㊀霞たなびく。(霧)。㊁明かに見えず。(翳)。

かす-むめ[掠む](他、ま下二) ㊀羅(ツ)かに盜む。ぬすむ。㊁強(シ)ひて奪ふ。うばふ。㊂一部分を盜奪す。かする。㊃はのめかす。諷す。㊄解れて過ぐ。僅かにさはる。

ガス-メートル[瓦斯米突=Gas-meter](名) 石炭瓦斯の產出高又は消費高を測る一種の器械。

++かす-も[滓面](名) そばかす。(雀斑、飼面)。

かず-もの[數物](名) ㊀數の多くあるもの。㊁數すくなきもの。

++かす-もみ(名) 糟漬にしたる肉。「かしたるもの。

かす-ゆざけ[糟湯酒](名) 湯にさけのかすを浮(ウ)

かすり[掠](名) ㊀かすると。㊁一部分をとると。うはまへをはねると。「—を取る」。(微利)。——**-ず**[掠傷](名) かすれきず。

かすり[飛白](名) ㊀霏漬の處々擦(ス)りて墨色しく見ゆると。㊁織物の處々かすれたる如き模樣。又、其模樣ある織物。「さつま—」。——**-がき**[飛白書](名) かすりに書くと。又、其書法。(隱)。——**-おま**[飛白縞](名) かすり模樣ある織物。

かす-る[掠](自、ら下二) ㊀輕くふる。ふれ過れ過ぐ。㊁墨を乏しくなりて、霏漬かすりとなる。

かす-る[掠](他、ら四) ㊀輕くふる。ふれ過ぐ。「矢が身を—」。㊁一部をかすめとる。うはまへをはねる。㊂かすれがきをなす。

かすれ[掠](名) かろく物にふると。かすると。(輕觸)。——**-きず**[掠傷](名) 物のかすりて皮膚に生じたる微傷。「彈丸の—」。

(かすれる(自)「かする」の訛。

(かす-する[歌吹](名) うたをうたひ笛を吹きなどすると、轉じて、遊藝又は遊興。——**-かい**[歌吹海](名) 遊藝又は遊興の盛んなる所。

かせ[桿](名) つむにて取りたる絲をかけ卷く具、殆んど篗(ウ)の訛をなして篗より大きし。かせひ。

かせ[枷](名) ㊀「かし」(枷)に同じ。㊁三味線のこま。

かせ[捷](名) 水をふせぐための竹籤。

かせ[乾](名) うにの殼、かぶと。

かせ[乾](名) かさぶた乾くと。

かせ[風](名) ㊀氣壓の變化によりて起る大氣の流動、高氣壓の地より低氣壓の地に向ひて流動す。㊁傳はり來ると。「—のたより」。㊂さま。けぶり。やうす。「風病—」。㊃あしき氣候に中り、體内の藩營を妨げられて、體溫其宜しきを失し、ために寒氣(ケム)又は發熱などを生ずると。ふうがや。かぜけ。(風邪、感冒)。——**をくらつて にぐ** すきまをうかゞひてにげ失(ウ)するにいふ。——**をひく** 風邪にかゝる。

(か-せい[加勢](名) ㊀たすくると。勳力をなすと。たすけ。㊁たすけの兵。ぐんぜい。

かせ-い[家政](名) 一家の經營。家のとりまり。

(か-せい[家聲](名) 一家のほまれ。家のひやうばん。

(か-せい[歌聲](名) うたふ聲。「一響を過む」。

(か-せい[假聲](名) こわいろ。つくりごゑ。

(か-せい[苛政](名) 多額の租稅を取り又は人民の自由を束縛する等の政治。殘酷なる政治。「—は虎よりも猛し」。

(か-せい[苛征](名) からき租稅のとりたて。

(か-せい[歌聖](名) 歌に最もすぐれたる名人。

(か-せい[苛稅](名) からき租稅。

(が-せい[我精](名) 骨を惜まず勳むると。

かせい-カリ[苛性加里=Caustic potash](名)【化】水酸化カリウム」に同じ。

かせい-ソウダ[苛性曹達=Caustic soda](名)【化】水酸化ナトリウム」に同じ。

カセイタ[梨絲](名)《外國語なるべきも、原語明かならず》梨に砂糖を混じて醸したる菓子。

かせ-いと[桿絲](名) 桿にかけたる絲。(綛絲)。

かせ-いり[風入](名) 風の吹き入ると。「—よい」。

++かせき(名)【動】鹿の古名。

かせぎ[桿木](名)「かせ」(桿)に同じ。

かせぎ[稼](名) ㊀はげみはたらくと。はたらき。㊁くらし。なりはひ。——**-て**[稼手](名) かせぎにん。——**-にん**[稼人](名) ㊀かせぎて一家を養ふ人。「—に死なれて困る」。㊁よくはたらく人。

かせ-ぐ[稼](自、か四) 家業に精を出す。はげみはたらく。ほねをる。(出精)。

かせ-くさ[風草](名)【植】茅の一種、其なびく方によりて風向の知らるゝ故に此名あり。(知風草)。

かせ-け[風氣](名) かぜけ。「同じ。

かせ-ぎり-ぐさ[風知草](名)【植】「かぜくさ」に同じ。

(か-せつ[假設](名) ㊀假に設くると。假につくると。「一說」。㊁[Hypothesis] 實驗によりて確定せ

られたる事實を說明せんがために、假に設けたる說。ふくせつ。

(か・せつ)[架設](名) かけわたすこと。わたし設くること。「橋梁の—」。

(か・せつ)[佳節](名) よきひから。又、いはひ日。「天—」。

(か・せつ)[佳絕](名) 最もすぐれてよきこと。

(が・せつ)[賀節](名) いはひ日。「祝。祝杖。

かせ・づゑ[桂杖](名) あたまが桂(カセ)の形をなす杖。

かせ・とほし[風通](名) 風の吹きかよふこと。

かせ・ぬき[風抜](名) 空氣の通ふ穴。かざぬき。

かせ・の・かみ[風神](名) かぜを吹かする神。

☆かせ・の・たまくら[風枕](名) かぜの吹く處に「さ、ひやうばん。いぬること。

かせ・の・たより[風便](名) ほのかなる風聞。うはさ。

かせ・の・つて[風傳](名) かぜのたより。うはさ。

かせ・ひ[桂](名)「かせ」に同じ。

かせ・ひき[風引](名) 風邪に犯さるゝこと。かぜ。「—の氣味」。(感冒)

かせ・ぶか[桂鱶](名)【動】「ゑゆもくざめ」に同じ。

☆かせまち・づき[風待月](名) 陰曆六月の異稱。

かせ・まつり[風祭](名) ㊀立田又は廣瀨の神をまつりて豐作をいのること。 ㊁稻の實のるさかり頃に、風の神を祭ること。

かせ・むき[風向](名) ㊀風の吹く方向。 ㊁ひやうばん。雲譽。「—がわるい」。

☆かせる[乾](自)「かす」の訛。 「がかはった」。

(か・せん)[歌仙](名) 和歌の名人。「三十六—」。

(が・せん)[牙錢](名) てすりうり。こちせん。

(が・せん)[俄然](名、副) にはかなるさまといふ。

☆かぞ[父](名) 父。「—いろはいかになげかん」。たちまち。だしぬけ。「—雲消く」。(突然)

かぞ[楮](名)【植】「かうぞ」の轉言。

カゾアル(名)《ポルトガル語Casuar の訛、「イギリス語Cassowary》【動】「ひくひどり」の一名。

☆かぞ・いろ[父母](名) ちゝはゝ。ふぼ。

(か・ソウ)[加僧](名) 會式などのすけに出る法師。

(か・そう)[下層](名) ㊀ただのかさなり。ただのだん。 ㊁下方の階級。「—に沈淪す」。 「と、(增加)。

(か・そう)[加增](名) 加はりますと、又、加へます。

(か・ぞく)[家族](名) 戶主の家長權の下にある親族の團體。いへ。うから。やから。一家。一門。 —— **せいど**[家族制度](名) 家族を國家社會の單位となす制度。此制度にては、家長のみ人格を有し、家族及其財產を支配して、家族は單に一の物體たるに過ぎざるものなり。

(が・ぞく)[雅俗](名) 雅なるものと俗なるものと。上品なるといやしきと。風流と野卑と。

(かそく・ど)[加速度](名)【理】速度の變化の割合、單位時間に對する速度にて計る、速度の增加する場合には正なれど、速度減ずる場合は負となる。

(かそく・どう)[加速動](名)【天】時間の經過する に從ひて、其路程の次第に增加し行く運動。

☆かそけ・し[幽](形、一) かすかにてあり。

☆かそ・ふ[掠](他、は四) かすむ。

かぞ・ふ[數](他、は下二) ㊀數を積もる。勘定す。計算す。 ㊁取り擧げていふ。あぐ。「罪をかぞへてこれを責む」。

かぞへ・あ・ぐ[數擧、枚擧]。 ㊀かぞへたつ。(數擧、枚擧)。

かぞへ・うた[數歌](名) 二三三の歌を追ひて唱ふるやうに作りなしたる歌。即ち、一つとやの如き歌又はてまり歌などの如きもの。

かぞへ・き・る[數切](他、ら四) かぞへ終る。

かぞへ・た・つ[數立](他、た下二) ひとつ〳〵かぞふ。かぞへあぐ。

☆かぞへる[數](他)「かぞへる」の訛。

かた[肩](名) ㊀【生】胸と體との接續する所、一に肩帶といひ、前方は鎖骨後方は肩胛骨より成り、これに諸種の筋肉附着して其運動をなす。 ㊁衣服の肩にあたる部分。「—がよごれる」。 ㊂獸の前肢又は鳥のつばさのうへなる部分。 ㊃物の右の上。「—に記す」。 ㊄擡(ハ)ひたる荷。「—をあろす」。 —— **をならぶ**[比肩] 其等位を同じくす。

かた[潟](名) ㊀海岸の遠淺にして、潮來れば隱れ潮去れば現はるゝ所。ひがた。 ㊁海水より上に見はれいでたる泥砂。 ㊂[補又は潟]西國の方言。「松浦—」。 ㊃湖又は沼。東北の方言。「八郎—」。

かた[形](名) ㊀知らるべき物體のありさま。かたち。 ㊁もやう。あいろ。 ㊂劍術又は柔術などにて、其流派の仕方。「—をつかふ」。 ㊃ひきあて。抵當。 ㊄うらかた。占兆。 ㊅錢の文字の刻みてある方。

かた[模](名) ㊀ためし。さきたり。典例。「—の如く」。 ㊁てほん。のり。模楷。 ㊂鑄物の具。金屬を溶(ト)かし入れて或形を作るもの。いがた。(型)。

かた[方](名) ㊀はうろ。はうがく。 ㊁むかふ所。むき。はうかう。 ㊂なかま。くみ。みかた。 ㊃其局にあたる人。かゝり。「勘定—」。 ㊄てだて。さかた。方法。

かた—[片](接頭) ㊀或語に冠して、對にてあるべきもの、たゞ一つある意を表はす語。「—足」。「—膝」。 ㊁或語に冠して完全ならざる意を表はす語。「—言」。 ㊂或語に冠して一方に偏したる意を表はす語。「—田舍」。(片)。

カダ[迦陀](名) ㊀梵語。「ピンパシの千萬倍。無限大。 ㊁佛教のうたひもの。偈(ゲ)。 「殿—」。「柳暮人—」。

—がた[方](接尾) 人を指して呼ぶに添ふる敬語。

かた・あげ[肩上](名) 小兒などの衣服のゆきの長きを肩に縫ひ上げて置くもの。

かた・あし[片足](名) ㊀一方の足。(隻脚)。 ㊁一方の足のみある不具の人。

かた・あて[肩當](名) ㊀衣服の裏の肩のあたる部分につけたる布片。 ㊁寒さを防ぐために枕と肩との間にはさむ布。

かた・あひて[片相手](名) 一方の相手。

かた・あふぎ[片扇](名) 他をあふぎたて又は騷ぎを鎭むるときなどに、つかふ扇のあふぎ方。

かた・あぶら[固油](名) ぴんつけあぶら。

かた・あめ[固飴](名) 固く製したる飴。(餳)。「と、

☆かた・あらし[偏荒](名) 田を一年がはりに作る

かた・いき[片息](名) たえ〳〵なる息。

(か・たいげん)[假體言](名)【文法】動詞をいひすて名詞となせるもの。

かた・いぢ[片意地](名) 我儘なること。意地を立てとほすこと。又、其性質。(偏意地、執拗)。

かた・いっぱう[片一方](名) 兩者の中の一方。

☆かた・いと[片絲](名) より合はせぬ絲。ひとといと。 —— **どり**[片絲鳥](名)【動】雁の異稱。「—くるるあふ笹」に冠らする詞。 —— **の**[片絲](枕)「よるる」の血の涙なり」。

かた・いろ[片色](名) のしめの一種、色の最も淺はしきもの、あもにかりぎぬに用ふ。

(か・たう)[歌道](名) 歌の道。(歌學)。

(か・たう)[家道](名) 家計。家政。

(か・たう)[河道](名) 河水の流るゝ道。

(か・たう)[牙纛](名) 大將軍のたつる大旗。支那の古昔には、其上に象牙の飾をつけたりといふ。

かた・うづら[片鶉](名) 雌雄相揃はずして、唯だ一匹にてゐる鶉。

かた・うで[片腕](名) ㊀片方の腕。かたて。 ㊁最もたのみとする輔佐の人。(股肱)。

かた・うど[方人](名) ㊀相對せる一方の人。 ㊁わがかたの人。なかま。みかた。(贊助者、荷擔人)。

☆かた・え[片枝](名) 片方の枝。

かた・ぇち[片落](名) ㊀一方のみ重きと、平均を失すること。(偏重)。 ㊁一方のみをひいきすること。公平を失すること。えこ。(偏頗)。 ㊂因などの一方を切りゐかたの部分。「嗣の—」。 十分に成長せぬこと。

☆かた・れもひ[片生](名)

かた・れも[片思](名) 我を思はぬ人を思ふこと。かたこひ。(片戀慕)。

かた・れや[片親](名) ㊀兩親の中父又は母の稱。 ㊁兩親の中一人かけて、其殘れる一人。

かた・れろし[肩下](名) 東あそびの曲の名。肩をぬぎて舞ふ。

かた・がき[肩書](名) ㊀本文の右上に書き添ふること。 ㊁人の姓名の右上に居所などを書くこと。 ㊂[官位・勳等又は學士號などの稱。

かた・かけ[偏掛](名) かたの帆をかくること。「に乘りし」。

かた・かけ[肩掛](名) 婦人などお、外出のとき肩にかけあほふもの、毛絲又は羅紗にて製す、模樣又は色は種々なり。 「ぬ部分。(除處)」。

かた・かげ[片陰](名) ㊀物の陰。 ㊁日のあたらぬ一方。

かた・かた[片方](名、副) ㊀堅き物の相觸れて發する音。 ㊁板の上を下駄にて小走りに歩むときなどの音。

かた・がた[方方](名) ひとゞ〳〵。人たち。

かた・がた[方方](代) 多人數をよぶ時の敬語。きみら。あの〳〵がた。 「〳〵。とりまぜて。

☆かた・がた[方方](副) あれこれ。いろ〳〵。さま

かた・がた[旁](接) ついでに。いつまよに。(序)。

(が・たがた)(名) はげしく胴ぶるひすること。 **ぶるひ**

かた・がど[片角](名) ㊀一方の角。ひとかど。 ㊁☆ひとかどの幾に立つ事。

かた・かな[片假名](名) 假名の一種。「アイウエオ」の如き書體のものにして、漢字の畫を省略してなれるもの。 —— **ぎんがち・はふ**[片假名信號法](名) 右に赤旗、左に白旗を持ち、これを動かして片假名の形象を示し、通信する法にして、多く陸海軍に行はれ、現時小學校兒童の間に普及す。

かた・かは[片側](名) 一方のかは。「町の—」。 「尊の—」。(半面)。 —— **やぶり**[片側破](名) 理でも非でも押し通さんとする性質。又、其性質の人。

かた・かへり[片繪](名)【動】二歲の鹿の稱。

かた・かほ[片顏](名) ㊀一方より顏を見たる場合。 ㊁かためん。(片面)。 —— **なし**[片顏無](名) 心一致にして他を顧ざること。又、其人。

かた・かま[片鎌](名) 「かたかまやり」の略言。 —— **やり**[片鎌槍](名) 槍の刃の片側に枝の一本あるもの。(輕丁)。

かた・がみ[形紙](名) 模樣を付しある紙。

☆かた・かゆ[固粥](名) かたく煮たる粥。即ち、今の普通の飯。(糂)。

かた・かんな[片假名](名) 「かたかなに同じ。

かたき[敵](名) ㊀あひて。「とゝば—」。(對手)。 ㊁

かた・き[片食](名) 一度の食事。 [あだ。(仇敵)。

かた・き[模木](名) ㊀模型を彫りたる板。㊁「はんぎ」(板木)に同じ。

かた・き[樫木](名) 堅き木材。㊁[植]「かし」の一名。

かた・き[堅氣](名) ㊀堅き木材。㊁心の堅固なること。浮薄ならざること。「一な人」。㊂[ばくち打又は藝娼妓などの營業に對して、常の營業の稱。足をあらふて—になる」。

かた・き[氣質](名) 其身分に相應したる氣性。「商士の—」。「書生—」。

かたき・うち[敵討](名) ふくしう。あだうち。「義

かた・きぬ[肩衣](名) 古昔、武家にて用ひし禮服、もと素襖(スハウ)の袖を去りたるに起る、袖無くして、肩より背に掛けて着るもの、下は半袴を用ふ。(背衣)。

[ぬぎたか]

かたき・やく[敵役](名) ㊀芝居にて、惡人にいでたつ役。あくがた。㊁うらみを受くる言行をなすもの。にくまれもの。

(かた・たく[假托](名) ことよせすること。かこつけ。

(かた・たく[家宅](名) いへやしき。又、すまひ。——。

かんにふ[家宅侵入](名)【法】故なくして人の住居せる邸宅又は看守せる建造物に侵入すること。——・**そうさく**[家宅搜索](名)【法】搜審手續の一、刑事被告人の住所又は證據物件を藏匿する疑あるもの、住所、若しくはそれ等の身體財產に就きて證據物件をさがしたづぬること。

かた・ぐ[傾](他、か四) かたむく。

かた・ぐ[擔](他、か下二) になふ。かつぐ。

かた・くじけ(名) 見にくく、曲がりくじけたること。「雁首の—たる古煙管」。

かた・くち[片口](名) ㊀片方の口上。一方の陳述。「—は頼めぬ」。㊁一方にのみ口あるながえの銚子。又、一方にのみ口のある鉢。

(かた・くな・し[頑](形、一) かたくなり。固陋なり。

かたくな[頑](名) ㊀強情を張りとほすこと。片意地強きこと。ぐわんこ。㊁心偏りて常識に遠ざかること。(固陋)。

かたくな・し[頑](形、一) かたくなり。

かた・くび[肩首](名) かたぐるま。

かた・ぐるま(名) ㊀[植]百合科に屬する宿根草、山野に自生す、花は鐘狀をなし片端は反捲す、根は白く蒿に似る、以て澱粉を製すべし。(車前蕒山慈姑)。㊁「かたくり粉の略言。——・**と**[片栗粉](名) かたくり草の根にて製したる淡白色の澱粉、麵類又は菓子の料に供し、又、熱湯に和して飲む。——・**めん**[片栗麵](名) かたくり粉にて製したる麵。(山慈麵)。

(かた・くり(名、副) かた〳〵と揺(ユ)れうごくさまにいふ語。——・**ばきや**(名) がたくりとする粗末なる栗合馬車。

かた・くる・し[堅苦](形、二) あまり嚴格なり。偏屈なり。

かた・ぐるま[肩車](名) 人を肩に跨らせて擔(ラ)ぐこと。かたくびぐるま。

かた・げ[片食](名) ㊀一日一回の食。㊁一回のみの食。

(かたげる(他)「かたぐ」の訛。

かた・と(名) ㊀ひとつの語の半分。㊁「片言」(名) ㊀ひとつのみの言。かたくち。不完全なる語。「左言」。㊁一方のみの言。かたぁもひ。

かた・とひ[片戀](名) かたとる。

かた・とり[片戀](名) かたとる。

かた・とる[片戀](自、ら四) 一方にのみ戀する。

かた・さ[堅](名) かたき度合。

(かた・ざり(名) 品行よき人。つゝしみ深き人。かたぎ。

かた・さがり[肩下](名) 一方の下りあること。

かた・さき[肩先](名) 肩の上部。(肩頭)。

かた・さと[片里](名) 遠鄙なる里。かたほとり。かたゐなか。

+かた・さま[方樣](名) ㊀方向。ゆくへ。㊁人を愛し敬ひて呼びし稱。

+かたし[鍛](名) 鍛ふこと。きたひ。又、鍛冶する人。

+かたし[偏](名) かたかた。

+かたし[堅](形、一) ㊀くだけ易からず。やぶれ易からず。けんごなり。ぢやうぶなり。(固)。㊁たしかなり。あやふからず。(確)。㊂みだらならず。つゝしみぶかし。「身持ち—」。㊃きびし。つよし。「かたく主張す」。

かた・し[難](形、一) 容易ならず。なやましむづかし。「創業と守成と何れかかたき」。

+かたし・がひ[偏貝](名) 二つあるべき貝殼が離れて一つになりたるもの。かたつがひ。

かた・き[片敷](名) かたしく。——・**ども**[片敷衣](名) ひとりねの衣。

かた・き・く[片敷](他、か四) ㊀ひとりねに衣の片袖を下に布く。㊁ひとりねをなす。

かたじけなさ[忝](名) かたじけなきこと。「一に涙こぼる、」。

かたじけな・し[忝](形、一) ㊀もそれ多し。もったいなし。(辱)。㊁あり難し。謝するに餘りあり。

かたじけ・なみだ[忝涙](名) かたじけなさに堪(ヒ)ねはす涙。ありがた涙。「なく感ず」。

+かたじけな・む[忝](自、ま四) かたじけ

かた・ぼ[固臨](名) かたまりたる膿、瘤腫。

かた・ぼや・きり(名) 芝居にて、殺者の舞臺より退く時に用ふる幕(バク)。

かた・ぶろ[形代](名) ㊀古昔、神を祀るとき、其神靈の代りとして作りたるもの、佛家の位牌の類。(尸)。㊁陰陽師などが、みそぎ又は祈禱のときに用ふる紙の人形(ヒトガタ)で、これを以て身體をなで、其身の災を移すといふ。ひとがた。なでもの。(倆)。㊂本物になぞらへ作りたるもの。

かた・ぶるし[肩章](名) 陸軍の兵種を區別するため、兵士の肩につけたる走るし。けんしやう。

+かた・ぶん[堅人](名) かたざう。

+かた・すかし[肩透](名) 相撲の手、巳が指したる手と、敵の胸に當てたる肩とを引き、敵の體を前へ引き落すこと。

かた・すそ[肩裾](名) 肩と裾と。

かた・すみ[片隅](名) かたよりたる一方の隅。かたわき。かたはし。(偏隅)。

かた・ずみ[堅炭](名) 橙・樫などを蒸しやきにしたる炭。(硬木炭)。

+かた・そ[片組](名) 山の一方の險阻なる處。

かた・そぎ[片削](名) 屋根にあるちぎの一端をそぎたるもの。ちぎ。

かた・そば[片傍](名) 片方の傍。かたはし。

かた・たがひ[片違](名) ふそろひ。いきちがひ。たがひく。

+かた・たが・ふ[片違](自、は下二) かたゝがへをなす。

+かた・たがへ[方違](名) 陰陽家にて、天一神の居るといふ方角を避けて他出すること。

かた・たて[肩楯](名) 肩をおほふためのたて。

かた・だより[片便](名) 此方より音信をなせども、先方よりは返事の無きこと。

かた・ち[形](名) ㊀知覺によりて知り得べき物體のありさま。㊁やうす。けはい。㊂すがた。みめかたち。容貌。(容)。

かた・ち[堅地](名) 濕塗などの堅固なる下地。どろ地の對。

かたちづく・る[形](他、ら四) ㊀其形をなす。㊁容貌をかざる。けしやうす。(容)。

+かたち・びと[容人](名) かたちうるはしき人。みめよき人。美人。

かた・ちんば[片跛](名) ちんば。ふそろひ。(跛)。

かた・づ[固唾](名) 心をこめて事をなすときなどに、口中にたまる唾。——**をのむ** 心をこらし氣をつめて、事のなりゆきを危み待つにいふ。

(かたっ・かは[片側](名)「かたかは」の訛。

かた・つき[肩衝](名) 茶入れの一種。

かた・つき[形付](名) 模樣のあるもの。

かた・づき[片付](名) ㊀物事の落着又は整理。をはり。をさまり。㊁よめいり。結婚。「たづく」。

かた・づ・く(自、か四) かたよる。かたづく。

かた・づ・く[偏着](自、か四) ㊀亂れたるものの治まり整ふ。といのふ。をさまる。おちつく。㊁嫁(ヨ)に行く。よめいりす。

かた・づ・く[片付](他、か下二) ㊀亂れたるを整へをさむ。といのふ。㊁よめにやる。とつかす。よめいらす。

(かた・つ・く(自、か四) ㊀堅き物の脆れあひてかたゝくと音す。㊁不和起る。もめ生ず。

(かたづける[片付](他)「かたづく」の訛。

(かたっ・つら[片面](名)「かたつら」の訛。

(かたっ・ぱし[片端](名)「かたはし」の訛。

かたつぶり[蝸牛](名)【動】腹足類中有脚類に屬する軟體動物、螺旋の殼を有すれど脣なし、陸上に棲息し脚を以て空氣を呼吸す、雌雄同體なり、二對の觸角を具ふ、種類多し。まひ〳〵。(蝸螺)。

(かたっ・べら[片片](名)「かたへら」の訛。

(かたっ・ぽ[片方](名)「かたはう」の訛。

かた・づま[片隅](名) かたはし。一端。(片端)。

(かた・づ・むすぶ[片詰](自、ま四) ㊀かたよりて一般にゆきわたらず。㊁一方へのみ傾く。

(かた・づ・むすぼる[片詰](他、ま下二) かたはしより事をきめて行く。

かた・つら[片面](名) 一方の面。(半面)。

(かた・づ・る(自、ら四) かたよる。

かた・て[片手](名) ㊀一方の手。隻手。㊁一方の對手。㊂かたはう。一方。㊃五圍又は五十圍若しくは五百圍等、圍以上の五の數を冠する額の隱語。——・**うち**[片手擊](名) ㊀かたてにて打ち又は切ること。㊁かたづまち。——・**おち**[片手落](名) 一方に厚くして一方に薄きこと。かたおちち。(偏頗)。——・**おやりだん**[片手上段](名) 擊劍にて、片手にて上段の構へをなすこと。——・**せいがん**[片手星眼](名) 擊劍にて、片手にて星眼の構へをなすこと。——・**つき**[片手突](名) 擊劍にて、片手にて突きをかくること。——・**まき**[片手卷](名) 刀のつかいとを、一片よりまきたるもの。——・**わざ**[片手業](名) 本業のかたはらになす職業。ないさよく。(餘業)。——・**をけ**[片手桶](名) をけの一片に取手を附けたるもの。

かた・ど[片戸](名) 扉一枚のひらき戸。「ぞ」。

かた・とき[片時](名) 暫時の間。あばしのま。〈ん

かた・ど・る[象](他、ら四) 物の形をうつし採る。まねる。にす。「古代の作に—」。

かた・ど・る[方取](他、ら四) 其方にひかゆ。「後に—」。

かた・な[片名](名) 二字名の半分。(偏譯)。

かた・な[刀](名) (片刃(かたは)の轉かともいふ)、又、片殺(かたそぎ)の略言かともいふ。 ㊀片刃の劍。 ㊁昔時、武士の帶せし大小の中の長きもの、稱。(佩刀、腰刀)。 ㊂小なる刃物、即ち、庖丁の類。 ——・**かけ**[刀懸](名) 刀をかけおくための具。(刀架)。 ——・**かぢ**[刀鍛冶](名) 刀をきたひつくる鍛工。(刀劍工)。 ——・**きず**[刀創](名) 刀にて切りたる疵。又、其疵の平癒せし後の痕。(刀傷、刀瘢)。

++**かたなし**[結政所](名) 古昔、太政官の外記廳の南にありて、文書をとゝのふるとを掌りし所。

かた・なし[堅梨](名) (植)林檎の一名。(楽梨樹)。

+**かた・なし**[形無](名) ㊀取るに足らぬはどなること。「—の境界」。 ㊁遂に其效なかりしと。

かた・な・だま[刀玉](名) 田樂などにて、刀を空へ投げ上げて、手に受くるわざ。

かた・な・とぎ[刀研](名) 刀劍類を研ぐこと。又、其業の人。

かた・な・の・さび[刀錆](名) ㊀刀に生ずる錆。 ㊁斬られて命を喪(うしな)ふこと。「するもの。

かた・な・もち[刀持](名) 貴人の刀を持ちて附從して、養育の不充分なること。

かた・に[片荷](名) 半分の荷。又、些少の荷。

++**かた・ぬ**(ぬ活ぬ)[固](他、な下二) むすびて一緒に重ねあつむ。

かた・ぬぎ[肩脱](名) ㊀かたぬぐこと。 ㊁++古昔、宮中の宴會にて、装束の肩をぬぎて遊びしこと。

かた・ぬ・ぐ(ぬげ)[肩脱](自、か四) ㊀上着を半ばぬぎて、下着を出す。 ㊁はだぬぐ。(裸、肉袒)。

++**かた・ね**[固根](名) 「ねぶとに」に同じ。

かた・ね[偏寝](名) 體の一方をのみ下にしねかゆ。(りせずに寝ること。

かた・ねり[固練](名) 固く練ること。又、固く練りたるもの。「—の甘酒」。

かた・の・り[偏乘](名) 一方にかたよりて乘ること。

かた・は[片刃](名) ㊀刀などの一方にのみ刃を付けたるもの。「雨刃の對」。 ㊁小刀などの表の方をもに研ぎて刃をつけたるもの。

かた・は[片端](名) ㊀普通の人にあとりてあること。又、其人。 ㊁胃・腎・腰など身に具はらぬ所あること。又、其人。(不具)。

かた・はう[片方](名) 一方。

かた・はし[片端](名) 一端。

かた・はだ[片肌](名) ㊀一方の肌。 ㊁かたはだぬぎ」に同じ。 ——・**ぬぎ**[片肌脱](名) 片肌脱ぐこと。(偏袒)。 ——・**ぬ・ぐ**(ぬげ)[片肌脱](自、か四) ㊀衣をぬぎて片肌をあらはす。 ㊁人に力を添ふるにいふ。「るゝこと。

かた・ばち[片撥](名) 太鼓の撥を片手にて打ち入

かた・はづし[片外](名) 婦人の髪の結(ユ)ひ方、輪に結び、笄を横に貫きて其上部を外(ハ)したるもの、笄をぬけば下げ髪となる。徳川時代に、御殿女中又は武家の内室などあもに結びたり。

[しづはたか]

かた・ばみ[酸漿](名) ㊀(植)酸漿草科に屬する草本、酸味を有す、葉は頂圓し花は黄色なり、葉は通常三個の小葉より成り、食用とすべく、又、鏡を磨ぐに用ふべし。鳩酸草、酸漿草)。 ㊁紋所の名。 ——・**わらべん**[酸漿黄蓮](名) (植)毛茛科に屬する草、葉は掌狀複葉にして三箇の小葉より成る、蘗蓋は明瞭なる柄を具ふ、藥用植物なり。 ——・**も**[酸漿藻](名) (植)浮萍の一種、根は泥中に蔓延し、葉は四箇の小葉より成り、酸漿の葉に似て田字形をなす、夏の頃、四瓣の白花を開く。かつみ。

かた・はら[偏腹](名) わきばら。(腋)。++—・**ぼね**[偏腹骨](名) あばらぼね。

かた・はら[傍](名) そば。わき。(側)。 ——・**いた・し**[傍痛](形、一) ㊀かたはらにありて氣の毒に思はる。きのどくなり。 ㊁笑ふに堪へず。(捧腹、抱腹)。 ——・**な・し**[傍無](形、一) なちぶもの無くすぐれてあり。「かたはらなき人だち」。 ——・**め**[傍目](名) よこめで見ること。

かた・ひいき[片贔屓](名) えこのさた。かたよりたるひいき。「をなす。

++**かた・ひ・く**(くけ)[片引](他、か四) かたひいき。

かた・ひざ[片膝](名) 一方の膝。 ——・**たて**[片膝立](名) かた膝を立てゝ、ゐること。「し。

かた・ひさし[片廂](名) 一方(のみ出でたるひさし。

かた・ひし(名) 堅き物の相觸れて發する音。

かた・ひと[片人](名) みかた。かかま。

かた・ひば[堅檜葉](名) (植)柊柏(ヒバ)科に屬する羊齒植物、山中に生じ岩石に附着す、大小二種の胞子を有し各別叢あり、觀賞用として栽培せらる。

かた・びら[帷子](名) (傍平張の略といふ) ㊀古昔、木丁(キテイ)・幔幕(マンマク)などになしい布帛の稱、夏は生絹冬は練絹を用ひたり。 ㊁昔時、單衣の總名。ひとへ。ひとへもの。(單衫、涼衫)。 ㊂後世、廂絲にて縫りたる夏衣。又、それに用ふる布帛の稱。

++古語　一伊語方言　一字音

++**かた・ぶ・く**(くけ)[傾](自、か四) ㊀かたむく。 ㊁頭をかたむけて考ふ。 ㊂うたがふ。あやしむ。

++**かた・ぶ・く**(くけ)[傾](他、か下二) ㊀かたむく。 ㊁離ず。なじむ。

++**かた・ぶち**[片淵](名) 一方のみ水深き河。

かた・へ[片方](名) ㊀かたはら。かたはし。かたわき。かたそば。(傍、側)。 ㊁はんぶん。なかば。

かた・へら[偏片](名) 對にてあるべきもの、一方。かたゝ。かたはう。

かた・ほ[片帆](名) 二を一方にかたむけて、風をふくますと。眞帆の對。「ならざること。

++**かた・ほ**[片偏](名) 不充分にてあること。まだ完全

かた・ほざり[偏邊](名) ㊀へんぺ。かたゐなか。 ㊁かたすみ。かたへ。

かた・ほほ[片頬](名) 一方の頬(ほほ)。

++**かた・ま**[堅間](名) 目のかたくこまかき籠。

++**かた・ま・し**[奸](形、二) 心ねぢけてあり。性質正しからず。(ヒ)。「豆。

かた・まめ[堅豆](名) 硬(カタ)く炒(イ)り又は煮たる

かた・まり[固](名) ㊀かたまること。又、かたまりてあるもの。「砂糖の—」(團塊)。 ㊁ゐつり。だんたい。 ㊂かたより念ずること。「深く信ずること。「門徒の—」。

かた・まる[固](自、ら四) ㊀凝(ニ)りて堅くなる。 ㊁あつまる。よる。 ㊂たしかになる。熟練す。「腕が—」。 ㊃定着して進歩なくなる。 ㊄深く信ず。ぼく心を置(ヨ)む。 ㊅十分の活動をなす能はざるやうになる。「負けて體が—」。 ㊆きまる。定まる。「天氣

かた・み[匿](名) 目のこまかき籠。かご。「が—」。

かた・み[形見](名) ㊀死にし人又は別れたる人の生存中又は昵近(ジツ)中の事を思ひ出さるゝ種となる遺物。(記念)。 ㊁すべて過去の事の思ひ出さるゝ種となるもの。

かた・み[片身](名) ㊀身體の半分。(偏身)。 ㊁衣服のぬひあはせらるべき一方。みごろの半分。「し」。

かた・み[肩身](名) 社會に對しての面目。「—廣

++**かた・みあ**[互替](名) 相互に恨怨の念を抱くこと。「と。りんぱん。

++**かた・みが・はり**[互替](名) 互にかはりあふ

++**かた・みぐ・さ**[形見草](名) (植)(ゐ)夾の一名。(ゐ)芍の一名。

かた・みち[片路](名) 往還の道の一方。

かた・みづ[片身漬](名) 魚肉の片身の鹽漬。

かた・みつわ[片三輪](名) 婦人の髪の結(ユ)ひ方、みつわの一方を切りはづして、若衆(ワカシ)まげの如くせるもの。「うちゐみ」。

++**かた・みみ**[傍耳](名) かたはらにありて聞くこと。

かた・むき[固](他、き下二) ㊀堅くす。 ㊁たしかに。「心を—」。 ㊂警戒す。いましむ。

++**かた・むき**[計](自、き四) 心ねぢけく。

かた・むき[傾](名) かたむくこと。又、かたむきたる度合。「四十五度の—」。

かた・む・く(くけ)[傾](自、か四) 《片向く義》 ㊀餅に一方(向く)傾。 ㊁より向ふ。あつまる。「人心の—所」。 ㊂不偏に思ふ。いたかる。うたがふ。 ㊃日又は月日に入らんとす。ほろぶ。 ○裏(ウラ)に向く。もとろふ。 ㊄滅亡す。ほろぶ。

かた・む・く(くけ)[傾](他、か下二) ㊀餅に一方へ向かす。 ㊁よゝ向かす。かたよす。「耳を—」。 ㊂もとろへしむ。よわくす。又、ほろぼす。くつがへす。「國を—」。

かた・むくろ[片軀](名) 偏屈にして一徹なる人。「元祿頃の語」。

かたむけ[傾](他)「かたむく」の訛。「ばかと。

++**かた・ぶすび**[片結](名) 帶などをもろともに結ぶ。

かた・め[固](名) ㊀堅くすること。たしかにすること。いましめまもること。 ㊁ちかひ。約束。「夫婦の—」。 ○そなへ。警衛。「大手の—」。

かた・め[片目](名) ㊀一方の目。 ㊁一目の盲せるもの。「かんち。めっかち。隻目、偏盲)。「ん。

++**かた・めぶ・み**[固文](名) 契約の證書。えようも

かた・める[固](他)「かたむく」の訛。

かた・めん[片面](名) 一方の表面。(半面)。「もの。

かた・もち[堅餅](名) 篇餅を砕きて干(ホ)したる

++**かた・もひ**[片思](名)「かたおもひ」の略言。

かた・もん[固紋](名) 衣服の紋の堅く織(オ)ひつけて浮かぬやうにしたるもの。浮紋の對。

かた・や[方屋](名) 相撲の力士の控へゐる小屋。

++**かた・やき**[肩燒](名) 古昔、占(ウラ)をなすに、鹿の肩骨を焼きしこと。

かた・やぎ・さ[片山里](名) 片田舎の山里。

かた・ゆき[片桁](名) 左右いづれかの桁。(肩行)。

かた・よ・す(すせ)[片寄](他、さ下二) 一方へよす。よせかたづく。(偏)。

かた・よせる[片寄](他)「かたよす」の訛。

かた・より[片寄、偏](名) ㊀かたよること。 ㊁【理】光線の通過又は反射の能が、方向により異なる現象、或角度・角度は物體により異なり)にて或物體より反射し又は或物體(結晶體)を通過したる光線を再び反射若しくは通過せしめんとするとき、或位置にてはよく反射若しくは通過すれども、これに直角の位置にては反射若しくは通過せざること。「と。

かた・より[片縒](名) 一方より絲のよりをかくること。

かた・よ・る[片寄、偏](自、ら四) ㊀一方へ

++古語　一個語方言　一字音

のみ傾きよる。よる。かたむく。㊁避けて傍に寄ふ。（避）。㊂公平を失す。かたあちとなる。

かたらひ[語](名) かたらふと。はなしあひ。やくそく。——**ぐさ**[語草](名) はなしの種。

——**びと**[語人](名) はなし相手。

かたら・ふ[語](他、は四) ㊀相談す。かたりあふ。はなしあふ。㊁約束す。いひかはす。ちぎる。㊂徒黨に引き入る。

かたり[語](名) 脚本の外題(ゲダ)のうへに、五七の文章を以て、其作の大要を述べたるもの。

かたり[騙](名) 人をだまして物などを搾むること。又、其人。

かたり・ぐさ[語草](名) 語るべきたね。はなしの「たね」(話柄)。

かたり・ごと[語事](名) 語りをなすと。だますこと。

かたり・ごと[騙事](名) 騙りをなすと。だますこと。

かたり・つ・ぐ[語](他、か四) 話しつたふ。いひつぐ。

↔かたり・べ[語部](名) 古昔、大嘗祭のとき、其式場に出でゝ古事を語りし人民。

かたり・もの[語物](名) 浄瑠璃の諸曲。又、かたる浄瑠璃の外題(ゲダ)。

カタル[加答兒＝Catarrh](名) 粘膜に炎衝などを起すこと。「腸—」、「胃—」。

かた・る[語](他、ら四) ㊀思ふ事を言語によりて陳べ表はす。つげいふ。いふ。㊁他と互に言語を交へあふ。ことばをかはす。はなす。㊂浄瑠璃などを節をつけて唱(タ)ふ。

かた・る[騙](他、ら四) 詐偽して人を迷はす。あざむきて財物を取る。だます。(拐騙)。

かた・わき[片脇](名) かたはら。かたへ。

かた・われ[片割](名) ㊀物割れて二つ以上となりたる其一片。(碎片)。㊁鳶與の一部分。なかま。くみ。「敵の—」。(鳶與)。㊂片割月の略言。(半輪、彎月)。——**づき**[片割月](名) 弦月の稱。

ぶね[片割舟](名) 割れて殺をなさぬ舟。

↔かたゐ[傍居](名) ㊀道傍にありて、人に金錢食物などを乞ひもとめて、生を送るもの。こじき。(乞食)。㊁らいびやう。かったゐ。天刑病。

かた・ゐざり[片寒](名) ㊀僅かに這(ハ)ふと。やっとゐざると。㊁片足は膝を立て片足は地をすりて這(ハ)ひ行くこと。(片膝行)。

かた・ゐなか[片田舎](名) 遠く都を離れたる田舎。へんぴ。(僻村)。

かた・ゑみ[片笑](名) 片頬にわらひを含むこと。

かた・をりど[片折戸](名) 一方のみ開くつくりの折戸。又、一方のみ開きたる折戸。

(か・た・ん[荷擔](名) ㊀力をそへて助くること。味方すること。㊁荷物をになふと。「—して走る」。

↔かたん(名) 物の落つる時に響く音。又、鳳が戸障子などを吹き動かす音。

(がたん(名) 前條に同じ。

カタン・いと(名) もと舶來したる錦絲。もろよりにして光澤よし。おもに袋織の用に供せらる。

かち[徒](名) ㊀直馬其他乘物にのらずして歩行すること。足にてありくこと。(徒歩、徒行)。㊁「かちざむらひ」の略言。「ゐ—」(徒士)。

かち[勝](名) 勝つこと。まけの對。(勝、敗)。

かち[褐](名) 濃き紺色。かちいろ。

(か・ち[價値](名) ㊀あたひ。ねうち。㊁たふとさ。㊂【經】財が人の慾望を充たすに適する程度、即ち、効用の程度の稱。慾望と財との關係に基ぐくものにして財の固有のものにあらず、故に財が定量以上を超ゆれば、遂に其價値を失ふに至る。これを價値の限界といふ。

かち[梶](名) ㊀櫓(ロ)又は櫂(ト)など舟を行る具の稱。(楫)。㊁艦に付けて舟の方向を正しくする一種の船具。(舵)。㊂車の梶棒。㊃車の梶棒に感じ得らるゝ、積荷の重量。「—が重し」。

かち[梶](名)【植】桑科に屬する直立木本、枝は密毛を有し、葉は粗糙にして多少稍圓形をなす、樹皮の纖維は製紙の原料に供せらる。

か・ち[鍛冶](名)《金打(カス)の轉》金屬をきたひて器物を製すること。又、其工人。「刀—」。(鍛工)。

(か・ち[加持](名)【佛】(い)諸佛の大悲は行者に加はり、行者の信心は佛因を感ずること。諸佛が行者を加護保持して災を除き樂を與ふること。(め)密教にて、佛力の加護を祈りて病氣・災難を除くこと。

(が・ち[雅致](名) みやびやかなる趣。風流なるさま。「古色蒼然として—多し」。(風致)。

——がち[勝](接尾) 或語に添へてかたよる義を表はす語。「憂ひ—」、「傾き—」。

かち・あひ[搗合](名) まようとつ。又、むさゆ「ん。

かち・あ・ふ[搗合](自、は四) ㊀物と物とつき合ふ。ぶつかりあふ。㊁互に一致せず。矛盾(ムジ)をなす。はんたいす。

かち・ありき[徒歩](名) 徒(チ)にてあるくこと。(歩「行」)。

かち・あるき[徒歩](名) 前條に同じ。

かち・いくさ[徒軍](名) ㊀徒(チ)だちの士卒。歩兵。㊁歩兵の合戰。

かち・いくさ[勝軍](名) 勝利ある戰。(捷戰)。

かち・いろ[勝色](名)「カーキー」に同じ。

↔かち・かた[搗離](名)【植】「あはむぎ」の異稱。

(かち・かち(名、副) 固きもの、鋭く觸れあふ音。

かち・いろ[褐色](名)「かち」(褐)に同じ。「衣。

かち・え[褐衣](名) 古昔、隨身(ズイジン)の着し褐色の

(がち・がち(名、副) ㊀固き物のふれあひて發する音。㊁急(ヅ)がしげなるさまにいふ語。㊂物事に餘裕なく氣せはしきさまにいふ語。

かち・き[勝氣](名) 人に負くるを忌む性質。人ときそひ勝ちなること。(克己)。

かぢ・き[舵木](名) ㊀舟の舵。おもに木にてつくる故にいふ。㊁【動】硬鱗類に屬するかぢきとはし、はたうを等の總稱。又、俗に「かぢきとはし」の略言。

——**・さほし**[舵木徹](名)【動】硬鱗類中かぢき科に屬する魚。體は圓長にして稍々圓錐形をなす、鱗なくして皮膚は粗糙なり、上顎は延長して劍狀をなし、其緣邊は鋸齒をなす、口は圓けれど齒なく、尾鰭は新月形をなす、背部碧藍色にして淡黑色を帶び腹部は銀白色なり、體長大なるものは一丈三尺許に及ぶ、常に遠洋の上層に游泳し動作猛烈なり、七月頃より九月頃にかけて產卵のために近海に來る、我沿海概ねこれを產す、殊に南海西海に多し。かぢきまぐろ。かぢとはし。

——**・まぐろ**[舵木鮪](名)【動】前條に同じ。「馬・豚・雞等の稱。

(か・ちく[家畜](名) 家に飼養する動物、即ち、牛・

かち・ぐり[搗栗](名) 栗の實をゆで、よく乾し、これを臼に入れ搗きて其鞘皮と殼とを去りたるもの。勝栗と音相通ずるを以て、祝賀の儀式などに用ふ。(搗栗、乾栗)。

↔かち・さ・ぶ[勝進](自、さ上二) 勝ちすゝむ。

かち・ざむらひ[徒侍](名) ㊀徒歩して伴をなす從者。㊁德川氏の部下にありし小身の士。おかち。(徒歩士)。

↔かち・ぢね[搗稻](名)「もみよれ」に同じ。

↔かち・すみ[和炭](名) けしずみの類。

かち・だち[徒立](名) 徒歩。

かち・ぢ[徒路](名) 徒(カ)にてあるくこと。

(か・ちつ[加秩](名) ㊀秩祿のましくはゝること。㊁年齡のましくはゝること。

かぢ・づか[舵柄](名) 舵の柄。(柁杠)。

(がち・つ・く(自、か四) ㊀がち〳〵する。㊁かち〳〵音生ず。㊂もめ事生ず。

かち・つづけ[勝續](名) 勝がつゞくこと。

(かち・てき[可知的＝Knowable](形) 知覺に由りて感じ得らるゝさまにいふ。「聲(凱歌)」。

かち・どき[勝鬨](名) いくさにかちてあぐる鬨の聲。

かち・とほし[勝通](名) 續けて勝つこと。

かぢ・とほし[舵徹](名)【動】「かぢきとはし」に同じ。かぢきまぐろ。(瀛魚)。

かぢ・とり(名) ㊀櫓(ロ)をあやつる人。(棍師)。㊁舵(カ)を取りて舟の方向を定むる人。(舵手)。㊂或團體の行動を指揮する人の稱。「ると。

(かち・にげ[勝逃](名) 勝負に勝ちしまゝ其場を去

かち・ぬの[褐布](名) 褐色に染めたる布、搗磨國節曆(ヂカ)の名產。

↔かち・の・き[勝木](名)【植】「ぬるでの古名。

かぢ・の・き[梶木](名)【植】「かぢ」(梶)に同じ。

かぢ・の・は[梶葉](名) ㊀梶の木の葉。㊁紋所の名、梶の木の葉を描きたるもの。

↔——・ひめ[梶葉姫](名) 古昔、七夕の夜に梶の葉に、詩歌などを書きしより、織女の稱。「ヒ。

↔かち・の・やまひ[痛病](名)「せうかち」に同

かぢ・ばしら[舵柱](名) 舵の柄。

かち・はだし[徒跣](名) 徒(カ)にて足跣足(ハダシ)なると、「供をも連れず—」。

タバコ(名) 文化以前に、わらびでの鍋つきたる引田に、刻煙草をふたかはに盛べ入れ、がちやゝ〳〵

量以上を超ゆれば、遂に其價値を失ふに至る、これを價値の限界といふ。

かぢ[梶](名) ㊀艦(ロ)又は櫂(ト)など舟を行る具の稱。(楫)。㊁艦に付けて舟の方向を正しくする一種の船具。(舵)。㊂車の梶棒。㊃車の梶棒に感じ得らるゝ、積荷の重量。「—が重し」。

かぢ[梶](名)【植】桑科に屬する直立木本、枝は密毛を有し、葉は粗糙にして多少稍圓形をなす、樹皮の纖維は製紙の原料に供せらる。

か・ぢ[鍛冶](名)《金打(カス)の轉》金屬をきたひて器物を製すること。又、其工人。「刀—」。(鍛工)。

(か・ぢ[加持](名)【佛】(い)諸佛の大悲は行者に加はり、行者の信心は佛因を感ずること。諸佛が行者を加護保持して災を除き樂を與ふること。(め)密教にて、佛力の加護を祈りて病氣・災難を除くこと。

(が・ち[雅致](名) みやびやかなる趣。風流なるさま。「古色蒼然として—多し」。(風致)。

——がち[勝](接尾) 或語に添へてかたよる義を表はす語。「憂ひ—」、「傾き—」。「ん。

かち・あひ[搗合](名) まようとつ。又、むさゆ

かち・あ・ふ[搗合](自、は四) ㊀物と物とつき合ふ。ぶつかりあふ。㊁互に一致せず。矛盾(ムジ)をなす。はんたいす。「行」。

かち・ありき[徒歩](名) 徒(チ)にてあるくこと。(歩

かち・あるき[徒歩](名) 前條に同じ。

かち・いくさ[徒軍](名) ㊀徒(チ)だちの士卒。歩兵。㊁歩兵の合戰。

かち・いくさ[勝軍](名) 勝利ある戰。(捷戰)。

かち・いろ[勝色](名)「カーキー」に同じ。

↔かち・かた[搗離](名)【植】「あはむぎ」の異稱。

(かち・かち(名、副) 固きもの、鋭く觸れあふ音。

と音立て、賣りあるきしもの。又、其調聲。

〔かちや・つ・く〕(自、か四) ㊀かちや〳〵と音す。㊁高騰生ず。もめ起る。

〔がちや・つ・く〕(自、か四) 前條に同じ。

〔かちやん〕(名) 物の落つるなどの音。

〔かちゆう〕[家中](名) ㊀大小名の家來の全體。㊁武士の仲間。「一屋敷」。

かち・ゆみ[徒弓](名) 徒歩にて弓射ること。(歩射)。

〔かちよ〕[家猪](名) 【動】「ぶた」の異稱。

〔かちよ〕[加除](名) 加ふると除くと。

〔かちよ〕[歌女](名) ㊀うたひめ。げいしゃ。㊁【動】「みゝずく」の異稱。

〔かちり〕(名、副) 堅く小さき物の堅き物にあたりたる音。「矢が一あたる」。

〔かちり〕(名、副) 前條に同じ。「鍬が一石にあたる」。

かち・わたり[徒渡](名) 舟又は筏にて渡ること。(歩渉)。「(舵繩、櫓繩)。

かちを(名) 舟の舵又は櫓につけて力とする繩。

かちん(名) 〔鳥飯(イヒ)の轉〕餅の一名。

〔かちん(名) 堅き物の相あたる音。

〔かつ[渴](名) 喉のかわくこと。「一を覺ゆ」。

〔かつ[褐](名) ぬのこ。わたいれ。「一を衣る」。

かつ[勝](自、た四) ㊀相手を負かす。(勝、敵)。㊁敵軍を敗る。「捷」。㊂物事にすぐれてあることを示す。㊃おさへつく。おしとゞむ。「私慾に一」。「克」。

かつ[搗](他、た四) ㊀うすつく。つく。「餅を一」。㊁加ふ。そふ。

かつ[揉](他、た下二) まぜ合はす。まぜ。

かつ[且](副) 彼にもわたり此にもかゝはりて。一方には。「一こえて、分れも行くか、逢ふ坂は」。「す」。

かつ[且](接) 其上に。なほ。「武を修め、一文を屬

〔かつあい[割愛](名) 惜しく思ふものを見すつること。あもひきること。「一して歸る」。

〔かつう[且](接) 「かつ」に同じ。

〔かつかり[恰好](名) ㊀あたかも好きこと。丁度ころあひなること。㊁すがた。かたち。やうす。「一の善惡」。㊂價の相應してあること。又、割合に價のやすきこと。「一な品」。

〔かつがう[渴迎](名) 渴望して待ち迎ふること。

〔かつかく(名、副) 掲火などの燥(ハヤ)んなるさまにいふ語。「頭が一する」。

〔かつがつ[且且](副) わづかに。からうじて。ほとんど。「一出來上つた」。

〔かつがつ(名、副) 餓渴などにせまれる時のさまにいふ語。「一して食ふ」。

〔かつがつ・し(形、二) 忙かるべし。(可然)。

〔かつかり(名、副) ㊀張りつめたる氣の俄かに緩むさまにいふ語。㊁たちまち衰(かはるさまにいふ語。

かつ・き[勝木](名) 【植】「ぬるで」の一名。「夫」。

かつ・き[搗夫](名) 荷を運ぶ人。物を搗(ツ)ふ人。(搗語。

かつぎ[被衣](名) 「きぬかづき」に同じ。

かづぎ[潜](名) 水中に沒入すること。水をくゞること。(潜)。——め[潜女](名) 水をかづきて、底にあるものを拾ひ採る女。(海人、蜑人)。

〔かつきよ[割據](名) あの〳〵一方面を占領すること。「英雄一時代」。

〔かつきり(名、副) 區別のきはだちたるさまにいふ語。「割前一五十錢」。

かつ・ぐ[擔](他、か四) ㊀肩にかけて擔(ニナ)ふ。かたぐ。になふ。「負」。㊁【動】小さき種類の集(ハヤ)ぎ。

かづ・く[被](他、か四) 頭上にかうむる。かぶる。いただく。かうむる。

かづ・く[潜](他、か四) 水中にくゞりいる。もぐる。(潜)。

かづ・く[被](他、か下二) ㊀被らしむ。かむらす。㊁負はす。持たす。「罪を他人に一」。㊂かづけものを與ふ。あたる。(歸)。㊃かこつく。ことよす。(託)。

〔かつくひ[蚊食](名) 身體の蚊のさしたる痕。

〔がつくり[名、副) 俄に挫(ヒシ)け衰ふるさまにいふ語。——れち(名) がつくり衰ふること。

かつけ[脚氣](名) 「かくけ」(脚氣)を見よ。

かづけもの[被物](名) 人(多くは蜑人)をねぎらひ又は賞美して與ふる物品。はな。はうび。(贈頭)。

〔かづける[被](他) 「かづく」の訛。

〔かつと[鍋](名) 古昔の一種の菓子。うどん粉を原料として製し、これを油揚にしたるもの。

かつ・と[翔鼓](名) 一種の樂器。足の上に横に置き、撥(バチ)にて打つもの。(杖鼓)。

〔かつ・と(名) 「からころ」の略言。下駄。(小兒の語)。

かつとり・どり(名) 【動】「よぶこどり」の一名。

〔かつとく(名) 各國。各の國々。「一條約」。

〔かつとん[葛根](名) 葛の根。藥用に供す。——たう[葛根湯](名) 葛の根を料としたる漢方の服藥。風邪の發汗劑なり。

〔かつさい[喝采](名) どよめきわたりてはむる聲。はめどゑ。

〔かつさい[鶏哉](名) 【動】小さき種類の集(ハヤ)ぎ。

〔がつさい[合切](名、副) のこらず。いっさい。「いつさい一」。——ぶくろ[合切袋](名) 身に

附屬する小さき物を一切入るゝ袋。ぐだぶくろ。

〔かっさう[褐藻](名) 【植】褐色又は帶褐色の水草。海中に生ず。蕃殖は有性及結性の兩樣あり。こんぶ・わかめ等これなり。

〔かっさ[甲子](名) ㊀きのえね。㊁年月。

〔かっし(名) 固きもの、はげしく觸るゝ音。

〔かっさき[喝食](名) 僧家(主に禪と律と)にて給仕のちごを指して呼ぶ語。「一花若丸」。「ず」。

〔がっさき[合式](名、副) 一切。いっさき。のこらず。

〔かつおやう[割讓](名) 其物を割きて他へゆづり與ふること。「土地の一」。

〔がっさやう[合掌](名) ㊀佛を拜するときなどに行ふ禮。雙方の掌を密着せしめてをがむと、天竺の風なりといふ。㊁材木を合掌せしめてをがむと、天竺の風なりといふ。又、其狀に構ふること。又、其狀に構へたる材木。㊂「がっさようもよぎ」「がっさやうぐみ」又は「がっさようひねり」の略言。——ぐみ[合掌組](名) 材木を交叉して組み合掌したる手を水上に出してなす立ちもよぎ。——ぐみ[合掌組](名) 材木を交叉して組み合はすこと。又、其材木。——ひねり[合掌捻](名) 相撲にて、相手の首を兩手にて搾(ツ)き、其指先を組合せてひねり仆すこと。

〔がっさよう[合從](名) ㊀支那の戰國時代に、蘇秦が計策なし、秦に對する山東六國の同盟。㊁轉じて、國と國との同盟にいふ。

〔かっさよく[褐色](名) 茶色。——くわやく[褐色火藥](名) 一種の火藥。黑色火藥に比すれば、低度の熱にて發火する利あり。——さう[褐色藻](名) 【植】「かっさう」「褐藻」に同じ。——おんきゆ[褐色人種](名) 世界の人種を五類別したるもの、一、皮膚褐色にして髮黑く鼻扁く、顎骨の突出したるを特性とす。「マレイ」人種。

〔がっきり(名、副) ㊀物のよく一致せるさまにいふ語。「一した身體」。

かっ・すする[泓](自、さ變) 泓(ヒタ)のために水の淵(カ)る。

〔がっすする[泓](自、さ變) 前條に同じ。

かっ・すする[渴水](名) 旱(ヒデリ)。

〔かっ・せん[割線](名) 【數】曲線と二つ若しくは二つ以上の點に於て交はる直線の稱。

〔かっ・せん[合戰](名) 相戰ふこと。たゝかひ。(戰爭、戰鬪)。

〔がっ・そう[合奏](名) 種々の樂器を合はせて、音一致すること。(合同)。

〔がっ・たい[合體](名) ㊀體と體と一つになること。

〔かっ・たう[喝道](名) ㊀叱咤すること。どなりつくること。「智深便ち一すちくる」。㊁昔時、貴人の通行などに、聲をあげて行人を制せしこと。みちもさ〳〵。「一して過ぐ」。

かったり(名) さしものをさすために附くる具。

かったる[癩](名) かたゐ。らいびやう。(癩病)。

——ばち[癩坊](名) ちいびやうやみ。

〔かっ・たん[褐炭](名) 石炭の一種。褐色を帶び低からずして多量の有機物を混じ、燃燒するに火燼を散じ奇臭を散ず。黑炭より火力弱く灰多し。

〔かっ・だん[割斷](名) きりたつこと。たちはなすこと。

〔がっ・ち[合致](名) 「がふち」に同じ。

〔がっ・ちゆう[甲冑](名) ㊀鎧と兜と。㊁古昔の戎衣の總稱。(鎧冑)。

〔がっちり(名、副) かちりのや、度を強めたる語。

〔がっちり(名、副) ㊀がちりのや、度を強めたる語。㊁きっかり。丁度。「一當てはまる」。

かって[勝手](名) ㊀便宜よきこと。都合よきこと。㊁ものゝ方にのみ利益になるやうに行ふこと。わがまゝ。きまゝ。「てまへ一」。㊂だいどころ。みづゐどころ。㊃すぎはひのやうす。くらしむき。——づく[勝手口](名) だいどころのぐはいりぐち。——づく[勝手盡](名) 勝手をつくすこと。きままにすること。——に[勝手](副) 自由に。思ふまゝに。——むき[勝手向](名) くらしむき。なりはひのやうす。——もと[勝手許](名) かってむき。

かって[嘗、曾](副) ㊀かれて。まへかた。㊁あるとき。いちど。㊂すべて。全く。「一知らず」。

〔かっ・てつくわう[褐鐵鑛](名) 【鑛】黃褐色又は黑褐色にして光澤なき鐵鑛。酸化鐵八五・六と水一四・四とより成り、不規則なる塊狀をなす。其軟(ヤハラ)きものは指頭にて碎くことを得、往々砂・粘土・燐酸化物等を含有するを以て種々の變種を生ず。純良なるものは鍊を獲る要料とし、粘土を混ずるものは專ら繪具の料に供せらる。(含水酸化鐵)。

〔がっ・てん[合點](名) ㊀詩歌などを評してよきものに點を加ふること。(批點)。㊁承知すること。えようだく。㊂うなづくこと。てんとう。

〔かっ・さう[葛藤](名) ㊀かづら。つた。㊁もんちやく。もめ。「實證の一」。㊂煩悶又は疑問。

ガットリング・はう[—ホウ][—砲＝Gatling gun](名)「ガトリングはう」に同じ。

かつ・は[且](接)「かつ」に同じ。

(かっ・ぱ[喝破](名) ㊀聲を大いにして他の言をもさへ止むると。㊁邪說を排し眞理を說き明かすと。千古不滅の言を吐くと。

かっぱ[河童](名) 想像上の生物、水陸共に棲み、形三四歳の童子に似て、面は虎の如く嘴や、尖りて身に鱗あり、頭に毛少く、節上凹み僅かの水を容る、其水の存する間は、陸上にても力強く、他の生物を水中に引き入れて血を吸ふ、俗說に河中にて子供の溺死するは其ためなりといひ傳ふ。かはっぱ。(水虎)。

カッパ[合羽](名)《スペイン語 Capa より出づ》㊀雨天の外出などに用ふる外套、「スペイン」人の外套を摸して製したるに始まりたるものなりといふ、綿布・毛布・桐油などにて製して油を付く、種類多し。(雨衣)。㊁荷物又は駕籠などの雨被に用ふる桐油紙。㊂見世物などの木戸口にて、客に見物を勸めて引き入るゝ出方の男、よく雨合羽を着して居たりしより名づく。——**かご**[合羽籠](名) 古昔、貴族の外出するとき、供人の雨具を入れて、奴に持たせたる具、前後に一つづゝ付け、棒にて肩に荷ふもの。——**ざる**[合羽笊](名)「カッパかご」に同じ。

(かっ・ぱら[—ホウ][渴望](名) 炎天に水を求むるが如くに、切に希望すると。

(かっ・ぱら[—ホウ][割烹店](名) 食物の調理。料理。——**てん**[割烹店](名) 料理店。

(かっぱ・と(副) 俄に倒れ伏し又は急に起き上がるさまにいふ語。「—起きて」(埠破)。

(かっ・ぶく[割腹](名) 武家時代に、武士の重罪犯あるもの、閉刑、はらきり。切腹。

かっ・ぶく[恰幅](名) 身體の成り立ちたるさま。どたいのやうす。「—がよい」。

かつ・ぶし(名)[鰹節]「かつをぶし」の略言。

カツブリ(名) 西洋こがたなのたぐひ。

(かっ・ぺい[合併](名) ひとつに合はすと。「(比隣)」。

(かっ・ぺき[合壁](名) 壁一重隔てたる隣家。となり。

カッペル(名)《「オランダ」語 Kagchel「ストーブ」》[國聲]。

(かっ・ぽく[恰幅](名)「かっぷく」の訛。

かっぽれ(名) 一種の俗曲、猥褻淫猥なる歌に合はせて、猥褻淫猥の踊りをなすもの。「木」。

(かっ・ぽん[合本](名) 數冊を一冊にとぢ合せたるもの。

(かっ・つ・く[自、カ四] ㊀がつ〳〵す。㊁もつれ生ず。「木」。

かつ・の・き[勝木](名)[植]「ぬるで」の一名。「勝軍木」。

カツマ[羯磨](名) 一種の佛器、鬮鈷を二本なゝめに打ち違へたるもの、多く銅にて造る。

カッマル(名)《琉球語なりといふ》[植]一種の植物、つばきに似たる白き花を開く。

かつ・み[勝見](名)[植]「まこも」の古名。(ろ)「かたばみ」の一名。

かつ・むし[勝蟲](名)[動]「とんぼ」の異稱。

(かつ・めい[渴命](名) はなはだしく餓うると。

(かつ・もく[瞎目](名) 目を開きて見張るると。「—して山を見ず」。

かつ・やま[勝山](名) ㊀婦人の髮の結ひ方、今のまるまげの前形にして、寶永の頃、江戸吉原の妓女勝山が結ひしに始まるといふ。㊁校者の用ふるかつやまの聲。

(かつやま(一))

かつら[桂](名) ㊀[植]「ゆぶにっけいの一名。又、「をかづら」の一名。㊁[植]木犀の異稱。(桂)。㊂遊女の異稱。——**をを**る[折桂] 進士の第一等に及第するにいふ。

かづら[葛](名) ㊀植物の匍匐莖・攀繞莖又は攀縁莖などの總稱。つる。㊁桶のたが。(京都の方言)。

かづら[髮](名) ㊀古昔、蔓草を頭髮の飾とせしもの。㊁乏しき毛髮の補ひにいゝ、毛髮、そへがみ、かもじ。髮、鬘。㊂毛髮を以て、種々の髻の形につくりたるもの。(假髮)。

かつら・あゆ[桂鮎](名) 古昔、山城國桂の里より内裏へ寒りし鮎の稱。「鮎」。

かづら・がほ[髮顏](名) 髮をつけたるときの顏。

かづら・く[髮](自、カ四) 髮とす。

かづら・き[髮師](名) かづらを造る職人、髮工。

かづら・きた[髮下](名) 婢人の髮の結ひ方、昔時、俳優又は少女の多く結びしもの。「しき髮」。

かづら・ひげ[髮髭](名) かづらをつけたるやう美ひ物を賣り歩きし女、世々女主なりしといふ。㊁古昔、婚禮のとき嫁女につき添ひし女。

かつら・を[桂男](名)「かつらをとこ」(三)に同じ。

かづら・をけ[髮桶](名) 能狂言にて、太鼓を打つ人などの腰を掛くるもの。つゞみをけ。

かつら・をとこ[桂男](名) ㊀月中に棲むといふ人。㊁月の異稱。㊂容姿麗しき男子。

カツレツ(名)《イギリス語 Cutlet の譯》一種の料理、おもに鳥肉に玉子を交へて揚げたるもの。

(かつ・ゑる[飢餓](自、ワ下一) ㊀空腹を感ず。(餓)。㊁甚しく欠乏を感ず。

かつを[鰹](名)《堅魚の轉》【動】硬鱗類中さば科に屬する魚、體は頗る豐肥し、鱗は細小にして胸鰭の上部及後部を被ふのみ、背部は蒼黑色にして腹部は銀白色なり、體圓にして四條乃至八條の蒼色なる線あり、體長二尺許に達す、我陸東海西海に產す、性活潑なり、黑潮の變動に從ひて洄游す。(鰹鳥、松魚、雜魚)。——**いろり**[鰹色利](名) 鰹を煮出したる汁、食物の味付けに用ふるもの。(鰹魚煎汁)。——**き**[鰹木](名) 宮殿又は神社のむなぎの上に並列せる材木の稱、丸く長く形鰹節の如し。(加棟木)。

(かつを[ぎ])

——**くぢら**[鰹鯨](名)【動】「いわしくぢら」に同じ。——**ぶし**[鰹節](名) 鰹魚の肉を湯煮にし、これを干し固めたるもの、其生乾(ナマ)なるをなまりといふ土佐及薩摩の產を佳良とす。(木魚、鰹干)。——**むし**[鰹蟲](名)【動】(い)「みづすまし」の一名。(京阪地方の方言)。(ろ)「ぬかゝ」の一名。(水馬)。

かて[糧](名) ㊀古昔、旅行又は行軍などに携帶せしはしいひ。(粮、糧)。㊁貯へもく穀物の類。㊂生命を維持し活動を補充する料。「精神の—」。

かて(名) 雜炊(ザフ)の稱。

かて[粂](名) 雜炊(ザフ)の稱。

—がて[難](接尾) 或語に添へてかたき意を表はす語。「碧まち—に」。

—がて[勝](接尾)「がち」に同じ。「雪—」。

(かて・てい[柯亭](名) 漢の蔡邕が柯亭館にて、館のたるきの竹にて笛を造りし故事に出づ》笛の異稱。

—の・たけ[柯亭竹](名) 前條に同じ。

(かて・てい[假定](名) ㊀かりに定め置くと。㊁或說明をなすために、未だ實際の證明若しくは經驗を經ずして想像したる事實。

(かて・てい[家弟](名) おのれのおとうと。

(かて・てい[家丁](名) 自家のつかひをとこ。

(かて・てい[家庭](名) 一家の中。うち。「—の風波」。

—けいいく[家庭教育](名) 父母若しくは兄姉が、其子女若しくは弟妹に對し、家庭に於ける日常生活より自然に與ふる教育。にはのをしへ。——**せうせつ**[家庭小說](名) 家庭教育の一助ともなる小說。

(かて・てう[—チウ][嘉兆](名) めでたき兆。

(かて・でう[—デウ][箇條](名) あげていふ件。かど。すぢ。(條款)。——**がき**[箇條書](名) 箇條を分けて書き立てたるもの。

(かて・てう[—チウ][鷲鳥](名)【動】水禽類中扁嘴類に屬する鳥、がんより大形なり、身白く頸長し、嘴大いにして頭黑し。たうがん。(蒼鵝)。——**くび**[鷲鳥頸](名) 鵝鳥のごとき長き首。「ふと」。

かてて・くはへて[エテクワ][搦加](副) ある物事の上に更に加へまして。其上に。

—がてら(接尾) 或語に添へて「それと共に」又は「其ついでに」の意を表はす語。「花見—」。「く」。

(かて・てる[テテテルテル]「拵」(他、た下一) 拵(ヂ)にてつくる。

(かて・でん[家傳](名) 家に傳來せること。「—の妙藥」。

(かて・てん[合點](名) がつてん」の略言。

がでん・いんする[我田引水] 自己の主張する議論又は關係せる物事に、利益となるやう他の物事を引きよせること。

(か・ざ[家兎](名) 家に飼ふうさぎ。

(か・ざ[河圖](名) 支那の上代に、黃河に大魚又は龍馬ありて負ひて浮びしといひ傳ふる圖、或は日月星辰の狀を畫きたるものといひ、又、一・三・五・七・九の奇數を天即ち陽とし、二・四・六・八・十の偶數を地即ち陰として、これを排列して其變化を記したるものともいふ。

かど[門](名) ㊀住居の外廓にある出入口。もん。㊁もんのまへ。もんのきゝよ。「柳—を通る」。㊂一族。——**をいづ** 出家して僧尼となる。

かど[角](名) ㊀物體の外面へ尖出せる端末。㊁ものゝすみ。㊂まがりめの端末。「町の—」。㊃方面。事件。「一—の役に立つ」。㊄いひたつべき箇條。(廉點)。㊅氣ばたらきあると、智能あると。「—ある童」。(才)。㊆ひとくせあると。圭角あると。「年老いて、—なくなり」。㊇面操あると。主義あると。㊈反抗の氣、憎惡の心。「ものはいひやうで—が立つ」。

(かど[鍊](名)【動】「にしん」の一名。(青魚)。

(かど[家奴](名) 家にやとふ者。

(かど[下十](名) ㊀天上に對して大地の稱。㊁都會に對して、田舍の稱。

(かど[下奴](代) ㊀自家の謙稱。やつがれ。㊁他人の蔑稱。なんぢ。

かど・いで[門出](名) かどで。「いやしきと。

(かど・ざら[下等](名) 品くだりてあると。位低きと。

(かど・ざら[歌頭](名) 謠歌の音頭。

(かど・ざら[河東](名) 河東節の略言。——**ぶし**[河東節](名) 俗曲の一種、半太夫節の分派にして、十寸見(マス)河東の創始にかゝるといふ。

(かど・ざら[家僮](名) めしつかひの子供。

かどざら・ぐち[架燈口](名) 五燈口(ゴトウグチ)の轉。

(かどざら・くわんせつ[可動關節](名)【生】動物の關節が動くやうになりてあるもの。

(かどざら・ぶつ[下等植物](名)【植】組

繊簡単なる植物、其最も下等なるものに至つては、動物の最下等なるものと區別し難し。

(かどう)どうぶつ[下等動物](名) ㊀【動】組織簡単なる動物、最下等なるものに至つては移動力をも有せず、植物の最下等なるものと區別し難きものあり。 ㊁品性の下等なる人をのゝしりていふ語。

かど-かど[角角](名) すみ〳〵。すぢ〳〵。はし〳〵。「一によく注意して」 ——**し**[角角](形、二) ㊀才氣多し。かしこし。 ㊁かど多し。「一き岩」

かど-がまへ[門構](名) ㊀門の構へ方。 ㊁漢字の頭にある門の字、問・聞などの上にあるもの。

(か-ざく)[家督](名) ㊀相續すべき家のあとめ。 ㊁【法】戸主の其身に專屬せる權利義務以外の其身分に伴ふ總ての權利義務。 ㊂家督を繼ぐべき子、即ち、嗣子。 ㊃長子の異稱。「僕有一」。 ——**さうぞく**[家督相續](名) ㊀一家のあとめをうけつぐこと。 ㊁【法】相續の一、前戸主の自身に伴ふ權利義務の相續即ち戸主權の繼承にして、戸主の死亡・隱居・國籍喪失若しくは戸主が婚姻又は緣組の取消、若しくは戸主の入夫婚姻又は入夫離婚によりて開始す。 ——**さうぞくにん**[家督相續人](名) 【法】家督を繼承する人、被相續人の家族たる直系卑屬に於て相續人たるものは、親等の異なるものゝ間にては、其近き者を先にし、親等同じき者の間にては男を先にし、親等の同じき男又は女の間にては、婚出子を先にし、親等の同じき婚出子・庶子又は私生兒の間にては、婚出子及庶子は女といへども私生子より先にす、以上に掲げたる事項につき相同じきものゝ間にては、年長者を先にす、これを法定の推定家督相續人といふ。

かど-ぐち[門口](名) 門の出入り口。「一にさむらひ二人」。 「所。

かど-さき[門先](名) 門の出入り口の前又は其近

かど-すずみ[門涼](名) 門前にてすゞむこと。

かど-せっけう[門說教](名) 德川時代に、人の門前に立ち說教をなして物を乞ひし乞兒。

かど-た[門田](名) 門外の田。「一の稻葉」。

かど-だ-つ[角立](自、た四) ㊀角がたつ。㊁互の間に反抗又は憎惡の氣生ず。あら〳〵しくなる。あらだつ。「議論が一」。

かど-だ-つ[角立](他、た下二) ㊀角を立てる。㊁互の間に反抗又は憎惡の氣を生ぜしむ。起す。

かど-たてる[角立](他)「かどだつ」の他。

かど-ちがひ[門違](名) ㊀行くべき家をとりちがへたること。 ㊁取るべき方向又は目指すものをとりちがへたること。

かど-ちがへ[門違](名) 前條に同じ。

かど-づけ[門附](名) 門口に立ちて、音曲を奏し、金錢を貰ひ受くること。又、其人。

かど-で[門出](名) ㊀逃亡すること。ずらかること。 ㊁進途。

かど-なみ[門並](名) ㊀家ごと。けんべつ。「きんぞよ。」 「一家」。

かど-ならび[門比](名) ㊀かどなみ。 ㊁となり。

かど-わらは[葛野童](名) 古、山城國葛野郡妻氏の女子の、御所の掃部主殿に事へ、火をとぼすことをつかさどりしもの。

かど-の-きさ[看督長](名) 古昔、檢非違使の下に屬し、追捕の事を司どりしもの。

カドミウム[Cadmium](名) 【化】白色の光澤を帶びたる金屬、亞鉛より稍や重く錫より稍や堅く、延性及展性に富む。

かどはかし[勾引](名) かどはかすこと。(誘拐)。

かどはか-す[勾引](他、さ四) 未成年者又は女子などの如き力弱きもの又は智乏しきものを、或は暴力を用ひ或は詐計を用ひ、其保護者の許より誘ひ出して他へ連れ行く。

かど-ばしら[門柱](名) 門の柱。 「す。

かどは-す[勾引](他、さ四) かどはか

かど-び[門火](名) 祖霊のとき、死者の魂を送るために、門前にて焚く火。門燈。

(かど-びらき)[門開](名) 見世びらき。

かど-ふ[勾引](他、は四) かどはかす。

かど-ふだ[門札](名) もんてう。てうさつ。

かど-べ[門部](名) 古昔、衛門府に屬し、皇居の門を守りしもの。

かど-べ[門邊](名) 門の邊、門のきんぞよ。

かど-まつ[門松](名) 新年に家々の門前に立て飾る松。まつかざり。

かど-みせ[角店](名) 市街の角に構へある店。

かど-め-く[角](自、か四) かどだつ。

かど-もり[門守](名) 門を守ること。又、其人。

かど-や[角屋](名) 街路の角にある家。

かど-やぶき[角屋敷](名) 街路の角にある屋敷。

かとり[縑](名) 《堅織りの義》目を細く堅く織りたる絹布。(繪絹)。 「の方言」。

(か-とり)[蚊鳥](名) 【動】「かうもり」の一名(近江

かとり-の-きぬ[縑衣](名) 白色又は水色のうすき絹布。

カトリック[加特力=Catholic](名) 「カトリッ

ク」教の略言。 ——**けう**[加特力教=Catholicism](名) 「クリスト」教の一派、紀元三百二十五年「ニケーア」の宗教會議にて、舊教の正統と認められて組織したるものに起る、今時爲は羅馬法王の統轄の下に屬す、羅馬教、天主教。

ガトリング-はう[—砲=Gatling gun](名) 機關砲の一種、北米合衆國人ガトリング氏が千八百六十二年頃の發明にかゝる、中軸ありて砲身其周圍を繞圍し、回轉しつゝ發射し續續し得る裝置にして、一分間に數百發の發射をなし得る。

かど-れいきや[門禮者](名) 新年に門口まで來りて賀禮を述ぶる人。

(か-さん)[河豚](名) 【動】「ふぐ」の異稱。

(か-さん)[嘉遯](名) 世をのがるゝこと。

(か-さんぼ)[蚊蜻蛉](名) 【動】撥翼類中蜻蛉科に屬する蟲、二個の長き尾毛を有し、翅は透明なり、身痩せて蚊に似る。

+かな[鮑](名) かんな。

かな[假名](名) 我國特創の寫音文字、眞字の片體を採り又は漢字をくづしたるもの、片假名と平假名との二種あり。「假字」。

かな[縢](名) 四條を合せて一條としたる織物の經。 「(な)の條」。

かな[哉](感) 語尾に附けて、感歎の意を表はす語。「夜半の月一」。「樂しき一」。

かな—[金](接頭) 《金の轉》 ㊀或語に冠して、金屬より成り立つもの、義を表はす語。「一山」。「一火者」。 ㊁或語に冠して、堅くして移らざる意を表はす語。「一つんぼ」。 「も一」。

がな(感) 語尾に附けて、希望の意を表はす語。「なくに編みたるもの。

かな-あみ[金網](名) はりがねにて網の目の如く

(か-ない)[家內](名) ㊀一家のうち。 ㊁わがつま。 ——**けいざい**[家內經濟](名) 一家の中のくらしむき。又、一家のくらしむきの處理。

かないろ[金色](名) 錄の如き色。

かなうつぎ[金卯木](名) 【植】薔薇科に屬する植物。短葉にして互生し、莖は木本なり、花は白色にして二十個內外の雄蕊を有す。やまどうまん。

かなぎ[鍬揺](名) 草を掻かくに用ふる農具、鍬にてつくる、形はくまでに似る。「鎌」。

かなぎ-がしら[假名書](名) 假名にてかくこと。又、其かきたる文書。

かなぎ-がしら[金頭](名) 【動】硬鱗類中かながしら科に屬する魚、頭部は大きくして堅く、背部は赤色にして少しく黃色を帶び腹部は白し、側部に淡黃色及黑色の縱條あり。體長大なるものは一尺五寸許に達す。我國東海に多く產す。 「の方言」。

(かなかなか)(名) 【動】「ひぐらし」の一名。「上總地方

(かながなか)(副) 辛うして。かろうじて。 「(鋼)」。

かながぢ[金地](名) 金屬にてつくれるさし。

かながひ[金具](名) ㊀金・銀・銅・錫等の薄片を蒔繪にはりつけたるもの。 ㊁金屬の薄片を以て物を包みたるもの、「卷煙草の一」。 ——**さいく**[金具細工](名) 蒔繪に金具を施すこと。又、其細工を施したる蒔繪。

かなぎ[鐵木](名) ㊀古昔の刑具の一、首を挾むるものにして、金屬にてつくれり。 ㊁石炭の一名。(近江の方言)。

(カナキヌ)[金巾](名) 「カナキン」の轉。

かなきり-どゑ[金切聲](名) 金屬を切る時に發する聲の如くに細くして高き音聲。「一をたてる」。

カナキン[金巾](名) 《ポルトガル語の Canequin より出づ》一種の綿布、綿を緯となし、堅く綾(ゑ)りて目を堅く細かく織り成したるもの、幅廣くして普通の木綿巾に倍す。

かなぐ[金具](名) 器具器械に裝置する鎖・錠などの類。かなもの。

かなくぎ[金釘](名) 金屬にてつくりたる釘。

(——-りう)[金釘流](名) 字體の拙せて拙惡なる筆蹟をあざけりていふ語。

かなくさ-しがれき[金臭](形、一) ㊀火などに物のくばりてあやしき香あり。きなくさし。 ㊁金屬の臭氣あり。

かなぐさり[金鎖](名) 金屬製のくさり。

かなぐし[金串](名) 金屬製の魚串。

かなくそ[金屎](名) ㊀錄のさび。 ㊁煙解したる金屬の殘滓。

かなくづ[金屑](名) 細工する金屬より出る屑。

かなぐつ[鐵沓](名) 馬の蹄の裏に打ちつくる錄(鐵)。

かなぐ-る[拐](他、ら四) ㊀かきなぐる。えひてはらひのく。 ㊁ひきよす。ねぢとる。たぐる。

かなけ[金氣](名) ㊀金屬の氣。 ㊁鍋・釜又は鐵瓶などの如き、火にかくる金屬製の器具の新しきものより出づる、其中に入れあるものを赤黑き一種の色に染めなすもの。

かなこき[金扱](名) 「いなこき」に同じ。

かなさいぼう[鐵撮棒](名) 古昔用ひし一種の兵器、太き錄の棒にとげを設けあるもの。

かなさび[金錆](名) 金屬に生ずるさび。

かなし[哀、悲](形、二) ㊀愛すべし。いとほし。いとし。 ㊁いたましく歎かはし。うれはし。

かなしがる[哀](自、ら四) かなしく思ふ。

かな-きき[鐵敷](名) 金屬をきたふ臺、銅鐵にて上面を平たくつくりたるもの。かなとこ。〔錄砧〕。

かな-きばり[金縛](名) のがれ能はざるやうきつく縛りつくること。「不動の—」。

++**かなしび**[悲](名) かなしぶこと。なつしぶ心。

かな-きぶ[鐵滓](名) 鐵に生じたるさびの皮。

++**かなし-ぶ**[悲ぶ](他、は四) かなしむ。

かなしみ[悲](名) かなしむこと。かなしむ心。

++**かなし-む**[悲む](他、ま四) をしむ。「露を—」。

かなし-むべ[悲・哀](他、ま四) ①心にいたましく感ず、なげく。うれふ。〔憐〕。「」②ふびんに思ふ。いとしむ。あはれむ。〔憐〕。

かな-おやこ[金杓子](名) 金屬にてつくりたる杓子。

かなた[彼方](代) 自身より最も離れたる部分に用ふる代名詞。あちら。あっち。むかひ。——。

とかなた[彼方此方](代) あちらこちら。あよこ〳〵。方々。

かな-たが[金箍](名) 金屬にて造りたるたが。

かな-たらひ[金盥](名) 金屬にて造りたる盥、多くは手水盥として用ふ。

かな-づ[奏](他、た下二) ①琴をかきなで、鳴らす。ひく。②音樂をなす。舞樂を演ず。

かな-づかひ[假名遣](名) 正しく假名をつかひて和文を書くこと。假名をうまくつかひ分くること。

かな-づち[鐵鎚](名) 金屬にて造りたる鎚。かれのさいづち。——**のかはながれ** 人の浮ぶ瀕なきにたとへいふ。「稱。

++**かな-つなゐ**[金綱井](名) 「はねつるべ」の古

かな-つぼ[金壺](名) 金屬にて造りたるつぼ、餌藏・錄藏の類。——**-いし**[金壺石](名) 錄鑄の砂禪・粘土など、まぜりあひたるもの。はったいし。——**-まなこ**[金壺眼](名) 落ちこみて形圓く白目多き目、貪慾の相なりといふ。

かな-つゑ[鐵杖](名) 金屬にてつくりたる杖。

かな-つんぼ[金聾](名) はなはだしきつんぼ。まるつんぼ。「—になりつ」。

かな-てこ[鐵梃](名) 錄にてつくりたるてこ。

——**-ぼう**[鐵梃棒](名) 前條に同じ。

かなでる[奏](他) 「かなづの訛」。

かな-と[金戸](名) ①金屬にて造りたる戸。②錄のくぎを以て固めたる戸。

かな-とこ[鐵床](名) 錄を鍛ふ臺、錄にて上面を平く造りたるもの。かなしき。〔鑄、錄砧〕。

かな-ばさみ[金鋏](名) ①金屬を切るためのはさみ。②「かなばし」に同じ。

かな-ばし[金箸](名) 鍛冶の具、きたふべき物をはさむに用ふるもの。かなばさみ。かなひばし。

かな-ひばし[金火箸](名) 金屬製の火ばし。

(か-なふ)[嘉納](名) よみして言を聞きいれ、又、よみして物を受けをさむること。

かな-ふ[叶ふ・適ふ](自、は四) ①うまく合ふ。てきがふす。あてはまる。「稱」。②のぞみ成就す。なる。(叶)。③事を爲し得。よくす。たふ。④親和す。むつぶ。やはらぐ。「兄弟相—」(諧)。

かな-ふ[叶ふ・適ふ](他、は下二) ①あてはまらす。適當せしむ。②望むとほりにせさす。願ひをかなへてつかはす。③親和せしむ。むつばしむ。

かな-ふぐし(名) 土を堀り起す具。

かな-ブツ[金佛](名) ①金屬にて作りたる佛像。木佛などの對。②底情の極めて冷かなるもの。「まなぶみの對。

かな-ぶみ[假名文](名) 假名にて書きたる文章。

かなへ[鼎](名) ①古代、食物を煮るに用ひし金屬製の器、脚あるものと脚なきものとありて、脚なきものは釜(カマ)に同じ。かま。②兩耳三脚ある鼎の特稱。あしかなへ。③支那の古昔、夏の禹王が九牧の金を集めて九個の鼎をつくり、これを王位承繼の寶器となしし、夏亡びて殷に傳はり、殷亡びて周に傳はり、周又亡びて秦に傳はりしより、王位又は帝業にかりいふ語。「國を興ひ—を訊ふ」。——**のけいおゆうをさふ**[問鼎輕重](名) 《周の定王のとき、楚の莊王が、九鼎の輕重を問ひし故事に出づ》 或國家又は或帝王を蔑視して、これを覆(クツ)さんと試みるにいふ。轉じて、國體又は或個人を蔑視して、これを覆さんと試みるにもかりいふ。

[(二)へなか]

かな-へび[金蛇](名) 【動】蜥蜴類中裂舌類に屬する尾鳥、形狀はとかげに類似す、舌は細長くして又裂し、其尾頗る長し。「蛇舌母」。

かな-べら[金篦](名) ①金屬製のへら。②鏝(ヒ)の一名。

かな-ぼう[鐵棒](名) ①錄にてつくりたる棒。〔錄棍〕。②錄の棒の頭に、錄の輪を四つ五つ付けたるもの、夜番をするものなどが地を突きて鳴らすもの。③巻械體操に用ふる一種の巻棍、左右二本の柱の腕木に錄の棒を架けわたしたるもの。④「かなぼうひき」の略言。——**-ひき**[鐵棒曳](名) ①かなぼうを突き鳴らして、夜をいましむる人。②〔蔑〕少なる事柄をもさわがしくふれ廻る人。③

かな-ほだし[鐵枷](名) 罪人をいましむる金屬製の枷(カセ)。

かな-ボトケ[金佛](名) 金屬にてつくりたる佛像。かなブツ。

かな-まじり[假名交](名) 假名と漢字とを混じて記すこと。又、其文書。

かな-また[鐵叉](名) 末端をさすまたの如くにつくりたる錄の棒。

かな-まり[金椀](名) 金屬製の椀。かなわん。〔鋺〕。

かな-むぐら[金葎](名) 【植】蓼科に屬する蔓纏草本、花は淡綠色にして雌雄異株なり、葉は掌狀に數裂す。〔蓼動蔓〕

かな-め[要](名) 《簪目の轉》 ①眼の骨を綴るために、つらぬきて、鯨骨などを嵌(ハ)むる小さき穴。又、其小さき穴に嵌(ハ)め入るゝ鯨骨など。〔眼目〕。②大事なる部分。肝要なる箇所。えうてん。えうこと。——**-いし**[要石](名) ①常陸國鹿島神社にある石、根は深く土中にひろがりて、其深さを知らずといふ。②轉じて、常に動かぬ物事にたとへいふ語。③〔建〕棟瓦又は石などを弓形に組み立て、其中ほどに差し入れて全體の力を支ふる石。

かな-め[金目](名) 【植】「かなめもち」の略言。——**-の-き**[金目木](名) 【植】薔薇科に屬する木、葉は橢圓形にして鋸齒を有し、嫩葉は赤色を帶ぶ、初夏、五瓣の小花を開き實を結ぶ、材堅くして種々の用に供せられ、殊に圓のかなめに適す、又、觀賞用として栽培せらる。〔圓骨木〕

かな-もの[金物](名) ①金屬製の器具の總稱。②かなぐ。

かな-やき[金灼](名) ①錄を熱して焼印を捺(オ)すこと。又、其焼印。②牧場のえるしに、其牧場の馬のもゝに捺す焼印。

かな-やま[金山](名) 金屬を堀り出す山。鑛山。

かならず[必](副) 相違なく。たしかに。きっと。——**-かならず**[必必](副) きっと相違なく。ぜひ〳〵。——**-しも**[必](副) かならずさうとも。〔下に打消の意を添ふ〕。「一勇ならず」。

(か-なり)[可](副) ①普通に。ひととほりに。②すこぶる。よほど。隨分。

カナリア[加奈利亞](名) 【動】《大西洋中「スペイン」領Canaria諸島の原產なるを以て名づく》 蕊類中すゞめ科に屬する鳥、形すゞめより小さく嘴は圓錐形なり、色は黃にして、聲高く愛らし。〔金絲雀〕。

かな-わ[金輪](名) ①錄の輪。②ごとくの一種。

かな-わらび[金蕨](名) 【植】わらびの一種、こはくして食すべからず。

かな-わん[金椀](名) 金屬製の椀。

かに[蟹](名) 【動】軟甲類中十脚類に屬する節足動物即ち短尾類の總稱、頭胸甲は幅廣く腹至つて小さく且扁平にして普通彎曲し、頭胸の下面に密着す、第一對脚は必ず鰲(ハサミ)となる、尾鰭はこれを缺く、横にあるく特異の能あり。〔蘆虎、桀步〕。

かに-[蟹](接頭) 《鶴髮草茸不合尊、海邊にて生まれたまひ、かにを拂ひ除けたまひしといふ故事に因ゞといふ》 赤子に關係したる語に冠らする語。「—ばき」。「—くそ」。

++**—がに**(接尾) 或動詞に附屬して、これを副詞體にする語。「やうに。ために。「身もまがふ—」。

かに-いし[蟹石](名) 蟹の化石。

かに-かく(副) とやかく。あれこれ。

かに-ぐさ[蟹草](名) 【植】海金砂に同じ。

かに-くそ[蟹屎](名) ①赤子のはじめての糞、色黑し。かにばゝ。〔胎屎〕。②〔近江の湖水の蓙などにつく魚のたまご。〔いふ〕。

++**かに-さり**[蟹取](名) うぶぎ。產衣。〔主に貴人に

かに-の-め[蟹目](名) 「かなめ」(一)に同じ。

++**かには**[樺](名) 【植】「かば」に同じ。——**-さくら**[樺櫻](名) 【植】「かばざくら」に同じ。

かに-ばば[蟹屎](名) 「かにくそ」(一)に同じ。

++**かに-ひ**(名) 【植】「がんぴ」(雁皮)に同じ。「—の花、色は濃からねど」。

(か-にふ)[加入](名) 或團體又は會社などに入ること。仲間入りすること。「る鮫(ヒ)釘。

かにめ-くぎ[蟹目釘](名) 頭の圓く高くなりたる釘。「かもんれう」に同じ。——**-の-かみ**[掃部頭](名) かにもりのつかさの長官。〔掃守〕。

かぬ[兼](他、な下二) ①一緒に合はす。合はせ持つ。②一つのものが兩樣のつとめをなす。兼帶す。「小刀と鍵とを—る刃物」。③足まりたる職務の外に、他の職務の事を行ふ。「總理大臣にして內務大臣を—」。④〔はゞかる〕「人目を—」。

かぬ[兼](自、な下二) 能はず。遂げず。「爲し—」「てき—」(難)。

かぬ-がぬ[豫豫](副) 「かねがね」に同じ。

++**かぬ-ち**[鍛冶](名) 《金打の約》 金屬をうち鍛(タ)ふと、又、其人。

かね[金](名) ①金屬。鑛物。②貨幣。金錢。③かねぶやく。曲尺。「大工の—や、蔵の鍵」。④直線又は直角。「—に曲る」。

かね[鐘](名) 「つりがね」又は「もはがね」の略言。

かね[鉦](名) 「たゝきがね」の略言。

かね[鐵漿](名) 「おはぐろ」に同じ。

かね[印](名) かねやき。

++—がね(接尾)「がに」の轉。「かたりつぐ—」。

かね-あひ[兼合](名) 輕重相關係して平均を保つこと。「七分三分の—」。

かね-いれ[金入](名) 貨幣を入れ持つ具、もしくは布帛製の袋をいふ。(財囊)。

++かね-うり[金賣](名) 古昔、砂金などを買賣したりし商人。「—吉次」。

かね-かし[金貸](名) 金錢を貸して、利息をとることを業とすること。又、其人。(子錢家)。

かね-がね[兼兼](副) あらかじめ。まへもって。かねて。「—思ふ」。

かね-ぐら[金庫](名) ㊀貨幣を入るゝための倉庫。㊁金錢を得べき顧客。資本を引き出し得べき「と」。

かね-ぐろ[鐵漿黑](名) 鐵漿を黑々と染めたる「と」。

++かね-ごと[豫言](名) かねていひおきたる言。又、契約の言。「諺の—俳りならば」。

かね-さし[鐵尺](名)「かねさやく」に同じ。

{かね-さやく[鐵尺]**}**(名) ものさしの一種、通常尺度をはかるに用ふるものにして、形は矩形に曲がり、其一尺は鯨尺の八寸に當る。まがりざし。(曲尺)。

かね-たたき[鉦叩](名) ㊀鉦を叩くこと。又、其人。㊁撞木(シモク)の稱。㊂かねをたゝきて物を乞ひあるく乞食。㊃【動】直翅類中蟋蟀科に屬する小蟲、翅短くして體は赤褐色なり、秋日美聲を發して鳴く。

{かね-つかひ[金使]**}**(名) 金錢を冗費すること。又、其人。「つるしむく堂。

かねつき-だう[鐘撞堂](名) つきならす鐘を

かね-づく[金盡](名) ㊀金を使用するとの隱語。㊁有るたけの金を出して事を謀ること。「語」。

かね-つけ[鐵漿付](名) ㊀【動】「かれつけとんぼ」の略言。㊁かねふで。㊂鳶の嘴側の羽。——。

さんぼ[鐵漿付蜻蛉](名)【動】とんぼの一種。翅は比較的大なれど他は薄弱なり、物にとまるとき翅を背上に直立す。あはじろとんぼ。

かねつけ-いし(金付石)(名)【鑛】硅石の一種、質鐵(ロ)かく色顯し、金銀をすりつけて其質量をためすために用ふ。「試金石」。

かね-つぼ[鐵漿壺](名) あはじろつぼ。

かねて[豫](副) まへかたより。まへもって。あらかじめ。「—聞きしかど」。「づる」。

{かね-の-つる[金蔓]**}**(名) 金錢を得らるべきて「ふる筆。

かね-ばと[金箱](名) ㊀貨幣を入るゝための箱。㊁其家の中にて、よく金錢を得べき顧客。

かねみ[金見](名) 貨幣の良否を見分くること。又、其人。

かねめ[金目](名) ㊀金錢上の價格。ねうち。ねだん。「—のもの」。

かねもち[金持](名) 金錢財寶を多く所持せる人。ぶげんまや。うとく。金滿家。富豪。「語」。

かねもと[金元](名) 金主又は信用者。元祿頃の「と」。(趙識)。

{かねる(他)「かぬ」の誤。**}**

{かねん[加年]**}**(名) 年を加ふること。年を迎ふること。

{かねん-ぶつ[可燃物]**}**(名) よく火にもゆる物。

かの[彼](代) 身邊を遠く離れたる事物を指す代名詞。あの。「—人」。

{かの-う[可能]**}**(名) ㊀できうべきこと。あたふること。㊁思惟上に於て矛盾なきこと。㊂【文法】動詞の分類の名、勢相に同じ。

かの-うば[蚊姥](名)【動】雙翅類中大蚊科に屬する昆蟲の總稱。觸角長くして糸狀をなし、胸背は穹形に膨大し中央に横皺あり、幼蟲は泥色を帶び濕地に產す、種類多し。

かの-え[庚](名)《金兄の轉》えとの名、十干の一。

かの-えば[蚊大母](名)【動】「かのうば」に同じ。

かの-と[鹿子](名) ㊀【動】鹿の子の稱。(麋、麑)。㊁【動】「かのこさう」の略言。㊂【植】「かのこもち」の略言。㊃「かのこさう」の略言。㊄「かのこもち」の略言。——**さう**[鹿子草](名)【植】敗醬科に屬する草、葉は掌狀複葉にして小葉は鋸齒を有し、花は淡紅色なり、根莖は藥用に供せらる。(排草、癰草)。——**まだら**[鹿子斑](名) 鹿の子の斑文を絞染(シボリ)にしたるもの。かのこめゆひ。——**どり**[鹿子鳥](名)【動】かはせみの一種、頭大きく嘴長大にして、體軀ははゞ鳩大なり、頭上に冠羽を生ず、體色は一般に白くして許多の黑斑點あり、通常山間の渓流に沿ひて棲息す。かぶとどり。やませみ。「花斑鳥」。——**マダラ**[鹿子斑](名) 鹿の毛の斑。又、それに似かよひたる

模樣。「—の雪はふりけり」。——**めゆひ**[鹿子目結](名)「かのこえぼり」に同じ。——**もち**[鹿子餅](名) 一種の菓子、甘く煮たる小豆をあんころ餅のまはりに付けたるもの。——**ゆひ**[鹿子結](名)「かのこえぼり」に同じ。——**ゆり**[鹿子百合](名)【植】百合科に屬する草、葉は線形にして花蓋の片は脚部より外方へ反捲し、雄蕊は大にして花蓋外に突出す、花の紅色なるものを特にかのこゆりと稱し、白色なるものを志ろかのこゆり一名志ろたまゆりと稱す、觀賞用として栽培せらる。(卷丹)。

++かの-あし(名)【動】鹿の古名。「朽木に生ず。

かの-たま[鹿玉](名)【植】一種の菌、冬季山中のあんころ餅のまはりに付けたるもの。——**ゆひ**[鹿子結](名)「かのこえぼり」に同じ。——**ゆり**[鹿子百合](名)【植】百合科に屬する草、葉は線形にして花蓋の片は脚部より外方へ反捲し、雄蕊は大にして花蓋外に突出す、花の紅色なるものを特にかのこゆりと稱し、白色なるものを志ろかのこゆり一名志ろたまゆりと稱す、觀賞用として栽培せらる。(卷丹)。

++かの-ざ[辛](名)《金兄の義》えとの名、十干の一。

++かのにけ-ぐさ(名)【植】人參の古稱。

{が-のみ[我飲]**}**(名) 強ひて酒を呑み過ごすこと。「む。

++かの-むらさき(他、ま四) かゝと聲立てゝ急に飲れて酒を飲むこと。

++かの-め(名)「かなめ」(要)に同じ。「ず。來世。

かの-よ[彼世](名) 人の死にて行くところ。よみ。

カノン-はう[加農砲](名)=Cannon gun 強き装藥を用ひて平射を行ふ火砲、砲身長く、彈丸は極めて遠距離に達す。

かは[川、河](名) 自然の作用により、地上の傾斜に沿ひて流れ走る水。ながれ。

かは[側](名) ㊀物の一方面。一邊。「帶の—」。㊁かたはら。かたへ。「東—」。

かは[皮](名) ㊀動植物の外面を覆ひ包むもの。㊁獸類のかはの特稱。けがは。つくりがは。たゞしがは零あり。㊂物の表面。うはかは。「ぬもの—」。

かは(感) 反動の意を表はす語。「夜半に嵐の吹か

—かは(接尾) 或語に添へて其度の甚しき意を表はす語。「馬鹿の—」。

かば[樺](名) ㊀【植】殼斗科に屬する喬木、葉は柔に似て尖頭及鋸齒を有し互生す、花は初夏に開き、雌雄同株にして共に葇荑狀をなし、花冠は白色なり、果實は廻を有する堅果にして每苞三個あり、樹皮は物を卷き松明を作り又は屋根を葺く等の用に供せらる。かんば。もゝらかんば。かには。㊁「かばこ」(蒲)の訛。㊂蒲の穗の色、赤色を帶びたる黃色。かばいろ。(赤茶色)。

{かば[河馬]**}**(名)【動】有蹄類中偶蹄類に屬する獸、「アフリカ」南部の沼池に產す、體長一丈餘にして體重六百貫以上に達す、軀幹肥大にして四脚短大なり、皮は厚くして皺あり粗毛を生ず、日中は水に潛み夜間陸上に出で草を喰ひ、作物に大害をなす。

[ばか]

{かば(名) 物と物と衝突し又は擦れあひて發する音。「—とつきあつ」。

かはあげ-みづ[川揚水](名) 田畝の灌漑のために川より引きたる水。

かはあげ-ようすゐ[川揚用水](名) かはあげ水を堰き止め置く所、これより溝渠を以て灌漑すべき所に水を通ず。「同じ。

かはあざみ[川薊](名)【植】「ひめあざみ」に同じ。

かはあつ[皮厚](名) ㊀外皮の厚くあること。

かは-あひ[川合](名) 川と川と流れあふ處。あちあひ。

++かは-あみ[川浴](名) 河水に浴すること。

かは-あらし[川嵐](名) 川に起る暴風雨。

かは-あをのり[川青海苔](名)【植】綠色藻門に屬する藻、淡水に生殖す、一層の細胞より成り綠色を呈す、味美なり。かはのり。かはもづく。

{かはい-さう(名) かはいらしきこと。**}**

{かはい-らし[しくしき]**}**(形、二) かはゆらし。

++かは-いり[川入](名) 川に入りて死ぬること。

かは-いろ[革色](名) 柳納戸色のやゝ黑ずみたるもの。「色」。

かば-いろ[蒲色](名)「かば」(蒲)(二)に同じ。(樺)。

(が-はら[牙保])(名)「がほう」に同じ。

かは-うす[皮薄](名) ㊀外皮のうすきこと。㊁皮膚のきめ細かにして滑かなること。「—に色白く」。

{かは-うそ[河獺]**}**(名)【動】「かはをそ」の訛。

かは-うま[河馬](名)【動】「かば」に同じ。

かは-おと[川音](名) 川の流るゝ音。

かは-おび[革帶](名) かはにてつくりたる帶。

かは-ぶろし[川下](名) 川をふきわたる風。

かは-かぶかぶ[川鰍](名)【動】「かぶか」の一名。

かは-かぜ[川風](名) 川を吹きわたる風。「—寒く、千鳥啼く」。

{かば-がば(名、副) ㊀水などのゆれ動くときなどの音。㊁合羽などの擦えれあふときなどの音。**}**

かは-かぶり[皮被](名) 物の皮を被れること。

かは-かみ[川上](名) ㊀川の頭。みなかみ。みなもと。上流。㊁川のほとり。

かは-がめ[川龜](名)【動】「すっぽん」の一名。

かは-がらす[川烏](名)【動】蒜雀類中からす

科に屬する鳥、稍や大形にして、翼と尾とは短く、嘴細長にして末端曲がる、頭部は褐色、胸部は白色、背部は灰黑色、鮭廣くして蹼(カミ)の用をなす。

かはがり(カワ)[川狩](名) 川にて魚を漁すること。

かはかり[斯許](名) かくばかり。かはど。

かはきし(カワ)[川岸](名) 川のほとり。川のきし。

かはきぬ(カワ)[皮衣](名) かはごろも。

かはきり(カワ)[皮切](名) ㊀最初に一つすうる灸。

㊁すべて氣ぐかはしき物事の第一着手。

かはきり(カワ)[川霧](名) 川に立つ霧。「宇治の—」。

かはく[河伯](名) ㊀川の神。㊁「かっぱ」(河童)の異稱。

かはぐち(カワ)[川口](名) ㊀河流の湖海などへ注ぐ口。(河口)。㊁武藏國北足立郡川口より製出する釜・鐵瓶其他の鐵器の總稱。㊂備馬樂の曲名。

かはぐつ(カワ)[革沓](名) 革にて作りたる沓。

かはぐわ(カワ)[革轡](名) 革にて作りたる轡。

かはくま(カワ)[川隈](名) 川の流のまがる所。川の流の入り込みたる所。かはわ(河曲)。——**つづら**[川隈葛](名)【植】「まゆみ」に同じ。

かはこ(カワ)[皮籠](名) 皮にて張りたる箱。又、紙にて張りたる葛籠(ラウ)。「出すさつまいも。

かはごえいも(カワ)[川越薯](名) 武藏國川越より出す一種の薯。

かはごえひら(カワ)[川越平](名) 武藏國川越より出す一種の袴地、經(タテ)は生絲にして緯(ヨコ)は練絲なるもの。

かはこざねぬ(カワ)[革小札](名) 鎧のこざねの一種、いためがはにてこしらへたるもの。

かはこし(カワ)[川越](名) ㊀川を徒歩(カチ)にてわたること。「—の人足」。㊁人を背負ひて川をわたることを業とする人。「大井川の—」。

かはごろも(カワ)[皮衣](名) 毛皮にてつくりたる衣。かはぎぬ(裘)。「をつくると。又、其品物。

かはざいく(カワ)[皮細工](名) 獸皮などにて品物

かはざうり(カワ)[皮草履](名) 竹の皮にてこしらへたる草履。寛文頃より始まりたりといふ。

かはさきぎ(カワ)[川崎音頭](名) 一種の俗曲、伊勢音頭はこれより分派せりといふ。

かはざくら[樺櫻](名)【植】(い)さくらの變種、花は少なく一重にて白し、皮は曲物の料に供せらる。(ろ)「きざくら」の一名。「き敷地。

かはきき(カワ)[川敷](名) 川水の流れて甃(タ)すべき地。

かはきま(カワ)[川島](名) 川の中にある島。「流。

かはきも(カワ)[川下](名) 川水のながれ下る方。下

かはばしら[蚊柱](名) 蚊のあまたあつまり飛ぶさまの柱の如く見ゆるにいふ。

かはぶり(カワ)[川尻](名) かはぶち。

かはす(スカ)[交](他、さ四) ㊀とりやりす。かうくわんす。か(あふ)。㊁互に交ふ。まじへあふ。

㊂輕く身を轉じて避く。さく。

かはすぢ(カワ)[川筋](名) 川のながるゝ路。水路。

かはせ(カワ)[爲替](名) ㊀かはすと。取りかはすこと。

㊁「かはせてがた又は「かはせけん」の略言。㊂互に隔りたる地にあるものが、正金を送付する勞費・不便又は危險等を免るゝために、かはせてがた又はかはせけんによりて、貸借其他送金を要する事を決濟する方法、內國爲替と外國爲替との二種あり。㊃かはせてがた又はかはせけんの賣買・割引其他かはせに關する事務。——**けいやく**[爲替契約](名)【法】一定の時期に一定の場所に於て、一定の金額を、證券を占有する者に、自ら支拂ふか又は第三者をして支拂はしむるかの契約。——**けん**[爲替券](名) いうびんかはせの證券。——**さうば**(カワ)[爲替相場](名) 外國爲替の賣買價格の高低、爲替は現金輸送の勞費を省略せんための方便に過ぎざれば、需要關係の點より觀れば、現金輸送費に依て制限さるべけれど、實際にては、金銀輸出の禁制及戰亂等最も高低の原因となり、殊に高低の度數繁きは、金銀價格の變動利子割引歩合の高低及手形の信用の厚薄等に原因す。(外國爲替の條參照)。——**ぞよようけん**[爲替證券](名)「かはせてがた」に同じ。——**ぞよようぞよ**[爲替證書](名) いうびんかはせの證券。——**そぞよう**[爲替訴訟](名)【法】一種の證書訴訟、商法に規定したる手形による請求を、證書訴訟を以て主張するものにして、支拂地の裁判所又は被告が普通裁判籍を有する地の裁判所に、これが訴訟を提起するを得るものとす。——**てがた**(カワ)[爲替手形](名) 手形の一種にして、債權者が債務者に宛て、自己又は其指圖人若しくは其所持人に一定の金額を支拂ふべしと命ずる證券、從うて振出人・支拂人・受取人の三者を具備するを要す、振出人は、支拂なき時にあらざれば其責を負はず、支拂人は、引受をなす迄はまた其責を負はず、受取人は、何時にても引受をなさしむるため、手形を支拂人に呈示するとを得、支拂人が引受けざるとき若しくは支拂はざるときは、前者は引受拒絕證書を作らしめ、後者は支拂拒絕證書を作らしめ、振出人又は裏書讓渡人に對して、前者は擔保請求を後者は償還請求を爲すとを得、此手形は裏書によりて轉傳して、貨幣の代用をなすものとす。

「歩。

かはせうえう(カワショウ)[川逍遙](名) 川邊の散

一字音　一佛語方言　++古語

かはせせり(カワ)[川鑿](名) 河の魚をあさりもとめて捕ること。

かはせびき(カワ)(名)【動】「かはせみ」に同じ。

かはせみ(カワ)[川蟬](名)【動】攀木類中はとゝぎす科に屬する鳥、雀大にして脚は攀木に適し、嘴は鋭直にして長大なり、背部青綠色にして脇部淸色、喉部白色にして腹部赤褐色、嘴黑くして脚赤し、多くは幽谿なる水邊に棲み、巧に魚の水面に浮ぶを窺ひてこれを捕る。かはせび。ぞよに。(魚狗)。

[みせはか]

かはぞひ(ソイ)[川沿](名) 河に沿ひたる所。かはべ。

かはだけ(カワ)(名) かはばう。(屠兒)。

かはたけ(カワ)[河竹](名) ㊀河邊に生ずる竹。(川竹)。㊁川竹のむきふし定まらぬといふより、轉じて、定めなき身の上殊に遊女の身の上をいふ。

かはたけ(カワ)[革茸](名)【植】「まゝたけ」に同じ。

かはたけ(カワ)[漢竹](名)【植】「かんちく」に同じ。

かはたち(カワ)[川立](名) ㊀水縣の達人。「—は川にてはてる」。㊁川ぎしにある人。

かはたで(カワ)[川蓼](名)【植】河邊に生ずるたで。

かはたび(カワ)[革足袋](名) 鹿のなめしがはなどにてつくりたる足袋。

かはたれどき(カワ)[彼誰時](名)《薄暗くて、かれはたれと、さだかに分からぬときの義》まだ明けきらぬ薄暗き時刻。

かはたれぼし(カワ)[彼誰星](名) あけの明星。

かはち(カワ)[輔](名) ㊀つらがまち。㊁車のかまち。

かはち(カワ)[川路](名) 川の流るゝ路。

かはちさ(カワ)[川芎](名)【植】玄參科に屬する水草、淺水に自生す、葉は披針形をなし、總狀花序は葉腋に生じ、花瓣は白色にして淡紅紫色の線を具ふ、窓葉は食用に供せらる。

かはちもめん(カワ)[河內木綿](名) 河內國より繰り出す木綿、地質普通のものより強し。

かはちや[樺茶](名) 茶にかばをおびたる色。

かはつ(カワ)[川津](名) 舟のよるべき川の岸。

かはづ(カワ)[蛙](名)【動】(い)無尾類中發指類に屬する兩棲動物、體形は痩小にして背部に疣(ボ)あり、趾指に吸盤あり、體色は黑色又は褐色にして、中には斑點あるもあり、外觀醜けれど美音を發す、山間の溪流などに棲む。(ろ)「かはづがけ」の略言。——**がけ**[河津掛](名) 相撲の手、片手を敵の首に掛け、片足を敵の片足に掛けて、反(ソ)りて敵を倒すこと。

かはつき(カワ)[皮附](名) 皮のつきてあるもの。

かはづたひ(カワタイヅ)[川傳](名) 河にそひて行くこと。

かはつづら(カワ)[革葛籠](名) 革にて張りたるつゞら。「の表面。

かはづら(カワ)[川面](名) ㊀河の邊。かはべ。㊁河

かはつるも(カワ)[川葛藻](名)【植】眼子菜(ヒルム)科に屬する草、緋水に生ず、葉甚だ狹く、花は通常二個づゝ叢生し、子房は成熟すれば柄を生ず。「す鳧。

かはと(カワ)[川門](名) 川の流の狹まりて瀨をなす所。

かはとし(カワ)[革砥](名) 刃物をとぐに用ふる革。

かはね(カワ)[川根](名)【植】「かはあをのり」の一名。

かはねがれ(カワ)[川流](名) ㊀川水に流さるゝこと。「げんのうの—」。㊁河にて溺死したること。又、其人。

かはなみ(カワ)[川波](名) 川に立つ波。

かはなみ(カワ)[川並](名) 川邊に並ぶこと。川ぞひ。

かばね[姓](名)(い)上古、血族の關係によりて社會の秩序を立て、以て國家を編制したりしときの氏族の名に添へて呼びし稱、即ち、連(ムラ)・臣(オミ)・首(トビ)・國造(クニノミヤツコ)などの類にして、例せば、中臣連・蘇我臣・忌部首・出雲國造と呼びしが加し、皆それ〳〵定まりたる世襲の官職ありて、臣・連等は政府を輔け、國造等は地方を治むるなど、當時の政治機關なりしが、大化の革新以後は公權上に關係なきとなれり。(ろ)天武天皇の時改めて八色の姓、即ち、眞人(マヒト)・朝臣(アソミ)・宿禰(スクネ)・忌寸(イミキ)・道師(ハシヒ)・臣(オミ)・連(ムラジ)・稻置(イナギ)を置かれし以後は、「藤原眞人」、「藤原朝臣」、「小槻宿禰」等の如く、たゞ氏族の名に添へて尊卑を表はす標號。「ぞよかばね。(屍)。

かばね[尸](名) 死者の身體。ぞよかい。なきがら。

かはねずみ(カワ)[川鼠](名)【動】囓齒類中ねずみ科に屬する小獸、身は扁くして蹼(カミ)あり、尾至つて細長く、色略ぼ普通の鼠に同じ、谷あひなどに穴居し魚を捕り食ふ。(水鼠)。「同じ。

かはのり(カワ)[川海苔](名)【植】「かはあをのり」に

かはばう(カワ)[皮坊](名) 動物の皮を剝ぐを商業とせる下賤の人。ゑた。かはだ。ゑとり。

かはばれり(カワ)[革羽織](名) なめしがはにて仕立てたる羽織、もとは寒を防ぎ又は火を防ぐに着用したれど、今は、職人・大工・仕事師・左官など着用す。

かはばかま(カワ)[革袴](名) なめしがはの袴。

かはばき(カワ)[皮剝](名) 動物の皮を剝ぐを商業とする人。かはばう。「茶筅」の一名。

かはばし(カワ)[川蓋](名)【植】ごぼうゆう。(呉

一字音　一佛語方言　++古語

かはらーけ

かはらけ（名）【瓦】❶土器の皿。❷酒盛りの一種。

かはらーけ（名）【川原毛】❶人の髪の毛が非常に細く、柔らかなもの。❷川原時代に、貴族の間で流行した人の髪の毛の形。

かはらーけの（名）【川原毛の】❶川原毛の。❷川原時代に、貴族の間で流行した。

かはらーけ（名）【川原毛】❶人の髪の毛が非常に細く、柔らかなもの

かひ

かひ―かひ

かひ―かひ

**かひ―

女などを招きて遊ぶ。㊃利用す。報酬す。「正直な所を—てやる」

か・ふ[かへふ]〔變〕(他、は下二)　㊀異ならしむ。變化せしむ。「形を—る祁傳の妖術」。㊁轉化す。うつす。㊂改革す。あらたむ。㊃移動す。うごかす。

か・ふ[かへふ]〔換〕(他、は下二)　㊀物と物とを交換す。かへあふ。「砂糖と金とを—」(交易)。㊁先のものを廢し此ものを用ふ。とりかふ。「人を—」(代)。㊂古き水を去りて新しき水を入る。さらふ。「瓶を—」(樣)。

かぶ〔株〕(名)　㊀きり倒したる木の殘りたる幹又は根。くひぜ。㊁植物の幹莖の個數。「三—の菜」。㊂官許又は規約によりて、特に限られある營業。「湯屋の—」。㊃昔時、賣買せし役目又は名跡。「同心の—」。㊄株式又は株券。㊅「ゐさだまり。おきまり。「愚鈍はお—」。

かぶ〔蕪〕(名)　〔植〕「かぶら」の略言。(蕪根)。

(か・ふ〔歌舞〕(名)　㊀歌ふと舞ふと。「—音曲」。㊁うたひ且舞ひて興ずること。遊興。

——のち〔歌舞地〕　遊興の盛んに行はるゝ繁華の地。

かぶ[かぶ]〔合〕(名)　㊀一坪の十分の一、即ち、三・六平方尺の積の稱。㊁一升の十分の一、即ち、六四八二・七立方分の量の稱。㊂距離などを十分して其一の稱。「富士山の八—目」。㊃蒸ゐる器の個數。「蒸—」。㊄計算のえめ高。たか。㊅〔Synthesis〕〔哲〕神證法にて、一事物若しくは一概念が、發展して或矛盾の狀態を經過し、更に新しき事物若しくは概念となるを、即ち、正が反となりて更に一狀態を形成すること。㊆〔天〕二つの天體が、同黃經若しくは同赤經に來ると、通常は遊星・衝星又は彗星が、太陽と同黃經若しくは同赤經に來ることをいふ、其太陽と地球との間に來るときは下合といひ、太陽がこれと地球との間にあるときは上合といふ、故に上遊星には下合起るとなし。

(か・ふ〔餓孝〕(名)　かつゑ死に。うゑ死に。

(か・ふ〔衙府〕(名)　やくえよ。やくば。

(か・ふ〔樂府〕(名)　漢詩の古體の一、句の長短一定せず、漢の武帝が音樂にの匠せうたふために、側定せしめしに創まる。

(か・ふ・い[ゴウ]〔合意〕(名)　互の意思が相一致せること。互の契約若しくは談合のできたること。

(か・ふ・いつ[ゴウ]〔合一〕(名)　一つにあふと、又、一つにあはすと。

——・さいむ〔合一債務〕(名)〔法〕各債務者が合同して一の債務を負ふと、債權者は同時に總債務者に對してのみ履行を請求することを得。

(か・ふ・ら〔家風〕(名)　家の掟。家のならはせ。

(か・ふ・ら〔下風〕(名)　其人の下位。「其—に立つを肯ぜず」。

(か・ふ・ら・らく〔夏風樂〕(名)　雅樂の一種、和風樂。

(か・ふ・れつ[コウ]〔甲乙〕(名)　㊀第一と第二と。㊁すぐれたるとあとりたること。又、かみとあもと。「伐倒—なし」。

——・にん〔甲乙人〕(名)　貴賤上下の人。

(か・ふ・か[コウ]〔闔家〕(名)　一家内。全家。

(か・ふ・か[コウ]〔閤下〕(名、代)　「かくか」閣下」に同じ。

(か・ふ・かく[コウ]〔岬角〕(名)　みさき。さき。

(か・ふ・かく[コウ]〔甲殼〕(名)〔動〕節足動物の皮膚が、多量に石灰質を含み硬化したもの。

——・る〔甲殼類〕(名)〔動〕節足動物の一、水中に棲息す、外皮は甲殼をなし、頭胸部と腹部とに分る。兩部の各節に肢あり、鰓を以て呼吸し、二對の觸角を有す、かに・えび等これなり。

(か・ふ・かく[ゴウ]〔合格〕(名)　㊀一定の格式又は條件に適合すること。㊁採用の試驗に及第せること。

かぶ・かけ[コウ]〔甲掛〕(名)　手足の甲にかくるためのもの、布片にてつくる。「む」。

(かぶ・がぶ〔名、副〕　酒などを勢よく飲む音。「—飲む」。

かぶ・き〔冠木〕(名)　㊀「かぶきもん」の略言。(衝木)。

——・もん〔冠木門〕(名)　かぶき(衝門)。

(か・ふ・き〔歌舞伎〕(名)　㊀慶長の頃、出雲の神子(ミコ)阿國といふ女の新に始めし舞曲、即ち、阿國歌舞伎の稱、これに淵源して其舞曲の行はれゆくに連れ次第に改良を加へられ、遂に芝居となり、今日にては、專ら芝居の稱にいふ。㊁「かぶきもの」の略稱。

——・と〔歌舞伎子〕(名)　歌舞伎に出づる役者。やくえや。

——・えばる〔歌舞伎芝居〕(名)　格よき芝居、昔時は、櫓(ヤグラ)を上ぐることを得しもの、今時の大劇場。

——・ぶは

ちばん[ゴウ]〔歌舞伎十八番〕(名)　十八番の條を見よ。

——・やくえや〔歌舞伎役者〕(名)　歌舞伎芝居に出動する名題役者。

(か・ふ・き[ゴウ]〔合議〕(名)　二人以上の者の相集まりて議すること。

——・さいばん〔合議裁判〕(名)　二人以上の判事の合議によりて成立する裁判、現今我國の地方裁判所・控訴院・大審院等に於ける裁判これなり。

——・せいど〔合議制度〕(名)　合議によりて事を行ふ制度。「授する」。

(か・ふ・きふ[キウ]〔合級〕(名)　二級以上を合併して敘す、外國の稱。

かぶ・きり〔株切〕(名)　小兒などが、頭の毛を四方

同じ長さに切り揃(ヅ)へたること。「—の若機すがた」。

かぶ・きん〔株金〕(名)　株式に對する出資金。

(かぶ・きん[ゴウ]〔合卺〕(名)　卺はひさごの實を半切したる杯、支那の古昔の婚姻の式に、夫婦各其杯にて酒をくみかはし、よりいふ。婚姻の式を擧ぐること。けつこん。「これい。「—の式を擧ぐ」。

(かぶ・きん[ゴウ]〔合金〕(名)　二種以上の相異なる金屬を熔融混合して成りたる金屬。まやくどうきん。ちゆう等これなり。

(か・ふ・くわ[コウ]〔甲科〕(名)　第一級。「き」に同じ。

(かぶ・くわん・ぼく[ゴウ]〔合歡木〕(名)〔植〕「ねむの

(かぶ・けい[ゴウ]〔合計〕(名)　㊀合せ數へたる高。㊁合せ數へたる高。

(かぶげふ・はふ[ゴウ]〔合業法〕(名)　二人以上のものが共同して業を營む方法。

かぶ・けん〔株券〕(名)　株式の所有を證明するための證券にして、該株式會社が本店所在地にて登記をなしたる後に、株主に對して發行するもの。

(かぶ・ど[ゴウ]〔合期〕(名)　一定の時間にあふと。よき機會にあふと。「進退更に—せず」。

(かふ・とく[コウ]〔闔國〕(名)　一國内。全國。

かぶさ・る[られる]〔被〕(自、ら四)　表面にかゝりふさがる。もはふやうになる。

(かぶ・ま[ゴウ]〔合祀〕(名)　二柱以上の神を一社に合せまつること。

(かぶ・ま[ゴウ]〔合資〕(名)　資本を合すこと。

(かぶ・ま[ゴウ]〔合子〕(名)　蓋ある塗椀。

かぶまち・かいだう[コウ]〔甲州街道〕(名)　東京を起點として、甲斐國甲府へ通ずる街道。

かぶまち・りう[コウ]〔甲州流〕(名)　昔時の兵學の一派、小幡勘兵衛景憲を流祖とす。

かぶ・まる〔株式〕(名)　株式會社の資本の單位、各株式の金額均一なるものにして、會社の定款に別段の規定なきときは、これを自由に他人に讓り渡すことを得。

——・がぶまくわいしゃ[コウ]〔株式合資會社〕(名)　無限責任社員と株主とを以て組織せる會社、其無限責任社員は合資會社の無限責任社員と株式會社の取締役とを兼ね、株主は株式會社の株主と同樣の權利義務を有す、機關は、會社を代表する無限責任社員及株主總會・監査役なり。

——・くわいしゃ[コウ]〔株式會社〕(名)　株主を以て組織せる有限責任會社にして、株式により成立せる資本團體、會社の權利義務に就ては會社のみ權利義務の責任を有し、各社員は其會社に對して權利義務の責任を有するのみ、機關は株主總會・取締役・監査役なり。

——・ざりひきおよ〔株式取引所〕(名)　株式の取引賣買をなす取引所。(取引所の條參照)。

(かぶまくわ・くわいしゃ[コウ]〔合資會社〕(名)　無限責任社員と有限責任社員とを以て組織せる會社、有限責任社員は、たゞ其組織の際出資したる外は一切責任を負はずして、無限責任社員の承諾を得ば、其持分を他に讓渡すことを得、無限責任社員は、會社を代表し事務を執行する權利義務を有し、總員の承諾を得ざれば、其持分を他に讓渡すことを得ず。

(かぶまく・さん[ゴウ]〔合資算〕(名)〔歌〕二人以上の人が醵金し、これを資本として營みたる事業より生じたる利益配當高・損失分擔額等を定むる計算法。

(かぶ・まゆ[コウ]〔甲首〕(名)　かぶとくび。

(かぶ・まん[コウ]〔盍簪〕(名)　「古語」に出づ。友人のあつまりあふこと。

カフス〔Cuffs〕(名)　詳服を着するとき手首に着くる飾布もて作り、鰓引又は鬆鰓引にしたるもの、「ホワイトシツ」の手首にあたる所にも附けあり、色はおもに白を用ふ。

か・ふす(名)　《歌》(カフス)の義。〔植〕橙の一種、皮苦し、おもに蚊遣火に焚くより此名あり。(臭橙)。

++かぶ・す[ゴウ]〔自、さ四〕　頭傾く。

かぶ・す[ゴウ]〔被〕(他、さ下二)　㊀かぶらす。きせる。おほふ。㊁或鳴物の上に、更に他の鳴物を入れてうつ。㊂あざむく。たばかる。

かぶせ〔被〕(名)　㊀物を被(カブ)ふと、又、被ふに用ふるもの。(蓋、蓋)。㊁「ばくちの隱語」。

(かぶ・せい[ゴウ]〔合成〕(名)　二つ以上のものが、相合して一の狀態を成すこと。

(かぶ・せつ[コウ]〔卿襲〕(名)　なれてみだらになること。

かぶせ・ぶた〔被蓋〕(名)　中身を殘らず被ふ蓋。「う」。

かぶせる〔被〕(他)「かぶすの誤」。

(かぶ・ぞく[コウ]〔甲族〕(名)　門閥高き家。よきいへが

(かぶ・そつ[コウ]〔甲卒〕(名)　よろひを着したる兵士。

(かぶ・たい[コウ]〔甲第〕(名)　㊀かみやしき。㊁進士などの第一等。

かぶ・だか[コウ]〔甲高〕(名)　手背又は足のおもての高くはりいでたること。「足袋」。「古名」。

++かぶ・ち[コウ]〔桐機〕(名)〔植〕「まるブえゆかん」の

(かぶ・ち[コウ]〔合致〕(名)　兩者互に一致すること。

(かぶ・ちゆう[コウ]〔甲蟲〕(名)〔動〕昆蟲類中翅翅類の稱、口器はものを咬むに適し變態完全なり、前翅は革質にして鞘をなし、其下に膜質の後翅を折り疊む、中胸後胸の兩部は相癒合す、其種類多く、かみきりむし・はたる等これに屬す。

(か・ぶつ[コウ]〔下物〕(名)　酒の肴。さかな。

(かぶてつ・かん[コウ]〔甲鐵艦〕(名)　㊀鐵甲したる軍艦、「アメリカ合衆國の南北戰爭のときの創始に

かゝるといふ。㊁「せんとうかん」(戰鬪艦)に同じ。

++かふ-と[コウ][鴨頭](名)(字音の誤讀)吸物に香をそふるため入れたる柚の皮など、被に浮ぶ體を鴨の姿にたとへていふ。すひくち。

かぶと[兜、冑](名) 古昔、戰爭のときに頭にかぶりしもの、頭を入るゝところを鉢(ハチ)といひ、鉢の後に垂れて頸を被(オホ)ふところを鉢巻(シコロ)といひ、目庇(マビサシ)の上につくる鍬形などを前立(マヘダテ)といふ、鉢は鐵にて作り、鉢はいため革などにてつくる、俗に甲の字をかぶと冑の字をよろひと誤用せると久し。(甲)。——-**がに**[兜蟹](名)【動】蟹の一種、體は堅甲を被り幅廣し、はゞ半月形の頭胸及六角形の腹より成り、後端に細長なる尾節を具す、頭胸の下面に口を圍みて六對の脚あり、腹に五對の鰓狀肢を有し腮を有す、瀬戸内海及九州沿海等に多く產す。(贊魚)。——-**がひ**[イヂ][兜貝](名) うにの石灰質の外殼(鹽蝶)。——-**きく**[兜菊](名)【植】毛茛科に屬する草、大なるものは四五尺に達す、葉は廣くして掌狀に分裂し深綠色にして光澤あり、花は通常深菊色を呈し、秋の頃に開く、有毒植物にして、根はぶすと稱し藥用に供せらる。とりかぶと。かぶとばな。(雙雲菊)。——-**くび**[兜首](名) 昔時の軍陣にて、大將分の首級の稱、「一に恩賞」。——-**たて**[兜立](名) 昔時の陣中にて、冑をかけ置きし具、長さ六尺許、全體槍に似ていしづきあり、其頂上に多くは鍬頭形の盤を置き、其處に冑をかく。(冑立)。——-**にんぎやう**[ギヤウ][兜人形](名) 五月節句に飾る武者人形。——-**パチ**[兜鉢](名) ㊀兜の頭をもはふ部分の稱。㊁綠の廣くはりいでたる鉢、天麩羅蕈などにて鯛飽の粉を澄(ト)くなどに用ふるもの。——-**はね**[兜花](名)【植】「かぶとぎく」に同じ。——-**むし**[兜蟲](名)【動】鞘翅類中五節類に屬する昆蟲、輻七八分長二寸五六分許、全身栗色なり、雄は頭邊より一個の長き突起を出す、雌にはこれなし、雌雄陶汰の最も著しき蟲にして、通常さいかち・楢等に多く見る所のものなり。——-**をぬぐ** 降參するにいふ。——**のをを**

ぎむ 敵に對して油斷をなさゞるにいふ。

(かぶ-ごう[コウ][合同](名) 二つ以上のもの、一つになると、又二つ以上のものを一つにすると。

かぶ-ね[蕪菜](名)【植】「かぶらな」の略言。(蕪菁)。

かぶ-ぬし[株主](名) 株式會社の社員、株主となる合資會社の無限責任社員以外の社員又は株式會社の機關の一、其決議は會社の意思にして、各株主は其權利は株券を以てこれを證明す。——-**そうく**は、少くとも一個の株式を引き受けざるべからず、一個の株式に付き一個の議決權を有す、十一株以上を有する株主の議決權は、定數を以て制限するとを得、取締役これを招集するものにして、定時と臨時とあり、定時は毎年一回一定の時期に必ず招集すべきものにして、取締役の提出書類及監査役の報告書を調査し、且利益又は利息の配當を議決す、臨時は必要ある毎に招集せらる、總資本の十分一以上を有する株主は、總會招集の請求をなすとを得。

(かふ-はん[コウ][甲板](名) 船のかんぱん。

かふひのり[コウ][合比の理](歌)二つの比相等しければ、一つの比の前項と後項との和と、其後項との比が、他の比の前項と後項との和と、其後項との比に等しといふと。

(かふ-へい[コウ][甲兵](名) よろひを着したる兵。

(かふ-へい[ヘイ][合併](名) 一つにあはすと。

(かふべん-くわ[ベン][合瓣花](名)【植】合瓣花冠をなす花。——-**くわん**[合瓣花冠](名)【植】花瓣の合着して一花冠をなすもの、あさがほ・かきうり等の如きこれなり。

(かふ-めい[ミヤウ][合名](名) 名前を一緒に書き列ぬると。「一て香賞を遣る」。——-**くわいしや**[合名會社](名) 二人以上のものが、各出資して共同の商業を營む無限責任の會社、各社員は會社を代表し會社の業務に當る權利を有す、若し會社の財產を以て會社の債務を完濟する能はざるときは、各社員は連帶して其債務を負ふものとす。

(かふ-やく[ヤク][合藥](名) 火藥の一名。

かふ-ら[カブラ][甲](名) 《「ら」は濁音》「かふ」に同じ。

かぶ-ら[カブラ][蕪](名)【植】十字花科に屬する一年生又は二年生の栽培草本にして、もぶらなの變種なり、種子は一列に並び、根は蕪菁根をなす、種子より油を搾(シボ)るべく、葉及根は食用に供せらる。かぶ。かぶな。(蕪菁)。——-**ね**[蕪菜](名)【植】「かぶら」に同じ。——-**のせんまいづけ**[蕪千枚漬](名) 蕪の根を薄くきりて鹽漬にしたるもの。——-**ぼね**[蕪骨](名) 鯨の頭の骨、釣にて細く削り、三杯酢などに入れて食ふ。ひづ。

かふら[鏑](名)「かぶらや」の略言。——**や**[鏑矢](名) やぢりの一種、木もて蕪菁の根の如き形に作り、中を空にし三個の穴をあけ、かりまたを附けて射るもの。空中を通過するとき響を發す。(鳴鏑、鏑箭)。——-**ぢり**[鏑鏑](名) 頭の曲りたる鷺おもにかぶらやの中

を彫るに用ふるより此名あり。

かぶり[被](名) ㊀頭にかぶるもの。㊁狩(シヲ)の其目の隱るゝばかりに毛の蔽ひかぶりたるもの。

かぶり(名) 《頭振の略》頭を左右にふりて不承知の意を示すと。——**をふる** 否む意を示す。

(かぶ-り[ヂヤウ][合理](名) 芝居の大入り。

(かぶ-り[ヂヤウ][合理＝Rationality](名) ㊀正に然るべきと、公平なると、道理に合ふと。㊁論理的に論證すると、推論上其道理が必然の結果なると。經驗又は想像の對。

(かぶり(名、副) 流動物を飲む音。がぶ〳〵。

かぶり-がさ[被笠](名) 頭にかぶる笠。

かぶり-ぎたぢ[被下地](名) ㊀冠を被る下地に用ふるもの。㊁髮の結ユひ方、冠を被るともさはりなきやう、髮を頭上にかためて結びたるもの。

(かぶり-せつ[ヂヤウ][合理說＝Rationalism] ㊀合理的に組織したる說。㊁基督教の一派、聖書の中にて、合理的部分のみを取りてこれを信じ、不合理的部分はこれを排除するもの。

かぶり-つ-く[ぐきけけ][嚙付](他、か四) ㊀むしやぶりつく。㊁かみつく。

「例に同じ。

(かぶりつ-ひれい[ゴウ][合率比例](名)【數】複比

(かぶり-てき[ヂヤウ][合理的＝Rational](形) 論理的に判斷論證するにいひ、又、道理に合ふるにいふ。

かぶり-もの[被物](名) ㊀笠又は帽子の如く頭にかぶるもの。㊁頭にかぶりてあるもの。

(かぶ-りよく[ヂヤウ][合力](名) ㊀力を合はすと。㊁やりき。たすけ。㊂施與すると。めぐみ。ほどこし。㊃【理】二個以上の力が組み合ひて成る一つの力。

かぶ-る[られれれ][被](他、ら四) かうぶる。

かぶ-る[らりるるれ][嚙](他、ら四) ㊀かむ。かじる。㊁苦痛の感を起さしむ。「腹を—」。

かぶ-る[れれれるるれ][感](自、ら下二) ㊀寢などの氣に感じて、皮膚病起る。㊁感じて其物の如くになる。感化をうく。あやかる。「惡人にかぶれて」。

かぶれ[感](名) ㊀かぶるゝと、又、かぶれたるもの。㊁かぶれて起りたる皮膚病。「うるし—」。

かぶろ[禿](名) ㊀頭に毛髮なきと、はげあたま。㊁山に樹木なきと、はげやま。㊂幼者などが髮を短くして結ばざると。㊃遊女の側にあるる幼女。かむろ。——-**たち**[禿立](名) ㊀子供の頃。㊁もと禿にて先輩に仕へ、よく其道をわきまへたりとの意より、遊女をはめて言ふ。

まつ[ゴウ][禿松](名) 葉の少なき松。

(かぶ-ゐ[ゴウ][合圍](名) まはりを かこむと。——-**ちきやう**[キヤウ][合圍地境](名) 敵の合圍若しくは攻擊等の事變に際し戒嚴する地域、其地の普通警察を停止して非常警察を行使する權を、其地の司令官の管掌に委ぬ。

(かぶん-さいむ[可分債務](名)【法】債務の目的物が分割して履行し得る性質の債務。例せば、金錢の債務の如きものにして、幾部分を支拂ふとも全體との差はたゞ其率に止まるものなり。

(かぶんすう[假分數](名)【數】分子が分母より大なる分數、分數は整數一より小なる數を表はすものなるに、分子大なるは、整數一より大なる數にして、たゞ分數の形式をなすものなる故にいふ。

(かぶん-せい[可分性](名)【理】物體の有する性質の一、如何なる細微にも分たれ得べきと、香氣は其物體の微細なる部分が飛散せるによるものなるを觀ても、これを知るべし。

(かぶん-ぶつ[可分物](名)【法】當事者の意思又は法律の規定によりて、分割し得べき性質なる權利

かへ[カエ][槪](名)【植】「かや」に同じ。

かへ[カエ][代](名) ㊀かはると。㊁かはり。みやうだい。㊂物價の割合。「米一俵七圓—」。(替)。

かべ[壁](名) ㊀家の四方のかこひ又は室の內部のへだての土を塗りてつくりたるもの。㊁《ぬると きに見るといふ義》古昔、夢の異稱。(あもに歌に用ふ)「ねる夜の、—さわがして見えしかど」。——**にみみ** 密談などのやゝもすれば洩れやすきにいふ。——**ひとへ** すぐのとなり又は極めて近接せるにいふ。

(かべ(名) 豆腐の異稱。(蹠人の語)。

かへいち[嘉平地](名) ぬいぜんぶりの產地。

かへ-うた[カエ][替歌](名) 立歌と俗歌及曲節の同じやうに作られたる歌。「を得たると。

かへ-れさり[カエ][替劣](名) 交換して惡しきもの。

かべ-がき[壁書](名) ㊀壁にかきたる文字。又、壁に貼りおく文書。㊁むきて書「評定所—」。

かへ-がへ[カエ][代代](名) とりかへ。かうくわん。

かべ-どし[壁越](名) 壁を隔てたると。又、壁を隔てゝものすると。「—に話す」。「ば。

かへ-とば[カエ][代言葉](名) ふてふ。あひと

++かへ-さ[カエ][歸](名)「かへるさ」に同じ。

かへさ-ふ[カエ][返](他、は四)「かへす」の

かへ-さま[カエ][反樣](名) さかさま。

かへし[カエ][返](名) ㊀かへすと。㊁字音の反切。㊂[延言。

へんたふ。返事。㊃かへしうた。返歌。㊄波瀾の去りて再び寄せ又は地震大風などの止みて再び起こるにいふ。㊅芝居の一幕の內にて、書時幕を閉ぢ鳴物にて其間をつなぎ、直に開くきり。——-**う**

た[返歌](名) ㊀贈られたる和歌の意に答へて、詠みかへす歌。へんか。 ㊁長歌の意を約めて、其後に附くる短歌。 ——**がたな**[返刀](名) 一方へ切り付けたる太刀を、更に他方へふりかへすときの太刀。かへすがたな。 ——**ぶみ**[返字](名)「かへりごと」に同じ。

かべ-ぶたち[壁下地](名) 壁の壁土をつけとゞむる骨となすもの、おもに竹又は木などの細き材を、縦横に細かく結びて作る。かべぶろ。「壁骨」。

かへし-ばり[返針](名) 衣服などの縫ひ方にて、縫ひ行きたる終りの止めに、もとの方へ一寸餘縫ひ返すと、又、袋物などの縫ひ方にて、一針づゝあと〈返し縫ふこと。

かへし-もの[返物](名) ㊀さいばらの呂律の歌。 ㊁ものをかへすこと。又、もどすべきものの。

かべ-ぶろ[壁代](名) ㊀宮殿などの内部に壁の代用に掛くる帳。 ㊁かべぶたぢ。

かへ-す[返](他、さ四) ㊀もとの如くにす。もどす。「復」。 ㊁もとの所へ到らしむ。「歸」。 ㊂受けず。へんきやくす。「品物を—」。 ㊃却退す。ふりぞく。「追ひ—」。 ㊄嘔吐す。はく。 ㊅報酬す。むくゆ。「恩を—」。 ㊆くりかへす。

かへ-す[返](自、さ四) ㊀くつがへす。ひるがへす。 ㊁重れて寫す。くりかへす。「これを—」。 ㊂耕す。 ㊃漢字の反切をなす。

かへ-す[孵](他、さ四) 卵を子に化せしむ。

かへす-がへす[返返](副) 幾度も。かさねて。

かべ-すきや[壁透屋](名) すきやの一種、普通のすきやよりは、一層よく縫に縫(ヌ)りをかけて、壁著羅の如くに縫りなしたるもの。

かべ-そぶよう[壁訴訟](名) ㊀たゞ獨が壁に對してつぶやくこと。きけよがしに物語すること。 ㊁とはまはしに密告又は讒訴などをなすこと。

〔**かへ-たま**[替玉](名) 偽物に見せかけて、其かはりに用ふる假物。「—をつかふ」。

かへ-ち[替地](名) ㊀移轉して住むべき土地。 ㊁とりかふる土地。

かべ-チヨロ[壁著羅](名) かめあやに似たる一種の銅布、ちゞれてちゞみの如き細かき文を表はしたる地合厚きもの。

かべ-つち[壁土](名) 壁を塗る土。

かへ-つて[却](副) うらう(に)。うらはらに。 ——**さく**[却說](副) さて。さてまた。

かへ-で[楓](名) ㊀[植]蛙手の略言、葉の形蛙の手に似たればいふ。楓樹科に屬する喬木、葉は掌狀にして對生し、單蕚又は複葉なり、嫩葉は色厚しく長して緑色となり、霜に逢へば紅葉して殊に美し、果實は雙翅果なり、種類多し、觀賞用として栽培せらる。(雞冠木、楓樹)。 ㊁かされの色目、表裏共に蘭黃(モエ)なるもの。 ——**だな**[楓棚](名) 四十八棚の一、足の總數四本、棚數八枚、袋棚は附屬せず、書院わきなどに適當す。 ——**のき**[楓樹](名)[植]「かへで」に同じ。

かべ-どなり[壁隣](名) 壁一重隔てたる隣家。

かへ-どの[柏殿](名) 古昔の離宮の名、朱雀院にありたる皇后のおはしまし〻所。

かへ-な[替名](名) ㊀本名に代へて用ふる名。 ㊁別名。「江戸助六のことは曉雨の—とぞ」。「エ」。

かべ-ぬり[壁塗](名) 壁を塗ること。又、其職人。(泥み竭(ツ)く)す。

かへ-ぼ-す[換乾](他、さ四) 水を汲

かへ-もん[代紋](名) 定紋にかへて別に用ふる紋。うらもん。

かへらぬ-たびぢ[不返旅路](名) ㊀死去せしこと。 ㊁あの世。冥途。

かへら-ふ[歸](自、は四)「歸るの延」。

かへり[返](名) ㊀かへること。もどること。 ㊁歸る路。かへりみち。 ㊂返事。返書。 ㊃わかり點。

かへり[反](名) ㊀うらがへること。くつがへること。 ㊁くりかへし。たび。「返」。

かへり-あそび[返遊](名) 一旦宴を終へて後、更に宴を催すこと。

かへり-あるじ[還饗](名) 古昔、はれの勝負事(弓又は相撲など)の終りたるとき、勝ちたる方の大將が、其配下に行ふ饗應。かへりだちのあるじ。

かへり-うち[返擊](名) 仇討をなさんとして、却りて仇に討たるゝこと。「—にあふ」(反討)。

かへり-がけ[歸掛](名) ㊀歸らんとする場合。歸る途中。 ㊁歸るついで。かへるさ。かへりさな。

かへり-ごと[返事](名)(ん)ず。あいさつ。こたへ。返答。「郷—聞えざらんも人目あやしければ」。

かへり-ごゑ[返聲](名) 雅樂にて、春のえらべより、秋のまらべにうつること。

かへり-ざき[返咲](名) ㊀時ならぬころ植物の花の一二輪開くこと、通常春咲きたるもの再び秋咲くにいふ。にどざき。 ㊁一旦あとへ(たるもの〻、再びもとの如くになること。「(りたる其ま〻。

かへり-さま[歸樣](名) ㊀かへりがけ。 ㊁かへりぎに、顛倒して讀むべき文字。かへしゑ。

かへり-ぶみ[返字](名) 漢文を和譯して讀むときに、顛倒して讀むべき文字。かへりがけ。

かへり-ぶんざん[歸新參](名) 一旦出て去りたる人が、立歸りて再び事ふること。でかへり。

かへり-だち[還立](名) 古昔、加茂の祭事などの終りし後、御所に還りて行ひし歌舞。

かへり-だち-の-あるじ[還立饗](名)「かへりあるじ」に同じ。

かへり-ちゆう[返忠](名) うらぎり。內應。

かへり-て[却](副)「かへつて」に同じ。

かへり-てん[返點](名) 漢文を和讀するため、漢字の左傍に為るして返り讀むことを表する符號、レ又は上・中・下又は一・二・三若しくは甲・乙・丙等を用ふ、レは直に上へ返り讀むべきもの、上・中・下は上より中・下と順を追ひて返り讀むべきもの、一・二・三等は一より、甲・乙・丙等は甲より、共に順を追ひて返り讀むべきものなり。「ヒ」に同じ。

かへり-の-あるじ[還饗](名)「かへりあるじ」に同じ。

かへり-ばな[返花](名) ㊀かへりざきの花。二度ざきの花。 ㊁かへりざきのもの。

かへり-まうし[返申](名) ㊀返事の奏聞。復奏。 ㊁あれいまゐり。

かへり-み[顧](名) ㊀ふりむくこと。「—していへらく」。 ㊁醫往の回想。 ㊂自己の反省。 ㊃なさけ。恩寵。「身にあまるまで御—」。

かへり-みち[歸路](名) かへりの路。

かへり-みる[顧](他、ま上一)《返り見る義》 ㊀うしろの方へ振り向く。「—都の山の六出花」。 ㊁醫往を思ふ。往事を尋ぬ。 ㊂自己に反省す。「我身に—」(省)。 ㊃なさけをかく。あはれむ。かばふ。「かへりみ給ふ御なさけ」。

かへり-やみ[返病](名) 一旦なほりたる病氣が、さらに惡くなること。やみかへし。

かへる[蛙](名)[動]兩棲類中無尾類に屬する動物、幼蟲即ち蝌斗(オタマジ)のときは、尾を有し水中に住み鰓を以て呼吸すれど、一定の變態を經過すれば、尾を失し肺を生じて空氣を呼吸し、陸上に生活す、四脚よく發達し後趾は長くして跳躍に適す、後趾間に膜を張り能く水中を游泳す、叫聲を膨脹せしめて聲を發す。

〔**かへる**(名) 魚の梁、やなす、うへ。

かへ-る(名)[返](自、ら四) ㊀もとありし如くになる。なはる。 ㊁(歸、還)。もどる。 ㊂(回、復)。所へ立もどる。まりぞく。「使者—」。 ㊃再び到る。またくる。 ㊄退去す。さる。

かへ-る[返](自、ら四)[れ]。

かへ-る[反](自、ら四) ㊀ひるがへる。うらがへる。 ㊁「秋風に—まくずの裏葉にも」。 ㊂くつがへる。 ㊃轉回す。めぐる。「なる、「鈴の朝が—」。

かへ-る[孵](自、ら四) 卵化して子となる。

かへ-る(他)「かへす」。

かへ-る[返](名)[れ]。

かへ-る(他)[れ]。

かへ-る-と[返返](名) かへすがへす。

かへ-る-がへる[返返](名) かへすがへす。

かへ-る-ぎ[蛙子](名)【動】おたまじやくし。

かへ-る-ば[歸](名) 歸るとき。かへるみち。

かへ-る-ば[蛙葉](名)【植「あはばこ」の一名。

かへ-る-また[蛙股](名) ㊀屋のむねの破風(ハフ)のまたなどに付くるもの、蛙の股を擬(ヒ)げたるさまをなす。 ㊁かんざしの一種、其足のかへるまたになりたるもの。 ㊂すべて蛙の股を擬(ヒ)げたる如きさまをなすもの、稱。

かへ-ん-ず[すべし](名)[ず]。うけがふ。ひきうく。

かほ[顏](名) ㊀目と眉とこの間。 ㊁鼻・口・目・眉のある所の總稱。もて、つら。 ㊂身の面目。めいよ。「—を立つ」。 ㊃其處に列する人。「—がそろふ」。

がうれる 人に立てらる。巾がきく。 ——**にどろをぬる** 恥辱を與ふ。はぢをかゝす。 ——**をうる** 人に立てらるゝやうにす。巾を利かす。 ——**をつぶす** はぢをかゝす。面目を失はす。

かほ[牙保](名)「かはばう」の略言。

がほ[顏](接尾) 其風をなすと。「物ゑり—」「時—」。

かほ-いろ[顏色](名) ㊀顏のいろあひ。「—がいゝ」。 ㊁かはつき。かはばせ。「—沈む」。(顏容)。

かほ-ばう[加俸](名) ㊀俸給の增加。 ㊁本俸給の外に、特別の事情によりて給與せらるゝ俸給。

かほ-れ-ぶろい[顏白粉](名) 顏に化粧するためのむろい。えりあしろひの對。「姿と。

かほ-かたち[顏貌](名) 顏のやうす。又、顏と。

かほ-ぼく[家僕](名) けらい。つかひをとこ。

かほ-さき[顏先](名) ㊀かほ。つら。 ㊁かほのまへ。眼前。「—にさし出す」。

かほ-そ-し[細](形、一) はなはだほそし。よわ〳〵し。きやしやなり。(屬)。

かほ-ぞろひ[顏揃](名) ㊀其處に列すべき人數のそろひたること。 ㊁伎倆すぐれたるもの又は種類同じきもの〻そろひ居ること。

かほ-だし[顏出](名) ㊀挨拶などに行くこと。あとづけとふこと。 ㊁集會の席に列すること。

カボチヤ[南瓜](名) ㊀《印度支那の Cambodia より傳來せしが故に此名あり》【植】葫蘆科に屬する蔓草、花冠は淺く五裂し、雄蕊は通常三個あり、果實は無毛にして、稍や成熟したるものは橙黃色の肉を有し食用に供せらる。(蕃南瓜)。 ㊁カボチヤやち

〔かへるまた(一)〕

う」の略言。〔——・やらう〕。「南瓜野郎」(名)男子を罵りていふ語。

かほ・つき[カオ]「顔付」(名) ㊀顔のてき。かほかたち。(面容)。 ㊁かはいろ。かはのやうす。

++**かほ・づくり**[カオ]「顔作」(名) ㊀顔の化粧(ケシ)。(色どりたる—)。 ㊁かはかたち。

かほ・づゑ[カオ]「顔杖」(名) はゝづゑ。つき杖。

かほ・ほど[カオ]「斯程」(名、副) これほど。比くらゐ。

++**かほ・どり**[カオ]「顔鳥」(名) 美しき鳥。「き。

かほ・ばせ[カオ]「顔」(名) 顔のさま。顔のいろ。かほつ

(**かほ・はん**[カオ]「牙保犯」(名)【法】強盗又は竊盗などの贓物なるとを知りて、其賣買の媒介をなしたる罪。

〔**かほ・ふれ**[カオ]「顔觸」(名) ㊀かはみせ」に同じ。 ㊁其物事の計畫又は發表などに列する連中。

かほ・みせ[カオ]「顔見世」(名) 古昔、芝居にて一座の役者が、總出にて見物人にめみえせしと。今時も田舍芝居にては、初日の興行をいゝ、り。「—狂言」

かほ・もち[カオ]「顔持」(名) 顔かたちのありさま。

かほ・やく[カオ]「顔役」(名) 勢力あり名望ある親分。(多くは勇肌又は博徒などの仲間にいふ)。

++**かほよ・ぐさ**[カオ]「顔佳草」(名)【植】(い)「かきつばた」の異稱。(ろ)「えやぐさ」の異稱。

〔**かほよ・ごし**[カオ]「顔汚」(名) 面目を損ずること。體面をけがすもの。つらよごし。

++**かほよ・とり**[カオ]「顔佳鳥」(名) 美しき鳥。

++**かほよ・ばな**[カオ]「顔佳花」(名)【植】かきつばた。

かま[蒲](名)【植】香蒲科に屬する草、水中に生ず、葉は長くして五分内外の幅を有す、夏の頃、七八すの矛形の花穗を抽く、これをかまぼこといふ、雄花より成る部と雌花より成る部とは相接近す、葉を以て席を織り、雄花の熟せる穗は、これに油を塗(ヌ)ぎて蠟燭に代用し、又、火口(ホクチ)の料となす。(香蒲)。

かま[釜](名) ㊀飯を炊(カシ)ぎ又は湯を沸(わ)かすに用ふる器、多くは鐵をもて作る、形狀は用ふる所の異なるに從ひ種々なれど、通常庖廚に用ふるものは、鍋の形にして深く、腰につばの如きものあり。まるかな〳〵。 ㊁茶道にて湯を沸すに用ふる器の總稱。其形は流派によりて同じからず。 ㊂汽罐の俗稱。

かま[鎌](名) ㊀草木などを刈(カ)るに用ふる具、鎌をもて新月の形につくり、内に向けて刃をつけたるもの。 ㊁鎌の如く曲りたる刃。「—槍」。 ㊂「くさりがま」又は「かまやり」の略言。

++**かま**[罵](名) やかましきこと。「あな—」。

かま[蒲](名)【植】蒲の轉。(香蒲)。 ——・**あふぎ**

が・ま[カマ]「蒲扇」(名) 蒲を編みて作りたる扇。

が・ま[カマ]「蝦蟇」(名)【動】(い)無尾類中尖指類に屬する陸棲動物、舌の前端は口底に附着す、指趾の末端尖るを常とす。(ろ)大いなる蛙の異稱。「—の妖術」。

かまあげ・うどん[釜揚饂飩](名) 釜よりあげ立ての饂飩を、熱湯を入れたる桶に盛りたるもの。

かま・いたち[鎌鼬](名) 旋風などの際に、空氣中に眞空を生じ、人體これに觸るゝときは、鎌にてきりたる如くに、皮膚の裂け破れて血を出すこと、古來、一種の鋭の如き妖魔が、空中にありてこれを行ふと信じたるより此名あり。

かま・いり[釜煎](名) 天正・慶長の切に、行はれたる刑罰の極めて慘酷なるものにして、罪人を熱湯の排膿せる釜に入れこれを煮殺せしこと。

〔**かま・うで**[釜茹](名)「かまゆで」の訛。

〔**かま・き**[叺](名)「かます」に同じ。「もの、稱。

〔**かま・きすご**[鎌鰭子](名)【動】かぶかの小さき一名。(東京地方の方言)。(ろ)「とかげ」の一名。(農羽地方の方言)。

かま・きり[鎌切](名)【動】直翅類中螽蟖科に屬する昆蟲の總稱、前胸頗る長く、前脚は角質なり、脚は強く、前脚は鎌狀にして捕獲脚に變し、觸角は線狀にして多節より成る、後脚は長くして跳躍に適す、多くは皆な害蟲を食し農家に大益あり、種類少からず。(螳螂)。 ——・**ちやうらい**[カマキリ](名)【動】「かまきりの一名。(肥前の方言)。

++**かま・く**[けけくくる](他、カ下二)(氣負の義) ㊀感觸す。かんず。 ㊁拘泥す。かゝはる。

が・ま・ぐち[蝦蟇口](名) 巾著の一種、其開きたるさまの蝦蟇(ガ)の口に似たるよりいふ。

かま・くび[鎌首](名) 鎌の如き形の首、蛇などの擡(モタ)げたる首の形。(蛇起頭)。

かまくら・えび[鎌倉蝦](名)【動】(い)せえび」の一名、相模國鎌倉沖の產なる故に此名あり。

かまくら・くわんりやう[カマクラ][鎌倉管領](名) 足利時代に、關東の鎮定として鎌倉に置きし管領。

かまくら・どさん[鎌倉五山](名) 鎌倉にある禪宗の五大寺、即ち、建長寺・圓覺寺・壽福寺・淨智寺・淨妙寺の稱。

かまくら・ぶだい[鎌倉時代](名) 治承四年源頼朝が幕府を鎌倉に開きしより、元弘三年北條高時の滅亡に至るまで、凡そ百五十年間の稱。

かまくら・ばくふ[鎌倉幕府](名) 源頼朝によりて鎌倉に開かれたる武家の政府、鎌倉時代の政

[りきまか]

++古語　一俚語方言　一字音

機はこゝに歸したり。

かまくら・ぶだ[鎌倉武士](名)「かまくらむさや」に同じ。「—は色好み」。

かまくら・ぼり[鎌倉彫](名) 鎌倉時代の彫刻、一種の特質を備へ、牡丹(ボタ)・梅・菱・紗綾形(サヤガタ)・雲形(ガタ)などを彫り、黑漆をもて塗りたる上に、朱漆などをもて彩(イロ)れるもの。

かまくら・むさや[鎌倉武者](名) ㊀鎌倉時代の武者。 ㊁關東の武者。

〔**かま・け**[蒲筌、叺](名)「かます」に同じ。

〔**かまける**(他)「かまく」の訛。「の一名。

かま・さざげ[鎌豇豆](名)【植】「いんげんまめ」

かま・ぢ[釜師](名) 釜を鑄る職人。

かま・ぢき[釜敷](名) 釜・鎌瓶などを置くとき其下に敷くもの、多くは藁又は藤蔓などをもて、輪の形につくる。

++**かま・ぢし**[氈鹿](名)【動】「かもしか」に同じ。

かます[鮞](名)【動】硬鱗類中かます科に屬する魚、體は圓柱狀をなし鱗は圓形をなす、口濶(ヒロ)し、背部蒼白色にして腹部白色、體長一尺許に達す、我國沿岸到る處に多少これを產する近海魚なり。 ——・**ご**

かま・す[叺](名)【動】かますの幼魚。

がま・すみ(名)【植】忍冬科に屬する木、葉は倒卵形又は圓狀にして短尖頭を有す、夏の頃、五瓣の小白花を開く、花冠は整齊にして、果實は核果なり、木材は種々の用に供せらる。(莢迷)。

かまち[輔](名) ㊀板の上下の骨。かばち。はゝぼね。つらがまち。 ㊁車の兩脇にあてたる木。 ㊂戸障子などの周圍のわく。(框)。

かま・つか[鎌柄](名) ㊀鎌の柄。 ㊁【植】「うしころし」の一名、其材を多く鎌の柄とするより名づく。 ㊂【動】一種の小魚、形だぼはぜに似て、頭四角に尖り鱗細かし、常に水底に沈み口を張り沙を吹く。(鉄)。

〔**かまっ・ぱらひ**[ライ][釜拂](名)「かまばらひ」の訛。

かま・ど[竈](名)《釜處の義》 ㊀土石をもて築き、其上に鍋又は釜などをかけて火を焚くもの、今時は、鎌などにてつくりたるものあり。くど。〈つゝい。 ㊁戶數割などの賦課にて、家族の生活の疎別に就きての稱、例へば、一軒の家にて其生活を疎別にするもの二組あれば、これを二かまどといふ。

かま・どめ[鎌止](名)《鎌を入るゝを禁ずる義》山野の草木を刈るを禁ずること。

++**かま・とり**[釜取](名)「ふいかけ」の一名。

++**かま・ね**[鎌菜](名)【植】「ひめあざみ」の古名。

かま・ねり[釜鳴](名) 釜の不時に音すること、俗に、これを以て吉凶をうらなふ。

かま・の・かみ[竈神](名) ㊀かまどを守護する神。荒神。 ㊁妻の隱稱。

かま・はらざらゐんりう[カマハラ][鎌實藏院流](名) 寶藏院流の槍術の一名、其流の鎌槍を使用するよりいふ。「はゞき。

がま・はばき[蒲脛巾](名) 蒲の葉にて編みたる

かま・ばらひ[ライ][釜拂](名) 男の巫(フ)。

かま・ひ[カマ][構](名) ㊀かまふと。か、はると。 ㊁追放に處して其地に入るを得しめざること。「江戶—」。

かまひす・し[しくしこしこ][暄](形、二)言煩(ワヅ)はし。

かまち[框](名) ㊀床の端に亘す橫木。 ㊁戶障子

かま・ぢ[竈風呂](名) ごゑもんぶろ。

かま・ぶろ[竈風呂](名) ㊀用意、準備、仕度。 ㊁こしらへ方。つくりかた、くみたて。 ㊂設けあると。備へあると。「門—の家」。 ㊃つけあはせ。こしらへごと。附會。誣言。 ㊄劍術・槍術などにて、武器の持ち方、又、柔術などにて身のそなへ。 ——・**て**[構](副) ㊀待ち設けて、心にかけて。 ㊁必ず。決して。「—心配し給ふな」。

〔——・**る**[構](他)「かまふ」の訛。

かま・ぼこ[蒲鉾](名) ㊀蒲の花穗。は。 ㊁魚類の肉を叩(タタ)き剉(キザ)みてすり碎き、これを固めて燒きたるもの、昔時は、もに竹串を心とし圓長形に塗り、其形蒲の花穗に似たりしより此名起りたれど、近時は、多くこれを長方形の薄板の上に低き穹窿形に盛る、これをいたつきかまぼこともいふ。(蒲桃、肉餅、魚圓)。 ㊂「かまぼこがた」の略言。——・**がた**[蒲鉾形](名) いたつきかまぼこの如く低き穹窿形をなすもの、稱。 ——・**どや**[蒲鉾小屋](名) 竹とむしろとにて圓く低く作りたる小屋にして、乞食などの住むもの、かまぼこ形なるより此名あり。

かまひ・て[カマ][構手](名)かまふ人、相手になる人。

かま・ふ[カマ][構](自、は四)㊀關係す。拘泥す。か、はる。 ㊁結ばる。連なる。「兵かまひて離れず」。

かま・ふ[カマ][構](他、は四) ㊀追放の刑に處す。 ㊁相手になる。 ㊂[かうかふ。なぶる。

かま・ふ[カマ][構](他、は下二) ㊀屋宇を架(カ)けわたす ㊁組み立てつくる。「家を—」。 ㊂附會す。誣言す。つけあはす。えひつくらふ。 ㊃結ぶ。連ぬ。「兵を—」。 ㊄合す。「男女精を—」。 ㊅待ち設く。まちうく。 ㊆仕度す。準備す。 ㊇武器を持ちて待つ。態度を定めて對す。「槍を—」。

かま・へ[カマ][構](名) ㊀用意、準備、仕度。 ㊁こしらへ方。つくりかた、くみたて。 ㊂設けあると。備へあると。「門—の家」。 ㊃劍術・槍術などにて、武器の持ち方、又、柔術などにて身のそなへ。 ——・**て**[構](副) ㊀待ち設けて、心にかけて。 ㊁必ず。決して。「—心配し給ふな」。

〔——・**る**[構](他)「かまふ」の訛。

かま・ぼこ[蒲鉾](名) ㊀蒲の花穗。は。 ㊁魚類の肉を叩(タタ)き剉(キザ)みてすり碎き、これを固めて燒きたるもの、昔時は、もに竹串を心とし圓長形に塗り、其形蒲の花穗に似たりしより此名起りたれど、近時は、多くこれを長方形の薄板の上に低き穹窿形に盛る、これをいたつきかまぼこともいふ。(蒲桃、肉餅、魚圓)。 ㊂「かまぼこがた」の略言。——・**がた**[蒲鉾形](名) いたつきかまぼこの如く低き穹窿形をなすもの、稱。 ——・**どや**[蒲鉾小屋](名) 竹とむしろとにて圓く低く作りたる小屋にして、乞食などの住むもの、かまぼこ形なるより此名あり。

++古語　一俚語方言　一字音

——・たが［蒲鉾箍］（名）眞鍮（シンチウ）又は銅などのたがの中央はりいで、鎌の薄くなりたるもの。

——・ねり［蒲鉾形］（名）「かまぼこがた」に同じ。

がま・むしろ［蒲席］（名）蒲にて編みたるむしろ。又、ふとろにて編みたるむしろ。

++かまめ［鴨］（名）【動】「かもめ」に同じ。

かまやま・あやめ［釜山菖蒲］（名）【植】「はながつみ」に同じ。

かまやり［鎌槍］（名）刃に枝ある槍、其兩方にあるを鎌槍といひ、片方にのみあるを片鎌といふ。

かまゆで［釜茹］（名）釜にて物をにること。

++かまり［伏兵］（名）ふせかい。

（が・まん）［我慢］（名）㊀【佛】我に執着する謬見。㊁自ら傲り人を凌ぐこと。㊂我意を張りとほすこと。

㊃「こらへ」忍ぶこと。忍耐。

かみ［上］（名）㊀高き所、高き位。うへ。㊁天子の尊稱。（主に漢文に用ふ）「一聞きて笑ひて曰く」。㊂官廳又は政府。「一のおふれ」。㊃將軍又は諸侯。「一のお通り」。㊄位高き人又は年長けたる人。「一は下を憐み」。㊅はじめ。もと。元始。㊆むかし。いにしへ。古昔。㊇宮城ある地。「一方」。㊈和歌の上の句。㊉身體の腰より上の部分。㊊古昔の官制にて長官の稱、諸官各其文字を異にすれど訓皆な同じ、即ち、神祇官にては伯をいひ、省にては卿をいひ、彈正臺にては尹をいひ、使にて長官をいひ、職にては大夫をいひ、寮にては頭をいひ、司にては正をいひ、兵衛府にては督をいひ、内侍司にては尚侍をいひ、國にては守をいへり。

かみ［神］（名）《上の義》㊀冥々の間に存在して、妙絶不可思議の能力を有し、人類に禍福恩威を降すと思惟せらるゝ實、即ち、宗教的思想上崇依若しくは長恤せらるゝ客體。㊁神武天皇の建國以前に、我國土を統治したまひし方の尊稱。「千早振る—代」。㊂寺院に供養せらるゝ佛に對して、神社に奉祀せらるる靈の稱。「—や佛に見離され」。㊃「キリスト教」にて、全智全能にして宇宙を創造し且支配する惟一絶對の主宰者。上帝。天帝。㊄神葬式に於ける亡者の靈魂。㊅人智を以て量り得られぬ物事。

かみ［髮］（名）《上毛の義》㊀頭部の毛髮。あたまのけ。とうはつ。㊁頭部の毛髮を結（ユ）ひたる形。「—がよくできた」。

かみ［紙］（名）書畫を認め又は物を包み、其他種々の用に供する薄片、其種類によりて原料を異にすれど、おもに纖維素より成る、其製造法は原料に背性實達若しくは石灰を加へて煮沸し、更に舂（ツ）き碎きて軟塊とし、これに樹脂又は糊等を加（抄（ス）き）て製す、洋紙は楮・木材・藁等を原料とし、日本紙は楮・三椏（マツ）・雁皮等を原料とす。「と」。

（か・み）［加味］（名）他物を交へて味をつけくはふる「り」。（俗語）。

（か・み）［佳味］（名）善き味。美味。

++かみ・あがり［神上］（名）崩御又は薨去。かんあがり。かみあがり。たる神を、

++かみ・あげ［神上］（名）祭事はて、後、もと（歸したてまつると。

かみ・あげ［髮上］（名）㊀髮をあげ結ぶこと。㊁古昔、女子があとなになりて、切りはなち垂れ下げたる髮を取り上げて結びしこと。㊂髮を結ぶ人。++——・の・うねめ［髮上采女］（名）古昔、内侍の髮あげをつとめしもの。

++かみ・あそび［神遊］（名）音樂にあはせて歌舞し、神事に奏するもの。かぐら。「神樂」。

かみ・あひ［嚙合］（名）㊀かみあふこと。㊁〔けんくわ〕つかみあひ。

かみ・あ・ふ［嚙合ふ］（自、は四）獸類など互に嚙みあらそふ。

かみ・いたし［髮出］（名）髮の毛のはさきを出す所の義。「兜（カブト）のうけばりのうしろにある穴。

かみ・いちたん・くわつより［上一段活用］（名）【文法】五十音圖の伊列の音にのみ活用する動詞の變化、例へば、「い・い・いる・いる・いれ・いよ」「き・きる・きる・きれ・きよ」等の如きこれなり。

かみ・いれ［紙入］（名）㊀はながみいれの略言。㊁巾著の一種、紙幣其他すべて薄き物など入れて、これを懷中するもの。「夾囊」。

かみ・うた［神歌］（名）神に奉る歌。

かみ・うつし［紙寫］（名）寫實にて、紙に映像をうつしとること。又、其寫眞。硝子寫の對。「紙撮」。

かみ・おき［髮置］（名）兒童の頭髮を延ばし初むる時の儀式、くしおきの粉を頂に付け白髮を殺らせて祝ふ、男女とも古昔は、三歲の霜月十五日を吉辰として行ひしが、今時は、陽曆の十一月十五日に行ふ。

++かみ・おろし［神降］（名）㊀かんなぎなどが、神靈を身に遷（ヨ）せんとて所ること。㊁かんなぎなどが、神靈を身に遷（ヨ）せて其託宣をのべいふこと。㊂祭壇などを設けて、神靈を招き奉ること。㊃和歌の第一番の五文字の稱。

かみ・がかり［神憑］（名）神靈が人身にのりうつること。

かみ・がかり［上掛］（名）謠曲にて觀世・寶生兩流の稱。下掛の對。

かみ・がき［神垣］（名）㊀神社の周圍のかきね。みづがき。たまがき。「神籬」。㊁轉じて、神社。

かみ・がくし［神隱］（名）童子など、俄に行衛知れ

ずなると、古來醫神の所業といひ傳へてかくいふ。

かみ・かざり［髮飾］（名）㊀髮を理（サ）め櫛又は笄などを以て飾ること。㊁髮のかざりに用ふる具、即ち、櫛・笄などの類。

かみ・かぜ［神風］（名）神の威力によりて起るといふ風。かむかぜ。——・の［神風］（枕）「伊勢」に冠らする詞。

かみ・がた［上方］（名）維新以前迄、京都に皇居の在らせられしため、他國より畿内邊を指して呼ぶ稱。

——・うた［上方唄］（名）上方に流行する俗曲。

〔——・ざいろく［上方才士六］（名）上方の人をのゝしりていふ語。〕——・ぜいろく［上方贅六］（名）「かみがたざいろく」の訛。

++かみ・かた・し［髮固］（形、一）すこやかなり。

かみ・かたち［髮容］（名）㊀髮を取りあげたる櫛子。結びたる髮の工合。㊁髮の結（ユ）ひ樣によりて、其容貌のかはりて見ゆること。

かみ・がッパ［紙合羽］（名）桐油紙にて造りたる「カッパ」、雨を防ぐために、物に被らせ又は身にまとふもの。

かみ・かは［紙革］（名）紙にてなめしがはの如くは革・三椏・雁皮等を原料とす。

かみ・かへ・す［嚙反］（他、さ四）牛又は羊など、一旦かみて髮（ノ）み下したるものを再び吐き出して食ふ。ねりかむ。

〔かみ・がみ（名、副）嚙みつくが如く、言葉きびしく責めたつるさまにいふ語「—いふ」。

かみ・からし［髮枯］（名）こはくしてちゞれ、普通のものとは全く違ひたる髮。

++かみ・き・づき［神來月］（名）陰曆十一月の異稱。

かみ・きぬ［紙衣］（名）かみこ。「はえぎは」。

かみ・きは［髮際］（名）髮の生（ハ）えたる際（ハ）。

かみ・きり［紙切］（名）「かみきりこがたな」の略言。——・こがたな［紙切小刀］（名）紙を切る料の小刀。

かみ・きり［髮切］（名）㊀髮の毛のいつとなく切れ落つる一種の病。㊁髮を切ること。㊂「かみきりむし」の略言。——・むし［髮切蟲］（名）㊀髮の毛を切る魔力あるといふ想像上の蟲。㊁【動】鞘翅類に屬する甲蟲、大形にして、鞭狀若しくは絲狀をなせる長き觸角を有す、樹幹に孔を穿ち大害をなす。（天牛、剪頭蟲）。

〔(二)しむりきかみ〕

かみ・きる［嚙切］（他、さ四）嚙みて斷つ。

かみ・くづ［紙屑］（名）すたりものになりたる紙片。くづ。——・かひ［紙屑買］（名）紙くづを買ひあつめて、活計をたつる人。くづや。——・ひろひ［紙屑拾］（名）紙くづ其他落ちたる屑物を拾ひあつめて歩く曉業者。「ほりこ」に同じ。

かみ・ぐに［神國］（名）㊀日本國の異稱。㊁「かみご」。

++かみ・くら［上座］（名）㊀貴顯の座席。㊁席のうちにて最も上位。かみざ。上席。

かみ・こ［紙子］（名）かみにて仕立てたる衣服、もと「紙子賣」（名）かみこを賣り歩く商人。

〔紙子紙〕（名）白紙をつぎ合はせて拂ふぶを引き、揉（モ）みて柔かにしたるもの。——・づきん［紙子頭巾］（名）かみにてこしらへたる頭巾。

かみ・ごと［神言］（名）㊀神の託宣。ものぐ。㊁神事祭事。

かみ・ごと［神事］（名）㊀神の祭典、まつりごと。神事祭事。㊁神のまうざ。奇怪不可思議なる厚集。

かみ・ごほり［神郡］（名）《神の居らるゝ國の義》伊勢國飯野・多氣・度會の三郡の稱。かみぐに。

かみ・ざ［上座］（名）かみくら。上位。上席。

かみ・ざいく［紙細工］（名）㊀紙にて作れる細工物。㊁紙ざいくを業とする人。

〔かみ・さかやき［髮月代］（名）昔時、月代（サカヤキ）を剃（ソ）りて髮を結（ユ）ひしこと。（槪則）。

かみさげ・むし［紙下蟲］（名）【動】くそ蠅の仔蟲の一名、俗に、四月八日の朝、あま茶にてすりたる墨汁にて、呪文を紙にまるし、これを厠に貼（ハ）れば、上にのぼり來らずといひ傳ふるより此名あり。

かみ・さ・ふ［神進ぶ］（自、は上二）かうん〜としてものさびしくあり、すごく尊く憂ゆ。（神閑）。

かみ・さま［神樣］（名）神の尊稱。

かみ・さま［上樣］（名）公方の卿臺所など高貴の婦人の敬稱、公方は上（ウヘ）樣といひ、相並べて兩上（ウヘ）樣ともいふ。「一名、」。

++かみ・さり・づき［神去月］（名）「かみなづき」の略言。

かみ・さん［上樣］（名）中流以下の妻の稱。おかみさん。「其文里さんの—の心にもなつて見や」。

++かみ・さ・ぶ［神島］（名）蓬萊山の異稱。

かみ・さ・むしめ［嚙緊］（他、さ下二）㊀力を入れて嚙む。くひしめる。㊁よくあぢはふ。玩味す。

〔かみさめる［嚙緊］（他）「かみさむ」の訛。

かみ・さも［上下］（名）㊀上と下と。うへとしたと。㊁袍と裳と。㊂直垂（ヒタレ）・水干（スイカン）又は素袍（スハウ）などと袴とを合はせての稱。㊃肩衣（カタギヌ）と袴と上も下も同じ色に染めたるものにして、德川時代の主なる禮服。㊄身體の腰より上と腰より下と（按摩の語）。「按摩—八百文」。

〔(四)もさみか〕

かみ・じほり［神樂］（名）《神樂の義》。

かみ・じも［紙霜］（名）紙の表面に霜の如く白粉を塗りたるもの。

かみ・すき［紙漉］（名）紙を漉くこと。

かみ・すき［紙漉］（名）紙を漉く人。

かみ・すき［紙漉］（名）紙を漉く人。

かみ・すき［紙漉］（名）紙を漉く人。

かみ・すき［紙漉］（名）紙を漉く人。

かみ・かやうふ[紙障子]（名）紙張りの障子。

かみ・すき[紙漉]（名）㊀紙を漉く職業の人。——**・ぶね**[紙漉槽]（名）紙を漉く原料を煮搗し更に舂砕し、これを溶解したる水を貯ふる大いなる水槽。

かみ・すぢ[髪筋]（名）㊀髪を梳(ク)りたる間あと。㊁髪の毛。けすぢ。髪篠。「刀」かみそり。（路刀）。

{かみ・すり[剃髪]（名）毛髪を剃ること、又、其ための事。

かみ・ぜに[紙銭]（名）紙にて銭がたをこしらへ（祭）神に奉るもの。

++かみ・そぎ[髪削]（名）古昔の小児が、髪おきの式を経たる後、齢に應じて次第に髪をそぎて行きしと、びんそぎ・ふかそぎ等の別あり。

かみ・そり[剃刀]（名）㊀髪剃の義。髪を剃るための小さき刃物。はがれのみにて打ちきたひ、刃は薄くきっさき無く、平面なる造り方のもの。かみすり。そり。㊁才機鋭く果斷に富み速かに事務を處理するさまをたとへいふ語。切りまはしの強(ツヨ)きと。「——大臣」。——**がひ**(イガ)[剃刀貝]（名）【動】（い）「からすがひ」の一名。（ろ）「たからがひ」の一名。——**・かぶれ**[剃刀感]（名）頭髪をそりたる後に生ずる小さき膿物。——**・ど**[剃刀砥]（名）剃刀を研(ト)ぐための砥石。

かみ・た[神田]（名）神社に屬する田。

かみ・たいどころ[上臺所]（名）高家にて奥むきの食物を調ふるだいどころ。「祭りもの棚」（神架）。

かみ・だな[神棚]（名）家のうちに神の護符などを

かみ・たのみ[神頼]（名）神にいのりて其加護をこふと。「苦しいときの——」。

かみ・たれ[髪垂]（名）子供の生れて六日目に、う

++かみ・ち[神路]（名）神の通ひたまふといふ路。

かみ・ちよちゆう[上女中]（名）華族又は富豪の女中の主人の側近く事ふるもの。

++かみ・づかさ[神祇官]（名）古昔、神祇の祭事其他神祇に關係したる事務をつかさどりし所。太政官の上に位せり。ぢんぎくわん。——**の・かみ**[神祇伯]（名）古昔のかみづかさの長官、神祇に關する事務を總理せり、相當は從四位の下、後世にては、二位・三位まで登用せられたり。「者」。

かみ・つ・く(クケケ)[嚙附](他、か四)食ひつく。噛

{がみ・つ・く(クケケ)（他、か四）がみ〳〵いふ。

かみ・つけあひ(イア)[紙附合]（名）一種の遊戯、頗に紙を唾などにて附け、目のあたりまで下げたるを、息を上へ吹きて落すもの。「紙のつゝみ」。

かみ・づつみ[紙包]（名）紙をもて包みたるもの。

かみ・づる(ルレレ)（自、ら四）のぼせあがる。

カミツレ（名）【植】「カミルレ」の訛。

かみ・て[上手]（名）㊀負綱の左方の綱。㊁上の方。

かみ・でっぱり[紙鐵砲]（名）小兒の玩弄品、女端に遊(ス)らしたる紙をまるめたる丸を込め、細長きものにて一方の丸は筒内に押し入るれば、空氣の壓搾作用により、他方の丸は音をなして飛ぶ。

++かみ・とき[神解]（名）かみとけ。らくらい。

++かみ・とけ[神解]（名）雷の落つること。

かみ・どこ[髪床]（名）かみゆひどこ。

++かみ・な（名）（動）がうなの古名。

++かみ・なが[髪長]（名）㊀僧の異稱。（齋宮の忌詞）。㊁蟹人の稱。「—のお酌」。

かみ・ながら[神隨](名)「かむながら」に同じ。「じ」。

かみ・なし・づき[神無月]（名）「かみなづき」に同じ。

かみ・なづき[神無月]（名）《此月には、八百萬の神々が出雲の大社に集りたまふとの俗傳により名づくといひ、又、かみなりなき月の義なりともいふ》陰暦十月の異稱。

かみ・なはゎ[紙繩]（名）こより。くわんぜより。

++かみ・ならふ(ナラフ)[神習]（他、は四）神の道に隨ふ。「—わざ」。

かみ・なり[雷鳴]（名）㊀空中に於ける電氣の放電により生ずる音響。古昔は、一種の魔神ありて、これを起すと誤想せしより此名あり。なるかみ。いかづち。㊁「やかましく責むること。がみ〳〵言ふと。「—親父」。㊂「物のつくりの堅固なるにいふ語。「—おこし」。

++——・の・ぢん[雷陣]（名）古昔、雷鳴三度すれば、警衛のために、近衛の大將及次將は弓箭を帶して御殿の殿廂に伺候し、將監以下は皆な裳笠を着け南殿の前庭に伺候せしと。——**・の・つぼ**[雷壺]（名）古昔、禁中に造られし五舎の一、櫻花舎の北にあたれり、即ち、瓊芳舎の別名。——**・ぼし**[雷干]（名）あをうりを輪に長くつなぎて切り、鹽ふしして日に干して食するもの、其輪になりて延びたるさまの、繪に畫きたる雷公の太鼓に似たるより名づく。

++——・まさかり[雷斧]（名）古昔、暴雨雷鳴のときなどに、土中に埋もれたる石器時代の遺物なる石斧が、露出したるもの、稱、其珍しさに、これを雷公の持物なりと誤想せしより此名あり、當時は、たゞ石斧のみにあらず、他の石器時代の遺物もまた露出せるもの多かりしより、雷楔・雷環・雷珠・雷鎚等の名稱もありたり。——**・よけ**[雷除]（名）㊀雷の落つるを除(ヨ)くること。㊁落雷をよくるための神佛のお札。㊂落雷の害をふせぐために、屋上に設置しある柱。避雷柱。避雷針。

かみにゐん・くわつよう[上二段活用]（名）

〇字音　〇俚語方言　++古語

【文法】五十音圖の伊列及字列の音にのみ活用する動詞の變化、例（ば「き・き・く・くる・くれ・きよ」し・す・する・すれ・しよ等の如きこれなり。

かみ・の・き[紙木]（名）【植】「かうぞ」の一名、其樹皮を紙の原料となすより此名あり。

かみ・の・く[上句]（名）和歌にて、はじめの五七五の三句をいふ。ものくの對。

かみ・の・け[髪毛]（名）かみ。頭髪。

かみ・の・け[神氣]（名）かみのたゝり。

かみ・の・つかひ(カイ)[神使]（名）神に附屬して、其使となるといひ傳ふるもの、所謂、伊勢の狼・日吉の猿・稲荷の狐・八幡の鳩・春日の鹿・熊野の烏・大黒天の鼠・宇賀神の蛇の類の如きもの。「出る戸口。

++かみ・の・と[上戸]（名）清涼殿の殿上より東方へ出る戸口。

かみ・の・みち[神道]（名）㊀かむながらのみち。㊁其道は神より出たりとなす基督教の類。

++かみ・の・みむろ[神御室]（名）神社に同じ。

かみ・の・よ[神世]（名）かみよ。

かみ・の・をしへ(シエ)[神教]（名）㊀かみのみち。㊁かみのおつげ。神託。

かみ・はさみ[紙挟]（名）紙をきる料のはさみ。

かみ・ばな[紙花]（名）まゝ紙を捻(ヒネ)りなどして與へ、後に與ふる縄頭(ナハ)のまるしとするもの。

++かみ・びと[神人]（名）神に仕ふる人。かんぬし。

かみ・びな[紙雛]（名）紙にてつくりたる雛人形。

かみ・びねり[紙捻]（名）㊀こより。㊁錢など包みたる紙を捻りたるもの。

かみ・びひな(ナイ)[紙雛]（名）「かみびな」に同じ。

かみ・ふくろ[紙袋]（名）紙にてつくりたる袋。

かみ・ふすま[紙襖]（名）カラかみ。ふすま。

かみ・まつり[神祭]（名）神を祭ること。

かみ・みくじ[紙御籤]（名）神佛のみくじの紙に占文を記したるもの。

かみ・む[上無]（名）十二律の一。

かみ・むかへ(エカ)[神迎]（名）陰暦十月の晦日に、出雲の大社にあつまりたまひし神々が、おの〳〵歸りたまふを迎ふるといふ意の祭儀。「た。

かみ・むき[上向](名)官府に關係すること。

かみ・や[紙屋](名)㊀紙を漉(ス)く家。又、其人。

(かみやう[家名](名)一家の名目。かめい。

かみや・がみ[紙屋紙](名)古昔、京都の紙屋川邊にて、御所の反古を漉(ス)きかへしたる紙、當時は

これを官用としたり。かうやがみ。「紙紙」。

かみ・やぎき[上屋敷](名)古昔、諸國の大名が、江戸市中に設けて、自身の常の住居となし、屋敷。

中やぎき又は下やぎきの對。甲第。

++かみ・やっと[神奴](名)「かみびと」に同じ。

++かみ・やま[神山](名)神の住むといふ山。

かみ・ゆひ(ユ)[髪結](名)㊀髪を結(ユ)ふこと。㊁髪を結(ユ)ふ業の人。——**・ぞこ**[髪結床](名)髪結ひを業とする店。又、轉じて理髪する所。

かみ・よ[神代](名)《神の統治したまひし御代の義》開闢以來、神武天皇の御代までの時代。「十早振る—」(神世)。

かみ・よし[神吉](名)陰暦にて、神又は先祖などの祭りてよしといふ吉日。

++かみ・より・いた[神憑板](名)ために、琴の板とて鳴らし、杉の板。

++かみ・ら[香韮](名)【植】韮の古名。

カミルレ(名)《オランダ語 Camille》【植】菊科に屬する草、外國より傳へしものにして藥用とす。

かみ・わ・く(クケケ)[嚙分](他、か下二)㊀食物をかみて甘味を味はふ。㊁物事を細かに分別し思考す。かんがへはかる。「咀嚼」。

かみわけ[嚙分](名)かみわくること。

かみ・わざ[神事](名)㊀神のなしたまふ不可思議の事。かみごと。かんわざ。㊁まつり。神事。

{かみ・わたし[神渡](名)《十月は神々出雲の大社に會するにつき、其神を渡らせ送るために吹く風の義》陰暦、十月頃に吹く西風の稱。

かみ・ゑ[紙繪](名)紙に描(ヱ)きたる繪。

かみ・をんな[上女](名)㊀かみがたの女。京都邊の女。㊁かみぢよちゆう。

(か・みん[下民](名)ぇんみん。ぇもん。

++かむ[神](名)神の轉。「—風」「—だち」。

(か・む[家務](名)一家の事務。

++か・むはぶる[醸](他、ま四)かもす。

か・むはぶる[嚙](他、ま四)㊀上歯と下歯とを相接(ツ)らす。「歯を—」。(切歯)。㊁上下の歯にて物をはさみ砕く。㊂歯にて物を傷つく。かじる。

か・むはぶる[擤](他、ま四)鼻の中の鼻液をぬぐふ。

++かむ・いまげ[神今食](名)ぢんこんぢき。

++かむ・かかり[神懸](名)あつげ。神託。託宣。

かむ・かぜ[神風](名)「かみかぜ」に同じ。——**の**[神風](枕)(伊勢)に冠らする詞。「に同じ。

++かむが・ふ(ハヘヘヘ)[考](他、は下二)「かんがふ」

++かむ・がら(名)「かむながら」に同じ。

++かむ・さ・る(ラレレ)[神去](自、ら四)かみさる。

{が・むぢや[我武者](名)むちやくちやに物事をふるまふと。又、其人。

++かむ・たち[剣](名)《單立の義》「かうぞ」の古名。

〇字音　〇俚語方言　++古語

かむ-だち[神館](名) 古昔、神殿に附屬し神事を行ひし所。かうだち。

かむ-ち[麹](名) かむたち。

かむ-ぢから[神税](名) 神に奉る稻。

かむ-つど-ふ[ツトフ][神集](自、は四) 神々あつまりたまふ。

かむ-づまる[ツマル][神鎮](自、ら四) かみさびまりたまふ。かみとゞまりたまふ。

かむ-ながら[神隨](名) 神の德を具(そな)へたること。神の心のまゝにて人爲を加へざること。——の-みち[神隨道](名)[まん たう] 神道に同じ。

かむ-なき[巫](名) 神にいつき事へ神樂を奏し神あゝしなどを行ふもの、男をもかむなぎといひ女をもかむなぎ又はみこといふ。(覡)。

[ぎなむか]

かむ-なめ-まつり[神嘗祭](名) 伊勢の大神宮の祭典、もと、陰曆九月十一日に敕使に幣を授け、十六日に度會の宮(外宮)を祭り十七日に皇大神宮(內宮)を祭られたりしが、明治以後は改めて、十月十七日と定められたり。ちんおやうさい。

かむ-はた[綺](名) 《神機の義》古代のあやおりもの、錦に似て薄し。

かむ-ほき[神祝](名) 神に奉る祝詞。のりと。

かむ-ほざき[神祝](名) 前條に同じ。

かむ-みぞ[神御衣](名) 神に奉る御衣。——まつり[神御衣祭](名) 五月十四日と十月十四日とに、一年二度伊勢の神宮に御衣を奉る祭事。

かむ-やらひ[ヤラヒ][神遣](名) 神の遣らるゝこと。神の放逐したまふこと。

かむ-だち[神館](名) 古昔、神殿に附屬し神事を行ひし所。かうだち。

かむ-ち[麹](名) かむたち。

かむ-ぢから[神税](名) 神に奉る稻。

かむ-つど-ふ[ツトフ][神集](自、は四) 神々あつまりたまふ。

かむ-づまる[ツマル][神鎮](自、ら四) かみさびまりたまふ。かみとゞまりたまふ。

かむ-ながら[神隨](名) 神の德を具(そな)へたること。神の心のまゝにて人爲を加へざること。——の-みち[神隨道](名)[まん たう] 神道に同じ。

かむ-なき[巫](名) 神にいつき事へ神樂を奏し神あゝしなどを行ふもの、男をもかむなぎといひ女をもかむなぎ又はみこといふ。(覡)。

かむ-なめ-まつり[神嘗祭](名) 伊勢の大神宮の祭典、もと、陰曆九月十一日に敕使に幣を授け、十六日に度會の宮(外宮)を祭り十七日に皇大神宮(內宮)を祭られたりしが、明治以後は改めて、十月十七日と定められたり。ちんおやうさい。

かむ-はた[綺](名) 《神機の義》古代のあやおりもの、錦に似て薄し。

かむ-ほき[神祝](名) 神に奉る祝詞。のりと。

かむ-ほざき[神祝](名) 前條に同じ。

かむ-みぞ[神御衣](名) 神に奉る御衣。——まつり[神御衣祭](名) 五月十四日と十月十四日とに、一年二度伊勢の神宮に御衣を奉る祭事。

かむ-やらひ[ヤラヒ][神遣](名) 神の遣らるゝこと。神の放逐したまふこと。

かむり[冠](名)[かんむり] 冠をのすること。——だな[冠棚](名) 冠をのするたな。みづしだなの類。——つけ[冠附](名) 俳諧にて、初句を出題して次きの二句を附くること。——の-を[冠緒](名) 「おいかけ」に同じ。

かむ-る[ラル][冠](他、ら四) かうむる。かぶる。

かむろ[禿](名)「かぶろだち」に同じ。——だち[禿立](名)「かぶろだち」に同じ。

かむ-わざ[神事](名) かみわざ。又、まつり。

かめ[龜](名)[動] 爬蟲類に屬する動物、體扁は盤狀をなし、腹背に甲あり、互に體間に於て總者し、頭尾及四足の出入し得る孔あるのみ、甲の表面は皮膚の露出せる部分に、角質の小鱗あり、性遲鈍にして長く饑渴に堪ふ、多くは熟帶・溫帶の水に棲み、穴を堀りて產卵す、いしがめ・すっぽん・あをうみがめ・たいまい等の種類あり。きべつるゐの總稱。(龜)。

かめ[瓶](名)[動] 流動物を盛る器、普通は陶器なりとす。(「いき」(瓶子)に同じ。

カメ(名)《「イギリス」語にて、Come(來い)と犬を呼べるを聞き訛りての稱》西洋種の犬の總稱。洋犬。

かめ-あや[龜綾](名) 龜の甲に似たる模樣を細く織りだしたる綾織絹。

(かめ-い)[佳名](名) 評判よきこと。よきな。

(かめ-い)[下命](名) あいひつけ。もまうしつけ。

(かめ-い)[加盟](名) 盟約にくはゝること。團體にくはゝること。なかまいり。(加入)。

(かめ-い)[下名](代) せつまや。わたくし。

(かめ-い)[家名](名) 一家の名稱。かみやう。家號。一家の評判。「—を上ぐ」。——さうぞく[家名相續](名) 家名をうけつぐこと。

かめ-うら[龜卜](名) 古昔のうらなひの一法、龜の甲を灼(さ)き其さけめによりて吉凶をトしたり。

かめざう-ともん[ザウトモン][龜藏小紋](名) 湯まきの模樣ある小紋の稱。昔時、殺者市村龜藏なるものが著始めしより此名あり。

かめ-の-かがみ[龜鑑](名) 古昔、龜の甲を灼きて行ひたるうらなひのかた。後世までの手本。

かめ-の-かふ[カフ][龜甲](名) 龜の背部にある角質の固き殼、中部稍々高く起る。龜甲(カフ)。六角形の上下左右に並びたる模樣。きつかふ。船の甲板(カフ)の稱、其龜の甲に似たるよりいふ。

(かめ-の-こ)[龜子](名) 「かめのかふ」の略言。小さき龜の稱。——いか[龜子烏賊](名)[動] 烏賊の一種、普通の烏賊より背高くしてかめのかふに似る。——ざる[龜子笊](名) 笊の一種、底圓く口廣くして、全體かめのかふに似たるもの。どんがめいかき。どうがめ。ひらざる。

かめ-の-て[龜手](名)[動] 甲殼類中蟹脚類に屬する節足動物、海岸の岩礁の間などに生ず、肉質の柄を以て外物に附着す、肉柄に鱗狀の石灰小片を被むり、先端に二枚の貝殼を有し、其間より六對の胸肢を出入せしめて食物を攝取す。(石蟹)。

[てのめか]

かめ-の-を[龜尾](名) 背骨の下端即ち肛門の上の高き骨、其龜の尾に似たるよりいふ。(尾骶骨)。

かめ-の-みづ-を-うつす[寫瓶水](名) 俗但が、奥樞をうけつたふるをたとへていふ。「病、(癒)」。

かめ-ばら[龜腹](名) 腹中に一種の塊を生ずる號。一家の評判。「—を上ぐ」。——やま[龜山](名) 蓬萊山の異稱。

カメレオン[Chameleon](名)[動] 蜥蜴類に屬する爬蟲、形やもりに似る、眼大にして頭上に突起あり、三趾內に向ひ二趾外に向ふ、運動極めて緩慢なり、先端膨大せる長き舌を有し、昆蟲の近づくものは、これに粘着せしめて捕食す。體長一尺許、「アフリカ」の北方海岸に棲息し、時々其色を變ずる奇性あり。

[シオレノカ]

かめ-ゐ[龜居](名) 龜坐して足を外に披き、尻を下につくること。

(かめ-ん)[假免](名) 假の免許。

(かめ-ん)[假面](名) 木・紙又は土などにてつくりたる顏の形。めん。おもて。——を かうぶる[被假面] 本心をつゝみて、うはべを然らざるが如くに見せかくるをいふ。

かも[鳧](名)[動] 水禽類中扁嘴類に屬する鳥、嘴は軟皮を被り、たゞ其末端のみ硬(カタ)し、嘴緣に角質薄板排列す、頭は長く、足は短くして後方に位す、前三趾間に蹼あり、河海沼湖に棲息する候鳥なり、種類多し、脂多く肉味は佳なり。(野鴨、野鴨、鴨)。

かも[氈](名) 古昔、獸毛にて織りたるまうせん。

かも[釭](名)「かりも」の略言。

かも(感)《疑問辭の「か」に、感動詞の「も」を加へたる辭》 疑問の意を表はす語。「晴るゝ夜の、星か、河邊の、螢—」。 感歎の意を表はす語。「三笠の山に出でし月—」。

が-も(感) 希望の意をあらはす語。「がな」に同じ。

かも-あひる[鳧鴨](名)[動] かもの變種、かもとあひるとの中間に位する鳥にして、體軀は恰もかもの如くなれど、飛力はあひるの如くに退化せり。

かも-あふひ[オフヒ][加茂葵](名)[植] 馬兜鈴科に屬する宿根草、山中に生ず、莖は上昇せず花は盤齊なり、花柱は結合して柱狀をなし、葉の平面は平滑なり、山城國加茂神社のあふひ祭に用ひたるより多く歌に詠ぜり。ふたばあふひ。(雙葉細辛)。

カモイ(名)《「アイヌ」語 Kamui》神の稱。

かも-うり[氈瓜](名)[植]「とうがん」の古名。

かもかくも(副) ともかくも。「—君がまにまと」に同じ。

かもがはぞめ[ワガ][鴨川染](名) 友禪染の一名、特に其模樣のゝ、あらきもの、稱。(加茂川染)。

か-もぎ[髢](名) 髮文字の義。 婦人の髮にそへ加ふる髮、いれがみ。 あや船の(さきに垂れ飾る流蘇(ザ)。——-ぐさ[髢草](名)[植] 禾本科に屬する草、春夏の交に花穗を抽く、女小供がこれを採り揉(モ)みて柔かにし、かもぎの如くに結びて弄ぶより此名あり。(龍鬚草)。

かも-ぎ[母文字](名)《「か」は「かゝさま」の略言》母の異稱。(女房詞)。

かも-ぎか[氈鹿](名)《氈に織る毛ある鹿の義》[動] 有蹄類中洞角科に屬する獸、牡牝共に角あれど通常の鹿と其性を異にし、舞枝月中空にして、前頭より生ずる骨軸を圍繞す、毛長く茶褐色にして柔かし、昔時これを採り氈などをつくれり、我國幽峻なる深山に產す。かもあゝ。(羚羊)。

かも-ぎす[ギス][醸](他、さ四) 穀類を麹にし、これを水と和して、酒・醬油・味噌の類に醸し成す。 もよほし成す。こしら(出す。「でかす。「風を—」。

がも-な(感)《「かも」に感動詞の「な」を加へたるもの》 まかあれと企望する意を表はす語。「世の中は、つれにも—」。

かも-の-いつき[加茂齋](名) 加茂神社の齋院。

かも-の-はいろ[鴨羽色](名) 光澤強き綠色。

かも-の-はし[鴨嘴](名)[動] 鳥に近き獸、形はかはをそに似て小なり、頭は長くして角質の鴨の嘴狀をなす、卵を產し腹部に有する蠶の中にてこれを孵化す、「オーストラリア」洲に產す、河岸に穴居し水中に游泳す。

[かものはし]

かも-まつり[加茂祭](名) 山城國加茂神社の祭典、陰曆四月中の申の日を當日と定められ、中古最も盛んに行はれたる故、祭といへば加茂に限れるやうなりき、又、寬平元年より、每年十一月下の酉の日に、臨時祭の執行はじまれり。

かも-め[鷗](名)[動] 水禽類中長翼類に屬する鳥、鳩大にして、嘴端鉤狀をなし、翼長くして末端尖り、前三趾は蹼を以て連繫せらる。——-おり[鷗尻](名) 毛皮の太刀の末端の稱、其殘刀形にして上にはねあがりて見ゆる體の、恰もかもめの尻の狀に似たれば名づく。

かも-ゐ[鴨居](名) 引戸・障子などをたつる所の上の橫木、講ありて引戸・障子などをはめて開閉するに便にす。ちきゐの對。

(かも-ん)[家門](名) 一家一門。「—の恥辱」。

(かも-ん)[下問](名) 身分下なるものに、物事をとひはかると。「—を恥ぢず」。

かも-ん[勘文](名) 古昔、朝廷よりの諮問につき、博士などが、其勘考(カンガヘ)を書きて上(マタ)つりし意見。かんもん。「陰陽博士の—」。「明法博士の—」。

古語　　俚語方言　　字音

（か・もん）［家紋］（名）家々の紋所、例せば、德川家の葵又は島津家の轡などの類。いへのもん。

（が・もん）［衙門］（名）やくゐよ。官省。

（が・もん）［牙門］（名）大將の陣營の門。牙營の門。

++かもん・の・かみ［掃部頭］（名）「かにもりのかみ」に同じ。

++かもん・れう［掃部寮］（名）「かにもりのつかさ」に同じ。

かや［榧］（名）【植】公孫樹科に屬する喬木、山野に自生す、葉は披針狀をなして互生し、花は單性にして雌雄同株なり、果實は楕圓形にして食用とすべく、材木は種々の用に供せらる。（枝子、玉山果）。

かや［茅］（名）【植】禾本科に屬するちがやすゞき等の總稱。

かや［萱］（名）【植】禾本科に屬する草、形狀殆んど茅（ガ）に似る、茅と異なる點は、莖の心空しからざるにあり、其葉を取りて屋根を葺（フ）く。（夏）。

かや［蚊屋］（名）蚊を防ぐために、帛（ツ）りて寢床を覆ふ一種のとばり、麻布又は紹にて方形に仕立て、四方へ掛けて帛（ツ）る。かちやう。蚊帳。

（か・や［夏夜］（名）夏の夜。

（か・やう［加養］（名）養生すること。

（か・やう［斯樣］（名、副）このやう。このとおり。

かや・がひ［榧貝］（名）【動】鮑類中同柱類に屬する貝、殼實大にして、體水と淡水との間の泥沙中に棲息す、介色甘藍色にして少しく黑色を帶び、東海地方の河口などに多く產す。

++かや・がみ［紙屋紙］（名）「かみやがみ」に同じ。

かや・かや（名、副）笑ふ聲、から〳〵。「一笑ひて」。

{がや・がや（名、副）あまたの人聲して騷がしきさまにいふ語。

（か・やく［加藥］（名）食物のやくみ。

（か・やく［加役］（名）㊀本職の輔佐、たすけ、すけ。㊁芝居にて、其幕の重立ちたる役者を助けて技を演ずる役。

かや・ぐさ［草藉］（名）【動】涉禽類に屬する鳥、形は鶴（ツル）に似る、嘴長くして其基部は軟皮にて被はれ、脚長くして趾は自在なり、水邊の茅の間に棲息し、小魚及小蟲等を捕り食す。「鷺、鷺」。

{かやす［返］（他）「かへす」の訛。

かや・やす・し［易］（形、一）㊀かろ〳〵し。てがるし。㊁わけなし。たやすし。

かや・やつ［彼奴］（代）あのやつ。あいつ。きやつ。

かや・つり［蚊屋吊］（名）【植】「かやつりぐさ」の略言。——・ぐさ［蚊屋吊草］（名）【植】（い）莎草科に屬する草、莖は圓節を有せずして多くは三稜なり、葉は三裂し閉鎖せる葉鞘を具へ、花は多く雨性にして通常雌雄同株なりとす、子供の莖を裂きて蚊屋の形をつくりて賣（モテ）ぶより此名あり。（ろ）めひたばの一名。（京都の方言）。

かや・ぶき［茅葺］（名）茅にて屋根を葺くこと、又、其屋根。

かや・むしろ［萱席］（名）萱にて編みたるむしろ。

かや・や［茅屋］（名）茅ぶきの屋根、又、其家。

かや・やね［茅屋根］（名）茅ぶきの屋根。かやや。

かや・やり［蚊遣］（名）蚊を追ひやるために、烟を燻（ユ）らし立つること。かいぶし。——・び［蚊遣火］（名）かやりのために、ぶす火。「ゆ。

かゆ［粥］（名）米を柔く水煮にしたるもの。おもかゆ。

{かゆ［換］（他）「かへ」の訛。

++かゆき・かくゆき（副）あちらへ行きこちらへ行きて、並び立つ狀の意を表はす語。「人—」、「家—」。㊁或語に添へて、並び立つ狀の意を表はす語。「日—」、「間—」。

カラー［Collar］（名）洋服の附屬品、「シャツ」の襟さきに現はし頸に纏ふ一種の飾、通常白色なり。

かゆ・し［痒］（形、一）膚に擦（ス）きたき感覺を生ず。かゆまはし。（癢）。

++かゆ・づゑ［粥杖］（名）古昔、正月十五日に、粥を煮たる木を削りて造りし杖、これにて子無き女を打てば懷妊すといへり。かゆのき。「—ひきかくして、

++かゆ・の・き［粥木］（名）前條に同じ。

（が・よ［駕輿］（名）のりもの。みこし。こし。——・ちやう［駕輿丁］（名）のりものを擔（カ）ぐ人。こしかき。輿丁。

か・よけ［蚊除］（名）蚊を追ひはらふと、又、蚊を追ひはらふに用ふるもの。——・の・ま［蚊除間］（名）蚊をふせぎとむる裝設をなしたる居間。

かよは・す［通］（他、さ四）通ふやうにす。つうず。水を—。

かよはせ・ぶみ［通文］（名）いろぶみ。艷書。「數百人の—つひに明けず」。

かよひ［通］（名）㊀かよふこと。ゆきゝ。往來。交通。㊁酒肆などの給仕をすること。又、其人。㊂行きかよふ路。㊃かよひちやうの略言。——・ぢいと［通稽古］（名）通ひて學ぶこと。つうがく。——・だる［通樽］（名）祝ひ事の儀式に用ふる酒樽。——・ぢ［通路］（名）行き通ふみちすぢ。「響の—」。——・ちやう［通帳］（名）物品をかけにて賣る人と買ふ人との間又は金錢を預くる人と預かる人との間に、其物品又は金錢の授受の都度、其金額を記し置く帳面。「書物の—」、「貯金の—」。——・づと［通勤］（名）通ひてつとむること。——・ばこ［通箱］（名）茶茶屋より茶を入れて得意先に送る小さき箱。——・ばんざら［通番頭］（名）自宅より其店へかよひづとめする番頭。

かよ・ふ［通］（自、は四）㊀往來す。交通す。ゆきゝす。ゆきかふ。「息が—」、「心が—」。㊁よく似てあり。かれとこれと同じくあり。「似—」。

++かより・かくより（副）「かゆきかくゆき」に同じ。

++古語　（ぞ）俚語方言　（へ）字音

{かよ・わ・しる（自、ら四）そば〳〵近づく。よる。

か・よわ・し［弱］（形、一）《「か」は接頭語》よわ〳〵し。かぼそし。「かよわき體」。「屠弱」。

から［空、虛］（名）㊀中の空虛なること。內に物の存せざること。「一船」。㊁何物をも所持せざること。「一手」。㊂正味なきこと。「一鉄砲」。㊃眞實なきこと。「一うそ」。

から［殼］（名）㊀內容なき外皮。「貝の—」。㊁もぬけのあと。ぬけがら。㊂きらず。卯花。㊃死骸。

から［幹］（名）㊀みき又は莖。「芋—」。㊁墓ノ「やー」。㊂柄（エ）。「斧の—」。

カラ（名）㊀古昔、朝鮮の稱にいひし語。「韓」。㊁古昔、支那の稱にいひし語。「唐」。

から（助）これよりかれへと物事の轉じ行く意を表はす語。「これ—行く」、「あと—よくなる」。

カラ—（接頭）㊀或語に冠して、外國より舶來したる意を表はす語。「—綾」、「—紅」。㊁或語に冠して、支那又は朝鮮の意を表はす語。「—びと」、「—やう」。

{から—（接頭）もとより、又、はなはだ。多くよからぬ場合に用ふ。「—いまない」、「—惡るい」。

—から［柄］（接尾）或語に添へて、人倫のつゞきあひの意を表はす語。「やー」、「うー」。

—から［故］（接尾）或語に添へて、其語を副詞とし、事物の原因を示す意に用ふる語。「のゆゑ」、「そのため」。「吹くー」に、秋の草木の、「ものゆゑ」。

{がら［柄］（名）體裁、樣子。「着物の—」、「人—」。

にぬい　其身分に不相應なること。

—がら［柄］（接尾）㊀或語に添へて、みぶん又はぶんざいの意を表はす語。「人—」、「家—」。㊁或語に添へて、並び立つ狀の意を表はす語。「日—」、「間—」。

カラー［Collar］（名）洋服の附屬品、「シャツ」の襟さきに現はし頸に纏ふ一種の飾、通常白色なり。

カラ・あふひ［唐葵］（名）【植】錦葵（ヲヒ）科に屬する草、莖高くして枝を生ぜず、葉は皺（シ）を有し、花は大形にして柄短く、紅・紫・白等種々の色を呈す、莖皮より纖維を採るべく、又、觀賞用として栽培せらる。はなあふひ。「葵蜀」。

カラ・あや［唐綾］（名）うき織に織りたる綾。

カラ・ある［韓藍］（名）【植】鶏頭花の一名。

カラ・いと［唐絲］（名）綾に組みたる絲。「其上に—の網をかけ」。

カラ・いも［唐薯］（名）【植】「さつまいも」の一名。

（か・らう［家老］（名）㊀大・小名の家臣の長。としより。㊁家政をつかさどる家人。「家宰」。

からう・じて［辛］（副）やうやくのことで。からくして。わづかに。かつ〳〵。やっと。

からう・す［殼臼］（名）「すりうす」の一名。

カラ・うす［唐臼］（名）うすの一種、地を堀りてこれを掘え、足にて杵（キ）の一端を踏み、其中に入れたる穀類などを搗く裝置のもの。ふみうす。（雜）。——・の・きを［唐臼杵］（名）カラうすの杵、きね。

{から・うそ［空嘘］（名）全くの虛言。事實すこしもなきうそ。

カラ・うた［唐歌］（名）支那の歌即ち漢詩。やまとうた。

カラ・うと［唐櫃］（名）㊀カラひつ。㊁ひつぎ。

カラ・うめ［唐梅］（名）《後水尾天皇のとき、朝鮮より獻上したるといふ》【植】「らふばい」の異稱。

カラ・うり［唐瓜］（名）【植】「かぼちや」に同じ。

カラ・え［唐荏］（名）【植】「たうごま」に同じ。

{から・えづき［空嗚］（名）はき氣もよはせど、何物をもはき出さゞること。

カラ・ぬり［唐織］（名）「カラおりもの」の略言。——・にしき［唐織錦］（名）蜀江の錦に擬して織りたる一種の錦、其模樣に花鳥等種々あり、能狂言の裝束などに用ふ。——・もの［唐織物］（名）唐より渡來せる織物。「ね。

++カラ・かき［鍬鍵］（名）《韓鍵の義といふ》かきがね。

++から・かと（名）【動】「いしよし」の類の古稱。

カラ・かさ［傘］（名）《唐笠の義》雨雪又は炎天にさして身を覆ふ具、割竹を骨とし、油紙などを張り、開閉により開閉し得るやうにつくる。さしがさ。

カラ・かね［唐金］（名）《製法の支那より傳はりたるより此名あり》銅の八金の一種、其割合は銅五六乃至八四と亞鉛一一乃至三二と錫三乃至四との合金より成り、稍々青黑色を帶ぶ、延べて板となし、鑄物・打物に用ふ。《雲銅、青銅》。

から・かは（辛皮）（名）山椒の木の皮。

カラ・かは（唐皮）（名）㊀虎の毛皮の一名。「—の尻箱」。㊁「オランダ」より舶來の紋革。

から・か・ふ［調弄］（他、は四）㊀押しつかへしつ弄ぶ。あらそふ。「志ばしからかひて、こしがたなをぬきて」。㊁なぶりあそぶ。たはむる。

カラ・かみ［唐紙］（名）㊀種々の模樣ある襖（ハ）しき紙、もとに摸（マネ）して張る。㊁「カラかみをやうぶ」の略言。——・ぶやうぶ［唐紙障子］（名）唐紙を張りたる障子。ふすま。「笑ふ、「呵々」。

カラ・からと（名、副）さはやかに高く笑ふ聲「—と打

から・から（辛辛）（副）やうやく。からうじて。

{がら・がら（名、副）㊀からびたるものなどの觸れて出る音。「—する」。㊁物の空虛になりたるさまにいふ語。「屋が—になる」。㊂言語にかざりなく、物事の包み隱しなきさまにいふ語。「—した人」。

{から・がら（名）㊀「から〳〵せんべい」の略言。㊁

++古語　（ぞ）俚語方言　（へ）字音

一種の玩具、振ればから〳〵と鳴るもの。——せんべい(名)中に小さき玩弄物をつゝみ入れたる煎餅。

カラ-き[唐木](名)《もと支那より舶來したるよりいふ》熟帶植物なる紫檀・黒檀・白檀などの材木の稱。——ざいく[唐木細工](名)唐木にて花臺・茶棚・机等種々の器具を作ること、又、其器具。

カラ-きぬ[唐衣](名)古昔の婦人の礼服、形は今の羽織に似て胴はより短く、上着のうへに着し、その、紋樣ある綾を用ひて仕立てたり。(襦子)。

からき-め[辛目](名)つらさあもひ。つらき場合。

[からく-きり(副)ねからはから。すこしも。一向。

からく[辛](副)からうじて。えいやっと。

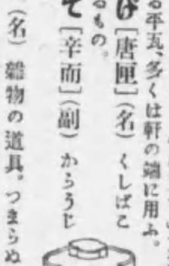
から-ぐ[紫](他、か下二)まことひてつかぬ。かゝげてつかぬ。ぶばる。くゝる。(臘)。

カラ-くさ[枯草](名)かれくさ。(冬)。

カラ-くさ[唐草](名)夏草の種々に這(ハ)ひまとふ模樣。——カハラ[唐草瓦](名)端に唐草の模樣ある平瓦、多くは軒の端に用ふ。

カラ-くしげ[唐匣](名)くしばこの上品なるもの。

からく-して[辛而](副)からうじて。


[げしくヲカ]

[がら-くた(名)雜物の道具。つまらぬ物。やくざ物。

カラ-くに[唐國、韓國](名)支那又は朝鮮の稱。

カラ-くは[唐桑](名)支那より舶來する桑の材木。たうぐは。(植)いっきの一名。

カラ-くみ[唐組](名)絲を組み合はせて、美しき模樣を織り出したる帶。

[ぬぎヲカ]

から-く-むすび[紫組](他、ま四)[「組を—」]からげ組む。

カラ-くら[唐鞍](名)古昔、飾馬に用ひし馬具、雲珠などの飾あるもの。うぢぐら。

からくり[繰](名)からくるること。あやつること。(からかけ。機械。(絲の糸かけによりて、色々に狀態をかへあらはすもの。「一人形」。(のぞきめがね)の一名。(やりくりさんだん。くりまはし。——ぎ

んぎやう[繰身上](名)うはべのみ豊かに見えて、うちらく苦しき身代。やりくりの家計。——ぎんばん[繰身代](名)前條に同じ。——ね

んばん[繰南蠻](名)鐘のなんばんぐさりの一種、環太くして、ひとつごとつ鎖をもて打ちつけたるもの。——にんぎやう[繰人形](名)矢を的に射あつれば、的がはづるゝと共に、人形のあらはれ出るやうの糸かけのもの。——びやう[繰鎖](名)かぶとの鉢に打つ鎖。——まと[繰的](名)からくり人形の的。(念力の矢に中ったー)。

からく-る[繰](他、ら四)(絲を縱横より組み合はせて帛(ハ)る。(活動やこしめ。あやつる。

カラ-くれなゐ[韓紅](名)韓より渡來したるくれなゐ。麗しき深紅の染色。「—に水くゝるとは」。

カラクン-てう[唐國鳥](名)《オランダ語Kalkoen》(動)「えちめんてう」に同じ。

からげ-つ-く[紫附](他、か下二)からげくる。[紫附](他、か下二)からげくる。くゝる。

[からげつける[紫附](他)「からげつく」の訛。

からげる[紫](他)「からげ」の訛。

から-と[穀粉](名)(圓鈍粉の團子。(絲を縱横より

カラ-と[唐子](名)(絲模樣などに畫く、支那風の打扮(ウ)したる小兒。(「カラこにんぎやう」の略言。(「カラこわげ」の略言。

から-と(名)藤蔓にてからげたるいりこ。

カラ-とざね[唐小札](名)鎧のこざねの一種、一枚ごとに上へ打ち出だしたるもの、慶長の頃、多く行はれたり、こざねの極品とす。「ごとの對」。

カラ-とざ[韓琴](名)琴又は箏の總稱。やまと

カラと-にんぎやう[唐子人形](名)唐子の姿したる人形。からと。

[から-とろ(名、副)堅きもの、鋼轉して響く音。又

カラ-とろ[韓衣](名)(朝鮮の衣服。(古代の衣裳(襦子)。

カラ-とろも[韓衣](枕)「きる」に冠らする詞。

カラと-わげ[唐子髷](名)「カラわ」に同じ。

カラと-をどり[唐子踊](名)唐子の扮裝(ヨウ)して踊。

[から-とん(名、副)「からころ」に同じ。「その—の」。

から-さ[辛](名)辛くある度合。

から-ざけ[辛酒](名)酢(ス)の一名。

から-ざけ[乾鮭](名)鮭の腹を裂きて腸を去り、鹽を振らずしてかげ干しにしたるもの。(干鮭)。

からさ-ぶ[空騒](名)(自、は上二)あれはつ。(荒涼。

[から-さわぎ(名)(左程にもなき事に、無益にさわぎ立つること。(酒肴の設けなしに、三味線などを彈じさ歌ひつ舞ひつすること。

から-ざを[穀竿](名)稻麥などの穗の根(ネ)をこきたるあとをうつ具、竿のさきに橫(ヨコ)ありて、これに更に竿をつけ、それを廻して打つもの。きびきね。くるりぼう。(連枷)。

からし[芥子](名)からしなの實を粉にしたるもの、黄色にて一種の辛味(カラ)あり。

から-し[辛](形、一)(辛味(カラ)

り、即ち、山椒(ハジ)唐辛などを、舌に當てゝ起る感じにいふ。(むごし。つらし。「—き目見する」。(かんざやうだかし。まわし。(めるみなし。きびし。「からきあきて」。(貫目又は數量かつ〳〵さだめの程に足る。「からき量目」。「志はからし」。

から-しけれ[鹹](形、一)鹽氣多し。まはゆし。

カラ-しし[唐獅子](名)(動)獅子をあのえゝと區別していふ語。「牡丹に—」。

から-し-づけ[芥子漬](名)野菜を芥子にまぶして漬物となすこと。又、其漬物。

から-し-ね[芥子菜](名)(植)十字花科に屬する一年生の栽培草本、葉は辛味(カラ)ありて鹽漬とし、種子は辛味又は藥用に供せらる。

から-ぢり[輕尻](名)昔時の宿場の駄馬に荷をつくるに、本馬の荷(三十六貫目)の半分即ち十八貫目を一駄と定めたりしもの。(鹽尻)。

からす[烏](名)(動)燕雀類に屬する鳥、稍や大形なり、嘴強大にして其根基に羽(ハ)き羽毛ありて鼻孔を蔽(オ)ふ、鳴聲を有せずたゞ呼聲を發す、羽毛は通常黑色にして光澤あり、種類少からず、多くは人家近き所に棲息す。「鴉」。

から-すがらす[枯](他、さ四)枯るゝやうにす。「木

から-すがらす[嗄](他、さ四)聲をたえ〳〵にす。聲をやぶる。えはがらす。「聲をからして呼ぶ」。

から-すがらす[涸](他、さ四)水を涸み竭(ツ)てす。乾して水氣を去る。はす。

からす—[烏](接頭)或語に冠して、色黑き意を表はす語。「—石」。

ガラス[硝子](Glass)(名)堅く脆(モロ)く透明なる物質にして、硅酸鹽を融合したる無定形の塊、通常これを「ソーダ、ガラス」「石」、「クラウン、ガラス」「カリ、ガラス」一名「ボヘミア、ガラス」、鉛「ガラス」一名「フリント、ガラス」の三種に分つ、通常「ガラス」といふは、ふもに「ソーダ、ガラス」を指す、著色のものは金屬を混じたるにて、藍色には「コバルト」、紫色には酸化「マンガン」、赤色又は綠色には酸化銅等を使用す、用途多く、種々の器具を作るに用ひらる。

玻璃。

からす-あふぎ[烏扇](名)(植)「ひあふぎ」の古名。

からす-いし[烏石](名)(うるしいし。(石炭。

ガラス-いた[硝子板](名)硝子の平面なる板。

ガラス-うつし[硝子寫](名)寫眞にて硝子の板に映像をうつすこと、又、其寫眞。紙寫の對。(硝子撮)。

からす-うり[烏瓜](名)(植)葫蘆科に屬する宿根草、葉は圓狀にして三裂乃至五裂し毛茸を有す、夏時に、淵斗形の白花をつけ、果實は熟して赤色に變ず、根より澱粉を採りて洗濯の料とす。くそうり。ひさごうり。(王瓜)。

からす-ぐち[烏口](名)圓引に用ふる具、鋼鐵を以て烏の嘴の如くに造り、其中に墨汁を含ませ線を引くもの。

からす-ぐち[烏日](名)圓引に用ふる具、

からす-ざんせう[烏山椒](名)(植)芸香(ヘンガ)科に屬する植物、葉は通常のさんせうより大形なり。

ガラス-ざやうぶ[硝子障子](名)紙を張るかはりに、硝子板をはめこみたる障子。

からす-だな[烏棚](名)四十八棚の一、三枚の棚板を床板に平行せしめたるもの。つだな。「七。

ガラス-ど[硝子戸](名)(ガラスざやうぶ)に同

[からす-とび[烏飛](名)烏の飛ぶが如くに、橫さまに飛ぶと。「によりて吉凶を占ふ。

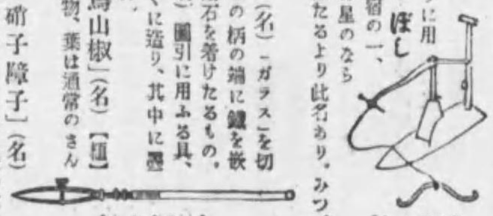
からす-なき[烏鳴](名)烏の鳴く聲、俗間にこれの金、貸したる翌日は其利金を取り上ぐる義。日歩にて取り上ぐる高利

からす-なめり[轉筋](名)足の筋肉の攣(モ)れちゞまること。こむらがへり。

からす-ぬへ[轉筋](名)前條に同じ。「たゞれ。

[からす-の-さと[烏炙](名)子供の口角に生ずる色なり、長さ五寸餘高き柱類に屬する貝、介殼は楕圓形にして膨脹し、外面は黑色にして內面は黑紫色なり、長さ五寸餘高き三寸餘、淡水の軟泥の上層に棲息す、我國湖沼概ねこれを產す。(る)殼黑き蛤(ハマグリ)の異稱。

からす-の-ぎやうずる[烏行水](名)沐浴する時間の甚だ早きこと。


[きヲカ]

カラ-すき[唐鋤](名)柄曲がりて刃廣き鋤、多く牛につけて田畠を耕すに用ふ。うしぐは。(犂)。

—ぼし[唐鋤星](名)二十八宿の一、即ち、參宿の一名、三個の星のならびたる形、カラすきに似たるより此名あり。みつぼし。(參星、觜星)。

ガラス-きり[硝子切](名)「ガラス」を切るための具、「ペン」狀形の柄の端に鑽を嵌(カ)めこ、これに小さき金剛石を著けたるもの。

からす-ぐち[烏口](名)圓引に用ふる具、鋼鐵を以て烏の嘴の如くに造り、其中に墨汁を含ませ線を引くもの。

からす-ぐち[烏口](名)圓引に用ふる具、

からす-ざんせう[烏山椒](名)(植)芸香(ヘンガ)科に屬する植物、葉は通常のさんせうより大形なり。

ガラス-ざやうぶ[硝子障子](名)

からす-だな[烏棚](名)四十八棚の一、三枚の棚板を床板に平行せしめたるもの。つだな。「七。

ガラス-ど[硝子戸](名)(ガラスざやうぶ)に同

[からす-とび[烏飛](名)烏の飛ぶが如くに、橫さまに飛ぶと。「によりて吉凶を占ふ。

からす-なき[烏鳴](名)烏の鳴く聲、俗間にこれの金、貸したる翌日は其利金を取り上ぐる義。日歩にて取り上ぐる高利

からす-なめり[轉筋](名)足の筋肉の攣(モ)れちゞまること。こむらがへり。

からす-ぬへ[轉筋](名)前條に同じ。「たゞれ。

[からす-の-さと[烏炙](名)子供の口角に生ずる色なり、長さ五寸餘高き柱類に屬する貝、介殼は楕圓形にして膨脹し、外面は黑色にして內面は黑紫色なり、長さ五寸餘高き三寸餘、淡水の軟泥の上層に棲息す、我國湖沼概ねこれを產す。(る)殼黑き蛤(ハマグリ)の異稱。

からす-の-ぎやうずる[烏行水](名)沐浴する時間の甚だ早きこと。

からす-の-どま[烏胡麻](名)【植】田麻科に屬する草、葉は楕圓形にして、鋸邊に齒牙を有し、花瓣は五個ありて黃色を呈す、雄蕊は通常二十個ありて、其中五個は葯を有せず。(田麻)。

からす-の-ぬれはいろ[烏濡羽色](名) 最もうるはしき烏羽の色。

からす-の-ゑんどう[烏豌豆](名)【植】豆科に屬する植物、莖は赤色にして、四月頃、黃色の花を咲く。(雲實、大巢菜)。

からす-ば[烏羽](名) ㊀烏の羽。「—に書く、言の葉の」。㊁烏の羽の色、紺の光澤まこれる黑色。——。

いろ[烏羽色](名) 前條(二)に同じ。　「德利」。

ガラス-ビン[硝子壜](名) 硝子にてつくりたる

からす-へび[烏蛇](名)【動】蛇類中闊口類に屬する爬蟲、全身黑色にして、山野に棲息す、尾尖り頭闊く、氣猛し、其大いなるは人を追ふ、漢方にては、捕りて醫藥に供す。くろくちなは。(黑花蛇)。

ガラス-まど[硝子窓](名) 硝子を張り又は硝子障子をたてたる窓。

からす-まめ[烏豆](名)【植】くろまめの一種、莖細く實黑くして小さし。たんきりまめ。

カラ-すみ[鰞](名)(唐墨の義)一種の食品、さはらぼらのめなだ等の子を胞袋のまゝ乾して製せるもの、形唐墨に似たれば名づく、肥前國野母(モ)の名產。　「【鑑】黑色の琥珀。

カラ-ずみ[唐墨](名) ㊀支那製の墨、たうぼく。㊁

からす-むぎ[烏麥](名)【植】禾本科に屬する一年生の草本、原野に自生す、平滑なる莖を有し、小穗狀花序は通常二三個の花より成り、花は皆な長き芒を有す、牧草として有用なり。(雀麥)。

からす-ゑんどう[烏豌豆](名)【植】「からすのゑんどう」に同じ。

〔からせ〕[乾咳](名) たゞ咳(セ)のみ起りて痰の出でざるもの。(形骸)。㊁物の胴

からだ[體](名) ㊀身體。ごたい。(形骸)。㊁物の全體。——**をとはす** 甚しく骨折りはたらく。——**をとにす** 病氣をかもす。——**をとしむ** はたらくを厭(ア)ふ。「ヒ」にあたる部分。㊁物の全體。——。

カラ-たいわり[唐大黃](名)【植】「まだけ」の一名。(竹)。

カラ-たけ[漢竹](名)【植】「かんちく」に同じ。

カラ-たち[枸橘](名)(唐橘の義)【植】芸香科に屬する植物、刺多し、葉は三個の小葉より成り綠色にして光澤を有す、春末に白色の花を開く、實は五個にして殆んど無柄なり、多くは籬用として栽培せらる。きこく。(枳殼)。

カラ-たちばな[唐橘](名)【植】紫金牛(マブジ)科に屬する植物、草本狀の小木本にして葉は厚からず、花梗は葉腋に生じ小數の花を着く、花冠は稍や白色にして赤色の小點を有す、果實は紅色なり、觀賞用として栽培せらる。(平地木)。

カラ-たま[唐玉](名) 外國より舶來せる玉。

カラ-ちち[乾乳](名) 乳汁の出ざる乳ぶさ。

カラ-ちや[唐茶](名) 支那流にたてたる煎茶。

カラ-つ[唐津](名) ㊀開西にて陶器の總稱、開西地方にては、種々の陶器を唐津燒其名を專ら「からつやき」の略言。

〔カラ-つ-く〕(自、か四) から〳〵す。

〔カラ-つ-く〕(自、か四) からつす。

カラ-づけ[辛漬](名) 澤庵漬などを鹽辛く漬くること、又、其漬物。

〔からづ〕[空砲](名) 鑄砲に彈丸を込めずして發火すること。「火すると、からづっぽう。

カラット[Carat](名) 合金中に含む金の割合、純金を二十四「カラット」とし、十八「カラット」十六「カラット」とは、二十四分中に十八分又は十六分の金を含むとをいふ。

〔からつ-つばき〕[空唾](名) 痰などの混合せざる唾。　「「肺病やみの—」。

カラ-つばき[唐椿](名)【植】つばきの一種、支那より渡來したるものにして、通常のつばきよりは葉細長くして厚し、花もまに大形にして麗しき紅色を帶び牡丹に似る。(勤茶)。

〔カラつ-や〕[唐津屋](名) 陶器をうる家、(開西の

カラつ-やき[唐津燒](名) 肥前國唐津より出す陶器の總稱、色は多く黑を帶びたる薄萌黃(ウスモエギ)にして、まゝ薄柿色に朱線を現したるもの多し。

からて[空手](名) 手を空うして何物をも持たぬこと、手を空うして何事をもなさぬこと。すで。てぶら。

からでっぱう[空鐵砲](名) ㊀「からづゝ」に同じ。㊁虛言すること、實なきこと。　「ぴつ」の一名。

カラ-さ[唐櫃](名) ㊀「カラうと」の略言。㊁「こめさんを入れたる左右相對する開戶。

カラ-ざ[唐戶](名) 縱の中央に一本、横に數本の

カラ-なし[唐梨](名)【植】薔薇科に屬する植物、葉は楕圓形にして鋸齒を有し、花冠は白色にして淡紅色を帶ぶ、果實は林檎(ゴ)に似て大きく紅色なり、木材は種々の用に供せられ、果實はまた食用に供せらるゝ。べにりんご。

カラ-なつめ[唐棗](名)【植】棗の變種、葉は長卵狀にして三大脈を有す、果實は形圓く味酸し、秋熟して赤色となる、仁は固く太く藥劑に供せられ、木材もまた種々の用に供せらる。

一字音　一俚語方言　〃古語

カラ-ねでしこ[唐撫子](名)【植】「かはらなでしこ」の一名。(石竹)。　「辛きより此名あり。

からに-にし[辛螺](名)【動】「いはにし」の一名、味

カラ-にしき[唐錦](名) 支那より渡來又は韓人の製作に成れる錦、又、金絲をいれて織りたる錦。やまとにしきの對。

〔からぬひ〕(名)「からげぬひ」の略言。

からね[乾根](名) 黑き稻。　「飾りたる兜(カブト)」。

カラ-の-かしら[唐首](名) 蓐生(ジョウ)の毛を上に

〔からのら〕(名) のらくらと暮らすこと。

カラ-はな-さう[唐花草](名)【植】桑科に屬する草、寒國に生ず、雌雄異株花を有す、葉は心形にして往々三裂す、果實はまつかさに似る、腐蝕藥に用ひ、又、麥酒の醸造にも用ひらる。

カラハニ(名)「ガルハニ」に同じ。

カラ-はふ[唐破風](名) 破風を乙字形に似たる曲線狀に作りたるもの、玄關又は門などの屋根の飾として用ふ。

カラ-びつ[唐櫃](名) 支那風に作りたる櫃の一種。「つは者共、—に走せ寄って」(幸櫃)。

カラ-びと[唐人、韓人](名) 支那又は朝鮮の人。

〔からびる〕[乾](自)「からぶ」の訛。

カラ-ひわ[唐鶸](名)【動】「ひわ」(鶸)の一名。

からぶ[乾](自、は上二) ㊀水分失せてよく乾燥す。かわく。㊁草木など生氣竭きてかじく。

カラフト-だま[唐太玉](名) 滿洲より唐太を經て、內地に來れるねり物の玉、色青し、煙草入の緒締(ジメ)などに使用す。むしのす。

からふね[空船](名) 積荷ち乘客もなき船。

カラ-ふね[唐船](名) 朝鮮又は支那の船、又、其他一般の外國船。

カラ-ぶみ[漢書](名) 支那の文書、漢文の書籍、かんぶよ。——**-よみ**[漢書讀](名) ㊀漢書の讀み人。

からぼり[空堀](名) 水なき堀。(空)。

カラ-まつ[唐松](名) ㊀【植】松杉科に屬する落葉木、山中に自生す、葉は針狀露出して柔軟なり、花は單性雌雄同株にして蓁荑狀をなす、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる、奥羽の南部地方に多し。テウセンまつ。シンラまつ。㊁「カラまつせんべい」の略言。——**-せき**[唐松石](名)【動】きくめいしの大いなる模樣の現はれたるもの。——**-せんべい**[唐松煎餅](名) カラまつの葉の形したる煎餅。

からまる[絡](自、ら四) まとはりつく、まとはりつく。

からみ[辛味](名) 辛き味、又、辛き味のもの。——**もち**[辛味餅](名) 搗(ツ)きたるまゝの柔かき餅に、大根おろしをつけたるもの。

〔からみ〕[乾耳](名) 耳の病、膿汁出ずしてたゞひつく。まきめぐる。蛇が足を—。(榮)。

からむ[絡](他、ま四) まとはりつく。まとはりつく。

からむ[搦](他、ま下二) 罪人などを捕縛す。からめとる。ちばる。

〔ガラム〕(名)「グラム」の訛。

からむぎ[殼麥](名) 殼のつきたるまゝの麥。

からむし[苧](名) ㊀【植】(苧麻(ヂマ))蕁しの義といふ)琴麻(ヂマ)科に屬する草、多少木質の莖を有す、高さ四五尺、葉は互生し下面は白色なり、夏の頃、細き青色の小花を着く、莖の皮より纖維を採り絲を製し布を織る、越後縮は此纖維を以て織れるなり。(榮)。

㊁「からむしてふ」の略言。——**-づきん**[苧頭巾](名)「もこもづきん」の一名、もとからむしの莖の纖維を以て織りてつくりしより此名あり。——**てふ**[苧蝶](名)【動】鱗翅類中地蠶蛾類に屬する蟲、翅は黑褐色にして、黑條黑紋あり、幼蟲は肥大す、苧の害蟲なり。

カラ-めか-す[唐風](自、さ四) 唐機になる。

からめき-の-ひ[柄目木火](名) 越後國蒲原郡柄目木村附近の地中より出る天然の石炭五斯。

カラ-め-く[唐風](自、か四) 唐樣に見ゆ。

からめ-て[搦手](名) 城砦の裏門。もふての對。「一の大將」(後門)。

カラ-もの[唐物](名) 唐土より舶來せる雜貨。

——-の-つかひ[唐物使](名) 古昔、唐土の商船流來に著したるとき、其船載せる雜貨を檢するため、京都より出張せし使者。

カラ-もも[唐桃](名)【植】(いたゞ)の一名。(ろ)桃の一種、葉細長し、花はまばらくして紅白色なり。

カラ-もん[唐門](名) 唐破風(カラフ)の屋根にて、唐戶をたてたる門。

カラ-やう[唐樣](名) ㊀支那の風。㊁支那流の書風、和樣の對。㊂行・草以外の書體、即ち、楷・篆・隸などの書體の稱。——**-かき**[唐樣書](名) からやうの文字を書く人。

[カんもヲカ]

からやま[空山](名) ㊀草木の枯れたる山。(枯山)。㊁草木なき山。はげやま。

がら-ゆき[柄行](名)「がら」柄に同じ。「縞物の—」。

〃カラ-よもぎ[唐艾](名)【植】菊の一名。

〃からり(名、副) 物事の全く以前に變はれるさまに

一字音　一俚語方言　〃古語

カラ-ハニ(名)「ガルハニ」に同じ。

カラ-はふ[唐破風](名) 破風を乙字形に似たる曲線狀に作りたるもの、玄關又は門などの屋根の飾として用ふ。

カラ-びつ[唐櫃](名) 支那風に作りたる櫃の一種。「つは者共、—に走せ寄って」(幸櫃)。

カラ-びと[唐人、韓人](名) 支那又は朝鮮の人。

〔からびる〕[乾](自)「からぶ」の訛。

カラ-ひわ[唐鶸](名)【動】「ひわ」(鶸)の一名。

からぶ[乾](自、は上二) ㊀水分失せてよく乾燥す。かわく。㊁草木など生氣竭きてかじく。

カラフト-だま[唐太玉](名) 滿洲より唐太を經て、內地に來れるねり物の玉、色青し、煙草入の緒締(ジメ)などに使用す。むしのす。

からふね[空船](名) 積荷ち乘客もなき船。

カラ-ふね[唐船](名) 朝鮮又は支那の船、又、其他一般の外國船。

カラ-ぶみ[漢書](名) 支那の文書、漢文の書籍、かんぶよ。——**-よみ**[漢書讀](名) ㊀漢書の讀み人。

からぼり[空堀](名) 水なき堀。(空)。

カラ-まつ[唐松](名) ㊀【植】松杉科に屬する落葉木、山中に自生す、葉は針狀露出して柔軟なり、花は單性雌雄同株にして蓁荑狀をなす、木材は種々の用に供せられ、又、觀賞用として栽培せらる、奥羽の南部地方に多し。テウセンまつ。シンラまつ。㊁「カラまつせんべい」の略言。——**-せき**[唐松石](名)【動】きくめいしの大いなる模樣の現はれたるもの。——**-せんべい**[唐松煎餅](名) カラまつの葉の形したる煎餅。

からまる[絡](自、ら四) まとはりつく、まとはりつく。

からみ[辛味](名) 辛き味、又、辛き味のもの。——**もち**[辛味餅](名) 搗(ツ)きたるまゝの柔かき餅に、大根おろしをつけたるもの。

〔からみ〕[乾耳](名) 耳の病、膿汁出ずしてたゞひつく。まきめぐる。蛇が足を—。(榮)。

からむ[絡](他、ま四) まとはりつく。まとはりつく。

からむ[搦](他、ま下二) 罪人などを捕縛す。からめとる。ちばる。

〔ガラム〕(名)「グラム」の訛。

からむぎ[殼麥](名) 殼のつきたるまゝの麥。

からむし[苧](名) ㊀【植】(苧麻(ヂマ))蕁しの義といふ)琴麻(ヂマ)科に屬する草、多少木質の莖を有す、高さ四五尺、葉は互生し下面は白色なり、夏の頃、細き青色の小花を着く、莖の皮より纖維を採り絲を製し布を織る、越後縮は此纖維を以て織れるなり。(榮)。

㊁「からむしてふ」の略言。——**-づきん**[苧頭巾](名)「もこもづきん」の一名、もとからむしの莖の纖維を以て織りてつくりしより此名あり。——**てふ**[苧蝶](名)【動】鱗翅類中地蠶蛾類に屬する蟲、翅は黑褐色にして、黑條黑紋あり、幼蟲は肥大す、苧の害蟲なり。

カラ-めか-す[唐風](自、さ四) 唐樣になる。

からめき-の-ひ[柄目木火](名) 越後國蒲原郡柄目木村附近の地中より出る天然の石炭五斯。

カラ-め-く[唐風](自、か四) 唐樣に見ゆ。

からめ-て[搦手](名) 城砦の裏門。もふての對。「一の大將」(後門)。

カラ-もの[唐物](名) 唐土より舶來せる雜貨。

——-の-つかひ[唐物使](名) 古昔、唐土の商船流來に著したるとき、其船載せる雜貨を檢するため、京都より出張せし使者。

カラ-もも[唐桃](名)【植】(いたゞ)の一名。(ろ)桃の一種、葉細長し、花はまばらくして紅白色なり。

カラ-もん[唐門](名) 唐破風(カラフ)の屋根にて、唐戶をたてたる門。

カラ-やう[唐樣](名) ㊀支那の風。㊁支那流の書風、和樣の對。㊂行・草以外の書體、即ち、楷・篆・隸などの書體の稱。——**-かき**[唐樣書](名) からやうの文字を書く人。

[カんもヲカ]

からやま[空山](名) ㊀草木の枯れたる山。(枯山)。㊁草木なき山。はげやま。

がら-ゆき[柄行](名)「がら」柄に同じ。「縞物の—」。

〃カラ-よもぎ[唐艾](名)【植】菊の一名。

〃からり(名、副) 物事の全く以前に變はれるさまに

一字音　一俚語方言　〃古語

いふ語「一變ける」。

〔がらり〕(名、副) 前條に同じ。

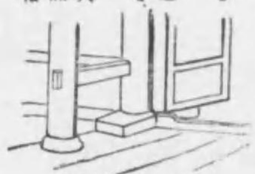
カラ・わ〔唐輪〕(名) 《婦人の髪の結(ユ)ひ方》(い)髪(モト)を束ねて其上部を輪につくりたるまげ、慶長以前切髪久しく行はれしもの。(ろ)髪より上を二つに分け銷の上にて二つの輪をつくりたるもの、德川時代に、奥づとめの小姓の少女これを結べり。

〔(い)わヲカ〕

から・ゐ〔空井〕(名) 乾燥して水無き井。

カラ・ゐまき〔唐居敷〕(名) 支那風に門の柱の下に敷きたる木。

カラ・ゑ〔唐畫〕(名) 支那人の手に成りたる畫。又、支那人の筆法にならひたる畫。倭畫の對「一の山水」。



〔きさゐヲカ〕

++から・をき〔枯荻〕(名) 枯れたる荻。

ガラン〔伽藍〕(名) 《梵語 Saṃghārāma (僧伽藍摩)の略、僧園又は精舍と譯す》衆多の僧の遊歩修行する場所。テラ。「七堂—」。

〔がらん・どう〕(名) 《空虛の義ともいひ、又、伽藍堂の義ともいふ》家の中に物なくして廣きこと。

かり〔雁〕(名) 〔動〕水禽類中扁嘴類に屬する鳥、脚長し、嘴は軟皮を被りてたゞ末端のみ硬く、嘴緣に數多の角質の薄板排列す、脚は短くして後方に位し、前三趾間に蹼(ミヅ)を張り後趾小さし、河海池沼に棲息する候鳥にして秋來り春去る、其聲悲哀の情を傳す、故に古來多く歌などによめり。「七。

カリ〔加里＝Kalium〕(名) 〔化〕「カリウム」に同

かり〔狩〕(名) ㊀鳥獸類を追ひ捕ること。(雅)。㊁獵狩の特稱。㊂魚を漁(ナス)ること。㊃尋ねさがすこと。さがしありくこと。「松茸—」「紅葉—」。

かり〔假〕(名) ㊀永久ならざること。まばし。(當時)。㊁實正のものにあらざること。「—につくる」。㊂眞正のものにあらざること。似て非なること。にせ。いつはり。㊃他の職をかぬること。臨時。「—の太守」(源語)。

かり〔借〕(名) 借ること。又、借りたる物。

かり〔刈〕(名) ㊀刈りとること。㊁古昔の段別の稱、今の四坪に當る。

++かり〔甲〕(名) 樗蒲(オウ)の采(サイ)。

++かり〔許〕(名) 音樂にて、調子を高く上ぐること。

++—がり〔接尾〕或語に添へて、そのもと(の義を表はす語。「妹—行けば冬の夜の」。

かり・あつ・む〔獵集・編集〕(他、む下二) 獵りたて、よせあつむ。「獵師をかりあつめて」。

〔かりあつめる〕〔獵集〕(他) 「かりあつむ」の訛。

++かり・あを〔狩襖〕(名) 古昔、隨身・舍人などの著し衣服、表は布にして裏は絹なるもの。

かり・いぬ〔獵犬〕(名) 狩獵に使ふ犬。れふけん。

かり・いへ〔借家〕(名) 人の家屋を借りてすまふこと。又、其家。

かり・いほ〔假廬〕(名) かりにすまふいほ。かり。

(かり・うち〔下流〕(名) ㊀川さき。㊁卑く賤しき地位。「—に居るを憂ふ」。

(かり・うち〔我流〕(名) おのれひとりにて立てたる流儀。「—の手腕」「—の劍術」。

かり・うち〔樗蒲〕(名) 博奕の一種、厚紙の札の外を黑く内を白くして、これに種々の繪模樣を描き、書をばう、赤色をいす、圓形をもつて、半圓をこふといひ、各十二枚合計四十八枚あり、これを以て勝負を爭ふ、恰も今時の花合せに類するもの。

かり・うど〔獵人〕(名) 山野にて鳥獸を獵するを職業となす人。れふし。「接者」。

カリウム〔加留母＝Kalium〕(名) 〔化〕銀色をなす脆(モロ)き金屬、水に遭(ア)ひ水素を遊離して水酸化「カリウム」となり、其際發する熱により音を發し紫燄をあげて燃燒す、酸化し易きを以て、石油或は揮發油に入れて貯ふ、天然には長石・明礬等となりて存在す。

かり・うめ〔假埋〕(名) かりにうづめおくこと。

かり・かいげふめんぎやう〔假開業免狀〕(名) 醫師をしき地に於て、府縣知事の具狀により、內務大臣より試驗によらず其人の履歷のみによりて付與する醫師の開業免狀。

かり・かた〔借方〕(名) ㊀人より物を借る手段。㊁借りたる方の人。㊂簿記の仕譯にて、帳簿が受けたる方の稱、例へば、織物一反を買ひ金十圓を支拂ひたりとすれば、其織物は帳簿に於て借方なり。

かり・がね〔雁音〕(名) ㊀雁の聲。㊁〔動〕雁の一名「玉づさは、掛けて來つれど、—の」。

——・てん〔雁音點〕(名) 漢文の返點の一なる「レ」の稱。

〔かりがね・ぼね〕〔刈株〕(名) 「かりがね」の訛。

かり・かぶ〔刈株〕(名) 刈りたるあとに殘る株。

かり・かぶ〔假株〕(名) 「かりかぶけん」の略言。

——・けん〔假株券〕(名) 會社より株主へ假に付與しおく株券、後に本株券と引き換ふるもの。

カリ・ガラス〔加里硝子＝Potash glass〕(名) 和もに「カルシウム」及「カリウム」の硅酸鹽より成る「ガラス」、「ガラス」の中にて、最も融解し難く且水及酸類の作用を受くること最も少きを以て、多く化學用器具製作に用ひらる。

かり・かり(名、副) ㊀雁の鳴き聲「來る秋ごとに—と鳴く」。㊁堅きものを細かく噛みくだく音「—音をさす」。

〔がり・がり〕(名、副) 前條(二)に同じ。「—齒にたへする」。

——・ばりず(ガリ)(名) ㊀貪婪の僧をいやしめていふ語。㊁頭髮を極めて短く刈ること。

——・まろおや(ガリ)(名) 執念深く我慾を成さんとするものをいやしめいふ語。「し。かれぎ」「外薤」。

かり・き〔刈葱〕(名) 〔植〕ねぎの變種、葉甚だ小さし。

かり・き〔借着〕(名) 他人の衣服を借りて着(キ)ること。又、其服。「損料の—」(借衣)。

かり・きちやう(ヨウ)〔假議長〕(名) 議長若しくは副議長にあらずして、一時議長の職務を行ふ人。

かり・きぬ〔狩衣〕(名) 《もと鷹狩の時に著せし服》古昔の官服、盤領(アクビ)にして袖にくくりあるもの、これを著るときは、必ず指貫(サシヌキ)の袴を用ひ、褶(ヒダ)を袴の外(出すを例とす、縫又は紗等にて仕立て、夏は一重にして冬は裏をつく、色は一定せず、五位以上のものは織紋を用ひ、五位以下のものは無紋を用ひたり。

〔ぬぎりか〕

かり・くび〔雁首〕(名) ㊀雁の首に似たる形をなすもの。㊁〔陰莖の頭〕(亀頭)。

++かり・くら〔狩座〕(名) 鳥獸を狩る所。かりば。

++かり・くら〔狩競〕(名) 爭ひて狩獵を行ふこと。

かり・けつぎ〔假決議〕(名) 本來の効力を有せざる決議。又、効力不確定なる決議。「せこ」。

かり・こ〔狩子〕(名) 狩獵に、鳥獸を驅り出す士卒。

かり・こみ〔刈込〕(名) ㊀刈りこむこと。㊁果樹栽培上必要なる手入れ、無用の枝を剪除して有用の枝を保護すること、初冬落葉の後若しくは早春發芽の前に行ふべきものとす。

——・ばさみ〔刈込剪刀〕(名) 樹枝をかりこむに用ふる鐵製の剪刀。

かり・こ・むまつぶ〔刈込〕(他、ま四) 頭髮をかりこむに用ふる鐵製の剪刀。

かり・こ・むまつぶ〔刈込〕(他、ま四) 「髮を—」(剪)。

〔かり・こ・むめる〕〔借込〕(他、ま四) 「酒に借る。

かり・こも〔刈菰〕(名) 刈りたる菰は亂れ易きより、「みだる」に冠らする詞。

++かり・ごろも〔狩衣〕(名) ㊀狩に著る服。㊁旅行の服。

かり・さしれさへ(エ)〔假差押〕(名) 〔法〕強制執行を保全するための處分、金錢又は金錢の債權に換ふることを得べき請求に就き、其目的たる動產又は不動產が、隱蔽又は費却等により失はるゝ恐れあるときに行ふものにして、判決の確定以後に行ふを通常とすれど、未だ期限に至らざる請求にても、其手續を履めばまた行ふことを得、假差押せんとする物の所在地の區裁判所又は本案繫屬の裁判所に申請し、其命令を得てこれを行ふ。假處分の條參照。

——・けつてい〔假差押決定〕(名) 〔法〕假差押の申請に對し、該管轄裁判所が、口頭辯論を經ずしてこれを認可する決定。

かり・ざまき〔借座敷〕(名) 借りたる座敷。

かり・ざまかう(ヨウ)〔假執行〕(名) ㊀假に或事柄をとり行ふこと。㊁〔法〕裁判所が職權又は申請により、判決は未だ確定に至らざれど、これに附したる假執行の宣言に基づきてなす強制執行。

——・の・せんげん〔假執行宣言〕(名) 〔法〕裁判所が或場合又は或條件の下に、其判決を假に執行するを許すとの宣言。

かり・さほ(ホ)〔刈機〕(名) 刈りてよき時期。「稻の—」。

かり・さゆうじく〔假出獄〕(名) 〔法〕重罪又は輕罪の刑に處せられたるものが、よく獄則を遵守し改悛の狀あるとき、假に獄より出して、普通人の生活を營ましむること。

かり・さよぶん〔假處分〕(名) ㊀假に或事柄を處分すること。㊁〔法〕裁判所が係爭物に關し、其現場の變更により、當事者の一方の權利を實行すること能はず、又、これをなすに著しき困難を生ずる恐れあるときに許す處分、其假差押と異なる點は、假差押は、專ら金錢上の債權に關して、強制執行を保全するために行ふものなれど、假處分は、たゞ係爭の目的物に限るものなり。

かり・せんぐう〔假遷宮〕(名) 神社の本殿を造營する間、假につくりし御殿に神體をうつす儀式、かりどのせんぐう、正遷宮の對。

かり・そ・ぐ(ゲ)〔刈削〕(他、か四) 刈り(らす。

かり・そめ〔假初〕(名) ㊀當時のまにあはせ。かりそめ。たうざ。(當且)。㊁かろ〳〵しくすること。そまつ。おろそか。なほざり。

——・にも〔假初〕(副) いやしくも。(當且)。

——・ぶし〔假初臥〕(名) うたたね。かりね。

かり・た〔刈田〕(名) 稻などを刈りたるあとの田。

カリタ〔骨牌〕(名) 「カルタ」に同じ。

かり・たく〔假宅〕(名) 一時假に住む家。

かり・たつ(てつてつる)〔驅立〕(他、た下二) ㊀驅り追ふ。おひたつ。「獸を—」。㊁強ひて備し赴かしむ。

〔かりたてる〕〔驅立〕(他) 「かりたつ」の訛。

かり・ち〔借地〕(名) 借りたる地面。まやくち。

かり・ちめん〔借地面〕(名) かりち。まやくち。

カリーア**ス**[固有](名)[仮名]　**カリ**ーア**ス**[固有](名)[仮名]　**カリ**ーア**ス**[固有](名)[仮名]　

かる-はずみ（名）「かるはずみ」に同じ。（輕率）。
ガルバニ（名）「オランダ」國の人「ガルバニス」（Galvanis）氏の發明にかゝる一種の電氣鍍金術。
かる-む［輕］（自、ま四）「かるむ」に同じ。
かる-む［輕］（他、ま下二）「かるむ」に同じ。
カルメラ（名）次條に同じ。
カルメル（名）《ポルトガル語Caramelo》一種の菓子、下等の砂糖を煮て泡を立たせ、そのまゝ凝らせたるもの。（泡糖、燒菓）。
かる-も［刈藻］（名）刈りたる藻。
☆かる-も［枯草］（名）かれぐさ。「臥す豬の床の、—にも」。**——-か-く**［枯草掻］（他、か四）かれくさを掻き集めて臥す。（豬などにいふ）。
☆かる-もの［輕物］（名）銅布の異稱。
かる-やき［輕燒］（名）「かるやきせんべい」の略言。**——-せんべい**［輕燒煎餅］（名）砂糖を煮ゴナの粉に加へて製し、膨ふくるゝやうに燒きたる煎餅。
かる-ゆき［輕行］（名）手輕く行くこと。容易に埒チラ。
かる-らか［輕］（名）「かるらか」の轉。
ガルロン［瓦＝Gallon］（名）「イギリス」國の量目、我國の二升五合一勺強にあたる。
かる-わざ［輕業］（名）㊀身輕に行ふはなれ業、即ち、綱渡・梯子乘などの類。㊁極めて危險多き計畫又は生業。**——-か**［輕業師］（名）㊀輕業の興行人。㊁輕業の技を行ふ人。（肉飛仙）。㊂極めて危險多き計畫又は生業をなす者の稱。
（か-るゐ）［家累］（名）家族に關してのわづらひ。家事に關してのはだし。
（か-るゐ）［蛾類］（名）【動】鱗翅類に屬する昆蟲、變態完全にして、觸角は棍棒狀をなさず、多く靜止するときは其翅を後方に向け横ふ、蝶は概ね鱗を作る、益蟲多けれど害蟲もまた少なからず、かひこ・やまゆ等これに屬す。

かれ［彼］（代）㊀二人相對話するときに用ふる他の人の代名詞、即ち、第三人の稱、あれ。㊁身より遠くはなれたる事物を指すに用ふる代名詞、あれ。それ又はこれの對。**——を志り**［知］**おのれを志る**［知］［彼知己］敵と味方との事情を明かにして、能く其優劣長短を知るにいふ。
☆かれ［故］（接）かるがゆゑに、故に。
（か-れい）［家令］（名）㊀親王家にて、別當を助け家務會計を管理するもの。又、諸王家にて精選の貴に任じ、家務會計を管理し他の諸員を監督するもの。㊁華族にて、其一家の事務を管理し諸員を監督するもの、即ち、家臣の長。
（か-れい）［家例］（名）一家に昔より定例として擧行する儀式など、「—を守る」。
（か-れ-い）［苛令］（名）きびしき命令。（苛政）。
（か-れ-い）［嘉例］（名）めでたき例。（吉例）。
（か-れ-い）［遐齡］（名）年老いたること。長壽。
（か-れ-い）［佳麗］（名）うるはしきこと。きれいなること。
（か-れ-い）［加齡］（名）年をむかへ齡を增すこと。
（か-れ-い）［下隷］（名）えもべ。つかひをとこ。
☆かれ-いひ［乾飯］（名）「かれひ」（餉）に同じ。
かれ-いろ［枯色］（名）㊀草木などのかれたゝまみたるときの色。㊁かさねの色目、表は白にて裏は薄色なるもの。
（か-れ-ち）［下僚］（名）おたづかさ。おたゞく。
かれ-えだ［枯枝］（名）かれたる木の枝。
☆かれ-がし［彼某］（代）かのなにがし。あのたれ。
かれ-がれ（名、副）㊀植物などの枯れんとするさまにいふ語。㊁☆☆交際などのうとくなるさまにいふ語。㊂☆☆もの〳〵相離れあるさまにいふ語、はなれ〳〵。
かれ-き［枯木］（名）枯れたる木。
かれ-くさ［枯草］（名）㊀かれたるくさ。㊁まぐさ。
かれ-とれ［彼此］（代）かれとこれと。
かれ-とれ［彼此］（副）㊀とやかく。いろ〳〵。㊁あよそ。やがて。「—二里許隔つ」。
かれ-ごゑ［嗄聲］（名）嗄れたる聲。えはがれこゑ。えやがれごゑ。（失聲）。
かれ-の［枯野］（名）草の枯れはてたる野。
かれ-は［枯葉］（名）枯れたる草木の葉。
かれひ［鰈］（名）【動】軟鰭類に屬する魚、體は頗る側扁にして楕円形をなし、一部は不等形をなす、眼に頭部は強くねぢれて高し、體の上面は砂色にして雨點は此面上にあり大きくして分離す、他の一面は白く、これを下に向けて游泳す、近海の砂底に棲息す、種類多し。（比目魚、扁魚）。

［かれひ］

☆かれ-ひ（名）《「かれいひ」の略言》㊀干したる飯。はしひ。はしいひ。（糧）。㊁旅行などに持ち行く飯。べんたう。（餉）。**——-つけ**［餉筒］（名）べんたう。わりご。（樋子）。**☆——-つけ**［餉附］（名）鞍の後嶺（シヅ）の鞍（デシ）の一名、古昔、此所に兵糧を付けて行きしよりいふ。
☆かれ-ふ［枯生］（名）枯れたる草木。又、冬枯。
☆かれ-ら［彼等］（代）彼の人々。あの人たち。あれら。
☆かれる（自）㊀「涸る」、「嗄る」、「枯る」等の訛。㊁技能進む。熟達す。「腕が—」。

（か-れん）［可憐］（名）憐れむべきこと。愛すべきこと。**——-せい**［可憐生］（名）憐れむべきこと。憐むべきもの。「ひるがほにいふ語。」
かろ-がろ［輕］（名、副）さも輕くあるらしく見やすし。甚だ容易なり。㊁あどそかならず。おちつきてあらず。かろはづみなり。「秋」。
かろ-がろ-し［輕］［輕］（形、二）㊀いとたやすし。甚だ容易なり。㊁あどそかならず。おちつきてあらず。かろはづみなり。
（か-ろく）［加祿］（名）祿だかの增し加はること。（加祿）。
（か-ろく）［家祿］（名）家に傳はれる祿。ちぎやう。
かろ-し［輕］（形、二）㊀目方少なし。重からず。「目方—」。㊁威力なし。尊嚴ならず。「大將としては—」。㊂沈着ならず。篤實ならず。㊃いやし。ひくし。㊄てがるし。たやすし。㊅すくなし。「罪—」。㊆はげしからず。ひどからず。「かろく打つ」。㊇利（ト）し。はやし。「車かろく、騎するどし」。
かろし-む［輕］（他、ま下二）㊀輕侮す。あなどる。みさげる。㊁をしまず。いとはず。
☆かろしめる［輕］（他）「かろしむ」の訛。
かろ-はずみ（名）かる〳〵しく事を處置すること。思慮淺くしてはやること。（輕率）。
☆かろ-ぶ［輕］（自、ば上二）かる〳〵しく見ゆ。かる〳〵しくあり。
かろ-む［輕］（自、ま四）かろくなる。「病—」。
かろ-む［輕］（他、ま下二）㊀あなどる。かろんず。㊁かろくなす。すくなくす。
カロメル［Calomel］（名）水銀と鹽酸とを化合せしめたる劇藥、多くの毒分を有すれど、また必用の藥品なり。（甘汞）。
かろやか［輕］（名）「かるらか」に同じ。
☆かろ-らか［輕］（名）物事の輕きさまにいふ語。
カロリー［Calorie］（名）【理】熱量の單位、一五の水を攝氏の零度より一度まで暖むるに要する熱量。
ガロン［瓦＝Gallon］（名）「ガルロン」に同じ。
かろん-ず［輕］（他、さ變）㊀あなどる。みさげ。「人を—」。㊁あしまず。いとはず。「命を—る」。「はす。（干）。」
かわかす［乾］（他、さ四）かわくやうにす。
かわき［乾］（名）かわくこと。
かわ-く［乾］（自、か四）㊀湿氣去る。水分盡く。ひる。㊁喉にうるほひ盡きて、飲料を得たく思ふ。「ふ。（渴）。」
（か-ゐ）［下位］（名）ひくき地位。えも。
（か-ゐん）［下院］（名）二院制度にて、人民の選出したる議員を以て組織する議院の稱。上院の對。
（か-をく）［家屋］（名）いへ。**——-ぜい**［家屋稅］（名）家屋の所有者に對して賦課する組稅。
かをら-す［薫］（他、さ下二）よき香を發せしむ。にはは す。
かをり［薫］（名）かをる。かをる氣。にはひ。香、「芳」。
かを-る［薫］（自、ら四）よき香發す。にはふ。
☆かん（名）長官（カン）の音便。「—の君」。
かん［燗］（名）《本邦の創作にかゝる「火」と「間」との合字、沸騰中間を煙る義》酒を器に入れて適宜の溫度まであたゝむること。又、其溫度。「酒の—」。（煖）。
（か-ん）［寒］（名）㊀さむきこと。さむき時。さむさ。㊁多の大寒と小寒との總稱。「一三十日」。㊂さびしき生活。まづしきこと。「—士」。
（か-ん）［癇］（名）㊀物事に感激するとき性質。㊁神經過敏なる一種の病氣、身體に痙攣などを起し、憂鬱などに惑ひ易し。「—の病」。
（か-ん）［駻］（名）馬の勢つよくして馭し難きこと。「前脚とつと、—強く」。
（か-ん）［漢］（名）㊀支那古代の有名なる朝、分つて前漢（西漢）と後漢（東漢）とす、前漢は我紀元四百五十五年劉季が帝位に即きしに始まり、同六百六十八年孺子嬰が廢せられしに終り、後漢は同六百八十五年劉季の末裔なる劉秀が帝位に即きしに始まり、同八百八十年魏に亡されしに終れり、當朝は漢人種の勢力最も發展せし時代にして、又、統治の間最も久しかりしより、遂に支那の異稱となれり。「カラ」、「—學」、「—字」、「—文」。㊁をのこ。をとこ。「暴—」、「好—」。
（か-ん）［間］（名）㊀あひ。あひだ。「天地—」。㊁なかたがひ。「無、隙。」。㊂をり。えは。「—に乘じてこれを說く」。**——はつをいれず**［間不容髮］物事極めて近接し若しくは急激にして、たとへば髮毛一本をさしいるゝすきもなきをいふ。
（か-ん）［閑］（名）㊀ひま。いとま。「半日の—」。㊁むよう。むだ。
（か-ん）［肝］（名）きも。「—の膽」。
（か-ん）［稈］（名）禾本科に屬する植物の莖の中空なるもの。わら。
（か-ん）［勘］（名）かんがへ。さとり。「—が鋭し」。
（か-ん）［艦］（名）いくさぶね。ぐんかん。「一首」、「—尾」。
（か-ん）［疳］（名）脾疳の略言。
（か-ん）［柑］（名）【植】柑子の略言、かうじ。「蜜—」。
（か-ん）［欠］（名）《「けん」の轉》物の勘定に、前より數の減ずること。めり。「—が立つ」。
（か-ん）［感］（名）感ずること。感じたること。感じたるかんがへ。「最頭の—」。
（か-ん）［韓］（名）㊀てがみ。「—を呈す」。㊁ふで。「—墨」。㊂つばき。「—を收むる鑒」。
（かん）［簡］（名）㊀大要を記したるてがみ。「—を送る」。㊁わりふ。ふだ。「—札」。㊂複雜ならざること。繁瑣ならざること。「繁より—に入る」。
（かん）［奸］（名）㊀德義にはづれたること。非理なる

と。㊁心ねぢけたること。よこしま。㊂かたぶき。

カン[甲](名)《字の唐音》音の圓子の上がると。

カン[羹](名)《字の唐音》㊀ざふにの一名。㊁菓子の一種、よせ集めて凝(カタ)らせたるもの。「羊—」。

(がん[龕](名)㊀佛像の厨子。㊁ひつぎ。

(がん[顔](名)かほ。あもて。「—を解く」。

(がん[雁](名)【動】「かり」に同じ。

(がん[癌](名)惡性なる固き腫物。往々大なる磊塊をなす。多くは遺傳性にして治療し難し。胃癌・舌癌・子宮癌等あり。

(がん[眼](名)㊀動物の感覺器の一、即ち、視官の稱にして、外界より來れる光線の刺戟に依りて、看視の感覺を起す所。高等動物のは一對にして球形をなし、其構造略猶に似て其だ複雜なり、運動自在にして、前面は眼瞼にて保護せられ且潤によりて常に其面を洗はる。下等動物に至りては、或はこれを有するものあり或は有せざるものあり、これを有するものにても、何れも不完全なり。(右圖は人類の眼を縱斷したるもの)。㊁見ること。見る所。「—に滿つ」。㊂めきき。鑑識。「—高し」。㊃あな。穿孔。「針—を穿つ」。㊄めだまの狀をなすもの。

(かん・あく[姦惡](名)㊀心のねぢけまがりたること。惡事をなすこと。㊁わるもの。あくにん。

かん・あけ[寒明](名)寒あきて、立春の日になること。

かん・あげ[髮揚](名)髮を結ふこと。

かん・あふひ[寒葵](名)【植】あふひの一種、花は冬咲く。(杜蘅)。

(かん・い[汗衣](名)はだぎ。あせぞゆばん。

(かん・い[簡易](名)てがるきと。たやすきこと。「—なふと。

の法」(簡單、平易)。

(かん・いう[甘誘](名)甘言をもてあざむきいざなふこと。

(がん・いう[含有](名)中にふくみもつこと。

(かん・いん[姦淫](名)不正なる性事をなすこと。夫婦にあらざるものゝ間に於て行ふこと。——・ざい[姦淫罪](名)【法】強姦罪、準強姦罪又は姦通罪の總稱。

(かん・う[甘雨](名)春さきなどにたと〳〵とよく物をうるほす雨。

(かん・えう[簡要](名)㊀物事の要點をつまみあげて說くこと。

(かん・えう[肝要](名)必ず要用なること。「—に堪へず」。

えう。かなめ。(肝心)。

(かん・えつ[感悅](名)心にいたく感じて喜ぶこと。

(かん・えつ[簡閱](名)かぞへまらぶること。けみすること。——・てんと[簡閱點呼](名)豫備役又は後備役等の下士卒を其地方にて召集し、人員のとりまらべをなすこと。

(がん・えん[岩鹽](名)【鑛】粒狀又は立方體の結晶をなす鹽素と曹達との化合物、水に溶解し易く鹹味ありて食鹽に同じ、大塊となりて現出し、岩石をなすことあれど、純粹なるものは稀なり。

(かん・れう[感應](名)㊀心の物事に觸れて動くこと。心にたへひゞくこと。㊁信心のほど神佛に通ずること。感通。㊂【理】或導體が發電體又は磁石に近づくとき、電氣又は磁氣を帶ぶるに至ること。又、磁場の強さを變ずるとき電流の通ずること。——・ぢ[感應起電機](名)【理】感應によりて電氣を收集する機械。——・コイル[感應—=Induction coil](名)【理】強き感應電流を起す機械、其構造は太き針線數十條にて作りたる「コイル」(捲線)を心とし、細き針線にて作りたる「コイル」(捲線)にて蔽ひたるものより成る、太き針のものを第一「コイル」といひ、小さき針のものを第二「コイル」といふ、第一「コイル」は電流斷及電池に連なり、電流が斷續的に通ずるが故に、第二「コイル」に強き感應電流起る。——・でんりう[感應電流](名)【理】磁場を變化するときに起る電流。

(かん・れん[漢音](名)漢字の音の一、支那の南北朝頃は鮮卑族等の侵入によりて、自然に字音の變化を生じ、漢以來の古音は北朝の地方に行はれ、雜樣せる音は南朝の地方に行はれぬ、漢音は即ち北朝の地方に行はれし字音の稱にして、吳音は即ち南朝の地方に行はれし字音の稱なり、共に我國に傳來したり、例へば、「行」を漢音にては「かう」、吳音にては「ぎやう」といふが如し。

(かん・か[閑暇](名)あき ひま。いとま。

(かん・か[感荷](名)うけたる恩を深く心に銘じ感ふこと。感佩。感謝。

(かん・か[漢家](名)㊀漢方の醫術を行ふ家。㊁支那にて、漢朝の帝室。「—皇薄し」。

(かん・か[鹹柯](名)志を得ざること。世に容(イ)れられざること。おちぶれたること。「—不遇」。「坎坷」。

(かん・が[閑雅](名)㊀たやびやか。えとやか。㊁土地たゞかにして景色のおもむき多きこと。

(がん・か[眼下](名)めのした。「—に見る」。

(がん・が[含呀](名)㊀口をあけること。㊁谷又は坑などの廣きこと。

(かん・かい[鑑戒](名)いましめ。てほん。かゞみ。

(かん・がい[陷害](名)姦計にかけて人を害にあ

とし又は難にあはすこと。

(かん・がい[感慨](名)物事に感じてなげくこと。

(がん・かい[眼界](名)目もて見るかぎり。

(かん・かう[勘考](名)かんがへ。ふかん。

(かん・かう[間行](名)ものびあるき。密行。

(かん・かう[刊行](名)文書を版に上(ボ)せて世に公にすること。(印行)。

(がん・かう[雁行](名)㊀空中に飛びゆく雁の行列。㊁人とはすかひに並び行くこと。「くだや。(看官)。

(かん・かく[看客](名)みて。よみて。けんぶつ。ど

(かん・かく[間隔](名)あひだ。へだゝり。

(かん・かく[扞格](名)互に相容れざること。互に相一致せざること。

(かん・かく[感覺](名)㊀感覺器により外界の刺戟を神經に傳へて腦に達し、これを感受すること。㊁不明瞭の智識。㊂さとり。のみこみ。——・き[感覺器](名)動物の體表にありて、種々なる外界の刺戟を感受する局所、即ち、觸官・味官・嗅官・聽官・視官等なり。——・しんけい[感覺神經](名)感覺器に刺戟あるとき、これを神經中樞に傳達する經路。組織は通常三層より成り、薄膜の內に髓質ありて其中心には軸索と稱する纖維貫通す、此軸索は即ち最も傳達に必要あるものにして、他は保護の用をなすものなり。——・ちゆうすう[感覺中樞](名)大腦・延髓・脊髓の稱にして、感覺神經の中樞なり、即ち、感覺神經より傳達し來る外界の刺戟を感受する所。——・ろん[感覺論=Sensualism](名)【哲】智識の根源は感覺にありとなす說にして、外界の刺戟腦に傳はりて感覺となり、此感覺審稱して、諸種の高尚なる智識を生ずとなす。

(かん・がく[漢學](名)漢文を綴り又は漢書を研究する學の總名、又、支那の漢朝時代に行はれし學問。——・しや[漢學者](名)漢學の學者。

がん・がさ[雁瘡](名)多くは脚部に發する一種の皮膚病、慢性にして容易に治し難し、年々寒時即ち雁の來る頃より發する故に此名あり。がんさう。

(かん・かち(名)固くして小さき物の觸れて出る音。——・だんと(名)杵(キ)を小さき臼の緣にあてゝかんかちと音をさせ、路上に於て春(ツ)きて賣りありく團子、多くはもろこし又は高を以て製し、これにきな粉をまぶしたるもの。

(かん・かつ[奸黠](名)わるがしこきこと。又、其人。

(かん・がふ[勘合](名)支那の明朝の頃、其交通せる諸國に往來の證として與へたるわりふ、銅製にしてこれに文字をあらせり。

かん・ふ[考](他、は下二)㊀思慮を廻らす。あもひはかる。ふかんす。㊁勘當す。とがむ。㊂とりあらぶ。きはむ。「年代國都—べからず」。

かんがへ[考](名)㊀かんがふること。かんがへたる意見。ふかん。かうかん。いけん。㊁かんだう。

——る[考](他)「かんがふ」の訛。

かんがみ・る[鑑](他)「かんがへる」。照らして見る。手本にあはして計る。(鑒)。㊁識別す。みわく。

(かんから(名、副)(名)「かんかち」に同じ。

——・だいと(名)かんかちと音のする小さき太鼓。

カンガルー[Kangaroo](名)【動】有袋類に屬する獸、南洋諸島の原野に產す、大きなるものは起坐するとき高さ六尺に達す、前肢は甚だ小形なれど、後肢は尾と共に長大にして能く跳躍す、糧物を食とし、子を生めば腹にある皮袋の中に入れて養育す。(袋鼠、長尾鼠)。

(かん・かん[名、副)㊀ひゞく聲。「—と鳴る」。㊁火などの燃(サ)んに起りたつさまにいふ語。「火が—する」。㊂金屬など極めて固きもの、相觸れて出る音。「—金をたゝく」。

(かん・かん[汗簡](名)《支那の上代にては、竹を炙りてあぶらを去り、これに文字を書きしよりいふ》文書又は記錄の異稱。

(かん・かん[侃侃](名、副)正直にして節(フシ)を曲げざるさまにいふ語。「—たる臣」。

(かん・かん(名)結(ユ)ひたる髮。又、簪(小兒の語)。

(かん・がん[汗顏](名)いたく恥ぢて顏に汗かくこと。極めて恥かしきこと。「—の至り」。

(がん・がん[巖巖](名、副)山のけはしくそばだちたるさまにいふ語。「維石—」。

「暑氣の對」。

(かん・き[寒氣](名)さむきこと。さむき時。さむさ。

(かん・き[勘氣](名)「かんだう」に同じ。

(がん・き[眼氣](名)めのやまひ。眼病。

がん・き[雁木](名)㊀船つきに設けある階段。馬頭。㊁だん〳〵はしご。階段。㊂犬の牙の如くに左右互に凸凹ありて、よく相合ふもの。「—に組む」。㊃次第を追ひて進むこと。「—ざとり」。㊄「がんぎやすりの略言。——・ざとり[雁木悟](名)頓に徹悟の境に到達するにあらずして、次第を追ひて徹悟の境に向ふこと、例へば、臨濟宗などにて、幾多の公案を經過して次第に進捗する如きこれなり。——・だな[雁木棚](名)四十八棚の一、雁木に組み合せたるもの。——・やすり[雁木鑢](名)㊀やすりの一種、太くして、目あらく、金屬をするに用ふるも

の。㊁物事の壓縮すると又は縮語するといふ語。

(かん-きら)[眼球](名) 眼に同じ。其球狀をなせるよりいふ。めだま。

(かんきら-おゆうざら)[汗牛充棟](名)《牛の汗かく程の重さと棟につかへるほどのかさとの義》書籍の甚だ多きといふ語。

(かん-ぎく)[寒菊](名)【植】菊の一種、冬期開花する故に名づく、觀賞用として栽培せらる。こがねめぬき。(珠子菊)。

(かん-きふ)[感泣](名) いたく感じて泣くこと。

(かん-きやう)[寒鄕](名) さびしきさと。

(かん-きやう)[眼鏡](名) 近眼の人が遠き物を見るため、又は遠眼の人が近き物を見るため、若しくは光輝の強きを避くるために眼にかくる具、眼を蔽ふに足るほどに切りたる楕圓形の「ガラス」の片の一雙に、鎳(ニッケル)や銀又は金などの緣及蔓を附したるを普通とす、近眼者の用ふるは凹「レンズ」にして遠眼者の用ふるは凸「レンズ」なり、又、光輝の甚だ強きを避くるためには、綠色又は暗色の「ガラス」を用ふ。めがね。

(かん-きやく)[閑却](名) 入用なきこと。

(かん-きよ)[閑居](名) ㊁閑靜なる地のすまひ。㊁ひまにて居ること。やすみゐること。

(かん-きよ)[扞禦](名) ふせぐこと。ふせぎ。

(かん-きよう)[感興](名) ㊁ふもしろみ。こゝちよさ。㊁其ものに趣味あるか意義あるかすること。即ち、美の實體の必要條件。

(かん-きよく)[好曲](名) ㊁わるだくみ。よこしま。(姦曲)。㊁わるもの。あくにん。

カン-キン[看經](名)《字の唐音》㊁經文を默して讀むこと。㊁經文を讀むこと。(讀經)。

(かん-きん)[監禁](名) 身體の自由を束縛して幽閉すること。——**-ざい**[監禁罪](名)【法】權利なくして不法に他人の身體の自由を束縛し幽閉せし犯罪。

(かん-きん)[感吟](名) ㊁俳句にて感ずべき秀作。㊁他人の詩歌を感賞して吟ずること。

(かん-きん)[閑吟](名) ゆゑづかに詩歌をくちずさむこと。

(かん-きん)[賢金](名) にせがね。

(かん-く)[甘苦](名) ㊁甘きと苦きと。㊁轉じて、人情世事の狀態。

(かん-く)[寒苦](名) 寒氣のくるしみ。

(かん-く)[艱苦](名) なやみ苦しむこと。

(かん-ぐ)[寒具](名) 寒氣を去のぐ用意。寒中の去

(かん-くつ)[岩窟](名) ㊁いはや。(石窟)。㊁不規律に、かどかどしきさまにいふ語。「—な坂」。

(かん-くてう)[寒苦鳥](名) 想像上の鳥、印度の雪山に棲み、夜に入れば寒氣になやみ悲鳴へんと思ふも、晝はこれを忘るゝといふ。

かん-く-の-あめ[寒九雨](名) 寒に入りてより九日目に降る雨、農家にて作物に利ありといへり。

かん-くび[雁首](名) 烟管(きせる)の頭、古昔のは長くして雁の首に似たりしより此名あり。(雁頸、火頭)。

かん-くび-まめ[雁喰豆](名)【植】豆(マメ)科に屬する栽培草本、種子は色黑くして形ふぢまめに似たり。(雪爲豆)。

(かん-くわ)[看過](名) ㊁見すごすこと。目をとはすこと。㊁見たばかりにて其まゝにすてもくこと。

(かん-くわ)[坩堝](名) るつぼ。

(かん-くわ)[干戈](名) ㊁たてとほこと。㊁たゝかひ。戰爭。——**をうどかす**[動干戈] 戰爭をはじむ。

(かん-くわ)[感化](名) 感じて善にうつらしむること。——**-ぢぐふ**[感化事業](名) 不良の少年などを感化し善良の人となすこと。——**-ゐん**[感化院](名) 地方長官の管理に屬し、不良少年を收容して其感化を圖る所。

(かん-くわ)[眼科](名) 眼一切の醫術。(眼療)。——**い**[眼科醫](名) 眼科の專門の醫者。めいさや。

(かん-くわい)[感懷](名) 感じたるおもひ。

(かん-くわう)[眼光](名) めのひかり。又、みるちから。——**ぢはいにさほる**[眼光透紙背] 讀書の理解力が字句以上に及ぶにいふ。

(かん-くわう-せい)[感光性](名)【化】物質の光によりて分解する性質、硝酸銀を塗りたる紙の光によりて黑變するが如きこれなり。

(かん-くわん)[感官](名) 感覺器に同じ。

(かん-くわん)[間關](名) 艱難してさまよふこと。

(かん-くわん)[看官](名) みて、よみて、けんぶつ、どく去や。「ためをなすと。

(かん-くわん)[看貫](名) 物品の貫目のかけあら

(かん-ぐん)[監軍](名) 軍隊の監督。又、其職。

(かん-けい)[奸計](名) わるだくみ。(奸謀)。

(かん-けい)[幹莖](名) 植物の上方に向ひて生長する軸部。これに葉又は枝を生ず、其位置又は外部の狀態によりて或は地中に存在して根狀をなし或は地上に現出す、狀態性質一ならずして、生活期の長短もまた種類によりて異なり。みき、くき。

(がん-けい)[岩頸]【地】岩流によりてなりたる圓錐形の丘。

(がん-けい)[巖桂](名)【植】「もくせい」の異稱。

かん-けいと[寒稽古](名) 寒中に寒氣を犯して、早朝に擊劍などを學ぶこと。

(かん-くわ)[感化](名) 感じて善にうつらしむること。——**-ぢぐふ**[感化事業](名) 不良の少年などを感化し善良の人となすこと。——**-ゐん**[感化院](名) 地方長官の管理に屬し、不良少年を收容して其感化を圖る所。

(がん-くわ)[眼科](名) 眼一切の醫術。(眼療)。——**い**[眼科醫](名) 眼科の專門の醫者。めいさや。

(かん-くわい)[感懷](名) 感じたるおもひ。

(がん-くわう)[眼光](名) めのひかり。又、みるちから。——**ぢはいにさほる**[眼光透紙背] 讀書の理解力が字句以上に及ぶにいふ。

(がん-くわう-せい)[感光性](名)【化】物質の光によりて分解する性質、硝酸銀を塗りたる紙の光によりて黑變するが如きこれなり。

(かん-くわん)[感官](名) 感覺器に同じ。

(かん-くわん)[間關](名) 艱難してさまよふこと。

(かん-くわん)[看官](名) みて、よみて、けんぶつ、どく去や。「ためをなすと。

(かん-くわん)[看貫](名) 物品の貫目のかけあら

(かん-ぐん)[監軍](名) 軍隊の監督。又、其職。

(かん-けい)[奸計](名) わるだくみ。(奸謀)。

(かん-けい)[幹莖](名) 植物の上方に向ひて生長する軸部。これに葉又は枝を生ず、其位置又は外部の狀態によりて或は地中に存在して根狀をなし或は地上に現出す、狀態性質一ならずして、生活期の長短もまた種類によりて異なり。みき、くき。

(がん-けい)[岩頸]【地】岩流によりてなりたる圓錐形の丘。

(がん-けい)[巖桂](名)【植】「もくせい」の異稱。

かん-けいと[寒稽古](名) 寒中に寒氣を犯して、早朝に擊劍などを學ぶこと。

(かん-げき)[間隙](名) すきま。ひま。「と、感奮。

(かん-げき)[感激](名) 感じて意氣おこりふるふ

(かん-けつ)[簡潔](名) 文章などの簡略にして要領をつくせること。つゞまやかなること。くだ〳〵しかちぬと。(簡固)。

(かん-けつ)[汗血](名) 駿馬が遠路疾走して、あせに血のまじり出ること。——**せんり**[汗血千里] 駿馬が汗血を流しながらも、尙は疾走して遠路に達するといふこと。

(かん-けつ)[間歇](名) 時をへだてゝ起ること。——**せん**[間歇泉](名) 一定の時に水蒸汽及熱水を噴出する溫泉。——**-ねつ**[間歇熱](名)「マラリヤ」性の熱病により、患者の身體に時を定めて發熱すること、おこり等これなり。——**-ねでん**[間歇遺傳](名) 祖先よりの遺傳が、一代又は數代を隔てたる子孫に發すること。

(がん-けつ)[巖穴](名) いはのほらあな。——**の-ぢ**[巖穴士](名) 世をのがれて山野などに隱れたる人。

(かん-けん)[寒喧](名) さむさとあたゝかさと。かんだん。——**をおよす**[叙寒喧] 時候のあいさつをなす。

(かん-けん)[勸檢](名) 考へまちぶること。檢閱。

(かん-げん)[諫言](名) 諫むること。諫むる言。いさめ。「—を用ひず」。「まいことば。「人を欺く—」。

(かん-げん)[甘言](名) 人の氣に入る巧なる言。う

(がん-けん)[眼瞼](名) 眼珠の上下を被ふ皮、上部のものは睫綿す、よりて眼を閉ぢるとを得。

かん-こ[神子](名)「かみこ」の音便。

(かん-こ)[諫鼓](名) 古昔、人民の上へ對して諫言する便を圖り、官廳に置きし鼓、諫言せんとする人民は、これを打ちて其意を通じたり。

(かん-こ)[簡固](名)「かんけつ」(簡潔)に同じ。

(かん-こ)[鹹湖](名)【地】鹹水を湛(タ)ふる湖、すべて排水口を有せざるもの。

(かん-ご)[監護](名) 監督し保護すること。

(かん-ご)[看護](名) かいはう。みとり。看病。

(かん-ご)[閑語](名) ㊁靜かなる物語。いそがぬ談話。㊁空しく時間を費す談話。むだばなし。

(かん-ご)[漢語](名) 漢字を音讀したる語。又、漢字にて綴りたる語。

(かん-ご)[含胡](名) ㊁愛の口に含まれてよく聞えざること。㊁はつきりしたる決答なきこと。

(かん-とう)[甘汞](名) 通常白色に稍や黃色を帶びたる粉末、醫藥殊に下劑に供せらる、古來伊勢國にて製出す、其法は食鹽と明礬との混合物に多量の水銀を加へ、これを土製の坩堝に入れて熱すれば昇華して半透明の結晶體を得。

(かん-とう)[箝口](名) ㊁口をふさぐこと。言を發せざること。㊁言論の自由を束縛すること。

(がん-とう)[眼孔](名) ㊁眼球の合る孔。めのあな。㊁見識の範圍。「—小なり」。

(かんとう-ぢゆす)[寒紅縮子](名) 一種の縮物「ガス」絲と綿絲とを交(織り、光澤をつけて唐縮子をまねたるもの。

(かん-とうばい)[寒紅梅](名)

花は八重にして紅色なり、寒中に咲く。

かん-どえ[寒肥](名) 寒中に想物に施す肥料。

(かんど-きむぢや)[監護務者](名) 未成年者又は精神病者に對して、其監護の義務を負ふ者。

(かん-とく)[寒國](名) きむき國。

(かん-とく)[監獄](名) 自由刑に處せられたる犯罪人又は刑事被告人を收容して、拘禁留置する所。ろうや。ひとや。(牢獄)。——**-きよく**[監獄局](名) 司法大臣の意思を受け、監獄に關する一切の事項又は假出獄・免幽閉・監視假免・出獄人保護等に關する事項を掌る司法省の一局。——**-ぢよ**[監獄署](名) 監獄のやくぢよ。「鍛冶橋の—」。

(かん-とくさ-し)[紙子臭](形、一)(くさき) 紙類・綿類・絲類などの火に焦(コ)げたる臭あり。きなくさし。かこくさし。(紙焦、焦臭)。

(かん-ご-そつ)[看護卒](名) 軍隊の衛生部又は病院に附屬して、兵士の病者・傷者を看護する兵卒。

(かん-ご-ちやう)[看護長](名) 看護卒を取締(シマリ)る下士官。

(かん-ど-どり)[閑子鳥](名)【動】(「かっこうどり」の訛)「よぶこどり」に同じ。

(かんど-にん)[看護人](名) 病傷者を看護する人。

(かんど-ふ)[看護婦](名) 病傷者の看護をつかどる婦人。特に、內務省の免許を受けて、病傷者の看護を職業とする婦人。

かん-とり[寒垢離](名) 寒中に垢離を行ふこと。

かん-どゑ[寒聲](名) 寒中に謠をうたひ又は經を讀みなどして、聲をならすこと。

カン-どゑ[甲聲](名) 甲ばしりたる高き聲。

(かん-さ)[奸詐](名) わるだくみ。いつはり。

(かん-さ)[勘査](名) つきあはしてとりあらぶること。くりかへしてとりあらぶること。

(かん-さ)[監査](名) 監視し檢査すること。

(かん-ざい)[寒劑](名)【理】溫度を著しく降下せしむるに用ふる混劑、普通は鹽と砕氷との混合にして、其融解する際に融解熱を要するを以て、溫度著しく降下するなり。

(かん・さう[ー ソ]【檻倉】(名) ひとや。らうや。
(かん・さう[ー ソ]【諫爭】(名) ものを犯して屈せずにいさむること。「ものひ。
(かん・さう[ー ソ]【感想】(名) 感じて起りたる思想。
(かん・さう[ー ソ]【政爭】(名) 決心して爭ふこと。
(かん・さう[ー ソ]【瘠瘡】(名) 梅毒によりて、陰部次第に潰亂する瘡。
(かん・さう[ー ソ]【乾燥】(名) ㊀湿氣又は水氣なきこと。かわくこと。ひること。㊁趣味なきこと。おもしろみなきこと。——・しつ【乾燥室】(名) 物を乾かすために特別の設置をなせる室。「材木の—」。——・くわ【乾燥果】(名) 【植】果皮の乾燥せる果實、例へば、堅果即ち栗の類、麹果即ち椎の類、頴果即ち稻の類。——・ちよくぶつ【乾燥地植物】(名) 【植】乾燥せる土地に適する植物、厚き肉質の葉を具するもの多し、地衣類の如きは岩石上に着生せる乾燥地植物なり。——・むみ【乾燥無味】(名) 詩文などが、文句の修飾を欠き又は意味の含蓄に乏しく、讀みて何等の趣味なきこと。——・れうはふ【乾燥療法】(名) 鉄劍の治療に、甚しく穢れ若しくは化膿せるもの、外は、洗滌せずにたゞ拭拭して、繃帶を施すこと。
(かん・さう[ー ソ]【肝臟】(名) 【生】腹腔の右上側橫隔膜の下際にある赤褐色の消化腺、胃の上面を蔽ふ、上部は凸隆し下部は凹陷す、血液中より膽汁を醸造しこれを膽嚢に送る。
(かん・さう[ー ソ]【甘草】(名) 【植】豆(マメ)科に屬する宿根草、高さ二三尺許、葉は互生し形楕の葉に似て、莖と共に毛茸を有す、花は蝶の形をなし豆の花に似て淡紫色を呈す、根は黄色にして甘味を有し、用ひて藥劑とす、又、其汁を取りて物に味を付くるに用ふ。あまき。あまくさ。あまづる。(質甘、美草)。
(かん・さう[ー ソ]【雁瘡】(名) 「がんがさ」に同じ。
(かん・さう[ー ソ]【贋造】(名) 贋(ニセ)せてこしらふること、又、にせもの。偽造。——・ぶつ【贋造物】(名) 贋せてこしらへたる物。にせもの。
(かん・さく【贋作】(名) がんざう。
(かん・さけ【燗酒】(名) 燗をしたる酒。かんをゆ。
(かん・さし【簪】(名) 《髮挿(カミ)の音便》 ㊀冠の附屬品、巾子(コジ)のもとに入れ、中のもとゞりを支ふるもの。㊁婦人の頭髮にさす「櫛の裝飾品、種類甚だ多し。「又、其人。めつけ。
(かん・さつ【監察】(名) 人の所業を監査すること。
(かん・さつ【鑑札】(名) 或營業を許可したる證として、官より下附する印符ある木札。「免許札」。
(かん・さつ【賣札】(名) 賣買の紙幣。にせさつ。
(かん・さまし【燗冷】(名) 冷えたる燗酒。
(かん・さ・やく【監査役】(名) 株式會社又は株式會社の機關の一、會社の業務を監督し檢査する ものにして、株主總會に於て株主中より選任す。
かん・さらし【寒晒】(名) 食物などを寒中に晒して製すること。(寒製)。
かん・さらへ【寒復習】(名) 寒中に早朝の寒氣を犯して、歌曲などの復習をなし聲をならすこと。
(かん・さん【閑散】(名) 動務なきこと。用事なきこと。ひま。「官を退きて—なり」。
(かん・さん【汗疹】(名) あせとり。はだぎ。
(かん・さん【寒酸】(名) まづしきこと。さむしきこと。
(かん・さ【諫止】(名) いさめて其事をもひとゞまらすること。
(かん・さ【漢詩】(名) 支那の詩。からうた。和歌の
(かん・さ【監視】(名) ㊀とりまもりまらぶること。きびしく見まもること。又、にせもの。偽造。——・ぶつ【贋造物】(名) 贋(ニセ)せてこしらへたる物。にせもの。
(かん・さ【敢視】(名) 見おろすこと。
(かん・さ【敢死】(名) 必死。決死。
(かん・さ【甘死】(名) 死ぬるを厭はぬこと。
(かん・さ【漢字】(名) 國字に對して支那文字の稱、其多くは形象文字なり、上古蒼頡といふ人、鳥跡を觀て發明したるものといふ、漢學の傳來以後、我國にてこれを使用すること年を遥ひて多く、なほこれを用ふ。
(かん・さ【幹事】(名) ㊀其事を總管すること。又、其人。㊁團體などにて、其事務を司どる人。
(かん・さ【監事】(名) ㊀前條(二)に同じ。㊁法人の機關の一、其財産又は業務を監査するもの。
かん・じ【感】(名) ㊀感受すること。感覺。㊁知覺すること。會得。「—の鈍きやつ」。㊂うつり染むこと。感じ動くこと。㊃きゝめ。「藥の—」。
かん・じ【寒】(名) さむさ肌に沁みわたること、さむさ。
(かん・さ【雁歯】(名) 梅上に橫たへたる材木の段。
(かん・さ【眼字】(名) 漢詩にて、五言の第三の字及七言の第五の字の稱、此字は、其句中の眼目にして最も推敲を要するものなればいふ。
(かん・さ【雁字】(名) ㊀かりのたまづさ。㊁かりの空中に飛ぶ列が、時に字形をなすよりかりの列にいふ語。——・あらさ【雁字驚梭】(名) 雁の空中に飛ぶ列を字形にたとへ驚の機間をとびかふさまを織機の梭(ヒ)にたとへなどして、詩文の字句を虚飾すること。をつゝみまもること。㊂法三角綱刑の一、犯罪人が主刑を終へし後、これに缺きて一定の期間内に執行する行政處分にして、其期間内は、居住轉轉の自由を禁じ且警察官をして其行狀を監視せしめらる。
(かん・さ【寒士】(名) 貧しきさむらひ。
(かん・さ【敢視】(名) 見おろすこと。
(かん・さ【敢死】(名) 必死。決死。
(かん・さ【甘死】(名) 死ぬるを厭はぬこと。
(かん・さ【漢字】(名) 國字に對して支那文字の稱、其多くは形象文字なり、上古蒼頡といふ人、鳥跡を觀て發明したるものといふ、漢學の傳來以後、我國にてこれを使用すること年を遥ひて多く、なほこれを用ふ。

かん・じ・いる【感入】(自、ら四) 深く感ず。
(かん・さう【含嗽】(名) 「がんそう」に同じ。
(かん・さ・かめん【監視假免】(名) 【法】監視に附せられたるものが、改悛の狀ある場合に、司法大臣が假に其監視を免ずる行政處分。
(かん・さき【鑑識】(名) 物事を見分くるにたちき、趣味を見得るちから。めきゝ。「蓋の—」「文の—」。
かん・じき【檻】(名) 雪の多き所にて、雪に上(ウヘ)り又はは まりこみなどせぬやうにはく風物。(種、履)。
(かん・さき【眼識】(名) 見分くるちから。めきゝ。
(かん・さげふ【閑事業】(名) 役にたゝぬわざ。むだのわざ。と。
(かん・さつ【看疾】(名) 看病。かいはう。
(かん・さつ【閑日】(名) ひまの日。用なきふき。
(かん・さつ【眼疾】(名) がんびやう。めやみ。
(かん・さつげつ【閑日月】(名) ㊀ひま。まやひ。㊁物事に饒饒(ヒマ)せざる度量。又、餘裕ある思慮。「英雄の胸中自ら—あり」。
(かん・さ・や【感謝】(名) ありがたく感じて、謝意を表すること。おれいをいふこと。「—の至り」。
(かん・さ・や【甘蔗】(名) 【植】さたうきび。
(かん・さ・や【檻車】(名) 囚人を載する車、車上に牢獄の設置あるもの。「ろして射擊すること。
(かん・さ・や【敢射】(名) 高處より低處へ向けみ
(かん・さ・や【間者】(名) まはしもの。ものびもの。
(かん・さ・や【奸邪】(名) よこしま。又、よこしまなるもの。(姦邪)。
(かん・さ・やり[ー ヨウ]【癇症】(名) ㊀癇のやまひ。㊁癇のある身體、少しの事にも激する神經質。(癇症)。
(かん・さ・やう[ー ヨウ]【妍商】(名) 惡だくみする商人。
(かん・さ・やう[ー ヨウ]【感賞】(名) ㊀感心してほめたゝふること。㊁功をめて賜はる褒美(ハウビ)。
(かん・さ・やう[ー ヨウ]【感情】(名) ㊀おもはく。こゝろもち。「人の—を惡くす」。㊁【心】快樂と苦痛との感、精力の開係によるものにして、精力の活動增進するときは快樂を感じ、精力の活動衰弱するときは苦痛を感ず、常に全體を總合統一して現ずるものとす、これを分ちて肉體的・知的・權力的・名譽的・獻身的・推想的・美的・生命的・道德的等とす。
(かん・さ・やう[ー ヨウ]【干城】(名) 《たてとゑろとの義》國家の防禦、又、其任にかなへる武夫。
(かん・さ・やう[ー ヨウ]【感狀】(名) 軍功を感賞して、大將より賜はる褒美(ハウ)の書狀。勳狀。
かん・さ・やう・が[ー レウ]【乾生薑】(名) ほしたる薑(ハジカミ)の根、藥品に供せらる。かんきやう。
(かん・さ・やく【癇癪】(名) 癇の病氣。又、癇の性質。「—を起す」。——・たま【癇癪玉】(名) ㊀かんをやく。又、いきどほり。㊁小兒の玩具、地に拋てば破裂するやうに製したる小球。——・もち【癇癪持】(名) 癇癪ある性質、又、其性質の人。「表したる書狀。
(かん・さ・や・おやり[ー ヨウ]【感謝狀】(名) 感謝の意を
(かん・さ・ゆ【燗酒】(名) かんざけ。
(かん・さ・ゆ【看守】(名) ㊀看まもること。又、其職の人。㊁監獄にて、囚徒を看守する官屬。
(かん・さ・ゆ【監守】(名) ㊀物事をとりまもりまもること。又、其職の人。㊁宮内省主殿局及掃部局支廳の屬官の一。——・たり[ー ヨウ]【監守盜】(名) 【法】官吏若しくは公吏が、自己の監守せる金穀などを竊盜若しくは私に消費すること。
(かん・さ・ゆ【感受】(名) 感覺神經によりて外界の刺戟を知得すること。直觀的に對象を受容すること。——・せい【感受性】(名) 【心】感覺の能又は直觀の力、天性・生育・癡鈍・平均等の事情によりて組織せらるゝものとす。
(かん・さ・ゆつ【間出】(名) 人目をさけて出行くこと。
(かん・さ・よ【寒晷】(名) ㊀さむさとあつさと。㊁冬と夏と、「三たび—を經」。
(かん・さ・よ【漢書】(名) 支那の書物。漢字にてえるしたる書物。カラぶみ。「漢籍」。
(かん・さ・よ【甘薯】(名) 【植】さつまいも。「地位」。
(かん・さ・よ【閑所】(名) ものづかなる場所。又、ひまの
(かん・さ・よ【閑所】(名) せついん。(雪隱)。
(かん・さ・よ【姦所】(名) 男女の相姦する場所。
(かん・さ・よ【雁書】(名) かりのたまづさ。
(かん・さ・よう【岩乘】(名) ㊀馬の特にすぐれて逞者なること。㊁構への堅固なること。ぢやうぶ。「—な道具」。㊂體の壯健なること。すこやか。「—な老爺」。
(かん・さ・よく【寒食】(名) 陰曆にて、冬至より大抵百十五日後頃に風雨ある節、支那の古昔に、當日は火食せざりしより此名あり。
(かん・さ・よく【旰食】(名) 人君が政治に志を傾け暇を惜み、おそく食事に就きたまふこと。
(かん・さ・よく【間食】(名) 定まりたる食事と食事との間にものを食すること。あひだぐひ。
(かん・さ・よく【間色】(名) 青・黄・赤・白・黑の五色又は赤・黄・青の三色以外の色、又、二種以上の色の配合によりて成る色。
(かん・さ・よく【感觸】(名) 外界の刺戟に觸れ感ずること。——・き【感觸器】(名) 感覺器に同じ。
(がん・さ・よく【顏色】(名) ㊀顏の色あひ。かはいろ。「一實なり」。㊁かほつき。かはばせ。——な

し[無顔色] 恥ぢ又は驚きて顔青ざむるにいふ。又、面目を失するにいふ。——をうかがふ[候顔色] 顔いろをうかゞふ、即ち、其人の機嫌をはかりてものするにいふ。——をうしなふ[失顔色] 「一名。」

(かんぞよ・ぞん[寒墓針](名) 「かんだんけい」の

かんぞよ・よみ[漢書讀](名) 漢籍よみ。

(かんぞん[感心](名) 心に感じ入ると。(感服)。

(かんぞん[寒心](名) 肝をひやすと。心におそれを抱くと。ぞっとすると。

(かんぞん[甘心](名) ㊀我が思ふがまゝにすると。㊁満足すると。不平なきと。

(かんぞん[奸臣](名) 心のねぢけたるけらい。わるだくみする家人。(佞臣)。

(かんぞん[艱深](名) 意味を悟るに難きと。むづかしきと。「一なる文」。

(かんぞん[奸人](名) 心のかたまりくねぢけたる人。ねぢけもの。わるもの。

(かんぞん[閑人](名) 用なき人。ひまぞん。

(かんぞん[肝心](名) 《肝と心とは、人間の身に必用なりといふ意より轉ず》肝要又は必用なること。

(かんぞん・より(名) 「かんぜんより」の訛。

かんぞ・する[姦](他、さ變) ㊀婦人を犯す。「まる。」

かんぞ・する[監](他、さ變) きをつく。とりえ。

かんぞ・する[緘](他、さ變) 封ず。「書狀を—」。

かんぞ・する[燗](他、さ變) 酒の燗をなす。あたゝひ。

かん・する[閑](他、さ變) 他人の仲をさく。

かん・ずる[感](自、さ變) ㊀物の氣に觸れ通ず。「電氣に—」。㊁感覺を起す。㊂ために情動く。ために心おこる。㊃深く心に銘す。「恩に—」。㊄感心す。かんじいる。

かん・ずる[寒](自、さ變) 寒さ身に染む。「—」。

かん・ずる[勘](他、さ變) 勘當す。

がん・すう[函數](名) 【數】甲數が乙數の變化に從ひて變化するとき、乙數に對して甲數の函數なり。例せば、$s=2t^2+3$ にて、s は t の函數なり。

(かん・する[鹹水](名) ㊀鹹味を含有するえほみづ。たはからき水。㊁うしほ。海水。

(がんする・さんくわてつ[含水酸化鐵](名) 「かってつくわう」(褐鐵鑛)に同じ。

(かんする・せき[寒水石](名) ㊀【鑛】大理石の一種。固くして團はしく、彫刻・装飾などに用ふ。㊁雲のにがりを凝結せしめたるもの、透明にして水晶の如し、眼病の藥用とす。(凝水石)。「と。」

(かん・せい[監製](名) 監督して製造せさせたること。

(かん・せい[寒製](名) 寒中の製造。かんざらし。

(かん・せい[陷阱](名) ㊀獣などをおとしいれ捕るために設けたる穴。おとしあな。(陷穽、坎阱)。

(かん・せい[間隙](名) いびきの聲。「一雷の如し」。

(かん・せい[閑靜](名) ものさびかなること。「一なる地」。(幽靜)。「ま。」

(かん・せい[寒聲](名) さむく覺ゆる聲。ふるへごゑ。

(かん・せい[寒生](名) まづしき書生。

(かん・せい[汗青](名) 《支那の古代にては、青竹を火にて炙り、これに文字を書きしよりいふ》史書又は記錄の異稱。留得丹心照—」。

(かん・せい[感性](名) 感覺の能。直觀の力。

(かん・せい[間稅](名) 「かんせつぜい」に同じ。

かんせい・ぬひ[寒清縫](名) 「かんせんぬひ」に同じ。

(かんせい・ゆ[乾性油](名) 酸素を吸收して乾燥せる油、亞麻仁油・胡桃油の如きこれなり。

(かん・せき[漢籍](名) 支那の書籍、又、漢字のみにて記したる書籍。カラよみ。——・よみ[漢籍讀](名) ㊀漢籍を讀む方法、即ち、返點又は送假名などをつけて漢文を讀むと。かんぞよよみ。カラよみ。㊁漢學者。

(がん・せき[岩石](名) ㊀いは。いし。いはほ。㊁【地】地球の外皮を構成するものにして或は一種或は多種或は硬軟或は粗密の鑛物の集合せるもの。——・どうふ[岩石豆腐](名) 豆腐を固く燒きて昆布に包み、これをよく煮たるもの。——・らん[岩石蘭](名) 【植】「せきらん」に同じ。

(かん・せつ[間接](名) ㊀間に或ものを隔てゝ其ものに對すること。㊁とはまはし。とはまはり。——・こくぜい[間接國稅](名) 間接稅の性質なる國稅、即ち、酒造稅・醬油稅等をいふ。——・ぞげき[間接射擊](名) 丘陵山稻などの障碍物を隔てゝ、其さきにあるものを射擊すること。——・ぜい[間接稅](名) 稅を納むるものと稅を負擔するものと異なる租稅、例へば、酒造稅又は醬油稅の如く、稅を納むるものは製造人なれど、其稅の額は酒又は醬油の賣價に組みこみあるが故に、實際に其稅を負擔するものは購買者なるが如し。——・せんきよ[間接選擧](名) 一般より選擧したる被選擧人が、更に目的の選擧をなすこと。

(かん・せふ[干涉](名) ㊀かゝりあひ。くわんけい。㊁立ち入りて其物事にたづさはること。㊂其任にあらざるものが、特に關係すること。「選擧—」。

題」。㊃【印】二つの波が相重なりて振幅の或は大きく或は小さくなり、異なる光が重なりて種々の縞を作り、若しくは異なる音が重なりて唸(ナリ)を生ずるが如き現象。——・きゆうき[干涉主義](名) 政府が民間に對し又は父兄が子弟に對し、若しくは屋主が被屋者に對して、何事によらず、ふかく立ち入りて關係すること。

(かん・せん[汗腺](名) 皮膚にありて、體中より汗を分泌して、これを體外に排出する作用を營む腺。

(かん・せん[幹線](名) 幹部即ちもとゝなる線。支線の對。「—鐵道」。

(かん・せん[酣戰](名) 敵我入り亂れて戰ふと。「又、戰爭のまさかり。」

(かん・せん[艦船](名) 軍艦と船舶と。

(かん・せん[感染](名) 他のものに感じて其如くなること。うつること。まみこむと。

(かん・せん[間然](名) 異議あると。よしあしをいふべきと。「—する所なし」。「目前」。

(がん・せん[眼前](名) 今の時。この所。めのまへ。

かん・せん・ぬひ[閑清縫](名) 絲を現はして、打ちゝがへたるからげぬひ、袋物などの端に行ふ。

かん・ぜん・より[簡箋綻](名) 日本紙を細く切り、絲の如くに縒(ヨ)りたるもの。かうより。こより。かんぞんより。(紙線、紙索)。

(かん・そう[閑窓](名) ものさびかなるまど。

(がん・そう[含嗽](名) うがひすること。——・さい[含嗽劑](名) うがひするためのくすり。くゝみぐすり。うがひぐすり。

(かん・ぞく[奸賊](名) にくむべき惡逆の徒。ぎやくぞく。それもの。(逆徒)。

(かん・そん[旱損](名) 旱(ヒデ)のために生じたる田畑の損耗。ひでりのそんじ。水損の對。

(かん・そん[寒村](名) ㊀貧窮なる村。さびしき村。「—僻邑」。㊁自家の居村の謙稱。

(かん・たい[簡怠](名) おこたり。ぬかり。なはざり。あやまち。

(かん・たい[寒帶](名) ㊀【地】地球の南北兩極より緯線各二十三度半の線內、即ち、赤道より緯線南北各六十六度半より兩極までの線內の稱、此帶內には、時に太陽の地下に沒せざる永晝を生じ、又、時に太陽の地上に現れざる永夜を生ず。㊁【植】森林植物帶にて、溫帶以北の稱。——・よくぶつ[寒帶植物](名) 【植】寒帶に生ずる植物、即ち、矮小なる禪木・杜松・楊柳等の灌木、及苔蘚類・地衣類に屬する植物等これなり。

(かん・たい[艦隊](名) 軍艦二隻以上を以て編制したるもの、稱、時としては、驅逐艦・水雷艇・工作船等を附屬す。又、驅逐艦二隻以上の編制にもいふとあり。——・きれいくわん[艦隊司令官](名) 一艦隊の統率をつかさどるもの。——・きれいちやうかん[艦隊司令長官](名) 二個艦隊以上を聯合したるもの即ち聯合艦隊の統率者、天皇に直隸して、海軍大臣の命を受け所管の軍政を處理す。

(がん・たい[岩臺](名) 【地】岩流の手かにひろがりたるもの。

(かん・たう[撼蕩](名) ふるひ揺(ヨ)かすと。又、ふり揺(ヨ)くと。「樹木を—す」。

(かん・たう[勘當](名) ㊀規則に當てゝ罪を定むること。㊁目うへの氣に入らずして、其許(モ)を追ひ出さゝと。かんき。かんぞ。(勘氣)。「ぬけみち。かくれみち。わきみち。(字の唐音)。㊂「がうたう」に同じ。——・ガン・ダウ[強盜](名) 「ガンダウチヤウチン」の略言。——・がへし[強盜返](名) 芝居にて、舞臺を覆へし其狀態を更に一變すること。——・チヤウチン[強盜提灯](名) 鋼板又は鐵葉製の酒鍾形の外郭の內に、蠟燭をさす所を縱橫上下に回轉すべくつくりたる提灯、先方を照せば我方へは光さゝず、一方へのみ光のさすやうの裝置のもの。——・づきん[強盜頭巾](名) 目ばかり出して他の部分はすべて包みかくす頭巾。

[ンチウヤチウダンガ]

++かん・たち[神達](名) 神々。

++がん・たち(名) 【植】「さるとりいばら」の一名。

++かん・たち・べ[上達部](名) 古昔、三位以上の殿上人の稱。かんだちめ。「ど。」

++かん・たち・め[上達部](名) 「かんだちべ」に同じ。

(かん・だ・ひ[乾打碑](名) 灰墨に蠟を混じて墨の如くに製したるもの、紙を文字又は圖畫を彫刻しある石碑の面にあて、これを以て其紙面を摺り、石碑の文字又は圖畫を寫すに用ふ。つりがれずみ。

++かん・たまご[寒玉子](名) 鶏が寒中に產みたる玉子、通常のものより滋養分多しといふ。

がん・だれ[雁垂](名) 漢字のかんむりの名、厚・厖などの字の上部にある厂の字の稱、もと雁を略して厂と書きしより此名あり。

(かん・たん[肝膽](名) ㊀きもといと。㊁こゝろ。心中。——・きむし[肝膽寒](名) あそれをいだく。おそれてぞっとす。——をくだく[碎肝膽](名) 智能のあらん限りを盡くすにいふ。——をひらく[披肝膽](名) こゝろのおくそこをうちあく。

(かん・たん[邯鄲](名) 小唄の名。又、謠曲の名。

(かん-たん[感歎](名) 感心して賞美すると、「—なゝめならず」。
(かん-たん[簡單](名) 簡略。つゞまやか。(簡短)。
(かん-だん[閑談](名) ㊀えづかなる物がたり。ゆるやかにする話。「—歎到」(閑話)。㊁むだばなし。
(かん-だん[寒暖](名) 寒きと暖かきと。
(かん-だん[間斷](名) あひだ。たえま。きれめ。「—なく發射す」。
(がん-だん[岩團](名) 【地】不規則なる岩石の團塊。
(かん-だん-けい[寒暖計=Thermometer](名) 溫度を計る器、通常用ふるものは、水銀を入れたる「ガラス」球に、目盛ある「ガラス」の毛細管を接(ナ)ぎたるものにして、其水銀の上下する程の目盛を讀みて溫度を知るなり、氷の溫度を氷點といひ、水の沸騰する溫度を沸騰點といふ、其目盛に攝氏・華氏・列氏の三種ありて、攝氏のは、氷點を零度とし沸騰點を百度とし、華氏のは、氷點を三十二度とし沸騰點を百二十二度とし、列氏のは、氷點を零度とし沸騰點を八十度とせり。(寒暑針、驗溫器)。
(かん-たん-ぶ[感歎詞](名) 【文法】喜怒哀樂等、情に感ずるときに發する一種の語、ものかるべき意味無く、其感情を其音調にあらはす、例へば、「あら」や「あゝ」や「はゝ」「あや」などの如し。(感動詞、間投詞)。
かん-たん-ぶ[邯鄲師](名) 旅客の睡中をうかゞひ其懷中物などをぬすむもの。まくらさがし。
かんたん-の-あゆみ[邯鄲歩](名) 《支那の邯鄲といふ處に行きて、舞ひの足どりを學びし人が、其足どりのよく出來ずして、其上に故國の舞ひの足どりをも忘れたりといふ故事に出づ》學びの道の中途はんぱにして何等の効なきにいふ。
かんたん-の-まくら[邯鄲枕](名) 《支那の邯鄲といふ處にて、盧生といへるもの、某仙人より富貴を夢み得たといふ不思議の枕を借りて寢たるに、果して幾年の富貴を極めたる夢を見たりしが、夢覺むれば初めに炊ぎかけし黄粱がまだ熟せざりきとの故事に出づ》富貴のいとはかなきと又はきめてはかなき物事にたとへいふ。
かんたん-の-ゆめ[邯鄲夢](名) 前條に同じ。
(かん-ち[妄智](名) よこしまなる智識、ねぢけたる才能。(邪智)。
(かん-ち[閑地](名) ㊀ものさびかなるとち。㊁職務いそがしからざる地位、又、職務なき身分。
(がん-ち[眼一](名) 《鎭治(チヤス)の祖天目一(ヒトツ)神のかためなりしより出づ》めっかち。かため。(片眼、隻目)。
(かん-ちく[寒竹](名) 【植】竹の一種、高さ五六尺、寒中に筍(ノタ)を生ず、節細かし、ふときものは杖などにす。紫竹、雪竹、篁竹)。
(かん-ちく[漢竹](名) 【植】竹の一種、女竹に似て節高く幹細し、もと支那より舶來したるものといふ。かはたけ。——-の-だい[漢竹臺](名) かねづく、まうけづはたけのだいに同じ。
(がん-ちく[含蓄](名) ㊀ふくみもつこと。㊁意味の淺薄ならざること。
かん-ちやら[艦長](名) 一軍艦の指揮統率をつかさどる人。
(かん-ちやら[翰長](名) 書記官長の異稱。
(かん-ちやら[勘定](名) ㊀考へ定むること。㊁金高又は員數の計算。㊂仕拂ふ金高。——-かた[勘定方](名) 金錢の出納の受持。くわいけいかた。——-だか-し[勘定高](形、一) 金錢の出納又は物品の賣買等に關して、算當からし。——-づく[勘定盡](名) かねづく、まうけづく。——-ぶぎやう[勘定奉行](名) ㊀古昔、金穀の出納をつかさどりし武家の役名。㊁德川時代に、金穀の出納及租稅・戶籍・裁判などをつかさどり、かねて遠國奉行・郡代・代官などを支配せし役名。「かんのうち」。
(かん-ちゆう[寒中](名) 小寒と大寒との總稱。
(かん-ちゆう[瘴中](名) 瘴と中氣と併發したる
(かん-ちゆう[閑住](名) ものさびかなる住居。「病」。
(がん-ちゆう[眼中](名) ㊀眼のうち。眼のさま。「—冷し」。㊁認むる所。見る所。「—の人」。——-びとなし[眼中無人] 自ら地歩を高むると高く、人を人とも思はざるにいふ。
(かん-つう[感通](名) ㊀感じひゞくこと。㊁我一念を先方が感ぜ受くること。
(かん-つう[姦通](名) ㊀男女のみだりに情を通ずること。㊁有夫の婦人が、其夫にあらざる男子と淫事を行ふこと。いうふかん。——-ざい[姦通罪](名) 【法】姦通の犯罪、其婦人及其相手の男子共に犯罪者にして、本夫の告訴に待つものなり。
かん-づ-くぐけ[感附](自、カ四) 考へつく。氣がつく。こゝろづく。「かんづきて油斷せず」(勘付)。
かん-づくり[寒製](名) 寒中の製造、又、其物。
++かん-つどひ[神集](名) 神のつどひあつまること。
++かん-づまり[神駐](名) 神のとゞまること。「と」。
かん-づる[海金沖](名) 【植】「かにぐさ」に同じ。
(かん-てい[鑑定](名) ㊀めきゝ。みさだめ。(審査)。㊁【法】裁判所が刑事訴訟にて、犯罪の性質・方法又は結果を分明にするため、特殊の學藝に熟する人に、其現前の事實に對する意見を聞くこと。又、民事訴訟にて、證書又は物件等の眞僞などに關し、其道に長じたる人の意見を聞くこと。——-にん[鑑定人]

(名) 鑑定をする人。又、鑑定を命ぜられたる人。
カンテイラ(名) 《カンテラ》に同じ。
(かんてい-りう[勘亭流](名) 書體の一、芝居の番附などを書くに用ふるもの、江戸中村座の手代勘六より創まるといふ。「言」。
(かんてき[名) 《ちりん》の一名。(京阪地方の方言)。
(かん-でき[陷溺](名) ㊀おちいり溺るゝこと。㊁酒色などにおぼれすきむこと。㊂窮地におちいること。又、窮地におとしいるゝこと。「人民の—」。
(かん-てふ[間諜](名) ものびのもの。まはしもの。たんてい。(探索者、探偵)。
カン-テラ(名) 《ポルトガル語Candeia、燭臺の義》鑛業又は銅業にてつくり、石油を盛り終を心として火を點ずるもの。
(かん-てん[旱天](名) ひでりのそら。夏のそら。
(かん-てん[寒天](名) ㊀きむそら。㊁一種の食品、ところてんを晒(ラ)したるものにして、半透明の色をなす。——-ぼん[寒天版](名) 一種の印刷版、晒(ラ)したる寒天に、「リスリン」及さらし膠(ニカ)を混じ、これを煮て平面の盤に延べつくりたるものにして、讀き「インキ」を以て印刷せんとする文字又は圖畫を描きたる紙の面を印して後、印刷す。
(かん-でん[間田](名) ㊀租稅をのがれてある田。㊁耕作せず又は植付せざる田。
(かん-でんち[乾電池](名) 【理】液體を用ひず固體及粘體を用ひて製したる電池、普通のものは、ルクランシ」の電池を改造したるものにして、礦砂の讀液を浸せる石膏末と過酸化「マンガン」とを亞鉛器中に入れ、中に炭素の棒を立てゝ、炭素を陽極とし亞鉛を陰極としたるもの。
(かん-と[奸徒](名) わるものども。ふれもの。
(かん-と[漢土](名) 支那の稱。もろこし。
(かん-ざう[竿頭](名) 竿のさき。「百尺—」。
(かん-ざう[感動](名) ふかく心にふみて感ずること。物事に感じて起る急激にして怪忽なる精神の興奮。「—して泣く」。「へ」。
(がん-ざう[巖頭](名) いはのてはな。いはのうへ。
(がん-ざう[岸頭](名) 岸のほとり。埠のうへ。
(がん-ざう[龍燈](名) 「ガンダウチヤウチン」の略言。——-がへし[龍燈返](名) 「ガンダウチヤウチン」に同じ。——-チヤウチン[龍燈提燈](名) 「ガンダウチヤウチン」に同じ。
(かんざう-ぶ[間投詞](名) 【文法】「かゞたんぶ」(感歎詞)に同じ。
(かんざう-ぶ[感動詞](名) 【文法】前條に同じ。
(かん-さく[奸慝](名) かくれてあらはれざる罪惡、又、かくしもつ邪心。
(かん-さく[感得](名) ㊀かんづくこと。㊁神佛に我信心通じ、ために望める物事を得ること。
(かん-さく[監督](名) ㊀とりまとめ。㊁行政を統一せんために、下級の行政官に對し、其權限を明かにし其職責を實行せしむる上級の行政官の行爲。㊂かんとくの任にあたる人。——-ぶ[監督官廳](名) 官廳又は物事の監督をなす職權ある官廳。地方廳に對しては各省をいひ、市役所町村役場に對しては地方廳などをいふ。——-しよ[監督書記](名) 地方裁判所・區裁判所及檢事局にて、書記二名以上ある場合に、上役の書記に命ずる職名にして、其書記課全體のとりまとめをなすもの。——-ちやう[監督廳](名) 「かんとくわんちやう」に同じ。——-はんぶ[監督判事](名) 區裁判所にて、二名以上の判事ある場合に、其上席判事に下す職名にして、該區裁判所の事務のとりまとめをなすもの。
(かん-ざく[簡牘](名) てがみ。ものよどく。——-ぶん[簡牘文](名) てがみの文。日用文。
かん-ざとろ[勘所](名) ㊀三味線又は琴などにて、絃(ゲ)を押ふる手にて音調をかんがふる處。㊁大いにかんがへを要する點。肝要の所。
カン-ざとろ[甲所](名) 甲の音を出すべき所。
(かん-ざり[楫取](名) 「かぢとり」の訛。
++かん-な[名) かな。(假名)。
かんな[鉋](名) 材木の表面を削りて平かにするに用ふる器、其種類多し。かな。——-くづ[鉋屑](名) 鉋をもて材木を削りて出たる薄き木片。(刨屑)。——-かけ[鉋掛](名) 經木の一名。
(かん-なら[肝膽](名) ㊀肝と膽と。㊁こゝろかんがへ。——-ちにまみる[肝膽塗地] 甚しき窮境に陥りたるを、又は討死すると殺さるゝと失敗して死ぬるとにいふ。——-を-ぶる[絞肝膽] さま〴〵とかんがへはかるにいふ。
かん-ながら[神隨](名) 「かむながら」に同じ。——-の-みち[神隨道](名) 「ものんだう」(神道)に同じ。
かん-なべ[燗鍋](名) 酒の燗をする鍋、多くは銅製なり。
かんなめ-まつり[神嘗祭](名) 「ものんだう」に同じ。
(かん-なん[難](名) 憂(ウ)きこと。つらきこと。難儀。
(かん-にち[坎日](名) 外出を忌むといふ日。
(かん-にふ[陷入](名) おちいること。くぼむこと。
(かん-にふ[嵌入](名) はめこむこと。
(かん-にん[堪忍](名) ㊀こらへ忍ぶこと。㊁怒り

を錮めて其罪を許すと。(起、堪辨)。——**おやう**[堪忍袋](名)堪忍する心。——**づよし**[堪忍強](形、一)よく堪忍する。堪忍する力強し。——**ぶくろ**[堪忍袋](名)かんにんする度量。——**ぶくろのをがきれる**もはや堪忍する能はざるにいふ。

かんぬし[神主](名)㊀神につかふる人。㊁神社に仕ふる人の長、即ち、其神社の神事一切を行ふ人。

かんねい[奸佞](名)心まがりよくへつらふこと。「す」。

かんねつ[寒熱](名)さむけとねつと。「—往來」

かんねブツ[寒念佛](名)信者が寒夜の修業に佛名を稱へながら寺詣りすること。「じ。

かんねんブツ[寒念佛](名)「かんねブツ」に同じ。

かんのう[堪能](名)よく爲し得ること。上手。「此頃召し出したる—の程覆法師」。

かんば[駻馬](名)駻強き馬。

かんば[汗馬](名)㊀汗をかきたる馬。又、馬を駈(カ)けさせて汗をかゝすこと。㊁馬にのりて戰場に奔走すること。「—の勞」。

かんば[看破](名)見やぶること。見あらはすこと。

かんばい[寒梅](名)寒中に咲く梅。又、早梅。

かんばい[感佩](名)委(ヰカタ)く心に感ずること。「さ。ふうぞや、又、深く感じて心にとめむくこと。

かんばつ[惑冒](名)邪氣に感ずること。かぜひ

かんばつ[監房](名)罪人を入るゝ監獄の室。

かんばつ[漢方](名)支那風の醫術。——**い**[漢方醫](名)漢方の醫師。

かんばく[雁帛](名)かりのたまづさ。「便。

かんばし[芳](形、二)「かうばし」の音カン・ばし・る[甲走](自、ら四)聲の調子が高まりて鋭くひびく。

かんばせ[顏容](名)「かほばせ」の音便。

かんばつ[旱魃](名)ひでり。

かんばふ[簡法](名)手輕く便利なる方法。

かんばん[看板](名)㊀商家などにて、家號又は職業其他一切廣告すべきものを記して、店前に掲げおきて行人に示すもの。「招牌」。㊁芝居又は見世物などにて、役者の名又は演藝の題などをまるして、小屋の前面に掲げて行人に示すもの。㊂昔時武家にて、仲間などの着し短き服、其背に主人の紋所などを染めたるもの。「蝶衣」。㊃紋所又は家號などを記しある提灯又は法被(ハッピ)。㊄みえ、外觀、外見。——**にいつはりなし**も違ふ所なきにいふ。其實質の外見と少し

カン・パン[甲板](名)《字の唐音》大いなる船の上部の廣く平かにして、木板若しくは鐵板などを一面に張りつめたる所。かふはん。(艦板)。

かんび[岩菲](名)【植】石竹科に屬する宿根草、高さ二尺にして叢生す、葉は肥厚にして尖端を有す、夏の頃、五瓣にして赤肉色の花を開く、花瓣の端末は缺裂せり。(前夏羅)。

かんび[雁皮](名)【植】瑞香科に屬する小木本、葉は卵形又は卵狀針披形にして、裏に絹絲狀の毛を有し、花序は頭狀に排列し、花蓋の裂片は、筒部より四倍短し、樹皮の纖維を製紙の料に供す。——**ぶ**[雁皮紙](名)雁皮の皮の纖維にて製したる紙、表面を椿の葉にて摺り滑かにしたる最も名あり。のにして、伊豆國熱海の產最も名あり。

かんびやう[看病](名)病氣の介抱。みとり。看護。——**にん**[看病人](名)看病する人。——**ふ**[看病婦](名)看護婦に同じ。

かんぴやう[眼病](名)眼の病氣。めやみ。

かんぷ[姦夫](名)他人の妻に通ずる男。みそかを、まをとこ。

かんぷ[姦婦](名)夫にあらざる男に通ずる有夫の女。夫をかきぬる女。

かんぷ[奸婦](名)どくふ。あくふ。「又、其人。

かんぷ[姦富](名)わるだくみによりて得たる富。

かんぷう[寒風](名)さむき風。さむかぜ。

かんぷく[感服](名)感じて心から服從すること。ぞんぷく。(感伏)。

かんぷくろ[紙袋](名)紙にて製したる袋。

かんぷつ[奸物](名)心あしき人物。(姦物)。

かんぷつ[乾物](名)食用に供する植物を乾したもの。(干物)。——**や**[乾物屋](名)乾物を賣る家、又、かんぷつを賣る人。

かんぷつ[實物](名)にせもの。偽物。

かんぶん[漢文](名)漢字のみにて記したる文章。——**がく**[漢文學](名)漢文の解釋又は組織、使用等に就きて研究する學問。

かんぶん[感奮](名)感じて精神のふるひたつこと。感激。「—して讀書を勵む」。

かんべ[神戶](名)古昔、神社に附屬して、租稅を神社に奉りし農民。

かんべう[乾瓢](名)一種の食品、夕顏の實の柔かなる肉を細く長く紐の如くに剝(ム)きて、干(ス)し上げたるもの。(瓢香)。

かんべき[癇癖](名)癇癖(カンシヤク)。

かんべつ[鑑別](名)みわけ。めきゝ。

かんべん[勘辨](名)㊀考へわきまふること。㊁辭退して、過失をゆるすこと。

かんべん[簡便](名)手輕くして便利なること。

——**はふ**[簡便法](名)手輕く便利なる方法。たやすき方法。

かんぼ[閑步](名)ゆるかに步むこと。足のはこびの急ならざること。

かんぼう[姦謀](名)わるだくみ。(奸謀)。

かんぼく[翰墨](名)㊀筆と墨。㊁轉じて、詩文などを草すること。又、書畫などをかくこと。「—の藝」。

かんぼく[肝木](名)【植】忍冬科に屬する灌木、葉は瓜蔔に似て鋸齒を有す、夏初に、五瓣の小白花を開く、材は香ばしくして楊子の料とす。——**ようぶ**[肝木楊子](名)かんぼくにて製したる楊子。

かんぼつ[陷沒](名)おちいること。むまこむこと。

カンマン(名)【佛】梵語、不動尊の尊稱。

かんみ[甘味](名)あまき味。よき味。又、其食物。

かんみ[鹹味](名)まはからき味。まほけ。

かんみ[含味](名)かみわけてあぢはふこと。よくあぢはふこと。

かんみやう[漢名](名)支那にての名稱、例へば、「かぶとぎくを雙鬘菊といふが如し。

がんみやく[岩脈](名)【鑛】斑岩などが、他の岩石の裂罅(サケ)に近(ボド)り出で凝固してなりたる脈。

かんむり[冠](名)㊀頭にかぶるもの、總稱。かぶりもの。㊁束帶のときに用ふるかぶりもの、特稱。黑羅又黑紗にてつくる。頭(カ)・簪(ヒシ)・巾子(コ)・纓(ヱイ)等の名所あり、形にも厚額・薄額・透額・半額等の諸種あり。㊂漢字の上にある種々の字形の稱。「宀」—「山—」。——**をかく**[挂冠]官職を辭す。——**をたまふ**[賜冠]五位に錄せらる。——**をはじく**[彈冠]出仕又は仕官の用意をなすにいふ。

(二)りむんかん

かんめい[漢名](名)「かんみやう」に同じ。

かんめい[感銘](名)恩義又は教訓などを深く心に感じて忘れざること。

がんめん[顏面](名)かほ。おもて。「と、

かんもく[緘默](名)口をとざして言を發せざること。

かんもち[寒餅](名)寒中の水をもて搗(ツ)きたる餅。

がんもどき[雁擬](名)《雁の肉に似るといふより此名あり》油揚の一種、古昔のは、麩を油にて煮しもの、今時のは、豆腐に細かく切りたる野菜を入れ、油にて煮たるもの。「雁饗」。

かんもん[勘文](名)「かもん」に同じ。

かんや[寒夜](名)さむき夜。

かんやう[涵養](名)潤を追ひて養ひ成すこと。「國力の—」「品性の—」。

かんやく[簡約](名)つゞまやか。かんたん。

かんやどり[神宿](名)《神のやどる所なりとの義》兜の頂、はちまんざ。

かんゆ[肝油](名)㊀動物の肝より取りたる脂肪。㊁醫(ラ)より取りたる脂肪の特稱、肺勞などの藥として用ふ。臭氣強し。「亂世の—」。

かんゆう[姦雄](名)奸智に長(タ)けたる英雄。

かんゆう[敢勇](名)勇氣に富み事をおしきりてなすこと。

かんよ[干與](名)あづかること。たづさはること。

かんらい[雁來紅](名)【植】《雁の來るときに赤くなるといふ義》「はげいとう」に同じ。《老少年、十樣錦》。

かんら[簡便](名)勇者などの笑ひ聲「—と打笑ひ」。

かんらく[乾酪](名)牛乳などを乾酪質を凝したる滋養品。——**ぶつ**[乾酪質](名)牛乳などの中にて、脂肪球と共に主要なる成分のもの。

かんらく[陷落](名)㊀おちいること。はまり入ること。「地震で大地—す」。㊁城廓のぬけおちること。——**と**[陷落湖](名)地層陷落して生じたる凹地に水を湛(タ)へて成りたる湖、十和田湖・琵琶湖の如きこれなり。——**ぢしん**[陷落地震](名)【地】地震の一種、溫泉などのために、地下の物質が溶解せられて空洞を生じ、上部の陷落するによりて生ずるもの。

かんらん[橄欖](名)【植】木犀科に屬する熱帶植物、葉は披針形又は披針狀長楕圓形にして全邊なり、果實は橢圓形にして、其仁よりかんらん油を搾(シボ)る、樹皮もまた藥用に供せらる。「オレーフ」「オリーブ」(果類、忠果、諸果)。——**がん**[橄欖岩](名)おもに橄欖石より成りたる岩石。——**せき**[橄欖石](名)【鑛】稀に結晶し多くは粒形をなす鑛物、概ね稍々黑色を帶びたる褐色をなす、裝飾の石材として用ふ。——**ゆ**[橄欖油](名)橄欖の果實の仁より採取したる油、食用とし、又、瘡泡膏藥用石鹼等を製する料とす。

かんり[幹理](名)すべくゝり。とりまとめ。

かんり[奸吏](名)よこしまなる役人。(姦吏)。

かんりう[寒流](名)㊀つめたき流。又、さむげに見ゆる流。㊁【地】海流の一、南極地方より赤道地方へ向ひて流るゝもの。

がんりう[岩流](名)【地】扩—にて溶解したる鑛物が、地上に噴出し、流れ走りて後凝結したるもの。

ぞう[象] (名) ❶鼻が長く牙のある動物。❷「象牙」の略。❸「象嵌」の略。❹「象形文字」の略。❺「象徴」の略。❻「象限」の略。❼「象限儀」の略。❽「象限儀」の略。❾「象限儀」の略。❿「象限儀」の略。

ぞう[像] (名) ❶人・物の姿。❷「肖像」の略。❸「像」の略。❹「像」の略。❺「像」の略。❻「像」の略。❼「像」の略。❽「像」の略。❾「像」の略。❿「像」の略。

ぞう[増] (名) ❶増えること。❷「増加」の略。❸「増」の略。❹「増」の略。❺「増」の略。❻「増」の略。❼「増」の略。❽「増」の略。❾「増」の略。❿「増」の略。

ぞう[造] (名) ❶造ること。❷「造」の略。❸「造」の略。❹「造」の略。❺「造」の略。❻「造」の略。❼「造」の略。❽「造」の略。❾「造」の略。❿「造」の略。

ぞう[蔵] (名) ❶「蔵」の略。❷「蔵」の略。❸「蔵」の略。❹「蔵」の略。❺「蔵」の略。❻「蔵」の略。❼「蔵」の略。❽「蔵」の略。❾「蔵」の略。❿「蔵」の略。

ぞう[贈] (名) ❶「贈」の略。❷「贈」の略。❸「贈」の略。❹「贈」の略。❺「贈」の略。❻「贈」の略。❼「贈」の略。❽「贈」の略。❾「贈」の略。❿「贈」の略。

ぞう[雑] (名) ❶「雑」の略。❷「雑」の略。❸「雑」の略。❹「雑」の略。❺「雑」の略。❻「雑」の略。❼「雑」の略。❽「雑」の略。❾「雑」の略。❿「雑」の略。

ぞう[造] (名) ❶「造」の略。❷「造」の略。❸「造」の略。❹「造」の略。❺「造」の略。❻「造」の略。❼「造」の略。❽「造」の略。❾「造」の略。❿「造」の略。

ぞう[増] (名) ❶「増」の略。❷「増」の略。❸「増」の略。❹「増」の略。❺「増」の略。❻「増」の略。❼「増」の略。❽「増」の略。❾「増」の略。❿「増」の略。

ぞう[像] (名) ❶「像」の略。❷「像」の略。❸「像」の略。❹「像」の略。❺「像」の略。❻「像」の略。❼「像」の略。❽「像」の略。❾「像」の略。❿「像」の略。

ぞう[象] (名) ❶「象」の略。❷「象」の略。❸「象」の略。❹「象」の略。❺「象」の略。❻「象」の略。❼「象」の略。❽「象」の略。❾「象」の略。❿「象

きい・いう［杞憂］（名）《古昔、支那の杞國の人が、天の崩れ墜つるとなきかと、心をいためたりといふ故事に出づ》未來の事に就きて、ふれこれとむだな心配をすること。とりこし苦勞。

きい・きい（名）氣分又は病氣。「小兒の——」。

きい・きい（名、副）物の聲。「—る音」。

きいた・ふう［利風］（名）氣のきゝたる風をよそはふと。何となく自慢めきたること。

きい・いちご［木苺］（名）【植】薔薇科に屬する亞灌木、葉は三裂乃至五裂し、鋸齒狀鋸齒を有す、果實は黃色にして食用に供せらる。《木覆盆、沿鉤子》。

きい・いつ［歸一］（名）分れたるものが一つになること。

きい・いと［生絲］（名）まだ練(ネ)らぬ絹絲。——**けんさぢよ**［生絲檢査所］（名）農商務省の直轄にして、生絲の品位及正量を檢査する所。

きい・いろ［黃色］（名）黃なる色。

きい・いろ・しきき［黃色］（形、一）きいろなり。

きい・いん［基因］（名）もとゐ。もと。ねもと。「と、

きい・いん［歸隱］（名）職をやめて鄕里に隱居すること。

きい・いん［欺隱］（名）事實をかくして人をあざむく

きい・いん［僞印］（名）にせの印形。「ぼうはん。」と、

きい・いん［僞引］（名）詐りてゐびき出すこと。

きう［灸］（名）漢方の手術の一、もぐさを肌に點しこれに火をつけて灼(ヤ)き、其熱氣に由りて病氣を療治すること。「きうてん。やいと。

きう［舊］（名）一ふるきこと。もと。二ふるき物事。「—を問ふ」。三もとありしさま。むかしの境遇。「—を懷ふ」。四ふるきちなみ。ふるきとも。五久しくなりて見なれ聞きなれたること。六舊曆の略言。「—の八月十五夜」。《舊》。

きう［球］（名）一支那の古代にて、圓形をなせる一種の玉の稱。「大—小—」。二琴の一種、球玉を以て其板となしたるもの。三まるきかたち。まるきもの。「—を投」。四【數】半圓の直徑を軸として、一周廻轉せしめて生じたる立體。又、一の定點より一定の距離ある點の軌跡。

きう［牛］（名）一【動】うし。二二十八宿の一。

きう・あ［舊痾］（名）久しく癒(イ)えざる病氣。ぢび

きう・あく［舊惡］（名）以前なしたる惡事。「—を

きう・い［休意］（名）あんまん。

きう・いう［舊友］（名）むかしのとも。友。

きう・いう・はちばん［九爽八蠻］（名）支那の古代にて、四境の蠻民を卑しめていひし語。

きう・えう［久要］（名）久しき以前の約束。

きう・えき［牛疫］（名）牛の流行病。

きう・えん［久延］（名）物事ののびノ〜になること。

きう・おん［舊恩］（名）むかしのおん。

きう・か［舊家］（名）久しく續き來たりたる家。其土地に久しく住居せる家。「伏」。

きう・か［九夏］（名）夏季九十日の間の稱。「一三

きう・か［休暇］（名）やすみ。ひま。

きう・が［球芽］（名）【植】百合科の植物などの葉腋に生ずる紫黑色の小球、此小球地に落ちて發芽し繁殖す。「ゆるさうかう。

きう・かう［舊稿］（名）以前につくりし詩文。ふ

きう・かう［舊好］（名）以前のよしみ。

きう・かう［仇校］（名）ふたつのものをてらしあはしてたゞすこと。「の異稱。

きう・かう［仇香］（名）德川時代の代官の手代。

きう・かう［舊交］（名）一以前よりの交際。ふるきちなみ。「舊好」。二むかしのとも。きういう。

きう・がく［休學］（名）しばらく學問をやすむこと。又、生徒のしばらく登校をやすむこと。

きうふ・ぶけん［休暇事件］（名）裁判所が、七月十一日より九月十日まで即ち夏季の休暇中に、特に取扱ふ事件。養子緣組・婚姻事件其他親族に關係する事件等其ものなるものとす。

きう・かつ［裘葛］（名）かはごろもとかたびらと。夏の衣と冬の衣と。——**をかふ**［裘葛］年月を經過するにいふ。

きう・がふ［糾合］（名）よせあつむること。あはせて一つにすること。「人數を—す」。《鳩合》。

きうかふ・るる［鳩鳩類］（名）【動】鳥類の一、脚短く翼長くして飛行迅速なり、嘴は小にして柔く鼻孔の周圍は膨(フ)る、穀類果實等を食す。かはらばと。きじばと等これに屬す。

きう・かん［嗅感］（名）氣體が鼻孔の上部なる粘膜を刺戟するより起る一種の感覺。鼻の感覺。

きう・かん［休刊］（名）新聞又は雜誌などが、其發行をやすむこと。

きう・かん［球竿］（名）體操の用具、長さ五尺ばかりの太竿の頭に、木の球をつけたるもの。

きう・き［嗅器］（名）嗅覺をつかさどる器官、高等動物の鼻又は甲殼類の第一觸角の外枝の如きもの。「さるく。

きう・き［舊記］（名）古事を書きたるもの。ふるき

きう・き［舊規］（名）ふるきおきて。《舊法》。

きう・き［舊誼］（名）以前のよしみ。ふるきなじみ。

きう・き［球戲］（名）たまつき。

きう・き［牛鬼］（名）一牛の形をしたる怪物。二正しからざる神靈。何物の—か、敢て我義兵を拒む」。

きう・きう・の・いちまう［九牛一毛］多くの牛

の中の一條の毛の義》多き物の中に於ける極めて少部分の物にいふ。

きう・きう・はふ［九鎖法］（名）【數】球算の割算にて、一けた即ち一より九までの數にてわるとの方法又は割聲、例へば、二にてわるに、二一添作五・二進一十の如く、三にてわるに、三一三十一・三二六十二・三進一十などの如し。

きう・きやう［究竟］（名）一くつきやう。くきやう。終極。二假定又は特殊に對して、根本又は普遍の稱。——**げんり**［究竟原理］（名）普通の科學の或事實を假定して說明せる特種の原理の上に立ち、すべてに普遍にして且假定にあらざる第一原理の稱。即ち、哲學にて說明する所の原理これなり。

きう・くわい［舊懷］（名）むかしからのかんがへ。又、以前よりのなつかしさ。「を救助すること。

きう・くわう［救荒］（名）飢饉にあちいりたる

きう・くわざん［休火山］（名）【地】古代に噴火せし形跡あれど、今は噴火せざる火山。「り。

きう・くわつ［久闊］（名）とほゝ〜しきこと。久しぶ

きう・くわん［嗅官］（名）「きうき」嗅器に同じ。

きう・くわん［舊貫］（名）一もとの領地。二むかしよりのならはせ。「舊慣」。「りさま。

きう・くわん［舊觀］（名）もとのみえ。むかしのあ

きう・くわん［九官］（名）【動】「きうくわんてう」の略言。——**てう**［九官鳥］（名）【動】一種の鳥、もと支那產にしてかけす大なり、全身黑色にして翼に白色の部あり、脚黃にして嘴赤く、巧に人語をまね。《秦吉了、鳩鴝》。

きう・くん［舊君］（名）もとの主君。舊主。

きう・くん［舊勳］（名）もとのいさを。「—を思ひ」。

きう・けい［球莖］（名）【植】地下莖の一種、くわゐの如く球狀をなすもの。「むること。

きう・けい［求刑］（名）刑罰に處せられんことを求

きう・けい［球形］（名）毬の形の如く圓きこと。《毬形》。——**ぼく**［球形木］（名）【植】枝椏は中部に多く且長く、上部に於て分れて細枝となり、其全形の球形をなす木の稱。はぎ・くるみ等これなり。

きう・けい［休憩］（名）やすみ。いきつぎ。——**おかん**［休憩時間］（名）やすみの時間。——**およ**［休憩所］（名）やすみどころ。休息所。

きう・けう［舊教］（名）「キリスト教の一派、「ルーテル」氏の宗教革命以前の宗旨によるもの、即ち、「ローマ」教、「ギリシヤ」教等の總稱。

きう・けつ［九穴］（名）《九個の竅の義》動物の體中に於ける口・兩耳・兩眼・兩鼻孔・二便孔の總稱。

きう・けつ［灸穴］（名）灸をすうべき身體の箇處。さんり・ちりけ等の類にして、其箇處は鍼術を施すべき箇處に同じといふ。

きう・げふ［休業］（名）業を休むこと。

きう・げん［九原］（名）よみぢ。又、黃泉。

きう・こ［舊故］（名）ふるきなじみ。むかしのとも。

きう・こ［舅姑］（名）男と姑と。夫の父母。

きう・ご［救護］（名）一すくひまもること。にぎはしたすくること。二病傷者の治療又は看護。——**はん**［救護班］（名）赤十社の戰時に於る救護上の部員編閭の名。

きう・ご［九五］（名）《易の卦にて、下よりかぞへて五つめにあたるもの、轉じて、其君位にあたれる象なるより轉じ天子のみくらゐ。「—に居る」。

きう・さい［救濟］（名）一不幸若しくは失敗の狀態に陷りたるを、其陷らざる以前の狀態に回復すること。すくひもどすこと。たすけすくふこと。二すべて物事を以前の狀態に回復すること。

きう・ざい［糾罪］（名）罪のとりまとめ。

きう・きう［灸瘡］（名）灸のあと。「文章。

きう・さく［舊作］（名）以前につくりし詩歌又は

きう・さつ［糾察］（名）罪狀などをとりたゞしあきらむること。とりまとめ。ぎんみ。「罪を—す」。

きう・ち［仇視］（名）あだかたきとして憎むこと。

きう・ち［舅氏］（名）母方のをぢ。

きう・ち［臼齒］（名）口の奥にある齒、先端は平かにして、臼の如く食物を碎(カ)き細かくする作用あるもの。おくば。

きう・ち［舊師］（名）もとの師匠、又、先師。

きう・ち［九死］（名）殆んど死すべかりし其だ危き場合。「—を出でゝ、一生を得」。——**いっしやう**［九死一生］（名）《死ぬべき場合が九分、生くべき場合が一分の義》前條に同じ。

きう・ちう［九秋］（名）秋期九十日間の稱。

きう・ちう［仇讎］（名）あだかたき。「—の服」。

きう・ちう［舊式］（名）舊のかた。以前のかたち。

きう・ちき［舊識］（名）もとの知己。ふるきちか

きう・つ［休日］（名）やすみの日。「づき。

きう・つ［舊習］（名）ふるきならはし。ふみこみたるならはし。「—容易に改まらず」。

きう・ぢや［牛車］（名）うしのひくくるま。

きう・ぢやう［休祥］（名）めでたきこと。又、めでたきえるし。

きう・ぢやう［舊章］（名）むかしののり。

きう・ぢやう［求償］（名）一賠償又は償還を求むること。二【法】連帶債務者若しくは保證債務者が、自己の出捐によりて其債務の全部又は一部を消

滅せしめたるとき、他の連帶債務者若しくは其主なる債務者に對して、出捐の償還を求むること。

(きう-ぶやう[ヨウ][球狀]**)**(名) 球の形をなすこと。

(きう-ぶやう[ヨウ][舊情]**)**(名) むかしのなさけ。むかしよりのおもひ。

(きう-ぶゆ[舊主]**)**(名) もとの主君。むかしのダンナ。——**-ぶん**[舊主人](名) 助け賑(ヒ)はすこと。ものをめぐみやること。——**-きん**[救恤金](名) 救恤のために貯蓄し又は義捐する金錢。

(きう-ぶゆん[九春]**)**(名) 春期九十日間の稱。

(きう-ぶよ[救助]**)**(名) すくひ助くること。——**-まい**[救助米](名) 救助のために貯蓄し又は義捐する米穀。

(きう-ぶより[救拯]**)**(名) すくひ。たすけ。「神の—」。

(きう-ぶよく[休職]**)**(名) 其官にあれど其職を帶びざること。「—判事」。

きう-ぶを-とる[執牛耳](名) 支那の古昔、列國の同盟にて血をすゝるに、其盟主は牛の耳を手になし、故事に出づ)同盟の主人公たるにいふ。「い。

(きう-ぶん[舊臣]**)**(名) もとの臣下。もとのけら

(きう-ぶんせい-ぶんけい[求心性神經]**)**(名) 末梢端より中樞部に向つて傳達する神經。

(きう-ぶんけい[嗅神經]**)**(名) 鼻孔の粘膜に分布して嗅覺を起さす神經。

(きう-ぶん-りよく[求心力]**)**(名) 【理】物體の運動するとき、常に一定點に向つて引き附くる力、例へば、或物體が圓運動をなすは、圓の中心に向ふ力即ち求心力が其物體に作用するが故なり。

(きう-せい[紀正]**)**(名) たゞしなほすこと。(糾正)。

(きう-せい[舊制]**)**(名) もとののり。又、もとのかた。

(きう-せい[九星]**)**(名) 陰陽家にて、九個の星を五行及方位に配し、これを人の生年にあて、吉凶を判斷するもの。即ち、一白(水星、本位は北即ち坎)、二黑(土星、本位は西南即ち坤)、三碧(木星、本位は東即ち震)、四綠(木星、本位は東南即ち巽)、五黃(土星、本位は中央)、六白(金星、本位は西北即ち乾)、七赤(金星、本位は西即ち兌)、八白(土星、本位は東北即ち艮)、九紫(火星、本位は南即ち離)をいふ。

(きう-せい-ぐん[救世軍]**)**(名) 「キリスト」教の一派、千八百六十五年イギリス人「ブース」氏の創始にかゝる、あもに貧民若しくは窮者の救濟に從事す、傳道の組織は軍隊の組織により、將校又は下士卒等の名を用ひ樂器には太鼓などを使用す。「稱。

(きう-せい-ぶゆ[救世主]**)**(名) 耶蘇基督(ヤソキリスト)の

(きう-せかい[舊世界]**)**(名) 「アジア」・「ヨーロッパ」・「アフリカ」の三大洲の稱。新世界の對。

(きう-せき[舊跡]**)**(名) 以前に或物事のありたる所。「名所—」。(舊蹟)。

(きう-せき[休戚]**)**(名) よろこびと悲しみと。「—を「共にす」。(喜憂)。

(きう-せき[求積]**)**(名) 【數】物の面積又は體積を算出すること。又、其算法。「つゞらをり。

(きう-せつ[九折]**)**(名) 阪路などの曲折多きこと。

(きう-せん[九泉]**)**(名) くわうせん。よみぢ。

(きう-せん[休戰]**)**(名) 戰爭の中止。交戰者が合意によりて、一定の期間交戰を中止すること。

(きう-せん[舊染]**)**(名) 久しき以前より染み込みたるならはし。

(きう-そく[休息]**)**(名) いきつぎ。やすみ。(休憩)。

よ[休息所](名) やすみどころ。

(きう-ぞく[九族]**)**(名) 高祖・曾祖・祖父・父母・自己・子・孫・曾孫・玄孫の總稱。

(きう-ぞく[舊俗]**)**(名) むかしのならはし。ふるきならはし。「ふ歌。

きう-うた[杵歌](名) 杵もて穀類を搗くときに謠

(きう-たい[久滯]**)**(名) 久しくとゞこほること。

(きう-たい[休臺]**)**(名) 茶盤の具。「閑話—」。

(きう-たい[休題]**)**(名) 說きのぶることをやむること。

(きう-たう[ト][舊套]**)**(名) ふるき事をうけつぐこと。又、ふるき物事の範圍。「—を脫せず」。

(きう-たう[ド][舊道]**)**(名) もとの道路。「箱根の—」。

(きう-たく[舊宅]**)**(名) もと住みたる家。故屋。

(きう-ち[舊地]**)**(名) もとの土地。もとの知行所。

(きう-ち[舊知]**)**(名) ふるきなじみ。ふるきとも。——**-ち**[舊知己](名) 前條と同じ。——**-ぶん**[舊知人](名) ふるきとも。

(きう-ち[灸治]**)**(名) 灸の療治。

(きう-ち[救治]**)**(名) 以前の狀態にすくひもどすこと。

(きう-ちやう[チヨウ][九腸]**)**(名) はらわたの全體。

(きう-ぢやう[ヂヨウ][休場]**)**(名) 興行などを休むこと。又、興行などに出動せざること。

(きう-ちよう[九重]**)**(名) 宮こ。のかされ。天子の住みたまふ所。きんちゅう。——**-の-てん**[九重天](名) 天の最高所。又、きんちゅう。

(きう-つ[氣鬱]**)**(名) 氣分のふさぎ。(鬱悶、鬱悒)。

(きう-てい-たいりよ[九鼎大呂]**)**(名) 《九鼎も大呂も共に支那上代の周の寶器》重き地位又は名聲にかゝりいふ。

(きう-てき[仇敵]**)**(名) あだかたき。(讐敵)。

(きう-てん[灸點]**)**(名) 灸穴の上に墨もてえがす點。「きうてんや」の略言。——**-や**[灸點屋](名) 灸點をおろす家。又灸點をおろす人。

(きう-て[舊典]**)**(名) 古典。むかしの書きもの。古文書。ふるきのり。むかしのかた。

(きう-てん[九天]**)**(名) 【佛】九個の天體の稱、即ち太地を中心として回轉せる日天・月天・水星天・金星天・火星天・木星天・土星天・恒星天・宗動天をいふ。支那にて、天を九方位に分ちたる稱、即ち、中央を鈞天といひ、東方を蒼天といひ、東北を變天といひ、北方を玄天といひ、西北方を幽天といひ、西方を昊天といひ、西南方を朱天といひ、南方を炎天といひ、東南方を陽天といふ。單に、天上の稱。轉じて、宮中の稱。「—に奏す」。

(きう-てん-ぶん[九點圓]**)**(名) 【數】一つの三角形の各邊の中點、各頂點より對邊へ引ける垂線の足、及各項點と垂心との半途の點の九點の稱、此九點を過ぎ一の圓を畫き得る故に此名あり。

(きう-と[舊都]**)**(名) もとの都。ふるきみやこ。

(きう-ど[舊土]**)**(名) 舊地。

(きう-とう[球燈]**)**(名) 圓くして小さき提燈(チヤウ)。

(きう-とう[舊冬]**)**(名) 舊年の冬。

(きう-とう[牛痘]**)**(名) 牛の痘瘡、うゑばうさうの種とするもの。(種痘)。

(きう-とく[舊德]**)**(名) もと行ひたる善事。もとはどこしたるめぐみ。

(きう-にく[牛肉]**)**(名) 牛の肉、滋養の食料。

(きう-にゆう[牛乳]**)**(名) 牛の乳汁、滋養の飲料。

(きう-ねん[舊年]**)**(名) こゞ。きよねん。(昨年)。

(きう-はい[九拜]**)**(名) 古昔の最敬禮、立ちて左・右・左、居て左・右・左、跪きて二度、立ちて一度、都合九たび拜すること。書簡の末尾に敬意を表するに用ふる語。(稽首、再拜)。

(きう-はう[ホウ][白砲]**)**(名) 火砲の一種、彎曲したる彈道を以て射擊するものにして、舊時のは、砲身短く其形曰に似て球狀の彈丸を使用せしが、近時のものは、砲身も長さを增し彈丸も長形のものを使用するとなれり。

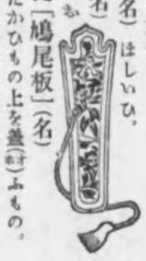
(きう-はく[休泊]**)**(名) やすむとゞまること。又、やどること。——**-ぶよ**[休泊所](名) やすみ泊るべき所。やどや。はたごや。

(きう-ばく[舊幕]**)**(名) 明治維新後に、德川幕府を指して呼ぶ語。「—の頃」。——**-ぶだい**[舊幕時代](名) 德川幕府が天下の政務を執行せし時代。

(きう-はん[舊藩]**)**(名) 舊幕時代の各藩。——**-ぶ**[舊藩士](名) 舊藩に仕へし士。——**-ぶゆ**[舊藩主](名) 舊藩の大名。

(きう-び[模糊]**)**(名) ほしいひ。

(きう-び[鳩尾]**)**(名) 胸骨の下部。みづおち。——**の-いた**[鳩尾板](名) 鎧の附屬具、左のたかひもの上を蓋(ホ)ふもの。


[たいのびうき]

(きう-び[牛皮]**)**(名) 牛の皮。「きうひあめ」の略言。(求肥)。——**-あめ**[牛皮飴](名) 一種の菓子、澱粉に砂糖を入れ飴を加へて煮固めたるもの、牛の革に似たれば此名あり。「きうひ。(牛皮帶)。

(きう-ぶん[舊聞]**)**(名) ふるきはなし。「—に屬す」。

(きう-へい[舊弊]**)**(名) ふるくよりの弊害。習慣となりたるあしき癖。「陳腐なる習慣を好む性質。いんぶゆん。

(きう-ほう[舊封]**)**(名) もとの封土。

(きう-ぼく-ふんど[朽木糞土]**)**(名) 《くちたる木とくされたる土との義》墮落腐敗して、手入れできざるもの又は利用できざるものをたとへいふ。

(きう-む[舊夢]**)**(名) 以前みしゆめのあと。

(きう-めい[糾明]**)**(名) 罪狀をたゞしあきらむること。きうもん。「ただみ。(糾案、吟味)。

(きう-めい[究明]**)**(名) 道理をきはめ明むること。けう。

(きう-めん[球面]**)**(名) 球を界する表面。——**-かく**[球面角](名) 【數】一つの球面上の二つの大圓をなす角。——**-きやう[ヨウ]**[球面鏡](名) 【理】反射面が球面の一部をなす鏡、凹鏡と凸鏡とあり。——**-くわおよう**[球面過剩](名) 【數】球面三角形の角の和と二直角との差。——**-さんかくけい**[球面三角形](名) 【數】三つの大圓を以て圍みたる球面の一部分。——**-さんかくはふ[ホ]**[球面三角法](名) 【數】三角法の一分科、球面三角に就きて論ずるもの。——**-ざうさ**[球面收差](名) 【理】一點より發する光線が、球面鏡より反射し若しくは「レンズ」を通過したる後、一點を通過若し發散する場合なれば後方に延長して)せざること。——**-たかくけい**[球面多角形](名) 【數】大圓弧を以て圍みたる球面の一部分。——**-ざうえいはふ[ホ]**[球面投影法](名) 【地】地圖作成の一法、透視畫法によるものにして、中央と邊側とは其割合を異にするものなり。「場所。

(きう-ぶん[球門]**)**(名) 打球にて、球を投(ナ)げこむ

(きう-ぶん[糾問]**)**(名) ぎんみ。きうめい。(糾問)。

(きう-やく[舊約]**)**(名) ふるきちかひ。以前の約束。「—をたがへぬ」。「るると、「—の情交」(從來)。

(きう-らい[舊來]**)**(名) 前よりなること。もとよりなること。

(きう-らく[牛酪]**)**(名) 牛乳をどの脂肪質を製しかためたるもの。「バタ」。

(きう-らふ[ロウ][舊臘]**)**(名) 去年の十二月。(客臘)。

きう-りう[黃瓜]**)**(名) 【植】葫蘆科に屬する草、蔓莖にして葉は冬瓜に似る、黃色の合瓣花を開く、果實は細長にして刺を有し熟すれば黃色となる、食用

ばりき―**ばりょく**

ばりき[**力**] (名) 能力。

ばりき[**剣**] (名) 剣術の腕前。

ばりき[**腕**] (名) 腕前。

ばりき[**筆**] (名) 文章を書く力。

ばりき[**物**] (名) 腕力。

ばりき[**力**] (名) 力。

ばりき[**力**] (名) 力。

ばりき[**力**] (名)

きき[利](名)㊀きくと「左ー」。㊁ものを。かうのう。「藥のー」(應輪)。

きき[聞](名)きこえ。「人ーが悪し」。

きき[記旗](名)うまるし。又、ものるしばた。

きき[器機](名)機械。

きき[汽機](名)蒸氣機械の略言。

きき[危機](名)あやふき場合。あぶなきをり。「ーに際す」。——**いっぱつ**[危機一髪]殆ど危機に陥らんとする場合。

きき[忌諱](名)忌みはゞかると。「ーに觸る」。

きき[歸期](名)歸る時。歸る期限。「ーを問ふ」。

きき[木木](名)多數の木。「ーの梢」。

きき[奇技](名)きめうなるわざ。めづらしきわざ。

きき[危疑](名)あやぶみ疑ふと。ためらふと。

きき[詭僞](名)いつはり。たぶらかし。

きき[義氣](名)義にいさむ意氣。「ーたる山」。

きき[巍巍](名、副)高く大いなるさまにいふ語。

きき[疑義](名)疑はしき意義。解し難き意味。

きき(名)【動】喉鄂類中なまづ科に屬する魚。頭扁く胴長し、體骨硬く且鋭尖にしてこれを以て物を刺す。體は茶褐色にして黑き斑紋あり。體長大なるは一尺許。淡水に產す。ぎゞう。ぎす。(貫鎖魚)。

きき[擬議](名)㊀あやぶみためらふと。㊁評(アラ)ひ又は論らんとしかくると。

きき-**あ**・**く**[聞飽](自、か四)㊀十分に聞く。たびたび聞く。㊁已に聞きて更に聞くを厭ふ。

きき-**あは**・**す**[聞合](他、さ下二)たづねあはす。てらしあはす。とひあはす。

きき-**あはせ**[聞合](名)きゝあはすこと。とひあはせ。〔——**る**(他)「きゝあはすこの訛。

きき-**いだ**・**す**[聞出](他、さ四)㊀秘密を探り知る。(探知)。㊁聞きはじむ。

きき-**いみ**[聞忌](名)遠方の親類などの死去を聞きて、忌みにこもること。

きき-**い**・**る**[聞入](他、ら下二)人のいふ所を承引す。うけがふ。うけひく。〔——**る**[聞入](他)「きゝいるこの訛。

きき-**いれ**[聞入](名)うけがふ。うけひく。うけひき。

きき-**きう**[笄裘](名)《列子に良弓之子必學爲裘、冥良冶之子必學爲裘とあるに出づ》親の業を其まま受け繼ぐこと。又、親より譲らる業。「ーを繼ぐ」。

きき-**きう**[氣球](名)㊀輕氣球の略言。㊁內部に氣體の充滿するによりて、球狀をなすもの、稱。即ち「シャボン球の如きもの。

きき-**きう**[鬼臼](名)【植】小蘗(ベ)科に屬する草、葱は直立し其端に葉を着け、背白色の花を開き、黃色の黑實を結ぶ。これを細末にし消毒用として用ふ。[一九日、鬼藥)。

きき-**きう**[歸休](名)【動】「きぎ」に同じ。

きき-**うで**[利腕](名)右方の腕。

きき-**きう**[歸休](名)我家にかへりて休息すること。

——-**へい**[歸休兵](名)事務勉勵にして品行方正なりし等により、定期の現役を終へずして、特に歸休を許されたる兵士。

きき-**れ**・**く**[聞置](他、か四)あらかじめ聞く。聞きて覺えおく。「て案外興のさめること。

きき-**れち**[聞落](名)㊀聞きおとすこと。㊁聞きおとしたること。

きき-**れと**[聞落](名)きゝおとしたること。

きき-**れと**・**す**[聞落](他、さ四)聞くべきを聞かずにやむ。きゝもらす。

きき-**れほえ**[聞覺](名)㊀一度聞きたる覺のあること。㊁正しく教授を受けず、人の物語などをきて覺え知ること。みゝがくもん。

きき-**れよび**[聞及](名)聞き及ぶこと。でんぶん。

きき-**れよ**・**ぶ**[聞及](他、は四)かねてより聞きてあり。つたへきく。

〔**きき**-**がうまや**[聞巧者](名)物事を聞くに其判別のたくみなること。「記錄(筆記)」。

きき-**がき**[聞書](名)聞きて書き取ること。又、其書。

きき-**かぶり**[聞囓](名)きゝかぢること。

きき-**かぶ**・**る**[聞囓](他、ら四)㊀よくは聞かずして少しく聞く。㊁其物事の皮相又は端緒のみを學ぶ。すこしく知る。

きき-**ぎく**[黃菊](名)㊀【植】花の黃色なる菊。㊁かさねの色目、表は黃にして裏は青なるもの。

きき-**ぐる**・**し**[聞苦](形、二)聞くに忍びず。聞くにつらし。

(**きき**-**くわいくわい**[奇奇怪怪](名)極めて奇怪なること。いとあやしきこと。「の稱。

きき-**ごま**[利駒](名)將棋の駒の金將・銀將など。

〔**きき**-**ざけ**[聞酒](名)酒を少し味ひて良否をためすこと。酒の鑑定。又、其ために飲ます酒。

きき-**さ**・**す**[聞差](他、さ四)よくは聞かずしておく。なかば聞きて止む。

++**きし**[雉子](名)【動】雉の古名。(山梨、銀鶏)。

++**きす**(名)【動】前條に同じ。「燒け野のー」。

きす-**すぐし**[聞過](名)きゝすぐすこと。

きす-**すぐ**・**す**[聞過](他、さ四)聞きすごす。

きす-**すごし**[聞過](名)きゝすごすこと。

きす-**すご**・**す**[聞過](他、さ四)㊀聞きて其まゝにさしおく。㊁過度に心をこめ聞きて、其眞相をあやまる。

きす-**す**・**つ**[聞捨](他、た下二)聞きて其まゝに打ちすておく。聞きながす。きゝすごす。

きき-**ずて**[聞捨](名)きゝずてにすること。きゝてなはざりにすること。「ーならず」。〔——**る**[聞捨](他)「きゝすつこの訛。

きき-**すま**・**す**[聞澄](自、さ四)よく注意して聞く。氣をつけて聞く。「け。

きき-**ずみ**[聞濟](名)きゝすみたること。きゝとゞけ。

きき-**す**・**むま**[聞濟](他、ま四)他のいふ所を納得(ナツ)す。ものゝきゝとゞく。

きき-**だ**・**す**[聞出](他、さ四)きゝいだす。

きき-**つき**[聞續](名)いひつたへ。

きき-**つ**・**く**[聞付](他、か下二)㊀それと心付きて聞く。聞きてそれとこゝろづく。㊁きゝいだす。きゝだす。

きき-**つ**・**ぐ**[聞續](他、か四)人より人へとつたへ聞く。かたりつぐ。傳聞す。

きき-**つけ**[聞付](他)「きゝつくこの訛。

きき-**つた**・**ふ**[聞傳](他、は下二)人づてに聞く。傳聞す。

きき-**つたへ**[聞傳](名)聞きつたふること。いひつたへ。〔——**る**[聞傳](他)「ききつたふこの訛。

きき-**て**[聞人](名)聞く人。よく聞く人。

きき-**で**[利手](名)きゝうで。

きき-**さが**・**め**[聞咎](名)きゝとがむること。

きき-**さが**・**む**[聞咎](他、ま下二)聞きて其事をとがめだてをなす。「あるべき所。

きき-**どころ**[利處](名)よく利きてゐるしの所。聞く甲斐(ガヒ)ある所。

きき-**ところ**[聞處](名)よく注意して聞くべき所。

きき-**とど**・**く**[聞屆](他、か下二)申立を聞き入る。許可す。ゆるす。

きき-**とどけ**[聞屆](名)きゝとゞくること。許可。

〔——**る**[聞屆](他)「きゝとゞくこの訛。

きき-**ども**-**な**・**し**(形、二)聞くことを欲せず。きゝたくなし。

きき-**ざり**[聞取](名)きゝとること。「きて飽る。

きき-**ざ**・**る**[聞取](他、ら四)㊀耳に受けとる。聞きて記憶す。〔——**る**[聞取](他)「きゝとるこの訛。

きき-**ざれ**[聞蕩](名)きゝとること。

[聞蕩](自)「きゝとるこの訛。

きき-**ながし**[聞流](名)聞きながすこと。

きき-**なが**・**す**[聞流](他、さ四)聞けども心をとめず。聞きすつ。きゝすぐ。

きき-**な**・**す**[聞做](他、さ四)聞きてそれとなす。

きき-**なほし**[聞直](名)きゝなほすこと。

きき-**なほ**・**す**[聞直](他、さ四)更に尋ね聞く。くりかへしてきく。

きき-**にく**・**し**[聞惡](形、二)㊀きゝぐるし。㊁問ひがたし。

きき-**ぬ**[生絹](名)きいとの絹布。いまだねらぬ絹布。(白生絹)。「ら寢ること。

きき-**ねいり**[聞寢入](名)人の物語を聞きながら寢ること。

(**きき**-**きふ**[危急](名)危難の切迫せること。——**そんばう**[危急存亡](名)存するかほろぶるかといふ極めて危急の場合なること。「ーの秋」。

(**きき**-**きふ**[僞級](名)にせくらべ。

きき-**ふけ**・**る**[聞耽](他、ら四)耳を傾け心を寄せて聞く。「て、珍しと思はず。

きき-**ふ**・**る**[聞蒔](他、ら上二)聞き慣れ—もいとうるさし」(外聞)。㊁世人(のきこえ)「世の

きき-**みみ**[聞耳](名)㊀世人(のきこえ)「世の聞かむとすること。㊁聞かむとすること。

きき-**め**[利目](名)利く力。ものるし。かうのう。

(**きき**-**めうめう**[奇奇妙妙](名)極めて奇妙なること。いとふしぎなること。「嬰(ヒ)あるもの。

きき-**もの**[聞物](名)聞く價値あるもの。聞く甲斐。

きき-**もらし**[聞洩](名)きゝもらすこと。

きき-**もら**・**す**[聞洩](他、さ四)聞きおとすこと。

きき-**もれ**[聞洩](名)きゝおとし。「す。(聞漏)。

きき-**やう**[桔梗](名)㊀【植】桔梗科に屬する草、高さ三四尺、葉は楕圓狀にして細小なる鋸齒を有す。秋の初め、五瓣の花を開く、花は大形にして紫色若しくは白色なり、觀賞用として栽培せらる。きちかう。(白藥)。㊁桔梗の花の如き色。薄紫に稍や藍を帶びたる色。

きき-**やう**[歸京](名)みやこへ歸ること。

きき-**やう**[歸鄕](名)故鄕へかへること。

(**きき**-**やうだい**[義兄弟](名)「きけいてい」に同じ。

きき-**やく**[棄却](名)㊀うちすて、用ひざること。すてゝとりあげざること。㊁【法】上告審にて、其上告を理由なきものとして却下すること。

(**きき**-**やく**[義脚](名)「きそく」(義足)に同じ。

(**きき**-**やく**[戲謔](名)たはむれ。おどけ。

(**きき**-**やく**-**るゐ**[鯨脚類](名)【動】哺乳動物に屬する魚形の海獸、全體に密毛を有し、趾間に膜を有す、後肢は後方に向ひて鰭狀をなす、多くは寒帶の海に棲息し時々上陸す、おつとせい・あざらしあじか等これに屬す。

(**きき**-**よ**[起居](名)㊀たちゐ。おきふし。㊁其人の日常の狀況。ようす。「ーを問ふ」。

きき-**よ**[箕踞](名)開足をなげだしてすわること。

(**きき**-**よ**[歇歡](名)すゝりなき。むせびなき。

(**きき**-**よ**[義擧](名)義のために起す事業。義のた

えへ

えへ

えへ

(**きくわ**[歸化](名) 他國の人民若しくは無所屬國の人民が、或國の國籍を取得して其國の人民となること。我國現今の制にて、外國の人民が我國に歸化するには、國籍法の規定に適合する者にして內務大臣の許可を得れば、歸化することを得。——**おん**[歸化人](名) 或國に歸化せる人。

(**きくわ**[氣化](名)【理】液體より氣體に變化すること。——**ねつ**[氣化熱](名)【理】液體が同溫度の氣體に變ずるに要する熱。「—を問ふ。」

(**きぐわ**[起臥](名) おきふし。やうす。きよ。

(**きくわい**[毀壞](名) そこなひやぶること。

(**きくわい**[機會](名) ばあひ。まあひ。をり。まぎは。はずみ。「—を候ふ。」

(**きくわい**[奇怪](名) ●怪しむべきこと。ふしぎ。●心得難くあること。とがむべきこと。「—なる振舞。」

(**きくわい**[議會](名) ●帝國議會又は府縣會・郡會若しくは市町村會の如く、或物事の議決を職とする合議制の機關。●帝國議會の特稱。「—開會中。」

(**きくわん**[汽罐](名) 火を焚くき水を熱して蒸氣を發生せしむるに用ふる大いなる鐵、銅鑛の板又は管にて製造す。其形體一ならざれど、要するに焰管式と水管式との別あり、後者は前者に比し蒸氣の發生急速にして且堅牢なり。燃料は固體と液體とありて、固體はおもに石炭を用ひ、液體は多くは石油を用ふ。ぶようきがま。

(**きくわん**[汽管](名) 蒸氣の通路なる管。

(**きくわん**[器官](名) 動植物體の種々の生活作用を分擔する局所の稱。分つて二とし運動及感覺に屬するものは、これを動物性器官といひ、營養及生殖に屬するものは、これを植物性器官といふ。(機官)。

(**きくわん**[奇觀](名) めづらしきさま。かはりたる見もの。「千古の—」。

(**きくわん**[氣管](名) 人類及高等動物の呼吸器の一部、肺の上部より食道の前面に沿ひ、喉頭を經て鼻腔に開通せる管、空氣の呼吸はこれを通じて行はる、又、昆蟲のは、無數に分岐せる顯質の細管にして體內に遍布せり。——**ぶ**[氣管支](名) 人類及高等脊椎動物の氣管の端より分れて左右の肺屬に各一本づゝ分出せる小さき氣管。

(**きくわん**[機關](名) ●他の行動の目的を達するため使用又は設置せられたるもの。「政黨の—」「國家の—」。——**くわん**[機關官](名) 專ら機關の事をつかさどる高等官。——**ぶ**[機關紙](名) 其ものゝ機關となり、其ものに利益ある報告言論を力むる新聞又は雜誌。——**ぶや**[機關車](名) 鐵道の列車の蒸汽機關を備置せるもの。——**ぶゆ**[機關手](名) 機關の運轉又は修理等をつかさどる人。——**はう**[機關砲](名) 少數の人員を以て少時間に多數の彈丸を發射し得る火砲、機關を設け自働的に發火の準備をなすが故に、たゞ引金を引けば、一分時間に數百發の彈丸を間斷なく發射し得、且隨意に砲口を上下左右するを得。

[きくわんはう]

(**きぐわん**[貴官](代) 官吏の敬稱。

(**きぐわん**[祈願](名) 神佛にいのりねがふこと。「神佛に—をかけ。」——**ぶよ**[祈願所](名) 祈願の事を依託する寺院。

(**きくわん**[議官](名) ●明治の初年に設置せられ、大政の評議に參せし高官。●元老院の議員。

(**きくん**[貴君](代) 同輩又は稍や貴き人に對して用ふる對稱の代名詞。あなた。

(**きくんぶ**[僞君子](名) 君子らしき舉動をなせど、實際の性狀は君子ならざる人。

(**きけい**[奇計](名) ●巧なる謀計。普通にあもひつかざるはかりごと。(妙計)。●秘密なるはかりごと。「陳平六たび—を出す。」

(**きけい**[奏傾](名)《あふひの花の日の方へ傾く義》心ひとへに其人の德に服すること。

(**きけい**[奇警](名) すぐれてするどくさとき。

(**きけい**[畸形](名) 普通の形に異なること。又、かたは。不具。——**ぶ**[畸形兒](名) 異狀の體軀をなす小兒。かたわもの。

(**きけい**[貴兄](代) 貴君に同じ。あなた。

(**ぎけい**[義兄](名) ●義を結びて兄と定めたる人。●姉の夫又は妻の兄の稱。

(**ぎけい**[僞計](名) いつはりの手段。

(**ぎけい**[技藝](名) わざ。藝術。技術。

(**ぎけいてい**[義兄弟](名) 義を結びてなりたる兄弟。ぎきやうだい。「行をなすと。」

(**きけう**[奇矯](名) 強ひて人よりかはりたる言行をなすこと。

(**きげき**[喜劇](名) ●看客に歡笑の情を催さしむる脚色の演劇。多くは滑稽の趣味あるもの。●傍觀者をしてそゞろに歡笑の情を催さしむる事態。

(**きけつ**[起結](名) ●詩の起句と結句と。●おこりとむすび。(歸結)。

(**きけつ**[歸結](名) ふまひ。落着。「とふまひと。」

(**きけつ**[剖決](名) ●ほりものとがたな。●版木を彫ること。

(**きけつ**[既決](名) ●已にきまりたること。●判決の已に確定したること。——**ぶん**[既決囚](名) 有罪の裁判已に確定したる囚人。

(**きけつ**[虧月](名)【天】滿月より新月に至るまでの間の稱。太陰の影が其間漸次虧くるよりいふ。

(**きげつ**[期月](名) かねて定めたる期限の月。

(**きげつ**[朞月](名) まる一月。

(**きげつ**[忌月](名) いみづき。

(**きけつ**[議決](名) 合議して或事柄を可決したること。又、其可決したる事柄。——**けん**[議決權](名) ●議案の表決に加はり、可否の數に計算せらるべき有力なる意見を表示する權利。議會及社團法人の議決權は平等なれど、財團法人の議決權は、出資額によりて制限を設くるを普通とす。●合議制度の機關が或事柄を議決する權利。「議會の—」。

(**きげふ**[機業](名) 布帛を織り出す事業。はたおりの事業。「桐生の—」。——**か**[機業家](名) はたおりの事業を營む人。

(**きげふ**[起業](名) 新に一事業をおこすこと。——**とうさい**[起業公債](名) 事業の設計に要する資金を得んために募集する公債。

(**きげふ**[企業](名) ●くはだつる事業。又、事業をくはだつること。●【經】生產營利の目的を以て、生產營利に要する諸種の條件を結合し經營する事業、即ち、經濟的事業、規模を標準として大企業と小企業とに分ち、人を標準として單獨企業と共同企業とに分つ。大企業とは、多數の雇人を使役し企業家がそれを指揮監督するもの。小企業とは、企業家が勞働者を兼ねるもの。單獨企業とは、企業家一人にして一切の責任を負ふもの。共同企業とは二人以上の共同になるものをいふ。——**か**[企業家](名) 企業に從事する人。——**ねつ**[企業熱](名) 經濟的事業を起さんとする人氣。

(**きけん**[危險](名) 安全ならざること。あやふきこと。

(**きけん**[奇驗](名) ふしぎなる功驗。「藝の—」。

(**きけん**[棄權](名) 自家の權利を棄て、行使せざること。「—して投票せず。」

(**きけん**[氣圈](名)【地】大氣が地球を包圍せる「區域。」

(**きけん**[紀元](名) ●建國の初年。●其國の經過せる年を數へ始むる年、我國にては、神武天皇の即位したまひし年をいひ、西洋諸國にては、「クリスト」の降誕六十年前なり。西洋諸國にては、「クリスト」の降誕せし年をいへり。

(**きげん**[期限](名) ●豫め定めたる時期、一定せる時日。(定期、定限)。●【法】法律行爲の履行に關し、將來に於て効力の發生若しくは喪失するとの確定せる事實に附帶したる意思表示。例へば、十二月三十日迄に借金を返濟すと契約すれば、十二月三十日は其期限なり。

(**きげん**[貴顯](名) ●身分の高貴なる人。「—紳士」。●帝室の方々。

(**きげん**[起原](名) おこり。はじまり。(起源)。

(**きげん**[徽言](名) 善美なる言。たゞしきことば。

(**げん**[機嫌](名) ●人の好まぬ事を何ひ問ふに、見量ふべき時機。「ことによりてよくをはからふべきなり。」●起居、安否。●こゝろもち。きもち。「—にさはる。」●酒に酔ひて、心地のよささうなること。——**うかがひ**[機嫌伺](名) 人の起居安否をたづぬること。——**かひ**[機嫌買](名) 人に對する好惡の情の、かはり易く激しやすきこと。又、其性質の人。——**なほし**[機嫌直](名) 不快なる感情を去りて、愉快なる心地となすこと。——**をとる** なごめよろこばす。又、人の氣心にさからはぬやうになす。

(**きけん**[喜見城](名)【佛】帝釋の居所の宮といふ處。

(**きげん**[紀元節](名) 我國三大賀節の一、神武天皇の即位し給ひし紀元の日を祝する祭事、毎年二月十一日に行はる。

(**きこ**[寄戶](名) 寄留する家。

(**きご**[寄語](名) 口上をいひ送ること。ことづて。

(**きご**[奇語](名) 普通思ひつかぬことば。又、巧にして面白きことば。

(**きご**[綺語](名) ●面白きことば。巧なることば。●詩文小說などのかざりたることば。●【佛】十惡の一、眞實に背きて巧に飾りたる言語。

(**きこう**[奇功](名) ふしぎなる功績。すぐれたるいさを。「—を奏す。」

(**きこう**[氣候](名) 氣溫・濕度・空氣の流動又は天氣の模樣若しくは雲雨雪霜等の變化の狀態の稱。其狀態は土地の形勢の異なるによりて同じからず。(季候)。

(**きこう**[氣孔](名) ●【動】昆蟲類などの體の側面にありて呼吸作用をなす數個の孔。これより體中の各所に分布する系統あり。●【植】葉又は莖の表皮の處々にある小孔。此氣孔により大氣中の炭酸瓦斯を吸收し、これを分解したる後にまた酸素を大氣中に放散す。

(**きこう**[貴公](代) もと長者に用ひしが、今日は下輩に用ふる對稱の代名詞。そこもと。

(**きこうし**[貴公子](名) 身分尊き家の男子。

ろ—ゆ　ろくがつ　ろくがつ—ゆうき　ろくがつ—ゆうき　ろくがつ—ゆうべ　ろくがつ—ゆうべ　ろくがつ—ゆうべ

きさん-てん[起算點](名) かぞへ始むる第一次。

きし[岸](名) ㊀陸の水に接近する所。陸と水との分界線。㊁山地の陥入したる間のきりそぎたる如くなりたる處。がけ。やまぎし。

一キ-シ[吉士](名) ㊀もと三韓の官にして、歸化の韓人に、其まゝ授へ呼びし稱。「和邇—」。「阿知—」。㊁後世は、かばねの一、ものに三韓との通譯をつかさどりしもの。「難波—」。

(きさ-む)[貴仕](名) 立身。出世。

(きさ-む)[餘子](名) 下人。又、給仕人。

(きさ-む)[騎士](名) ㊀馬にのれる兵士。㊁馬にのるべき家格の武士。㊂「イギリス」語の Knight を。

(きさ-む)[基址](名) もとゐ。どだい。[譯し呼ぶ語。

(きさ-む)[棄市](名) 支那の刑罰にて、斬罪に處したる上、其死骸を市中にさらすこと。

(きさ-む)[氣死](名) 絶望のあまり氣絶すること。

きじ[雉](名)【動】〈きぎし〉の略言。鶉雉類に屬する鳥。山野に棲息す、目紅く、頭・胸・腹・頸の羽毛に暈しき光澤あり、雌雄ともに、細長なる直き尾を有す、巣を地上に營み雌のみ抱卵す、雛は脱殼するや直ちに奔走して自ら食を求む、肉は美味にして上饌に供す。きぎし。きぎす。(雉子、野鶏、山梁)。

[き　ぎ]

(きさ-む)[棄兒](名) すてご。

(きさ-む)[記事](名) ㊀事實を記載すること。又、事實を記載したる文書。㊁漢文にて、一種の文體、事實を記載するとを主として論議を挿(サシ)まざるもの。

(きさ-む)[機事](名) 機密なる事實。「—密ならざれば成るを害す」。

(きさ-む)[義子](名) やしなひご。養子。

(きさ-む)[技師](名) 官職又は諸會社などにて、專門の智識を要する特別の技をつかさどる職名。

(きさ-む)[義齒](名) いれ齒。[補齒]。

(きさ-む)[義士](名) 義を守る士。なみ〳〵ならぬ節操ある人。「四十七人の—」。

(きさ-む)[疑字](名) ㊀うたがはしき字體。㊁互に似かよふ字形、即ち、己と已と巳となどの類。

(きさ-む)[疑似](名) まちがひ易きと、疑はしきほど似かよひてあると。

(きさ-む)[議事](名) 會合して事を議すること。又、會合して議する事柄。

(きさ-む)[貴酬](名) 返事の書狀の敬稱。ごへんたふ。(んな。

(きさ-む)[季秋](名) 秋のすゑ。ばんきう。

きさら-みかん[紀州蜜柑](名) 紀伊國名草・有田・海部の三郡より出すみかん、其名世に高し、殊に有田郡の產を最上とす。

きじ-かくし[雉隱](名)【植】百合科に屬する草、山地に自生す、通常葉を有せずして、綠色葉狀の小枝を有す、花は殆ど無柄にして白色なり、莖は上昇す。さうちく。

†きし-かた[來方](名) きたりしかた。すぎこしかた。こしかた。

(きさ-む)[儀式](名) ㊀のり。さだめ。㊁公事・神事・佛事若しくは吉凶の物事等に定まりたる設備又は作法。典禮。規式。

†きし-きし(名、副) 固きもの、相磨する音。

†きし-きし(名、副) 「きしきし」に同じ。

(きさ-む)[疑似症](名) 眞性のものにまぎらはしき病氣。「虎列拉の—」。

(きさ-む)[記事體](名) 記事の文體。

(きさ-む)[氣賞](名) ㊀【心】遺傳若しくは身體の特質によりて、限定せられたる心的組織の區別なる狀態。分つて多血質・神經質・膽汁質・粘液質の四種とす。㊁儒家にて、本性の善なるに對し、或は善或は惡なる心の作用をいふ。

(きさ-む)[氣室](名) 押上「ポンプ」にて水の噴出する管に連絡せる圓筒狀の室、水の斷次押し上げらるゝや、此室の空氣壓縮せられ、從ひて水は空氣の壓力を受くるを以て管口より繼きて噴出す。「る。

(きさ-む)[機蘊](名)【動】ちらみ。

(きさ-む)[枳實](名) 枳殼の果實、藥用に供せら

(きさ-む)[期日](名) 特に定めたる時日。期限の日。「—に到る」。

(きさ-む)[奇日](名) はめの歌にあたる日。奇數の日。

†きし-つ-く(自、か四) きしきす。[日

(きさ-む)-にって い[議事日程](名) 其日の議事の順序を豫め定め記したるもの。

きじ-の-を[雉尾](名) ㊀雉子の尻尾。㊁【植】羊齒類に屬する植物、穿鹿房蘆は葉身の上部より下部まとは異狀を呈し、穿鹿房蘆は葉身の上部より下部まで遠續して中肋に平行し、被包は大形にして、葉の緣邊の曲反せるものより成り、其側緣は殆ど中肋に達す。

きじ-ばと[雉鳩](名)【動】鳩鴿類に屬する鳥、嘴は短くして、膨大せる末端のみ角質にして餘は軟皮を被り、翼は長大なり、常に雙棲し、單一の巣を樹上に營み、毎歲二回產卵し雌雄ともに〳〵これを抱す、其雛[ヒナ]は微弱にして親鳥の哺育(ホイク)を仰ぐ。

[きじばと]

(きさ-む)[奇襲](名) 不意に敵陣に突擊すること。

きさ-むふ[生澁](名) 混和物なきもの。

きじ-ふえ[雉笛](名) 狩獵などにて、雉子を呼びよせんために吹く笛。

(きさ-むふん[記事文](名) 記事體の文章。

きさ-べ[岸邊](名) 岸のほとり。

きさ-ぼ[鬼子母](名)【佛】「きしもも」に同じ。——**ぢん**[鬼子母神](名)「きしもも」に同じ。

(きさ-ぼんまつ[紀事本末](名) 歷史の一體、一事件毎に其始末を記して、年代に係はらざるもの。編年體又は紀傳體の對。——**たい**[紀事本末體](名) 前條に同じ。

きし-みち[岸道](名) 岸邊に通ずる道。

きし-む[軋](自、ま四) ㊀すれあひて圓滑ならず。澁滯して利ならず。㊁種(クル)又は草などの回轉するに滯(ナメ)かならずして纏る。

きじ-むしろ[雉席](名)【植】蓋蕨科に屬する草、葉は複葉にして、小葉は鈍頭を有し、托葉は草質なり、雌蕊は短毛を具し一個の胚珠を含有す、花は通常黃色を呈す。「なす。

きしめか-す[軋](他、さ四) きしめくやうにな

きしめ-く[軋](自、か四) きし〳〵す。「—車に乘りてありくもの」。

(きさ-め)ん[碁子麵](名) 一種の麵、小麥の粉を原料として竹筒の端にて押しきり、ゆで、いり豆の粉を著けたるもの。又、平うちのうどん。

(きさ-も[鬼子母](名) ㊀【佛】女體の神、其像一兒を懷[コロ]にして吉祥果[ザ]を持つ、「インド」大兜國中に住し、所生千子ありて其最小なるは極めて愛育する所なり、始め他人の子の血肉を食ひしが、後遂に佛の五戒を受け千子と共に正法に歸依したりといふ、子なき人は求めればこれを得、疾病あれば鬼りて安きを得といふ。カリテイも。——**ぢん**[鬼子母神](名) ㊀【佛】「きしもも」に同じ。㊁子を多く持ちたる女。

[きしもぢん]

(きさ-め)や[騎射](名) 馬上にありて弓を射ること。やぶさめ。いぬおふもの。うしおふもの。かさがけ等の總稱。步射の對。

(きさ-め)や[汽車](名) 蒸氣を機圓の動力とし、其運轉によりて軌道の上を走る車。

(きさ-め)や[記者](名) 文筆に由りて生業を營む人。特に、新聞又は雜誌の記者の稱。(作者)。

(きさ-め)や[喜捨](名) 心より進みて、佛に物を供じ又は貧人に物を施すこと。「財の—」。

(きさ-めう-し[騎將](名) 騎馬の大將。

(きさ-めう-し[徽章](名) 衣服又は帽子などに附く記章。「旗の稱。

(きさ-めう-ゆう[旗章](名) ㊀旗。㊁單に、

(きさ-めう-ゆう[起床](名) ねどこよりおき出ること。

(きさ-めう-ゆう[氣象](名) ㊀人の生れつきたる心情の狀態。こゝろだて。きしつ。(氣性)。㊁精神又は意氣。㊂おもむき。けはい。「一萬千」。㊃寒・暑・冷・濕・晴・曇、其他すべて、大氣中に起る物理的變化の現象。——**がく**[氣象學](名) 氣象の現因を研究する學問。——**だい**[氣象臺](名) ㊀大氣中の氣象を觀測する臺。㊁大氣中の氣象の觀測又は研究に從事する所。——**もの**[氣象者](名) 氣性の鋭き人。

(きさ-め)ゆ[起請](名) ㊀☆古昔、長上に對して物事を誓ひねがふための文書。㊁約束に偽りなきことを神佛にかけて誓ひ、起請前書をなして志たたぬたる證書、近時は熊野牛王のお札の裏にえたゝむ。ちかひのえやうえよ。せいき。きしやうもん。「—をとり交はす」。㊂轉じて、たゞ誓約の事を認めたる證書にいふ。「互に夫婦の—をとり交はす」。☆——**うて**[起請討手](名) 起請にそむきて罪を得ること。——**まへがき**[起請前書](名) 起請にて誓ふ事柄を掲げ、若しこれに違ふに於てはえか〳〵の神佛の罰を蒙る旨を姓名の前に記したる文句の稱にして、即ち、「梵天帝釋四大天總日本國中六十餘州大小神祇殊伊豆箱根開所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類等屬神罰冥罰各可蒙者也、仍起請如件」などの如し。——**もん**[起請文](名) 起請の文書。

(きさ-やう-じ[机上](名) つくゑの上。(几上)。

(きさ-やう-じ-の-けん[机上燈下見](名) 机の上ともしびの下などにて考へたるほどの實際に經驗なき淺薄なる考案。——**の-けん**[机上見](名) 前條に同じ。

(きさ-やう-たい[氣狀體](名) 氣體に同じ。

きさ-やう-ゆ[生醬油](名) 混和物無き醬油。

きじ-やき[雉燒](名) ㊀一二寸四方に豆腐を切り、鹽を付けて燒き、熟酒を掛けたるもの。㊁魚肉などを醬油に付けて燒きたるもの。㊂茄子を切りて、胡麻の油をひき味噌をつけて燒きたるもの。

†きしや-と[細編](名)【動】「きさご」の誤。

はじき[細編彈](名)「きさごはじき」の誤。

きさや-きゆう[騎射宮](名)【天】十二宮の一、一に人馬宮ともいふ。

(きさ-ゆ[旗手](名) ㊀はたもち。㊁單旗を捧持するもの、軍隊附の少尉これにあたる。

あいうえお　かけくきこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

きしゆ[起首](名) 物事のかしら。はじめ。
きしゆ[亀手](名) ひびのきれた手。
きしゆ[喜壽](名) 七十七歳の祝賀の稱。喜の字を草書にかけば七四七十七といふ字の如くなればいふ。
きしゆ[技手](名) 諸官廳又は諸會社に於て、技師の下に屬して技術に從事するもの。
きしゆ[義手](名) 切斷せられたる手などにつくる假製品又は木製の手形をなすもの。「ると。
きしゆ[蟻聚](名) 蟻のごとく數多く寄り集ま
きしゆり[騎從](名) 騎馬にてともをして行く「き人。老成人。
と。又、其人。
きしゆく[耆宿](名) 年老いて其物事に經驗多
きしゆく[鬼宿](名) ㊀二十八宿の一。鬼星。㊁陰暦にて、正月は十一日・二月は九日・三月は七日・四月は五日・五月は三日・六月は一日・七月は二十五日・八月は二十二日・九月は二十日・十月は十八日・十一月は十五日・十二月は十三日の稱、其日は嫁とりの外は萬事に吉なりといふ。
きしゆく[寄宿](名) ㊀他家に身を寄せて居ると。寄寓。㊁學校などに生徒のやどり居ると。㊂「きしゆくしゃ」の略稱。——**しゃ**[寄宿舍](名) 學校の生徒などの寄宿するために設けたる家屋。「房。
きしゆく[耆熟](名) 年老いて事になるゝこと。
きしゆつ[奇術](名) 奇妙なる技術。——**きしゆつし**[奇術師](名) 奇術を行ふ人。てづまつかひの類。
きしゆつ[記述](名) ふるしのぶると。ときあかすこと。——**がく**[記述學](名) 研究の現象に關する眞理・法則を說明する學。理學・化學等の類これなり。
きしり[軌](名) きしること。
きしり(名、副) よく適合するさまにいふ語。「—合理想を實際に表現する懸繩。わざ。「詩繪の—」。——**か**[技術家](名) 技術を業となす人。又、技術に長けたる人。——**たい**[技術隊](名) 工兵隊。鐵道隊・電信隊等の總稱。
きしん[季春](名) はるのすゑ。ばんしゅん。
きしゆん[歸順](名) 反抗の心を改めて歸服すると。敵たりしものが我國又は我君に服從すると。
きしよ[貴書](名) 他人の手紙の敬稱。尊翰。
きしよ[寄書](名) 新聞又は雜誌などに、掲載するために其社(他より寄附する文書。きかう。——**か**[寄書家](名) つねに寄書をなす人。
きしよ[貴所](名) 他人の出動せる所若しくは居住する所の敬稱。
きしよ[貴所](代) あなた。そもと。
きしよ[偽書](名) にせがみ。にせがき。(偽筆)。
きしより[騎乘](名) 馬にのること。
きしより[偽證](名) ㊀いつはりの證據。㊁[法]法廷に證人として召喚せられ、宣誓をなしたる後、故意を以ていつはりの事實を申述すること。——**ざい**[偽證罪](名) [法]法廷に於て、故意を以て偽證又は詐偽の鑑定若しくは通事をなす犯罪、裁判宣告に至らざる前に自首するときは、其罪は免ぜらるゝものとす。
きしよく[氣色](名) ㊀其心意の顏容にあらはれたる狀態。がんしよく。「—を害ねる。」㊁こゝろもち。きもち。「—が穩るい」。㊂やうす。ありさま。
きしよく[饑色](名) うゑたる容貌。(飢色)。
きしよく[寄食](名) かゝりうどゝなりて、他人に養はるゝこと。ゐさふらふ。
きしり[軌](名) きしること。
きしり(名、副) よく適合するさまにいふ語。「—合して音を起す。相隱れて掛かに通ぜず。「車輪が—」。㊁互に親ひて離み寄ふ。あつれきす。(轢、軋)。「鐵。
きしろ[議事錄](名) 議場に於ける議事の記
きしろふ[はふ]「はふ」(自、は四)「きしる」の強言。
きしん[鬼神](名) ㊀死人の靈魂。「精忠—を感ぜしむ」。㊁惡しく暴き神。あらがみ。おにかみ。㊂惡るべき暴力を有するもの。——**ろん**[鬼神論](名) 鬼神に就きて研究したる說。
きしん[寄進](名) ㊀神社佛閣などの造營に、財物を寄附すること。きふ。㊁人に物を施し與ふること。
きじん[奇人](名) 氣性又は品行の普通ならざる人。
きじん[鬼神](名) おにかみ。きしん。
きじん[畸人](名) かたはもの。不具者。
きじん[義心](名) 義に勇むこゝろ。
きじん[疑心](名) ㊀疑ひいぶかる心。うたがふこゝろ。㊁そむかんとする心。ふたごゝろ。——**あんき**[疑心生暗鬼]うたがふ心高じて、ありもせぬ事實を想像して、惡れうたがふにいふ。「人。
きじん[義人](名) 堅く義を守る人。みさを高き
きじん[擬人](名) ㊀自然人にあらざるものに、人格を附すること。又、其附せられたるもの。㊁非情のものを人類即ち有情のもの、如くにいひなすこと。例へば、波怒る、花笑ふなどの如し。
きす[鱚](名) [動]硬鱗類きす科に屬する魚。鹹水及淡水に生ず、口小さくして上顎は下顎を蓋(おほ)ふ、背部は淡黃色にして腹部は淡白色に稍々淡黃色を帶ぶ。體長大なるもの一尺許に達す。我國西南東海に多く產す。(鼠頭魚、鶏魚)。
きす[着](他、さ下二) ㊀衣服などを他

はひふへほ　まみむめも　やいゆえよ　らりるれろ　わゐうゑを

に著しむ。㊁上よりつゝみ被らす。かぶす。「銀髮に金を—」。㊂受けしむ。蒙らしむ。「無き罪を—」。
きす[歸](自、さ變)。「歸」(自、さ變) ㊀趣向す。おもむく。「衆水遂に海に—」。㊁集合す。あつまる。㊂かへる。もどる。㊃依附す。よりつく。「賢者これに—」。㊄婚嫁す。とつぐ。「遂に某氏に—」。㊅をはる。又、をさまる。
きすぐ[歸](他、さ變) ㊀送附す。おくる。㊁託附す。もたす。㊂集合す。あつむ。「天下を一に—」。㊃委任す。まかす。「此事一に某氏に—」。㊄ゆるす。㊅をふ。又、をさむ。
きすぐ[記](他、さ變) ㊀書きとむ。ふるす。㊁記憶してあり。おぼゆ。
きすぐ[期](他、さ變) ㊀待ち設く。まつ。㊁かぎる。ちぎる。㊂かぎる。さだむ。「なほ他日を—」。㊃ねがふ。もとむ。「必ずこれを得んと—」。
きず[疵](名) ㊀斬られなどして皮肉破れたる處。身體に生じたる缺損。「刀の—」。(傷)。㊁すべて、物體に生じたる缺損の稱。「茶碗の—」。(瑕)。㊂指していふべき不完全の箇處。問題すべき點。
きず[生酢](名) 混和物無き酢。「橙の—」。
きす(名) [動]きりゝす。京都の方言。
きすぐ(他、さ變)。[擬](他、さ變) ㊀あてがふ。さしあつ。「刀を胸に—」。㊁まねす。まねぶ。「書體を—」。㊂くらぶ。比す。「自ら古の偉人に—」。「ふ。
きすぐ[犧](他、さ變) 犧牲をなす。よそはす。
きすぐ(他、さ變)。[議](他、さ變) ㊀相談す。はかる。「寂かに事を—」。㊁合議す。あつまりはかる。
きすぐあと[疵痕](名) なほりたる瘡のあと。
きすぐり[奇數](名) [數]一・三・五・七などの如く、二を以て除して殘餘を生ずる數。偶數の對。
きすぐ[歸趨](名) ㊀もむく所。「—を同じくす」。㊁むね。おもむき。
きすぐり[基數](名) [數]一より九までの數の稱。
きすぐり[擬數](名) [數]代數の級數の一。等差級數より導出せらるゝもの。
なり、初項は必ず一にして、其番目の項の價が、與へられたる等差級數の初項より同番目迄の總ての項の和に等(ひと)しきもの。又、一の擬數を基礎としもとの擬數を作りたると同じ方法を以て得たる級數。
きすぐりはふ[はふ]**しき**[記數法](名) [數]數を記する方法、先づ最高位の數を記し、順次に其右に次位の數を記し、若し或位に其數なきときは零を記す。例へば、三千二百四は、3204なるが如し、整數と小數とを分つには小數點(.)を用ふ。若しくは(,)を用ふ、例へば、八十三個七分五厘は83.75なるが如し、若し小數のみなるときは、小數點の上に一箇の零を置く。例へば、三分五厘は0.35なるが如し。
きすぐ[生漉](名) ㊀楮・雁皮などの外他物を混和せずして、紙を漉くこと。㊁「きずきがみ」の略言。——**がみ**[生漉紙](名) きずきにしたる紙。きがみ。「—とりのこ」。
きすぐ(名、副) 人の動作などのかどばるしく親み易からざるさまにいふ語。「—した男」。
きすぐ(名) すなほにして言行にかざりなきこと。
やうぢき。「木強」。
きずぐすり[疵藥](名) きずに塗抹する藥。
きずくち[疵口](名) きずの表に近き箇處。「—鄉
きすど[醋子](名) [動]「きす」の一名。
きする[既遂](名) なしとげたること。——**ん**[既遂犯](名) [法]犯罪の成立要素を具備したる犯罪行爲。
きする[奇瑞](名) めでたき兆。
きする[氣隨](名) 他の都合を顧みして、我思ふ所を立てとはさんとすること。きまゝ。わがまゝ。
きする[黃水晶](名) [鑛]水晶の一種、色黃なるもの。「がひ。
きせい[祈誓](名) 神佛に祈り誓ふこと。ぐわん。ね
きせい[既濟](名) 「きさい」に同じ。
きせい[既成](名) 物事のすでに成り上りたる
きせい[規制](名) 規則上のさだめ。「と。
きせい[歸省](名) 親見舞にかへること。故鄉をもとがれとふと。きせう。「歸鄉」。
きせい[期成](名) ㊀或物事を必ず成さんとを目的とすること。㊁其物事の必ず現(アラ)れ成ること。
きせい[寄生](名) 自ら獨立して生存すると能はざる動植物が、他の動植物の內若しくは外に寄り、それより營養を得て生存すること。
きせい[擬勢](名) 外面のいきほひ。
きせい[犧牲](名) ㊀神に供ふる生物。いけにへ。㊁或目的のためになげだし用ふる物事。「身命を—にして國事に奔走す」。
きせい[擬製](名) ㊀他物に模擬して製造すること。又、其製造せられたる物。「—の品」(僞製)。㊁ぎせいどうふ」の略言。「の現はるべき原因。
きせいげいん[期成原因](名) 當然其結果
きせいとん[寄生根](名) [植]寄生植物の根。他の植物體に着生し其體中に浸入して、これより營養を取るもの。
きせいぶつ[寄生植物](名) [植]他の植物體に着生して生存を保つ植物。きくらげ・ましひ

たけ・かび等これなり。

きせい・きよくぶつ［氣生植物］(名)【植】氣根により大氣中より養分を吸收して生存する植物。例へば、せきこく・ふうらん等これなり。

きせい・ちゆう［寄生蟲］(名)【動】他の動物體に寄生せる蟲、條蟲・蛔蟲等これなり。

きせい・どうぶつ［寄生動物］(名)【動】他の動物體に寄生し、それより營養を攝取して生活する動物、條蟲・蛔蟲等これなり。

きせい・どうふ［擬製豆腐］(名) 豆腐の一種、豆腐に玉子などを入れて甘味を付け、又、多少の野菜物などを加へて調したるもの。

きせい・どうめい［期成同盟］(名) 或物事を成就せしめん目的にて、幾多の團體が同盟をなすこと。

きせい・ろん［機制論］(名)【哲】宇宙の現象を、因果律の行動によりて生じたる偶然の結果となす說。目的論の對。

きせ・せき［貴戚］(名) 高貴なる方の親屬。

きせ・せき［鬼籍］(名) 過去帳。(八雲)「——に入る」「鬼籍」死去したるにいふ。

きせ・せき［奇蹟］(名) 自然法にてはあり得べからざる現象、不可思議にして其理由の解釋すべからざる形跡。例へば、基督の復活又は昇天等の如し。

きせ・せき［軌跡］(名)【數】或要件に適したる點を有する線又は線の部分若しくは線の一群が、其點に對する稱。

きせ・せき［輝石］(名)【鑛】結晶の角閃石に似たる鑛物、塊色多くは綠色なり。

きせ・せき［氣急］(名) 急ぐと。いらいらと思ふと。き

きせ・せき［議席］(名) 議場に於ける議員の席。

きせ・せきれい［黃鶺鴒］(名)【動】せきれいの一種、胴部黃色なるもの。

きせ・せけん［器世間］(名)【佛】この世の中。

きせ・せつ［既設］(名) すでに設けあれたること。

きせ・せつ［季節］(名) とき。をり。「一に會ふ」(期節)。

きせ・せつ［氣節］(名) 意氣と操守と。きがい。きこつ。けんき。「一を重んず」。

きせ・せつ［氣絕］(名) 驚愕若しくは打擊にあひなどして、一時氣息絕ゆること。(絕息)。「ざると。

きせ・せつ［義絕］(名) 在來の緣故を斷ちて交通せざること。

きせ・せなが［着脊長］(名) 大將の着る通常の鎧。

キセル［烟管］(名)《傳來不詳の外國語、一說に南洋語なりといふ》きざみ烟草を飲む具、金屬・牙・骨等の名所あり。——**づつ**［烟管筒］煙草入の附屬具にして、烟管を入るゝための筒。——**ぶくろ**［烟管袋］(名) 烟管を入るゝ袋。——**やき**［烟管燒］(名) 烟管に烟草を詰め、火を付けて肌などに燒印すること。

きせ・せる［着］(他)「きす」の轉。

きせ・わた［着綿］(名)【植】菊のきせわた。【植】莖形科に屬する宿根草、高さ五六尺許、莖は方形なり、葉はやくもさうに似て毛を有し對生す、花は淡紫色なり。(藍菜)。

きせん［木錢］(名)【宿屋】にて、旅人自ら米を携へて、これを炊ぎたる薪炭の料のみを仕拂ふと。【木錢宿に宿泊すること。

きせん［貴賤］(名) 貴きものと賤きものと。

きせん［機先］(名) 他より先んじて事を行ふこと。

——**をせいす**［制機先］敵よりさきんじて事を行ひ、敵の勢を抑ふること。

きせ・せん［汽船］(名) 蒸氣船の略言。

きせ・せん［基線］(名)【地上或二點間の距離を精しく測りて、高度の標準となすもの。【すべて他の基となる線の稱。

きせ・ぜん［喟然］(名、副) 歎息するさまにいふ語。

きせ・ぜん［義戰］(名) 道義上より起したる戰爭。名義たゞしき戰爭。

きせ・ぜん［巍然］(名、副) 高大なるさまにいふ語。

きせ・ぜん［僞善］(名) 外面をつくろひて善事を行ふと、心からならざる善事。——**ものや**［僞善者］(名) 僞善を行ふ人。ぎくんさ。「の略。

きせ・ぜん・げん［己然言］(名)【文法】「いぜんげん」

きせん・やど［木錢宿］(名) 木錢を拂はしめて旅客を迫ひとらする下等の宿。きちんやど。

きせん・やど［汽船宿］(名) 汽船に搭載する荷物又は旅客の取扱をなす宿。

きせ・そ［基礎］(名)【どだい。いしずえ。【もとゐ。

きせ・そ［稀疎］(名)【まれなること。まばら。

きせ・そ［起訴］(名) 裁判所に訴訟を提起すること。うったふること。「檢事の一」「被害者の一」。

きそ・ぞ［昨日］(名) さくじつ。きのふ。「「客送」。

きそ・ソウ［貴僧］(代) 僧の敬稱。

きそ・ぞう［寄贈］(名) 品物をもくりつかはすこと。

きそ・そう［議奏］(名) 古昔、武家よりの奏聞を傳へて、天皇に奏上せし公卿の職名。

きそ・そく［規則］(名)【人民行爲の標準を定めたるすべての法令。きだめ。おきて。のり。【物事の原因結果の關係を說示したるもの。

きそ・そく［氣息］(名) いき。呼吸。「一奄々たり」。

きそ・そく［貴息］(名) 他人の息子の敬稱。「と、

きそ・そく［羈束］(名) はだして自由を得しめざる

きそ・そく［氣色］(名)「きしよく」に同じ。

きそ・そく［驥足］(名)《駿馬の足の義》すぐれたる人物の才能。——**をのぶ**［展驥足］すぐれたる人物が、其才能を十分に活用するにいふ。

きぞ・ぞく［歸屬］(名) つくと。ふたがふと。

きぞ・ぞく［貴族］(名) 貴き家柄身分の人、平民の對。——**とくたい**［貴族國體］(名) 少數の貴族が、一國の政權を握りて政治を行ふ國體。——**せいぢ**［貴族政治］(名) 貴族國體なる國の政治。——**せいど**［貴族制度］(名) 貴族が政治上に於ける特權を有する制度。——**てき**［貴族的］(形) 貴族のさまにいふ語。階級儀式などに拘泥し、若しくは富貴を誇り榮華を特むなどにいふ、平民的の對。——**ゐん**［貴族院］(名) 二院制の國會にて、貴族を中心とし、更に卓越せる材能又は豐見を有する臣民の代表者を以て、これが補充をなせるもの、我國にては、皇族議員・華族議員・勅任議員を以てこれを組織す、皇太子は十八歲他の諸皇族は二十歲に達せられたるとき議員に列せらる、公侯の爵にある滿廿五歲以上の男子は、終身議員に列せられ、伯子男の爵にありて同爵中の互選に當りたるものは、任期七年の議員に列せらる、勳功あり若しくは卓識ある滿三十歲以上の男子と、各府縣にて多額納稅者十五名の互選に當りたる三十歲以上の男子とは、勅任せられて、前者は終身後者は任期七年の議員に列せらる。

きぞ・そく［義足］(名) 足の切斷せられたる部分を補ふために若くは眼鏡又は木履の足の形。

きそく・た・つ［規則立］(自、た四) 規律立ちて亂れず、「一た分類」。「活用をなす動詞。

きそ・そく・どうし［規則動詞］(名)【文法】正しき

きそ・そば［生蕎麥］(名) 蕎麥粉のみにて他に混合物なきそばきり。

きそ・ぞ・はじめ［着衣始］(名) 陰曆正月に、新衣着「はじめの儀式、(着衣初)。

きそ・ひ［競］(名) きそふと。はりあひ。はげみ。

——・うま［競馬］(名) 今時の競馬。けいば。

——・がり［競狩］(名) 古昔、五月の節句に、種々の草を競ひてとり集めし遊戲。

きそ・ふ［競］(自、は四) 一先後優劣を爭ふ。はりあふ。あらそふ。二はげむ。すゝむ。きはふ。「天下みな一」。「さる。

きそ・ふ［着添］(他、は下二) きかふ。「天下みな一」。

きそ・め［着初］(名) 衣服を着初めること。「こはすと。

きそ・そん［歸村］(名) 我居村に歸ること。

きそ・そん［毀損］(名) やぶれこはるゝこと。又、やぶり

きそ・そん［機樽］(名) 支那の古昔、祭典に供へし樽、牛の模樣を描き又は全體を牛の形に造りたるもの。

きた［北］(名) 一方角の一、日の出づる方角に向ひて左方。二北風。「一が吹く」。

きた［分］(名) わかち。わかれ。

きた［段］(名) きれめ。きざみ。だん。「みせん」の略言。

きた［義太］(名)「きだいふぶし」又は「きだいふさ

きた［氣體］(名) 流動し易くして一定の形狀及一定の立積を有せざる物體。瓦斯體。

きた［騎隊］(名) 騎馬の軍隊。又、其軍隊に屬する兵士。「べしと待つと。

きた［期待］(名) 心まちに待つこと。必ず然あるべしと。

きた［希代］(名) 一世にまれなること。「一の勇士」。二珍しきこと。不思議なること。「一な手術」。

きた［危殆］(名) あやふきこと。あぶなきこと。

きたい［擬態］(名)【動】昆蟲が自身を防禦する自然の性より、其體度を他物に擬すること。えやくとりもしが樹枝に擬し蝶が枯葉に擬する如きこれなり。

きた・い［議題］(名) 合議する問題。「り。

きた・いふぶし［義太夫］(名)「きだいふぶし」の略言。——**かたり**［義太夫語］(名) 義太夫節を語ることを業とする人。——**さみせん**［義太夫三味線］(名) 義太夫節を語るに用ふる太竿の三味線。——**ぶし**［義太夫節］(名) 一種の俗曲、もと擬歌節の分派にして、竹本義太夫の創始に係り、太竿の三味線によりて語る。えやうるり。——**ぼん**［義太夫本］(名) 義太夫節の詞をえるし更にこれに曲節をえるしたるもの。えやうるりぼん。

きた・たり［祈禱］(名) 神佛に祈ること。又、其儀式。「かた。

きた・たり［危道］(名) あやふきみち。あぶなきえ

きた・たり［詭道］(名) いつはりのはかりごと。いつはりのえかた。

きた・たり［軌道］(名) 一車のすぎゆく道、わだちのみち。二車輛の軌道として布設したる鐵條、車輛其上を通過す。「レール」。三(天)天體の運行する道、地球より見たる軌道を視軌道といひ、これに對して實際の軌道を眞軌道といふ。

きた・たり［氣道］(名) 動植物の體內の呼吸せる氣の通路。

きた・たり［儀刀］(名) 儀式のかざりに用ふる刀。

きたり・おや［祈禱者］(名) 祈禱を行ふ人。

きたり・ばり［祈禱坊］(名) 祈禱をする僧。「正眞を祖とす。但、「稻荷の神主」。

きたり・りう［起倒流］(名) 柔術の一派、寺田

きた・かぜ［北風］(名) 北方より吹き來る風。きた。

++きたきす(名)【植】「ごばう」の古名。
きた-きだ[段段](名)「きざきざ」に同じ。
(きた-たく[歸宅](名) 我家に歸ること。「歸館」。
(きた-たく[寄託](名) ㊀あづけたのむこと。「書簡を—す」。㊁【法】當事者の一方が、相手方より受け取りたるものを、相手方のために保管する責あるものとす。——**-ぎよりぎよ**[寄託證書](名)【法】寄託せられたる人が寄託したる人に對し、寄託の證として交附する文書。
きた-たけ[着丈](名) 身長に適するほどの着物のたけ。
きた-どち[北氣](名) 北の方より吹きくる風。
きた-す[北東風](名) 北東の方より吹く風。
きた-だち[來](仙、き四) 來らしむ。まねく。よ。
きた-だち[木太刀](名) ぼくたう。ぼくけん。「よ。
きた-だち[木立](名) こだち。たちき。
きた-だち[木賃](名) 木草學にて、其性質の木によく類似せるもの、稱。草質の對。(木本)。
(きた-たて[氣立](名) こゝろだて。きまへ。
++きたた-なか[段半](名) 一段の半。
きたな[穢](名) きたなき色。よごれいろ。——**-いろ**[穢色](名) きたなき色。よごれいろ。又、吝嗇なる心。——**-しこころ**[穢心](名) 卑怯なる心。又、吝嗇なる心。——**-し**[穢](形、一) ㊀けがれよごれてあり。清潔ならず。㊁卑怯なり。吝嗇なり。いやし。**++——-むし**[穢](仙、き四) きたなく思ふ。**(——-ら-し**[穢](形、二) きたなく見ゆ。けがらはしく思はる。
++きたた-の-ぎきね[北斗](名) 寒霜(サウ)の一名。
きた-の-かた[北方](名) 高貴なる人の妻の敬稱。れんちゆう。むくがた。

++きた-の-ぢん[北陣](名) 古昔、禁中の北門なる「中の北家の異稱。
++きた-の-ふぢねみ[北藤波](名) 藤原四家の加茂の臨時祭。
++きた-の-まつり[北祭](名)
きた-の-まんどころ[北政所](名) 關白の妻女の、宣旨をうけて稱ふる尊號。
きた-はし[階](名)「きざはし」に同じ。
きたひ[鍛](名) ㊀金屬を鍛ふと。㊁物事の修飾。「脚の—にぶし」——**-がね**[鍛金](名) よく鍛ひたる金屬。
++きたひ[膩](名) 干(ホ)したる肉。「魚の—」。
(きた-たふ[貴答](名) 認事の敬稱。もくんそ。
きた-ふ[鍛](仙、は四) ㊀金屬を火にて熟し、或は焠(ヲ)ぎ或は打ちて其密度を細かくし其硬度を強くす。「鐵を—」(鍊)。㊁たびゝ〜遭遇して其物事に熟す。たばゝ〜反覆して其技術に熟す。
きた-ふ[鍛](仙、は下二) 前條に同じ。
(きた-たふと[偽答](名) いつはりの認答。
(きた-だふれ[着倒](名) 生活費の大部を美服を着るために費すと、又、其ために生活の困難なるとをあざけりていふ語。
(きたへる[鍛](他)「きたふ」の訛。
++きたま-す[鞫](仙、き四) 糾(キウ)して處罰す。
++きた-まつり[北祭](名)「きたのまつり」に同じ。
きた-まど[北窓](名) ㊀北向きの窓。㊁《つきいらずの義》はぎのもち」の異稱。「す。
++きた-む[鞫](他、ま下二) 罪をとりたゞす。
++きた-め[鞫](名) きたむること。ぎんみ。
きた-る[來](自、ら四) ㊀此方へ到着す。いたる。㊁彼方より還歸す。かゝる。㊂あゝよぶ。かゝる。「編輯—」。㊃將來に屬す。「一者猶可追」。

きたる——[來](接頭) 次に來(ク)べき。近きうちに來べき。「—三日」。
(きた-たん[忌憚](名) 忌みはゞかること。
(きた-たん[起端](名) はじまり。おこり。(登端)。
(きた-たん[起單](名) 禪宗にて、寺を離れ出ること。
(きた-たん[奇談](名) 意外にして興味ある談話。
(きた-たん[義膽](名) 義氣。「忠魂—」。
(きた-たん[疑團](名) うたがひのかたまり。うたがひのこゝろ。「—氷解す。
(きた-たんま[奇男子](名) 奇なる性行ある男子。「又、普通ならぬ男子。
(きた-ち[吉](名) よき事。めでたきこと。凶の對。「に富む」。
(きた-ち[窺知](名) うかゞひ知ること。
(きた-ち[機智](名) よく活動する才智。はたらき。「—すでに知れてあること。
(きた-ち[既知](名) 危難の場所。
(きた-ち[危地](名) 他人の居る地の敬稱。
(きた-ち[貴地](名) ㊀木材の文理。もくめ。あや。㊁材木の文理のまゝをあらはして漆をかけたるぬり方。「一の重箱」。㊂何等の人工をも加へぬと、其まゝの地。(素地)。㊃堅物の下地。
++きた-かう[桔梗](名)【植】「ききやう」の古名。
きた-がひ[氣違](名) ㊀心狂ふこと。精神の錯亂。㊁過度に好みて有頂天となること。又、其人。「—居—」。**(——-ぎ-みるかかかるる**[氣違染](他、ま上一) 狂人の如くに見ゆ。——**-なすび**[氣違茄子](名)【植】茄科に屬する有毒草、葉は藥用に供せられ、氣帶炎病等の殺菌劑として効あり、俗にぜんそく煙草といふ。此實を食へば、氣狂ふといふより此名あり。**(——-みづ**[氣違水](名) 酒の異稱。飲めば本心を失ふよりいふ。(狂氣水)。

(きた-きち(名、副) ㊀鼓などの如きものゝ相觸れて發する音。㊁物事のよく適合し又は整頓しゆくさまにいふ語。——**-ばった**(名)【動】ばったの一種、張べばきち〜と音するより此名あり。
(きち-きち(名、副) ㊀物の相きしむ音。㊁物事の圓滑に行かぬさまにいふ語。「無慈悲なる者。
(きち-ちく[鬼畜](名) むにとゝく去やうと、轉じて、
(きち-ちく[騎竹](名) 竹馬に乘ること。——**-のまじはり**[騎竹交](名) 子供の時からのなじみ。
(きち-ちく[機軸](名) ㊀機圓の軸。車輪の軸。㊁地球の廻轉する中心の虛軸。㊂物事の活動のよりて起る中心。「—を握る」。㊃物事のくみたて又は方法。「別に—を出す」。
(きち-ぎ[吉事](名) 緣起よきこと。よろこび事。
(きち-ぎやう[吉上](名) ㊀此上もなく吉なること。㊁次條の(二)に同じ。
(きち-ぎやう[吉祥](名) ㊀めでたき祥あること。好ましき兆。㊁古昔、衛士の中にて、日夜よく務めたる功により頭となりたるもの。(吉上)。——**-くわ**[吉祥果](名) 石榴の果實。——**-とんがう**[吉祥金剛](名)【佛】文殊菩薩の一名。——**-さう**[吉祥草](名)【植】百合科に屬する草、竹林の陰に生ず、根莖は多數の細長なる葉を生じ、花は外紅紫色にして下垂せず、果實は熟すれば色赤し、觀賞用として栽培せらる。(觀音草)。——**てんによ**[吉祥天女](名)【佛】女體の佛、毘沙門天の妹、容貌端麗にして功德廣大なりといふ。——**らん**[吉祥蘭](名)【植】「きちぎやうさう」の一名。

[よにんてうやたちき]

(きち-すう[既知數](名) ㊀既に値の知られある數。㊁【數】方程式中にて與へられたる數、文字を以て表はされたりとも、與へられたる數を代表するときは既知數なり。
(きち-ずる[吉瑞](名) よろこばしき前表。めでたきさが。
(きち-つく(自、か四) ぎちゝす。
(きち-にち[吉日](名) 物事をするに吉き日。よきひがら。めでたきひ。きつぢん。(吉辰)。
きち-ぬり[木地塗](名) 木地の文理をあらはしたる漆塗。又、其器具。「又、其細工の職人。
きち-びき[木地挽](名) 木地の挽(ヒ)きもの細工。
きち-もの[木地物](名) ㊀木地びきにせるもの。㊁少しも人工を加へぬ其まゝの物。「きちやむすび」の略言。
(きち-ちや[吉彌](名)
(きち-ちや[几帳](名) 臺に柱を立て、これにとばりを掛けたるもの、古昔、外方より見えぬやう貴婦人の座側に立て用ひたり、今時のついたての類。「丈夫の略言。
きち-ちや[氣丈](名) 氣員を統率し議場を整理し、議事を代表し且つこれを管理する人、會議する一座の長たる人。
++きち-ちや[毬打](名) ㊀古昔、鞠を打ち合ひ遊びし戲。まりうち。扞毬。㊁古昔、正月に行はれし小兒の遊戲、鬼の如き杖に、五彩の毬をつけ、これをもて木鬼の毬を打ち遊べり。ぎつちやう。
(きち-ちやう[議場](名) 會議する場所。
(きち-ちやう[議定](名) ㊀評議して事を定むること。㊁さだめ。おきて。「—を破る」。——**-くわん**[議定官](名) ㊀明治初年に設けられし太政官の最高官。㊁實勢局に於ける實勢會議の議員。——**-ぎよ**[議定書](名)「きていぎよ」に同じ。
(きち-ちやう[儀仗](名) 儀式に用ふる兵仗。——**-へい**[儀仗兵](名) 兵仗を帶びて儀式に列する兵隊。
きち-ちやうぶ[氣丈夫](名) 自信力の強きこと。心のしっかりしてあること。
(きち-ちやう-めん[几帳面](名) ㊀机・盆などの細工に、撫角(カヂ)に面取りして、一節のきだを入れたるもの。㊁行事の嚴格にして折目正しきこと。
(きち-ちやく[歸着](名) ㊀歸りて到着すること。「國に—す」。㊁ひとゝころに寄ること。もちつくこと。「—する所は一」。
(きち-ちや-むすび[吉彌結](名) 帶・紐などの結び方、德川時代に、玉村吉彌と云ふ役者が始めて結び出したるものといふ。
(きち-ちゆう[忌中](名) 忌(イ)にこもるあひだ。忌の「かゝりある間。
(きち-ちゆう[鬼誅](名) 神の罰。
(きち-ちゆう[歸住](名) 歸りて住むこと。
(きち-ちゆう-き[起重機](名) 量重きものをもこしあげるに用ふる機械、其間種々ありて、大なるものは蒸汽機關のそなへつけあり。
(きち-ぢよ[貴女](名、代) 婦人の敬稱。
(きち-ぢよ[鬼女](名) ㊀女體の鬼。女夜叉。㊁鬼の如くに、極めて殘酷なる女。
(きち-ちよう[貴重](名) 極めて大切なること。たふとき。——**-ひん**[貴重品](名) 極めて大切なる物品。
(きち-ちよう[義塚](名) 無緣の塚。

[きうゆぎき]

方などといふが如し。

{きつ-つけ [来附] (名) 来なれてゐること。「一の家」。

(きつ-けい [吉慶] (名) 目出度きこと。賀すべき事。

きつ-きち [氣相] (名) 食相の動詞の連子。かはいろ。「一かくて」。

きつ-きち [吉左右] (名) 好きあんばい。よろこばれ。よろこばせ。

きつ-きき [切先] (名) 刀のはさき。はさき。(武藏鐵)。——-あがり [切先上] (名) 打つ刀の柄の方低く切先の方高きこと。——-さがり [先切下] (名) 打つ刀の柄の方高く切先の方低きこと。

きつ-し [形ク] ❶はなはだし。あはただし。❷きびし。かしこし。❸すぐつよし。はげし。

(きつ-ぶ [吉事] (名) 「きちぶ」に同じ。

‡きつ-ぶや [牛車] (名) 古音。牛にひかせし。ぎかた車。官等により種々の制限ありたり。

‡きつ-ぶよ [吉書] (名) 古音。年の始め改始め等すべて物事のあらたまりたるとき。吉日を選びて奏覧せし文書。——-そう [吉書奏] (名) 古音。年の始めに改元上奏例の文書を奏覧せし儀式。——-はじめ [吉書始] (名) ❶吉書を書く日。又、かきそめに吉とする日。❷かきそめ。試筆。

{きつ-ぶり (名、副) 清らかなること又は潔白なること。

(きつ-ぶん [吉辰] (名) よき日。吉日。(良辰)。

キツス [Kiss] (名) 西洋の風式にて、他人の頬に我物を接して親愛を表すこと。(接吻)。

きつ-すがた [陝] (仙、さ変) ❶狭き。❷狭き。かうもり。❸幸へ。かうもり。「一一蓋を—」。

きつ-すぐ (名) まこりけ無きこと。正直。

(きつ-すぐ [陝水] (名) ❶水をのむこと。❷細流の水

めなり。(風雅集)。——-つれづれ [狐流] (名) ❶狐の力を頼りて行ふといふ妖術。又、其妖術を行ふといふ人。——-つき [狐付] (名) 狐の妖術のために精神を惑ひたりといふ一種の神経病。又其神経病にかゝりたる婦人。(風藻、風雅)。——-つり [狐釣] (名) わなをかけて狐を捕ること。又、其事をなす人。(狩狐)。——-ど [狐戸] (名) 「きつねど」に同じ。——-の-まゆはけ [狐眉刷子] (名) 【植】「きつねあざみ」に同じ。——-のよめいり [狐嫁入] (名) 日影さして雨ふること。——-び [狐火] (名) 野火の異称。古来狐の口より出づるといひ伝へたり。——-まど [狐窓] (名) 「きつねがうもり」に同じ。——-まめ [狐豆] (名) 【植】「のあづきの一名」。

(きつ-ばら [吉報] (名) よきことばしを送らせ。めでたき報知。「一一すぐ」。

{きつ-ぱり (名、副) たしかに定まるさまにいふ語。

(きつ-ぱん [喫飯] (名) めしをくふこと。食事。

きつ-ふ [切符] (名) 金銭の受け渡しのときの目となして用ふる札。「乗車—」。

{きつ-ふ (名) きまく。氣風。

{きつ-ぶき [氣様] (名) こゝろもち。雰囲気。「雰囲—を取る」。——-をはす きげんをとる。

きつ-ぶり [氣詰] (名) 心の窮屈なること。氣分のさはやかならざること。(氣屈)。

きつ-ぶよ-し [氣強] (形ク) ❶氣強き。かたくなり。❷つれなし。むつかし。❸きびかひなし。こゝろびなし。「切」。

(きつ-りつ [屹立] (名) きびしくたつこと。「一五千」。

(きつ-てい [思程] (名) 考へたつ。いてたら。

(きつ-てい [思確] (名) 確をあげて思ふこと。

(きつ-れい [吉例] (名) めでたき例。よきたぐひ。

きつ-ちん [木貫] (名) 木鐸(ぬき)に同じ。——-そど [木貫宿] (名) 木鐸宿に同じ。

‡きつ-ちん [鐵鎮] (名) 「きくちん」の略音。

(きつ-ちん [鐵陣] (名) 鐵壁。くかくること。

‡きつつ [狐] (名) 【動】「きつね」の古名。

{きつつ (名) 鼎を入るゝ器。

(きつつ [吉] (名) 「きち」に同じ。「言は一」。

(きつ-えん [吉宴] (名) めでたき酒宴。

(きつ-えん [喫煙] (名) 煙草を吸ふこと。——-しつ [喫煙室] (名) 煙草を吸ふに設けたる室。

(きつ-かい [乞切] (名) こつそぎ。もの。もこり。

(きつ-かち [頭頂] (名) ❶上下すること。❷互にはりあひて相下ること。

(きつ-かち [結構] (名) はれること。

(きつ-かち [吉行] (名) めでたきたび。又、つれのたび。「一には三十里」。「回」。

(きつかう-てん [乞巧奠] (名) 「きこうてん」に

{きつ-かけ [切掛] (名) ❶てはじめ。はじまり。❷きり。きは。

きつ-づかは-し [氣遣] (形シク) 氣遣ふべし。心にかゝるべき。あやぶむべし。

きつ-づかひ [氣遣] (名) 氣づかはしきこと。こゝろづかひ。こゝろがかり。きんぱい。(心配、苦心)。

(きつ-かふ [龜甲] (名) ❶龜の甲殻。かめのこう。❷「きつかふがた」の略言。——-がた [龜甲形] (名) ❶かめのこうの如き六角形の上下左右に重なり出づる図様。❷紋所の名。龜の甲を描(ぬ)きたるもの。

きつ-づか-ふ [氣遣] (他ハ四) こゝろもとなく思ふ。きんぱいす。あんず。(不安心)。

{きつ-かり (名、副) 物事のきはだちて分明なるさまにいふ語。

きつ-づき [氣附] (名) きづくこと。こゝろづき。

{きつ-きつ (名、副) 圓形をつゞして、角立ちたるさまにいふ語。「ちゝこ」。

(きつ-きゃう [喫驚] (名) びっくりすること。おどろき。

(きつ-きょく [結局] (名) はたらこと。つとめること。

(きつ-きょう [吉凶] (名) よきことと凶事。よきことあしきこと。「す」。

きつ-くわう [來着] (名、自サ四) 来り着く。到着。

きつ-こ [築] (仙、カ四) 【建】家の基。❶城郭。❷土石をもて積み固めて作る。「築城を—」。

きつ-づく [氣附] (他カ四) それと感知すること。こゝろづく。

‡きつ-こころ [氣盛] (名) 心づよし。

(きつ-こく [結曲] (名) 文章の曲折に富みてむづかしきこと。

{きつ-こり (副) はたと来て又ははたと身を直すさまなどにいふ語。「一一所にとたくる」。

(きつ-こわい [奇怪] (名) 怪(け)り異なること。怪しきこと。「理に合はぬこと。「やあ一なる雷鳴」。

きつ-け [客所] (名) ❶客人なる者。❷客人の者。

きつ-け [氣所] (名) ❶注意せしめること。心を留むること。❷病気を感ずること。「一の酒」。❸気配。をとこがくしわること。❹「きつけ薬」の略言。——-ぐすり [氣附薬] (名) 気附に用ふる薬。

きつ-づけ [氣附] (名) 気を附けさせること。対頭。心づけ。「人の意を指摘し、皆様の気づかひには語を記して、某人某所の注意を乞ふ意に用ふ。なほ「某氏方」などといふが如し。

{きつ-つけ [來附] (名) 来なれてゐること。「一の家」。

(きつ-けい [吉慶] (名) 目出度きこと。賀すべき事。

きつ-きち [氣相] (名) 食相の動詞の連子。かはいろ。「一かくて」。

きつ-きち [吉左右] (名) 好きあんばい。よろこばれ。よろこばせ。

きつ-きき [切先] (名) 刀のはさき。はさき。(武藏鐵)。——-あがり [切先上] (名) 打つ刀の柄の方低く切先の方高きこと。——-さがり [先切下] (名) 打つ刀の柄の方高く切先の方低きこと。

きつ-し [形ク] ❶はなはだし。あはただし。❷きびし。かしこし。❸すぐつよし。はげし。

(きつ-ぶ [吉事] (名) 「きちぶ」に同じ。

‡きつ-ぶや [牛車] (名) 古音。牛にひかせし。ぎかた車。官等により種々の制限ありたり。

‡きつ-ぶよ [吉書] (名) 古音。年の始め改始め等すべて物事のあらたまりたるとき。吉日を選びて奏覧せし文書。——-そう [吉書奏] (名) 古音。年の始めに改元上奏例の文書を奏覧せし儀式。——-はじめ [吉書始] (名) ❶吉書を書く日。又、かきそめに吉とする日。❷かきそめ。試筆。

{きつ-ぶり (名、副) 清らかなること又は潔白なること。

(きつ-ぶん [吉辰] (名) よき日。吉日。(良辰)。

キツス [Kiss] (名) 西洋の風式にて、他人の頬に我物を接して親愛を表すこと。(接吻)。

きつ-すがた [陝] (仙、さ変) ❶狭き。❷狭き。かうもり。❸幸へ。かうもり。「一一蓋を—」。

きつ-すぐ (名) まこりけ無きこと。正直。

(きつ-すぐ [陝水] (名) ❶水をのむこと。❷細流の水

めなり。(風雅集)。——-つれづれ [狐流] (名) ❶狐の力を頼りて行ふといふ妖術。又、其妖術を行ふといふ人。——-つき [狐付] (名) 狐の妖術のために精神を惑ひたりといふ一種の神経病。又其神経病にかゝりたる婦人。(風藻、風雅)。——-つり [狐釣] (名) わなをかけて狐を捕ること。又、其事をなす人。(狩狐)。——-ど [狐戸] (名) 「きつねがうもり」に同じ。——-の-まゆはけ [狐眉刷子] (名) 【植】「きつねあざみ」に同じ。——-のよめいり [狐嫁入] (名) 日影さして雨ふること。——-び [狐火] (名) 野火の異称。古来狐の口より出づるといひ伝へたり。——-まど [狐窓] (名) 「きつねがうもり」に同じ。——-まめ [狐豆] (名) 【植】「のあづきの一名」。

(きつ-ばら [吉報] (名) よきことばしを送らせ。めでたき報知。「一一すぐ」。

{きつ-ぱり (名、副) たしかに定まるさまにいふ語。

(きつ-ぱん [喫飯] (名) めしをくふこと。食事。

きつ-ふ [切符] (名) 金銭の受け渡しのときの目となして用ふる札。「乗車—」。

{きつ-ふ (名) きまく。氣風。

{きつ-ぶき [氣様] (名) こゝろもち。雰囲気。「雰囲—を取る」。——をはす きげんをとる。

きつ-ぶり [氣詰] (名) 心の窮屈なること。氣分のさはやかならざること。(氣屈)。

きつ-ぶよ-し [氣強] (形ク) ❶氣強き。かたくなり。❷つれなし。むつかし。❸きびかひなし。こゝろびなし。「切」。

(きつ-りつ [屹立] (名) きびしくたつこと。「一五千」。

(きつ-てい [思程] (名) 考へたつ。いてたら。

(きつ-てい [思確] (名) 確をあげて思ふこと。

(きつ-れい [吉例] (名) めでたき例。よきたぐひ。

きつ-ちん [木貫] (名) 木鐸(ぬき)に同じ。——-そど [木貫宿] (名) 木鐸宿に同じ。

‡きつ-ちん [鐵鎮] (名) 「きくちん」の略音。

(きつ-ちん [鐵陣] (名) 鐵壁。くかくること。

‡きつつ [狐] (名) 【動】「きつね」の古名。

{きつつ (名) 鼎を入るゝ器。

(きつつ [吉] (名) 「きち」に同じ。「言は一」。

(きつ-えん [吉宴] (名) めでたき酒宴。

(きつ-えん [喫煙] (名) 煙草を吸ふこと。——-しつ [喫煙室] (名) 煙草を吸ふに設けたる室。

(きつ-かい [乞切] (名) こつそぎ。もの。もこり。

(きつ-かち [頭頂] (名) ❶上下すること。❷互にはりあひて相下ること。

(きつ-かち [結構] (名) はれること。

(きつ-かち [吉行] (名) めでたきたび。又、つれのたび。「一には三十里」。「回」。

(きつかう-てん [乞巧奠] (名) 「きこうてん」に

{きつ-かけ [切掛] (名) ❶てはじめ。はじまり。❷きり。きは。

きつ-づかは-し [氣遣] (形ク) 氣遣ふべし。心にかゝるべき。あやぶむべし。

きつ-づかひ [氣遣] (名) 氣づかはしきこと。こゝろづかひ。こゝろがかり。きんぱい。(心配、苦心)。

(きつ-かふ [龜甲] (名) ❶龜の甲殻。かめのこう。❷「きつかふがた」の略言。——-がた [龜甲形] (名) ❶かめのこうの如き六角形の上下左右に重なり出づる図様。❷紋所の名。龜の甲を描きたるもの。

きつ-づか-ふ [氣遣] (他ハ四) こゝろもとなく思ふ。きんぱいす。あんず。(不安心)。

〔一つまうがねつき〕

きつ-ぢ [吉兆] (名) めでたききざし。よきこと。「吉兆」。

きつ-ど [屹度] (副) ❶もちろん。「一思ひ出づる」。(必定)。❷相違なく。かならず。たしかに。「一忘るな」。(必定、必非)。❸厳重に。きびしく。「一申渡す」。❹意思を固めて。「一形を改めて」。

(きつ-どん [橋梁] (名) 「きんどん」に同じ。

きつ-ぢな [軒、縁] (名) 《建築の語》❶動物をつなぐもの。❷動物をつなぐ。「犬を—」。❸動詞の下に応ぶる意味。「雨れ」。「思案の一歌しおたし」。

きつ-ぢ [狐] (名) ❶【動】食肉類中犬科に属する獣。形狸に似て小さく且長く、耳は尖り尾長し。常行にして、前足に五爪、後足に四爪あるを常とす。性狡猾にして人家に近き山野に穴居し、食物のことを変ふ。食ふ。きつ。たうか。(狐子)。❷【俗】狡猾なる者。小人。❸「狐狸の異称」(人をよくだますといふより名づく)。——-あざみ [狐薊] (名) 【植】あざみの一種。葉は針状の鋸歯を有し、花は針状の尖端を具す。頭花は毛状の小花を有し、茎に毛あり。ひめあざみ。きつねのまゆはけ。(薊)。——-がうもり [狐格子] (名) ❶正しく縦横に組み立てたる格子。官殿・社寺の屋宿などの窓風呂に設べ。きつねがうもりの家に格を張りたる。❷きつねがうもりの家に格を張りたる戸。——-けん [狐拳] (名) 拳の一種。頭に両手を拳ぶるを狐といひ、鎗の上に両手を置くを庄屋といひ、鎗を かまくたる槍に手を前に出すを鎗隠といひ、狐は鎗隠にまけて庄屋に勝ち、庄屋は狐にまけて鎗隠に勝ち、鎗隠は庄屋に負けて狐に勝つの定

めなり。(風雅集)。——-つれづれ [狐流] (名) ❶狐の力を頼りて行ふといふ妖術。又、其妖術を行ふといふ人。——-つき [狐付] (名) 狐の妖術のために精神を惑ひたりといふ一種の神経病。又其神経病にかゝりたる婦人。(風藻、風雅)。——-つり [狐釣] (名) わなをかけて狐を捕ること。又、其事をなす人。(狩狐)。——-ど [狐戸] (名) 「きつねがうもり」に同じ。——-の-まゆはけ [狐眉刷子] (名) 【植】「きつねあざみ」に同じ。——-のよめいり [狐嫁入] (名) 日影さして雨ふること。——-び [狐火] (名) 野火の異称。古来狐の口より出づるといひ伝へたり。——-まど [狐窓] (名) 「きつねがうもり」に同じ。——-まめ [狐豆] (名) 【植】「のあづきの一名」。

(きつ-ばら [吉報] (名) よきことばしを送らせ。めでたき報知。「一一すぐ」。

{きつ-ぱり (名、副) たしかに定まるさまにいふ語。

(きつ-ぱん [喫飯] (名) めしをくふこと。食事。

きつ-ふ [切符] (名) 金銭の受け渡しのときの目となして用ふる札。「乗車—」。

{きつ-ふ (名) きまく。氣風。

{きつ-ぶき [氣様] (名) こゝろもち。雰囲気。「雰囲—を取る」。——をはす きげんをとる。

きつ-ぶり [氣詰] (名) 心の窮屈なること。氣分のさはやかならざること。(氣屈)。

きつ-ぶよ-し [氣強] (形ク) ❶氣強き。かたくなり。❷つれなし。むつかし。❸きびかひなし。こゝろびなし。「切」。

(きつ-りつ [屹立] (名) きびしくたつこと。「一五千」。

(きつ-てい [思程] (名) 考へたつ。いてたら。

(きつ-てい [思確] (名) 確をあげて思ふこと。

(きつ-れい [吉例] (名) めでたき例。よきたぐひ。

きつ-ちん [木貫] (名) 木鐸(ぬき)に同じ。——-そど [木貫宿] (名) 木鐸宿に同じ。

‡きつ-ちん [鐵鎮] (名) 「きくちん」の略音。

(きつ-ちん [鐵陣] (名) 鐵壁。くかくること。

‡きつつ [狐] (名) 【動】「きつね」の古名。

{きつつ (名) 鼎を入るゝ器。

(きつつ [吉] (名) 「きち」に同じ。「言は一」。

(きつ-えん [吉宴] (名) めでたき酒宴。

(きつ-えん [喫煙] (名) 煙草を吸ふこと。——-しつ [喫煙室] (名) 煙草を吸ふに設けたる室。

(きつ-かい [乞切] (名) こつそぎ。もの。もこり。

(きつ-かち [頭頂] (名) ❶上下すること。❷互にはりあひて相下ること。

(きつ-かち [結構] (名) はれること。

(きつ-かち [吉行] (名) めでたきたび。又、つれのたび。「一には三十里」。「回」。

(きつかう-てん [乞巧奠] (名) 「きこうてん」に

{きつ-かけ [切掛] (名) ❶てはじめ。はじまり。❷きり。きは。

きつ-づかは-し [氣遣] (形ク) 氣遣ふべし。心にかゝるべき。あやぶむべし。

きつ-づかひ [氣遣] (名) 氣づかはしきこと。こゝろづかひ。こゝろがかり。きんぱい。(心配、苦心)。

(きつ-かふ [龜甲] (名) ❶龜の甲殻。かめのこう。❷「きつかふがた」の略言。——-がた [龜甲形] (名) ❶かめのこうの如き六角形の上下左右に重なり出づる図様。❷紋所の名。龜の甲を描きたるもの。

きつ-づか-ふ [氣遣] (他ハ四) こゝろもとなく思ふ。きんぱいす。あんず。(不安心)。

に入る便度。「一一渡を乞ふ」。(乞求)。

(きつ-ぢな [吉祥] (名) 「きちぢな」に同じ。

きつ-づた [木蔦] (名) 【植】五加(ごか)科に属する植物。葉は上部に単葉にして、多く鋸歯は枯れず、花片は蔦合瓣に排列し、子房は五室あり。観賞用として栽培せらる。(常春藤)。「たちつた」。(乾空)。

きつ-たち [切立] (名) 切り立てたるが如くそびえ。

(きつ-たん [吉日] (名) 吉日。吉辰。

(きつ-たん [詰日] (名) あしたあさ。「に」。

‡きつ-ちゃう [鐵杖] (名) 「きこうぢゃう」に同

きつ-ちゆう-の-たのしみ [橘中樂] 《蘇軾詩に已切の人間貴を前問したるに、中に二人の皇帝ありて問ふしありとの故事に出づ》圓寂又は終末のあそび。

きつ-ちょ (名) 【動】「はたおりに同じ。

{きつ-ちり (名、副) 「きっちり」に同じ。「一はまる」。

{きつ-ちり (名、副) 清潔に同じ。

きつ-つき [木突] (名) 【動】啄木鳥に属する鳥。常緑樹にして堅く幹木に潜ず。四趾中二趾は前方に向ひ二趾は後方に向ひて樹木に便なり。舌は細長にして尖頭に逆鉤を有す。常にて樹を叩き中に木蟲のあるを察し孔を穿ちこれを釣出す。森林の樹間中に棲む。「つつき、つつき。(啄木鳥)。

きつ-つけ [切付] (名) ❶きりて付くること。❷元だ。(原、鐵)。——-ぶん [切付紋] (名) 切り付けたる紋。貼(ぬ)り付けたる紋。きめあげ紋の對。

きつ-つこ [木蔦] (名) 【植】つゝこの一種。葉は卵状披針形若しくは卵状卵形にして二十五分内外の長さを有す。花は八分内外の柄を具し、短き総状花序に排列して黄色又は赤色を呈す。観賞用として栽培せらる。(常春藤)。

きつ-て [切手] (名) ❶とがた。通用券。❷新便券。

に入る便度。「一一渡を乞ふ」。(乞求)。

(きつ-ぢな [吉祥] (名) 「きちぢな」に同じ。

きつ-づた [木蔦] (名) 【植】五加(ごか)科に属する植物。葉は上部に単葉にして、多く鋸歯は枯れず、花片は蔦合瓣に排列し、子房は五室あり。観賞用として栽培せらる。(常春藤)。「たちつた」。(乾空)。

きつ-たち [切立] (名) 切り立てたるが如くそびえ。

(きつ-たん [吉日] (名) 吉日。吉辰。

(きつ-たん [詰日] (名) あしたあさ。「に」。

‡きつ-ちゃう [鐵杖] (名) 「きこうぢゃう」に同

きつ-ちゆう-の-たのしみ [橘中樂] 《蘇軾詩に已切の人間貴を前問したるに、中に二人の皇帝ありて問ふしありとの故事に出づ》圓寂又は終末のあそび。

きつ-ちょ (名) 【動】「はたおりに同じ。

{きつ-ちり (名、副) 「きっちり」に同じ。「一はまる」。

{きつ-ちり (名、副) 清潔に同じ。

きつ-つき [木突] (名) 【動】啄木鳥に属する鳥。常緑樹にして堅く幹木に潜ず。四趾中二趾は前方に向ひ二趾は後方に向ひて樹木に便なり。舌は細長にして尖頭に逆鉤を有す。常にて樹を叩き中に木蟲のあるを察し孔を穿ちこれを釣出す。森林の樹間中に棲む。「つつき、つつき。(啄木鳥)。

きつ-つけ [切付] (名) ❶きりて付くること。❷元だ。(原、鐵)。——-ぶん [切付紋] (名) 切り付けたる紋。貼(ぬ)り付けたる紋。きめあげ紋の對。

きつ-つこ [木蔦] (名) 【植】つゝこの一種。葉は卵状披針形若しくは卵状卵形にして二十五分内外の長さを有す。花は八分内外の柄を具し、短き総状花序に排列して黄色又は赤色を呈す。観賞用として栽培せらる。(常春藤)。

きつ-て [切手] (名) ❶とがた。通用券。❷新便券。

きてい[規程](名) 從ひよりて行ふべき一定の章程。「料理屋—」。

きてい[旗亭](名) はたごや。やどや。又、茶屋。

きてい[既定](名) すでに定まりてあると。——**さいきゆつ**[既定歳出](名) 前年度の豫算によりて、すでに其額の定まれる歳出。——**さいにふ**[既定歳入](名) 前年度の豫算によりて、既に其額の定まれる歳入。——**よさん**[既定豫算](名) 帝國議會若しくは府縣會等の議決を經たる國若しくは府縣等の豫算。

きてい[規定](名) ㊀規則として定むると。きめさだむると。㊁規則として定めたる條件又は標準。おきて。さだめ。——**めいだい**[規定命題](名) [Categorical proposition] 【論】特殊の概念を一般の概念に從屬せしめ、これによりて斷定したる命題。例せば「紫はさめ易きものなり」といふ命題の如し。

きてい[義弟](名) 義を結びたる弟分。義兄の對。

きてい[議定](名) ㊀評議して事を定むると。㊁やくそく。さだめ。——**くわん**[議定官](名) 「ぎぢやうくわん」に同じ。——**けんはふ**[議定憲法](名) 主權者と人民との協議より成立發布せられたる國家の憲法。欽定憲法の對。——**ぢよ**[議定書](名) ㊀議定したる事をかきとめたる文書。㊁全權の委任を受けたる互の使臣が、會合して議定したる國際の事件をかきとめたる文書。

きているゐ[奇蹄類](名) 【動】哺乳動物に屬する草食類、前趾には四趾あるとあれど、後趾の趾數は必ず奇數にして中趾最も長く發達し、其先端に蹄(ひづめ)を有す、馬・犀等これに屬す。

きてう[歸朝](名) 外國へ行きし者の歸ると。

きでう[軌條](名) 車輪の軌道として布設したる鐵條「レール」。

きてき[棄擲](名) ㊀うちやると。なげうつと。㊁すて、使用せざると。

きてき[汽笛](名) 汽罐に裝置し、物事の合圖に蒸氣にて吹き鳴らす一種の笛。

きてれつ(名) 最も奇妙なると。「奇妙—妙不思議」。

きてん[起點](名) はじまりの箇處。もとり。

きてん[木貂](名) 【動】食肉類中鼬鼠科に屬する獸、深山に棲息す、形てんに似て太く、胸腹共に黃色、指趾五個あり、尾長く惡臭を放つ肛門線を有す、性質太だ怯懦にして、雷鳴の時、往々村里に飛び出るより、雷獸の名あり。やまねこ。

きてん[氣轉](名) 心のはたらき機敏なると。さきのきくと。

きでん[歸田](名) 官職を去りて、民間に下る。

きでん[貴殿](代) 同輩若しくは同輩以上に用ふる對稱の代名詞。あなた。

きでん[紀傳](名) 人の一生の行事をかきつたふると。又、其文書或は文體。——**たい**[紀傳體](名) 歷史の一體、紀傳の體裁により、本紀・列傳等其人の傳を記列すると。「週年體又は紀事本末の對」。——**だう**[紀傳道](名) 古昔の大學寮の一學科、史記・漢書等歷史を教授せしと。——**はかせ**[紀傳博士](名) 古昔、大學寮の所屬の博士歷史の教授を司どりし職。

きてん[儀典](名) ㊀儀式の規定。㊁のり。典範。

きでん[起電機](名) 【電】多量の電氣を發生せしむる器械、摩擦により發生せしむるものを摩擦起電機といひ、感應により發生せしむるものを感應起電機といふ。

きと[歸途](名) かへりみち。かへりがけ。「歸路」。

きと[企圖](名) ㊀くはだつると。こひねがひはかると。㊁もくてき。めど。

きと[副](副) すぐに。ちよつと。「明瞭—みて」。

きど[木戸](名) ㊀城の門。櫓門。㊁通路の出入口に設けある屋根なき門戸の門。「柵門」。㊂芝居・相撲其他、興行場などにある見物人の出入口。

きど[喜怒]—**つねなし**[喜怒無常](名) 感情みだりに激して喜怒測りがたきにいふ。

きとう[季冬](名) ふゆのすゑ。ばんとう。

きどう[奇童](名) いとすぐれたる子供。

きどう[起動](名) はたらきを起すと。

きどう—**えんまふ**[機動演習](名) 陸軍にて、毎年秋期の教育を了したる後、各種の兵を連合して行ふ野戰の演習。「の異稱、「—の母」。

きどう—**さんまい**[議同三司](名) 古昔の准大臣。

きどき[着時](名) 盛衣服を着るべき時節。

きとく[危篤](名) 病氣のてあもなると。——**けん**[既得權](名) 【法】從前の法規に基づき正當の行爲に依り、特定人が取得したる權利。法律が一般に認めし權利は既得權にあらず。

きとく[奇特](名) ㊀普通と違ひて、賞すべき所業なると。「殊勝」。㊁くりき。き、め。「爲の—其まゝに」。——**づきん**[奇特頭巾](名) ゞきんの一種、元祿の頃、婦人の被りたるもの。

〔きづくとき〕

きど—**せん**[木戸錢](名) 興行物の見物料。

きど—**ばん**[木戸番](名) 木戸を守ると。又、其人。

きどぼし[着通](名) 同一の衣服のみを常にきてゐると。

きどり[木取](名) きどると。用材の見積。

きどり[氣取](名) ㊀樣子ぶると。きどると。㊁趣向。工夫。「あの—が面白い」。——**や**[氣取屋](名) 志やれもの。容體ぶるもの。

きど—**る**[木取](他、ら四) 材木を挽(ひ)きて、それ〴〵の用になるべき見つもりをす。

きど—**る**[氣取](他、ら四) ㊀樣子をかざる。容體をつくる。㊁樣子を眞似(ま)す。「發者を—」。㊂きづく。かんづく。

キナ[規那＝Quina](名) 【植】茜草科に屬する木、葉は對生し綠色にして光澤あり、花は小形にして白色又は帶紅色なり、株々孤立して生ず、南「アメリカ」の特產なり。——**ぇん**[規那鹽＝Quina chlorida](名) 「キニン」を鹽酸に化合せしめて製したる白色針狀の結晶體、溶液は間歇熱に効あり。

きない[畿內](名) ㊀宮城の附近なる天子直隸の地。㊁京都の周圍なる山城・大和・河內・和泉・攝津の五箇國の總稱。「きない」。

きなう[氣嚢](名) 【動】鳥類の有する膨嚢、胸部と腹部との間にありて其內に空氣を出入せしめ、以て體重を加減し且呼吸作用を盛んならしむ。

きなか[半錢](名) 《一文なきなかの略言》。一文錢の半分。㊁轉じて、僅かなる物事。「一文—も、うしろ暗き所なし」。

きなが[氣長](名) 急ぎがさると。氣ゆるやかなると。「氣せきの對」。

きながし[着流](名) 袴をはかざると。「散髮かづら、—、好みの出て立ち」。

きなが—**し**[氣長](形、ク) 氣ゆるやかなり。急がず。

きなき[無](副) 力なく憂ふるさまにいふ語。「必ずとも、—思はず」。

きなく—**さし**[焦臭](形、ク) 火に焦(こ)げる臭(くさ)あり。

きなこ[黃粉](名) 炒(い)りたる大豆を挽(ひ)きてつくりたる粉、餅などに付けて食ふ。「豆碎、大豆黃屑」。——**もち**[黃粉餅](名) きなこをまぶしたる餅。あべかはもち。「粉餅」。

きなす[着倣](他、さ四) 正しく身に着る。監(着る)「長くきなしたる袋の、武士めいたる」。

キナ—**ひ**[規那皮](名) 「キナ」の樹皮を採集したるもの、「キニン」はこれを精製したるものなり。

きなふ[歸納](名) ㊀かへしをさむると。よせあつむると。㊁【論】論理の二大法の一、許多の事實を集めて一致の點を求め、其中に存する原理を案出し、更にこれより最高理に論及すると、演繹の對。㊂反切によりて、漢字の字音を出すと、例せば、德の字の反切は多則にして、音は「とくなるが如し」。

きなら—**す**[着馴](他、さ四) 着て身になれて馴れたり。「きなれし裝束」(着慣)。

きなる[着馴](自、ら下二) 屢ば身に着て馴れる。

きなれる[着馴](自) 「きなる」の訛。

きなん[危難](名) あやふきと。わざはひ。さいなん。

キニーネ[規尼涅＝Quinine](名) 【化】「キニン」に同じ。

きに—**いり**[氣入](名) 心にかなふと。愛せらるゝと。又、其人。「一の臣」(寵人、愛人)。

きにち[忌日](名) 其人の死したる當日。命日。

きにち[期日](名) 「き去つ」に同じ。「るも、

きにふ[記入](名) かき入るゝと。去るし加ふ

きによりはう[生女房](名) 處女たりし人の嫁して人の妻となりたるもの。

きにん[貴人](名) 身分貴き人。「—高家」。

きにん[歸任](名) 任處へ歸るると。

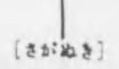
キニン[Quinine](名) 【化】「キナ」の樹皮中にある「アルカロイド」、苦味ある結晶體にして解熱劑として用ひらる。

きぬ[衣](名) 身に纏(ま)ひ着けて寒暑を防ぐもの。ころも。きもの。衣服。

きぬ[絹](名) 蠶の繭より取りたる絲、又、其絲をもて織りたる織物。「帛」。——**いと**[絹絲](名) 蠶の繭より取りたる絲。——**おり**[絹織](名) 絹絲にて織りたる織物。——**おりもの**[絹織物](名) 「きぬおり」に同じ。

きぬ—**いた**[衣板](名) 「きぬた」(砧)に同じ。

きぬ—**がさ**[衣笠](名) 絹を張りて蓋(がさ)となしたる傘、古昔、支那又は我國にて貴人などに翳(さし)すに用ひしもの。「繖」。



〔きがぬき〕

きぬ—**かたびら**[絹帷子](名) 絹絲にて織りたる帷子。「—の袖すゞしき風」。

きぬ—**かつぎ**(名) ㊀芋の子を皮つきのまゝ茹(ま)でたるもの。㊁【動】猶(ゆ)の異稱。

きぬ—**かづき**[衣被](名) ㊀昔時、婦人の外出のときに用ひし服、襟かたを前へ三すばかり下げて縫(ぬ)ちて仕立つ、これを頭より背に掛けて殺り、深く

顔を隠して、其前を手もて押へ行きしもの。かづき。 ㊁衣被をかぶりたる女。「一かさなりて更に道なし」。

きぬ-かぶり[衣被](名) 前條に同じ。

†きぬ-ぬき[着抜](名) 着たる着物を其まゝ脱(ス)ぬこと。

きぬ-きぬ[後朝](名) 夜寢を共にしたる男女が、其翌朝各己のきぬを着て別るゝこと。又、男女相會ひたる其夜の翌朝。「一の、わかれていつか」。「し」。

きぬ-きれ[絹切](名) 絹布のあまりはし又はきりはし。

きぬ-けぬけ[氣抜](名) 精神のうつとりとすると、心をうしなふこと。(失神、喪心)。

きぬ-こし[絹漉](名) ㊀物を絹にて濾(コ)すこと。又、其濾(コ)したる物。 ㊁「きぬこしどうふ」の略言。

——**どうふ**[絹漉豆腐](名) 絹の袋にて濾(コ)して製したる豆腐。質緻密にて味佳良なり。

きぬ-た[砧](名) 《衣板の約》 ㊀衣を載せて搗(ウ)つための木又は石の臺。「相槌に、母を頼めば、—より」。(謠)。 ㊁きぬたの形にしらへたる枕。

きぬ-ち[絹地](名) 絹ありもの、地。「—繪」。

きぬ-ちぢみ[絹縮](名) ちゞみのきぬあり物。木綿ちゞみの對。

きぬ-づきん[絹頭巾](名) 一種の頭巾、絹にてつばも無く、圓柱體のやゝ扁(ヘン)き形に作り、頭の全部に被(ク)むるもの。「—ところなし」。

きぬ-ぬの[生布](名) 未ださらさぬ布。

†きぬ-の-ぶり[衣尻](名) 「きよ」(裾)に同じ。

きぬ-ばり[絹張](名) ㊀絹布を張る板。 ㊁絹布を張ること。又、絹布を張りたるもの。「—の傘」。

きぬ-ばり[絹針](名) 絹布を縫ふに用ふる針、木綿針に比して細小なり。

[(一)きづかぬき]

きぬ-ふたと[絹雙子](名) 絹絲を少しく交へて「織りたる雙子織。

きぬ-ふるひ[絹篩](名) 絹布を底に張りたる篩、細粉をふるふに用ふ。

†き-ね[宜禰](名) 《新女の義》女の巫(カンナギ)。

†き-ね[杵](名) 臼に附屬する具、臼に穀物又は餅などを入れて搗(ツ)くもの、其形一機ならず。——**うた**[杵歌](名) 杵にて物を搗くときにうたふ歌。

[ねき]

き-ね[鍋](名) 《新女の義》女の巫(カンナギ)。

き-ねずみ[木鼠](名) 【動】「りす」(栗鼠)に同じ。

き-ねずみ[黄鼠](名)【動】嚙齧類中ねずみ種に屬する小獸、天氣の變(ハル)しきときは穴口に出づ、若し人を見れば、前足を交叉し手を拱(コマ)き、恰も禮拜するが如きさまをなして走りにげ、支那にては裘の裾として珍重す。(齧鼠、雞鼠)。

†き-ね-たち[木根立](名) 樹木のきりかぶ。

†き-ね-つづみ[杵鼓](名) 古昔、杵の音を助くるために打ちし鼓。「力」。

き-ねん[祈念](名) 念じいのること。又、いのる念。

き-ねん[期年](名) 限れる年。ねんげん。

き-ねん[朞年](名) まる一年。

き-ねん[紀念](名) かたみ。「友人の—」。——**さい**[紀念祭](名) 以前ありし物事の記憶を新しくするために備す會合。——**ぶつ**[紀念日](名) 以前に其物事の紀念のために行ふ祭事。——**ぶやう**[紀念日](名) 以前ありし當日。「旅順陥落の—」。——**ぶん**[氣毒](名) 《使用すること》 ㊀氣毒なること。 ㊁氣毒なること。

わい[紀念會](名) 以前ありし物事の紀念のために行ふ會合。

念章](名) 或物事の紀念のために、其場に列したる人などに與ふる徽章の稱。「寇法發布—」。——**び**[紀念碑](名) 紀念のために立つる碑、或物事を後に傳ふるためにたつる碑。「紀念標」。——**ふ**[紀念日](名) 「きねんぶつ」に同じ。——**ぶつ**[紀念繪葉書](名) 紀念のために發行する繪葉書。

(き-ねん[疑念](名) うたがふ心。うたがひ。「—を

(きねん-とく[祈年穀](名) 古昔、豐年を祈りて「に同じ。

(きねん-さい[祈年祭](名) 「としごひのまつり」

(き-のう[機能](名) はたらき。作用。

(き-のう[歸農](名) 官を辭して民間に下ること。「歸田」。

(き-のう[技能](名) うでまへ。わざまへ。

き-の-え[甲](名) 《木兄の義》十干の一。「明逢」。

き-の-と[乙](名) 《木弟の義》十干の一。「旗望」。

き-の-ど[氣毒](名) 《心の毒といふ義》他人の心配又困難などを思ひやりて、自家の心をいたまする。(憐憫)。 ——**せん**[氣毒千](名) 《使用すること》 ㊀氣毒なること。 ㊁氣毒なること。

きのこ[茸](名) 【植】菌類(キノコ)の總稱。山野の樹陰又は落葉の敷きたる地若しくは朽ちたる樹木等に生出す、其狀態は極めて多數なれど、皆な無性生殖にして胞子より菌絲を生じて發生す、或は食用とすべきものあり或は有毒のものあり、食用となる部分は菌の全體にあらずして、胞子即ち顆花植物の花實にあたる所なり。たけ。——**がり**[菌狩](名) きつたけがり。たけがり。

(き-の-お(名) 女などが、髮をすこし横にして坐したるさまの「き」の字形に似たるを。

き-の-ざ[乙](名) 《木弟の義》十干の一。「旗望」。

き-の-どく[氣毒](名) 《心の毒といふ義》他人の心配又困難などを思ひやりて、自家の心をいたまする。(憐憫)。 ——**せん**[氣毒千](名) 《使用すること》 ㊀氣毒なること。 ㊁氣毒なること。

きのはし[氣帽](名) きやすめ。

きの-ふ[昨日](名) けふの前日。きくぶつ。

——**けふ**[昨日今日](名) ㊀きのふとけふと。 ㊁近き頃。

きの-ぼせ[氣上](名) 神氣の逆上。のぼせ。「—」。

†きの-ぼり[木登](名) 木に攀(ヨ)ぢのぼること。「猿の—」。

†きの-まろ-どの[木丸殿](名) 「きのまろどの」に同じ。

†きの-まろ-どの[木丸殿](名) 荒木にて造りたる宮殿。きのまろどの。「(木子)」。

きの-み[木實](名) 木に結びたる果實。このみ。

(きの-み-きのまま(名) ㊀服裝を更へず着たる着物のまゝにて、外に持ち物なきこと。「丸腰けにて—」。

†きの-みどきやう[季御讀經](名) 古昔、禁裏にて春季二月及秋季八月に、大般若經を講ぜられしこと、此時僧に茶を賜ふを例とせり。

きの-め[木芽](名) ㊀木の萌芽。め。 ㊁食物のつまにする山椒の芽。——**あへ**[木芽韲](名) 山椒の芽を擂(ス)り込みたるあへもの。——**づけ**[木芽漬](名) あけびのわかめのえはづけ、京都鞍馬の名產。——**でんがく**[木芽田樂](名) 山椒の芽をあへたるでんがく。「感ずること。

(き-のり[氣乘](名) 其氣になること。ものもらるみを

きは[際](名) ㊀かぎり。はて。はし。「谷の—」。 ㊁そば。かたはら。ほとり。 ㊂とき。をり。きざみ。 ㊃ほど。ていど。ぶんざい。

き-ば[牙](名) 《牙齒の義》門齒の左右に、一枚づゝある鋭く尖りたる齒(牙)。——**をかむ**[咬牙] 齒をくひたばる。はがみをなす。

き-ば[木場](名) 材木を貯へ置く所。材木商のあつまり住む所。「く」。

(き-ば[騎馬](名) 馬に乘ること。又、其人。「—て行いき。樣子。「生絲相場の—」。

(き-ばり[幾望](名) 《殆ど望に近き義》陰曆十四日の夜、又、其夜の月。

(き-ばり[既望](名) 《既に望のをはりたる義》陰曆十六日の夜、又、其夜の月。

(き-ばり[希望](名) 或物事を成し若しくはこれに達せんとねがひのぞむこと。のぞみ。ねがひ。「立身出世の—」。「期望」。

(き-ぱり[企望](名) 方寸を考へて希望を達せんとすること。くはだて。のぞみ。

(き-ばり[氣鋭](名) やうす。風采。

(き-ばり[歇岡](名) あざむくこと。だますこと。

(き-ばり-ぶゆ[擬寶珠](名) ㊀欄干の柱の頭につくる飾形はちよろぎ又は蕨の蕾のはなの異稱。 ㊁【植】「ねぎ」(蔥)に同じ。

(き-はう[百合](ユリ)科に屬する草、葉は長楕圓形にして根に叢生す、高さ四五尺、夏の頃、白色六瓣の花を開く、根は藥に効ありといふ。(紫蘭)。

きは-きは[際際](名) ㊀はどはど。 ㊁はしれ〳〵。

きは-きは-し[際際](形、二) 極めてきはだちてあり。きはやかなり。(顯著)。

(き-はく[稀薄](名) 液體又は氣體の密度の薄きこと。

(き-はた[黄肌](名) 【植】芸香科に屬する木、寒地の山中に生ず、葉は複葉にして數個の小葉より成る。果實は楕果にして內皮は黃色なり、其內皮及樹皮は藥用又は染料に供せらる。(黃蘗)。

きはた[生肌](名) 【動】「きはだまぐろ」の略言。

きはまる[極](名) はて。きはり。かぎり。つめ。きよくてん。きよくど。(終極、窮局)。

きはまる[極](自、ら四) ㊀いたり得べきつめに至る。それ以上進む能はざる度に達す。

——**まぐろ**[生肌鮪](名) 【動】硬鱗類中さば科に屬する魚、後背鰭及臀鰭は長くして相對す、胸鰭も稍や長し、體色は背部蒼黑にして腹部白し、體長大なるは六尺に達す。

きは-だか[際高](名) ㊀きはのたかきこと。——**し**[際高](形、二) きはだかにてあり。きはだかし。

きは-だ-つ[際立](自、た四) 他との區別著しくあり。めだつ。

(き-はたらき[氣働](名) 心のはたらき。きてん。きよう。

き-バチ[木鉢](名) 木製の鉢。(太鑿)。

(き-はつ[揮發](名) 通常の溫度にてもよく引火すること。「—の油」。——**ゆ**[揮發油](名) 無色透明にして稀薄なる石油、揮發するが故に點火用に供ずる能はず、樹脂を溶(ト)き塗料を調し、若しくは脂肪等にて汚染せる物を洗濯するに用ふ。

(き-はつ[奇拔](名) いと希代なること。著しくすぐれたること。

(き-はつ[貴闕](名) たふとき家格。

き-はづか-し[氣恥](形、二) こゝろはづかし。うらはづかし。

きは-ど-し[際疾](形、二) ㊀まぎはに切迫せり。 ㊁事情切迫してあやうし。危機せまれり。 ㊂手段危險なり。「きはどき手段」。

(き-ばふ[匱乏](名) 不足なること。竭(ツ)きてもなしきこと。とぼしきこと。

きはまり[極](名) はて。きはり。かぎり。つめ。きよくてん。きよくど。(終極、窮局)。

きはまる[極](自、ら四) ㊀いたり得べきつめに至る。それ以上進む能はざる度に達す。

もしつまる。㊁つく。をはる。やむ。「廻轉きはまらず」。㊂くるしむ。せまる。「これに安んじてきはまらず」。㊃いたる。とゞまる。「天に—」。㊄決定す。きまる。さだまる。「寒の—」。

きはみ[キワ][極](名) きはまり。をはり。かぎり。「悲

きは・む[キワ][ムル][極](他、ま下二) ㊀いたるべきつめまで致す。それ以上進む能はざる度に達せしむ。むしつむ。㊁つくす。をはる。やむ。㊂くるしましむ。せまる。㊃決定す。きむ。さだむ。

きは・むだ[ムダ][黄](自、ま四) 黄色を帶ぶ。黄色になる。「—ならの葉」(發黄)。

きば・むきや[騎馬武者](名) うまのり。きへい。

きば・め[メ][極](名) ㊀つめ。きは。かぎり。はて。㊁さだめ。きまり。決定。㊂めきゝ。鑒定。㊃あらべ。訊問。

—・て[極](副) はなはだ。もっとも。いと。「—嬉し」。

—・ふだ[極札](名) きはめの證明の札。をりかみ。「書畫の—」。

—・る[極](他)「きはむ」の訛。

きは・もの[モノ][際物](名) 所用の季節の眞際(マギ)に賣る品物。三月の雛人形又は正月の羽子板などの類。

—・ゑ[際物師](名) きはものゝみを製造し又は商賣する人。

きは・や[氣早](名) 氣早きこと。きぜき。せいさふ。

—・し[氣早](形、二) 堪忍力少し。はやり氣多し。心いそがし。氣みじかなり。

きは・やか[際](名) 著しく際だちてあること。

きは・ばらし[氣晴](名) 鬱をはらすこと。きさんじ。きなぐさみ。散憂、消悶、解悶、散鬱。

きば・り[氣張](名) きばること。ふんばつ。

きば・る[氣張](自、ら四) ㊀氣をふるひ張る。いきみたつ。ふんばつす。奮興。㊁不相應に多く出金す。意外に高價の物を買ふ。はづむ。むごる。㊂見えを張る。

きば・ん[歸帆](名) ㊀船舶の歸路に就くこと。㊁歸途に就く船舶。

きば・ん[軌範](名) のり。てほん。「を設す」。

きば・ん[羈絆](名) はだし。又、くわんけい。「—」。

きば・ん[規範](名) 從ひのつとるべき標準。のり。

—・がく[規範學](名) 從ひのつとるべき標準を立つる學。倫理學・論理學等これなり。

きば・ん[僞版](名) 僞作の版木。又、其刷(ス)りもの。

きば・ん[儀範](名) のり。てほん。

きはん・りよく[既判力](名) 【法】判決の確定より生じたる一事不再理の効力。

きび[忌避](名) ㊀忌みてさくること。㊁【法】訴訟事件にて、判事若しくは書記が、偏頗の虞ありからざると。

きび[法]訴訟事件にて、判事若しくは書記が、法律により其かゝりより除斥せらるゝこと。又、其事件のかゝりの判事若しくは書記が、偏頗の虞ある場合に、訴訟關係人より其かゝりの除斥を請ふこと。「—の申請」。

きび[黍](名) 【植】禾本科に屬する植物。高さ二三尺の草本にして、小穗狀花序は開き出でて、下垂せる圓錐花序に排列す。果實は淡黄色を帶ぶ。もちきび。うるきびの別ありて、共に食用とす。(稷粃)。

きび[吉備](名) 備前・備中・備後の古稱。

きび[機微](名) ㊀隱微なる事。㊁微なる事。けはひ。けしき。「—の言面に見るゝなし」。

きび[驥尾](名) 《駿馬の尾の義》賢者の後(シリ)又は隨「—に附く」。

きび[氣味](名) 氣味(ミ)の略。「—が善い」。

きび[氣味氣味](名、副) 勇ましくして心地よきさまにいふ語。

きび・ざけ[黍酒](名) 黍にてかもしたる酒。

きび・し[殿](形、二) ㊀嚴重なり。ゆるやかならず。むごやかなり。㊁からし。むごし。(劉殿)。

きび・しさ[殿](名) ㊀はなはだし。いみじ。「—き寒さ」(甚)。

きび・ま・よ[急須](名) 「きふす」の訛。

きび・ま・より[急須](名) 前條に同じ。

きびす[踵](名) くびす。(踵)。

きびたき(名) 【動】鶺鴒類に屬する鳥。小形にして美麗なり。嘴の基部は偏濶にして鬚を生ず。尾長くこれを振りて鳴く。(金雀)。

きび・だんご[黍團子](名) 黍の粉にて團したる團子。備前國岡山の名產。「日本一の—」。

きび・ひつ[僞筆](名) 他人の手蹟に擬(ニ)せて書きたる筆跡。にせひつ。にせふで。(偽書)。

きびは[ワヒ](名) ㊀みやびやかなること。㊁よわきこと。「—なる」。のいふさ(涙なり)。

きび・もち[黍餅](名) もちきびを蒸(ム)してつきたる餅。

きび・ひら[生平](名) いちひの纖維にて織りたる布のよく晒さぬもの。近江國犬上郡邊の名產。

きび・ひろひ[ロイ][木拾](名) ㊀たき木を拾ふ雜業者。「湯屋の—」。

きび・ん[氣品](名) きぐらゐ。

きび・ん[奇品](名) めづらしき品。

きび・ん[機敏](名) 舉動又は處置のすみやかなること。すばやきこと。敏捷。「—な性質」。

きふ[給](名) ㊀給料又は給金。㊁あてがひ。たまもの。めぐみ。「—を富人に仰ぐ」。

きふ[級](名) ㊀まな。くらゐ。等階。㊁だん。きだ。階段。㊂ふるし。首級。「敵を斬る三千—」。

きふ[急](名) ㊀はやきこと。はげしきこと。㊁たちまち。にはか。「—の間にはあはぬ」。㊂きびしきこと。

〇字音　〇俚語方言　〇古語

からきこと。㊃きみじか。きばや。「君の性は—」。㊄猶豫すべからざること。「事の—なるを聞き」。㊅困難。事變。「國家の—に赴く」。㊆第一に行ふべきこと。先要。「人生の—務なり」。

きふ[笈](名) ㊀もひ。もひづる。㊁背に負ふ書物箱。

—を おふ[負笈] 鄕里を離れて遊學又は入塾するにいふ。

きふ[寄附](名) ㊀公共の事務を精助する目的を以て財物を贈ること。㊁【法】寄附行爲をなすこと。

きふ[棋布](名) 將碁を列したる如くに散じ居ること。「畿内に—する松島」。

きふ[基部](名) もとになる所。ねもと。

きふ[妓夫](名) 女郎屋の下男。女郎屋の客引。

きふ・いん[吸引](名) ㊀吸ひこむこと。㊁我味方にとりこむこと。「くい—」。

きふ・ふり[氣風](名) こゝろだて。きだて。氣性。「さ

きふ・う[急雨](名) にはかあめ。

きふ・かう[急行](名) 急に行くこと。いそぎゆくこと。

—・れっしや[急行列車](名) 途中の小さき驛に立ち寄らずして急行する鐵道列車。

きふ・かりゐ[寄附行爲](名) 【法】公益上の目的を以て財團法人を設立せんため、自己の財產を無償にて處分し義捐する單獨行爲。

きふ・かく[給額](名) 給與するたか。

きふ・きふ[急騎](名) はやうま。「駆」。

きふ・きふ[岌岌](名、副) あやふきさま又は高きさまにいふ語。

きふ・きふ[汲汲](名、副) 一心を傾けてつとむるさまにいふ語。「—として夜を日に繼ぎ」。

きふ・きふ[急急](名、副) 最もいそぐさま又は極めてきびしきさまにいふ語。「一事を處す」。

—・によりつりやう[急急如律令](名) 僧侶又は道士などが、惡魔其他邪道を行ふものを攝伏(ブク)ふ呪文の終末に誦へ唱ふる語。

きふ・きよ[急遽](名) ㊀にはか。きふ。㊁あわつると。「周章」。

きふ・きん[寄附金](名) 寄附の金錢。「學校の—」。

きふ・きん[給金](名) 給料として渡す金。

きふ・く[起伏](名) ㊀或はたかく或はひくきこと。たかひく。「連山の—」。㊁或は起り或は止むこと。「人生の波瀾は—常なし」。

きふ・く[歸服](名) つき志たがふこと。降參。歸順。

きふ・く[忌服](名) 忌と服と。例へば、父母の忌は五十日にて服は十三ヶ月なるが如し。

きふ・くわ[急火](名) まぢかき火事。近火。

きふ・げき[急擊](名) はげしくせめかけ戰ふこと。急に擊つこと。

きふ・げき[急激](名) ㊀にはか。きふ。㊁あ(急劇)。

きふ・けつ[泣血](名) 《なみだ盡きて血出づる義》非常に泣き悲しむこと。

きふ・こ[急鼓](名) つゞけ打ちに早く打つ太鼓。

きふ・ざいさん[寄附財產](名) 【法】寄附行爲により義捐したる財產。

きふ・さき[氣塞](名) 心の窮屈なること。氣のはれ〳〵せざること。

きふ・きう[給資](名) 資本を給すること。資用を給はかの使者。又、早飛脚。

きふ・きう[急使](名) にはかの使者。又、早飛脚。

きふ・きう[給仕](名) ㊀傍に居て行ふこと。㊁饗應の席に侍りて、飲食の世話をなすこと。又、其雜務をとる人。

きふ・ぜん[翕然](名、副) 一つにあふさまにいふ。

きふ・そく[急速](名) にはか。たちまち。きふ。「兵は—をむねとす」。

きふ・ぞく[黍粟](名) 黍と粟。

きふ・ぞく[給料](名) 給與。

きふ・ぞく[急速](名) 急速。

きふ・ぞく[急速](名) 急速。

きふ・ぞく[急速](名) 急速

ほうれん草

ほうれん草

ほうれん草

きみじか[氣短](名) 心はやりやすきこと。事を急ぐこと。たんき。性急。「短慮」。

きみ-あらず[君不知](名) 鷹の廻の裏なる二枚。「目の羽」。

きみ-みず[黄水](名) 溜飲などにて吐く膽汁。

をはく わなゝき惡るゝさまにいふ。

きみ-すし[黄身鮨](名) 一種の料理。鳥卵の黄身を固めて味をつけ、鮨の如くにしたるもの。上に鰹又は鳥肉などを載す。專ら口取などに用ふ。

きみつ[機密](名) 秘密なる事件。「陣密」。——**ひ**[機密費](名) 機密なる事件のために使用する費用。——**-ぶんしよ**[機密文書](名) 秘密なる事件に關する書類。

きみつ[生蜜](名) 未だ精製せざる蜂蜜。蜂巣の中よりとりたるばかりの蜜。

きみやう[歸命](名)【佛】梵語。南無の譯。佛の教命に歸依して他に移らざること。——**-ちやうらい**[歸命頂禮](名)【佛】歸依禮拜すること。又、佛に禮拜するに唱ふる語。「む。きばむ。」

きみ-はし-る[自、ら四] 黄色を含む。

きみ-みん[義民](名) 義のために事を起せる民。義のために一身を犧牲となす民。「阿波の—」。「す。」

きむ[機務](名) 根本の事務。樞要の政治。「—に參す」。

きむ-むすむ[極](他、ま下二) ㊀決定す。きだむ。「きめつけてやつた」。㊁其やうすをなす。

きむ[喪務](名) ㊀風俗・習慣若しくは道德・信仰等の要求に一致せる行爲。自家の分限に應じて爲すべく又は爲すべからざる行爲。「國民の—」。㊁(法)法律が規定し強制せる行爲又は不行爲。又、債務。——**-けういく**[義務教育](名) 國民が一般に義務として受くべき普通教育。——**-しや**[義務者](名) 義務を果すべき責任ある者。債務を負ふ者。

きむく[黄無垢](名) 黄色にして結地なる衣服。

きむすめ[生娘](名) 未婚の少女。世になれぬ少女。うぶをとめ。處女。

きむづか-し[氣難](形、二) 萬事につけて、容易に氣に入り難し。

きめ[木目](名) ㊀材木の面にあるあや。もくめ。(木理)。㊁皮膚の面にある細かきあや。(肌理、膚理)。㊂すべて物體の面にある細かきあや。「石の—」。

きめ[極](名) さだめ。やくそく。「一通り」。

きめい[忌明](名) いみあけ。(解忌)。

きめい[記名](名) ㊀姓名を記すること。「一捺印す」。㊁記名式に同じ。「一公債」。「—捺印」。——**-しき**[記名式](名) 證券を發行するに、其權利者の氏名又は商號等を記載すること。無記名式の對。——**-どうへう**[記名投票](名) 投票紙に投票者の姓名を記すること。無記名投票の對。

きめい[雅名](名) いつはりの名。

きめ-り[奇妙](名) ㊀くしくたへなること。不思議。㊁巧にして立派なること。著しくすぐれたること。「と。(肌理、密理)。「—の文」。

きめ-と[肌理細](名) 皮膚のきめの細かなること。

きめ-と-むすむ[極込](他、ま四) ㊀きめつく。㊁其やうすをなす。「音羽屋を—」。

きめ-つ-く[極附](他、か下二) ㊀いよ〳〵それときめなす。㊁貴めなじる。

きめつける[極附](他) 「きめつく」の俗。

きめる[極](他) 「きむ」の訛。

めん[鬼面](名) あにの假面。——**ひとを**[鬼面嚇人] 外見をいかめしくして世人にえらく思はするにいふ。

きも[肝](名) ㊀かんざう。(肝臓)。㊁臓腑又は心中。㊂たましひ。氣力。膽力。「—太き奴」。「膽」。——**-いり**[肝煎](名) ㊀周旋する人。とりもつ人。㊁支配人。世話役。㊂名主。庄屋。——**-き-ゆ**[肝消](自、や下二) いたく驚き又は悲しむにいふ。——**-たま**[肝魂](名) きも。たましひ。——**-たましひ**[肝魂](名) 前條に同じ。——**-なます**[肝膾](名) 《きもをなますにする義》心配すること。心を砕き氣をもむこと。「—をつくりかたづけをのむもあり」。——**-ふと-し**[肝太](形、一) ㊀物事に臆せず。(大膽)。㊁惡事をなすを憚らず。——**にめいず**[銘肝]深く心に記して忘れざるにいふ。——**をつぶす** いたく驚くにいふ。——**をひやす** 前條に同じ。

きもち[氣持](名) こゝろもち。こゝち。「—が惡い」。

きもの-たま[肝魂](名) きもだま。

きもの[着物](名) ころも。いふく。衣裳。(衣服)。

きもの[季物](名) 其時節に應じたるもの。「活花には—を用ふ」。

きん[記問](名) たゞ記憶のみの學問にして、これを實際の行狀にあらはさゞること。「—の學」。

きもん[鬼門](名) ㊀《北方角に鬼星ある故にいふ》陰陽家にて、萬事につけて忌み避くべきものとせる方角。即ち、艮(うし)の隅。㊁行くを忌む所。「あの家はあのれは—」。——**-よけ**[鬼門除](名) きもんの方に、神佛を祭り災難を除(よ)け避くること。

きもん[疑問](名) きもの。いふく。

きもん[疑問](名) ㊀疑ひ問ふこと。㊁疑ふべきこと。分明ならざること。「彼の心中は—なり」。——**-ぶん**[疑問辭](名) 疑問に用ふる辭。かゝや等の類。——**-だいめいし**[疑問代名詞](名) 疑ひ問ふ意の代名詞。たれ・どこ・いづこ等の類。

きや[木屋](名) 材木をあきなふ家。

きやう[經](名) ㊀佛教の經文。即ち、佛陀の言を錄したるもの。「きやうもん」。「一切—」。「阿含—」。㊁儒學の經書。即ち、聖人の言を集めたるもの。「けいぎよ」。「詩—」。「書—」。㊂經文を讀むこと。「どくきやう」。

きやう[饗](名) 酒食を設けてもてなすこと。「略言。そう」。「人の—を受く」。

きやう[香](名) 將棋の駒の名。「きやうあし」の「略言。

きやう[鄕](名) ふるさと。さと。「—にかへる」。

きやう[卿](名) ㊀古昔、八省の長官。㊁三位以上の人の敬稱。「公—」。「藤屋藤房—」。

きやう[京](名) ㊀官城のある都會。みやこ。㊁京都市の特稱。「—の清水」。

きやう[境](名) ㊀さかひ。かぎり。㊁ばあひ。をり。「九死の—」。㊂ありさま。やうす。「實—」。

きやう[磬](名) 磬(けい)の一名。

きやう[强](名) ㊀つよきもの。つよきこと。「北方の—か」。㊁四十歲前後の稱。をとこざかり。㊂示されたる歌は無算にして、なほ切りすてたる殘餘のあると。「九百—」。

きやう[狂](名) ㊀常態を失すること。くるふこと。又、其人。きちがひ。「—となる」。㊁志大いにして行の不檢束なること。又、其人。「一者は進取さ」。

きやう[行](名) ㊀【佛】十二因緣の一。煩惱の惑ひを因として、善惡の諸業を造作すること。志よぎやう。㊁僧侶又は修驗者が、其道の定まりたる業を修むること。特に、其難苦なるものをいふ。「難—苦—」。㊂「きやうぎや」の略言。㊃「きやうもよ」の略言。㊄++位と官との間に置きて、位高く官低きことを表はすに用ひし語。「正二位—大納言」。㊅つらなり並ぶこと。

きやう-あく[强惡](名) きはめてあしきこと。

きやう-いう[享有](名) 無形物を我身にうけたもつこと。「天より—す」。「と。「爲—す」。

きやう-いつ[驚逸](名) おどろきてそれ走ること。

きやう-えふ[杏葉](名) ㊀唐鞍に用ふる杏の葉の形に似たる飾。ぎようえふ。㊁肩丸(ドウ)のよろひのたかひもの上を蓋(ふた)ふもの。㊂すべて杏の葉の形をなしたるもの、稱。

++**きやう-えん**[竟宴](名) 古昔、書物の講義などをはりし後に開きし酒宴。「日本紀—」。

きやう-ねう[響應](名) 響の聲につれて起るが如く、其人のなす所に應じてきそひ起ること。「する上品の白粉」。

きやう-ねう[響應](名) もてなし。ちそう。

きやう-ねう-ろい[京白粉](名) 京都より製出す。「—す」。

きやう-か[狂歌](名) 平易の言を以て諧謔の調をなしたる和歌。たはれうた。

きやう-かい[境界](名) さかひ。くゝり。はんぐわい。

きやう-かい[境界](名)【佛】六塵と六根とによりて形成せる自家の狀態。

きやう-がい[境涯](名) 此世にある身分のはどあひ。「と。」(境遇)。

きやう-がい[驚駭](名) おどろきあやぶむこと。

きやう-がい[强碍](名) てつよきと。屈せざること。「—なる手段」。

きやう-かう[强項](名) 《首の骨の強き義》安に人に首をさげざること。「所。」

きやう-かう[鄕校](名) さとの兒童の學問。

きやう-かう[强行](名) 先方の事情如何にかゝはらずおしておこなふこと。——**-ていさつ**[强行偵察](名) 敵の砲火を冒して敵狀の偵察をなすこと。又、敵の陣口の閉塞を破壞にするため、陣口に突入して行ふ一種の作業。——**-はふ**[强行法](名)(法)人民の志望如何に關せず、必ず遵奉せしむる法律。即ち、憲法・刑法等これなり。關用法の對。

きやう-かう[行幸](名) 天子のみゆき。

きやう-かう[行香](名) 儀式の席にて、香をくばること。「するかうがい。」

きやう-かう-がい[京笄](名) 京都にて製造せる方角。即ち、艮(うし)の隅。㊁行くを忌む所。「あの家はあのれは—」。——**-よけ**[鬼門除](名) きもんの方に、神佛を祭り災難を除(よ)け避くること。

きやう-かく[驚愕](名) にはかの事にあひて心を驚したる狀態。「驚に—を下して」。

++**きやう-かご**[京籠](名) 古昔、人をのせて京を發したる駕籠。

きやう-か-ぶ[狂歌師](名) よく狂歌をよむ。「人。」

きやう-かたびら[經帷子](名) 佛式にて死人を埋葬するとき、死人に着する衣。白麻をもてつくり、南無阿彌陀佛など、書けるもの。「壽衣、弔衣」。

きやう-かのこ[京鹿子](名) 京都にて染めたる鹿子ぶぢり。

きやう-がハラ[經瓦](名) 佛經を彫(ほ)りたる瓦、永く傳ふるために土中に埋めおくもの。

きやう-かん[狂簡](名) 志大いにして物事に疎略なること。「つかましきこと。」

きやう-がん[强顏](名) ㊀つれなきこと。㊁あざなること。「—なる手段」。

きやう-き[强記](名) ものおぼえよきこと。又、よく物事を記憶せること。「博覽—」。

きやう-き[驚喜](名) 其事の意想外なりしに、おどろき且よろこぶこと。「くよろこぶこと。」

きやう-き[狂喜](名) 常を失ふばかりにいたく喜ぶこと。

ぎょうしょう【**狂**】（名）能の中で、主役の演じる人物。

ぎょうしょう【**業**】（名）仏教で、人間の行為

屈行せざる場合に、債權者が裁判所に訴訟し、國家の公力によりて屈行せしむること。

（きやう-せい）（名）【行政】【法】我國法上にては、天皇が法律若しくは勅令により、國務大臣以下の機關若しくは自治體の機關に委任して行はしめ給ふ諸般の政務、これを分つて內務・外務・財務・農商務・司法・逓信・軍事・教育とす。——**かんさく**【行政監督】（名）【法】行政上の施設の瑕疵を未發に防遏し又は既發のものはこれを匡正すること。——**きくわん**【行政機關】（名）【法】行政事務をつかさどらしむる機關、即ち、國務大臣・自治體等の如きこれなり。——**くくわく**【行政區劃】（名）【法】或行政機關が其權限を及ぼすべき範圍として定められたる土地の區劃、即ち府・縣・郡・市・町・村の如きこれなり。——**くわん**【行政官】（名）行政事務にあづかる官吏。——**くわんちやう**【行政官廳】（名）行政事務をとりあつかふ官廳。——**けいさつ**【行政警察】（名）【法】各部の行政に關連附隨して、危害を防遏し其目的を達せしむるための警察、例へば、衛生・營業・建築等に關する警察の如し。——**けん**【行政權】（名）【法】行政と稱する統治權の作用。——**さいばん**【行政裁判】（名）㊀【法】行政上の權利を保護し又は行政上の法規の適用を強制するために、行政訴訟に對して行政裁判所がなす裁判。㊁行政訴訟の俗稱。㊂行政裁判所の略言。——**さいばんしよ**【行政裁判所】（名）行政訴訟を審判する合議制の機關、長官一人評定官十一人を置く、其裁判は、裁判長及評定官合せて五人以上の合議に成るものとす。——**さいばんしよ-ちやくわん**【行政裁判所長官】（名）行政裁判所の事務を總理する勅任官、他の評定官と同じく行政裁判所を構成する一員とす。——**ぢむ**【行政事務】（名）行政上に關する事務。——**ぢよぶん**【行政處分】（名）【法】行政機關が行政上の法規を執行するため、若しくは法規存せざる場合には、法律命令の範圍內にて、行政の目的を達するため、特定の人に對し特定の事項を強制する行爲。——**ぢよより**【行政訴訟】（名）【法】行政機關の違法なる處分により、權利を侵損せられたりとなすものが、行政處分の取消又は變更を請求する訴訟。——**ちやうかん**【行政廳】（名）行政官廳に同じ。——**はふ**【行政法】（名）【法】行政機關の組織並に其權力・權利の享有・行使に關する法規の全體。——**めいれい**【行政命令】（名）【法】行政機關が私人に對して發する規則の全體の稱、閣令・省令・廳府縣令・郡の警察規則・市町村條例及規則等これなり。

（きやう-せき）（名）【行跡】ぎやうぎやう。みもち。「品行」。

（きやう-ぜん）（名）【饗膳】ちそうのぜんぶ。「こ。

（きやう-そう）（名）【競走】はしりくらべ。かけっそう。

きやう-ぞめ【京染】（名）京都にて染むる染物。

（きやう-そん）【郷村】（名）さとむら。

（きやう-たい）【狂體】（名）其體裁が常のものに

（きやう-たい）【狂態】（名）くるひざま。

［いだうやき］

たがふと、「一の文」。

（きやう-たい）【鏡臺】（名）鏡を常にはづれたるふるまひ。

（きやう-だい）（名）立てゐく憂、主に箱の造りにして、櫛道具を入る、にもかね用ふるもの。かゞみかけ。かゞみたて。かゞみだい。「鏡架、粧飾臺。「の對。

（きやう-たい）【經題】（名）經文の名稱、品題。

（きやう-だい）【兄弟】（名）㊀あにとおとうとと。けいてい。㊁はらから。同胞。骨肉、連枝。

（きやう-たち）【郷黨】（名）むらのなかま。又、むら。「い。先輩。

（きやう-たち）【嚮導】（名）道まるべ。あんな

（きやう-だう）【經堂】（名）經文を納むる堂。

（きやう-たう）【行道】（名）㊀法師の經をよみつゝ行くこと。㊁列をなし左右に分れて佛又は堂をめぐる儀式。

きやう-だて【饗立】（名）食物を折敷などにもりて出すとき、其（りに立つる紙、又、其紙の折形。

（きやう-たん）【驚歎】（名）すぐれたるを又は奇妙なるとに驚き感心すること。

（きやう-たん）【郷談】（名）くにもとのはなし。

（きやう-たん）【杏壇】（名）莊子に、孔子杏壇に立ちて琴を彈じ、弟子其前に讀書するといふ記事あるに出づ。學問を敎へ授くる所。がくもんぢよ。

（きやう-ち）【京地】（名）みやこ。又、かみがた。

（きやう-ち）【郷地】（名）ふるさと。くにもと。

（きやう-ち）【狂痴】（名）㊀きちがひとばかと。㊁極めてゐろかなること。心氣あぶ〳〵しく事理に暗きこと。

（きやう-ちや）【行茶】（名）佛事の儀式にて、茶をくばること。

（きやう-ちゆう）【輕重】（名）けいぢゅう。

（きやうぢゆう-ざゞわ）【行住坐臥】（名）㊀行くと止まると、すはると臥すと、即ち、ぎやうぢゅうざゞわ。佛家にてこれを四威儀といふ。（威儀）。㊁つねづね。ふだん。「にこれを思ふ。

きやう-づか【經塚】（名）佛經を永く後に傳ふるため、經筒に入れ、これを埋めたる處に立つる塚。

きやう-づくゑ【經机】（名）佛前にてどきやうのとき、經文をのせ置く案。

きやう-づつ【經筒】（名）經塚に埋むる佛經を入る、金屬又は陶物の筒。

（きやう-てい）【筐底】（名）はこのそこ。はこの

（きやう-てん）【經典】（名）きやうもん。きやう。

（きやう-てん）【郷天】（名）こきやうのそら。

（きやう-てん）【狂顚】（名）きちがひ。

（きやう-でん）【宜陽殿】（名）古昔、禁中紫宸殿の東南にありし御殿の名、中に、陣座（ぢざ）とて政を議せし所ありて、其所には大臣・參議・公卿座などあり。又、樂器・書籍等ををさめおく所もありたり。

（きやう-てん）【仰天】（名）いたくおどろくこと。びつくり。

（きやうてん-どうち）【驚天動地】（名）天をおどろかし地をうごかす勢大いに世人をおどろかすといふ語。「一の事業。「京都市の特稱。

（きやう-と）【京都】（名）㊀宮城のある都會。㊁

（きやう-と）【狂奴】（名）常人とはいとたがひたる行爲ある人の賤稱。「一の故團。

（きやう-ど）【強弩】（名）つよきおはゆみ。

（きやう-ど）【郷土】（名）其人の生れ長ぜし土地。ふるさと。こきやう。——**ちり**【郷土地理】（名）兒童の就學せる學校のある地方の地理。

（きやうと-さく）【行德】（名）【佛】佛法修行の德。

（きやうと-ごさん）【京都五山】（名）京都にある五つの禪宗の寺院、即ち、天龍寺・相國寺・建仁寺・東福寺・萬壽寺をいふ。

きやう-な【京菜】（名）【植】「みづな」に同じ。

（きやう-にん）【杏仁】（名）あんずの仁。藥用に供せらる。

（きやう-にん）【行人】（名）ぎやうにん。

べんぎやう-にん【行人偏】（名）漢字の偏の名、行・後などの左方にあるイの字。（雙方人旁）。

（きやう-ねん）【享年】（名）生まれてゐりし間の年齡。ねんれい。よはひ。「稅—十六歲」。

（きやう-ねん）【行年】（名）前條に同じ。「六石主

（きやう-はい）【狂悖】（名）きちがひおみたる

（きやう-ばい）【競賣】（名）多人數の買手が、已にて、最も高價のものに賣ること。せりうり。

（きやう-ばい）【競買】（名）多人數の買手が、已が手に入れんと爭ひて高價にて買ふこと。せりがひ。

（きやう-はう）【强暴】（名）むつき。むさぼ。

（きやう-はう）【狂暴】（名）くるひあるゝこと。又、常道常識には外れたる亂暴。

（きやう-はう）【强暴】（名）㊀つよくしてあらく〳〵しきこと。あれてゐしとゞめ難きこと。㊁強迫又は暴行を加ふること。

（きやう-はう）【仰望】（名）仰ぎのぞむこと。心をよせたふこと。「風采を—す」。

きやう-はう-がく【享保學】（名）享保年間に行はれし眞學の稱、當時、江戸には林大學頭を始めとし、室鳩巢・荻生徂徠・服部南郭・太宰春臺・伊藤東涯・淺見絅齋・大阪には三宅石庵・五井持軒・筑前には貝原益軒・對馬には雨森芳洲等ありて、儒學大に天下に起りたり。

きやう-はう-きん【享保金】（名）德川吉宗の代、殖に享保年間に鑄造せられし大判金・小判金などの稱、金位は慶長金に同じ。

（きやうはう-きん）【享保銀】（名）享保金と同時代に鑄造せられし丁銀（ぢやうぎん）などの稱。

（きやう-はく）【强迫】（名）㊀おしつくること。おしせまること。㊁不法なる手段を以て、他人の自由意志の決定を妨ぐること。威嚇を加へて己が意に從はしめんとすること。——**けういく**【强迫教育】（名）「きやうせいけういく」に同じ。

（きやう-はふ）【行法】（名）天台宗又は眞言宗にて、密敎の行をなす法。「彌摩の—」。

（きやう-ふ）【驚怖】（名）おどろきおそるゝこと。びつくりしておぢけちゞむこと。

（きやう-ふう）【驚風】（名）小兒の腦膜炎。

（きやう-ふう）【强風】（名）樹木の大枝を動かすほどの風。つよきかぜ。

（きやう-ふう）【狂風】（名）極めてあらき風。

（きやうぶ-しやう）【刑部省】（名）古昔の八省の一、刑罰及訴訟に關する一切の事を掌りしところ、今の司法省と大審院とを合せたるが如し。

（きやう-ぶん）【狂文】（名）おどけの文。滑稽文。

（きやう-ぶん）【狂奔】（名）㊀せきにせきてかけつくること。の狂せあげて奔走すること。㊁馬などの勢つよくそれ走ること。「ると。

（きやう-ほん）【競奔】（名）先をあらそひてはしること。

きやう-ま【京間】（名）尺度の名目、曲尺六尺三寸或は六尺五寸の長さにして、もと京都にて座敷を造るにこの長さをもて度としたりしに起る。あひのま（六尺又はゐなかま（五尺八寸）の對。

（きやう-む）【郷夢】（名）他郷にて故郷の物事を夢みること。「射する方。

（きやう-めん）【鏡面】（名）かゞみの表面即ち反

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

きやう-もん[キヤウ-]〔經文〕(名) ㊀佛教の聖典として佛徒の讀奉する文書。㊁すべて宗教の聖典として其信徒の讀奉する文書の稱。

きやう-もん[キヤウ-]〔狂紋〕(名) いろ〳〵の紋樣をまじへたると、又、其樣物「一の狩衣」。

きやう-やき[キヤウ-]〔京燒〕(名) 京都より出す陶器又は磁器の總稱にして、特に粟田燒・清水燒をいふ。

きやう-よう[キヤウ-]〔饗應〕(名) 「きやうもう」(饗應)の訛。「一し、ものくはせ」。

きやう-よみ[キヤウ-]〔經讀〕(名) ㊀きやうを讀むと。㊁きやうを讀む法師、又、法師の異稱。——どり〔經讀鳥〕(名) 〔動〕「うぐひす」の異稱。

きやう-らく[キヤウ-]〔競落〕(名) 競賣・競買又は競負等の入札にて、其物事が手に落つると、せりおち。

きやう-らん[キヤウ-]〔狂亂〕(名) ㊀精神又は擧動の常態を失ふと。くるひだるゝこと。㊁きちがひ。きやうき。㊂小唄の名。「一を舞ふ」。

きやう-らん[キヤウ-]〔狂瀾〕(名) たちくるゝ波瀾。たちさわぐなみ。〔驚瀾〕。

きやう-り[キヤウ-]〔筐裡〕(名) はこのなか。

きやう-り[キヤウ-]〔鄕里〕(名) ふるさと。故鄕。

きやう-り[キヤウ-]〔鏡裏〕(名) 物像の映りたる鏡の表面。「一自己新」。

きやう-りやう[キヤウ-]〔杏林〕(名) 〔神仙傳に、董奉といふもの、病者に施療して報酬を受けず、癒えし重病者は五株の杏を輕病者は一株の杏を記念に植ゑさせしに、數年の後、林をなしたりといふ故事に出づ〕醫者仲間の稱。

きやう-れう[キヤウ-]〔經料〕(名) 讀經の報酬として僧侶に與ふる金錢。

きやう-れつ[ギヤウ-]〔行列〕(名) ㊀列をなして行くと、又、其列。「提燈—」。㊁儀衛を備へ供人を從へて行くと、又、其一群。ろぼ。「供奉の—」。〔儀仗、鹵簿〕。

きやう[ギヤウ]**ぎつ**〔行列三重〕(名) 芝居の難——。

きやう-ろん[ギヤウ-]〔經論〕(名) 佛教の經典。又、其中の大日經・法華經の類と俱舍論・淨土論の類と。

きやう-わく[キヤウ-]〔誑惑〕(名) だましまどはむくと。たぶらかしまどはすこと。

きやう-わく[キヤウ-]〔狂惑〕(名) 心のみだれまどふこと。道理にたがひまどふこと。

きやう-わらべ[キヤウ-]〔京童〕(名) みやこのこども。

きやう-ゐん[ギヤウ-]〔行爲〕(名) あこなひ。かうゐ。

きやう-ゐき[キヤウ-]〔境域〕(名) さかひ。かぎり。

きやう-きや(名、副) 疼痛(ヅウ)のさしこみ來るさまに用ふる語。きやり。「一痛む」。

きやう-ぐ[キヤウ-]〔鬼藥〕(名) 〔植〕「ききう」(鬼臼)の一名。

きやう-ぐ[キヤウ-]〔既約〕(名) 〔數〕分數又は分數式の兩項に公約數なく、更に簡單なる形となす能はざると。

きやう-ぐ[キヤウ-]〔規約〕(名) 規則に定めたる約定。さだめ。

きやく〔格〕(名) 「かく」に同じ。

きやく〔客〕(名) ㊀あとづれて來りたる人。招き呼びたる人。まらうど。㊁外來の者。又、寄寓せる人。㊂ひと。人士。「創—」「仙—」。㊃主の對。「敢て主となり—とならず」。㊄物を買ひ又は注文する人。賃を出して物を借る人又は料を拂ひて物に乘る人。代價又は報酬を拂ひて其物品又は其勞力を需要する人。(花主、得意、客人、顧客)。

きやく〔脚〕(名) あし。「前—」「山—」。

きやく〔脚〕(接尾) 足のある道具を數ふるにいふ語。「一一の机」。

きやく〔瘧〕(名) おこり。わらはやみ。

きやく〔逆〕(名) ㊀さかしま。うらはら。反對。「—に取る」。㊁正しからざると。道理に違ふと。㊂君父に叛くこと。(逆手)。㊃【數】一の定理の假定と終結とを轉倒して得たる定理。もとの定理は眞なれど、逆は必ずしも眞ならず。「心」。

きやく-い[ギヤク-]〔逆意〕(名) わはんのこゝろ。そむく。

きやく-ぐう[ギヤク-]〔虐遇〕(名) むごきとあつかひ。

きやく-ぎやう[ギヤク-]〔逆境〕(名) 意の如くならざる境遇。苦痛多き境遇。

きやく-えん[ギヤク-]〔逆緣〕(名) 親の子より後れ老者の幼者より後れてながらふると。

きやく-か[ギヤク-]〔却下〕(名) 願書などを取り上げずしてさげると。

きやく-か[ギヤク-]〔脚下〕(名) あしもと。

きやく-が[ギヤク-]〔客我〕(名) 「かくが」に同じ。

きやく-かう[ギヤク-]〔逆行〕(名) ㊀物事の順序を顚倒して行ふと。㊁さかさに進みゆくと。「洪水—」。㊂【天】遊星の運行が、時により西より東に向はずして、東より西に向ふが如く見ゆると。地球の公轉のために起るものにして、遊星にては下合のときに起り、上遊星にては衝のときに起る。

きやく-き[ギヤク-]〔客氣〕(名) かくきに同じ。

きやく-くわん[キヤク-]〔客觀〕(名) 「かくくわん」に同じ。——**てき**〔客觀的〕=Objective〕(形) 「かくくわんてき」に同じ。

きやく-ご[キヤク-]〔客語〕(名) 「かくご」に同じ。

きやく-ざ[キヤク-]〔客座〕(名) まらうどの座席。

はひふへほ　まみむめも　やいえよ　らりるれろ　わゐうゑを

きやく-ざき[キヤク-]〔客坐敷〕(名) 客をとはす坐敷。

きやく-さつ[キヤク-]〔虐殺〕(名) むごたらしきとろしやう。非道なる殺害。

きやく-ざん[キヤク-]〔逆産〕(名) 子の出産するに、頭部より出でずして他の部分より出づると。さかご。さかさん。

きやく-さ[キヤク-]〔客思〕(名) 「かくさ」に同じ。

きやく-さ[キヤク-]〔虐使〕(名) ひだうにつかふと。

きやく-さき[キヤク-]〔格式〕(名) 「かくさき」に同じ。

きやく-さつ[キヤク-]〔脚疾〕(名) 脚氣。〔脚疾〕。

きやく-さふ[キヤク-]〔逆襲〕(名) 防禦者若しくは敗走者の地位にありしものが、態度を變じ攻擊者に向つて進擊すること。さかよせ。

きやく-しや[キヤク-]〔客車〕(名) 「かくしや」に同じ。

きやく-しや[キヤク-]〔客舍〕(名) 「かくしや」に同じ。

きやく-じやう[キヤク-]〔客情〕(名) 「かくじやう」に同じ。

きやく-じやう[キヤク-]〔逆上〕(名) 神氣常にたがひて上へのみたかぶりすゝむと。のぼせ。かみつり。

きやく-ぢゆ[キヤク-]〔逆修〕(名) ㊀死なざる前に逆修(アラカジメ)め、自身のために佛事を修め冥福をいのると。㊁若きもの先に死にて、老いたるもの其冥福を修すると。「一の因果」。㊂大小管屬の亡者のために、其冥福を修むると。其功德の多くは修むる者の身にむくひ來るといふよりいふ。

きやく-ぢゆ[キヤク-]〔逆取〕(名) 無理なるかたによりて手に入るゝこと。道にたがひたる所行によりて取りたること。「一して順守す」。

きやく-ぢよく[キヤク-]〔脚色〕(名) 脚本のさくみ。

きやく-ぢん[キヤク-]〔客心〕(名) 「かくぢん」に同じ。

きやく-ぢん[キヤク-]〔客人〕(名) きやく。まらうど。

きやく-ん[キヤク-]〔逆心〕(名) 謀叛のこゝろ。そむくこゝろ。〔逆意〕。

きやく-ぢん[キヤク-]〔逆臣〕(名) 君にそむく人。君を弑したる人。むほん人。〔反臣〕。

きやく-せい[キヤク-]〔客星〕(名) 「かくせい」に同じ。

きやく-せつ[キヤク-]〔逆說〕=Paradox〕(名) ㊀主義又は意見の反對なる議論。いろん。㊁衆論に反對するが如き觀あれど、仔細に其理路を尋ぬれば、究竟は衆論と一致せる說。

きやく-せんぷう[キヤク-]〔逆旋風〕(名) 地表の一點に高氣壓生ずるとき、此部より四方に向ひ、螺旋狀に旋動して吹く風。

きやく-そう[キヤク-]〔客僧〕(名) 旅の僧。たびソウ。

きやく-ぞく[キヤク-]〔逆賊〕(名) 反逆せる賊徒。〔反賊〕。

きやく-たい[キヤク-]〔却退〕(名) あとへひくと。又、あとへひかすると。

きやく-たい[キヤク-]〔客體〕(名) 「かくたい」に同じ。

きやく-たい[キヤク-]〔虐待〕(名) むごきあひあつかひ。

きやく-たう[キヤク-]〔脚湯〕(名) 逆上を防ぎ又は發汗を備さするために、兩脚を湯に浸しあたゝむると。

きやく-で[キヤク-]〔逆手〕(名) ㊀柔術にて、敵の手を逆に受けて防ぐ手。㊁相撲にて用ふる柔術の手。

きやく-でん[キヤク-]〔客殿〕(名) 賓客に對面する所と定められたる殿舍。賓客をとはす書院。おもてごてん。いでゐ。ひろま。

きやく-ど[キヤク-]〔客土〕(名) 「かくど」に同じ。

きやく-ど[キヤク-]〔逆徒〕(名) 惡逆を行ふ者ども。げきと。

きやく-ど[キヤク-]〔逆睹〕(名) まへかたより其物事の如何を推知すること。

きやく-どめ[キヤク-]〔客止〕(名) 興行場大入りにて、客をいる、場所なくこれを謝絕すること。

きやく-はんねう[キヤク-]〔逆反應〕(名) 【化】一の反應ありたる後、周圍の狀況を異ならしむるとき、再び初めの狀態に復歸すること。「ヒ」。

きやく-ひれい[キヤク-]〔逆比例〕(名) 【數】反比例に同じ。

きやく-ふう[キヤク-]〔逆風〕(名) むかひかぜ。

きやく-ぶん[キヤク-]〔客分〕(名) 客としとりあつかふと。又、其人。「一て入れたる輕」。

きやく-ぶんすう[キヤク-]〔既約分數〕(名) 【數】分子及分母が、互に素數なる分數。

きやく-ほん[キヤク-]〔脚本〕(名) 狂言のえくみ又は舞臺の機樣、役者のせりふ等を逐一記載せる臺帳。「き」。

きやく-ま[キヤク-]〔客間〕(名) 客をとはす室。きやくざき。

きやく-まち[キヤク-]〔客待〕(名) ㊀車夫などが、客の乘車を待ちてあると。㊁車夫の客を待ち居る小屋。

きやく-みやう[キヤク-]〔逆名〕(名) 生前につけおく死後の戒名。

きやく-らい[キヤク-]〔客來〕(名) 客の來ると、客の來りてあると。「一て失敬」。

きやく-りう[キヤク-]〔逆流〕(名) さかさに流るゝこと。又、さかさに流るゝ水。

きやく-る[キヤク-]〔逆流〕(名) 【佛】生死の流に逆ひ六塵に染まず聖道に入ること。

きやく-ばや[キヤク-]〔花車〕(名) 〔華嚴の語〕よわ〳〵しくてすがたよきこと。體のはそくなやかなること。

きやく-すすめ[キヤク-]〔氣休〕(名) 當時心を安め慰むること。きやすめのこと。——**もんく**〔氣休文句〕(名) きやすめのためにいふ實際ならぬ文句。

きやく-たつ[キヤク-]〔脚欄〕(名) 高處へ手を屆かんとするときなどにのるふみ臺。四脚にして多くは木をもて

駆したるもの。ふみだい。(脚台)。

(きやつ)[渠](代) あいつ。かやつ。

(きやつ)(名) いたく驚きたる時などに出す聲。「—と叫ぶ」。——·きやつ(名、副) 女子などが驚きて聲を立てさはぐさまにいふ語。きやきや。

きや·はん[脚半](名) 脛巾に纏(ま)ひつくる衣。はゞき。(脚絆、脛衣)。

きや·ふ[脚布](名) 婦人の腰卷。(腰巻)。

キヤベージ[Cabbage](名) 【植】十字花科に屬する栽培植物。葉は黄綠色にして牡丹の花の如し。花はあぶらなの花より大形にして淡黄色なり。葉は食用に供せらる。「蕃牡丹」。

(キヤベツ)(名) 【植】「キヤベージ」の訛。——·きき(名)「キヤベージ」葉の葉に肉をつゝみて、蒸煮にしたるもの。

ギヤマン(名) 《オランダ語 Diamant の訛》 ㊀金剛石。㊁「ガラス」の異稱。——·せき(名) 金剛石。

「氣」

きゃみ[氣病](名) 愚ひ聾したるあまりに起る病。

キヤラ[伽羅](名) 《梵語 Kāla-aguru の略、黑と譯す》一種の香料。にはひ強く、香合には、六國香の一として、香料の中藥に貴ぶもの。沈香の屬の心を採りて製すといふ。奇楠香、加藍香。——·の·あぶら[伽羅油](名) 髪を結ふに用ふるねり油。——·の·ねんかた[伽羅御方](名) 古昔、本妻の異稱。——·ぶき[伽羅蕗](名) 一種の食品。ふきの莖を醤油にて黑くなるまで煮つめたるもの。——·ぶし[伽羅節](名) 麗(はな)しき歌の節。「匂ひある聲や、一調ひ初め」。——·ぼく[伽羅木](名) 庭などに植うる小さき水松の稱。(土蘇木)。——·まくら[伽羅枕](名) 引出ありて其中にて香をたくべき枕。

キヤラコ[Calico](名) 金巾(かなきん)に似て、手あたり好く綿地にかに、光澤多き布。

きや·り[木遣](名) ㊀多人數にて重き材木などを曳(ひ)きて運搬をなして送り遣ると。㊁「きやり節」を取り拉聲をなして送り遣ると。——·うた[木遣歌](名) きやりうたの略言。——·の·ちから[助行](名) 我身に行ふと。行狀の俗歌。きやり。(勤力歌)。

(きやり)(名、副) きやゝ、「胸が—する」。

(きやん)(名) 犬の驚きたる時などに鳴く聲。「犬が—と鳴く」。

きやん[俠](名) きはひ肌に過ぎたると。「ぼ。

きや·んま[黄蜻蛉](名) 【動】きやうりやうとんぼ。

(きゆ)[覬覦](名) 分外の物事を得んと覗(ねら)ひ狙(ねら)ふと。「帝位を—す」。

きゆ·ゆ[消](自、や下二) ㊀其形跡失(う)せて見えずなる。㊁火の氣盡く。火なくなる。㊂解く。「響—」。㊃散る。「煙—」。㊄はろぶ。つく。「小人道—」。㊅死ぬ。

きゆう[宮](名) ㊀みや。又、いへ。㊁五音の一、口を合はして發するものにて、これを中聲と稱し五音主とせり。㊂天球の區分、星宿。「十二—」。

きゆう[弓](名) ㊀ゆみ。「—鳥の道」。㊁支那の古昔、弓術にては六尺の稱にいひ、又、地積にては八尺の稱にいふ。「地—」。

(きゆう)[窮](名) ㊀くるしみ。なやみ。びんぼふ。㊁くるしむもの。びんぼふ人。「—を救ふ」。「はる」。

きゆう(名) 物を捻(ひね)づるさまにいふ語。「—と廻す」。

(きゆう)[義勇](名) ㊀忠義と勇氣と。又、忠義に厚く勇氣多きと。㊁國家社會のために一身を犧牲となすと。——·かんたい[義勇艦隊](名) 平時には海運を業とし、戰時には軍艦に艤裝して、國家の戰闘に參加する商船の團體。

(きゆう·かう)[躬行](名) 我身に行ふと。行狀にあらはすと。「實踐—」。

(きゆう·かう)[躬耕](名) 自分で耕作すると。

(きゆう·かう)[窮窖](名) 弓形のあなぐら。

(きゆう·き)[窮鬼](名) びんぼふがみ。

(きゆう·きやう)[窮境](名) くるしき境遇。

(きゆう·きよく)[窮極](名) ㊀つめ。はて。どんづまり。㊁きはめつくすと。あしつむると。

(きゆう·けい)[弓形](名) ゆみなり。ゆみがた。「すは—の日にあり」。

(きゆう·く)[窮苦](名) くるしみ。なやみ。「事を成

(きゆう·くつ)[窮屈](名) ㊀自由ならざると。ゆるやかならざると。㊁氣づまり。きがね。

(きゆう·けつ)[宮闕](名) 宮門。又、禁中。

(きゆう·とう)[窮窟](名) 追ひつめられたる敵兵。

(きゆう·さう)[穹蒼](名) あはぞら。そら。

(きゆう·さく)[窮策](名) くるしきあまりの實略。

(きゆう·ざつ)[宮室](名) ㊀きゅうでん。ごてん。㊁すまひ。い(「あもに眞文に用ふ」。

(きゆう·ざやう)[宮相](名) 宮内大臣の異稱。

(きゆう·ざやう)[窮狀](名) くるしむありさま。びんぼふのやうす。「—見るに忍びず」。

(きゆう·ざやう)[宮城](名) 帝王の居城。むみや。皇居。

(きゆう·ざゆつ)[弓術](名) 弓をいる技術。射術。

(きゆう·ざん)[宮人](名) 宮中に仕ふる女。宮女。

きゆう·す(自、さ變) ㊀きはまる。せはる。つまる。㊁くるしむ。なやむ。㊂つく。をはる。「永世きゆうせず」。㊃びんぼふにてあり。

(きゆう·せん)[弓箭](名) ㊀弓と箭と。㊁戰爭。「—を以て授受せん」。

(きゆう·そ)[窮鼠](名) おひつめられたる鼠。困りきれる鼠。——·ねこをかむ[窮鼠嚙猫]《おひつめられたる鼠は猫へくひつく義》おひつめられて逃路なきより一大決心をなせば、弱者も強者にうつてかゝつてこれを破るとあるにいふ。

(きゆう·たう)[弓道](名) きゆうどゆつ。

(きゆう·たつ)[窮達](名) 零落と出世と。びんぼふとふうきと。「—は命なり」。

(きゆう·ちゆう)[宮中](名) ㊀禁中。禁裏。㊁神宮の境内。——·とものくわん[宮中顧問官](名) 帝室の典範儀式に係る事件の御諮詢に奉答する勅任官。國家に勳勞ありし者これに任ぜらる。——·も[宮中喪](名) 宮中のみに限りて行はせらる、喪(も)。

(きゆう·ぢよ)[宮女](名) みやづかへの女。女官。

(きゆう·つう)[窮通](名) 「きうだつ」に同じ。

(きゆう·てい)[宮廷](名) きんちゅう。きんり。

(きゆう·てう)[窮鳥](名) おひつめられたるとり。轉じて、おひつめられたる人。「懷に入る」。

(きゆう·でん)[宮殿](名) 皇居の御殿。みや。との。

(きゆう·とう)[窮冬](名) 冬のをはり。

(きゆう·ば)[弓馬](名) 弓と馬と。又、弓を射る術と馬に乘る術と。

(きゆう·はく)[窮迫](名) ㊀處置又は生活の困難なること。くるしみなやむと。㊁逃路なきまでに敵をおひつむると。おひせまると。

(きゆう·へい)[義勇兵](名) 國家の強制によらず、人民自ら進んで組織したる軍隊。

(きゆう)[義勇奉公](名) 君國のために一身を犧牲となして力をつくすと。

(きゆう·みん)[窮民](名) びんぼふにん。貧民。

(きゆう·めい)[窮命](名) 苦しき目にあふと。

(きゆう·もん)[宮門](名) 宮城の門。みやのもん。

(きゆう·やく)[窮厄](名) 危難にあひくるしむと。さいなん。

(きゆう·りゆう)[穹隆](名) ㊀晴れたる天空の狀態。㊁「きゆうりゆうけい」の略言。——·けい[穹隆形](名) 天空の如く中央高くして側邊の弧狀をなし垂下する狀態。ゆみがた。

(きよ)[裾](名) ㊀すそ。もすそ。㊁東帶の時に長く地に曳く袍のすそ。

(きよ)[虚](名) ㊀むなしきと。「敵の—に乘ずる」。㊁そなへなきと。「怪に—なれば足り易し」。㊂私慾なきと。「—なれば足り易し」。㊃根もかも。㊄そう。こくう。太空。㊅あな。すきま。孔竅。

(きよ)[居](名) すみか。すまひ。「—を轉ず」。

(きよ)[擧](名) あこなひ。まわざ。ふるまひ。「稀世の—」。

(きよ)[渠](名) みぞ。「—成して水通ず」。

(きよ)[凶](名) よからざること。きよう。吉の對。

(きよ)[御](名) ㊀鳥に乘ると。鳥をあつかふと。㊁馬をあつかふもの。べつたう。ぎよまや。㊂君王のめしたまふ衣服・飲食又は車馬。㊃も側にはんべるもの。もやべ。こもよう。㊄も寵愛にて幸せらるゝもの。「妃嬪など。

(きよ)[魚](名) うを。いを。「一類」「一鳥」。

(きよ)[敔](名) 支那古代の樂器。形は伏せる虎の如くにして、背上にぎだ〳〵あり。一尺許の刺竹にて、擽(こ)り鳴らすもの。

(きよ—)[御](接頭) 尊敬の意を表するために物事に冠する語。「—慶」。

(きよ·い)[御衣](名) 陛下又は殿下の衣服。

(きよ·い)[御意](名) ㊀おかんが(へ。おぼしめし。㊁いひつけ。命令。

(きよ·いう)[魚油](名) 魚類の脂肪より採りたる「油」。

(きよ·いん)[醸飲](名) 多人數互に費用を出しあひて酒を飲むと。

(きよ·いん)[虚引](名) 漢文にて、題目の物事に論及するに先だち、それとはなしに後に照應するやうの論議をなし置くと。

(きよ)[興](名) ㊀おもしろみ。たのしみ。「一座の—」。「一醒む」。㊁支那古代の詩の六義の一。自家の感ずる所を他の物にくらべかたどりてのぶると。

(きよ)[凶](名) ㊀運命のよからざると。えんぎのわるきと。吉の對。㊁わざはひ。さいなん。㊂ききん。ふさく。㊃よとしま。又、わるもの。「—を除く」。「兇」。

(きよ)[拱](名) ㊀兩手にて合せ持ち又は抱へ持つほどの太さ。㊁「アーチ」(一)に同じ。

(きよ·よう)[器用](名) ㊀役に立つ材能あると。㊁技藝に巧者なると。

(きよ·う)[御字](名) 天皇の御國を治めたまふ間。みよ。「土御門天皇の—かとよ」。「治世」。「人」。

(きよ·あく)[凶惡](名) 極めてあしきと。又、其人。

(きよ·い)[凶衣](名) 忌中に着くる衣服。もふく。

(きよ·いう)[共有](名) ㊀一の物を二人以上共

[(二)よき]

同して持つと。㊁〔法〕一の所有權が二人以上に屬すること、其處分は共有する者全體の同意あるにあらざればなし得ざるものとす、されど持分あるときは、其持分だけの處分・使用をなし、又其分割を請求するとを得るものとす。——**ざいさん**〔共有財産〕(名) 二人以上の共有に屬する財産。——**ぶつ**〔共有物〕(名) 共有に屬するもの。

(きよう-いん)〔跫音〕(名)「きようおん」に同じ。

(きよう-いん)〔凶音〕(名) 死去のおらせ。

(きよう-えき)〔共益〕(名) 共同の利益。——**ひよう**〔共益費用〕(名)〔法〕共同に利益となる場合に要する費用。「一至極」

(きよう-えつ)〔恐悅〕(名) かしこみよろこぶこと。

(きよう-れく)〔胸臆〕(名) ㊀むね。胸部。㊁こゝろ。心中。㊂おぼえ。記憶。——**をれとねふ**〔行=胸臆〕思ひ通りに勝手なる事をなす。

(きよう-れん)〔跫音〕(名) あしおと。「空谷の—」。

(きよう-かう)〔胸腔〕(名) 胸部の體腔。

(きよう-から)〔兇行〕(名) てあらき惡事。不正なる亂暴。

(きよう-かく)〔胸膈〕(名) むね。胸部。

(きよう-かく)〔恐懼〕(名) おどかすこと。おどかし。

(きよう-かつ)〔恐喝〕(名) 無根の事を以て、他人を恐れしむること。おどろかしおどすこと。——**ざい**〔恐喝取財〕(名)〔法〕他人を恐喝して財物又は證書類をかたりとること。

(きよう-かふ-るゐ)〔胸甲類〕(名)〔動〕甲殼類の一、頭部と胸部とを組合して頭胸部をなし概ね甲を被る、複眼に柄ありて能く自由に動き、步脚は數對ありて其第一對は往々鰲(ハサミ)に變ず、かに等これに屬す。

(きよう-が-る)〔興〕(自、ら四) 面白がる。愉快に感ず。

(きよう-かん)〔兇悍〕(名) 性根ねじけて氣質あらく〳〵しきこと。

(きよう-かん)〔兇漢〕(名) ㊀わるもの。惡れもの。㊁他人の身體に危害を加へたるわるもの。

(きよう-き)〔兇器〕(名) 人を殺傷する用に供せらるゝ器具、又、人を殺傷する用に供せらるゝ器具、「或器又は—」。

(きよう-き)〔凶器〕(名) 不吉なる事に使用するもの。「と」。

(きよう-ぎ)〔共議〕(名) 共に相談すること。

(きよう-ぎ)〔凝議〕(名) いろ〳〵と相談を重ぬること。

(きよう-きふ)〔供給〕(名) ㊀そなへたすこと。めぐみあたふること。㊁要求に應じて物を提出すること。

㊂〔經〕販賣又は交換の用に充(ア)てんため、市場に提出せらるゝ貨物の分量。——**けいやく**〔供給契約〕(名)〔法〕物若しくは權利を供給する目的を以て成りたる契約。

(きよう-きよう)〔兢兢〕(名、副) おそれをのゝくさまにいふ語。おど〳〵。「人心—」。

(きよう-く)〔恐懼〕(名) ㊀おそれいること。おそれのゝくこと。おそれかしこむこと。㊁書狀などの末に記す敬語。「—再拜」。

(きよう-くわう)〔恐惶〕(名) ㊀おそれいること。おそれいること。㊁書狀の末に記する敬語。「—謹言」。㊂次條に同じ。

(きよう-くわう)〔恐慌〕(名) ㊀〔經〕信用の濫用等より經濟界の恐怖心を生じ、金融切迫事業沈滯し、生産・分配・交換等の全部若しくは一部が、其活動を止むる狀態。㊁すべて何事にもよらず人々恐怖心を生じて安靖せざる狀態。

(きよう-くわう)〔凶荒〕(名) きゝんどし。ききん。

(きよう-くわう-ぎや)〔凝華舍〕(名) 古昔の禁中の五舍の一。うめつぼ。

(きよう-けつ)〔凝結〕(名) こりむすびて、液體が固體となり氣體が液體となること。「りくだると、

(きよう-けん)〔恭謙〕(名) うや〳〵しくて人にへりくだること。たしかなること。

(きよう-こ)〔凝固〕(名) ㊀こりかたまること。㊁融解せる物體が冷却して固體となること。——**てん**〔凝固點〕(名)〔理〕融解物が凝固する溫度。

(きよう-こつ)〔胸骨〕(名) 高等脊椎動物爬蟲類以上の胸部にありて胸肥をなす骨。「きんどし。

(きよう-さい)〔凶歲〕(名) 作物のみのらぬ年、き

(きよう-さい)〔共濟〕(名) 共力して事をなすこと。

(きよう-さく)〔凶作〕(名) 作物のみのり甚だあしきこと。

(きよう-さつ)〔恐察〕(名) 他人の事を推察する敬語。「語。

(きよう-さん)〔共産〕(名) 資産を共同にすること。——**くみあひ**〔共産組合〕(名) 勞働者が、互の小資本を醵集して會社を組織し、其生産に從事して勞銀を得、更に資本に對する配當を得る組織をいふ。——**ぎしゆぎ**〔共産主義〕=Communism〕(名) 私有權を撤廢して社會の總財産を社會を組織する各人の共有とし、消費又は勞働を平等ならしめんとの說。——**たい**〔共産黨〕(名) 共産主義を奉ずる黨派。

(きよう-さん)〔胸算〕(名) むなざんよう。

(きよう-ぶ)〔胸次〕(名) むねのうち。むもひ。心を生じて安靖せざる狀態。「ん。

(きよう-くわう)〔凶荒〕(名) きゝんどし。きゝ

一字音　〃個語方言　〃古語

(きよう-ぎ)〔凝脂〕(名) ㊀こりかたまりたる脂肪。㊁轉じて、色の白き肌。

(きよう-ぎ)〔凝視〕(名) 目をはりてみつめること。

(きよう-ぎふ)〔凝集〕(名) こりあつまること。

(きよう-きやう)〔胸墻〕(名) ㊀凡そ胸の高さ程に築きたる墻。㊁堡壘又は砲臺の主要なる部分にして、敵軍の射擊を便にし敵の射擊を殺(ソ)ぐ目的を以て築造されたる構土。

(きよう-きやう)〔兇狀〕(名) 國法にふれたる惡事をなしゝこと。犯罪。——**もち**〔兇狀持〕(名) 犯罪あること。又、其人。

(きよう-きゆ)〔拱手〕(名) ㊀手をこまぬくこと。㊁何事をもなさざること。「—して成を人に仰ぐ」。

(きよう-きゆ)〔凝聚〕(名) かたまりあつまること。〔凝集〕——**りよく**〔凝聚力〕(名)〔理〕同物質の分子が相牽引する力、物體はこれによりて其體形を維持す。

(きよう-きゆく)〔恐縮〕(名) いとおそれ入ること。

(きよう-きゆく)〔凝縮〕(名) こりちゞまること。

(きよう-きゆつ)〔供述〕(名) 訊問に應じ申立つること。

(きよう-きゆん)〔恭順〕(名) つゝしみかしこみてあること。かしこみて反抗せざること。

(きよう-きよう)〔恐悚〕(名) おそれちゞむこと。

(きよう-すす)〔供〕(名) そなふ。

(きよう-すす)〔拱〕(名) こまぬく。

(きよう-ず)〔興〕(自、さ變) 興に入る。たのしむ。

(きよう-する びやう)〔恐水病〕(名)「きやうけんびやう」狂犬病に同じ。

(きよう-せい)〔共棲〕(名) ともに一處にすむこと。ともに處を同じくしていきながらふること。〔共生〕。

(きよう-せん)〔凝煎〕(名)「ぎやうせん」の一名。

(きよう-たい)〔凝滯〕(名) とゞこほりて通ぜざること。ど〳〵まりて進まざること。

(きよう-たく)〔供託〕(名) ㊀物を提出して其保管を頼むこと。㊁〔法〕規定又は指定により、金銭又は有價證券を供託所(提出して其保管に付すること。——**しよ**〔供託書〕(名)〔法〕供託物に添へて出す書類。——**しよ**〔供託所〕(名)〔法〕供託せる金銭又は有價證券を保管する所。「こゝろ。おもひ。

(きよう-ちゆう)〔胸中〕(名) ㊀胸の中。むね。㊁胸部のいたみ。「有。

(きよう-つう)〔胸痛〕(名) 雙方(共に通ずること。通

(きよう-つう)〔共通〕(名) 雙方(共に通ずること。通

(きよう-てう)〔凶兆〕(名) めでたからざるなること。

(きよう-と)〔兇徒〕(名) ㊀わるもの。惡徒。〔惡黨〕惡漢。㊁兇行をなすもの。きようぞうあるもの。

㊂多人數集合して亂暴をなし官吏に抗し官廳に迫りなどするもの。暴動の仲間。——**ざい**〔兇徒聚衆罪〕(名)〔法〕多人數暴動を圖り官吏の說諭を受けて解散せざる罪。多人數相集まりて暴動をなしたる罪。

(きよう-どう)〔共同〕(名) 數多のものが共に事をなすこと。二人以上が資格を同一にして相結合すること。——**かいそん**〔共同海損〕(名)〔法〕海損の條を見よ。——**かうゐ**〔共同行爲〕(名) 共同してなしたる行爲。——**きむ**〔共同義務〕(名)〔法〕同一の債務を共同して負担すること、連帶債務の如きこれなり。——**くみあひ**〔共同組合〕(名) 二人以上相集まりて組織したる團體。——**けいざい**〔共同經濟〕(名)〔經〕小資本を糾合し團體を組織して、經濟上の便利發達を圖ること。——**げんとく**〔共同原告〕(名)〔法〕二人以上のものが同一の事件の原告となること。——**けんり**〔共同權利〕(名)〔法〕同一の權利を共同して有すること、例せば、不可分債權の如きこれなり。——**さうぞく**〔共同相續〕(名)〔法〕遺産相續にて、同順位にある遺産相續人が、共同して其遺産を相續すること。——**ぎげふ**〔共同事業〕(名) 共に協力してなす事業。——**せいくすつ**〔共同生活〕(名) 互に助けあひよりあひて生活すること。——**そしよう**〔共同訴訟〕(名)〔法〕同一の訴訟事件にて、原告若しくは被告が數人あること。——**だんたい**〔共同團體〕(名) 共同によりて成立する團體。——**ひとく**〔共同被告〕(名)〔法〕同一の訴訟事件にて、數人が共に被告となること。——**べんおよ**〔共同便所〕(名) 路傍などに、公衆のために設けられたる便所。

(きよう-ねん)〔凶年〕(名) 不作なる年。きゝんどし。「凶歲、飢歲」。「せ。㊁死去のおらせ。

(きよう-はう)〔凶報〕(名) ㊀めでたからぬおらせ。

(きよう-ばう)〔兇暴〕(名) 不正なる亂暴。

(きよう-ばう)〔凝望〕(名) 眼をすゑてよくのぞみみること。みつめること。

(きよう-はん)〔共犯〕(名)〔法〕二人以上のもの共同して罪を犯すこと。——**ざや**〔共犯者〕(名) 共同して罪を犯したる連中。「る、と。「一戰慄」。

(きよう-ふ)〔恐怖〕(名) 甚しく恐るゝこと。おぢおそ

(きよう-ぶ)〔胸部〕(名) むね。

(きよう-ふく)〔凶服〕(名) もふく。

(きよう-へき)〔胸壁〕(名) ㊀「きようまやう」胸

一字音　〃個語方言　〃古語

墻に同じ。㊁とりで。とぞる。㊂内臓に對して、胸部の外壁の稱。

(きよう・まう)[兇猛]（名）極めてあら〳〵しきと。あしくしてたけきと。

(きよう・ぼう)[共謀]（名）二人以上のものが、共同してはかりたくなむと。——**・しゃ**[共謀者]（名）共同してはかりたくなみたる連中。

(きよう・まく)[竅膜]（名）【生】眼球の外壁を包む白色の線維膜。

(きよう・きく)[胸膜]（名）「ろくまく」肋膜に同じ。

(きよう・み)[興味]（名）おもしろみ。おむもき。

(きよう・む)[凶夢]（名）えんぎあしき夢。

(きよう・めい)[共鳴]（名）㊀【物】「ともなり」に同じ。㊁他の活動を感受して、我心にもまた其さまの活動を生ずること。

(きよう・やく・かく)[共軛角]（名）【數】項點及二邊の共同なる角の各が、他の角に對しての稱。

(きよう・やく・こ)[共軛弧]（名）【數】和が圓周に等しき二つの圓弧が、他の弧に對しての稱。

(きよう・やく・てん)[共軛點]（名）【理】一點より發する光線が球面鏡より反射し、又は「レンズ」を通過して後、再び通過又は發散（發散するときは後方に延長して）する點と原點との稱。第二の點に光線を置けば光線は、反射又は通過の後初めの點を通過する故に名づく。

(きよう・やく・ふくそすう)[共軛復素數]（名）【數】$a+ib$ と $a-ib$ との如き二つの數。

(きよう・やく・ふおんとんすう)[共軛不盡根數]（名）【數】$a+\sqrt{b}$ と $a-\sqrt{b}$ との如き二つの不盡根數。

(きよう・ゆう)[洶涌]（名）水波のわきあがると。

(きよう・わ)[共和]（名）二人以上のものが、共同して政治を行ふと。「號して一といふ」。——**・とくたい**[共和國]（名）共和國體の國。——**・とくたい**[共和國體]（名）國法上最高の地位を占むるものが二人以上なる國體。又、國法上最高の位地を占むる者を大統領と稱し、人民の選擧によりてこれを定むる國體。——**・せいぢ**[共和政治]（名）國法上最高の地位あるものの二人以上の共同によりて行はるゝ政治。人民の選擧せる大統領によりて施行せらるゝ政治。共和國の政治。——**・せいど**[共和制度]（名）共和政治の制度。

(きよう・えい)[虚榮]（名）實際の價値もなき外見上のさかえ又はほまれ。——**・心**[虚榮心]（名）虚榮をむさぼる心。

(きよう・えふ)[杏葉]（名）「きやうえふ」に同じ。——**・ぼたん**[杏葉牡丹]（名）紋所の名、牡丹の花をきやうえふの形に描きたるもの。

(きよう・えん)[魚鹽]（名）海邊の生産物の總稱。海産「沿海にして一の利あり」。

(きよう・か)[許可]（名）ゆるすと。ゆるし。

(きよう・か)[許嫁]（名）いひなづけ。

(きよう・か)[學家]（名）家内の全體。（全家、闔家）。

(きよう・か)[漁家]（名）漁夫の家。

(きよう・か)[漁獣]（名）漁夫のうたふ歌。

(きよう・か)[御下]（名）てまた。配下。

(きよう・が)[御駕]（名）天子などの御車。

(きよう・かい)[魚介]（名）魚類と貝類と、即ち、海産「はやけになすと。

(きよう・かう)[舉行]（名）披露しあこなふと。あむどりたかぶると。

(きよう・がう)[倨傲]（名）あむどりたかぶると。

(きよう・がう)[虚耗]（名）㊀むなしく費ゆると。㊁身體のあとろへたると。

(きよう・かう)[御幸]（名）みゆき。

(きよう・かう)[御溝]（名）宮城のみぞ。あほり。

(きよう・がき)[清書]（名）下書などを、新に正しく書くと。せいしよ。「郵書」。

(きよう・かく)[巨額]（名）かず多きと。たかく。

(きよう・かつ)[虚喝]（名）虚勢を張りておどすと。虚言を以ておどすと。

(きよう・かん)[巨艦]（名）あはいなるいくさぶね。

(きよう・かん)[炬眼]（名）明かに物事を鑑察する才能にいふ語。

(きよう・かん)[巨眼]（名）めだまのふときと。

(きよう・かん)[御感]（名）主上の思召。あぼえ。「一斜ならず」。

(きよう・き)[歔欷]（名）すゝり泣き。

(きよう・き)[虚僞]（名）うそ。いつはり。

(きよう・き)[虚儀]（名）いつはりの儀式。かざりばかりの儀式。「會の敬稱」。

(きよう・き)[御忌]（名）貴人又は祖師等の年忌の法

(きよう・きつ)[去去月]（名）其月よりひと月隔てたる前の月。せんゝげつ。「先々月」。

(きよう・きつ)[去去日]（名）をとゝひ。一昨日。

(きよう・きつ)[虚虚實實]（名）互に計略又は技倆を盡し、敵の實をさけ虚に乘じ相戰ふと。

(きよう・きよ・ねん)[去去年]（名）をとゝし。一昨年。

(きよう・きふ)[遽急]（名）㊀にはか。きよ。㊁あわてると。あわたゞしきと。

(きよう・きん)[醵金]（名）多人數より金をよせあつむると。費用をだしあふと。「一して客賂す」。

(きよう・く)[山]（名）㊀たゞしからざると。ねぢけたると。よこしま。㊁すみ。くま。「河一」。㊂ことわけ。

委細。「心一を盡くす」。㊃こわけ。部局。㊄音律歌謡の變化節奏。ふし。てうぶ。㊅技藝の變化節奏。あべ。げい。「一うち」。㊆音律歌謡又は技藝の段落。きり。㊇おもしろみ。きよう。「一もない其御ことば」。㊈漢詩の一體。思想を委曲にのぶる意。「長篇一」。

(きよく)[局]（名）㊀こわけ。きり。㊁つぼね。へや。㊂基盤・雙六（すごろく）盤又は將棋盤等。「一に對して日を終ふ」。㊃事務の小區分、又、事務の一區分を掌る所。㊄其場合、其物事「一に當る」。

(きよく)[極]（名）㊀きはみ。きはまり。はて。つめ。「愚の一」。㊁くるしみ。なやみ。「子をして此一に至らしむ」。㊂みくらゐ。天位。「一に登る」。㊃まなか。中央。㊄もと。主要。㊅むき。方位。「天に六一あり」。㊆街上道。第一義。「これ醫道の一」。㊇北辰星と老人星との稱。㊈【地】地軸の兩端の稱、其北を北極といひ南を南極といふ。又、地軸の延長線が天體と相會する兩端の稱。㊉【理】磁石の作用の最も強き二點の稱、これを磁極といひ南極と北極とに分つ。又、電池若しくは電解器に電線の出入する口の稱、これを電極といひ、陽極と陰極とに分つ。㊋【數】球の大圓又は小圓に垂直にして球の中心を通過する線の球面と會する二點の稱。

(きよく)[玉]（名）㊀琢石若しくは角閃石の一種、古來支那及我國にて、寶石として裝飾又は印材等に使用せり、色は種々なれどすべて半透明なり。㊁遊女、藝妓などをあざるさだめの料。「藝妓の一代」。

(きよく)—[玉]（接頭）或語に冠して、貴重又は美麗の意を表はす語。「一體」「一顔」。

(きよく・あく)[曲惡]（名）つみ。とが。あくぞ。

(きよく・あん)[玉案]たまのかざりあるつくゑ。貴重なるつくゑ。

(きよく・いん)[玉音]（名）ことば又はおとづれ等の「て太鼓をうつと。

敬稱。

(きよく・うち)[曲打]（名）いろ〳〵の手わざをし

(きよく・えい)[玉詠]（名）他人の詩歌の敬稱。

(きよく・えふ)[玉葉]（名）㊀天子の御一門を申す語。「金枝一」。㊁他人の著書の敬稱。

(きよく・かい)[曲解]（名）正しからざる解釋。

(きよく・がく)[曲學]（名）正道にはづれたる學問。又、曲解したる學問。——**あせい**[曲學阿世]（名）曲學を以て人氣に投ずる言說をなすと。

(きよく・かん)[極諫]（名）心のたけをつくして諫むると。「る碩子の眼球。

(きよく・がん)[玉眼]（名）細工物などにはめ用ふ

(きよく・がん)[玉顔]（名）玉の如き麗しき顔。

(きよく・き)[旭旗]（名）日のまるのはた。日章旗。

(きよく・き)[旭卿]（名）あさひ。「遊戯。

(きよく・ぎ)[局戯]（名）ばくち又はスゴロク等の

(きよく・きより)[極距離]（名）【天】南北の一極よりの角距離。

(きよく・ぐわい)[局外]（名）其物事に關係なき位地。「一にありて事を見る」。——**・ちゆうりつ**[局外中立]（名）國際上にて、交戰國の何れにも援助を與へず、また交戰に影響すべき行爲を避くる國家の地位。

(きよく・くわう)[極光]（名）高き緯度の地にて、空中に弧狀若しくは幅射狀に見ゆる淡緑黄若しくは紅雲朧等の美麗なる光の稱、空中電氣の現象なるが如しといふ。

(きよく・くわん)[玉冠]（名）㊀玉にて飾りたるかんむり。㊁「ぎよくかん」「冕冠」の稱。

(きよく・けい)[殛刑]（名）ものきつみ。ものさい。

(きよく・げい)[曲藝]（名）さまざまに目先の變れるとをなす藝。

(きよく・けん)[極圏]（名）【地】南北回歸線より各二十三度半の所に地球の周圍に劃せる圏線にして、南なるを南極圏といひ北なるを北極圏といふ。

(きよく・げん)[極言]（名）いひつむると。ことばを盡くすこと。

(きよく・げん)[極限]（名）㊀かぎり。はて。㊁【數】或數が一定の法則に從ひ漸々變値して達せんとする一定の數、此數と變數との差は漸々小さくなるべきものなれど遂に同値となると能はざるもの。

(きよく・ぎ)[玉座]（名）陛下の御座所。おまし。

(きよく・さい)[玉碎]（名）《たまとなりて碎くる義》面義を守り又は功名を立てゝ死するなどにいふ語。

(きよく・ざん)[玉山]（名）人品の皎潔なるをたとへいふ語「一まさに頽れんとす」。

(きよく・さんかくけい)[極三角形]（名）【數】一つの球面三角形の各邊の二つの極の中、其邊に對する頂點と同上側にあるものを、大圓の弧により結び付けて得る球面三角形の、もとの球面三角形に對しての稱。

(きよく・し)[殛死]（名）罪きはまりて、死に至る「と。

(きよく・ぶ)[曲事]（名）正しからざる事。くせごと。「一事たるべし」。「惡事」。「一を勞す」。

(きよく・ぶ)[玉趾]（名）他人の足の敬稱。あみあし。

(きよく・ぶ)[玉璽]（名）至尊の御印の稱。ぎよぶ。

(きよく・ぶつ)[旭日]（名）あさひ。——**・き**[旭日旗]（名）旭日を描（エガ）きたる我國の海陸旗又は軍艦旗等の稱。——**・きやう**[旭日章]（名）勳勞ありし男子に賜はる勳章の一、勳一等より勳

はいはい【林】(名) ❶そまばやし。❷王朝時代に大臣の官職の名。

はいはい【王朝】(名) ❶王朝時代に大臣の官職の名。❷王朝時代に大臣の官職の名。

はいはい【王朝】(名)

（きよ・とう）[虚構]（名）いつはり。うそ。
（きよとう・さいりん）[巨口細鱗]（名）《口ふとく鱗こまかき魚の義》【動】鱸（スヾキ）の異稱。
（きよ・とく）[擧國]（名）國中悉皆。國の全體。
（きよ・どん）[虚言]（名）そらごと。うそ。偽言。
きよさ [清]（名）きよき度合。
（きよ・ざ）[御座]（名）陛下又は殿下のいましますところ。「座席。
（きよ・さい）[去歳]（名）㊀こぞ。きよねん。㊁むかし。以前。
（きよ・さい）[巨細]（名）㊀大いなるものと細かなるものと。㊁いちぶ始ふゆう。ゐさい。
（きよ・ざい）[巨材]（名）ふとき材木。
（きよ・ざい）[巨財]（名）多量の財物。
（きよ・さう）[距爪]（名）【獸】鷄の條を見よ。「の。
（きよ・さく）[御作]（名）貴人のつくりたまひしもの。
（きよ・さつ）[巨刹]（名）大いなる寺院。
（きよ・さん）[魚山]（名）《支那の陳思王魚山にて自然の音響を聞きて會明せし音律に基くといふ、慈覺大師これを我國に傳へ後、大原來迎院の僧良忍これを盛にせり》「ボンばい」梵唄の異稱。
（きよ・ざ）[鉅資]（名）多くの資財。
きよ・し（きよ・し）[清]（形、一）㊀けがれなし。にごりなし。㊁あきらかなり。くもりなし。「日影—」。㊂のこりなし。あまりなし。㊃邪念なし。惡情なし。「きよき心」。㊄心地よし。すがすがし。「風—」。
（きよ・ぢ）[虚字]（名）漢文にて、實字及助字以外の字、即ち、恐・憂・泣・落などの如く、多くは動詞若しくは形容詞として用ひらるゝもの。
（きよ・ぢ）[凶事]（名）「きようじ」の略言。
（きよ・ぢ）[御璽]（名）天子の御印。傳來のものは、銅の材にして曲尺方二寸七分、明治七年新製のものは、黄金の材にて曲尺方三寸、何れも天皇御璽の四字を刻みあり、内大臣これを保藏す。
（きよ・ぢ）[語次]（名）はなしついで。
（きよ・ちう）[巨酋]（名）かしら。巨魁。
（きよ・ちう）[去秋]（名）こぞのあき。
（きよ・ちう）[去就]（名）去ると止まると。背くと從ふこと。「ふと。
（きよ・ちう）[巨臠]（名）形體大いなるけもの。
（きよ・ちう）[漁舟]（名）いざりするふね。
（きよ・つう）[居室]（名）居間。
（きよ・つう）[虚氣]（名）㊀うそとまことと。なきとあると。「—を決す」。㊁敵に對するの防禦の有樣。
㊂敵の虚に乘じ實を避け種々の謀計又は技術を用ふると。「—を盡くして戰ふ」。「日「—無し」。
（きよ・ちう）[虚日]（名）其物事のなき日。ひまの日。
（きよ・ちう）[虚ふ（ふ）—]（名）金員を出しあふと。
（きよ・ちう）[駆者]（名）馬をあつかふ人。特に、車の前に乘りて馬を扱ふ人。御者。
（きよ・ちう）[漁者]（名）すなどりするもの。
（きよ・ちう）[漁舎]（名）漁者のすむいへ。
（きよ・ちう）[去聲]（名）漢字の四聲の一、分つて逐・來・絆・貫・未・柳・過・驚・泰・卦・隊・震・問・願・翰・諫・霰・嘯・效・號・箇・璃・漾・敬・徑・宥・沁・勘・豔・陷の三十韻とす、これに屬する字はすべて仄字なり。
（きよ・ちう）[居常]（名）つね。ひごろ。
（きよ・ちう）[居城]（名）すまひせる城。
（きよ・ちう・ぢう）[虚掌實指]（名）書道にて、筆管を持つに掌を廣くし指先に力を入るゝこと。
（きよ・ちく）[虚弱]（名）㊀儘なく力よわきこと。
（きよ・ちゆん）[去春]（名）こぞのはる。
（きよ・ぢよ）[居所]（名）㊀居る場所。ゐば所。ゐどころ。すみか。㊁住所に對して、現に居る所の稱。「從來の住處又は—を去りたるもの」。
（きよ・ぢよ）[居諸]（名）《詩經に日居月諸とあるに出づ》つきひ。くわういん。「—を惜む」。
（きよ・ぢよう）[擧證]（名）或事實の存否を證明すること。「—の責任」。
（きよ・ぢよく）[虚飾]（名）いたづらに外見をかざること。
（きよ・ぢよく）[漁色]（名）たれかれの擇びなく女を弄ぶこと。女色にふけること。
（きよ・ぢん）[虚心]（名）心にわだかまりを抱かざること。「一平氣」。「性の偉大なる人。
（きよ・ぢん）[巨人]（名）身體の偉大なる人。又、品
（きよ・ぢん）[園人]（名）鳥かひ。「鳥飼」。「る。
きよ・ぢん・な・る（きよ・ぢん・な・る）[御寮]（名）（「ぢ」ら四）げしなる。
きよ・ず（きよ・ず）[御]（他、さ變）㊀鳥をとりあつかふ。「鳥」。㊁統御す。すべたばす。㊂つかさどる。をさむ。㊃使用す。もちふ。つかふ。天子にいふ。
㊄疑處に幸す。「事幸—せず」。
（きよ・すう）[虚數]（名）【數】負數の平方根の稱、かゝる數はあり得べからざる故に名づく、例へば、$\sqrt{-8}$の如し、而して$\sqrt{-8}=\sqrt{-1}\sqrt{8}$なるが故に、虚數は實數に$\sqrt{-1}$を乘じたるものなるより、通常$\sqrt{-1}$を以てこれを表はす。
（きよ・する）[魚水]（名）《魚と水との義》君と臣との極めて親しきこと。「—の親」。「—の馬匹」。
（きよ・せい）[去勢]（名）動物の睾丸を拔去ること。
（きよ・せい）[虚聲]（名）根も無きうはさ。いつはりのひやうばん。「に—を張る」。（虚威）。
（きよ・せい）[虚勢]（名）外見のみのいきほひ。「大いに—を張る」。
（きよ・せい）[去聲]（名）「きよしやう」に同じ。

一字音　〃熟語方言　++古語

（きよ・せい）[御製]（名）陛下などの御作の詩歌。
（きよ・せう・てん）[虚焦點]（名）【理】「せうてん」焦點の條を見よ。
（きよ・せつ）[虚說]（名）うそのはなし。そらのうはさ。「浮說、流言、虚談」。
（きよ・せつ）[拒絶]（名）こばみふせぐこと。ひきうけざること。「—きよよう」[拒絶證書]（名）手形などの所持人が、支拂又は引受を受くること能はざる場合に、其事實を證明するため、公證人又は執達吏に請求して作成する證書。「るさまにいふ語。
（きよ・ぜん）[遽然]（名）にはかなるさま又はあわつ
（きよ・ぜん）[居然]（名）其まゝにてあるさまにいふ語「—たる昔時の一書生」。
（きよ・せん）[漁船]（名）れふ船。いさり船。
（きよ・ぞく）[巨賊]（名）手下多き盜賊。大いなる惡事をはたらく盜賊。ゐはぬすびと。
（きよ・ぞく）[魚族]（名）ぎよるゐ。うを。
（きよ・そん）[蹌蹌]（名）うづくまること。
（きよ・そん）[漁村]（名）漁者のあつまりすむ村。
（きよ・た）[許多]（名）數多くあること。あまた。
（きよ・たい）[巨大]（名）大いなること。
（きよ・たい）[魚袋]（名）古昔、東帶のとき、石帶の右の第一第二にぶし物、厚さ五分長さ三寸幅一寸許の箱を白鞣にて張り、金又は銀にて彫りたる鯉の形を表に六つ裏に一つ付け、紐もて帶びたり。

［いたよぎ］

（きよ・たく）[居宅]（名）住む家。すまひ。すみか。
（きよ・たく）[虚托]（名）いつはりかこつくること。
（きよ・たく）[許諾]（名）うべなふこと。きゝいるゝこと。承知。承諾。
（きよ・たつ）[虚脱]（名）身體ゐとろへて體力のぬけうせたること。又、死に近き狀態。
（きよ・だん）[虚談]（名）根もなきはなし。虚說。
（きよっ・ざ）（副）胸にこたへて驚くさまにいふ語。「碧氷も—せしが」。
（きよ・てい）[居邸]（名）住まひのやしき。
（きよ・でん）[虚傳]（名）いつはりの風聞。
（きよ・でん）[魚田]（名）《魚の田樂の略言》一種の料理、魚に味噌を付けて炙り燒きたるもの。
（きよ・どう）[擧動]（名）たちゐ。ふるまひ。やうす。
（きよ・どう）[魚燈]（名）「ぎよとうゆ」の略言。——ゆ[魚燈油]（名）魚肉より煎じ出したる油、特に鰯又は鯉（ヒカ）より煎じ出したる油の稱。燈火の油に用ふるもの。「魚膏」。
（きよ・ど・きよど）（名、副）ゐそれを含みてうろ〳〵するさまにいふ語「狼狽て—」。
（きよ・にく）[魚肉]（名）㊀魚の肉。㊁やがて殺せらるべきもの。「我は方に—たり」。
（きよ・ねん）[去年]（名）こぞ。昨年。
（きよ・はう）[巨砲]（名）たいはう。ゐはづゝ。
（きよ・ばう）[虚妄]（名）㊀うそ。いつはり。㊁きよひ。まどひ。
（きよ・はく）[巨擘]（名）㊀ゐはゆび。火指。㊁其社會にて、頭立てるもの。
（きよ・はく）[巨舶]（名）巨大なる船。
（きよ・はく）[擧白]（名）さかづきを手にすること。酒を酌むこと。
（きよ・ばん）[魚板]（名）魚の形に作れる木板。
（きよ・ひ）[拒否]（名）こばみいなむこと。
（きよ・ひ）[許否]（名）ゆるすとゆるさざること。
（きよ・ひ）[魚肥]（名）鯡（カ）又は鰮などを乾して製造したる肥料。
（きよ・びやう）[虚病]（名）にせやまひ。つくりやまひ。けびやう。「作病」。
（きよ・ふ）[漁夫]（名）漁（スナ）を業とするもの。れふ夫。——の・り[漁夫利]（名）他の互に相爭ふに乘じ、傍より勞せずして利を收むることをたとへいふ語。「鷸蚌爭の條を見よ」。
（きよ・ぶん）[虚聞]（名）㊀根もなきうはさ。虚傳。㊁むなしきはまれ。
++きよ・まはり（きよ・まはり）[清]（名）ものいみ。「齋戒」。
++きよ・まはる（きよ・まはる）[清]（自、ら四）㊀きよまる。㊁物忌みす。「いましもけさやかにきよまはりてたちにしわが名」。
きよ・ま・る（きよ・ま・る）[清]（自、ら四）清淨になる。きよくなる。
きよ・み（きよ・み）[魚味]（名）うをの料理。
きよみづ・やき（きよみづ・やき）[清水燒]（名）京燒の一、京都の清水邊にて製する陶器、多くは染付のいしやきなり。
（きよ・みん）[居民]（名）其地に住む人民。
（きよ・みん）[漁民]（名）漁（スナ）りする人。れふ夫。
（きよ・む）[虚無]（名）㊀何の物事も無く空なること。㊁心を虚くして挾む所なきこと。㊂[哲]支那の戰國時代に、楚の老子の唱へし說にして、天地萬物は虚無に生ずとし、無爲玄默を以て道德の極となすこと。——ゐゆき[虚無主義＝Nihilism]（名）現在の政治・宗教・社會上の一切の制度を否認し、これを打破して共産主義により更に之を組織すべしとの主義。——・たり（ト）[虚無黨]（名）虚無主義を實行せんがために組織せられたる秘密團體。「ロ

一字音　〃熟語方言　++古語

シア」國に多く、皇帝の此寵臣の手に逆殺せられしとあり。——**の・がく**[虛無學](名)【哲】支那に於て老子これを唱へ、其徒莊子等の承繼し鼓吹せし學問、玄默無爲を以て道德の極となす、其後流は道家となりたり。——**・ぼつが**[虛無沒我](名)其物自身に何等の挾持する所なく、たゞ對象を其まゝ受用すること。

きよ・むむ[ムムムム](名)。[清](他、ま下二)㊀けがれをはらひ去る。きやうめやうにす。きよくす。「不淨を—」。㊁唇をはらひ去る。すゝぐ。はらす。「汚名を—」。

きよめ[清](名)きよむること。清淨にすること。「—」。

きよ・めい[虛名](名)實よりは高き名。實に過ぐるきこえ。「—を貪る」。

きよ・めい[御名](名)陛下又は殿下の御名。

きよめる[清](他)「きよむ」の誤。

きよ・もと[清元](名)「きよもとぶし」の略言。

——・ぶし[清元節](名)一種の俗謠、富本節の分派にして、延寶太夫清水吉五郎に始まる。

きよ・より[清](名)きよらかなること。「—に見ゆる薄雲の影」。

きよ・らい[去來](名)㊀ゆきき。「—の船」。㊁過去と未來と。

——・とん[去來今](名)過去・未來及現世、即ち、三世の稱。「るゝこと。」

きよ・らう[虛勞](名)精氣衰弱し、身體羸(ルイ)ぐること。

きよ・らか[清](名)けがれ又はにごりなきこと。

きよらん・くわんおん[魚籃觀音](名)魚を入れたる籃を提げ、ぎょらんくわんおんぎょらんくわんおんぎょらんくわんおん

きりまい　きりしま　きりしまこ　きりしまこ　きりしまこ

殺して、物を擦め毒ふと、「一強盗」(剪逃)。

きり・ど・る[切取](他、ら四) 一部分をわけ取る、切りて取る。「敵圖を—」　「と、「一に喋る」。

きり・なし[切無](名) をはりなきこと。たえまなき。

きり・ぬき[切抜](名) ㊀切り抜くこと。又、切り抜きたるもの。㊁「きりぬきる」又は「きりぬきつうたん」の略言。——**つうたん**[切抜通信](名) 新聞又は雑誌等の、其人に要用なる部分を切り抜きて送附すること。——**ゑ**[切抜絵](名) 物の形を切り抜きて取るやうに畫きたる繪、又、切り抜きて取りたる繪。

きり・ぬ・く[切抜](他、か下二) ㊀圍まれたる敵中に切り入つて免(マヌカ)れ出ヅ。㊁免れがたき場合を免れ得。

きり・ぬ・く[切抜](他、か四) 一部分を切り取る。「てぬき取る。

きり・ぬけ[切抜](名) きりぬくること。

↔**きり・の・まがき**[霧離](名) とぢめたる響を切り抜きて取るやうに畫きたる繪、又、切り抜きて取りたる繪。

きり・はし[切端](名) 断ち切りたる物のはし。

きり・はた[切畑](名) 新に切り開きたる畑。

きり・ばな[切花](名) きりとりたる花の枝。

きり・はなし[切離](名) きりはなしておくこと。

きり・はな・す[切離](他、さ四) 切りたちてはなれしむ。

{**きり・はなれ**[切離](名) ゐもひきり。あきらめ。

きり・はら・ふ[切拂](他、は四) ㊀切り入つて敵を追ひはらふ。㊁樹木などの枝を切りのぞく。「小枝を—」。

{**きり・ばり**[切張](名) 紙障子などの破れたる所ばかり、切り取りて張り貼(ヨ)ふること。

きり・び[切火](名) ひうち石とひうち鐵と又は固き物と物とを打ち合せて取りたる火。ひうちび。「一かち〳〵、祝を申す」(雅火、鑽凝)。——**なは**[切火縄](名) 切火を燃(モ)し付けてそな(置く火縄、火縄鐵砲を打つ用意になすもの。「鑽火縄」。

↔**きり・びと**[切人](名) 主君などに愛せられて、權威強き人。きりもの。「寵臣」。

きり・ひら・く[切開](他、か四) ㊀山上又は荒地などを平らに均(ナ)らして田畑又は道路をひらく。㊁敵中にきり入つて、一方の路をひらく。

↔**きり・ひをけ**[桐火桶](名) 桐の木にて造りたる火桶。桐木の火鉢。

きり・ふ[切疵](名) ㊀鷹の羽の上下黒く、中間白きもの。㊁狂言(ヤ)ある草木の葉。「一の芒」。

きり・ふだ[切札](名) 「トランプ」にて、他の組の札を押へとる價値ありと定めたる札。「勝牌」。

きりぼう・かど[切棒駕籠](名) 駕籠の棒の切りつめたる如く短きもの。長棒駕籠の對。

きり・ぼし[切乾](名) 一種の食品。大根を細く切り、日に干(ホ)して乾物(ブツ)にしたるもの、煮て食ふべし。ゐもに秋又は冬に製す。「切乾菜、幾羅切」。

きり・まい[切米](名) 扶持米の代りに金錢を渡すこと。

きり・まく[切幕](名) 切りてゐとすやうに張りたる幕。

きり・まく・る[切捲](他、ら四) ㊀はげしく論難す。㊁はげしく切り入つて敵を追ひ散らす。

きり・み[切身](名) 肉の断片、切りたる肉。「屠」。

きり・むぎ[切麥](名) 一種の食品、小麥の粉を麺饒の如く製し、薄く延ばして細く切りたるもの、多くは夏日ゆで、水に冷して食ふ。(切麥)。

きり・むす・ぶ[切結](他、は四) 切りあひて刀を互に合はす。「一太刀の下」。

きり・むね[切棟](名) 屋根の棟の間鎖をきつかりと切り立てたるもの。はうぎやうの對。

きり・め[切目](名) ㊀切りたるとぐち。切りたるあと。㊁物事のきまり。「折目—」。——**いし**[切目石](名) 自然に現出せる餌。

きり・もち[切餅](名) ㊀角に切りたる餅。㊁昔時、一分銀百枚を紙に包みて封じたるもの、稱。

↔**きり・もの**[切者](名) きりびと。權臣。

{**きり・もの**[着物](名) きもの。

きり・もり[切盛](名) ㊀料理又は膳部のこしらへに、程よく食物を切り又は盛ること。㊁物事の處置、さばき、はからひ。

(**きり・やう**[器量](名) ㊀物事の用に立つべき才能又は德量。「將帥の—」。㊁かはばせ。みめ。容色。「ざま〳〵」。「一佳き娘」。

(**きり・やう**[伎倆](名) はたらき。うでまへ。わ

きり・やき[切燒](名) 切りて燒くこと。又、其物。「平

(**きり・やく**[機略](名) はかりごと。もち。「の—」。

(**きり・よく**[羈旅](名) たび。「一の臣」。

(**きり・よく**[氣力](名) 物事に堪へ得る精神の力。氣根。性根。

きり・よけ[霧除](名) ㊀霧を除(ヨ)くるために、角窓の上などに造る小さきひさし。㊁すべて驟のかからぬために用ふるもの、稱。

{**きり・り**(名、副) ㊀「きりきり」に同じ。「一とする」。㊁ゆるみなきさまにいふ語。「一とした顔」。

{**きり・り**(名、副) 前條(一)に同じ。「一と亂る」。

(**きり・りん**[麒麟](名) ㊀支那古代の想像上の獸、狀は鹿に似て大きく、尾は牛に似て蹄は馬に似る、頭上に角に包まれたる一本の角を有し、背毛は五彩にして腹毛は黄色なり、生草を履まず生物を食はず、聖人出で王道行はるれば現るといふ。㊁[Giraffe](動)偶蹄類麒麟科に屬する獸、「アフリカ」の内地に產し、形狀鹿に類す、頸は前脚と共に甚だ長く、頭は地上より一丈五尺以上の高さに在り、好んで木の嫩芽を食す。㊂最も傑出したる人士の稱。「河北の—」。——**けつ**[麒麟竭](名) 一種の血止藥、膠の如き黑色の塊狀をなす。——**さう**[麒麟草](名) 〔植〕景天(ベンケイ)科に屬する草、葉は長楕圓形若しくは長倒卵形にして、葉緣に鋸齒あり、夏日、花咲く。「賢草」。——**ぢ**[麒麟兒](名) 技藝又は才能の最も拔群なる少年の稱。——**もおいて はゞとばにおさる**[麒麟老劣駑馬](名) 武勇すぐれたる傑士も年老いては、其はたらき凡人よりも劣るにいふ。

↔**き・る**[蛍](名) 自、ら四) ㊀きり立つ。「きり渡る空」。㊁くもりて見ゆ。「眼—」。

き・る[切](自、ら下二) ㊀はなる。わかる。たゆ。「緣が—」(斷)。㊁遠く、果つ、終はる。㊂やぶる。さく。「袖が—」。㊃不足す。(る、かく。

き・る[切](他、ら四) ㊀たつ。さく。はなす。(斷)。㊁刃物を用ひて断ち又は割く。「紙を—」(截)。㊂刃物を動物の體軀に加ふ。(斬)。㊃殺害す。ころす。「人を—」。㊄去る。除く。「筆の端を—」。㊅遮ぎへる。「途路を—」。㊆よとぎる。横過す。「供先を—」。㊇畫す。果たす。終ふ。「讀み—」。「書き—」。㊈骨牌(カル)などを改めて まぜあはす。又「トランプ」にて、切札もて他の組の札を押へとる。㊉用器を造す。

き・る[鑽](他、ら四) 物と物とを烈しく摩(ス)り合して火を取る。「火を—」。

きる[着](他、か上一) ㊀體にまとひつく。身につく。「若物を—」(服、衣)。㊁穿つ。はく。「袴を—」。㊂蔽る。うく。「恩を—」(被)。

キルク(名) 「コロップ」に同じ。

き・る[着類](名) 身に着する服。ころも。きもの。

き・れ[切](名) ㊀きゝと。㊁切りたる小さき部分。きれはし。「一で繕ぐ」(帽、襪)。㊃反物、縫物。㊄刃物の物を切り得る能。「刺刀の—が止つた」。㊅石材の一尺立方。——**あぢ**[切味](名) 刃物などのきれぐあひ。「刀の—殊に愛でたし」。

(**き・れい**[奇零](名) 單位以下。はした。——**ぢ**

やく[奇零尺](名) 普通の尺に端置したる小さき尺。細かき寸法をとるためのもの。

(**き・れい**[綺麗](名) ㊀爲羅を裁ひて體ハしきこと。㊁うつくしきこと。みごと。あざやか。みやびやか。「鮮麗」。㊂いさぎよきこと。㊃殘りなきこと。「勘定が—に濟んだ」。——**ずき**[綺麗好](名) すこしのよごれをも厭ふ性質。潔癖。好潔。「と、「好潔」。

(**き・れう**[議了](名) 議しをはること。議決したること。

き・れ・き・れ[切切](名) ㊀切れたる上に更に切ること。甚しく裂けやぶれたること。(寸斷)。㊁切れ散りたる断片。「一をつぎあつめて」。——**に**[切切](副) はなれ〳〵に。ずた〳〵に。

き・れ・ぐづ[切屑](名) きれの小さき不用物。「と、

き・れ・こみ[切込](名) きれこむこと。きれこみたるあと。

き・れ・と・むぎ[切込](自、ま四) 切れたるあと深く入る。切れて深くはいる。「風の絲が手に—」。

き・れ・ぢ[切地](名) ㊀反物。縫物。㊁反物のきれはし。縫物のきれ。「の餘れ生ずると。

(**き・れつ**[龜裂](名) ひゞいりてさくること。さけめ

(**き・れつ**[義烈](名) 忠義のすぐれたること。みさをの最も堅きこと。

{**き・れ・て**[切手](名) ㊀賃(ヂ)まずに念錢を出す人。氣前よき人。㊁決斷よき人。よく處置する人。

き・れ・はし[切端](名) 切れたるあまりの端。「紙の—」。「一をとぢつくらふ」(斷片)。

き・れ・ま[切間](名) たえま。「雲の—」。

き・れ・め[切目](名) ㊀切るゝところ。切れたるあと。㊁をはるところ。つくるところ。はて。えまひ。「金の—が緣の—」。

き・れ・もの[切物](名) ㊀物を切る用に立つるもの。刃もの類。㊁貯蓄盡くること。「船間で—となる」。㊂「氣前よき人。果斷よき人。きれて。

き・れ・や[切屋](名) 縫物などをあきなふ店。たんものや。どふくや。

(**き・れ・る**[切](自) ㊀「きる」の訛。㊁よく物を切り得る。「刀が—」。㊂果斷に富みよく事を處置す。又、金錢を吝まず手放す。「一人」。「たる木材。

き・れんぐは[木煉瓦](名) 煉瓦の大きにつくり

き・れんぐはやく[黄連雀](名) 〔動〕れんぐはやくの一種、嘴は個扁にして頭上に羽冠あり、體羅は黄色なり。(十二黄雀)。

(**き・ろ**[鞜路](名) かへりみち。もどりみち。

(**き・ろ**[岐路](名) わかれみち。ふたまたみち。

—**ひつじをうしなふ**[岐路亡羊](名) 岐路にて牧せる羊の亡げうせ、何れの方へさがし行くべきかと惑ふが如く、物事の方向を何れに定むべきかとまどふをたとへいふ。

(**き・ろ・り**[岐櫻](名) いうぎよや。ぎようや。

{**き・ろ・ぎろ**(名、副) 目をぐり〳〵とさせて、物を見るさまにいふ語。ぎよろ〳〵。「一と見る」。

ぎょうりゅう　ぎれるりゅ　ぎんいろ　ぎんがかい　ぎんがかい　ぎんがかい

(**きん・がく**[金額]（名）きんだか。「一何程」。
(**きん・がく**[勤學]（名）學問を勤めはげむこと。「一して身をたつ」。
きん・かくし（名）大便所に大小便をなすために屈みたる人の腰部以下を蔽ふやうに其前面に設け立てたるあほひ。「の一名」。
(**きん・が・せき**[金牙石]（名）〔鑛〕きんやがんせき。
きん・かた[金方]（名）きんちゆ。
きん・がは[金側]（名）側が黄金にてつくられたるもの。——・**とけい**[金側時計]（名）金側の懐中時計。
ぎん・がは[銀側]（名）側が銀にてつくられたるもの。——・**とけい**[銀側時計]（名）銀側の懐中時計。
きん・がみ[金紙]（名）金箔又は金色の箔を塗りたる紙。「—にはね元結」。
ぎん・がみ[銀紙]（名）銀箔又は銀色の箔を塗りたる紙。「すさまにいふ語」。
(**きん・かもとゆひ**[髷]（名）《きんかあたまの少き髪を束ぬるに用ふる義》極めて細き元結。
きん・カラかは[金唐革]（名）〔金泥をもて模様を高く打ち出したる薄きなめしがは。〕〔金泥をもて模様を高く打ち出したる紙。
(**きん・かん**[金柑]（名）〔植〕みかんの變種、夏の頃白色の小花を開く、果實は小形にして冬に至り熟して黄金色となる食ふべし。
(**きん・がん**[近眼]（名）〔水晶體「レンズ」の凸起の度高く、通常の眼より明視の距離小にして、遠方の物は明瞭に見ると能はざれど、近接したる物は却て扁大に見ゆる眼。〕〔前途を推察すると能はざるもの。〕——・**きやう**[近眼鏡]（名）ちかめの人の掛くる凹眼鏡。「眼鏡の條參照」。
(**きん・かん**[銀漢]（名）あまのがは。
(**きん・き**[欣喜]（名）よろこぶこと。「—に堪へず」。
(**きん・き**[禁忌]（名）忌みて禁ずること。
(**きん・き**[金櫃]（名）〔貨幣などを入るゝはこ。かねばこ。〕〔金庫(二)に同じ。
(**きん・き**[金器]（名）こがねを用ひてつくりたる器。「琴物」。
(**きん・き**[錦旗]（名）皇室の御旗、赤地の錦にて上部に日月の形を並べて描きてあり、昔時、詔勅によりて發遣せらるゝ征討軍の標識としても用ひられしもの。「にしきのみはた」。

[きんき]

(**きん・き**[近畿]（名）宮城の所在地に近き國々。
(**きん・き**[銀器]（名）銀にてつくりたる器。
(**きんぎう・きゆう**[金牛宮]（名）〔天〕十二宮の一、其最大なる星を天高とす、昴宿は此宮内にあり。
(**きん・きふ**[緊急]（名）〔絲又は繩などのきびしく物にまとふと。「—の絃」。〕〔事件の重大にして且火急の場合に迫れると。——・**ちよくれい**[緊急勅令]（名）〔法〕公共の安全を保持し又は其災厄を避くるに緊急にして、且帝國議會閉會中提出協賛を經るの暇なきより、特に發せらるゝ法律に代はるべき勅令、此勅令を發せらるゝには、福密院の決議を經べきものにして、發せられたるときは、次の帝國議會に提出して其承認を求むるとを要し、若し議會に於て承認せざるときは、政府は將來に於て其効力を失ふことを公布すべきものとす。——・**ぎ**[緊急動議]（名）議すべき緊急なる事件を提出し、當日の議事日程を變更して、これを議題となさんとするの動議。——・**めいれい**[緊急命令]〔法〕「きんきふちよくれい」に同じ。
(**きん・きゆう**[窮窮]（名）くるしみ、なやみ。
(**きん・きよ**[金魚]（名）〔動〕ひどなの變種なる小魚、胴は膨(ふ)れ尾は長くして數節に分岐す、色は黄金色若しくは白銀色又は黄白相交れるもあり、種類多し、何れも人爲淘汰の結果なりとす。〔——・**あたま**[金魚頭]（名）きんかあたま。はげあたま。——・**バチ**[金魚鉢]（名）金魚を飼ふ鉢。——・**ぶ**[金魚鮒]（名）金魚に與ふる餌に煮きて極めて軽くしたる鮒。——・**ぶ**[金魚藻]（名）〔植〕藻類の一、淡水殊に清泉に生ず、葉は細くしてすぎなに似る、所々に結節ありてこれより枝葉を輪生す、中心に一個の長き細胞あり、金魚好みて此藻に卵を產み付くるより此名あり。まつも。ふさも。「聚藻」。——・**や**[金魚屋]（名）金魚を賣る家又は育つる人。
(**きん・きよく**[金玉]（名）〔こがねと玉と。〕〔最も珍重すべき物事にいふ語。「一の文字」。——・**たう**[金玉糖]（名）一種の菓子、寒天(かん)と砂糖とを煮て混(ま)ぜたるもの。
きん・きり[摹切]（名）寒丸を抜き取りたると。「一牛」。
(**きん・きれ**[錦切]（名）にしきのきれはし。〔牛」。
(**きん・きん**[欣欣]（名、副）よろこびいさむさまにいふ語。「—然」。
(**きん・きん**[近近]（副）ちかん〳〵に。ほどなく。
(**きん・きん**[金銀]（名）〔こがねとぎんがねと。〕〔通用の貨幣、かね。通貨。「一の出納」。——・**かんちやう**[金銀勘定]（名）簿記の勘定の科目、總て受取りたる金圓を借方に記入し支拂ひたる金額を貸方に記入す。——・**くわい**[金銀塊]（名）金

塊と銀塊と。——・**くわ**[金銀貨]（名）金貨と銀貨と。——・**するたふちやう**[金銀出納帳]（名）日々の金銀の出入を記入する帳簿。——・**ふたふほう**[金銀出納簿]（名）前條に同じ。——・**ふくほんる**[金銀複本位]（名）金貨と銀貨とを以て本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣となす制度。
(**きん・きん**[闇闇]（名、副）もの靜かに意見を戰はす。「すさまにいふ語」。
(**きん・く**[禁句]（名）〔歌にて、忌み避くべき語。「り」。とめ句。〕〔他人にきらはるゝことば。
きん・ぐさり[金鎖]（名）金にてつくりたるくさり。
ぎん・ぐさり[銀鎖]（名）銀にてつくりたるくさり。「て鎖ぐ」。
(**きん・くわ**[近火]（名）近所より出たる火事。「—に
(**きん・くわ**[金貨]（名）金を以て鑄造したる通用貨幣の稱、我國現時の制度上の品位は、純金九百分にして參和銅百分の定めなりとす。——・**とくる**[金貨國]（名）金貨本位の國。——・**たんほんる**[金貨單本位]（名）金貨を本位貨幣とし、他の貨幣を補助貨幣となす制度、文明諸國多くは此制にして、我國にては明治卅年三月以後此制を採れり。——・**へい**[金貨幣]（名）金貨に同じ。——・**ほんる**[金貨本位]（名）金貨單本位に同じ。
(**ぎん・くわ**[銀貨]（名）銀を以て鑄造したる通用貨幣、我國現時の制度上の品位は、純銀八百分にして參和銅二百分の割合なりとす。——・**とく**[銀貨國]（名）銀貨本位の國。——・**たんほんる**[銀貨單本位]（名）銀貨を本位貨幣とし他の貨幣を補助貨幣となす制度、支那等は此制を採れり。——・**へい**[銀貨幣]（名）銀貨に同じ。——・**ほんる**[銀貨本位]（名）銀貨單本位に同じ。
(**きん・くわい**[金塊]（名）黄金のかたまり。金貨の地金。「貨の地金」。
(**きん・くわい**[銀塊]（名）ぎんろかねのかたまり。銀の地金。
(**きん・くわ・ぎよくでう**[金科玉條]（名）最も貴重なる規定若しくは訓戒。
(**きん・くわん**[金環]（名）金製の環。——・**ぎよく**[金環蝕]（名）日蝕の一種、太陰が恰も太陽の中央のみを蔽ひ、太陽が環狀に見ゆると。
(**きん・くわん**[銀環]（名）銀製の環。
(**きん・けい**[錦鷄]（名）〔動〕鶉雞類に屬する鳥、もと支那產なり、頭に雞冠を有し、形狀毛色共に雉(ゐ)に似て美麗なり。にしきどり。あかきじ。——・**てり**[錦鷄鳥]（名）前條に同じ。——・**の・ま**[錦鷄間]（名）宮中の御間の名稱。——・**の・まおとう**[錦鷄間祗候]（名）退職せる勅任官が特に陛下の御思召によりて命ぜらるゝ名稱、時々錦雞間に祗候して御諮詢などに奉ずるもの。

[いけんき]

(**きん・けつ**[禁闕]（名）〔帝王の御門。禁門。〕〔天皇の御所、內裏、宮城「—を語す」「大闕」。
(**きん・けつ**[禁穴]（名）〔其所を害せば一命に及ぶべき體中の局部、急所。〕〔最も緊要なる箇所。
(**きん・けつ**[金穴]（名）〔金鑛のいづる山。「金坑」。〕〔かねもち。富豪。〕〔資本又は費用などをみつぎくるゝ人。
(**きん・げふ**[近業]（名）ちかごろてきたる著述又は詩歌などの稱。
(**きん・けん**[近縣]（名）近まはりの地方。近在。「—旅行」。
(**きん・けん**[金權]（名）金錢上の權威。かねのちから。
(**きん・けん**[勤儉]（名）〔事務につとめはげみて費用を節すること。〕——・**ぎやうぶ**[勤儉尚武]（名）政府の冗員を淘汰し歲計を節減し、且大いに武勇の氣風を鼓舞するを以て政治の眼目となすこと。又、個人が勉强且けんやくして、武勇の精神を養成すること。——・**ちよちく**[勤儉貯蓄]（名）勤儉してつとめて餘財をたくはふること。
(**きん・けん**[金券]（名）「きんさつ」「金札」に同じ。
(**きんげん**[金言]（名）貴重すべき言語、格言。「—耳に逆ふ」。
(**きん・げん**[謹嚴]（名）つゝしみ深くして物事の嚴重なること。
(**きん・げん**[謹言]（名）〔謹みていふ義〕書狀の末に用ふる語。「恐惶—」。
きん・こ[金海鼠]（名）〔動〕沙噀(コナマ)類に屬する棘皮動物、なまこに似て稍々圓く小さくして刺なし、陸前國金華山邊より北海に掛けて產す、食用に供せらる、其莫(ユ)て、干したるものは、多く支那に輸出せらる。〔「いりこ」に同じ。
きん・こ[金粉]（名）〔黄金の粉末。金砂。〕〔塗美に用ふる一種の漆、穴を穿ち、其中に金粉をいれて、如何に投ぐるとも、其量量により必ず定まりたる目の現出するやうにたくみとしらへたるもの。

[こんき]

(**きん・こ**[金重]（名）〔貨幣其他銀などを藏むる庫。かねぐら。〕〔貨幣其他重要なる書類等を收めるため特別のこしらへある廣、錠前及周壁を殿重且堅固につくりて、火難・盜難等を防ぐ設置あるもの。〕〔大藏大臣の管理に屬し、國庫に於て保管出納する

現金を扱ふ所、東京に中央金庫を置き、地方に本金庫・支金庫を置き、中央金庫は各地の本金庫を統轄し、本金庫を置かざる地方の支金庫は、中央金庫これを總轄す、現時の制度にては、日本銀行をしてこれが事務を扱はしむ、從ひて日本銀行は、其ため各地に支店出張店若しくは代理店を設く。

(きん・と)〔金鼓〕(名) 陣中の號令又は佛事の音樂に用ふる鉦(カネ)と太鼓と。どんく。

(きん・と)〔禁錮〕(名) ㊀とゞめふさぐと。「下位に—す」。㊁一室内に閉ぢ込めて其自由を束縛し外出せしめざると。むしとめ。㊂〔法〕自由刑の一、輕罪に科せらるゝ刑罰にして重禁錮と輕禁錮との別あり。

(きん・と)〔今・古〕(名) いまとむかしと。

(きん・と)〔近古〕(名) ㊀年代餘り隔たらざるむかし。㊁歴史上の區別、近世と中古との間の稱にして、我國にては後鳥羽天皇の文治二年より後陽成天皇の慶長八年までをいひ、西洋にては「ルーテル」の宗教革命頃より神聖同盟の前頃まで、即ち、十五世紀の末頃より十九世紀の始頃までをいふ。——**・ぶ**〔近古史〕(名) 近古の歴史。

(きん・と)〔金吾〕(名) 《支那の官名なる執金吾の略言、金吾は支那の宮門の衛士が執りし兵器の稱にして、其兩端を金にて塗りたるもの》衛門府の唐名。「—中納言秀秋」。

(きん・と)〔銀粉〕(名) 銀の粉末。

(きん・とり)〔勤功〕(名) 職務上のはねをり、つとめたるいさを。「—によりて爵を給はる」。

(きん・とり)〔噤口〕(名) 口をつぐむと。又、ものをいはざると。

(きんとう・ぼくぜつ)〔金口木舌〕(名) 《木鐸の異稱にして、論語に天將以夫子爲木鐸とあるに出づ》もと儒道を說きあかすものをたとへいひ、轉じて、道理を宣べ世人を歎ふるものをたとへいふ。

(きん・とく)〔金穀〕(名) 金錢と穀物と。(金米)。

(きん・とく)〔近國〕(名) 近きはりの國。遠國の對。

(きん・とく)〔禁獄〕(名) ㊀獄中に監禁すると。「さながら科人の—なりとも云ひつべし」。㊁〔法〕自由刑の一、重罪に科する刑罰にして重禁獄と輕禁獄との別あり。

(きん・とぶ)〔金巾子〕(名) 主上のめさる、一種の冠、巾子の上より前に綏(ズイ)をかされ、金紙にてはさみたるもの、きんのかんむり。

(きん・とつ)〔筋骨〕(名) ㊀筋と骨と。㊁身體。體力。「—を勞して」。

(きん・とん・きき)〔金婚式〕(名) 結婚の五十年目に行ふいはひの式。

(きん・とん・きき)〔銀婚式〕(名) 共存せる夫婦が、結婚の二十五年目に行ふいはひの式。

(きん・さ)〔欽差〕(名) 君主より便者として差しつかはさるゝこと。「—大臣」。

(きん・ざ)〔金座〕(名) 德川時代に、官の支配を受けて金貨を鑄造せし所、慶長年中江戸に創設せられ、明治二年造幣局の設置せられたるにより廢止せられたり。「—の後藤」。

(きん・ざ)〔銀座〕(名) 德川時代に、金座と同じく官の支配を受け銀貨を鑄造せし所、慶長十三年に京都に同十七年に江戸に設けられ、明治二年造幣局の設置せられたるにより廢止せられたり。

(きん・ざい)〔近在〕(名) 近き在鄕。

(きん・さう)〔金創〕(名) 刃物のきず。きりきず。

(きん・さう・ぼん)〔巾箱本〕(名) 小形の唐本。

(きん・さく)〔金策〕(名) 金子を調達する工夫(クフ)。

(きん・さく)〔近作〕(名) ちかごろつくりなるもの。

(きん・ささげ)〔銀豆〕(名) 〔植〕いんげんまめ。

(きん・さつ)〔金札〕(名) ㊀こがねの札。㊁政府より發行して國中に通用せしむる貨幣代用の信用證券、さつ。紙幣。

(きん・さつ)〔禁札〕(名) 禁制の旨を記したる制札。

(きん・サラサ)〔金更紗〕(名) 金をまじへたる模樣ある「サラサ」。

(きん・さん)〔菌傘〕(名) 〔植〕菌類の上部なる傘形をなす所。

(きん・さん)〔金簪〕(名) 金づくりのかんざし。

(きん・さん)〔金山〕(名) 黃金の出る鑛山。

(きん・さん)〔近算〕(名) 〔數〕眞の値を求むると能はざるとき、これに近き値を算出すると。

(きん・さん)〔銀簪〕(名) 銀づくりのかんざし。

(きん・さん)〔銀山〕(名) 銀の出る鑛山。

きんざんぶ・ミソ〔金山寺味噌〕(名) ひしほの一種、大豆と大麥とを混(マ)ぜ蒸(ム)してねかし、これに鹽を加へ味をつけてこしらへたるもの、支那の結齋の經(ジン)山寺にて創めて製せしより此名ありといふ。「玉藻」。

(きん・し)〔金枝〕(名) 天子の椰一門を申す語。「—玉葉」。

(きん・し)〔菌絲〕(名) 〔植〕菌の地中などに埋没して繁殖して絲の如き狀態をなす所、即ち、菌の本體にして、これにより生活し柄傘を地上に抽出す。

(きん・し)〔禁止〕(名) 其物事を禁じとゞむると。さしとめ。はっと。「と」。

(きん・し)〔近思〕(名) 自己の身に體して考へみる。

(きん・し)〔勤仕〕(名) 役を勤むると。

(きん・し)〔金絲〕(名) 金箔を薄紙に塗り細く切り

又はよりたるもの。細く切りたるものをひらきんといひ、よりたるものをよりきんといふ、きんらんあり又はぬひとりに使用し、其他種々の飾にも用ふ。

(きん・ぢ)〔金鶏〕(名) 神武天皇の長髓彦を征したまひしとき、櫛眞(クシマ)にとまりたりといふ黃金色のとび。

(きん・ぢ)〔金字〕(名) 金泥にて書きたる文字。

(きん・ぢ)〔近時〕(名) いまごろ。このごろ。(今時)。

(きん・ぢ)〔近事〕(名) このごろの出來事。

(きん・ぢ)〔近侍〕(名) ちかぢかと。「と」。

(きん・ぢ)〔近似〕(名) によりたると。同じやうなる

(きん・ぢ)〔銀絲〕(名) 銀箔を薄紙に塗り細くきりたるもの。

又はよりたるもの、細く切りたるものをひらきんといひ、よりたるものをよりきんといふ、種々の裝飾に用ひらる。

(きん・ぢ)〔銀字〕(名) 銀泥にて書きたる文字。

(きん・ぢ)〔錦繡〕(名) ㊀にしきとぬひある帛と。㊁あや麗(ウル)しき衣服又はあや麗しき織物。「身に—を纏ふ」。㊂字句麗しき詩文又は詩文に巧(タク)なる思想をたとへいふ語。「—の麗」。

(きん・ぢう)〔禽獸〕(名) ㊀鳥とけものと。「—魚介」。㊁〔道理〕又は恩義を知らざる人を罵りていふ語。

(きん・ぢ・がん)〔近視眼〕(名) 「きんがん」(近眼)に同じ。

(きん・ぢき)〔禁色〕(名) 次條に同じ。

(きん・ぢき)〔禁色〕(名) ㊀古昔、私に着ることを禁ぜられし色、即ち深紫と深紅との稱。ゆるしのいろ。㊁轉じて、後世は、黃(クワウ)に靈(レイ)の紋ある袴をいふ。——**・せんげ**〔禁色宣下〕(名) きんぢきを着るを許さるゝこと。

(きん・ぢ・くん・ぢやう)〔金鶏勳章〕(名) 一種の勳章、明治廿三年の創設にかゝり、軍功あるものに下賜せらるゝもの、功一級より功七級まであり、級に應じもの〻〻一定の年金附屬す。(下圖は功一級の金鶏勳章なり)。

[きんぢ・くん・ぢやう]

(きん・ぢ・ち)〔近似値〕(名) 〔數〕無理數の値に稍々似たる値を有する有理數、2,64 或は 2,6 は √7 の近似値なり。

(きん・ぢつ)〔琴瑟〕(名) ㊀きんとぢつと。㊁夫婦又は其情愛にいふ語。「—和せず」。

(きん・ぢつ)〔近日〕(名) 今より後多く日數を經ざる程。そのうち。やがてのうち。近き頃。

(きん・ぢつ・てん)〔近日點〕(名) 〔天〕遊星・衛星又は彗星が、太陽に最も近き位置。——**・ねん**〔近日點年〕(名) 〔天〕地球が同一なる近日點を再び通過する時間にして、三百六十五日六時十三分四十八秒なり。

(きん・ぢふ)〔近習〕(名) あそば。こばやう。

(きん・ぢふ)〔菌傘〕(名) 〔植〕菌傘の裏面にある鰓の如きひだ、其表面に數多の胞子を着生す。

(きん・ぢや)〔金砂〕(名) 「きんこ」(金粉)(一)に同じ。

(きん・ぢや)〔金紗〕(名) ㊀金絲の稱。出したる紗。

(きん・ぢや)〔銀砂〕(名) 「ぎんこ」(銀粉)に同じ。

(きん・ぢや)〔金將〕(名) 將棋の駒の名、後方の二隅(欠)に退くと能はざるのみにて、前後左右及前方の二隅へ、何れも一畫づゝ進み得るものにして、なるとなし。

(きん・ぢやう)〔襟章〕(名) 陸海軍の將校又は文官の高等官の禮服の襟につくる徽、官等の高下によりて金線又は銀線を用ひ、其形狀模樣もまた一模ならず。

(きん・ぢやう)〔今上〕(名) 現在の時代を去ろしめさる、天皇陛下。いまのうへ。

(きん・ぢやう)〔謹上〕(名) 《謹みて奉る義》書狀の名宛に添ふる語。「—何某殿」。——**・さいはい**〔謹上再拜〕(名) ㊀神を拜むときの語。㊁書狀の末尾に用ふる語。

(きん・ぢやう)〔金城〕(名) 《金にてつくりたる城の義》防禦極めて堅固なる城にいふ語。——**・たうち**〔金城湯池〕(名) 防禦極めて堅固なる城池にいふ語。(湯池の條參照)。——**・てつぺき**〔金城鐵壁〕(名) 防禦極めて堅固なる城壁又は極めて堅固なる物事にいふ語。(鐵壁の條參照)。

(きん・ぢやう)〔銀將〕(名) 將棋の駒の名、金將の次の位置を占む、四隅と前方とに一畫づゝ進み、なりては金將にひとしきはたらきのもの。

(きん・ぢゆ)〔金主〕(名) 資本又は費用を出す人。きんかた。「—が付く」。(財主)。

(きん・ぢゆ)〔禁酒〕(名) 酒を飲むを禁ずると。酒を斷つと。——**・くわい**〔禁酒會〕(名) 規約を設けて互に禁酒を勵行し、又、其利益を唱道する會合。

(きん・ぢゆ)〔銀朱〕(名) 水銀を燒きて製したる朱、普通に宋硃として用ひ、又、顔料に供せらる。

(きん・ぢゆく)〔緊縮〕(名) ㊀かたくふまること。かたまりちゞまること。㊁かたくふむると。かためちゞむると。

(きん・ぢよ)〔近所〕(名) ちかきところ。(近邊)。

(きん・ぢより)〔煙衝〕(名) 身體の或部局疊階して膨脹し、痛むと。「肺—」。

(きん・ぢより)〔近稱〕(名) 〔文法〕自身に近き物事又は場所に用ふる代名詞、これ・こゝ

ほんそ

ほんそ[本訴]（名）民事訴訟法で、原告が被告に対して、訴を提起すること。

ほんそう[本葬]（名）死後、日を隔てて行う葬式。

ほんそく[本足]（名）①本来の足。②（「本足の」の形で）本来の。

ほんぞく[本属]（名）①本来の属。②（「本属の」の形で）本来の。

ほんぞく[本俗]（名）本来の俗。

ほんぞく[本賊]（名）本来の賊。

ほんぞく[本続]（名）本来の続き

あいうえお　かきくけこ　さしすせそ　たちつてと　なにぬねの

ると。——**けんぱふ**[ケンポ][欽定憲法](名)其國の君主が制定して發布せられたる憲法。

きん-でい[金泥](名)こんでい。「こんぢ—」。

ぎん-でい[銀泥](名)こんでいの類、銀の粉をにかは水にてときたるもの。

きん-てき[金的](名)一寸四分の金色のなかに三分許の丸を描きたる射術の的。

きん-てき[銀笛](名)銀色をなしたる金屬製の笛、西洋より傳來したるもの。

きん-てつ[金鐵](名)㊀金と鐵と。㊁極めて堅固なる物事をたとへいふ語。「—の盾」。

きん-てん[均霑](名)他と同一に利益を受くること。平等にうるはふと。(多く國際の利益にいふ)。

きん-でん[金殿](名)金を用ひて裝飾を施しある殿舍。又、極めて壯麗なる殿舍。「—玉樓」。

きん-ど[禁度](名)物事にたへ得る心中。むねのうち。

きん-とう[均等](名)㊀ひとしきこと。へいきん。ひやうどう。㊁[貸借勘定などの聯もなはぬこと。

きん-とうぐわ[金冬瓜](名)【植】「カボチヤ」の類、果實は色甚だ赤く、形は長くして底扁く、味たうなすの如し。紅南瓜。

きん-とき[金時](名)㊀「きんたらう」に同じ。「對」。㊁小豆に砂糖を交へて煮たるもの。

きん-とく[金德](名)かねを多くもつこと。人德の

きん-どく[菌毒](名)菌類の含有する毒。

きん-どけい[金時計](名)きんがはどけい。

ぎん-どけい[銀時計](名)ぎんがはどけい。

きん-とん[金團](名)一種の料理、ながいもをすり、これに砂糖を加へて餡となし、栗の實又は慈姑(クワイ)の煮たるを混じたるもの。(橘餡)。

きん-ぱん[勤番](名)㊀かはるがはる勤務に赴くこと。㊁德川時代に、諸侯の大小名の家臣が、交代して江戸の屋敷につとめたりしと、子は國許に殘し置くを例とせり。㊂轉じて、獨身にして勤務のために遠方に留在すること。——**もの**[勤番者](名)勤番のくにもの。

きん-ぴやうふ[ヒヨウ][金屏風](名)地紙に金箔をあきたる屏風。特に其全體にあきたるものゝ稱。

ぎん-ぴやうふ[ヒヨウ][銀屏風](名)地紙に銀箔をあきたる屏風。特に其全體にあきたるものゝ稱。

きん-ぴやくだん[金白檀](名)漆の塗方、金箔を一面にあきてうすく漆をぬりたるもの。

きん-ぴら[金平](名)《金平本の主人公の名に起る》強くして立派なる物事にいふ語。「—骨」。——**ごぼう**[ゴボウ][金平牛蒡](名)一種の料理、ごぼうを細かくきざみ、胡麻の油にていためて後煮たるもの。——**ぼね**[金平骨](名)堅固なる骨。屈などに用ふ。——**ぼん**[金平本](名)德川の初代に流行せし、金平といふ主人公の武勇を述べたる極めて幼稚なる淨瑠璃本、轉じて、すべて武勇なる人を描(エガ)きたる幼稚なる小說などにいふ語。——**もの**[金平物](名)芝居又は小說にて、趣味少き武勇談を脚色(シキ)とせるもの、稱。

ぎん-ビン[銀瓶](名)銀製の瓶。

きん-ぷう[金風](名)あきかぜ、秋風。

きん-ぷくりん[金覆輪](名)金を被(カブ)せたるふくりん。「—の鞍をおき」。

きん-ぶち[金緣](名)㊀うるしぬりのふちに金をぬりたるもの。「—の鏡」。㊁金にて緣をつくりあるもの。「—の眼鏡」。

きん-ブラ[金布羅](名)「テンプラ」の一種、衣に玉子をまぜて揚げたるもの。

きん-ぶん[金粉](名)金の粉。

ぎん-ぶん[銀粉](名)銀の粉。

きん-ぺん[近邊](名)近きあたり。きんぺん。

きん-ぺん[金](名)つくりたるペン。きん。

きん-ぼう[欽慕](名)もちひのぞむこと。ふたふと。

ぎん-ぼう(名)【動】硬鱗類に屬する魚、體は細長側扁にして、頭口共に小さし、背鰭は頭後より起りて全背上を被ひ、體色は背部紅褐にして暗褐色の斑紋あり、體長大なるは五六寸許、東海地方に多く產する近海魚なり。

きんぽうげ(名)【植】毛茛科に屬する草、葉は單葉にして掌狀に分裂し、夏の頃、五瓣黃色の花を開く、果實は小形にして球狀をなす、有毒植物なり。

キンマ[蒟醬](名)㊀安南地方に產する桑の實の如き果實、蜜に漬けて食ふ。㊁「キンマで」の略言。——**で**[蒟醬手](名)舶來の漆器、金漆をもて鞭(ハク)しく模樣を置きたるもの。もも。「キンマ」を盛るより此名あり。

きん-まくは[クワ][銀甜瓜](名)【植】まくはうりの一種、果實は大形なれど味美ならず。「ぶどん」。

きん-まん-か[金滿家](名)有福なる人。金もち。

キン-マン-モン[君眞物](名)琉球の神の名。

きん-み[吟味](名)㊀詩歌を吟じ味ふこと。㊁よく物事を調べ糺ぶこと。詮議すること。——**かた**[吟味方](名)吟味する役前。又、其人。——**がかり**[吟味掛](名)㊀詮議のかゝりあひとなること。㊁吟味の受持。又、其人。——**やく**[吟味役](名)吟味する役扁。又、其人。

きん-みつ[緊密](名)㊀きびしくしてぬけめなきこと。㊁すきまなくぴったりと附着すること。

きん-みづひき[金水引](名)㊀水引の一種、金箔をふきたるもの。㊁【植】薔薇科に屬する草、葉は不整齊羽狀複葉にして、花は總狀花序に排列し、花瓣は五個ありて黃色を呈す、藥用植物なり。(龍芽草)。

きん-む[勤務](名)つとめ。

きん-むく[金無垢](名)混合物なき純金。

ぎん-むく[銀無垢](名)混合物なき純銀。

きん-め[斤目](名)かけめ。りやうめ。

きん-め[金目](名)昔時の兩・步・朱などの名目。

ぎん-め[銀目](名)昔時の貫・匁・分などの名目。

きん-めい[欽命](名)君王のおほせ又はつかひ。

きん-めっき[金鍍金](名)金にて鍍金(メッキ)すること。又、其鍍金もの。

ぎん-めっき[銀鍍金](名)銀にて鍍金すること。

きん-モール[金毛織](名)金織の「モール」。

ぎん-モール[銀毛織](名)銀織の「モール」。

きん-もつ[禁物](名)㊀禁じ戒むること。又、其物事。(禁忌)。㊁いみさくべきこと。又、其物事。

きん-もとゆひ[ユイ][金元結](名)金色のもとゆひ。

ぎん-もとゆひ[ユイ][銀元結](名)銀色のもとゆひ。

きん-もん[禁門](名)禁闕。

きん-もん[金紋](名)金箔をもて書きたる紋所。德川時代に、大名が家格に由りて許され、其挾箱に記し、邊(ヘリ)に用ひられざりしもの。

きんや[禁野](名)古昔、天子の御獵のため、私に鳥を捕ふを禁止したる所、河內國交野(カタノ)の類。

きん-やく[勤役](名)役を勤むること。又、其役。

きん-ゆう[金融](名)㊀金融市場に於て、金錢の需要供給の狀態、即ち、金錢に關する諸取引の狀態の稱、金融市場にて、貸出をなし得べき金錢の多

きん-ぱく[錦囊](名)㊀にしきの巾地にてつくりたる袋。㊁名吟多き人の草稿にいふ語。

きん-ぶくろ[金囊](名)かねのいれてあるふくろ。かねざいふ。

きん-ながし[銀流](名)㊀水銀にとのこを混じ、金屬に摺り付けて、銀色となすに用ふるもの。又、それを用ひて銀色となしたるもの。㊁[土臺は惡しくて上部のみよく見ゆること。又、其物。「—の人物」。

きん-なふ[ナフ][金納](名)租稅又は小作料を納むるに金錢を以てすること。米納の對。

キンナラ[緊那羅](名)【佛】八部衆の一、音樂の神といふ。

[ラナンキ]

ギン-ナン[銀杏](名)いてうの樹の果實。

きん-にく[筋肉](名)高等動物の外皮を剝(ハ)ぎて內に見ゆる色赤くして柔軟なるもの、其內臟の壁を纏圍せるものとをいふ、前者を橫紋筋一に隨意筋といふ、前者は索狀の大小束をなして橫紋を有し、種々なる方向に骨に附著し、關節に跨(マタ)りて骨と骨とを聯結す、意志のまに〳〵運動するものにして、關節の運動は專ら其收縮力による、後者は東をなさずして紋狀なく、自體の收縮力により運動を營み、意志のまに〳〵に運動するものにあらず。

きん-ねん[近年](名)この頃、ちかごろ。

きん-のう[勤王](名)「きんわう」の訛。——**おうい**[ヨウ][勤王攘夷](名)「きんわうぜうい」に同じ。

きん-の-かんむり[金冠](名)「きんぐわん」に同じ。

きん-の-とと[琴](名)七絃の琴、きん。

きん-ば[金齒](名)金をかぶせ又は塡(シ)めたる齒、又、金を用ひて細工せる入齒。

きん-ば[金波](名)月の光の稱、又、月光の映(ウツ)りて金色を帶びたる波。

ぎん-ば[銀齒](名)銀をかぶせ又は塡(シ)めたる齒、又、銀を用ひて細工せる入齒。

きん-ばい[金杯](名)金にてつくりたる杯。

ぎん-ばい[銀杯](名)銀にてつくりたる杯。

きん-ばい[金牌](名)金にてつくりたる賞牌の稱にして、賞牌の第一なるもの。

キン-パイ[金海](名)朝鮮產の陶器の一種。(茶人の語)。

ぎん-ばい[銀杯](名)銀にてつくりたる杯。

ぎん-ばい[銀牌](名)銀にてつくりたる賞牌、金牌に次ぐもの。

きん-ばう[ボウ][近傍](名)近きあたり。ちかまはり。きんぼう。(近邊)。

きん-ぱく[金箔](名)㊀黃金の箔。㊁[正味より一層よく世人に思はしむる飾「—がはげる」。㊂[ねうち。くらゐ。「—がついた」。——**けんでんき**[金箔驗電器](名)【理】「ガラス」瓶內に二枚の金箔を具(ソナ)へし、其上部は眞鍮の板又は球に終はる銅置にして、或物體の電氣の有無を驗するに用ふる器、今電氣の有無を驗せんとする物體を其板若しくは球に觸るゝときは、電氣あれば二枚の金箔は開き、然らざるときは從前の狀態を保つ。——**つき**[金箔附](名)㊀まがひなき正味のもの。「—の狂人」。㊁かたがき又はくらゐなどのあること。

きん-ばく[銀箔](名)銀の箔。

きん-ばへ[エバ][金蠅](名)【動】蠅の一種、胸背共に黃金色をなし、好んで腐敗せる食物等に集まる。

ぎん-ばへ[エバ][銀蠅](名)【動】「くそば(ヘ)」に同じ。

はひふへほ　まみむめも　やいえゆよ　らりるれろ　わゐうゑを

〇字音　一個語方言　＋＋古語

きに反して借入をなさんとする人の少きときは、これを金融緩漫といひ、若し金融市場にて貸出をなし得べき金錢の少きに反して借入をなさんとする人の甚だ多きときは、これを金融逼迫といふ。㊁金錢の融通。かねまはり。——**かい**[金融界](名)金錢の融通する社會。金融市場。——**きくわん**[金融機關](名)金融市場にて金融の便利を圖るために設置せられたる經濟上の機關、銀行又は手形交換所の如きこれなり。——**ぶちやう**[金融市場](名)世界又は一國若しくは一地方に於ける富の集積して其金融上の主要なる所。

(**きんよくしゆぎ**)[禁慾主義](名)【倫】肉體上に關する一切の慾望若しくは名譽・利益・富貴等を得んとする念慮を禁止するとを以て、道德に進む手段となす主義。「續き」(近時)。

(**きんらい**)[近來](副)ちか頃。この頃。「—豐作打とめの勞苦」。

(**きんらう**)[勤勞](名)㊀勤勞のはねをり。つとめの勞苦。「—に酬ゆ」。㊁【經】直接には生產に効力を及ぼさざれど、間接には生產に効力を及ぼす勞力、即ち、官吏・辯護士・著述家などの勞力をいふ。

(**きんらん**)[金襴](名)一種の織物。錦の類にして、橫にひら金の絲を織りて地とし、絹絲にて模樣をあらはしたるもの。(織金)。——**で**[金襴手](名)磁器の模樣の一種。にしきで。

(**きんらん**)[金蘭](名)《易經に二人同心其利斷金、同人之言其臭如蘭とあるに出づ》朋友間の情誼のいと親しきにいふ語。「—の交」。「—の契」。——**ぼ**[金蘭簿](名)交友の姓名宿所などを書きとめおく帳簿。

(**きんりたるもの**)

(**きんりん**)[銀襴](名)金襴の類、銀色の絲にて織

(**きんり**)[禁裏](名)宮中。禁中。ごてん。(內裏)。——**さま**[禁裏樣](名)きんていさま。主上。——**づき**[禁裏附](名)德川時代に、幕府より禁中の守護につけおきし武士の稱。

「錢の利子。

(**きんり**)[金利](名)金錢の借用に對する報酬。金

(**きんりやう**)[斤量](名)りやうめ。目方。

(**きんりよく**)[金力](名)かねのちから。

(**きんりん**)[近隣](名)近きとなり。きんぐよ。

(**きんりん**)[金輪](名)金の輪。又、金色の輪。

(**きんるる**)[菌類](名)【植】きのこ・かび等の總稱。種類屬多にして、構造形狀等より生殖機關の狀態に至るまで一樣ならざれど、何れも柔組織にして體中に葉綠を缺き、特立の生活をなす能はず、他の有機物に寄生し營養分を取りて生活す、死物に寄生するものと生物に寄生するものとあり。

(**きんるる**)[金類](名)金屬に同じ。

(**きんれい**)[禁令](名)㊀或行爲を禁止する法令。刑罰に關するもの、大部分はこれに屬す。㊁【法】民事上にて、他人の權利を害し若しくは自己の義務を怠る行爲の豫備又は繼續をなすものに對し、關係者の請求により、其行爲を禁止するために裁判官の發する命令。

(**きんれん**)[金蓮花](名)【植】「あさゞ」の一

(**きんれんぼ**)[金蓮歩](名)《支那南朝の齊の東昏侯が潘妃を愛し金製の蓮花を地にちりばめて、其上を歩ませ歩々生蓮花といひて與じたる故事に出づ》美人の歩行にいふ語。

(**きんろく**)[金祿公債](名)華族・士族の家祿及賞典祿を償還するために、明治九年にこれを公債に改めしもの。

(**きんわ**)[勤王](名)王室に勤勞すること。君

(**きんわい**)[勤王攘夷](名)德川幕府の末年、朝野の志士が其尊橫と開港とに對して、反抗運動をなすに標榜せし題目。

(**きんゐ**)[金位](名)鑄造する合金の品位。

(**きんゐん**)[金員](名)かねだか。又、きんす。

(**きんゐん**)[金匠](名)きんす。「—を取る」。

(**きんゐん**)[禁苑](名)宮城內の御園。

(**きんをく**)[金屋](名)金にて裝飾せるいへ。又、おごりをつくしたるいへ。「—の觀」。

く　ぐ

く　喉的破裂音k即ち舌の後部を軟口蓋に接して破裂せしむる音と、母音「う」との綴音。

ぐ　「く」の濁音、凡て「く」音と同じく、たゞ破裂音に聲帶の振動の伴ふを異なりとす。

(**く**)[句](名)㊀文章又は言語の一切(ことば)、即ち字を連ね又は言を綴りて、一文としての意義を形成するに至らざるもの。㊁和歌若しくは俳句等の一切。普通は五字若しくは七字にして、時に字あまりと稱し、一二字の更に加はるとあり。㊂詩の一切。普通は五字若しくは七字にして、時には四字六字若しくは三字乃至十數字のものあり。㊃俳句の俗稱。

(**く**)[苦](名)㊀はねをり。はたらき。㊁くるしみ。なやみ。「人の—を救ふ」。㊂【佛】切有爲の心行が、无常の思累のためになやまるゝこと。「生老病死の四—」。㊃【心】心の活動が盛火なる狀態より微弱なる狀態に落下するか又は精力に不相應なる外界の刺激を受

くるかによりて生ずる感情。

(**く**)[空](名)「くう」に同じ。

(**く**)[區](名)㊀とわけ。さかひ。分域。㊁去な。わかち。差別。㊂場所又は方位。「疎方別—」。㊃小さき室又は小さき舍。「賈—をつくる」。㊄物を藏(ぞ)むる所又は身を容るゝ所。「賦の—處を知る」。㊅まちく。べつ〳〵。「—にして別あり」。㊆行政區劃の一、北海道・沖繩縣に於けるもの即ち小樽區・那覇區の如きは、國の行政區劃にして、市町村に於けるもの即ち數町區・神田區の如きは、地方自治體の行政區劃なり。前者は法人なれど後者は法人にあらず。

(**く**)[來](自、か變)こなた。至る。きたる。

(**く**)[九](數)とゝのつ。

(**—く**)[鑢](接尾)佛像などを數ふるにいふ語。「觀音三—」。

(**ぐ**)[具](名)㊀うつは。だうぐ。「物の—」。㊁去たく。そなへ。設備。㊂きりやう。人物。「將相の—」。㊃【こもくずしの中に混ずるたね(具)。

(**ぐ**)[愚](名)㊀おろか。ばか。㊁ばかもの。たはけもの。㊂自分の才能の謙稱。「—を効す」。——**にもつかぬ**　おろかになる。ぐちになる。

(**ぐ**)[愚](代)自分の謙稱。「—案ずるに」。

(**ぐ**)[五](數)博奕にて、賽(さい)の目の五の數の稱。

(**ぐ—**)[愚](接頭)自分の物事に冠し、謙遜の意を表はす語。「—見」。「—策」。「—老」。

クーデター[Coup d'Etat](名)猛烈なる政略を斷行すること。大打擊を加ふること。暴斷を行ふこと。

クーリー[苦力=Coolie](名)にんそく。かるこ。

クーロン[Coulomb](名)【理】電氣量の單位。「アンペーア」の電流が一秒時間に送る電氣の量。——**のていりつ**[—の定律=Coulomb's law]電氣力及磁氣力に關する定律。電氣を帶びたる二つの球體の相互作用は、兩球の電氣量の相乘積に比例し二球の中心の距離の平方に逆比例す。又、二つの磁極の相互作用は、二極の強さの相乘積に比例し、其距離の平方に逆比例す。

(**ぐあひ**)[工合](名)㊀もの、機成せられたる形狀。「—のよしあし」。㊁もの、適合せるありさま。「弟—がよし」。㊂あんばい又はてうゞ。

(**ぐあん**)[具案](名)書狀などにかきたゝむるとき、又、一定の方法手段をそなふること。

(**ぐあん**)[愚案](名)㊀おろかなる考。ばかなおもひ。㊁自分のかんがへの謙稱。

(**くい**)[悔](名)くやること。後悔。「—の八千度」。

(**くい**)[區醫](名)衛生上其他必要なる場合のために、區役所よりかれて囑託しおく醫師。

(**くい**)[愚意](名)「ぐあん(二)」に同じ。

(**くい**)[悔改](名)前非をくいて性行を改め善に向ふこと。「おもに、「キリスト」教にていふ」。

(**くいいう**)[具有](名)そなへたもつこと。「語」。

(**くいくい**)(名、副)物をはげしく吳くさまにいふ。

(**ぐいぐい**)(名、副)㊀くい〳〵の意を稍や強めたる語。「一引く」。㊁勢よく酒などを飲むさまにいふ語。「酒を—飲む」。

(**ぐい—のみ**)[ぐいぐい—](名)ぐいぐいと勢よく飲むこと。「酒のうゝ。ちゆう。「—を攝んで七頭八倒」。(虛空)。㊁空間の略言。「時—を超越す」。㊂むなしきこと。むなしきこと。「—を打つてよろ〳〵よろ」。㊃ひろ處。から。あき。「—を打つてよろ〳〵よろ」。㊃ひろきと、廣大。「天—海濶」。㊄事實なきこと。又、根據なきこと。「—な噂」。㊅むだ。いたづら。あだ。「—な考」。㊆

知性なきこと。思慮なきこと。「—で居たから知らぬ」。㊇無著なきこと。私意なきこと。又、煩惱なきこと。㊈【佛】宇宙の萬事萬象は、すべて因緣の所生にして、實體自性なきこと。——**そく せきぐ**[空卽是色]【佛】諸法の本體は空なれど、因緣の相續により歷然として存在し、其まゝに有なりといふこと。

(**ぐう**)[寓](名)かりずまひ。やど。

(**ぐう**)[偶](名)㊀つい。そろひ。㊁つれあひ。めを。㊂なかま。とも。㊃ぐうすう。ちやう。

(**ぐうい**)[寓意](名)物事に託して、意をほのめかすこと。「—小說」。

(**ぐうかく**)[隅角](名)㊀すみ。かど。㊁三平面以上の一點に會する所。

(**くうかん**)[空間](名)㊀あきてあるところ。からなるばしよ。すきま。あひだ。㊁【哲】上下・四方・遠近・長短等によりて表はさるゝ一般無限にして物體の延長の成立し得べきもの、彼處・此處・平面・立體等は其部分の稱なり、此觀念は、吾人の心中に具有せる形式なりともいひ、又は觸感視感等によりて物の廣がれる樣を感得し、抽象に抽象を重ねて得たるものともいへり。——**び**[空間美](名)繪畫又は彫刻等の稱。「かびたるかんがへ」。

(**ぐうかん**)[偶感](名)偶然に發したる感想。ふ語。「酒を—飲む」。

(**くうき**)[空氣](名)地球を包圍する氣體にして動植物の呼吸するもの。無色・無味・無臭にして、酸素四・窒素一の割合に混合す。——**おゆう**[空氣銃](名)一種の銃。壓搾空氣の作用によりて、筒中の裝塡物を發射する裝置のもの。——**ブトン**[空氣蒲團](名)側を空氣の漏れざるやうにし、中に空氣を吹き入れ膨(ふく)らして使用する裝置の敷蒲團。——**ポンプ**[空氣—=Air pump]

(名) 空氣を排除する「ポンプ」。圓筒の底に筒内に向つて開く瓣あり、又、筒に密に嵌入する活塞にも外方へ向く瓣あり、筒底を空氣を排除せんとする鎖に連絡して活塞を上下せしむ、活塞を上ぐるときは、底の瓣開きて空氣筒内に入り來り、活塞を下ぐるときは、底の瓣閉ぢ空氣出づるにより、鎖中の空氣を排除するとを得、されど如何に活塞の上下を反覆すとも、充分空氣を排除する能はず、此外水銀を用ひたる空氣「ポンプ」あり、水銀「ポンプ」の條を見よ。(空氣喞筒)。——**まくら**[空氣枕](名) 側を空氣の漏れざるやうにし、中に空氣を吹き入れ膨(ふく)らして使用する裝置の枕。——**ランプ**[空氣洋燈](名) 光力を強くするために、心を通じて上下に空氣のよく通ふ裝置ある洋燈。

(**くう-きょ**[空虛](名) ㊀空しくして何物も存せざること。から。㊁乏しきこと。竭きたること。「資力—」。㊂防禦なきこと。そなへなきこと。「敵の—を衝く」。

(**ぐう-きょ**[寓居](名) かりずまひ。

(**くう-くう**[空空](名) ㊀茫然としてあること。分別なきこと。㊁私意なきこと。執着なきこと。又、煩惱なきこと。「一乎たり」。㊂【佛】色心内外共に空なること。——**おやくおやく**[空空寂寂](名) ㊀【佛】宇宙の有形も無形も、其實體自性は空にして何等の思惟をも絶つこと。㊁思慮無きこと。又、何事をも辨知せざること。「一の人間」。

(**ぐう-ぐう**(名、副) ㊀「ぐい〳〵」に同じ。「一飲む」。㊁肝膽を發するさまにいふ語。「爲肝を—かく」。

(**くう-げ**[空華](名) ㊀かすみたる眼にて月を望めば、空中に花ある如く見ゆること。㊁煩惱(ぼんなう)の滿ちたる心に、種々の妄相の見ゆるにいふ語。

(**くう-けい**[空閨](名) 夫若しくは妻のひとりねのねや。(空房)。

(**くう-けん**[空拳](名) ㊀何物をも持たざるにぎりこぶし。又、何物をも殺(あやま)らざるにぎりこぶし。「—を以て人を撲殺す」。㊁孤立して援助なきこと。又、十分の用意なきこと。「—よく互萬の富を致す」。

(**くう-げん**[空言](名) ㊀根も葉もなきはなし。眞實ならざる說。㊁ぞくにたゝぬことば。實施せられざる論。「—施すなし」。「談話、莊子の—」。

(**ぐう-げん**[寓言](名) 事實を假設したる寓意の譬き論。「—施すなし」。

(**ぐう-ご**[偶語](名) 相對して語ること。——**の-き**[空谷](名) 人なきたに。

よう-れん[空谷蛋音](名) 《空谷に聞ゆる人のあしおと》さびしさにわびてあるときに、田會せしうれしきはなしなどにいふ語。

(**ぐう-ざ**[偶坐](名) 相對して坐すること。

(**くう-さう**[空想](名) 【心】現實よりかけ離れたる思想。事實及法則等に關係なく、其目的に達する手段も太だ漠然とし、實用的より寧ろ快樂的若しくは苦痛的にして、其多くは偶然に藝作するもの。

(**ぐう-ざう**[偶像](名) 木・石又は金屬などにて作りたる像。——**けう**[偶像教](名) 偶像を宗教的客體として崇拜信仰し、これによりて苦患を免れ安慰を得んとする宗教。「同じ。

(**くう-さう-ばう**[空相場](名) 【商】「くうとりひき」に同じ。

(**くう-さう-し**[空紙](名) 何ものも書きてなき白紙。

(**ぐう-ぐう**[宮司](名) 官幣社又は國幣社の最高の職。

(**ぐう-ぐつ**[偶日](名) ちやうどの日。[神宮。

(**くう-きゆ**[空手](名) からで。てぶら。くうけん。

(**くう-きよ**[空所](名) 空虛なる處。

(**ぐう-きん**[編進](名) 左右より並び進むこと。

(**ぐう-ぐん**[偶人](名) でく。人形(にんぎう)。

(**ぐう-すう**[偶數](名) 【數】二を以て整除し得べき數。四・六・八・十等の如きこれなり。ちやうのかず。

(**ぐう-せい**[偶性](名) 其物の本來の性質にあらずして偶然に生じたる狀態。

(**ぐう-せい**[偶成](名) ㊀偶然に成りたること。㊁相合して成りたること。

(**くう-せき**[鞦韆](名) さしちがへて死ぬること。

(**くう-せん**[空船](名) からぶね。

(**くう-ぜん**[空前](名) 以前にそれに比すべき物事なきこと。「一絕後」。

(**ぐう-ぜん**[偶然](名) ㊀おもひよらざること。意外。㊁豫想せざりし結果。原因の知れざる事柄。

(**ぐう-ぜん**[偶然](副) おもひもよらず。不圖。

(**くう-だん**[空談](名) むだばなし。又、ねなしごと。

(**くう-ち**[空地](名) あき地。

(**くう-ちゅう**[空中](名) ㊀大空の中。そらのうち。なかぞら。「—に舞ひ上がる」。㊁【佛】不生不滅不垢不淨不增不減なる諸法の本體。——**でんき**[空中電氣](名) 空中に現はるゝ電氣。——**ろうかく**[空中樓閣](名) 《そらの中のたかどの》、義根據なき物事にたとへいふ語。

(**ぐう-ちゅう**[偶中](名) ㊀《推南子に出づ》ひるなか。晝間。㊁まぐれあたり。

くう-づ-くだけ[功付](自、カ四) 器用になる。巧になる。「くうづきて、だらによみたり」。

(**ぐう-てい-るる**[偶蹄類](名) 【動】脊椎動物の一、每肢に四蹄ありて中央の二蹄はよく發達すれど、兩側のものは小にして地に接せずこれを懸蹄といふ、日齒の咀嚼面に珪質より成る數多の波線あり、牛・鹿・羊・豕等これに屬す。

一字音　〃俚語方言　〃古語

くう-ざりひき[空取引](名) 實際に物品の賣買をなさず、たゞ其相場の高下のみにより損益の計算をなす取引。くうさうば。「く。かんがへなく。

(**くう-に**[空](副) ㊀徒に。むなしく。㊁めあてなく。

(**くう-はう**[空砲](名) からでつぽう。

(**くう-はう**[空胞](名) 內部の空虛なる細胞。

(**くう-ぼう**[空房](名) ㊀人なきへや。あきま。㊁《くうけい》空閨に同じ。

(**くう-はく**[空白](名) 紙面の何も書きてなき所。ひろきと。

(**くう-ばく**[空漠](名) ㊀何物もなくぼつとしてひろきと。㊁ぼんやりとして要領を得ざること。

(**くう-ふく**[空腹](名) 食に飢ゑて胃の空乏なること。ひだるきこと。「—を感ず」。「言又は規則。

(**くう-ぶん**[空文](名) 實益若しくは實用なき文

(**ぐう-もく**[寓目](名) 目をつくること。

くうや-ねんブツ[空也念佛](名) 【佛】天台宗の一派、空也上人光勝を祖とす、京都の空也堂を本山とし、徒弟は優婆塞(うばそく)の姿にて、無常頌文を誦(ず)み、念佛をとなへ鼓を叩(たゝ)きて踊る。

(**くう-り**[空理](名) 實際とかけはなれたる理。事實に關係なき理。「る意見。

(**くう-ろん**[空論](名) 根據なき議論。又、無益な

(**くう-ゐ**[空位](名) あきてある位地。

(**く-えう**[九曜](名) ㊀七曜に、羅睺(らご)及計都(けいと)の二星を加へたるもの、陰陽家などにては、此九個の星を人の生年に配當して、其運命吉凶を判ず。「九星」。㊁紋所の名、中央に大いなる星を置き、周圍に八個の小なる星を附したるもの。

(**く-えき**[苦役](名) ㊀苦しき勞働。つらき使役。

(**く-えき**[驅役](名) あひつかはれ。あひつかひ。

(**く-えんさん**[枸鹽酸](名) 【化】柑類の果實中に含まる、麻基性の酸、無色無臭の結晶にして、水に溶解す。

くが[陸](名) 《國所(がうこ)の略言》地球の表面の河海湖沼ならざる部分即ち水の濕(しめ)へざる場所。りくち。

(**く-がい**[苦界](名) ㊀【佛】苦思ある世界即ち娑婆。㊁遊女の境界。

(**ぐ-かう**[愚考](名) ぐあん。ぐい。

(**く-がく**[苦學](名) なみ〳〵ならぬ辛苦をして學問すること。——**-せい**[苦學生](名) 苦學する書生。又、勞働しつゝ學問する書生。

+くが-たち[探湯](名) 古代、是非正邪を判ずるため、神に誓ひて熱湯に手を入れしめしと、其正なるものは爛(ただ)れず邪なるものは爛るといへり。

くが-ぢ[陸路](名) 陸上を通ずる道路。又、りくち。

(**く-かん**[苦寒](名) ㊀さむさにくるしむこと。㊁いとさむきこと。又、最もさむき時。「と。「—の君子」。

(**ぐ-がん**[具眼](名) 物の是非を判ずる識見ある

くき[莖](名) ㊀【植】草本の幹莖即ち中軸の稱にして、胚の幼芽の成長したるものなり、或は地上にもあり、或は地中に存在して根狀をなすあり。或は一年生なるあり或は多年生なるあり。㊁花の柄又は葉の軸。「菜の—」。——**づけ**[莖漬](名) 野菜の莖を鹽漬にしたるもの。

+くき[嗣](名) 山の洞ある處。「洞」。

+くき[豉](名) 今日の醬油の類。

くき(名) 【動】「うぐひ」の一名。

くき[釘](名) 材木と材木とを嚙(と)ぢ合はすに用ふるもの、金屬・木・竹其他かたき物を細く削りてつくる。——**かくし**[釘隱](名) なげしに打ちつけたる釘のあとを隱すため、其上に被(おほ)せ打ちて飾となすもの、金屬又は木石などにて種々の形につくる。

[くしかぎく]

——**かすがひ**[釘鎹](名) ㊀くぎとかすがひと。㊁雙方を離れぬやうつなぎとむるもの。——**ぎめ**[釘締](名) 戶・蓋などに釘を打ちつけて、開かぬやうにすること。又、其物。「家の—」。「箱の—」。——**づけ**[釘付](名) 前條に同じ。——**ぬき**[釘貫](名) ㊀柵の類。㊁紋所の名、四角形の角(かど)を左右上下に向けたるもの。(鉗子)。——**ぬき**[釘拔](名) 打ちこみたる釘を拔くに用ふる具、形は鋏(はさみ)のごとく頭はけぬきの如し、其頭にて釘をはさみて拔く。(千斤秤)。——**をさす**かたく釘定す。「蓋く」。

+ぐき-ぐき(名、副) 固く蓋(ふた)くさまにいふ語。「—

(**く-きやう**[究竟](名) ㊀きはまり。つめ。終極。畢竟。㊁假定又は特殊に對して、根本又は普遍の稱。㊂最もすぐれたること。「一の士」。——**かく**[究竟覺](名) 【佛】无明の惑ひ全く盡き、心性の本體を見證して、心性の常住なる狀態。——**げんり**[究竟原理](名) 「きうきやうげんり」に同じ。

(**く-きやう**[公卿](名) 公即ち攝政・關白・大臣と卿即ち參議・大中納言及三位以上と、又、殿上人の總稱。くげ。

(**く-きやう**[苦行](名) 【佛】極めてつらき修行、即ち斷食の類。「難行—の功を積み」。

(**く-きやう**[供饗](名) 形は三方と同じくして、四方に穴ある臺。「音さへ—なり」。

+くき-やか[際](名) きはやかに分明なること。「聲

一字音　〃俚語方言　〃古語

(く・きやく[苦虐](名) 苦しめ虐(たぐ)ること。

く・きり[句切](名) ㊀句のきれめ。段落。㊁物事のかぎり。きり。

く・きる[句切](自、ら四) ㊀句にて切る。くぎりを設く。㊁分界又は段落を施す。えきる。

(く・きん[九斤](名)【動】雞の變種、毛深く脚にもまた毛あり、人爲淘汰の結果肥大となり、飛力殆ど退化せり、もと舶來の種なり。(交趾鷄)。

(く・く[區區](名、副) ㊀まちまち。べつべつ。㊁物事のさゝいなるさまにいふ語。「一の小國」。

(く・く[九九](名)【數】九九合數の略言。

(く・く[九九](數) 九と九との乘數、即ち八十一。

++く・く[苦苦](自、か四) くるる。

く・ぐ[苧草](名)【植】苧科に屬する草、海邊に生ず、高さ二三尺、かやつり草に似て、秋の切、小花を開く、莖を採りて賽(ゼ)をつくり又は繩をつくる。

(く・くがふすう[九九合數](名)【數】九九の表に掲げたる一より九までの數の中にて、二つの數を掛け合はせたる積。

くくし[括](名) ㊀くゝすと。くゝると。㊁くゝりぞめ。志ぼりぞめ。——**つ・く**[括附](他、か下二) くゝりつく。——**つける**[括附](他)「くくしつくの訛」。

くく・す[括](他、さ四) くゝる。くゝりつく。

++く・ぐ・せ[屈脊](名) 疾病のために、脊髓のまがりたるもの。せむし。(佝僂)。

++く・たち[蜷立](名) 藁にて編みたる袋、籾又は貝などを入るゝ用に供するもの。

++くぐつ[傀儡](名) ㊀からくりの裝置ある人形(ニンギヤウ)。又、其人形を歌に合はして舞はする藝。㊁まひめ。舞妓。㊂あそびめ。遊女。——**まはし**[傀儡舞](名) くぐつを舞はす女。㊁遊女。

[しはまつぐく]

めし[傀儡女](名) ㊀くぐつ。——。

(く・でいでい[區區泥泥](名、副) さゝいの物事にもかゝりなづむさまにいふ語。

++く・ぬき(名) 牧蔦の鳴き聲。

++く・ぬは[苧繩](名) くぐの雲にて綯(ナ)ひたる繩。

く・の・へら[九九表](名)【數】一より九までの數の中にて、二つの數を掛け合はせたる積の表、掛算を簡便に行ひ得るために設くるもの。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
	2	4	6	8	10	12	14	16	18
	3	6	9	12	15	18	21	24	27
	4	8	12	16	20	24	28	32	36
	5	10	15	20	25	30	35	40	45
	6	12	18	24	30	36	42	48	54
	7	14	21	28	35	42	49	56	63
	8	16	24	32	40	48	56	64	72
	9	18	27	36	45	54	63	72	81

くぐひ(名)【動】「はくてう」に同じ。

++くぐま[蹋](名) くゞまること。

++くぐま・る[蹋](自、ら四) 屈を曲げ體を縮む。かゞむ。とゞむ。

くくみ[銜](名) ㊀くゝむこと。くゝむもの。㊁(他、ま四)「つゝむ」に同じ。「袖ひきちぎりて、押しくゝみ」。

くく・む[銜](他、ま四) ㊀口の中に含み持つ。ふくむ。「水を一」。(哺)。㊁心中にうちみ思ふ。

くく・む[銜](他、ま下二) ㊀口の中に含ましむ。くゝます。(哺)。㊁心に會得(エト)せしむ。「いひ一」。

くぐ・む[屈](自、ま四) かゞむ。

くぐ・む[屈](他、ま下二) かゞます。

++くくめる[哺](他)「くゝむ」の訛。

++くぐもり[曇](名) くゞもること。(冥濛)。——。

どろ[曇聲](名) 分明ならざる音聲。うちふめりたる音聲。

++くぐも・る[曇](自、ら四) くもりて分明ならず、きはやかならず。くもる。

くくり[括](名) ㊀くゝること。㊁鳥類の翅又は脚などをくゝりてこれを捕ふる装置。わなの類。㊂蒲實(ガマ)の莖にある結、足首に蒲實の莖をくゝりよするためのもの。——**ざる**[括猿](名) 綱又は布などに錦を包みて、猿の如くにつくりたるもの。——**ぞめ**[括染](名)「志ぼりぞめ」に同じ。

[るざりくく]

——**ばかま**[括袴](名) 藁(ワラ)を紐にて貫きてくゝるやうにしたる袴。——**まくら**[括枕](名) 中に錦又は蕎麥(ソバ)がら若しくは茶がらなどを入れ、兩端を括(クク)りよせたる枕。はこまくらの對。

くぐり[潜](名) ㊀くゞり入ること。㊁「くゞりど」の略言。——**ど**[潜戸](名) くゞりて出入すべき小さき戸口。

くく・る[括](他、ら四) ㊀まとひてむすぶ。志めて束ぬ。㊁つなぎあはす。かけむすぶ。㊂總括す。すぶ。まとむ。㊃捕縛す。えばる。㊄絞殺(ツンボリ)にす。㊅首を志めて死ぬ。

くぐ・る[潜](自、ら四) ㊀水をかきて底に入る。水中に迯(ニ)ぎ入る。「神の祊あひに、一螢」(書)。㊁物の間より中に入込む。「小門を一」。

(く・くわい[區會](名) 北海道及神奈川縣の區に於て、區の重要なる事項を議決する機關。又、市參事會又は郡參事會が、市内又は町村内の一區に、其區かぎり特別に費用を負擔する場合に設くる議會。

——・きゐん[區會議員](名) 區會を組織する議員、其區の公民が其區の公民中よりこれを選擧す。

(く・くわく[區劃](名) 志きり。さかひ。

(く・ぐわつ[九月](名) 一月より數へて九つ目に當る月。ながつき。いろどりづき。——**・せつく**[九月節句](名) 五節句の一、九月九日。(重陽)。

くげ[公家](名) ㊀天子、朝廷(官家)。㊁殿上に伺候する人、即ち、上達部殿上人の總稱。——**・ぶゆう**[公家衆](名) 中古、武家時代に幕府に仕ふる武士に對して、禁裏に伺候せし人の稱。

++くげ[公解](名) やくば。やくざよ。

++くけ・あな[漏穴](名) ぬけあな。「形、方形。

(く・けい[矩形](名)【數】各角が直角をなす四邊形。

(ぐ・けい[愚兄](名) 自分の兄の謙稱。

(く・げき[駒隙](名)《莊子の語に出づ》㊀生涯の當時なるとは光陰の急速なるとにいふ語。㊁つきひ。くわういん。

++くけ・ぢ[漏路](名) ぬけみち。

(く・けつ[口訣](名) くでん。

++くげ・でん[公解田](名) 古昔、地方の費用を支出するために設けし職田。「やうにぬふと。

くけ・ぬひ[紩](名) 縫目を表にあらはさぬ不器等によりて生ずる瘡の特稱。

くけ・ばり[紩針](名) くけぬひに用ふる針。

くけ・る[紩](他、か下二) 縫目の見えぬやうに縫ふ。

(く・げん[苦患](名) くるしみ。なやむ。(苦惱)。

(く・げん[苦言](名) 聞くには好ましからざれど、身には利ある言。又、いふを好まざるとまでをもいひて諫むること。

(ぐ・けん[愚見](名) 自分の意見の謙稱。

く・と[桐杞](名)【植】茄子科に屬する木、高さ七八尺、花冠は通常淡紫色にして裂片は圓五狀に排列す、果實は赤色にして尖卵形をなし、葉は食用に供し茶に代用せらる。(天精)。——**・ちや**[桐杞茶](名) くこの葉を茶の如くに製したるもの、壽命を延ばす効ありといふ。——**・めし**[桐杞飯](名) くこの嫩芽をいれて炊ぎたる飯。

(く・と[供御](名) 主上の御膳。

(く・と[莟蓂](名) クダラごと。

(ぐ・と[供御](名)「くど」に同じ。

(く・とふ[口業](名)【佛】口によりてつくりなす業、即ち、妄語・綺語の類。

く・ともり[口篭](名) くごもると。

く・ともる[口篭](自、ら四) 聲口中に籠(ロ)りて判然聞えず。

(く・とん[九獻](名) ㊀【植】草本植物の稱、茎に木質のものなく、一年生・二年生又は多年生等の別あり。㊁酒の異稱(女房詞)。

くさ[草](名) ㊀【植】草本植物の稱、茎に木質のものなく、一年生・二年生又は多年生等の別あり。㊁畳の名、「一がち」。(圖まどさ。かひば。「氣」。

くさ[種](名) ㊀物事を生ずる根、もと。たね。「いひ一」。「笑ひ一」。㊁志なる。たぐひ。志ゆるる。「ゴ一」。

くさ[瘡](名) ㊀瘡(ソウ)の總稱。「齒一」。㊁胎濕又は不潔等によりて生ずる瘡の特稱。

++くさ・あはせ[草合](名) 古昔、五月五日に種々の草を取り集めて鬪はしたる遊戯。(鬪草)。

(ぐ・さい[愚妻](名) 自分の妻の謙稱。(荊妻)。

(ぐ・ざい[倶在](名) 同時に存在すること。

くさ・いち[草市](名) 盂蘭盆(ボン)の前に、佛に供する草花などを賣る市。

(く・さいばんしよ[區裁判所](名) 最下級の司法裁判所、裁判は單獨判事これに任ず、事物の管轄に關しては裁判所構成法に、土地の管轄に關しては民事訴訟法及刑事訴訟法に、これを規定す。

(ぐ・さう[具草](名) 草稿にかき志るすこと。

(ぐ・さう[具象](名) ㊀形象を具有すること。㊁【心】個體其ま、を寫象する心の作用、感覺・知覺・記憶等これに屬す。——**てき**[具象的](名) 形象を具有するまま又は個體其ま、を寫象するさまにいふ語。——**・び**[具象美](名) 個體に關する美。——**・めいし**[具象名詞](名) 形象を具有するものを表はす名詞、家・山・馬・犬等これなり。

++くさ・うづ[臭水](名)《「くさみづ」の音便》石腦油の一名。

++くさ・かげろふ[草蜉蝣](名)【動】脈翅類に屬する蟲、觸角は絲狀若しくは逆鬚狀をなし、形は蜻蛉(ボウ)に似て小さし、極めて薄弱にして、夏日樹下に飛翔す、幼蟲は蚜蟲を食し間接に農家に益す、「ウドンゲ」は其卵子なり。

くさ・かご[草籠](名) 刈(カリ)草を入るゝ籠。「と。

++くさ・がち[草勝](名) 文章に漢字少く假名多き一。

++くさ・がな[草假名](名) ひらがな。

くさ・かり[草刈](名) ㊀草を刈り取ること。㊁草を刈る人。——**・がま**[草刈鎌](名) 草を刈る鎌、多くは刃と柄と矩形をなす。——**・ぶえ**[草刈

笛(名) くさかりわらはなどの吹く笛。——·わらは[草刈童](名) 草を刈る童子。

くさ·かれ[草枯](名) ㊀草の枯るゝこと。「一の頃」。㊁草の枯るゝ時面即ち秋季。「一の頃」。

くさ·かんむり[草冠](名) 漢字の冠の名。花·草などの字の上にある艹の字。さうかう。

くさ·き[臭木](名) 【植】馬鞭草科に屬する草、山野に生ず、葉は單葉卵形にして尖り短毛を有す、聚繖花序は枝の上部に位して散在せる花より成り、莓は膨大し、花冠は白色にして紅色を帶ぶ、嫩葉は食用に供せらる。「海州常山」。

くさ·ぎり[臭桐](名) 【植】「くさぎ」の一名。

くさ·き·る[草刈る](他、ら四) 田畑に生(オ)ふる雜草を除き去る。

「厭きて、—する」。

〔くさ·ぐさ(名、副) 種み厭きたるさまにいふ語。

くさ·ぐさ[種種](名、副) 物事の品數の多きさまにいふ語。いろ〳〵。さまざま。「一の品」「一供へて」。

艹くさ·くたもの[草果物](名) 草に生じたる果實の食ふべきもの、胡瓜(キウリ)又は南瓜(ボウブラ)の如きこれなり。「其—を奉りて歸らましかば」「藏」。

くさ·けづり[草削](名) ㊀くさをけづり去ること。又、其人。㊁草をけづるに用ふる具、刃の字形をなす鎌等にして、これに柄をつく。

くさ·ごえ[草肥](名) 植物を田圃に鋤(エ)き込みて肥料となすもの、綠肥又は苗肥といふ、豆科に屬する植物最も適當なりといふ。

くさ·さ[臭](名) 臭くある度合。

くさ·ざうし[草雙紙](名) 《初めの印刷は極めて粗惡にして、あさくさ紙を用ひ、一種の惡臭ありしため、臭草紙といひしより轉ずともいひ、又、草假名にて書きしよりの名なりともいふ》德川時代に行はれし一種の短篇小說、多くは平假名のみにて書き、中に挿畫(エ)あり。

くさ·し[臭し](形、二) ㊀不快なるにはひあり。㊁其如くに見ゆ。然るらし。さうらし。

くさ·ぶゑ[草鹿](名) 草にて鹿の形をつくりたるもの、古昔、武士がこれを獸類に擬し、的(マト)となして射術を學ぶに用ひたり。

[くさぶえ]

くさ·すぼ[腐](他、ば四) あしざまにいひなす。けなす。そしる。「誹」。

くさ·ずり[草摺](名) 《裾にて草を摺る故にいふか》鎧の腰より以下を覆ふ部分の稱、數枚に分る。

くさ·たか[草高](名) 大小名の領地内の米の收穫の總高、其内より現石(コクダカ)と稱して領主に納め、其殘餘は人民の所得としたり。

くさ·たち[草立](名) 草の生(オ)ふること。

くさ·たち[草質](名) 本草學にて、灌木などの草の性質を有せるもの、稱。(草木)。

くさ·だんご[草團子](名) 志んこに餅草を搗(ツ)き混(マ)ぜてこしらへたるだんご。

(ぐ·さつ[愚察](名) 自分の推察の謙稱。

艹くさ·つ·づき[草津月](名) 陰暦八月の異稱。

くさ·とり[草取](名) ㊀草を取り去ること。又、草を取る人。「田の—」。㊁草を取るに用ふる具、形はくまでに似る。

くさなぎ·の·つるぎ[草薙劍](名) 三種の神器の一、素盞嗚尊がきり殺したまひしやまたをろちの尾より出でたりといふ劍にて、もと蓋雲劍(ムラクモノツルギ)といひしが、日本武尊これを佩(オ)びて東征したまひ、途中にて賊の謀計に陷り火攻にあひたまひしとき、これを以て草を薙(ナ)ぎたまひしより草薙劍といふ、其後熱田の神宮に奉祀す。

くさ·の·いほ[草庵](名) ㊀くさぶきのいほり。㊁いぶせきいほり。——·り[草庵](名) 前條に同じ。

艹くさ·の·かう[草香](名) 草より取りたる香料。

くさ·の·かげ[草蔭](名) ㊀草の生ふるかげ。㊁くさばのかげ。

くさ·の·ぎる[草汁](名) 一種の顏料、雌黃と鹽蠟とを混じたるもの。

艹くさ·の·て[草手](名) 平假名の古稱。

艹くさ·の·とざし[草扃](名) くさを編みてつくりたるとざし。轉じて、いぶせきすまひ。「扃」。

くさ·の·はら[草原](名) 草の生(オ)えわたる野。

くさ·の·まくら[草枕](名) 「くさくだものまくら」に同じ。

くさ·の·み[草實](名) 「くさくだものこに同じ。

くさ·の·むしろ[草筵](名) ㊀艹草のよくはえそろひたるを筵にたとへいふ語。㊁草を筵のかはりに敷きて坐すること。

くさ·の·や[草屋](名) くさぶきの家。

くさ·の·わう(名) 【植】罌粟科に屬する草、葉は羽狀複葉にして小葉は缺裂す、花は總形花序に排列し四個の瓣を有す、花柱短し、有毒植物なれど藥用に供せらる。(白屈菜)。

くさ·ば[草葉](名) 草の葉。——·の·かげ[草葉陰](名) 黃泉又は墓所の下。「親は、—で泣く」。

くさ·ばうき[草箒](名) 蓍草又はきびがらなどにて造りたるはうき。

くさ·ばね[草花](名) ㊀草に咲く花。㊁花の開くべき草。

艹くさ·はひ(名) 物の種となるべきもの。「物定まらん—なるべき」。

くさ·はら[草原](名) 草の生ひたる野。

くさび[楔](名) ㊀V字形の木片又は金屬片にして、木石を裂き又は重き物を押し上ぐるに用ふるもの。「薄き楔力少くしてよく其用をなす」。又、物と物との合せめの離れぬために、兩方へ跨らせて打ち込むにも用ふ。㊁車輪の脫落を防ぐために、軸の端の穴に挿(サ)すもの。「轄」。㊂物と物とをつなぎとむるもの。「あひの—」。

くさ·び[草火](名) くさをもやす火。

くさ·びえ[草稗](名) 【植】(ヒ)「のびえ」の一名。(ヒ)「はびさ」の一名。

くさ·ひとがた[草人形](名) 古昔、祭事などに用ひし藁人形。わらにんぎやう。「藁靈」。

くさ·ひば(名) 【植】「いはひば」の一名。

くさ·びら[草片](名) ㊀艹あをもの·やさい。蔬菜。㊁きのこ。たけ。(菌)。——·いし[草片石](名) 【動】珊瑚の類。海中の石に生ず、形きのこを積み重ねたるがごときもの。(石芝)。

くさ·ぶえ[草笛](名) 「くさかりぶえ」に同じ。

くさ·ぶか·し[草深](形、一) ㊀くさだちたけし。くさまげし。㊁ひなびたり。ゐなかなり。未開なり。「くさぶかきこの在處」。

くさ·ぶき[草葺](名) 茅又は麥藁などを以て屋根を葺(フ)くこと。又、其葺きたる屋根。

艹くさ·ぶし[草臥](名) 野山に臥すこと。「小野の—ふしわびて」。

くさ·まくら[草枕](名) たびまくら。「旅」に冠する詞。

[きぶさく]

くさ·まくら[草枕](枕)

くさ·みし[臭](名) くさきこと。くさき氣。

くさ·むすび[草結](名) ㊀山野の路案内などをなすに、草を結びて路を記すこと。㊁轉じて、先導したること。「草群の義」草の生(オ)ひ繁(シ)りて神經が、急に刺戟を受けて覺えず聲を發すること。くしやみ。

くさ·もち[草餅](名) 餅米によもぎの葉を混(マ)ぜて搗きたるもち、中にはあはばがらし又はつばきの葉などにて色を付けたるもあり。よもぎもち。

艹くさ·もちひ[草餅](名) 前條に同じ。

くさ·や[草屋](名) ㊀まぐさを貯藏する所。㊁草葺(ブキ)の家屋。かやゝ。わらや。かやぶき。

くさらかし[腐](名) ㊀腐らすこと。㊁ものを腐らすに用ふる藥劑。

くさらか·す[腐](他、さ四) くさらす。

くさら·す[腐](他、さ四) くさるやうにす。くされしむ。

くさり[腐](名) ㊀くさること。「—が早い」。㊁くさりたる部分。くさりたる度合。

くさり[鎖](名) 音曲·遊藝又は講談などの段落。きり。「淨瑠璃—」。

くさり[鎖·鎖](名) ㊀環と環とを貫き繋ぎたるもの。又、環と環とを數多く貫き繋ぎて長き連條となせるもの。「鏈·琅璫」。㊁ものともものとの間をつなぎつゞくるに用ふるもの。きづな。——·かたびら[鎖帷子](名) 小さき鏈を編みつらねてつくりたるかたびら。

[くさりかたびら]

くされ[腐](名) ㊀くさり。㊁「物をうちすてゝ、其成り行きに任すること。「ふて—」「いつその—」。

くされ—[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「—儒者」「—文章」「—緣」。

くされたま[草連玉](名) 【植】「ゆわうさう」の一名。

くされる[腐](自) 「くさる」の訛。

くさ·わけ[草分](名) ㊀草のある所を分け行く昔時の戰爭又は斬合などのときに、上着の下に着用せしもの。「鎖子鎧」。——·がま[鎖鎌](名) 昔時の一種の武器、鎌に長き鎖を着け、其端に適當なる鐵丸を着けたるもの、其鐵丸を投げかけて敵の武器を卷き取り、鎌を以て敵の首をかき切るなどに用ふ。——·だい[鎖題](名) 一人の讀みたる歌の末の句をとりて、これを始めの句として次の人が歌を讀むと。又、前の歌の末の句をとり、これを始めの句として次の歌を讀むと。——·ばかま[鎖袴](名) くさりかたびらの如くに造りたる袴にて、昔時、戰爭又は斬合などのときに用ひしもの。——·れんが[鎖聯歌](名) 多人數にてよく聯絡するやうに讀む聯歌。

[まがりさく]

くさり—[腐](接頭) 或語に冠し、よからぬ意又はさげしみの意を表はす語。「—女」「—男」。

くさ·る[腐](他、ら四) つなぐ、つゞく。

くさ·る[腐](自、ら四) ㊀たゞれうむ。あざれやぶる。「邪氣で—」。㊁金屬銹蝕せられて全く用をなさず。「鏈が—」。㊂すべて物の化學的變化により、やぶれくづるゝにいふ。「材木が—」。㊃用に堪へず。又、くづれやぶる。「性根が—」。

と、「一衣」。㊁草の生じたる地を切り開くこと、荒地の開拓。㊂草を創め行ふこと、(草創)。——どろも[草分衣](名)草の生じたる所を分け行くに着用する衣服。

++くさぶ・ねき[草居鳴](名)【動】「ゐのしゝ」の一名。

++くし[首](名)かしら、かうべ。「佛の御—」。

くし[髪](名)かみ、頭髪。「御—のかゝりば」。

くし[櫛](名)毛髪を梳(すき)るに用ふる具。竹・骨・鼈甲・「ゴム」などにて造る。其形種々あれどすべて細き口の櫛(ラナ)びあるもの。(櫛)。

[しく]

くし[串](名)㊀魚肉其他の食物を貫き、火に炙り又は日に乾すに用ふる細き箸(ハシ)の如きもの。「魚—」「雁—」。㊁すべて細長くして物を貫くに用ふるもの、稱。「—を刺す」。

(く・ぶ[驅使](名)もひつかふと。

(く・ぶ[苦使](名)むごきもひつかひ。

(く・ぶ[苦思](名)いろ〳〵と心を苦しめもものふと。くるしきおもひ。

く・し(しくし)[奇](形、二)㊀不思議なり、靈妙なり。たゝなり。㊁あやしむべし、あやし。㊂珍奇なり。めづらし。

くじ[鬮](名)木片・紙片其他何によらず數ある細片をあつめ、これに標記をつけ、ときて、人に其中の一を抽(ヌ)きとらしめ、其標記によりて、吉凶勝敗其他物事を判定するもの。(籤)。

(く・ぶ[九時](名)一時より數へて、九番目に當る時の稱。午前と午後とにあり、昔時の時刻にては、巳の上刻と亥の上刻と。

(く・ぶ[九字](名)臨兵闘者皆陣列在前の九箇の字の稱。もと陰陽道にて用ひ、後に兵家及修驗道に移り、傳へて神祕の威力を有する護身の祕語となす。——をきる九字を唱へつゝ、指にて空中をたてよこに切るが如くしてまじなひをなすをいふ。斯くすれば強敵も惡魔も恐るゝに足らずといひ傳へり。

(く・ぶ[公事](名)㊀おほやけの儀式。朝廷にて行はるゝ事柄。㊁訴訟。㊂表立ちたる事柄。

くじ・あたり[闘中](名)くじをひきて、定めのくじにあたること。

くし・あはび(ハビ)[串鮑](名)串にさして干(ホ)したるあはび。

++くし・らら[櫛占](名)古昔、くしにて行ひしうら。

く・ぶか[鹿](名)【動】偶蹄類中鹿科に屬する獸、鹿より小さく角無し、毛は黑く、皮極めて柔かにして種々の用に供せらる。(鹿)。

くし・がき[串柿](名)串に貫きて乾したる柿の實。(乾柿)。

くし・がた[櫛形](名)㊀古代の櫛の背の形。㊁壁にくしがたにあけたる出入口。「くわとうぐち」。

く・ぶかた[公事方](名)徳川時代の訴訟吟味の役。

くじ・く(ばくじく)[挫折](自、か下二)㊀折れいたむ、まがり砕(クダ)く。㊁勢ぬく、よわる。はゞむ。㊂つまづく。たふる。

くじ・く(ばくじく)[挫折](他、か四)㊀折り傷つく。まげ砕く。「骨を—」。㊁勢を抑ふ。おさふ。よわむ。㊂うちつけて其人の罪過を詰責す。なじる。「まのあたりこれを—」。㊃つまづかす。たふす。

くし・げ[櫛笥](名)櫛を入れおく箱。くしばこ。

くし・けづ・る(ばくしけづる)[梳](他、ら四)㊀櫛にかけて毛髪をとゝのへ、をさむ。すく。㊁けづり除く。「兇を芟り暴を—」。

(くじける[挫](自)「くじく」の誤。

くし・と[串海鼠](名)串にさし貫きたるいりこ。

くし・ざし[串刺](名)㊀鳥獣を刺し殺すこと。獄門。㊁串に刺し貫くこと。「一の魚」。㊂すべて魚を刺し貫くが如くに、物を刺し貫くこと。

くし・ざ・す(ばくしざす)[串刺](他、さ四)くしざしにす。

くし・ぶ[公事師](名)他人の代理となりて、其訴訟をあつかふ人。辯護士。代言人。

くし・だらぐ(ばくだぐ)[櫛道具](名)髪を結ぶに入用なる道具。

(ぐ・ぶつ[愚室](名)自分の妻の謙稱。

(くじ・づよ・し(けくしき)[闘強](形、一)くじをひくたびに、よく利益あるくじをひくにいふ。

くじ・どり[闘取](名)くじをひくこと。くじをひきて事を決すること。

くし・ば[公事場](名)訴訟を裁判する所。

くし・ばこ[櫛匣](名)櫛を入れおくはこ。くしげ。

くし・はらひ(ハラハ)[櫛拂](名)櫛の垢を去る「刷毛(ハケ)」。

++くしび[靈](名)たゝなると、靈妙。

くし・びき[櫛挽](名)櫛をつくる職人。

くし・びき(ばくしびき)[闘引](名)くじとり。

くし・ぶぎやう(ハギヤウ)[公事奉行](名)鎌倉時代に、訴訟の裁判にあづかり奉行の總稱。

くじ・ふだ[闘札](名)くじびきの札。

くしぶ・の・ぶゆんくわう(ハクワウ)[九十春光](名)春季三箇月間の稱。

クシヤ[倶舎](名)【佛】(サ)(梵語Abhidharma-kosa の上略、藏と譯す)一切所應の知識を包持すると。(ホ)「クシヤぶゆう」の略言。

(ぐ・ぶや[愚者](名)愚鈍なるもの。ばか。あほう。

(く・ぶやう(ヨウ)[苦情](名)㊀難儀なる事情。㊁「やかましく不平などを陳べ立つること。「—を訴へる」。

(ぐ・ぶやう(ヨウ)[具状](名)つぶさに文書にたゝめて上申すること。又、其文書。

(く・ぶや(ばくぶや)[孔雀](名)【動】鶏類に屬する鳥、雄は形大にして頭に三四寸の長毛直立し、羽毛美麗しくして尾長く、尾端に金色の緑を帶びたる玉の如き模様あれど、雌は形小にして斑なく、頭上に直立せる毛もまた短し。(孔友)。——がひ(ガイ)[孔雀貝](名)【動】うぐひすがひに同じ。——せき[孔雀石](名)【鑛】銅の酸化物よりなる鑛物、色は美麗なる青緑色を呈し、錦晶稀にして多くは瘤狀をなす、堅美なるものは装飾品に供せらる。(孔緑)。

(くしや・くしや(名、副)㊀入り亂れて秩序なきさまにいふ語。㊁樣々みあらされたるさまにいふ語。㊂心のみだれわづらふさまにいふ語。

(ぐしや・ぐしや(名、副)㊀前條に同じ。㊁水分多くして固からざるさまにいふ語。「泥が—する」。

クシヤ・ぶゆう[倶舎宗](名)【佛】八宗の一、天親菩薩の倶舎論を所依とする小乘教なり、もと奈良に行はる。

(くしやみ[嚏](名)「くさめ」の誤。

(く・ぶゆ[酬酒](名)酒に酔ひて狂ふこと。

くじ・よわ・し(ばくじよわし)[闘弱](形、一)利益ならぬ籤を引きがちなるにいふ。

くじり[抉](名)㊀くじると。㊁物の結び目をくじりて解く用に供する具、さき尖りて錐の如き狀をなすもの。「鑷」。

くじ・る(ばくじる)[抉](他、ら四)㊀穴を穿ちてかきまはす。穴の中に物を入れてかきまはす。ほじる。㊁ほじりて中にあるものを出す。「吾眼をくじりて東門に懸けよ」。

++くしろ[釧](名)古昔、臂(ヒ)に纏(マト)ひ付けし一種の装飾品。今時のうでわの類。たまき。ひぢまき。

くしろ[鋸](名)土をかきならすに用ふる具、形くまでの如し。

(く・ぶん[苦心](名)心をくるしむること。ちゝにかんがへなやむこと。ぶんつう。ぶんぱい。

(ぐ・ぶん[具臣](名)員にそなはるだけにて、役にたゝぬ臣下。

(ぐ・ぶん[具申](名)情狀を上申すること。

(ぐ・ぶん[愚人](名)ばかもの。あほう。

くす[薬](名)「くすり」の略言。「一師」「一玉」。

くす[樟](名)【植】「くすのき」に同じ。

++ぐ・す(ばぐす)[屈](自、さ變)かがむ。ふさぐ。

++ぐ・す(ばぐす)[致](他、さ四)いたす。おこす。「一か、くさぬか、どうぢや」。

++く・ず[國栖](名)古昔、大和國吉野郡國栖の邊に居りし人民、應神天皇の時より、宮中の節會に參上し、琴(ヲ)を歌じ、音樂などを奏したり、其音琴をくずの奏といへり。

くず[葛](名)㊀(國栖葛の略言)【植】豆科に屬する蔓草、多く山野に生ず、葉は圓狀にして尖頭を有し、花は小形にして紫赤色なり、根よりくず粉を製し、又、葉の纖維を採りてくず布の料に供す。㊁くずこ。くずだまり。くずはの略言。

ぐ・す(ばぐす)[具](自、さ變)そなはる。そろふ。

ぐ・す(ばぐす)[具](他、さ變)㊀そなふ。そろふ。㊁伴なふ。「れだつ」「共にぐして參りける」(倶)。

くず・かけ[葛掛](名)料理にくずだまりをかくること。又、其料理。

++くず・かづら(名)【植】「くず」(葛)(一)に同じ。

くず・きり[葛切](名)一種の食品、葛粉を水にて澄(ト)き、砂糖を加へ煮固めて、煎餅(ヒン)の如くこまかく切りたるもの。

(ぐスク(名)(琉球の語Gusiku)琉球にて、城の稱。

(くす・くす(名、副)ひそかに笑ふさまにいふ語。

(くすぐったい(形)身に觸れられて、一種異樣の感起る。こそばゆし。

くすぐ・る(ばくすぐる)(他、ら四)こそぐる。

くず・こ[葛粉](名)葛の根の液汁を採りて製したる粉、澱粉質に富み、種々の食用に供せらる、大和國吉野地方の産最も有名なり。

くず・ざらめん(ハツ)[葛索麪](名)葛粉にて製したる雲麪。

++くす・し[醫師](名)いしや。醫師。

++くす・し(しくし)[奇](形、二)㊀あやし。めづらし。不思議なり。くし。「一き智慧」。㊁窮屈なり。とゝろよからず。

++くす・す(ばくすす)[薬](他、さ四)藥用して疾病を治す。「授す。いやす。

++くす・だま[薬玉](名)㊀種々の香料を入れたる袋を集めて玉となし、造花などを用ひてこれを装飾し、其下に五色の絲を七八尺ばかり垂れたるもの、昔時、これを簾又は柱などに掛けて、不淨を掃ひ臭氣を避くる具となせり。(續命縷)。㊁かけかう。

くず・だまり[葛溜](名)葛粉を「たるもの。

くず・に[葛煮](名)葛粉を加へて煮ること。又、其煮

くず・ぬの[葛布](名)「くずふ」に同じ。

くす・ね[薬煉](名)油を混じて煉(ネ)りたる松脂(マツヤニ)、弓弦などに塗るもの。

くず・ねり[葛煉](名)葛の粉を水に溶(ト)き、砂糖を加へて煮固めたるもの。くずもち。

くす・ねる(ばくすねる)(他、ら下一)こそかに掠(カス)

[まだすく]

め取る。「鼠山して錢を—」。

〔くすね〕**くす-の-き**[樟](名)【植】樟科に屬する喬木、葉は革質にして羽狀脈を有し、花は小形にして黄白色なり、材は堅くして文理美(ハウ)しく且一種の香氣を有し、種々の用に供せられ、又、樟腦を製する料となる。(楠)。

++**くすは-し**[しくしき](名)【奇】(形、二)くすし。

くず-ひき[葛引](名)くずを塗りたる紙、婦人の髪飾にするもの。

くず-ふ[葛布](名)葛の皮の纖維を採りて織りたる布、質強くしてよく水に堪ふ、雨具・袴を造り又は襖(マフ)などを貼(ハ)るに用ふ、遠江國掛川の名産。

くす-ぶ[燻](自、は四)くすぶる。

くす-ぶ[燻](他、は下二)くすぶらしむ。

くすぶり[燻](名)くすぶると。

くすぶ-る[燻](自、ら四)㊀盛(モ)えずして けむる。㊁室内にかゞみこみて外出せず。

+**くすべる**[燻](他)「くすぶるの訛。

+**くすぼる**[燻](自)「くすぶるの訛。

くず-まんぢゆう[葛饅頭](名)かはを葛粉にて製したる饅頭。

くす-むだ(自、ま四)㊀老人めく。大人(オトナ)めく。㊁質朴に見ゆ。虚飾なく見ゆ。「くすんだ人間」。㊂衣服又は携帶品の色・柄若しくは模樣などが、はでやかならず、さみにてあり。「くすんだ感柄」。

くず-もち[葛餅](名)葛ねり。(藕遺餅)。

くず-や[葛家](名)くずや。かやや。

くず-ゆ[葛湯](名)葛の粉に砂糖を加へ、熱湯を注ぎて薄く溲(ト)きたるもの。

くすり[薬](名)㊀疾病又は傷痍等を治療するために、飲用又は塗抹して使用するもの、總、やくざい。やくひん。㊁陶器に注(カ)けて、光澤を生ぜしむる料のもの。(釉)。㊂火藥の稱。㊃すべて、身體又は性狀に益を與ふるもの、總、運動が何よりの—。++——**がり**[薬獵](名)古昔、五月五日に野山に出でゝ鹿を狩りしと、鹿の若角(ツノ)を採りて藥用となし、より此名あり。++——**ど**[薬子](名)古昔、正月元日供御(ゴ)に奉る屠蘇酒の味を試みし童女。——**ま**[薬師](名)㊀いしゃ。(醫師)。㊁やくざいを。——**なべ**[薬鍋](名)藥を煎ずるための鍋。++——**のかみ**[典薬頭](名)くすりのつかさの長官、相當は、從五位の下。++——**のつかさ**[典薬寮](名)古昔、宮内省の被官に屬し、醫藥一切の事を掌りし所。——**ばこ**[薬箱](名)㊀藥品を入るゝ箱。㊁醫者が患者を見まゐとき、藥品を入れて携帶する箱、藥囊。(藥匣)。++——**び**[薬日](名)五月五日の異稱、此日は藥狩をなし、又は藥玉(ダマ)を掛けなどせしより此名あり。——**みづ**[薬水](名)藥を混じたる水、又、藥の調劑などに使用する水。——**や**[薬屋](名)くすりを賣る家、又、其人、やくをゆや。——**ゆ**[薬湯](名)中に藥劑を入れたる洗湯。——**ゆび**[薬指](名)拇指(オヤユビ)より數(て四番目の指、即ち、小指の隣にある指、此指先にて藥などを溶(ト)くによりて此名あり。べにさしゆび。「無名指」。

++**くす-る**[薬](他、ら四)「くすすの訛。

くせ[癖](名)偏頗なる一種の嗜好又は習慣若しくは性質「惡い—」。(性癖)。

くせ——[曲](接頭)或語に冠して、正しからざる意を表はす語「一事」、「一者」。

(ぐ-せい[愚生](代)自分の謙稱。せっせや。

(ぐ-せい[弘誓](名)【佛】弘く衆生を救度して菩果を得しめんとの、佛陀の大慈悲なるもの。——**の-うみ**[弘誓海](名)【佛】佛陀の弘誓の慈悲の深大なるを海にたとへいふ語。——**の-ふね**[弘誓船](名)佛陀の誓度を船にたとへいふ語。「—に帆をあげて」。

(く-せう[苦笑](名)にがわらひ。

くせ-ぐせ-し[しくしき](名)[癖癖](形、二)ひがみてあり、すなはならず。「心樣—」。「きたる事。

くせ-ごと[曲事](名)まがりたる事。條理にそむく。

(く-せち[口舌](名)いさかひ。いひあひ。

(く-せつ[口説](名)親密なるもの、言ひ寄ふと。いひあひ。いさかひ。「痴話が高じて—の種よ」。

(ぐ-せつ[愚説](名)自分の說の謙稱。

くせ-もの[曲者](名)わるもの。又、あやしきやつ。

(く-せん[苦戰](名)苦しきたゝかひ。

++**く-せん**[口宣](名)古昔、頭辨(トウベン)が敕命を帶びて、直に五位以上の官位を授くること。——**あん**[口宣案](名)古昔、頭辨より上卿に達せし口宣を其家に納めて、別に寫して大外記に遣しゝこと。

(く-ぜん[瞿然](名、副)ぎょっとしておそるゝさまにいふ語。

くそ[屎](名)㊀動物が、消化器内に於て、養液に變ぜしめたる食物の殘滓不用物を、肛門を經て體外に排泄したるもの。ふん。(糞)。㊁垢又は滓などにもいふ稱。「眼—」、「齒—」。「のまゐはんとは」。

++**くそ**[屎](名)古昔、童子を呼びたる稱。「けふ—達」。

くそ——[屎](接頭)或語に冠して、よからぬ意又はいやしむ意を表はす語「—蔵」。

(ぐ-ソウ[愚僧](代)僧侶の自分の謙稱。「同じ。

くそ-かづら[細子草](名)【植】(くそかづら)に

くそ-がへる[屎蛙](名)【動】「いぼがへる」の(ぐ-そく[愚息](名)我子の謙稱。[一名。

(ぐ-そく[具足](名)㊀そなはり足りてあると、缺陷なきこと。㊁きぐ。だうぐ。「調度—ども取り持ちて」。㊂よろひ。甲冑。——**ま**[具足師](名)甲冑を製造する職人。(鎧匠)。——**に**[具足煮](名)一種の料理、伊勢蝦を殼のまゝ、輪切にして煮たるもの。

——**ひつ**[具足櫃](名)甲冑を入るゝ櫃。——**もち**[具足餅](名)甲冑に供へしかゞみもち。「れど益鳥なり。

くそ-とび[屎鳶](名)【動】鳶の一種、形みにくけれど益鳥なり。

くそ-ばひ[屎蠅](名)【動】「くそばへ」の訛。

くそ-ばへ[屎蠅](名)【動】蠅の一種、大形にして青綠色をなし、最もよく不淨物にあつまる。

++**くそ-ばった**(名)【動】「つちばった」の一名。

くそ-ひり(名)「りびやう」(痢病)に同じ。

++**くそ-ぶくろ**[屎袋](名)胃の古名。

くそ-むし[屎蟲](名)【動】「こがねむし」の一名。

++**くそ-わたぶくろ**[屎腸袋](名)「くそぶくろ」に同じ。

(ぐ-ぞん[愚存](名)自分の所存の謙稱。ぐい。

くた(名)くた〳〵して役に立たぬと。

くた[管](名)㊀調くして細長く中の空虚なるもの即ち小さき筒。「煙管の—」。㊁機の鍋(コ)絲を卷きて杼(ヒ)に入るゝもの。㊂絲車のつむにさして絲を卷くもの。(紡)。㊃餘計なることば。むだぐち。——**いと**[管絲](名)管に卷きたる絲。——**をまく**酒に酔ひなどしてむだくちを言ひたつ。——**をもってでんをうかがふ**[以管闚天]

積細なる體見を以て、廣大なる物事をうかゞひはかり抜き出したる一句か、若しくは或漢詩の一句かを題とせるもの。

(ぐ-たい[具體](名)「ぐさう」(具象)に同じ。——**てき**[具體的](形)「ぐさうてき」(具象的)に同じ。——**めいし**[具體名詞](名)「ぐさうめいし」(具象名詞)に同じ。

(く-たい[裙帶](名)うはも。えびち。「るにいふ。

(く-だい[句題](名)歌の題の一種、三代集の歌より

(ぐ-たい[愚](名)こぬすびと。草賊。「るる。

(ぐ-たう[求道](名)宗教上の正しき道をもとむ

++**く-だ-かけ**[鶏](名)《東國の方言》にて、家をくたといふより此名ありといひ、或は百濟鷄の義なりといひ又は梵語なりともいふ。【動】「にはとり」の古名。「家雞」。——**-どり**[鶏鳥](名)【動】前條に同じ。「一の、まだきに鳴きて、せなをやりつる」。

くだ-く[碎](他、か四)㊀打破りて細片となす。とはす。「氷を—」(搗)。㊁やぶる。くじく。「敵を—」。㊂はした金に分ける。「豆腐札を—」。

くだ-く[碎](自、か下二)㊀こはれて細片となる。こはる。(搗)。㊁やぶる。くじく。「敵勢—」。

㊃よわる。やはらぐ。「心—」。㊄(はした金に分ける。

㊅意義わかる。理解せらる。

くだ-くた(名、副)力抜けて弱くなりたるさま又は勞乏しくて堅固ならざるさまにいふ語。「—した

くだ-ぐた(名、副)前條に同じ。[布]。

くだ-くだ-し[しくしき](形、二)㊀厭(イ)はし。煩(ワヅ)はし。ものうし。くどし。㊁繁雜に過ぎたり。こまかすぎたり。ものうし。「—き辭」(煩瑣)。

くだけ[碎](名)くだくること。又、くだけたる細片。

——**る**[碎](自)「くだく」の訛。

くださ-る[被下](他、ら四)長上より物を賜はる。下し賜はる。たまはる。

くだし[下](名)㊀くだすこと。㊁「くだしぐすり」の略言。——**ぐすり**[下藥](名)便通をよくするために飲用する藥劑。つうじぐすり。げざい。

——**ふみ**[下文](名)㊀古昔、官府の命令書。㊁鎌倉時代又は室町時代に、所領を與ふるときなどに、政所(マンドコロ)より與へし文書。

++**くた-す**[下、降](他、さ四)㊀腐敗せしむ。くさらす。㊁恐しさまにいひなす。けなす。そしる。

くだ-す[下、降](他、さ四)㊀上より下へ行(ヤ)る。高きより低きへ移す。おとす。おろす。㊁ふらす。「天雨を—」。㊂敵の城壘を拔く。せめおとす。㊃ふさへ鎖む。「氣をくだし心を平かにす」。㊄まうしわたす。さげわたす。「誤をくだして其是非をいはしむ」。㊅下賜す。たまはる。㊆ひくゝす。さげ。おとす。「品を—」、「價を—」。㊇京地より地方へ遣(ツカ)す。㊈大便を通ぜしむ。

くだ-だま[管玉](名)圓柱體にして、心に管のごとき孔を穿ちたる玉、古代これに紐を通し帶びて飾とせり。(管石)。

++**くだ-つ**[降](自、た四)するとなる。かたむく。

ぐた-つ-く(自、か四)ぐたにやきこの略言。——**やき**[九谷焼](名)「くたにやき」の略言。——**やき**[九谷焼](名)加賀國江沼郡九谷村より出ず磁器、伊萬里燒より分派したるものにて、赤繪・金襴手等多し。

くだ-の-ふえ[小角](名)管の形につくりたる小さき笛、古昔、戰場などにて用ひしもの。

ふくしゅう　書きなおしたり、書き加えたりして、復習すること。「一度、文章を通して～する。」

ふくしゅう-する　[サ変]　❶[名]　❷[名]　❸[名]　❹[名]　❺[名]　❻[名]　❼[名]　❽[名]　❾[名]　❿[名]　⓫[名]　⓬[名]　⓭[名]　⓮[名]　⓯[名]　⓰[名]　⓱[名]　⓲[名]　⓳[名]　⓴[名]　㉑[名]　㉒[名]　㉓[名]　㉔[名]　㉕[名]　㉖[名]　㉗[名]　㉘[名]　㉙[名]　㉚[名]　㉛[名]　㉜[名]　㉝[名]　㉞[名]　㉟[名]　㊱[名]　㊲[名]　㊳[名]　㊴[名]　㊵[名]　㊶[名]　㊷[名]　㊸[名]　㊹[名]　㊺[名]　㊻[名]　㊼[名]　㊽[名]　㊾[名]　㊿[名]　(1)[名]　(2)[名]　(3)[名]　(4)[名]　(5)[名]　(6)[名]　(7)[名]　(8)[名]　(9)[名]　(10)[名]　(11)[名]　(12)[名]　(13)[名]　(14)[名]　(15)[名]　(16)[名]　(17)[名]　(18)[名]　(19)[名]　(20)[名]　(21)[名]　(22)[名]　(23)[名]　(24)[名]　(25)[名]　(26)[名]　(27)[名]　(28)[名]　(29)[名]　(30)[名]　(31)[名]　(32)[名]　(33)[名]　(34)[名]　(35)[名]　(36)[名]　(37)[名]　(38)[名]　(39)[名]　(40)[名]